
少年は魔人になるようです

Hate.revolve

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年は魔人になるようです

【Nコード】

N1419Q

【作者名】

Hate・revolve

【あらすじ】

少年は見ず知らずの少女を助け、死んでしまった。更に少年は地獄に落されてしまうが、そこで少年は運命と出会う。物語の歯車は、今回り出す！！この作品はチート転生、ご都合主義、処女作ですので、取扱いに注意が必要です。オリ主最強、駄文、アンチ気味が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

第一話 少年は回想するそうです（前書き）

初めまして、aitteneと申します。

まずはこの駄文を読んでくださるうとしていらっしゃる方々に感謝を。

作者は思い付きとノリで書き始めましたので、変な所があっても、生暖かい目で見えてやってください。

それでは、どうぞ。

第一話 少年は回想するそうです

皆様初めまして、織原愁磨おりはら しゅうまと言います。

どこにでもいるかは分からないけど、まあ普通のオタク、17歳です。

さて、俺は今一列3万人はいるのではなからうか、と言う列の一つの最後尾にいます。

いえ、いきなり並んでいた、と言った方が正しいでしょうか。H A H A H A H A ! !

・・・なに! ? w h y ! ? 一体俺に何が起きたというんだ! ?

落ち着け俺、クールになるんだ。

今俺に足りないもの、それは、情報、思考、理性、頭脳、気品、優雅さ、冷静さ!

そして何よりも ! 速さが足りない! ! !

いや、だから落ち着けと。・・・ふう。(賢者タイムにあらず)

おばあちゃんが言っていた。困った時は回想に入れと!

それではどうぞ! ! !

回想

「はあ……」

まったくあのDQNどもは……なんであんなに脳みそが足りんのかね？

口で負けたからってすぐに集団で来るのは駄目だと思うんだ。

しかも教師共もPTAが怖いからってなにもしないしさ。

まったく、これだから現実^{リアル}ってやつは嫌いなんだ……まあいいか。

漫画みたいに突然能力に目覚めるとか、SSみたいに転生とか出来る訳ないし。

学校以外はそれなりに楽しいしな。

さて、今日のバイト……は手伝いだけだったな。

ちなみに俺の学校はバイト禁止だ。ならなんでやってんのかって言うし、

所謂俺の家は片親ってやつで、母さんしかいない訳だ。

んで、実家が田舎だったから、比較的仕事のあるであろう都心の方に越してきた。

ああ、勿論仕事は見つけてからな。

それからちよいと不便だが安い家見つけて、転校して、学校に許可貰っただけ。

学期初めに転校してきて、もう四ヶ月くらい経ったから、不便さは慣れたけどな。

「織原く今日はもうあがっていいぞ。特売に間に合わんぞ」WWW
と店長から声がかかる。

「あ、はい。分かりました」

声をかけてから帰宅準備をし、声をかけてスーパー向かう。

「
」

そして特売後の俺は収穫が上々だった為、上機嫌だった。

まさか超高競争の戦場である「牛肉2kg50円」が手に入るとは思ってもみなかったのだ。

しかも「業務用ビーフシチュー1kg100円」まで手に入ったのだ。もはや何を作るべきかは明白だな。

そうだ、しかも今日はソーダアートオ ラインの発売日じゃないか。買っていかなければ。

いくら金がないと言ってもこの趣味だけは譲れんからな。

ちなみに織原家の といっても二人だけだが 水道光熱費と食費は俺の財布から出ている。

家に帰り、ビーフシチューを食べてラノベを読み終わると、もう十時を過ぎていた。

(そろそろ寝るかな……ん?)

と、何気なく窓の外を見た

見てしまった。

道路に見えるのは小学生くらいのワンピースを着た少女だった。

「こんな時間に何やってんだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・だああああ、もう!!」

偽善は嫌いだと謳いながらも見過ごせない俺は、上着を着ると家から飛び出した。

「あれ？確かこの辺に・・・・ああそこに居た」

少女は少し見えにくい処に居たから多少見失っていた。

そして向こうから走ってくるのはトラック。

(オイオイオイオイ、不味いんじゃないか!?)

人の目にも見えづらいのだから車、ましてやトラックなど言わずもがな、である。

「クソッ!!」

と独りごちると走り出した。ギリギリ追いつき、少女を引っ張り避けようとし

(間にあわねえじゃん!!)

と考えるや否や、少女を突き飛ばした。瞬間、目の前に光があふれ、

ガオン!!

俺の意識は途絶えた。

回想終了

第一話 少年は回想するそうです（後書き）

最初はこんなものでしょうか？

・・・添削していたら予想より短くなったでござる?!
思ったより難しいでござる。

二話は見直し終わり次第なので、ほぼ連投になるかも。
それではひとまず Arrivederci!（サヨナラだ!）

第2話 運命は出会い、回り出すようです(前書き)

見直し終わったので投稿です。

カレーうどんうめえ。

経済的にも優しい。金の無い若僧には嬉しい一品です。
カレーは万能だ。

それではどうぞ。

第2話 運命は出会い、回り出すようです

うん、簡単な回想だったけど、テンプレ通りならここは生界と死界の狭間ってところか？

もしくは天国か地獄ってところか。

と、考えていると、俺がいつの間にか列の一番前に来ていた。

そこにはダンブルドア校長を神々しくしたような爺さんが居た。

（まあこいつに質問した方が早そうだ。

回想しなくても、冷静になりやすすぐ分かったな・・・）

「何を言っているか分からんが、とりあえず説明してもいいかの？」

あ、申し訳ない。どうぞ。

「ほう、思考が読まれていることには疑問を持たんのじゃな。」

まあテンプレだしな。

あんたみたいなのはしゃべるよりこうした方が俺的には楽だし。

普通に話すのって苦手だし？

「テンプレ？・・・とりあえずこの箱の中から紙を一枚ずつ取ってくれ。」

なんなのこれ？

「これは行き先を決めるものじゃ。天界、地獄、他の世界に転生するもの。」

「一つは期間、転生の場合は寿命じゃな。そしてそこで課される労働内容じゃ。」

は？そう言うのって生きてた時の業で決められんじやないの？

「神と言っても長年生きてきたのでな。ただ仕事をするだけでは飽きてな。」

しかもそれでは罪を犯した者は永劫罪を背負い、同じような人生を送ってしまう。

それでは面白くないのでな、ランダムにしてしまおうと、そういう訳じゃ。」

「・・・つまりてめえら神様は暇だから、仕事に飽きたから俺

ら人間で遊ぼうと。

そういうわけか。」

「まあそういうわけじゃな」

そう言いつこの自称神はニヤリと笑った。

「ぶっざく」

「おお、居た居た。お主じゃ。その前髪の長い。」

そこに、あのワンピースの少女、ってゆうか少女が居た。

「どうしたのじゃ、アリア。」

と、ダンブルドア（仮）は髪が腰まである銀髪翠眼の少女に話しかける。

ああ、こいつも神様だった訳ですね。つまり俺は無駄死にだったと。

「いや、妾とて人間界で死ねば死んでいたであろうな。礼を言うぞ、

人間。それではな。」

「……………ん？」

いやいやいやいやいや！！ちょっと待て！それだけ？

俺一応神様助けたんだよね！？だったら何かしら特典が」

「何をゆうておるか。そなたが勝手に助けただけではないか。

妾の運が良く、そなたの運が悪かった。ただそれだけではないか」

「ハツハツハ、アリアよ。神と人間の運を比べても可哀相なだけではないか！」

「フッフ、それもそうだな、クルセウスよ。だがそうだな。

下賤なものに借りを作ったままではおれんな。

どうじゃ、行き先を天界にして、妾のそばで期間をすごさせても良いぞ」

ああ神ってこんな性格悪いDQNだったわけですか

眼が覚めると、そこは氷の世界だった。

奴の言ったことが正しければここは地獄の・・・コキユートスとか
だっけ？

SAOだとヨツン・・・いや、ニブルヘイムになってるが、良く分
からん。

あ、手足再生してるや。あんのクソ幼女が・・・助けた人の手足ぶ
っ飛ばしやがって!!

見つけて必ずボコb・・・ダメだ、美少女はなぐれん・・・orz
ぬちよぬちよにしてやる!! あ? Yes ロリ、No タッチだ?
知るか!

俺はロリも好きではあるが、ロリコンじゃねえんだよ!!

コホン、 さて、そのためにはここから出なきゃならんのだが・・・
・・・

「やっつっつっつっつむ!!!!」

そう、俺は夏の夜用の軽装。そしてここは北極もかくやと言つ氷の世界。

現在進行形で死にそうだつぜ！

そうだ、雪の中は意外と暖かいと聞いたことが！！

俺は雪を掘りだし、入ってみる。だいぶマシだが……………

「くっそ、駄目じゃん！！冷てえよ！！」

当然だ。雪は冷たいのだ。ましてや今は夏服。冷たくないはずがない。

「くそ、なんとかしねえと！！」

誰に言つでもなく叫ぶと、俺は歩き出した。

数時間後

俺はまだ当てもなく氷の地獄を彷徨っていた。

まだ生きているのが不思議なぐらいである。

もうすでに体は感覚が無く、眼も良く見えない。

しかし、何かが俺を突き動かしていたのだろう。

満身創痍という言葉が相応し過ぎるくらいにボロボロになっても、

俺は歩き続けていた。

すると、何かにぶつかった。

歩いているかも怪しい速度でぶつかっても、今の俺には十分な衝撃だった。

俺はそのまま倒れ、ぶつかった何かを見上げ、

そして、それに見惚れた。

それは俺が堕ちてきた場所から見えなかったのが不思議なほど大きなクリスタルだった。

闇色なのになぜか向こう側が見えるほど透明で、十字架のような形をしていた。

それに、煮えたぎっていたはずの俺の心は不思議と冷めてきて、

怒っているのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

「まあ……こんな綺麗……な物が……墓標ってのは悪くねえな……」

と、眼を閉じそうになった。が、クリスタルの中が不意に動いた。

(なん・・・だ・・・?)

と、クリスタルの中で何かが形づくられていく。そして

鈴のような、雷のような声が聞こえてくる。

「貴様、人間だな。なぜここに居る。ここは魔を封じるための世界。人間程度がなぜここに墮とされた?」

その声を発した女は、黒眼・超ロングの黒髪で、可愛さを残したまま綺麗で、無垢で妖艶な・・・

(うっわあ・・・俺この人だったらリアルで結婚して欲しいわ・・・)

「どうした？早く答えんか。」

(しかし俺のタイプなお姉様の問いだろうがこればかりはしかない。)

喋れるわけねえだろうが。だったら人間程度の思考読んで見やがれ。

「フフフフ、いや、分かっているよ。」

いやはや、まさか『神の威光』に負けずに手を出せるほどの剛の者が、

まさかまだ人間に残っていたとはな。普通は神に反抗的な思考すらできないモノなんだが。

なかなか面白い。おまえ、名はなんという？」

愁磨。 織原 愁磨だ。

「フム、愁磨、シュウマ、よし、シュウだな。」

何勝手に愛称で呼んでんだよ。嬉しいぞこのやろ・・・野郎じゃね

えな。このお姉様が。で？

「む？で？とはなんだ？」

あなたの名前は？ってことだ。普段なら相手から名乗らせるが、俺のど真ん中に直球の代わりに

Hekart？で弾丸ぶち込まれた位、俺のタイプのお姉様だから特別だ。

「つまりどう言っことなのだ？」

つまり俺はお前のことが超大好きだってことだ。

「なっ、すっす、好きだと！？／＼馬鹿を言うんじゃない！！／＼コホン、全く…調子が狂っわ…」

何この子、きゃわいいわ！！

「ゴホン！！……すまんが、私に名前はない。

ただ、『閻神』と言う役職名がはるか昔あったただけだ。」

……なるほどな。『閻神』以外の呼ばれ方はなかったのか？

「……そうだな、昔は『六対のプテリクス』とは呼ばれていたよ。

渾名みたいなものだったかな。」

(六対の翼、ね。ここ地獄だし、こいつもしかしてルシファーさん？)

まあいいか、そうだな・・・安直で悪いが、『ノワール』ってのはどうだ？

「いったいなにがだ？」

お前の名前だよ。そうだな、『ノワール・プテリユクス・エデル』でどうだ？

『高貴な黒き翼』って意味なんだが。意味が厨二臭いが・・・

「……………」

(え？なに？なんですか？この沈黙は？もしかしてやっちまった！？)

side???

なんなのだ、此奴は？人間のくせにこの氷結地獄に墮とされたり、死んでいるはずの体で歩いていたり、

更に、この魔族用の、私の色の封印用棺を綺麗だと言ったり・・・
・
嫌味のつもりで名前を略して言ってやったのに嬉しいなどと言ったり・・・

「あんたの名前は？ってことだ。普段なら相手から名乗らせるが、俺のど真ん中に直球の代わりにHekart?で弾丸ぶち込まれた位、

俺のタイプのお姉様だから特別だ。」

天界で忌み嫌われ、もはや言うことすら許されない私の名前を聞い

てきたり

「つまり俺はお前のことが超大好きだったことだ。」

「なっ、すすすす、好きだと!? / / / 馬鹿を言うんじゃない!! / / / コホン、全く…調子が狂うわ…」

私のことを好きだなどと言い、

「何この子、きゃわいいわ!!」

「ゴホン!! ……すまんが、私に名前はなし。」

ただ、『閻神』と言う役職がはるか昔あったただけだ。」

こんな堕ちた私をかわいいなどと言う。

そして、そして

「まあいいか、そうだな……安直で悪いが、『ノワール』ってのはどうだ？」

一体こいつはなにを言っている？

「お前の名前だよ。そうだな、『ノワール・プテリユクス・エデル』でどうだ？」

『高貴な黒き翼』って意味なんだが。意味が厨二臭いが……」

なぜ、私なんかの名をくれるというのだろうか？私の名は神に取られてしまったというのに。

……私は……私は、こんな、人間風情に、

どうして、こんな、人間風情の……！！

side out

s i d e 愁磨

あ、あのー…いかなさ

「なぜだ？なぜお前は私を好きだなどと言っ？なぜお前は私に名を
与えようとする？」

い、いや、なぜっていわれてm

「なぜ、こんな私と話す？なぜ、なぜ私に優しくする！私には見
えるのだ！！」

お前は自分すら騙し、何でも無いかの様に振舞っているが、他人に気を使い、

一切自分を出さないせいでお前の心は磨り減り、歪み、拳句の果てに裏切られ、

私の……私の心と同じように真っ黒になっている!」

いやいや、そんなことな

「気付かない振りをしているだけで、お前は自分でも気付いているだろう!？」

疲れ切り、絶望しているのに、なぜ……

なぜそんな心で他人に優しくできる!?! どうしてだ!?!」

おいおい、女の子泣かしちまったよ、全く。

「やれやれ、何を言ってるのかね、このお嬢さんは……」

「な、なにを」

そう言いながら俺は立ちあがる。だってさ、眼の前の……、

最っつ高なお姉様が泣いていらっしやるんだぜ？

死んじまうとしても、立たなきゃ逝けないよね〜男の子としては？

「簡単なこつたるーよ、そうしていた方が楽だと思ってたんだ。

……実際は、そうじゃ無かったってだけだ。

俺がお前に優しい？らしいが、俺にとっちゃこれが普通。寧ろ凶々しいだろ。

そして、男が美しい二次元のような女性を前にやるべき事は二つだ。

一つは鼠のように逃げ果せるか……」

そう言いながら普通なら一歩で行ける様な距離をノロノロと十歩かけて歩く。だってさ、

「や、やめろ！！それ以上動いたら死んで」

意地があんだろ？

男の子にはなあ！！

「某英雄王のようにしつこく求婚するしかないだろ？」

しかもおまえ自分の言ったことよく考えてみるよ。」

あと・・・四歩だ・・・

「え……………？」

あと三歩・・・

「疲れて、骨折り損で、裏切られて、凍え死にそうになった先で。

自分の超タイプなお姉様を見つけたんだぜ？」

二歩・・・

「逃げる必要性なんてどこにもねえじゃねえか。しかも封印されると来た。」

ラスト……っつと。

「まるで王道RPG!!運命以外のなにモノでもねえじゃか!自分が何か出来ると思うだろ?」

そう言つて俺は笑い、クリスタルに手をつきしゃがみ込む。

「お、おい!!大丈夫か!?しっかりしないか!!」

あー、無理無理。体力つてか寿命?もうそんなんねえよ。

「おい、シュウー!しっかりしろ!!くそ、どうすれば……。」

……ならば、私と契約しろ!!そうすれば助かる!!」

へえ……助かるん……なら……ありがてえけど……何か代償はあんのかよ?

「……私は罪人だ。私と契約すれば神たちがお前を追つて来るだろ

う。」

神ども・・・は、どうでもいい。で？

「...それと.....私の属性である『闇』。それがお前を喰らうだろう。最悪」

んなことかよ・・・ならいいから契約しようぜ。そろそろ・・・不味いし・・・

「.....分かった。ならばクリスタルにシュウの血を付けてくれ。」

了解・・・感覚無くて助かったぜ・・・

普通なら指嚙んで血出すなんて、ビビってやれんから・・・

「よし、もういい。少し休め。あとは私がやっておくから。」

そうかい・・・なら、た・・・の・・・む

ここで俺の意識は途絶えた。

第2話 運命は出会い、回り出すようです（後書き）

と、言う訳で二話でした。

主人公が二回もブラックアウトしたが大丈夫か？

愁「大丈夫じゃない、ワンパターンだ。」

作「なんで居るんだよ？」

愁「いや、これ言う為だけに。」

作「ならさつさと逝って来い。出番なんだから。」

愁「んなこと言いつつまだ書き始めじゃねえか!!」

作「うるせえよ！良いから行って来い!!」

愁「つたく、しょうがねえな。」

作「ふう。やっといなくなったか。

所で、あとがきでいきなり始めましたが、

作者、本編だけで手いっぱいなので、

掛け合いは今回だけだ。」

愁「安心しろ、期待してる人なんて誰も居ねえから。」

作「そうなんだよなあ……」

誰も見てないのにこんな事してるとか。

恥ずかしすぎんだろ俺……。鬱だ、死のう。」

愁「ま、まあまあ、元気出せよ。」

いつかそのうちきつと、誰かが読んでくれるって。」

作「そうだな、そうだよな!!」

始まったばっかなのにネガティブになっちゃダメだよな!!」

愁「そうだぜ!!落ち込むのは完結してからでいい!!」

作「よし、早速三話の続き書くか。」

あ、あと、更新については仕事と作者のスペックの都合上、二日に一話くらいになると思います。

最後に、読んでくださった方に感謝を。

それでは、アリーヴェデルチ!!」

第3話 二人は異世界に旅立つようです(前書き)

仕事中に投稿してやるぜえ!!!

どうも皆様、a1t1e1n1e1です。

今回は、徹夜の変なテンションで書いた為、
良く分からない事になってるかもです。

……いつもの事が。

それでは、どござ。

第3話 二人は異世界に旅立つようです

side ノワール

私はシュウの血を使い、契約を始める。

「いにしえに我を創りし神よ。」

この契約は私の魂と契約者の魂を半分融合させ、共有し、互いの力を互いに渡し合う。

「我が名はノワール・プテリユクス・エ デル！」

これは私を創った神に反逆する儀式。魂とは名。

天界に生み出された者の名は神が決める。

故に、天界人は魂を割ることとは『名を略すこと』神への反逆』とみなす。

故にこの儀は自分の名を創りし神に帰し、許しを乞う必要がある。

が

「貴様は私を創りだした！！だが貴様が創りし魂はすでに帰した！！
故に貴様に許しは乞わない！！」

そう。今の私の名はノワール。そしてこの名前をくれたのは……

「我が創造主の名は織原 愁磨！！彼の者に誓い、彼と私の魂を今、
逢わせよう！！」

この儀式に必要な口上は『名を帰すから力を貸せ』と宣言するだけ。
だが、次の口上だけは違う。これは唯の、私の願い。

「どうか、我が創造主の魂に憐みを……………」。

そう呟き、祈りの礼をとる。

この狂った優しき人間の魂が一時でも安息につけますように・・・
例え、世界に安息が無くとも、

私が・・・この狂った私でも、せめて、彼の安息地になれますように。

そう、願いを込めて、手を勢い良く広げ、最後の詩を奏でる。

「闇よあれ、光よあれ、全てを飲み込め！聖唱！！」
l a c r i
m a a l m a 『 r

その瞬間、地獄と呼ばれた世界は天国のような光に包まれた。

s i d e o u t

side 愁磨

「……う……きる。」

ユサユサ

「う……」

誰だ、俺の素敵な睡眠時間を奪おうとするのは……

「お……シユ……そ……る。」

ユサユサユサユサ

「なっ、なんだ／＼お世辞を言っても意味はないぞ！！／＼」
で、なんで俺は見ず知らずのお姉様に起こされると言う
なんてギャルゲ？な状況になってんだ？
って……どこだこく

「ああ、そうか。地獄に墮とされたんだっけ」

「なんだ、今頃思い出したのか？シユウは意外と抜けてるんだな…
…」

「うるさいな。ところでノワール。」

「！！／＼なっなんだ！？／＼」

なんで名前呼んだだけで赤くなってるんだよ？

って、ノワールは『ノワール』で納得してくれたのか。

良かった良かった。ところでこの生き物可愛いから抱きしめていいよね？

答えは聞いてない！！（抱きっ）

「なっ／＼なん、な！？／＼／」

「おはよう。」「

「あ……、おっ、おはよう……／＼／（ニ）」「

ガハアッ……！！

「吐血！？どっどっどした！？」

「ハア、ハア、あぶねえ、普通レヴェルの女とさえ関わりのない俺には

破壊力が高すぎる……！！ノワール、恐ろしい子……！」

「え！？あ、あと、えっとその……ゴ……メン……（、・・・）シ

ヨボーン」

ツー・・・おっと、鼻から愛があふれ出たぜ・・・

「コホン、ごめんごめん、

お前が悪いわけじゃないから元気出してくれ、な？」（ナデナデ

「ノノノわ、分かったから撫でるな……子供じゃないんだから……」

やばい、こんな状況なったことエロゲでしか無かったから、

愛が溢れてもうどうにも止まらない……！！

……いや待て俺、自重しなきゃ話が進まん。

「さてノワール先生、この氷地獄の居ても全く寒くない状況等々、説明して頂けるかな？」

「ん、コホン。

分かりました。（チャキ）それでは授業を始めます。」

と言うとホワイトボード一式を出し、メガネをかける。

・・・落ち着け俺、説明だ・・・説明が終わってからだ！！

「さて、おま……、君の状況説明すればおおよそ説明できるから、そこからいくよ？」

まず君は私と契約したことで魔人となりました。

これにより不老長寿になり、少なくとも7000年は生きられるかな？

ちなみに魔人とは、魔王と魔神の間に位置する強さを持った人間のことです。

ちなみに私が魔王だからね。」

「……………」

「質問は後で。で、強さ的には魔王<<魔人<<魔神です。

これはあくまで身体能力、スペックだけ。

更に君と私の魂は相性が良すぎたせいで、君は私が他の魔王から

預かっていた

『宝玉・七つの大罪』を使える様になりました。

これは各大罪に付いている装備と能力を使い、単純にスペックが0・3段階アップします。

0・3段階と言っても、魔人のステータスにおいて、だから。

そうだね、君の知識にあつたFate/Stay nightで言うと、『干将莫邪』の一刀が

『天地乖離す開闢の星』の真名解放の一撃になるくらいのパワーアップだと思って。」

47

何それ怖い。

刀振るごとにエヌマ・エリシュが襲ってくるんですか？何それ怖い。
(大事なことなry)

今の説明だとしてもそれを通常時がそのレベルな感じですよ？
何そ(ry)

「ちなみに今の君は魔力壁(最弱)状態で『約束された勝利の剣』

喰らっても、

かすり傷負う程度だから。当然、君は力の制御ができていません。

魔力強化もしっぱなしの状態です。

なので、手加減しないと一般人なんかは君が普通のデコピンのつもりでも

”バチュン！！”

ってなっちゃうから気を付けてね。

でも今の君はこれらを一切使えません。

まだ完全に契約が終わっていないので、まだ一般人のままなのです。

「なるほど、履行はされたけど執行はされてないと」

「そうですね。」

契約の執行は一度転生しないと使えないので君は転ス「キター」

「……………」

…転生してもらいます。

送るのは私なので、好きな場所に逝けます。」

「…字、違わない？」

「実際、この地獄での生を終えてからなので間違いではないです。

そして、あなたには一つだけ能力が与えられます。

ですが注意事項があります。生命を創造することは不可能。

そして神族にはなれない。これだけです。

さて、どんな能力にしますか？」

俺は、チート転生できるとしたら、この能力。と以前考えた能力を言う。

「『創造』の能力をくれ。正確には、言葉にしたままの物が創れる能力、だね。」

「…なる程、確かにそれなら他のどんな能力でも使えますね。勿論制限はつきますよ？」

「分かってるって。でも説明書はつけてな。無いと発動すらできないし。」

「その点に関しては問題ありません。私が着いて行きますので。」

あ、教えてくれんだ。それは助かる。しかし……

「なんで自分でその能力使わないの？使ったら無敵じゃん？」

「……この契約者に能力を付加する力は私の力ではありません。

かつて居たとされるこの天界・地獄・次元を創ったとされる、

創造主神に自分の名前を捧げ、力を一度だけ貸してもらい、能力を貰うのです。」

「なるほど。で、それを使えるのは天界人だけ、と」

「そうです。そしてそれを使った天界人は神に逆らったとして、

墮天使として地獄に落とされるわけですね。」

「なるほどね。ところで、今言ってる神って言うのは創造主神のことだよな？」

来た時の受付？にいたクルセウスとアリアってのが、

自身を神って名乗ってたんだが、なんでだ？」

「天界での自警団、いえ軍ですね。これに入っている者が天使と呼ばれます。」

そして、その天使の中で最も強い50人が大天使、

その頂点12人が能力に応じた『神の名』を名乗ることを許されるのです。」

・・・なるほど。あのむっかつく二人は腐っても天界最強のうちの二人なのか。

「……お前の心中は察するが、今のシユウでは返りうちになるだけだぞ？」

「ああ、分かっている。…やっぱりそっちの喋り方がいいな。」

なんかこう、ノワールにあってる。ところで。」

「ん？大まかな説明は終わったぞ。質問か？」

……ああ、まだ転生するところを決めていなかったな。」

「いや、それもなんだが……その……妙に俺の視線が低いんだが……」

「ああ、契約自体は魂が生きていたから問題なかったんだが、

お前の肉体は死んでしまったんだ。

肉体が無いと魂は死んでしまうから、

入れ物となる肉体を作らなければならなかったんだが、

封印されていたせいで魔力が少なくって、

それで作れるギリギリの大きさの肉体が、お前の記憶上そんな感じだったのだ。

見てみると言い。《^{イジス}反転魔鏡》」

そんなすごいそうな魔法を鏡の代わりに出すなよ……まったく……

「……ってなんじゃこりゃあああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！？」

鏡？に映っていたのは女の子だった。13、4歳くらいだろうか？

ぱっと見は……そう、Fateの、少々成長して凛々しくなった
イリヤ。

女としても美しくなっているが。

身長は155〜160cmってところだろうか？

雪のような髪も同じだ。しかし眼の色は紅ではなく透き通るような
灰色。

『雪の精』よりは『雪の狩人』って感じか？主観的印象だが。

そして 我が息子は、無事だった。なぜか、前より立派なくら
いだ……orz

どう考えても男の娘です、本当にありがとうございます。

・・・まあいいか。前よりは確実にいい外見だし。

「さて、それじゃあ転生するとしますか。

ああ、行き先は『ネギま!』の世界。時間は・・・そうだな。

大分烈戦争の始まる600年前で。

力の使い方はマスターしないといけないからな。さ、行こうぜ。」

差し出す手を握り返しながら、ノワールが聞いてきた。

「原作の600年前ではないのか？」

「エヴァンジェリンが吸血鬼になるのが西暦1400年頃。

大分裂戦争が1981年。能力把握にかかる時間としては適当だろ。」

「?とりあえず分かった。

しかし本当にいいのか?神の二人に仕返ししないで。

…なんならわて「ノワール。」……」

「奴らは俺がこの手で生きて居るを後悔させてから
ゆっくり鬺り殺してやるからいいんだ……今は、な」

そう言つと俺はニヤリと笑つ。

「そ、そうか（あの二人も不幸だな…因果応報か…）」

「それに、今はちよつと感謝すらしてるんだ。」

「え？どつ、どうしてだ？」

ノワールは首をかしげ聞いてくるが、俺はその問いに明確には答え
ない。

「ハズいこと聞くんじゃねえよ、馬鹿ノノ」

代わりに少しだけ握る手に力を加える。

「あ…ノノつ、そつ、そつだシュウ。私はシュウと契約したから、

また名前が無くなってしまったんだ。だから……」

そう言っつてノワールは色んな期待を込めた眼を送ってくる。

「名前は前と同じだが、少し加える。」

「／／あ、ああ。それで……？」

「……ノワール・P・E・織原、そう名乗れ。」
フテリユウ エステル

「あ……、はい／／よろしくお願いいたします。マイマスター。」

「俺は……そうだな、愁磨・P・S e c h s ゼクスバール p a a r・織原でいいかな」

「……ちなみに意味は？」

「……六対の翼。」

「え……？／／／」

急に恥ずかしくなった俺はノワールの手を引く。

「くっそハズい！！／／さっさと行くぞ、ノワール……！」

「え、あ、ああ。」

Yes, my master シュウ。どこまでも共に行く。」

そして俺たちはネギま世界に旅立った。

第3話 二人は異世界に旅立つようです(後書き)

毎回長さがバラバラな件。

そして居眠りしてたら部長に怒られたでござる W W W W

さて、ようやく転生した愁磨ですが、

転生時期的に、暫くオリ展開になるかと。

次話はおそらく明後日になるかと思えます。

ロロノアゾロ様、感想ありがとうございます!!
凄く励みになりますッ!!

それでは、ここまで読んでくれた方に感謝を。

アリーヴェデルチ!!

作&愁「それでは、じじい。」

第4話 少年は力の使い方を学ぶようです

Side 第三者

光が収まると、そこは森の中だった。

恥ずかしいからという理由で急かした愁磨だが、

転生するのは二人一緒だったので、雰囲気はそのままである。

さっきの初々しい雰囲気そのまま引きずっていた二人だが、

それはいったん置いておくことにした。

「とっ、とところで、ここは本当に『ネギま!』の世界なのか?」

「あ、ああ、問題無い。 と言ってもここはオリジナルではない
がな。」

と言つと??と愁磨が問いかける。

「修正力がほぼ無い世界、と言うのかな。」

勿論、物語の根本たる大筋、つまり主人公級をトラウマなり

ケガなりで原作から退場させるようなことは出来んが、

主人公たるネギ少年の仮契約者を奪ったとしても、

他のクラスメイトが仮契約するだろう、から？

ハーレム、とか…やりたいならばやればいい。

そして、原作を外れんようにはなっているが、

主にお前サイドの人間の行動で徐々に未来が代わる。

お前の行動により原作知識が役に立たなくなるかもしれないのでな。注意しろ。」

「まあ、当然だな。森羅万象。物事は因果によって繋がれてる。」

これに関係ないのはお前の言う創造主神くらいだろうな。」

「…シユウは頭が良いんだか抜けてるんだかわからないな。」

「とある黒真珠の船長は言った。『その二つは必ずしも矛盾しない』」

「……確かにその通りだな。そいつは余ほど頭がキレるのだろうな。」
「少なくとも頭がキテはいるな、と思ったのは主人公しか知らないことである。」

「ゲフン!!! さて、能力の確認の前に言っておくぞ。」

俺がしたい原作ブレイク？は三つ。

一、エヴァの魔女狩りの歴史を粉砕する。真祖と『悪の魔法使い』にはなってもらおうが。

二、見解が『一般人』である原作メンバーの魔法介入の阻止。

三、野菜小僧を粉砕する。」

「他二つは分かるが、三つ目は無理じゃないか？」

「可能だ。修正力が働くと思われるのは

『原作メンバーが介入不可能になり原作の大筋を変える』ことだろう。」

ならば『大筋を変えない程度に介入不可能』にするか、

『事前に介入不可能な怪我を負わせても復帰出来る策』

この二つを用意しておけば大体は問題ないだろう。」

そんな愁磨の言葉にノワールはどこか呆れたように溜息をつく。

「そんな屁理屈が通じるか？仮にも理が決定している世界だぞ？」

そんなノワールの言葉に愁磨は可笑しそうに言う。

「おいおい、その世界を創ったとされる創造主神に創造の力を貰った俺が、

一世界でしかない此処の理の裏を搔けないとも思うのか。

お前の伴侶はその程度の男なのか？」

愁磨の言葉に照れながらも心配そうに見ながらノワールが問う。

「シ、シユウの事は信じているノノノ……実際、可能だろう。

しかしそれは驕りではないか？それは」

「（伴侶に反応しない?!ノノノ）ち、違う。これは自信だ。

俺は自分の限界を見極めてるし、出来ないこと位は分かるから大丈夫だ。

まあ、いざとなったらお前もいるしな。問題ないだろ。」

「ふっ、ふん。ノノまあいざとなったら助けてやるから、頼りにしろ。」

少し照れているノワールを満足げに見た愁磨は、先を促す事にした。

「じゃあ、能力の特訓を始めるぞ。」

「あ、ああ。しかし現状の把握はしなくていいのか？」

こういう時はまず置かれた状況を分かっていた方が……」

「ああ、問題無い。創造でそういう能力創ればいいから、状況把握はしなくていい。」

「……何より面倒だし。楽できる分にはした方が良くない!!」

「……………」

そんな愁磨を、先程とは裏腹に冷めた目で見るノワール。

「と、取り敢えず能力説明頼む。」

「はあ…、まあいいか。じゃあ説明するぞ。」

使い方はいたって簡単だ。魔力解放と同時に『創造』で能力使用が始まる。

次に『付加』で創造物に付加したい能力を単語を並べて行く。

これは、文で構成してもいい。

付加する能力が強力になるに連れて創造にかかる時間が長くなるから注意しろ。

そして付加したい能力が決まったら『*Briah*』で創造が「
ちよwおまwww」

……少し、頭冷やそうか。」

愁磨の脳天にノワールのアイアンクローが決まり、掌に魔力が溜まりだす。

ギリ　ギリ　ギリ

「ごめんなさいごめんなさい、もうふざけないので説明を続けてください！！」

「全く……で、『 Briah 』で創造が始まる。」

まあ大まかな説明はこれで終わりだな。」

「ホントに簡単だな。細かい説明もしてくれんのか？」

「言っておくが、私は能力のすべてが分かる訳ではないぞ？」

あくまで簡単な、初歩の初歩くらいだ。」

「……ああ、なるほど。あくまで能力をくれたのは創造主神だからな。」

「まあそういうことだ。私ができるのは全体の能力に共通する所だけだ。」

ああ、因みに開始キーは私が決めたモノだが、変更はできないぞ。

決めたと言っても、お前の記憶にあったモノを使ったただけがな。

続きだが、命を直接創ったり、能力で創り出したのも創ることも不可能だ。」

「なるほどな。使い方は分かった。」

しかし魔力って言われても、俺は魔力なんて使ったことないから分からないぞ？」

「ああ、そうか。じゃあ今魔力を流すから、まずはそれを感じ取っ

てくれ。」

そう言つと愁磨の胸に手を当てて魔力を流しだす、が……

「ひゃっ……んっ、あう……ッふ、んんっ!!」

「へっ、変な声を出すな!!! / / / こっちまで変な気分になるだろっが!!」

コホン、取り敢えずこれで魔力が分かったか？」

「あ、ああ / / 言葉が肉体に引つ張られるつてのは本当だな。」

あんな声が俺から出るとは……。ふう……。ふう……。

あとはこの魔力を解放？すればいいんだなよな？」

「ああそつだ。それを体の外に出すイメージなんだが……
ゾクッ)!!」 (

瞬間、世界を飲み込み、潰すかのような魔力が放出される。

「ん？これでいいのか？」

「あ……う……ああ。」

「ん？……あー、もしかして魔力が多すぎて辛いつてやつか？」

「すまんが止め方が分からんのだが。」

「あ、ああ。体の中に丸めて纏める様なイメージだ。」

すると、すぐに解放されていた魔力は、再び愁磨の中に納まった。

「ごめんな。……まだ顔色が悪いけど、これで大丈夫か？」

「ふう……ありがとう、もう大丈夫だ。」

しかし、基本を一度で成功させるとも思っていなかったが……
魔人の魔力量を侮っていたよ。

まさかこれほどの魔力を持っているとは思っていなかったよ。」

「魔王すらビビるってどんな魔力だよ俺はorz

……まあいいや、続けようぜ……って、座り込んでどうした？」

「／／／……正直、まだ、その……、震えが止まらないし、

それに、腰が抜けて……あの……だからその……だな／／／」

涙目になりながら顔を赤くし、

上目使いで見ってくるノワールを愁磨は神速で抱きしめる。

「ああ、もうお前はかわいいなあ　これでいいのか？」

なに、髪も撫でて欲しいのか？このいやしんぼめ!!！」

「いや／／／まあ、これはこれでいいのだが／／／」

そう言うとノワールは愁磨を一度剥がし、逆に後ろから抱きしめる。

「ああ、こちらの方が落ち着くよ……ノノノ」

「ああ、まあ別にこれはこれでいいけどさ？

でも、魔力の制御方法とかまだ教えて貰ってないんだがどうするんだ？」

「もう少しこのままで……ノノノ」

「……………」

Side out

Side ノワール

1時間後

「さて、魔力の制御方法だったな（ツヤツヤ）」

「ああ、よろしく頼む……（グツタリ）」

その後、一時間に渡り抱きしめられた愁磨は、

なぜか疲れていたが、顔はどこか満足げだ。

「さて、もう自分の中の魔力は拵んだな？」

後はその魔力を少しだけ放出したりするだけなんだが。」

「イメージ的には全身の細い血管通して出す感じでいいのか……？」

「イメージは人によって違うから一概には言えんが……、

ああ、そうそう。そんな感じだ。いいぞ。」

言っている間にもシュウは魔力解放を最低限出したり徐々に増やしたりしている。

……こいつは本当に生前魔力に触れていなかったのか？

魔力の扱いが上手すぎる気がするんだが……

いや、単にこちらの才能があるだけか。

「すごいな。もう制御もできるようになったか。」

「ああ。前の世界じゃ、イメージだけはしていたしな。

使えたらこんな感じかなってさ。」

……想像力だけでここまでできるようになるのか？

シユウのいた日本のオタクとやらは皆こうなのか？

ならば、素晴らしい魔法使いの軍団を作れそうだな。

「で、後は『創造』『付加』『*Briah*』でいいんだよな？」

「あ、ああ。最初は簡単な物から創造すると良い。解放量も最低限でな。」

「了解了解。んじゃ行きますか！！」

そう言うとシユウから魔力が僅かに流れ出す。

と言ってもそれですら一般魔法使いの10倍はあるのだが。

「『創造』 『付加』 属性は光と斬、姿はアーサー王の剣、理想郷の鞘に収まり、故に破壊不可能。

担い手を守護する、天をも貫く騎士王の剣を我が前に！

フウ…… 『 B r i a h 』 約束された勝利の剣」

徐々に創られていたそれが、名を紡がれた瞬間、急速にその生成速度を速める。

……って、なんだこれは！？付加の内容を見るに、

最低数十時間はかかる筈の創造が、もう完成しそつだと！？

パリン！！

れ、
と言う音と共に光が砕け、シュウの目の高さに一振りの西洋剣が顕

重力によって地面に突き刺さる。

「おおお！すつげえええ！！」

適当に言ってみたらマジでエクスカリバーできたじゃん！！」

そう。シュウの前に顕れたのは見た目・中身共に本物とほぼ同じ、
いわゆる伝説の剣だった。

S i d e o u t

s i d e 愁磨

「おおお！すつげえええ！！」

適当に言ってみたらマジでエクスカリバーできたじゃん!!」

いや、まさか本当にできるとは思わなかったんで、

ハイテンションなのは許してほしい。

しかしすげえな。

つて、セイバーはこんなでかい物振り回してたのか。流石騎士王。

と、俺がテンションを上げていると、

ノワールは不思議そうな、難しそうな顔をしていた。

「ん?どうした、ノワール?なんか変だったか?

言われた通りやった筈だが……」

「…ん、あ、いや、そうではないのだ。やり方は正しかった。

しかし、妙なのだ。」

「………妙って何が?いきなり伝説の剣出せたことがか?」

俺がそう言っとノワールは首を曖昧に横に振り、続けた。

「いや、創造できるのは当然なのだ。

別次元の伝説の剣だとしても創造主神の創ったモノだ。

シュウの『創造』で創れるのは当然だ。問題はそこではない。

言っていないかったが、モノを『創る』と言うのは存外難しく、

先に説明した神の中にも一人『創造』の真似事ならできる者が居るんだが、

そいつでさえ天使用の武装を一つ創るのに一週間はかかるのだ。

いくら主神の力の一部を貰ったとしても、

伝説の剣を創るのなんてそれこそ最低数十時間、

いや、一週間程度ならかかって当然。

なのにそれがただの数分で創れてしまうのはおかしいのだ。」

なるほどな。確かに強い方が創造にかかる時間多くなるって言うってたもんな。

エクスカリバーこんな短時間で創れたら、

戦神いくさがみ的な殲滅せんめつゲーになりそうだしな。

「で、なんで俺はそんなルール無視な『創造』が出来たんだけ？」

何かしらの抜け道ってないのか？」

「ふむ、確かにそれはどんな能力にもある。逆に、隠し制限もあるがな。」

この能力で考えられるとすれば……うーん……。」

ふーむ、どんな能力にもあるのか。

確かに連載開始時は最弱の能力だと思っていたら、

実は一番強かった、ってのも一応隠し要素の一つだろうしな。…ん？

「…なあノワール。この能力って創造主神？から貰った能力なんだよな？」

「ああ、そうだぞ？私は仲介しただけだ。」

ついでに言うなら初元の魔法と全ての固有能力は、全て主神から貰ったものだ。」

「そして、それらの『名前』を決めてるのも主神さんなんだよな？」

「む、その言い方だと、分かったのか？」

「憶測でしかないけどな。まあ簡単なことだよ。

俺の紡いだ『付加』と主神の創った時に『付加』したモノが似ていた。

で、俺が何となく言った最後の『創造物の名』。

そして『名＝魂』って言ってただろ？で、これを決めたのは主神。

そしてこれらを繋ぐのは主神の能力だ。

主神は想っただけでそれを創り、名を与える。

としたら、俺があとは主神と同じように名を与えると、真似事ではあるが魂を与える。

これでおおよそ全ての条件が揃う。

後は主神さまの補助が入って、瞬間創造が出来る、と。

ほら。多少の時間を吹っ飛ばして『創造』出来るのは無しじゃ無いと思うんだ。

と言っても、時間を短縮出来るのは主神の付けた『付加』の内容と『名』が合っている時だけだろうから自由になんか使えないだろうけど。」

「ふむふむ、分かり難い上に穴だらけな気もするが、確かにそうだな。」

…では、これを重点的にやっていくか？」

「いや、これは確かに便利だけど、全然条件が分からない。」

だが、俺の考えたモノがあると確実に分かるようになるし、

他のを創る場合にも役に立つ。」

「そうか。ではそれからやって行こう。ちなみに私は何をすればいい？」

「ああ。これを創るのだけは穴が無い様にしたいから、意見出してくれ。」

あと、この世界の魔法と、その知識も欲しいから、教えてくれ。」

「了解だ。さあ、とっととやってしまおう!!」

最初の目的まで、余り時間が無いのだろうか？」

「OK。まずだな」

第4話 少年は力の使い方を学ぶようです（後書き）

作「と、言う事で4話でした!!」

・・・短いかな?と、思わなくもないです。」

愁「まあ、ほぼやつつけだしな。」

作「それは毎回だ、H A H A H A H A H A!!」

愁「ますます駄目じゃねえか!!」

作「そんな事は分かってる。」

さて、十ZO様、感想と脱字訂正、ありがとうございます!!」

愁「そしてこんなダメ作者に助言してくださり、本当にありがとうございます。」「

作「そして、この作品を読んでくださっている方々に感謝を!!」

愁「あれ?『作品にもなって無い』とか言ってたのに、どうした?」

作「作品にもなって無いモノを読ませてる、なんて思ったら

失礼だと思ってな。あと、その程度の自信なら持つてもいいかなって。」

ノワ「良い心がけだが、驕るなよ。」

お前なんぞ他の作者の足元にも及ばんのだからな。」

作「分かってますとも。あ、更新は明後日になるかと思えます。」

愁「お前まさか、余裕持ったために明後日とか言ってるんじゃない・・・」

作「マジで仕事忙しいんだよ。部長滅べ。仕事押し付けんな。」

それでは、次回までアリーヴェデルチ！！」

設定と能力（ver・挿絵追加（前書き））

作「と、言う訳で説明するほどでもない設定です。」
愁「あと、挿絵追加。」

提供は Rain 様でお送りします。」

設定と能力（ver.挿絵追加）

名前：織原 愁磨

転生前

黒髪黒目で前髪をかなり伸ばしており、鎖骨まである。

普段は左半分を耳にかけている。

17歳、165cm 54kg 見れない顔ではないが、髪の毛のせいであつたく見えない。

基本的にはフェミニストであるが、たまにキレる。

タイプは作中通り、『お姉様』。

転生後

灰眼、腰までの長さの銀髪ロングをポニーテールにしている。

顔は凛々しくなったイリヤ。

普段は完璧に女の子の顔であるが、真面目な顔になると男の子としての

かつこ良さが出る、らしい。（ノワール談）

男の子（娘） 17歳（見た目14歳）、157cm、43kg

> i 2 4 4 7 5 — 2 2 9 6 <

神のひとりを手助けたのだが、神の実態を知った所に尊大な態度を取られ、

キレて殴りかかったところ、助けた神により地獄に落とされた。

という経緯があり、神をくちやくちやにしたいぐらい嫌い。

転生前より若干攻撃性が上がっており、

溜まっていたストレスのせいでキレると残虐に。

ノワールが居るおかげでマシになっているが、

ノワール以外には補正が全く通用しない。

能力次第ではバーサーカー状態に。

「身内（家賊）」とした人は全力をかけて守る。

しかし家賊と言えど、ノワールに手を出すと、容赦なく断罪する。殺しまではしない。

転生前から「自称『正義の味方』」が大嫌いである。
(ネギ・明日菜や一部を除く学園サイド、元老院など)

能力

クリエイト
創造

地獄に封印されていた堕天使・闇神ノワールから貰った能力。

(正確には、ノワールを介し、創造主神から貰った)

主人公が言葉にしたままの能力を持ったモノを作り出す能力。

『創造』で起動させ、その後に『付加』で能力や外見を並べていき、

最後に『Briah』と言葉にすることで創造が始まる。

『付加』は適当に単語を並べるだけでも良いし、文で構成しても良い。

大きな力を持つモノを創るにしたがい、長い・多い付加言葉が必要となるし、

(例『創造』『付加』”剣”『 Briah』で創れるのはRP
Gの初期装備のような剣。)

創造にかかる時間も長くなる。

(”剣”などは一瞬で出来るが、”伝説の剣”などは数日必要。)

平行作業が可能。一つ創造物が増えるごとに、かかる時間が×1
25倍になる。

89

生物を0から創ったり、生き返らせるもの

(例えば、「龍を作り出す珠」や、「生き返らせる薬」など)は
創造出来ない。

しかし、「万病を癒す杖」や「無くなった腕を再生させる魔法」
など、

生きている物に干渉して作用する様なものは創造できる。

すでに死んだ物（例えば『冷凍されている魚』や『売られている野菜』など）も創造可能。

宝具・神器などに更に能力を持たせることは不可能など、隠し禁則や、

作中の様な、時間短縮の隠し道がある。

『うんめいのうつくしきせかい』（未使用）

主人公が数年かけて創ったオリジナル魔法であり、自分の世界。

（アーチャーの無限の剣製のようなもの。）

平行創造の禁止、創造に必要ないと判断された異能の封印、

戦闘能力の激減（魔力以外のステータスを4ランクダウン）を犠牲に、

本来不可能な創造の時間短縮（必要時間を1/100程度まで軽減）し、

自分の想像から創造を補完できるようにした。

『創造』開始時に使われている能力は停止しない。

そして、この世界限定で、『ルールの改竄』が可能となる。

上記の制限は創造時にかかる制限の為、

創造を行っていない場合は制限がかからないが、

この空間での『創造』、『改竄』時には、強制的にこの効果が適用される。

発動すると、満月が浮かぶ、氷色の結晶と草原を抱く氷の世界になる。

背後には黒結晶の十字架型の棺。

戦闘時は草原は黒く、結晶は紅く染まる。

しかし戦闘に直接使える世界では無いため、空気になりがち。あくまで補助用。

名前ノワール・プテリユクス・エ デル・織原

黒眼黒髪で、髪は膝の裏側より少し長い感じの超ロングで、ストリート。

SAOのGGO時のキリトのAvatar+リトバスの来ヶ谷唯湖。
(想像補完で)

見た目17'8歳 169cm

@¥ . . : p k g (禁則事項だぞ だそうです) (. : . .)
ガクガクブルブル)

天界人だったが、十二神決定戦の時に嵌められ、

天界人殺しの濡れ衣を着せられ地獄に封印された。

とされているが、彼女が大天使長兼十二神主だった時が天界の

最上であり、

その最高戦力を持ってようやく、彼女を倒せる、と言っ
ほどの力を持っていた。

しかし自身が争いを好まないため、天界に無用な争いを生むま
いと、

自ら地獄に行き、その時に墮天、裏切り者とされた。

墮天して力が上がったことは本人以外知らない。

自分が犠牲になったにも拘らず争いを止めないどころか、

怠惰になった天界人を見て墮天の影響もあり、だんだん心が荒
んで行った。

天界人に4000年間裏切り者とされ、迫害されていた。

そこに愁磨が来て、恋に落ちた。

能力

????

強力な魔法を使える、ということしか分からない。

武器

巨大な槍剣、ルシファーズ・スピア『明星の彗星』。

ルシフェルが投げれば超彗星ですら打ち砕けるとされる神槍。

払えば山脈を薙ぎ払い、突けば星を貫くと言われているが、定かではない。

固有魔法

『封神八十七式裂光流星乱舞』ガンマ・レイ

光により圧縮された反物質を細いレーザーの様に複数打ち出す。

反物質の爆破力は全て貫通力に変換される。

任意のタイミングで爆発させられるが、その際の爆発は標的の範囲1mに凝縮される。

攻撃力は宇宙開闢にすら匹敵するが、破壊力ではなく殺傷力としての攻撃力である。

名前 クルセウス

ダンブルドアが神々しくなった感じ。(あれで十分神々しいが)

天界の『神』の一人。

能力

?????

名前 アリア

主人公が助けた銀髪翠眼の幼女。

天界の『神』の一人。

能力

?????

指を鳴らして主人公の手足を吹き飛ばした所を見ると、

何らかのサイコキネシスの能力があると思われる。

天界と地獄

天界 天界で暮らすことになった人間と、天使が暮らす世界。

数十の階層からなっており、

上に行くほど主神の加護が受けられるとされている。

12人、
天界軍の軍位は、最も力のある『神』と呼ばれる『大天使』

『神』の候補である『大天使』50人（『神』を含む）、

一般兵である『天使』約500万人があるのみである。

天使の振り分けは、

『力天使』（白兵戦闘要員）
『智天使』（後方戦闘要員）のみ。

指揮官・将軍・参謀などの高役職に就くのは『大天使』だけである。

天界の下に広がる十層の地獄は、本来の地獄では無く、天界が独自に造ったモノである。

本来なら天界の地獄に落されるのは天界人・天使となった者が罪を犯した時や、

侵攻してきた悪魔のみである。

地獄 天界とは場所を同じにして、空間がずれている世界。

人間としての生を終え、選ばれた者、天界で罪を払い切れなかった者が

こちらに送られて来る。

来た者は、正面に閻魔があり、罪状を述べられた後喰われるだけである。

下に階層が幾百とあり、魔物や本来の魔王、魔神が居る。

ノワールは、『神』の力と墮天により、魔王中最強級の力を得た。

天使・悪魔に関わらず、不老能力はかなり高く、寿命での死は殆ど無い。

再生力は、悪魔が天使より遙かに高い。

あくまで天使は人間の完全体であるためだ。

設定と能力（ver・挿絵追加（後書き））

今の所はこんなモノ…かな？

五話は、今日の八時くらいになるかと。

それでは、アリーヴェデルチ！！！！

第5話 二人は家賊と出会うようです(前書き)

二日ぶりです、aittleneです。

少々申告時間から遅れてしまい申し訳ございません!!

今回の話し、作者的に中々納得がいなくて・・・。
ハイ、言い訳です。

しかし、何度書いても納得が・・・!!

愁「いい加減うるせえよ!!」(ゴンッ

作「orz」

愁「お、おい。どうした?」

作「先にお前に謝るぞ!! すいません!!」

愁「おま、どう言う意味だ?!!」

作「それではどうぞおおおおおお (遠ざかりつつ

愁「ちょ、おま、なんだよ?!!」

第5話 二人は家賊と出会っようです

S i d e 愁磨

俺とノワールが修業を始めてから15年が経った。

修業開始一分ぐらいではっちゃけ始めたノワール。

外に出れたのが嬉しかったのか、魔法をぶっ放しまくっていたら、

魔法使いの一団と思しき奴らが来ていきなり戦闘になった。

どうやらこの頃から魔女狩りのなモノが在ったらしく、

俺達は、片や真白の美少女(男)、片や真っ黒な美女

でかなり目を引いて、怪しいからひっ捕らえろ、ってな。

・・・まあ、途中でキレたノワールが殲滅魔法で爆破したんだが、目撃者を残さなかったおかげで賞金は付かずに済んだ。

哀れ、野盗？（魔法使い）。

その後は魔力隠しの結界をノワールが張って、その中で修業していた。

いや、正確には最初の二、三年は手も足も出なくて一方的だったから、

修業ではなく虐めだった。

しかし、四年かけて創った俺の固有魔法『うんめいのつつくしきせかい』

が完成してからは、様々な能力を創り始め、

八年経つと、ノワールと戦えるレベルになった。

十三年程したらノワールにも勝てる様になって来たので、

戦闘は軽めにして、『創造』の特訓に入った。

特訓と言っても、『うんめいのうつくしきせかい』で

『アンサートーカーになる薬』を創って使えるようにしていたので、

確認と言った方が正確だろう。

創った武装は『王の財宝』と『闇』の中に入れてある。

『王の財宝』には戦闘用の武装、

そして『闇』には生活雑貨と、治癒・補助用の後衛装備と、

切り札用の『禁箱』^{バンドラ}が入っている。

『禁箱』には、星破壊とか次元破壊レベルの財宝を入れてあるので、

ノワールにすら開けられない様にした。

そして今俺がいるのは、

エヴァンジェリンが居るであろう欧州はイングランドの安宿。

ぶっちゃけ吸血鬼になる時期とかうる覚えだし、

ノワールと観光しつつ搜索している。

アンサイクロではマルドゥークとか王族がどうか書いてたから、
偉い人の処に行けば多分分かるはずだ。

まだ1400年に入ったばかりだから、時間あるはしな。多分。

仮に時すでに遅し、になっても、アンサートーカーで探し出せば良い。

その場合ちようk・・・、もとい、

教育が大変だがろうが、なんとかなるだろう。

・・・行き当たりばったりだが大丈夫か？

大丈夫じゃない、大問題だ。

お前は出てくるな！！宇宙意志！！ゲフンゲフン

「しかしこの時代は娯楽がねえな……PCでも創るか？」

「いやいやいや、それは流石に不味いんじゃないか？！」

そもそも、電源が無ければ出来ないだろう。」

「フッフッフ、無ければ創ればいいのだ！！というわけで」

「やめろと言っているだろうが！！」

そ、それに、シュウが『創造』し始めると私が暇なのだ！！／／／

成程、要するにノワールはイチャイチャしたいと。

そう言うわけか！！ならばよし！！

・・・まあ彼女なんて居た事無いから何すりゃいいか分からんが。
とりあえず。

「（抱きつ）そんなに拗ねんなって。綺麗な顔が可愛くなってるぞ」

「拗ねてない！／＼／＼くっ、後ろからとは卑怯な！おい！

くっ、離せ！！／＼／＼（バツ！）」

と、俺はノワールに無理矢理引っぺがされる。

「あ…、わ、悪い。そんなに嫌がるとは……その、ごめん…。」

「えっ、あ、いや！違う！違うぞ！？」

嫌だった訳じゃなくて、その、予想以上に力が入ったと言うか？！」

…っん、今なら好かれてると思ってた相手に拒絶されて怒る？

ってかキレて立ち去るギャルゲの主人公の気持ち分かるかもしれない。

うん、これはマジで胸が痛いぞ？

誤解と分かっているんだが、ちょっと泣きそうだ。

ああ、そうだ、もう寝ちまうか。不貞寝と言う奴である。

「ああ、…大丈夫、分かってる、

うん……、大丈夫。じゃ、おやすみ。」

「うえ?! ちょ、シュウ!! 話を聞いてってば!!」

ノワールがお姉様モードじゃなくて女の子モードになっているが、

…ダメだ、なんかダメだ。

気にはなるんだが、起きる気になれんぞ? 一体どうした、俺?

いつもならマツハで抱きしめるんだが…

いかん、なんだ、この気持ちは? 拗ねてんのか? 俺は?

S i d e o u t

S i d e ノワール

「ああ、…大丈夫、分かってる、うん……、大丈夫。じゃ、おやすみ。」

え！？寝るって、まだ昼なんだけど！？

「うえ？！ちょ、シユウ！！話を聞いてってば！！！」

しかしシユウは怒ってしまったのか、

壁に顔を向けて布団を被ったまま返事をしてくれない。

……ど、どうしよう！？嫌われた？！それはないよね、だよ？！

シユウが私の事嫌いになんて・・・ならない・・・よね・・・？

嫌だよ、そんなの・・・。私には、もう、シユウしかいないのに・・・

シユウの傍に居られないなんて・・・

シユウが居ないなんて、そんなのヤダよ・・・

私はフラフラと愁磨の方に近づき、恐る恐る肩に触れる。

触った瞬間、私の手がビクリと震え、離れる。

が、布団に包まれたままの愁磨の左肩を、缙るよつに抱きしめる。

と、私の目から涙が出てきた。

「愁磨あ……………」

S i d e o u t

S i d e 愁磨

俺の上になっている方の肩に誰かの・・・まあノワールだがな。

両手が置かれ、弱々しく握られる。と、

「愁磨あ……………」

泣きそうなの、いや、もう泣いているノワールの声が聞こえる。

「嫌だよ…私を嫌いにならないで…私を…一人にしないでよお…
もう、一人は…独りは嫌だよ…シユウ、シユウ…返事して
よお…」

俺は布団を撥ね退け、ノワールを思いつきり抱きしめる。

するとノワールの体ははビクリと震えた。

…さっきと同じ様に柔らかいが、さっきとは違い、すごく冷えていた。

「全く、馬鹿だな…」

「うえ…ごめんなさい、ごめんなさい、シユウ…私を」

ホントに馬鹿だよなあ。あんな事で拗ねて一番大切な人泣かすとか。

ああ、ホントは場所整えてやりたかったんだけどなあ。

衝動ではやりたくなかったんだけどなあ。

まあ、こう言うのもアリ、かなあ？

「私をき」　ンッ!？」

うるさい口を塞いでやる。いや、俺自身、初めてだからよく分かんが、

とりあえず、悲しい顔をされてるのが嫌だった。まあ、俺のせいだが。

「んん!…ん、ん……、んっ。……チュ、んちゅ……ン」

「ノワール…ノノノン……ちゅ、んん……ん」

「ン…フ、んっ……ッちゅ……フウ、シュ、シュウ?ノノノ」

唇を離すと、ノワールが真っ赤な顔をしていた。……俺もだろっが。

そして、ノワールを抱き締めなおす。

数十分後、ノワールが静かになった。

「もう大丈夫か？ノワール。」

「……………」

「の、ノワール？もしかして怒ってる？」

「……………すう……………すう……………」

「……………なんだ、寝ちまったのか。」

ノワールをベッドに寝かせようと運び、下ろす時に、

服を掴まれている事に気がついた。

「……………まあ、この場合はしょうがないか。」

独りごちると、俺はノワールと一緒のベッドに寝転がると、眠ることにした。

「…おやすみ、ノワール。」

この少女が明日は、笑って居ますようにと願いながら。

S
i
d
e

o
u
t

S
i
d
e

ノ
ワ
ー
ル

チ
ュ
ン
チ
ュ
ン
チ
ュ
ン、

「ん……」

ああ、そうか、もう朝か……だが……

なんだか、暖かいな。それに、とても安らぐ……。

抱き枕……か？私より10cm程しか小さくないから、そうだろう。

しかし、私は昨晚、何時寝たんだろうか？記憶が無い。

ん？いや、違う、昨晚では無い。たしか、そう。私は昼過ぎに寝たんだ。

シユウに嫌われたかと思って、また優しくされて、

そして、泣き疲れて寝てしまったんだ。

くううううううう！！！！／／はっ、恥ずかしい！！！！／／

魔王とあるう者が、人に縋りついて甘えた声出して

キスされて泣き疲れて寝るとか……子供か！！

ラブコメなのか！？それともギャルゲとやらか！？

と私が悶えていると、抱き枕がモゾモゾと動く。……ん？

いや、抱き枕は動かんよ。それにこれは、私が抱かれて

「ん……」

「あ……」

私が抱き枕だと思っていたのはシュウだった。

その寝顔は彫刻の様に整っていて、宝石の様に綺麗だった。

私を抱く腕は少し力を入れただけで折れそうな程細く儂げで、

でも、どこか頼りがいがあった。

生前とは全く違う、少女にしか見えない顔。細い腕と肩、狭い背中。

でも、同じように馬鹿馬鹿しく優しい愚か者。

私が唯一、共に居たいと思った人。私のいとしいひと。

「良かった……」

そう、よかった。

シユウの心は、私と同化させてから読めなくなってしまった。

そのせいでたまに不安になることもあった。だが、彼は優しくしてくれた。

彼と居られるのが嬉しい。彼が私の事を好きで居てくれるのが嬉しい。

そう思ったら、また涙が込み上げてきた。

ああ、私は弱くなってしまったな。

こんな、ただ一人の事を考えるだけで、

こんなにも嬉しくて楽しくて、切なくて悲しくて。

胸がいつぱいになる。

涙なんて投獄されて100年程で枯れてしまったと思っていたが、

二日続けて泣いてしまうとは。

ああ、ダメだ。早く泣き止まないと。じゃないと

「なんでお前は朝一から泣いてんだよ……?」

シユウが、起きてしまうと云うのに。

S i d e
o u t

S i d e
愁 磨

グスツ・・・ふえ、っうつ、ヒック・・・

近くで女の子の泣く声がして、俺は起きた。

目を開けると、目の前でノワールが泣いていた。・・・またか。

なんだ？泣き癖でも付いたか？全く・・・

「なんでお前は朝一から泣いてんだよ……？」

と、俺が声をかけると、ノワールは吃驚したようにこちらを見た。

「あう…シユ、シユウ。いや、ヒック、これはだな。」

「ボロボロ泣きながら何言っても無駄です。」

全く、泣くなって言っただろうが。俺は偉そうに話しながら、

自信ありげに微笑んでるお前が一番好きなんだから。

その他も勿論良いんだけどな。」

言いつつ、ノワールを優しく抱きなおす。

「落ち着くまでこうしてやるから。」

「……ありがとう、シュウ。」

・・・十分もしたら、ノワールは落ち着いたようだった。

「もう大丈夫だ。ありがとう、シュウ。」

「ん、そうか。…あ、そうだ。まだしてなかったな。」

おはよう、ノワール。」

「…クスツ、ああ。おはよう、シュウ。」

「こう言う時はおはようのキスでもした方がいいのか？（ニヤリ）」

「なっ…!!? / / /」

「ふふふ、冗談だ。」

こいつは……少し弄ってやるうか。

「フン、また泣き疲れて寝られたらどうしようかと思ったぜ。」

「フグツ、いや、それはだな……」

「大体、おはよふのキスとか。」

そんな発想、ホントは冗談じゃなくて、

お前がしたいだけじゃないのか?」

「ふあ?! / / / いつ、いいいや、私は別にそんな事……ない……ぞ?」

ククク、良い反応だ。ちょっと楽しいぞ。

「おやおや? その反応はなんだ? 真剣マツでして欲しいのか。」

「くううう、ああ、して欲しいよ! 悪いか!! バク　ん! ……んん

……」

言い終わる前に口を塞いだ。

いやいや、ギャルゲみたいな状況に自分になってる事もビックリだが、

自分から進んでキス出来る様にすらなるとは。

転生してちょっと性格変わった気がするなあ……………。

「はふ……………満足か？」

「ふぁ……………ううう、フッ、フン！満足げなのはシュウの方じゃないか！！！！／＼／＼」

「俺は満足だぜ？？こんな美女と朝っぱらからキス出来るんだからな。」

「づうづうづうづうづうづう！！！！！！」

うん、ノワールのキャラがだんだん崩壊してきたからやめておこうか。

「コホン、さてノワール。」

少々早いが、エヴァンジェリン探しをしようと思っただが？」

「むうう、覚えてるよ…!!」

…ふう。しかし、まだ時間があると言っていたのはシュウじゃないか。

どうして早く探すんだ？アンサーターカー使えば一発だろう？」

まあそっちの方が早いし正確だし楽なんだが……

「いや、これにばかり頼っていると直感が効かなくなるからな。

いくら能力的、ステータス的に勝っていたとしても、

第六感つてのは必要だ。それに俺の『創造』で感覚系を

底上げする物も創ったが、限界が在ったのが気になる。

おそらく、感覚の質は、経験でのみ上がるモノなんだろう。」

「自分で何かする分が無駄にならないのは良い事じゃないか。

頑張っても報われん者など掃いて捨てる程居るのだからな。」

「……………そうだな。」

ってああ、言わなくても分かっている。

憐れんだりなんてしないさ。そいつが、そいつの限界に

挑んだ結果だ。そんな事したら礼を失するだろう。」

・・・十分上から目線で失礼な上傲慢だと思っがな。

「気にはしてないからどうでもいいが。」

私はシュウの事しか考えていないからな。」

「Huh!!そつ、そうかい／＼／」

「変な処で照れるな、お前は。で、これからどこに行くんだ？」

「そうだな。」

やっぱりここは王さま「化け物だああああ!!吸血鬼だあああああ
ああ!!!!」

……………探さなくても良くなったかもしれないな。」

「ふう…一体、どこがまだまだ余裕なんだ？」

そっぴゃ細かい所は原作通りじゃないんだっつたな、この世界。

自分の曖昧な知識と直感より、

能力に頼った方が良い気がしてきたなあ……（――）

「ま、まあ良いじゃんか。行く手間省けたんだし？

ってか、まだエヴァンジェリンだって

決まったわけじゃ「いやあああああ！！離して！離してよお！！」……」

窓の外に見えるのは金髪ゴスロリ？の少女です。

はい。はあ……鬱だなあ……。

「ハハハハハ……」

「シュ、シュウ、大丈夫だって。ほ、ホラ！

行く手間省けたんだから良いじゃないか！な！？」

「そつつすね……んじゃ、目標其の一。行きますか！！」

「具体的には？」

「素直に渡すなら良し。記憶消すだけ。」

渡さないなら、見敵必殺。サーチャントデストロイただそれだけだ。」

「何も殺さなくてもいいのでは……?」

「ダメ。花を手折る奴はその時点で死ぬべきなんだ。」

そこに慈悲をくれてやるんだから、感謝して欲しいくらいだよ。」

「お前、前に確かアリアをどうとか言ってた様な……?」

「『撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ!』」

「黒いな……。それでは、お姫様を助けに行くのか?」

「俺のお姫様はここに」「そう言うのは良いから! / / / /」「全く……」

んじゃ行くか。お姫様とやらを助けに、さ。ま、適当にな。」

言いつつ窓から出るよ、

もう十字架型に木が立てられ、エヴァが縛られていた。

さっき見た感じだとまだ壊れてはいない。

ならばさて、壊れる前に助けますか。

……俺が正しく壊すために、な。

第5話 二人は家賊と出会つようです（後書き）

作「と言つ訳でした！！！」

愁「とりあえず言いたい事は山ほどある。

が、まずは齒をくいしばれ！！！」

作「だが断る！断りたい！！断らせてくれえええええ！！！」

愁「な、なんだよ。そのまで必死になる事無いだろうが。」

作「いや、もつとなんかあつたんじゃないかなと。」

愁「そんなの毎回だろうが。」

どうせ実力ないんだから気にしても無駄だろうが。」

作「そうなんです。」

実力ないけど、いつか、きつと！！！」

愁「文才増える様になんとかしてやるので、

今回の事はご容赦を……………」

作「ってか、お前、まだキスもしてなかったんだなあ。」

愁「う、うるせよ！！俺の勝手だろうが！！？」

作「キスまで15年。

そんなギャルゲはやりたくないでござる。」

愁「くうううう！！！！」

今度の更新は明日です！！よろしくお願いします！！！！」

作「ちょ、おま！！！！」

愁「それでは、アリーヴェデルチ！！！！」

作「ま　　プツン

きんぎょ

かいぎ……(前書き)

そつごうです。

愁「ちよ、おまー！洒落んならん事を！！！？」

作「言い訳させて頂くならば今回の第五話、本日休みであった作者、

朝から数え、最低十回は一から書きなおしております、

出来てすぐに投稿して、感想の御礼を忘れた次第であります。」

愁「そこはお前の文才の無さを怨むしかないな。」

ノワ「ああ、全くだな。ま、まあ私としては、シユウとやっと一歩

進んだのは嬉しいのだがな／＼」

愁「の、ノワール。少し空気読めって（・・）（・・）」

作「これ以降はこのような事が無い様に致します・・・！！

本当に申し訳ありませんでした！！！」

ノワ「これからは私とシユウで気を付けるよう

促すので、勘弁してやってくれないか？」

作&愁「サーー!!! イエツサーー!!!!!!」

作「は、ハーレム候補が増えて来たので、纏めようと思った次第であります!サーー!!!」

愁「つきましては、ここで大々的に応募求めようとした次第であります!!!サーー!!!!!!」

ノワ「なるほど。して、現在はどのようになっているのだ?」

作「現在 ノワール様

決定メンバー エヴァ テオドラ 真名 刹那」

ノワ「二人、『お姉様』でないが良いのか?」

作「一番が『お姉様』二位が『黒髪』三位はいつぱいな作者であります。

ヤンデレなら尚の事良いのですが、今の所入っておりますぬ。」

作「と言う訳で、ハーレムメンバー選出会を開催したいと思っています。」

投票は感想からどうぞ。」

ノワ「ちなみに、今上がっていないキャラでも勿論OKだ。」

作「上位4人くらいをハーレム入りさせたいと思っています。」

ノワ「随分中途半端な数だな。」

作「9人と10人じゃかなり違うんだよ……。」

期間は、10話うp後に集計いたしますので、それまでです。」

ノワ「具体的には？」

作「今のペースだと25日の22:30最終集計になるかと。」

ノワ「ちなみに言うておくが、投票理由は必要だ。」

『可愛い』『好き』でも良いが、具体的な方が作中で

意見を反映させやすい事を念頭に置いておけ。」

作「『このキャラにこうして欲しい』などの要望が来ましたら、

作中で最大限反映いたします。」

作&ノワ「それでは、アリーヴェデルチ!!!」

きんきゅ

かいぎ!!! (後書き)

ノワ「さてシュウ。覚悟はいいか？」

愁「ま、待てノワール!! 言うておくが

俺はハーレムなんて……!!」

ノワ「いいや、無理だな。

シュウの事だ、どうせいつの間にか増えているんだろう?」

愁「ええええええ?!」

作「ああ。それは本当だな。主人公補正で、お前は一級建築士の

資格を手に入れているからな。」

愁「ちょ、お前……!!」

の、ノワール、早まるな!!!

俺が一番好きなのはノワールだから! な?!」

ノワ「クッ?! / / / . . . だから、シュウはズルイと言っただい!」

愁「え?」

作「ラブコメるのは本編だけにしろ!!」

ほら、やるぞ!!!!」

愁「ああ、分かった。」

ノワ「（折角チャンスだったモノを . . .）」

作・愁・ノワ「 . . . それでは、アリーヴェデルチ!!!!」

第6話 吸血鬼は魔人と出会うようです(前書き)

作「……………」

愁「おい。もう始まつてるぞ!!」

作「……………」

ノワ「へんじがない。たたのしかばねのようだ」

愁「まあ、作者的には異例のスピードで書いてたしな。」

ノワ「大丈夫だ。遺言は残して逝った様だ。」

『今回の話は戦闘が入っておりますが、

戦闘と呼べるようなモノですらない事になっております。

嫌な予感のする方は、中間を飛ばす事をお勧めします。』

だそうだ。」

愁「一体何を書いたんだ……………」

ノワ「作者が死んでいるので、私から礼を言おうと思う。」

十ZO様、感想誠にありがとうございます。

ユウト様、FMY様、m n f様、つくつくかました様。

要望を送ってください、ありがとうございます。

つくつくかました様、作者が偉そうに述べていますが、

そう言う事だと思い、容赦してやってください。」

愁「ところで、なんで前書きでお礼が？」

ノワ「後書きに要望経過入れるから、だそうだ。」

愁「よく分からんな。」

ノワ「とりあえず、長くなってしまったので。」

愁&ノワ「それでは、どうぞ!!」「」

第6話 吸血鬼は魔人と出会うようです

S i d e ? 金髪幼女?

私は、ある城で十歳の誕生日の日、

魔法使いの男に真祖と言うのにされて、

不老不死、つまり、外見上一切歳をとらなくて、あらゆる傷が再生し、

死ぬような病気にはそもそもかからなくなりました。

その魔法使いにお父様もお母様も、メイドも爺やも、みんな殺されました。

私はその男を許さなかった。許せなかった。

男が顔を近づけて何か言おうとした時に、

男の頬を思い切り叩いてやりました。

逆上して殺される覚悟もしていたんだけど……

私が頬を叩くと、まず男の顔が反対まで回りました。

続いて体が錐揉みしながら、少なくとも2〜3mは飛んで行きま
した。

その時私は直感的に悟りました。『私は人間じゃなくなった』と。

それから三年くらい経ったんでしょうか。

幸い、お父様がお金持ちでしたから旅をするお金には困らなかった
けど、

子供一人だと、宿屋に泊るのにも一苦勞でした。

同じ町には一か月も居られなくて、

人ともなるべく関わらないように気を付けていました。

だけど、この町に来て、人にぶつかって転んでしまった。

ただ、それだけ。

ぶつかった人は親切な人だった。だから、ダメだった。

その人は、私の怪我を見て「ごめんね」と謝ってくれたけど、

その傷が一瞬で治るのを見ると、

だんだん顔が青ざめていって、叫びました。

「化け物だあああああ！！魔女だ！！吸血鬼だあああああ！！！！」

その声を聞くと、町の人たちが私を捕まえに来ます。

私は走りましたが、足がもつれて転んでしまいました。

そして、私の体よりも太い腕が、私の髪の毛を掴んで

木で出来た台の上まで引きずって行きます。

昼で力が出ないので、振りほどく事ができません。

私はたまらず叫びました。

「いやあああああ！！離して！離してよおおお！！！」

なぜ、私がこんな目に遭わなければいけないのでしょうか。

私は、あの男のせいでこうなってしまったただけなのに。

私は何も悪い事をしていないのに！！

・・・私があつ男を殺してしまったのがいけなかったのでしょうか？

私は、みんなの仇を少しでも、と思っただけなのに。

「皆様！！ご覧ください！！これが魔女です！！外法で身を穢し、

永遠を生きようとする吸血鬼です！！そのような事、神が許しはしません！！」

「神父様 ！！！！」
「その魔女に裁きを！！」
「神の断罪を！！」
「殺せえええ！！」

あなた達の神様は、それすらも許してくれないのでしょうか？

・・・なら、私はそんな神様なんて信じない！！

そんな神なんていない！！

「さあ！！今、この魔女を神の炎で焼いてしましましょう！！！！」

「！！！！！！焼け！！殺せ！！！！神の裁きを！！！！」

ああ、私はこのまま焼かれてしまうのでしょうか？

焼かれると言っているのはただでさえ苦しそうなのに、

私は傷が再生してしまいます。

そんな・・・そんなのは嫌です!!

誰か・・・誰でもいい!! 悪魔でもかまいません!! だれか私を・・・

「誰か!! 誰か助けてえええええええええええええええええええ!!!!」

トン

「その言葉は本当か? お嬢ちゃん」

軽い足音を立てて上から来たその人は、私に問いかけました。

S i d e
o u t

s i d e
愁磨

あーあ、こりゃもう駄目だな。こいつら皆殺し決定。

善は急げだ。早速眼の前の奴から・・・

「って、待て待て！！それはダメだと言っただろうが！！」

「いやだって、もう救いようないだろうが。」

あいつら『神の』とか言ってる時点でダメ。

俺の敵決定。」

ちなみに、修業時代から認識阻害かけてるから、

俺とノワールはそこらへんの農民に見えてるし、

今、この状況に合わせて叫んでるように周りには見えてるから問題なし。

「いや、シュウの気持ちは分かるが……

しかし、やはりいきなり殺すなんてダメだ!!」

こいつはやっぱり優しいな。

何千年も迫害されてたつのに、こんなにも他人を思っている。

俺なんかとは違う。俗な俺とは違う。

故に、今だけは眠っていて貰わなければならない。

多分、ノワールが起きていたら中途半端な殲滅になってしまう。

いくら了承しても、多分、ノワールには我慢できない。

こいつにお願いされたら俺は絶対に断れない。

それが本当に願っている事ならなおさら。

だから、この優しい魔王には見せられない。

ギョッ

「分かった。だけど、エヴァを渡さない場合は、

さっき言った通りにするぞ?」

「あつ、ああ。分かった。や、約束する。」

やっぱり駄目だな。こいつは覚悟が出来てない。

こんな優しいのが魔王だなんて笑っちまうよなあ……。

……ごめんな、ノワール。ごめんな。

俺はもう一度ノワールを強く抱き寄せ、

「じめんな(トーン)」

囁き、手刀を入れる。

「あ………」

ノワールは短く息を吐くと、意識を落とした。

ノワールを『闇』の中のベッドに寝かせる。

・・・さあ、切り替えて行くか。

吸血鬼と言ったら、赤い旦那だよな。

エヴァはもう吸血鬼になった後だけどさ。

認識した。

その瞬間、俺は認識阻害を破り、1000m程を跳躍し、エヴァの前に立ち、問う。

「その言葉は本当か？お嬢ちゃん」

「え………？」

「本当に助けて欲しいか？本当に生きたいか？生きていても、苦しいだけかもしれんぞ？」

エヴァは涙でくしゃくしゃになりながらも、しっかりと自分の意思を伝えてきた。

「生きたいです……」

神様がグスツ、許してくれなくヒック、ても、私は生きたい!!

みんなの分まで、私は生きたいです!!

「それが、本心だな？」

「ひゃい……」

「よかろう。たった今、運命は貴様を駆り立てた!!」

「なっ、なんだ貴様は!?! 貴様も魔「五月蠅い!!」

「出来損ないのくだらない生きものめ!! 能書きはいい。で、どうするっ。」

「な、なにがだ?!」

「この子を見逃し全員生きるか、あるいは私に全員殺されるか。

さあ、決断できるのは一度だけだ。」

「何を言っている!?!その化け物は神に仇成すモノだ!!

故に断罪されなければならない!!!!」

「「「「「そうだ!!その通りだ!!」」」」」

ああ、そうか。そうなのか。ククククク……………

「な、なにがおかしい……………」

「クククツ、クククク。成程、成程。

そうか、全く以ってどうしようもない連中だ。

ならばこの私が相手をしてやらねばいけないのは全く自然だ。

ああ、とてもうれしい。

未だおまえ達の様な恐るべき、馬鹿共が存在していただなんてな。

我が名は『アーカード』。

覚えておけ。地獄で怨むことになる名だ。

さあ！！ 殺ろつぜ！！！行くぞ、歌い踊れ。豚のような悲鳴を上げろ！！！」

そう言つと俺はカスールとジャツカルの引き金を引く。

始まったのは殲滅であり、虐殺。

演目は恐怖劇。
グランギニョル

演じるのは俺と民衆。観客は少女一人。

しかし、あまりにも短い劇だ。

青年の頭を撃ち抜き、老婆を引き裂き、

母の体を吹き飛ばし、赤子を踏み潰す。

向かって来る者を叩き殺し、老爺を弾き飛ばし、

逃げる者を飛び散らせ、男を手刀で貫く。

そうすると、5分もしない内に、立っている民衆は居なくなった。

残っているのは神父だけ。

「さあ、残っているのはお前だけだ。

だがしかし、狗では私は、殺せない。

化物を打ち倒すのは、いつだって人間だ。

さあ、お前はどつだ？どつするんだ？

おまえは狗か？ それとも人間か？！」

「うわああああああああ！！来るな化け物おおおおおおお
おお！！！！！！」

「そうか。全く持って下らん。」（ダン！！）

神父の脳天を撃ち、俺はエヴァの縄を解き、言う。

「さあ、これで君は自由だ。

しかしどこへ行っても同様の事が起こると思え。

さあ、どこへなりとも行くがいい。」

そして兵装を解除しつつ歩きだす。と、後ろから声がかかる。

「ま……、待ってください!!--」

俺は正直驚いた。正直、初戦闘だったからテンション上がってやりすぎたし、

こんな光景見て、声をかけられれば奇跡だろうと思っていたからだ。

「どうした？嬢ちゃん。」

「あれ？別人…？いや魔法？と、とにかく、えっと、あの、その」

「……何が言いたいんだ、嬢ちゃん。」

「そ、その嬢ちゃんってやめてください！！」

私にはエヴァンジェリンって名前があるんです！！」

あー、今の今まで確信は無かったけど、エヴァだったか。良かった良かった。

「分かったよ、エヴァンジェリン。で、それだけか？」

「…あなたは魔法使いなんですか？」

「一応魔法使いだが、それがどうした？」

…何となく読めるし、誘導してるようだが。

しかし、選ぶのはこの子だ。この子でないとダメだ。

「……私に…私に魔法を教えてください！！」

と、エヴァは頭を勢い良く下げる。

「なぜ魔法を知りたい？これを見ても魔法を使いたいと思うのか？魔法使いになるとはこういう世界があるという事だぞ？」

俺が死体の山を指さすと、エヴァは吐きそうな顔をしたが、震えながら、それでも言った。

「はい。お父様達が死んだ時に、それは知っていました。

…それが、本質であるとも。

私は、お父様達の方まで生きたいんです。しっかりと、意志を持って。

でも、今日みたいな事が起きたら、次はきっと助けてもらえませんが、こんな事が続けば、自暴自棄になって、何も考えないようになってしまいます。

だから、力が欲しいんです！！自分で、自分を守る力が！！

だから……だから、お願いします!!」

パーフェクト。合格だろう。

普通なら既に気を失っているか逃げだしている所を、

この子はしっかりと自分で立ち、自分の答えを出した。

「分かった。君を弟子として受け入れよう。」

「あ、ありがとうございます!!」

俺の目的は、あくまで壊す事。

壊すなら妥協は許されない。

壊れないように、壊す。

「ただし、俺の弟子になると言うなら、地獄を見るぞ。覚悟してい

る。」

「地獄なら2度見ています。」

「……正しく理解はしているようだ。」

しかし、2回な。

間違いなく此処も一回に勘定されてるんだろうな……。ハア。

「さあ、行くぞ、キティ。」

「なっ！！／＼／＼どっ、どうしてそれを知っているんですか！！」

「さて、なぜだろうね、」

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。

言うておくが俺とお前は初対面だ。」

「ますますどうしてですか！？それに不公平ですよ！！」

あなただけ私の名前知ってるなんて！！

なんて名前なんですか？！えっと、アーカードさん！！」

「ちなみにそれ偽名だからな。 H A H A H A H A H A。」

「なっ?!」

「俺の名はお前が家賊になれば教えてやる。」

「かつ、かかかか家族なんてなれませんよ?! / / / ずるいです
! ! !」

「完全に誤解しているな。『家』『賊』だ。」

「『家賊』? なんですか、それは?」

「お前が『何を犠牲にしても守りたい人』だと思っておけ。」

「だが、定義なんぞ自分で決めてしまえ。俺も名を借りているだけだ。」

「私の…守りたいモノ……」

「言うておくが、簡単に増やすなよ？」

心の底から、本当にそう渴望した人だけにしろ。」

「……分かりました。」

「あと、タメ口にしろ。ム力つくから。」

「タ…タメ口？」

「ん、ああ、そうか。つまり、砕けた、楽な口調にしるってことだ。」

「む、難しいですね…じゃなかった、難しい……な？」

「アハハハハ！まあ徐々に使えるようになればいいさ。」

さつて、そろそろ行くぞ。誰か来たら面倒だからな。」

「え！？あのこの人たちは……？」

「……やれやれ、そうだな。腐って養分にでもなれば儲けもんだろ
う。」

『形態変化：モード エドワード・エルリック』と「（パンツ！バシイ！！）」

俺は落とし穴を作り、死体を全て土の中に埋める。

「解除つと。さ、これでいいだろ。行くぞ。」

「すごい…これも魔法でs…魔法…なの…か？」

「いや、これは錬金術だよ。歪んだ、だけどね。」

「歪んだ…って、どういう意味ですか？」

「言葉のままだよ。ま、お前には使えないから気にするな。」

言いながら俺は町の外に歩き出した。

「あつ、待ってください…待て…ってば？」

「いや、その質問は聞かれても困るんだが？」

馬鹿な事を言いつつも俺はある懸念事項をすごく、すごく考え

ていた。

そう。

手刀で寝かしたノワールへの説明と、機嫌をどうやってとるか、だ。

鬱だなあ。　まあ、適当に行くか。

・・・しかしまずは、

「待つてって言うてるじゃないですか!!」

無視すんなやゴルアアアアアアアアアア!!」

宇宙意志によってネタに走ったエヴァを治そうか。

第6話 吸血鬼は魔人と出会うようです（後書き）

作「・・・と言う訳です。」

愁「相変わらず色々酷いが大丈夫か？」

ノワ「聞くまでも無いだろう。大問題だ。」

作「いや、批判は感想ページで受けるから。」

とりあえず、前書きで言っていた、投票経過ですが、

現在

ノワール エヴァ？

決定

真名 テオドラ 刹那

投票

アリカ 9票

ちづねえ 2票

裕奈 1票

ネカネ 2票

柿崎 美砂 1票

くぎみー 1票

椎名 桜子 1票

アキラさん 1票

となっております。」

ノワ「……これ、姫はもう入れていいんじゃないか？」

作「色々悩んでるんだよ……。」

愁「一番悩みたいのは俺だよ……orz」

作「お前はちゅっちゅちゅっちゅしてりゃいいんだ。」

愁「それが問題だろうか?!」

作「そんな事はどうでも良い。」

さつき、何となくハーレムメンバーの会話書いたんだ。」

ノワ「ふむふむ。で？」

愁「無視すんなー!!」

作「まあ聞け。アリカ・ノワール・テオ・エヴァ。

四人の言葉遣いがマジで似てるんだよ!!」

愁「た、確かに。多少は違うが・・・。」

ノワ「それはお前の文章構成力次第でなんとでもなるだろう?」

作「テオについては『くじや』とかあるから問題ないんだが、

他の三人が無理すぎるんだ。

そこで、オリキャラたるノワールの口調を、

女の子にしても良いかどうか聞こうと思ひまして。」

ノワ「ふむ、成程な。」

愁「常に女の子モードだとうなるんだ?」

ノワ「そんなに違和感無いと思うんだけど、どうかしら?」

作「な感じになると思うので、宜しかったらついでに

「ご意見くださいます。

期間は7話掲載までの2日間にします!!」

作&愁&ノワ「「「それでは、アリーヴェデルチ!!」」」

第7話 時間は一気に飛ぶようです（前書き）

作「こんにちは、altleneです。」

愁「いい加減原作行かないとネタが無くなるが大丈夫か？」

作「大丈夫じゃない、大問題だ！」

ま、一応今回で次ステージに行くから大丈夫。」

愁「困るのはお前だから良いんだけどな。」

作「そう言うなって。一緒に過労死しようぜ！」

それでは、パパチャ様、zero様、菜木沢 竜華様、

神無月様、十ZO様。」

愁「感想、ありがとうございます！！」

続いてパパチャ様、使徒様、神無月様。」

愁「アンケート、要望ありがとうございます！！」

作者の力と勇気と希望です！！」

愁「まあ、前書きはこの辺で。」

作&愁「それでは、どうぞ！！！！」

第7話 時間は一気に飛ぶようです

side 愁磨

さて、エヴァを助けて数時間。俺は大ピンチだ。

殺されかけている訳じゃない。

痴情の纏れで「誠君、死んでください」になっている訳でもない。

あの後、眼を覚ましたノワールにキレられて、

第一次殲滅事件（俺命名）を説明し終わった後、

「なんで私を気絶させたんだ!!!？」

って言われて、あまりの剣幕に仕方なく

「覚悟が出来てなくて、止め刺すのに邪魔になると思った。」

的な事を言ったら、

それ以降、怒るでもなく、泣くでもなく、

口を利かないでムスツとしておられる。

はあ、悲しませないって言うておいて、

舌のね乾かない内に、何してんだか俺は。

泣かれてないから大丈夫だとは思うんだが……………。

どうでもいいけど、ずっと頬を膨らませると、

風船膨らませた時の内頬がキーンって感じになるよね。

ノワールは大丈夫なのかな？

……話を逸らすのはやめようか。

さて、どうしたら良いんでしょうか？

エヴァも居心地悪そうだし……

そ、そうだ！自己紹介しようか！！

人が自己紹介するってのに、自分は自己紹介しないなんて

失礼なことはしない子だしな！！では早速行こうか！！

断じて遅く無い！！遅くないぞ？！

「コ、コホン。の、ノワール？

こちらはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

ほら、さっきの吸血鬼の子だよ。（行けエヴァ！！頼む！！逝って
くれ……！）

「(字が違いますよ?!)(ん、んっ。

は、初めましてノワールさん。

私はエヴァンジェリン。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルって言います。

長いので、どうぞエヴァって呼んでください。

「よ、よろしくお願いします。」

エヴァはビビりながらも、恐る恐るノワールに手を出す。

「……………」

僅かな・・・沈黙・・・ツツ!!き、きついぞ、これは!?

そばに居る俺ですらこの重圧ッ!!

相對しているエヴァの負荷は図り得ない!!

一秒も経ってないのに冷や汗をかいているツツ!!

「……ノワール。ノワール・P・E・織原だ。……よろしく。」

その言葉を聞くと、俺とエヴァはホッと息を吐く。

「あ、あの。ノワールさんはアーカードさんとどう言う関係なんですか?」

「……アーカード?……一体誰の事だ、それは?私は知らんが。」

「え、ええっと……。あそこの人です。私を助けてくれた……。」

「さあ!?

舌の根も乾かない内から裏切ってくれた奴の事など、私は知らないが?!」

「あは、あははははは……。」

キツ！と俺を睨んでくるエヴァンジェリンさん。

「（何をしたか知りませんが、後はあなたがなんとかしなさい！！）
「！」

「（……………うう、分かりました……………」。

悪いが、離れててくれ。1km以内なら結界あるから。」

ふう、とため息をついて離れていくエヴァ。

そして俺はノワールの背後になんともなく正座で座る。

「ノワール…その、悪かった。

…言い訳だが、目撃者を残すわけにはいかなかったんだ。

今賞金首になるのは面倒だったんだ。

せめてエヴァが力を付けてからじゃないと、

何かあった時、エヴァにもしもってことがあったから……。」

「……人間如きの力であったなら、

リミッターを着けているとは言え、お前なら対処出来るだろう……？」

そう、俺はまだ、感情が昂ったりした時の力の制御が完璧でないから、

リミッターをかけているのだ。 いや、そんな事はどうでもよくてだな。

「い、いや、確かにそうかもしれんが、

イレギュラーが起きた時の事を考えた場合、

皆殺しにした方が危険が低かったんだ。」

「しかし、その程度のイレギュラーなんて、

私がエヴァを守っていれば問題ないだろう?。」

言いつつ、ノワールが俺の方を向く。

「う、その通りだ……。。」

「た、確かに、私はあの時、お前が『全員殺す』と
私に確認した時、覚悟が出来てなかった。

お前なら連れて逃げる事など雑作も無いと思ったし、

そこまでする必要も無いと思ったからだ。

私も、追われながらの生活など勿論嫌だし、

そう言う事は極力避けるべきだと思う。

「……だから、お前のあの時の行動は正しいのだ……。。」

あ、あれ？意外と納得してた？ならなんで拗ねてたんだ？

「だが、私は悲しいのだ……。」

シュっ、シュウに、信じて貰えなかった事も……。」「

「いや！？俺はノワールを信じてるぞ？！ただあの時は」

「そうでは無い！そんな事は分かっている！！」

お前が私の事を思ってやってくれた事も……！

しかし、わっ、私は嫌なのだ…。

こんなモノ、駄々を捏ねているだけだと分かっている…。

私が起きた時、そこがお前の創った『闇』の中だと分かった。

しかし、不安なのだ……。

寝る時に、起きた時に、シュウが居ないのが、

不安なのだ……ツク…。」

「（また！？）の、ノワール。」

「何時もそっ、傍に、シュウが居ない、と、不安なのだ……！！」

こっ、んな、女、面倒だと、思うっ。だけど、だけどおお……

わっ、私は、弱くて、弱く、なっ、てしまっ……

私には、私には、シュウしか、居ない、から、だから、だから……

……。」

「……もういい。もういいから。ごめんな。」

「ごめんな、ノワール。こんな奴で、ごめんな……。」

俺は正面からノワールを優しく抱きしめてやる。

最近頻繁すぎないか、これ？

ふう、もっと精進しないといかんな。

「シユウ、は悪くない、のだ……イック。」

「こんな、こんなことっ、でっ、

泣いてしまう、ような、私が、いけ、なッい、のだ……！」

「いや、俺が悪いんだ……ってこれじゃ終わんなくなるな。」

「だから、私が」

「もう良いってば。な？落ち着くまで黙ってる。」

コクリと頷くと、ノワールのすすり泣く声だけがしばらく続いた。

S i d e エヴァンジェリン

私は、アーカードさんに離れていると言われましたが、
近くの茂みに隠れる事にしました。

だって、結局分かったのは、

アーカードと言うのが偽名という事と、ノワールさんの名前。

そして二人がある程度近い関係 多分ですが という事だけ
です。

ああ、あとはアーカードさんが強く、
残忍だけど優しい(?)とい
う事です。

結局殆ど何も分かっていません!!

と言う訳で、二人の話の話を聞いていれば、何かしら情報を聞けると思っただのです。

50m程離れています、幸い二人の会話は聞き盗れます（誤字では無いです）。

吸血鬼になったからでしょうか？

「、、いや、確かに れんが、

イレギュラーが起きた時の事 合、

皆殺 険が低かったんだ。」

「し、 程度のイレギュラーなんて、

私がエヴァを守って 問題ない ?」

むむ？神父を殺した、いえ、吸血鬼（魔女）を助けたのですから、教会の魔法使いが派遣されるはずです。

普通の人なら泣いて逃げる所を、あの人たちはイレギュラー、しかも、多分ですが「そんな程度」って言ってますからやはり相当強いのは間違いありません。

しかもあの口調から、ノワールさんが、

アーカードさんと別で私を守りながら戦うと言ってますから、ノワールさんも強いのでしょう。

「 、私は悲し

…シュッ、シュウに、信じて貰えなか も……。 」

「 いや！？お ルを信じてるぞ？！ただ 」

むむむ！？『 シュウ』とは？！

おそらくアーカードさんの本名ですね！！

これだけでも聞いていた価値があります。

でも、アーカードさん、ノワールさんの尻にしかれている様な・・・

「何時

ユウが居ない、と、不安なの

！！

こっ、んな、

うう。だけど、だけどおお……………

わっ、

く、なっ、てしまっ……………

私には

には、シュウしか、居な　ら、

だから、だから……………。」

「もういい。もう

めんな。

ごめんな、ノワール。こん

な……………。」

あわわわわわ？！

ノワールさんが泣きだしたと思ったら、

アーカードさんがノワールさんを抱き締めました!!

あの二人、雰囲気からすると、恋人なんでしょうか？

……ちょっと、残念です。

アーカードさんは、私のピンチを救ってくれた、白馬の……

いえ、見た目はお姫様みたいですし怖かったです。

私にとっては、白馬の王子様だと思っていましたのですが、

先を越されていた様です。

……でも、これで良いのかも知れません。

私は吸血鬼で、あの人達は強いと言っても人間です。

私より、遙かに早く死んでしまいます。

ちょっと、……かなり、いえ、絶対に諦めきれませんが、

この思いは封印しておきましょう。

永遠を生きるであろう私が、恋なんてしても、ダメなんですから。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

ノワールが落ち着いたので、エヴァを呼び、

これからの修業とかいろいろ方向性を決めようとなった。

「さて二人とも、俺の案は二つ。

エヴァの各地を回りつつエヴァの修業をするか、

それとも一か所に留まってするか。この二つだけど、どっちだ？」

「それしかないだろうな。

しかし、私は一か所に留まるのは反対だな。

幾ら私の結界と云っても、留まるだけ危険になる。」

「わ、私もその方が良いかと…。」

それに、色んな所に行ってみたいし……／＼。」

エヴァがなんか、いきなり敬語使わなくなったけど……

まあ良いか。そっちのが楽し。

「OKOK。んじゃ、諸国漫遊しながら

エヴァに地獄をたいけ「え！？なっ、何それ！！？」うるさい。

一緒に来るなら地獄を見せてやると言っただろうが。

んで、行く場所はどこが良い？」

「お前の故郷はどうだ？今なら武勲は立て易いと思っぞ？」

「日本か？ダメダメ。」

戦国は1467の応仁の乱か、1493の明応の政変から始まると言われてるから、

最低後50年は待たないと。…って、あ。」

「日本？ってどこの事？後、今の言い方、まるで先の事が

」

「ちなみに日本はえっと、ジパング、ジャパン、黄金の国、東とか

そんな感じの呼び方をされてる、小さな島国だ。で。」

ガシィ！！！！

「あとは忘れてくれ。な？（ニツコリ）」

俺の誠意ある説得にガクガクガクガク！と首を縦に振るエヴァ。

良かった。説明すんのはいいけど、信じられんだろうしな。

「と言う訳で日本は却下。遠いしな。

行くなら他んどこ回りながら行くっぜ。

で、俺は欧州を南下、アフ：暗黒大陸を回り、北東に。

中：…そのまま緩やかに東に向かい、日本へ。こんな感じでどうだ？」

「私がかまわんぞ（然し魔法世界に行かなくて良いのか？）」

「（ああ、これは建前。エヴァはアフリカ居る内に完成させる。

後は俺とノワールでトンスラこいて魔法世界に入る。）」

「（むう、騙すみたくて申し訳ないが。まあいいだろう。）」

「私もそれでいいと思うけれど。(二人で何コソコソやってるのよ…?)」

でも、まさか歩きながら修業する訳じゃないですよね?」

「ああ、だから、これを使う。」

そう言いつつ取り出すのは、何の変哲もないダイオラマ球。

しかし、これは、俺の特別製。

「ダイオラマ球……? そんなの使ったら、二人は」

「心配無用です奥さん!!」

このダイオラマ球、私の特別製!!

外部との時間齟齬はなんと1時間に付き96時間!

しかも老化防止も付いているため、歳をとるのは外の時間の半分!!

今ならたったの5万円!! しかも魔法指南書低・中・上級用が付いてくる!!」

「きゅ、96時間!?!うそ?!!!」

だっ、だって、最新式でも6時間が限界だって……」

「そ、そこは、俺は天才だからな。

で、旅の休憩中にこの中で休憩と修業をする。

時間はこちらの時間で5時間ずつ。

その位ならノワールの結界でバッチリ守れるだろ?」

「ああ。5時間だったらこちらの

…創造主だったか?でさえ気付けない物を張っていられるぞ。」

「流石俺のノワールだ。愛してるぞ!!」

「きゅっ、急に何を言うか!!ノノノからかうな!!」

「いいや、俺は真剣^{マク}だぜ……?」

「コホンコホン、そういう事は人の居ない所でしなさい!!」

行き先が決まったなら行きましょう。さあ!!」

「ククク、分かった分かった。行こうぜ、ノワール。」

「あ、ああ。わかった。(もう少しだったのに……)」

「ん？んんん。どうした？ノワール。(ニヤニヤ)」

「い、いや、なんでもないぞー？ノノノ」

全く、何時まで経っても素直じゃない。まあそこが

「はー！やーく！何やってんの？！置いてくよ！？」

「わーかった、分かったって。全くもう。」

こうして、のんびり旅行とエヴァの地獄の修業は始まった。

S i d e o u t

100年ほどたったため。口。

S e d e 愁磨

俺達は今、あの言望峰あたりを旅してる。

・・・うん？なんで暗黒大陸過ぎたのに

なんでまだ旧世界に居るかって？

そりゃあんた、エヴァが居るからだよ。

それこそなんでだ、だって？

・・・確かにエヴァの修業は殆ど終わり、後は自己研鑽の時期だ。

それなのになぜ一緒に居るのかって？

うん、ぶっちゃけさ、親心付いちゃったんだよね！！

痛い痛い！物投げんな！！

実は、50年

と言っても、実際はダイオラマ球内で300年くらい修業してだな。

ああ。ちなみに、俺の本名と不老超長寿、『創造』については軽く教えた。

ある日、全く成長も老けもしない俺達に、流石に疑問抱いたらしく、真剣な顔で聞いて来たから、教えてやったんだ。

教えてやったら「良かった、良かったよおおお……」って

泣き崩れたから、焦った焦った。

その頃にはもう原作通りの性格になってたからなあ。

抱き締めて慰めてる時に「まだチャンスはある!!」って

言ってたけど、なんなんだろうな？

原作通り？のエヴァだが、俺とノワールには素直で、

俺には偶に甘えて来たりもする。

・・・性格が少々違うが、きちんと『悪の魔法使い』にはなった。

・・・そうでないとは修業で死ぬるように教育したからな。

それで、そろそろ良いだろうとある日、

エヴァに言わずに旅に出ようとしたのだが、

300mも離れると俺とノワールは、

原因不明に胸が苦しくなって息が出来なかった。

・・・寝どこまで戻って、エヴァの寝顔を見るとなぜか治った。

数日後、エヴァに話してから行こうとしたのだが

俺は、「お前としばらく」「まで言ったら、

泣きそうな顔になったエヴァに、それ以上何も言えなくなり、

「なんでもない！なんでもないんだ！！」

と言って抱き締める事になった。

ノワールに至っては、

「エ、エヴァ。はっ、話があっ、るんだ、う、うあああああああ
ああん！！！」

と泣き叫び、俺とエヴァにより

「もういい！！もう良いんだ！！お前は頑張った！！」

と慰められる事となった。

エヴァは終始和訳が分からないと言った顔をしてたが。

と、こんな感じで俺達はエヴァと離れられずに、

旅行を満喫する事となっていた。

ちなみに、やはり不老不死関係で各地で戦闘になり、

目撃者を全て消すことは出来なくなっていた。

流石に助けた農民とか商人まで殺す気にはなれなかったのだ。

ノワールに止められたし。

「なあ、兄さま。一つ相談があるんだが。」

と、俺の隣から、エヴァの声がかかる。

エヴァは聞いての通り、いつからか

俺を『兄さま』、ノワールを『姉さま』と呼ぶようになった。

「おう、どうした、エヴァ？」

「そうそう、遠慮しないで言ってみなさい。」

ノワールは、エヴァのいる所では女の子言葉になった。

姉さまって呼ばれてるからかな。

「私は魔法世界に行こうと思うんだが、いいか？」

わ、私達の事がき、き「、きいいい、

うああああああああああああああああ！！

エヴァアア！！行かないでえゝえゝえゝえゝえゝ

俺達は半狂乱になりながらエヴァに縋りつく。

「うおおあ?!?!」

な、何を勘違いしてるか分からんが、

私は、魔法世界に行きたいから行き先を日本では無く、

魔法世界にしても良いか、と聞いているんだ!!」

その瞬間、俺とノワールはザ・ワールド。

………つまりあれか？

「俺達と、エヴァで、魔法世界に、行こうと。」

そう言っているんだな？」

「あ、ああ。勿論、兄さまと姉さまがいいなら、だk

」

「ノワール。俺達は一番の基本を忘れていた様だ。」

「ええ、私も今そう思った所よ。」

「一番の基本を見失っていたよね、シュウ。」

「え、えーと、な、なにが……？」

「そつだよ!!」

傍にいなければ俺達が死んでしまっくらい狂おしいのなら、

一緒に行けばいいだけじゃないか！なあノワール!!

殺されたり死んだりはしないが大丈夫か？

「大丈夫だ、問題無い!!」

そんな結果は見えないしなあ!! H A H A H A H A H A!!」

「ね、姉さま？兄さまは一体誰と話をしてるんだ？」

「ダメダメ、キャラが崩壊していたわ……」。

冷静に、冷静によ、私……」。

ああ、あれは多分宇宙意志と話しているのよ。

アブナイ意味じゃなくてね。」

「ほー、流石兄さまだな!! 集合意志と話が出来るとは!!」

的外れなエヴァの愁磨への称賛と、

愁磨の笑い声がしばらく街道にこだましていた。

その後十数分、愁磨が咽た事をきっかけに冷静になり、

三人は魔法世界に旅立ったとき。

めでたし、めでた

「まだだ！！まだ終わらんよ！！」

「うえ?!に、兄さま?何が終わらないんだ?」

「気にしてはダメよ、エヴァ。」

ちよつと頭の中に春が来てるd 「

「もう良いからそれ!!全く。」

さっさと魔法世界に行くぞ、二人とも。」

「はあ。了解だ、兄さま。」

「Yes、my master。フッフ、楽しみねえ。」

こうして、未来の魔法世界のなまはげ三人は旅立ったのだ
た。

第7話 時間は一気に飛ぶようです(後書き)

愁「もう、色々酷いな。」

作「後半、ちょっとノワールさんの試験運用ですね。」

ノワ「違和感しかないけれど、

無いと言えば無いわね。」

作「ノリで書いてるんだから仕方ない。」

愁「あ、現在の投票はこんな感じですよ。」

つ 現在

ノワール エヴァ

決定

真名 テオドラ 刹那

投票

アリカ 1 1票

ちづねえ 2票

裕奈 1票

ネカネ 2票

柿崎美砂 1票

釘宮円 1票

椎名 桜子 1票

アキラさん 1票

アリカ & アスナ (明日菜にあらず) 1票

木乃香 & せつちゃん 1票

愁「となつております。」

ノワ「姫の人気に嫉妬しちゃうわね。」

作「ちなみにアリカ姫ってどうしたらいいんだろっな？」

愁「どう言う意味だ？」

作「姫の日常デレを見たいのか、戦闘見たいのか。」

愁「とりあえずそれもアンケート ト!!!」

ノワ「アンケートの回数多すぎじゃない？」

作「俺の想像力貧困なのが悪い。」

愁「分かってんじゃねえか!？」

作「まあまあ。今のアンケートは、

『愁磨のハーレムメンバー選出』

『アリカ姫の取扱い』

です。お暇でしたら、お答え頂きたいです。」

愁「前書きと後書き毎回長くねえか？」

作「俺が介入出来るからなんか楽しいんだこれが。」

さて、次回はようやく魔法世界に入ります。」

愁「と言って原作よりかなり前だけだな。」

作「更新は明日を予定しています。」

暇で暇で、他にやる事が死ぬ事くらいの時

宜しいので、呼んでやってください。」

ノワ「流石にこれは長すぎね……。」

作「そ、それでは次回まで!!!」

作& amp;愁& amp;ノワ「「アリーヴェデルチ!!!」」

第8話 魔人は賞金首になるようです(前書き)

おはようじよ、ロリこんにちはorばんわ。

littleねです。

作& amp ;愁「何故だ!!!??」

ノワ「最初からクライマックスね。どうしたの？」

作「純粹に疑問。の『お姉様ver.』はないのか!？」

愁「いつそ自分で作っちゃうか？」

ノワ「二人が発狂する前に情報頂けませんか？」

『そんなのねえよ!!』でも宜しいので。」

作「では定例の。ユウト様、剣の舞姫様、のほほん様、幻想を望む人様。

愁「感想、ありがとうございます!!!」

ノワ「ユウト様、剣の舞姫様、のほほん様、

幻想を望む人様、zero様、mnf様。」

作「アンケ、要望、ありがとうございます!!!」

ノワ「それじゃ、カオスにならない内に始めましょうか。」

作& amp ;愁& amp ;ノワ「それでどうぞ!!!」

第8話 魔人は賞金首になるようです

side 愁磨

魔法世界。それは、想像したモノと殆ど変わりなかった。

まさか転送ゲートでいきなりひと悶着あつて、

賞金首になるとは思わなかったがorz

亜人、精霊、人間、伝説上の生物。

ペガサスもドラゴンも見た。何時か戦いたいな。

エヴァには「アホな事を言つな！！殺されるぞ！！？」って言われたけど。

男の子のロマンだよねー！ドラゴンって。

「兄さま！あっちにアイスがあるぞ！！」

「ダメ、さっきクレープ食ったばかりかだろ？太るぞ。」

「「くう？！」」

「に、兄さまは本当にデリカシーがないな？！」

「そうよ！！女の子はお菓子を食べたいのよ！」

それをただでさえ我慢しているのに、なんて事言つの？！」

「いや、二人とも『女の子』なら　いや！？なんでもない！！ゲ
フンゲフン。」

ふう、仕方ないな。皆で半分ずつだぞ？」

「やったあー！！姉さま！行くぞ！！」

「フフフ、何食べようかしら」

「全く……。精神年齢変わらんなあ……………」

そうやって俺は苦笑する。

・・・周りの人もエヴァとノワールを優しい目で見ている。

さて、俺達が居るのは王都オスティア。

人が行きかうメインストリートは、呼び込みの声や、

笑い合う声、どこからか喧嘩してる声や、

それを煽る声までするが、『平和な声』だ。

右を見ると凄まじく大きな木に、店が点在している。

左を見ると下が見えて、まさに絶景。

一見アマゾンの様だが、こちらにも大きな木が在り、

飛び立つ鳥の大きさが異常だ。

あ、河から出てきた30mのワニモドキに食われた。

イツァ・ファンタジ。

勿体無いな。

こんなに綺麗なのに、後300年もしたら此処は落ちちやうのか。

此処を落とさない様にする事は俺の實力上簡単だ。

しかしそうすると、アリカ姫は投獄されない、かも、しれない。

そうするとナギが告白出来なくなる、かも、知れない。

するとネギは生まれてこないかも知れないし、

生まれたとしても歳が変わるかも知れない。

俺は原作の大筋を変える事は出来ないが、

細かく下地を重ねていけば可能だろう。

しかし、こいつらにそこまでしてやる義理は無い。

だから、やらない。やれない。

俺の大事なものはノワールとエヴァだけだ。

それ以外を守るのは、二人が確実に、何があっても大丈夫で、

俺がいつでも駆け付けられる状況で無いと、知った事ではない。

それを怠って知らない他人が助かって、

二人に一ミクロンでも傷が付いたら意味がない。

大切な人を守れなくて後悔するより、

その他大勢が助からなくて後悔した方が俺は良い。

そもそも後悔するかは置いといて。

二人と二兆人どちらを選ぶ、と言われれば勿論二人を選ぶし、

二人の内どちらを選ぶ、と言われれば二人を選ぶ。

・・・以前ならノワール一択だったが。

人でなしだろうが知った事ではない。

俺の守りたいモノは二人で、お前の守りたいモノが他のモノ。

それだけだ。否定はしない。否定するのは許さない。

だが、そんな問答より今は。

ガシィ！！

「俺の女に何触ろうとしてるんだ、ニイチャン。」

俺はノワールに手をかけようとしたユミの手を掴んでやる。

リミッターはもう外れているから、俺の身体能力のみでの最高移動速度は、

17000 m/s。要するに音速の50倍。

比較するなら、野菜の双壮時の速さが150 km/s。

これや『千の雷』は落雷と同じ原理で行使される為、

正確にはマツハ440、149.6 km/sとなる。

・・・計算合ってるか自信無いが、そんな感じだ。

「気付くのが遅いわ、シュウ。」

私に意識を向けたらもう捕まえるくらいで無いと。」

「そんなこと言ったら、ここら一体死体だらけになるぞ?」

「そ、それは私が勘弁して欲しいのだが……。」

と俺達が談笑していると、

「てめえ！！何、間に入って……って、

なんだネエチャン。メチャメチャ美人じゃねえか！！」

「うっわ、本当だ！！銀髪なんてめつずらしいー！」

「…勿体無い。あと十年幼かったら好みだったモノを。…本当に惜しい。」

そう。虎獣人どもが言う通り、美人。

ロリ、いや、シヨタのままだとノワールに似合わないと思った俺は、

『体を成長した未来の姿へ変える薬（永久版）』を創り、

体の年齢を17、8歳まで引き上げた。

少しは男らしくなるかと思っただがそんな事は無かったでござる、だ。

手足は長く艶やかに、髪はサラサラポニーテール。

顔は女性らしさのみが上がった。

体はペッツペッツタン・キュッ・プリンとした。

胸が出てたまるか………!!

いや待て、これはイリヤ主体の体、と言う事は……。

残念ですが、手遅れです………!!!!

…あ、俺男だから関係無いじゃないか。

い、意識をしっかりとって俺!!俺は男、男なんだ!!!!!!

コホン。そして、男物の似合わない俺は、黒いYシャツに白ネクタイ、

黒の裾広のスラックスと言う、せめて、と中性的な格好。

中性的……だよな？

ちなみにノワールは白いワンピースに黒いストールで、

エヴァは茶々ゼロ片手に白ゴスロリ。

皆モノクロなのは俺の好みによる所が大きい。

「ん？どうしたネエチャン。俺の手ずっと掴んで。」

ああ、そうか！その黒いネエチャンに取られまいってかあ？」

「ギャハハハハ！そんなわけねえだろ！？」

てめえの顔が怖くて固まっちまってんだよ！！」

「…勿体無い。あと十年幼かったら食べごろだったモノを。」

…本当に惜しい。惜しいなあ……。」

喜べ三番目。

お前は色々ダメだが、酒を飲めそうだから容赦してやる。

「おいおい、どうしフベレバゴオオ？！バアア！！ヘデブツ！？」

魔王拳×2（ジャブ）、灼光拳で掴みつつ（ストレート）、

金的に三華猛襲脚、獅吼滅龍閃。

飛んで行く前に踵落しで犬神家にする。

「あ？変な声だグギャ？！ブルア！ブルア！ゲ！ゲ！ギョ！ガ！！
？」

孤月閃、断空剣、断空剣で上空に打ち上げ、

鷹嘴襲落×四で地面にめり込ませる。

俺にネエチャンって言った事を後悔しろ、一匹……！！

「ああ、本当に惜しゴフツ！！」

鳩尾に迫撃掌一発で沈めてやる。怨むなよ……！！

「アハハハハ！相変わらず面白い連撃ねシュウ。」

「今、獅子の顔出たんだが！？スルーで良いのか、姉さま？！」

「そんなの今更だろう、エヴァ。」

休業中に、は、魔法しか使ってなかったな、そついや。」

「そつだよ?!見たことの無い技ばかり使いおつて!なんだあれは!?!」

「まあまあ良いじゃねえかそんな事は。適当に行こうぜ、適当に。ほら、さつさとアイス食おうぜ。」

ああ、すみません、騒がせて。お代と、迷惑料です。」

そつ言つて金貨を店員の女の人に渡す。

金を『創造』で創るのは簡単だ。

金には『力』がないから、一瞬で作れるのだ。

嵩張るが、一応数枚、一番価値のある金貨を持っている。

だんだん『創造』が日常用になつてゐる気がするなあ。

食材も創造で出してるし。

だが、お菓子は繊細なモノなのでぶつちやけ無理。

だから、こうして買って食べている。

「さ、行くこうぜ。警備隊来てもm」そこまでです！動かないでください！！」

……仕事熱心すぎるだろう。」

喋っている数分の内に警備隊が来てしまった。

「た、隊長！！こいつ、『白き死神』です！！

恐らく隣のは『黒翼氷帝』と『闇の福音』です！！」

マテ、なぜ障害が効いていない？！

「『白き死神』って、あの『殲滅白雷の白雪姫』の事？！

クツ、最悪ね！！お、大人しくしなさい『白雷姫』！！

在り得ないくらい綺麗だからって容赦しないわよ！！

…髪の手入れになに使ってるんですか？！」

今日のニュースです。

昼頃、女性二人、子供一人に言い寄る男三人に警備隊が注意に向かいました。

白髪の女性が男を一瞬で倒す、と言う喧嘩がありました。

警備隊は女性の方を危険視、連行しようとしたが、

女性は『白き死神』『殲滅白雷の白雪姫』などの異名を持つ、

殺人鬼『アーカード』である事が判明。

さらに、同行する『黒翼氷帝』と『闇の福音』を発見。

これを逮捕しようとしたが、『白雷姫』が抵抗、

周囲の民間人ごと警備隊を撃破、以前逃走中です。

死者は出ていませんが、怪我人が1000人は出ている模様です。

こちらが現場の状況です。

今なお怪我人の救助が・・・ツブ！！ちょ、ちよっとこれ何よ？！

みんな GANGROAFRO になってるじゃ　　ツブ、アハハハハハハハ
！！プツン

ただ今電波の調整中です。申し訳ございませんが、しばらく
お待ちください

「アハハハハハハハハ！！！！見て見て見てシュウ！！！！

どこの放送局もキャスターが笑って、ニュースが流れてないわ!!」

「ハハハハハ!!これは見事だな兄さま!!」

ハハハハハハハハ!あー、腹が痛い!!」

「俺は全然愉快じゃねえっつーの。」

こんな髪だから余計なんだよなあ。

はあ、いっその事髪短くしようk」

「絶対ダメ!!」

「うおわ!?!」

テレビを見て笑っていた二人がグルン!!とこつちを見て叫んだ。

ちなみに普通のテレビじゃなく魔法による通信みたいなもので、

丸い筐体が信号（念波?）をキャッチ、幻術の応用で映像の様に見

せている。

「なんでだよ？別に髪型なんて俺の好きで良いだろ？」

「ダメだったらダメ！！そんなに綺麗なのに勿体無いじゃない！！」

「そうだぞ兄さま！！似合っているんだから良いじゃないか！！」

「だから嫌なんだよ！！？」

一瞬女に見られるのは別に構わないんだが、その後が問題なんだよ。

せめてショートボブとかにだな、」

しかし、ノワールとエヴァは全く俺の言う事を聞かない。

「ダメ！！私はシュウの長い髪が好きなんだから！良い匂いするし！！」

そんなに切るって言うんだったら、私も髪切るんだからね！？」

「何？！だつ、ダメだダメだ！！そんなの許さないぞ！？」

「ああ、それは妙案だな、姉さま。」

兄さまが髪を切ったら私も髪を切つてやろう。」

「エヴァまで?! わ、分かった!! 髪切らないから!! な!?! 早まるなよ!?!」

俺はショートもセミロングも好きだが、

ロングこそ至上!! 黒髪なら尚良し!!

超ロングなら更に良し! よって二人とも愛してる!!

話が逸れたな。逸れてはいないか。まあいい。

「あ、ホラ。テレビ映ったぞ。」

先ほどは失礼致しました。

この事態に政府は、指名手配犯アーカードの懸賞金を大幅に上乘せする事を発表。

同時に、ノワール、エヴァンジェリン両名の懸賞金も

「「「
「「「
「「「

『白き死神』 『殲滅白雷の白雪姫』

『返り血染紅の雪の精』 『嗤う不死女王』
ノイライフクイーン

通称『皆殺しアーカード』

本名不明の懸賞金を100万ドラクマ（以下Dp）から1300万Dpへ。

『黒翼氷帝』 『詠う黒獅』 『黒燐迅豹』 『片翼の墮天使』

通称『微笑みの漆黒菩薩』

本名ノワール・プテリユクス・エデル・織原の懸賞金を80万Dpから700万Dpへ。

『童姿の闇の魔王』 『闇の福音』 『禍音の使途』 『不死の魔法使い』
通称『災厄と共に来る真祖』

本名エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルの
懸賞金を、150万Dpから600万Dpへ引き上げました。

政府の発表によりますと、エヴァンジェリンよりも

アーカード、ノワール両名の方が危険度大としております。

そして、アーカード討伐にはすでに魔法部隊が二個大隊規模で形成
されており、

明後日には討伐に向かうと思われます。

元軍人であるマツカーさんはこれについてどう考えますか？

そうですね。

賞金首一人に二個大隊が投入されるケースは例を見ません。

大隊と言っても、まあ一概に人数は言えませんが、

最低でも2000〜4000人は投入されるでしょうな。

中には神官クラスが300人からいるでしょうな。

また、この大人数は人海戦術での搜索と共に、

アーカードと共に行動しているノワール、エヴァンジェリン。

この両名への警戒もあるのでしょうかね。

俺は何時から裏切りの騎士になった。ってゆーか。

「ふーん、4000人だっせ。雑魚がまあワラワラと来るんだねえ。」

「一撃で全部潰してやろうかWWW」

「WWWじゃないわ!!!!どうするんだ?!!」

神官クラスが最低でも300は来るんだぞ?!」

「エヴァ?その神官と言うのはどのくらい強いのかしら?」

「知らないのか?!常識なんだがな……」。

魔法使いの最上『大魔導士』。

その候補となる者たちが『神官』と呼ばれる者だ。

奴らは4属性以上の魔法を使えるエリート中のエリートで、

光だけでなく、聖属性の魔法を使う者も居る。

私達、『闇の生き物』にとってはまさに天敵なのだ。」

239

「…聖属性とはつまり、神様の力って奴か?

そいつ等相手にエヴァは勝てるか?」

「え、ええと、それに近いモノ、と言われている。

使えるのが十人ほどしか居ないせいで解析が進んでいないそうだ。

そして、…多分、私でも上の奴は、一人相手でも勝てるか分からん。

「一番厄介なのが聖魔法だな。浄化効果があるらしい。」

「……『顕れる全知ノ樹』。」

俺が唱えると、小さな樹が『闇』からせり出てくる。

「や、闇の次元魔法だ！？こんなモノどうやって?!」

「エヴァ、少し黙ってる。」

久しぶりだな、アーク。良く枯れなかったな。」

「フン、一体何の用だ？またふざけた事だったら」

「『神官とナギ・スプリングフィールドとエヴァ、

それぞれの魔法戦による勝率・相性』を教える。」

「…どうやら真面目な要件の様だな。少し待て。」

この樹アークは俺の創造物の一つだ。

樹ではあるが、一種の機械の為、生命創造では無い。

そしてこいつには『答えを出す者』の力と、

限定的なアカシックレコードへの接続能力を持たせた。

故に、俺では主観・才能により辿り着けない答えにも、こいつなら届く。

「分かったぞ。

魔法戦による相性、現在の感情値も計算に入れた勝率だ」
流石だ。俺の注文の上に行くか。

「神官1人 vs 500人 vs ナギ ナギの勝利100%

ナギ vs エヴァ ナギの勝利23% エヴァの勝利12%

エヴァ vs 初級神官 100人 エヴァの勝率 97% 神官の相打ち
成功率 12%

vs 中級神官 35人 エヴァの勝率 68% 神官の勝率 1
6% 相打ち成功率 35%

vs 上級神官 1人 エヴァの勝率 75% 神官の勝率 4
2%

上級神官については、一人増えるごとにエヴァの勝率が（-25%）
×0.89%だ。

総神官数 初級 412人 中級 237人 上級 64人。

これが全て大隊に配備。三部隊に分けられている。」

「なっ?!」

とエヴァが絶句する。そうだろう。

神官が全員配備されているなど、俺でも考えてなかった。

しかも総勢713人がたった三部隊、一部隊約237人の神官が居
るのだ。

「二個大隊は常時共に行動。」

『大神官三名』による広域搜索魔法による搜索を敢行する。」

「だっ、大神官が全員出てくるだど!？」

兄さま、これは無理だ、逃げよう!！」

「お前らしくもない。いつもの尊大さはどうした? ってゆーか大神官って

……ああ、ああ、分かった分かった。

神官の頂点で、もはや大魔導士レベルの強さだっただろ?」

「わ、分かったなら早く逃げよう! !今なら旧世界に帰れる! !」

「アーク。」

『俺達全員がこのまま無事に旧世界に入れる確率と、負傷確率』は?」

「すぐ分かる。……。」

愁磨の負傷確率0%、ノワールの負傷確率33%、

エヴァの負傷確率100%。よって無傷での脱出確率0%

お前の『闇』に二人を入れての脱出は100%だが、戦闘無しでの脱出時の

旧世界への侵攻確率は95%だ」

「なら脱出は却下だな。って言うか、今ので答え出てるじゃないか。

」

「シュ、シュウ?!まさか貴方!!」

「だ、ダメだ兄さま!!危険すぎる!!」

「ククク、アーク。

『二人が『闇』に入った状態での俺vs大隊共の戦闘結果』は?」

.....

「 害敵殲滅率100% 敵弾被弾確率0.3% 負傷率0.001%」

被弾時のダメージはHP100の場合、0.1ポイント。

よって愁磨単体での魔力or気強化5%時の戦闘結果、パーフェクト完勝。」

「ハハハハハ！聞いたか、ノワール、エヴァ。」

PERFECT GAMEだつてよ。議論の必要がないだろ！？」

「し、しかし兄さま！！やはり危険すぎる！

相手はあの神官と大神官だぞ？！幾ら兄さまでも無理だ！！」

「そ、そうよ！！イレギュラーがあつたらどうするの？！」

「ククク、アーク。『イレギュラーがあつた場合の戦闘結果』だつてよ。」

「分かつているくせに良く言う。」

今のは英雄が加入したイレギュラーを含めた戦闘結果だ。」

「と、言う訳だ。明後日起きたら旧世界にゆるりと帰還。」

これで決定だ。異論は？」

「あるに決まっているでしょう?!」

危険すぎるわ!! もっと別の「ノワール」っ?!」

「俺は、他の案があるなら、話せと言っているんだ。

悪いがこれはお前達の身を守る最善で最高手段だ。

無理矢理でも聞いて貰うぞ。」

「で、でも! 私はシユウが心配で……! それで……。」

「ノワール。お前を悲しませないと約束した。

しかしそれはお前達の安全とは天秤にかけられない。

お前らが傷を負おうものなら、俺は仇成す可能性のある万物を破壊し、俺は死ぬ。

俺はエヴァもノワールも簡単に殺せる。そんな俺を、俺は残しておかない。

確率をゼロにする為に、俺の死は必要だからな。」

「「シユウ?!(兄さま?!)」」

「言っただろうが、俺が一番大切なのはお前達だ。」

俺自身はその次でしかないんだよ。自分勝手に悪いな。

さて、どうする?別のあてのない方法か、俺を信じてくれるか、だ。」

まあ、ここまで言ったらどう答えるかなんて、

一緒に居るから分かってるんだよなあ。」

最低?知った事か。何度でも言っつてやろう。

「ずるいわ。そこまで言われたら、

シユウを信じるって言うしか無いじゃない。」

「ああ、全くだ。しかし忘れるなよ。」

「「シユウ(兄さま)が死んだら私達も死ぬからね(な)」」

俺は、ノワールとエヴァ以外、知った事じゃ無い。

だから、死ぬ訳にはいかない。

二人の前に片膝をつき、手を握り、首を垂れる。

「承った、姫様方。」

この愁磨・プテリユクス・ゼクスパール・織原。

全身全霊を持ってお守り致します。」

「フッフ、私と愁磨は愁磨がマスターなのに、立場が逆ね。」

「ククククク、私は心地よいぞ。兄さまが跪くなど見た事が無いからな。」

「いつか修業で負かして跪かせてやるぞ!!」

全く、情緒もへったくれもない姫様だな。

「お前らな……。」

もつと感動的に行けよな！！演技でもいいからさ？！」

「ああ、そつだ。戦前に、勝利の女神からプレゼントしないとな。」

「いや、それつて普通戦いの前夜に送るモノじゃ ム！？」

「なあー！！？？！？」

「……ん、ふ………つちゆ。フフフ、頑張つてね、マイマスター？」

「ハハ、これじゃ負けらんねえな。」

もつとも、ノワールは女神じゃなくて魔王様だけどな。」

ちよつと死亡フラグな気もするが、そんなもんへし折つてやる。

「な、なななななな？！／／／何をやってるんだ！！姉さま！？
／／／」

「何つて、キスだけど？」

「そつ、そつ言う意味では無い！！／／／だから、その、だなあ？

「!!」

「もう、うるさいわねえ。」

「良いわよ？エヴァだったら、シユウにキスしても。」

「にゃあ?!?!」

「わ、私は別に兄さまと…兄さまと…キス……な、なんてしたく

無いん、だからな……!本当だぞ?!」

「はいダウト。ウソついちゃダメよ?ほら、大人しくしなさい。」

「そう言うとノワールはエヴァを羽交い締めにする。」

「なあ?!は、ははははは離せ、姉さま!!!!!!」

「シユウ。今のうちよ。やっちゃってあげて。」

「いや、やっちゃってと言われても。」

「いやいや、やめろってノワール、嫌がってんじゃないか。」

「はあ。疲れたからもう寝るぞ。お前らも早く寝ろよ。」

と俺は自分の部屋に戻る。

「むうう、（ほら、どつするのEヴァマ。」

私が良いって言ってるのよ。ホントにいいの?」

「（ね、姉さま……。くううう!!!／／／）兄さまっ!!!」

「なんだよ、まだ　ムグツ?!」

「ん、…ん、あふ／／……んん、兄さまあ……／／／」

「え、Eヴァ!?／／ちよ、んん、……ん、ふ……あ、…ふ、ん
ん。」

「あらあらEヴァったら大胆ねえええ。若いわあ／／」

三十秒もキスしていただろうか。

苦しくなってきた所で、Eヴァが口を離した。

息も絶え絶えで顔は茹でダコみたいに真っ赤だ。

「ふ、フン！／＼今はもう無い国だが、

正真正銘、王女からのキスだ！ありがたく思え！！／＼／」

態度も言葉も尊大だが、顔真つ赤で涙ぐんでる上に

背が低いからせいで上目遣いになって言われても可愛いだけなんですけど。

可愛いから抱き締めよう。ノワールも一緒に。

「ふにゃ？！／＼兄さま、離し……………」

「…………お前らは、俺が守ってやるから、安心しろ。

必ず、守るから。何があるつと、絶対に。」

「に、兄さま……………」

「フッフ、見た目は女の子だけど、やっぱり男の子ね。だから好きよ。」

「わ、私も、す、す、好き…だぞ、兄さま。／＼／」

「ありがとう。俺も、二人の事大好きだ。」

「…兄さまの女誑し。どっちか決めないのか？」

「うるせえよ。　　ふああああ。もう眠いからこのまま寝るか。」

「ええ、良いわね。勿論シユウが真ん中ね。」

「いや、私が真ん中で川の字だろう。」

「くっ、シチュエーション的には美味しいけど、

エヴァが得してるからダメよ!!」

「おい、もう寝るから二人とも来いよ。一人で寝るぞ。」

「「今行きます!!!」」

やれやれ。こんなんでも明後日大丈夫かなあ……。

ま、俺が頑張るだけだ。この二人を守るために。

「おやすみ。ノワール、エヴァ。」

「おやすみなさい。エヴァ、シュウ。」

「おやすみ。兄さま、姉さま。」

魔法世界第一次大戦争まで、あと一日。

今は、夢を見ていよう。

第8話 魔人は賞金首になるようです（後書き）

作「一向に進まないな！！WWW」

エ「なぜ私がこんな事になっているのだ？！／／／」

作「だってエヴァもハーレム要員だし？」

愁「妹分とやっちまった……orz」

ノワ「まあ、心情的な問題しかないけれどね？」

作「ノワールさん意外と寛容だね？」

ノワ「ぱつと出の子に、

送受共に愛情で負けるとは思ってないからよ。」

作「愛されてんなあ……。俺も奥さん欲しい。

もしくは家政夫で雇ってくれないかなあ。」

愁「お前高校じゃ『主夫』だったもんな、渾名。」

作「渾名って言うか称号な。」

ノワ「特技 家事、速読。

趣味 料理、二次元全般じゃあ、ねえ？」

作「今思つとすげえプロフィールだな。

ちなみに能力は邪気眼だぜ？」

エ「それは能力なのか？」

作「細かい事言つなつて。ではそろそろアンケートを。」

つハーレム要員

現在

ノワール エヴァ

決定

真名 テオドラ 刹那

投票

アリカ 11票

ネカネ 3票

ちづねえ 3票

アキラさん 3票

木乃香嬢 2票

柿崎 美砂 2票

釘宮 円 3票

椎名 桜子 3票

しずな先生 2票

ゆいな 2票

アリカ&アスナ(明日菜にあらず) 2票

木乃香&せつちゃん 2票

さよつち 1票

刀子様 1票

アスナ 1票

ナギ(女) 1票

アリカ 戦闘する 1票

日常デレ 2票

「愁「アリカは、両方という意見とデレという意見でした。」

作「もともと『デレのみ』か、『+戦闘』の意味合いが

強かったので、こうしてみました。」

エ「決定メンバーだけでギリギリのくせに大丈夫なのか？」

作「ぶっちゃけ本編のみだと活かし切る自信ないから、

ちよこちよこ外伝で補完してこうかと。」

愁「そんなんでいいのか？」

作「もともとは現決定メンバーだけの予定だったしな。」

愁「なぜこうなったorz」

作「& a m p ; ノワ & a m p ; エ」「ノリだろう（ね）（だな）。」

「」

愁「なったモノは仕方ない。言うておくが、俺の大切なモノは皆だ。」

作「でも、あくまで作者的優先はノワール。」

愁「もちろん、皆大事にするが、

そこは出会いと、過ごした時間が違いすぎるからな。

悪いが、許容してほしい。」

第9話 魔人は殲滅戦で友を見つけるようです(前書き)

お早うorこんにちは、もしくはこんばんわ!!
altitudeです!!!

愁「PV113,000!!!」

ノワ「ユニーク12000!!!」

作「突ウああああああああああああ!!!

ヒヤッハアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

愁「少し落ち着けて。」

ノワ「無理でしょうね。」

PV10000越えの時点で既に、怒られても笑ってたくらいだし。」

作「ヒヤッフウウウウウウウウウウウウウウ!!!」

愁「いやつかましい!!!」『闇』に入ってる!!!」

作「ビヤアアアアアアアア i」

ノワ「脅威は去ったわね。それでは恒例の行きましょう。」

愁「まずは、zero様、ゆや様、剣の舞姫様!!!感想ありがとう
ございます!!!」

作「続きまして!ゆや様、シエン様、紅蓮様!アンケートありがとうございます
うございます!!!」

愁「ゲ?!通信可能のままだった!!!『発言無効』!!!」

ノワ「今回もまた酷いわねえ。。。」

愁「ネギま界なんて倍々ゲームだから仕方ないんだけどな。」

ノワ「とりあえず。あまり喋ってバラシても仕方ないので。」

第9話 魔人は殲滅戦で友を見つけるようです

side 愁磨

俺の撃破用二個大隊が来る前日、

俺達三人はバツチリ認識阻害かけて

オステイアの町で、平和に過ごしていた。

俺達は朝起きてからまた話し合った。

大隊の魔法使い、総勢5576名。(アークから聞いた)

これを本当に全て殺さなければいけないのか、と。

確かに皆殺しにしなければ、

旧世界での生活に大きな支障が出るだろう。

だからと言って皆殺しにしては将来的に不利。

最悪魔法世界には犠牲無しでは二度と入れない様になるかも知れない。

ならば全員を戦闘不能にしまえばいいのではないかと。

しかしこれはとてつもなく難しい。

すでに、悪い方向での

『正義の魔法使い』

が風潮になってしまっている。

つまり、強い奴ほど妄信的で、諦めが悪くなっている。

総体的に、だが。

弱い、ただの魔法使いは、魔法の発動媒体を壊してやればいい。

神官級の奴らは媒体を幾つも持っていて、

上の奴ほど高価な物故、壊しにくい。

大神官達はオリハルコンレベルの硬度を持つ装備を持っているらしい。

しかし、これは俺の『創造』で創った剣で問題無い。

俺の剣達は伝説の物。

ならば叩き切ってやればいい。

一番の問題は演出。

俺達に『手を出したくない』と思わせないといけない。

こつ言つのは恐怖が一番なのだが。

そうなると殺す必要が出てくるが、それではダメだ。

やるなら徹底的に。

生かすなら0。殺すなら100。

生き死にの問題に半端はダメだ。

生かすなら、半殺しは良いが大怪我をさせてはいけない、
分かり難いがそんな感じだ。

アークで検索した結果、

一番楽な方法は、神官達と大神官三人の
攻撃を受け切り、絶望させる事。

しかしこれでは、あとで対策を立てた気になって、
再度攻撃される可能性が高いのだが。

しかし、今はこれが最適だと出た。

あとは俺が神官以上と戦っている時に周りに被害が
出なければOKと審議の結果、結論が出た。

そして、念の為に二人は今日の夜から『闇』に入っていて貰い、
その後俺はすぐに軍と戦いに行く。

実は、こっそりアークに聞いた所、

今日の昼から既に軍が搜索を開始しているのだと言う。

5000人以上が動いているのに、

市民に気付かせない情報規制諸々には称賛すら覚える。

そして俺がこんなに色々考えてる時に、

お姫様二人は何をしているかと言うと

「む？なんだ兄さま、そのパフェ食わんのだったらくれ。」

「…ああ、食べ食べ。お前らの見てただけで腹いっぱいだ。」

「エヴァー！！シユウの食べかけなんてずるいわよー！」

「フン！早い者勝ちだー！」

二人はとある店でパフェだのクレープだのを食いまくっている。

周りからは呆れと称賛と、

戦場に向かう同志への眼差しが送られている。

……なぜだ？！

昨日はカロリーがどうか言っていたのに今日はドカ食いだと！？

女の気持ち分からない！！！

『答えを出す者』でも分からないとはどういう事だ！？

新手のスタンド攻撃か？！誰か助けてくれ！！

「ふ、二人とも。

もうそこらへんにしておかないか？

見ているだけで胃が……。」

「む、なんだ、だらしないな兄さまは。

「全く、仕方ないな。」

「ま、丁度別腹八分目くらいだから、

これくらいで良いわ。もう宿に戻りましょ。」

「別腹八分目ってなんだ?!

ってか、三時から食ってて、もう日が傾いてるんだが!?!」

溜息を付きつつ、エヴァの頬に付いてるクリームを取って口に運ぶ。

「に、ににに兄さま?!?!?!?!?!?!?!」

あつま!!こんな甘いモノをよく.....。

やっぱりおやつは、和菓子に緑茶だよな。

そして会計に行ったら、

デザートだけで五桁後半を叩きだした美女二人だった。

店員の男性は俺にそつとのおど飴と胃薬をくれた。

泣きそうになった。

宿にゆっくりと歩いて帰ると、9時になっていた。

…だんだんと血が沸き立つのが分かる。

俺はノワールの言う『魔』を受け入れてから、

戦闘行為をする時に若干の興奮状態になるようになった。

戦闘が楽しみ、と言えば妥当だろう。

「さ、二人とも。もう『闇』の中に入っててくれ。」

戦闘狂になった訳ではないが、戦闘は楽しい、そう言う事だ。

アクションゲームをするのと同じ感覚だな。

そして俺が今からするのは、

能力カンストした武将でイージーモードをやるのと同義の戦闘。

これがいかに難しいか。

雑兵など、ただの一振りでも十人から屠れるのだ。

それをギャグ補正無しで大怪我すらさせない。

難しいからこそ、遣り甲斐がある。

「ああ、分かった。……兄さま……。」

「心配しなくても良いってば。

中から見れるようにするから、明日は俺の雄姿を存分に拝め。

さ、とつとと寝る。おやすみ、エヴァ。」

「…おやすみ、兄さま。」

俺の頬にキスしてからエヴァは『闇』に入ってしまった。

「さ、ノワールもとっと入れ。」

お前らが入らないと俺が寝れないんだ。」

と俺はノワールに振り替える。

「……はあ。言わないつもりなら良いわ。」

今更言ったところでシユウが意見を変える訳無いものね。」

……どうやらノワールさんは気付いていらっしやっただようだ。

「……怪我したら承知しないわよ。絶対に、絶対に、だからね……。」

ノワールが、俺に抱きついて来る。

「エヴァは信じてくれたのに、お前は信じてくれないのか？」

「そんな訳無いじゃない。私は、誰よりもシユウを信じてるわ……。」

静かにキスすると、ノワールも『闇』に入っていく。

「頑張つてね。」

「任せろ。」

短いやり取りを終えると、目を閉じる。

そして目を開け、詩を紡ぎながら移動を開始する。

「
我が心中に眠る暗き空に響け

そこは深い森

そこに響くは墮天使の歌声

天上の月は忌み子の金

包む黒は虐げられた乙女

我の心にいるのは負の者のみ

故に見よその美しさを

如かして見よその荘厳さ

我に在るのは

是への愛のみ

俺の『これ』の発動に必要なのは名前のみ。

だが、今は詠いたい気分だ。ノリで付けた、彼女達を綴った詩を紡ぐ。

壊された美しい黒は我を包む

壊された金は我が包む

ここまで詠つと、軍が見えてきた。何か叫んでいるが関係ない。俺

は歌の最後を詠う。

さあ刻もう、恐怖劇を

しかし怒りの日ではなく

共に謳おう、出立を

俺は甲を前に向け、ゆっくりと手を上げる。

さあ、歌い踊ろう、人間！！

！！

魔人と魔王と吸血鬼と共に！！！！

！！！！

『広がれ、うんめいのうつくしきせかい』

『

俺が手を横に払うと同時に、

足元から徐々に世界が変化していく。

いや、塗り替えられる。

この世界は、ノワールと出会ったあの氷の世界を模している。

氷色の草が一面に生え、所々から闇色の結晶が生えてくる。

そして俺の後ろには、あの闇色の十字型の棺。

違う所はただ一つ、天上に浮かぶ金色の満月。

俺の全てが詰まった、俺の中の『二人』。

ただそれを表した世界。

「な、何が起こった?!」「軍曹!報告しろお!!!」

「寒い!寒いいいい!!!」「落ち着け!!!隊列を崩すなあ!!!」

「空間魔法?!馬鹿な!こんな広大な!!?!」「……面白い。」

「総員構えろお!!!敵は目の前に来ている!」「解凍呪文!!!急げ

!!!!!」

軍の連中は恐慌状態になっているようだが、

落ち着いているのが500人はいる。

恐らくは中・上級神官と大神官。

愚か者だけだと思っていたら、骨のある奴が居るじゃないか。

だが、この世界は闘争の為の世界では無い。

故に、更に塗り替える。

「さあ、『闘争の始まりだ』」

俺が更に紡ぐと、草原は黒く、結晶は紅く染まる。

棺の黒と満月の金は、変わらない。

『行けえ！兄さま！！』 『やっちゃんなさい、シュウー！！』

『闇』から二人の声が聞こえる。

来る前に、通信可能にしたのだ。

「ああ、行って来る。ま、適当にな。」

俺は軍に向かって飛び出すと同時に、

白い神官服が100人程前に出てきて魔法を放って来る。

「魔法の射手・連弾・雷の153矢!!!」

「魔法の射手・戒めの風矢!!!」

「魔法の射手・連弾・光の201矢!!!」

約30:20:50の割合で魔法の射手が放たれる。

雷・風で動けない所を、光で攻撃。と言う作戦だろう。

悪くない、むしろ即興にしては完璧な作戦だ。

だが、俺にとっては、『悪くない』だけだ!!

「さあ今回は御披露目!!」

俺の創りしこの盾、撃ち抜けるなら打ち抜いて見やがれ!!!

行くぞ!!!
『ロ・ファイアス熾天覆う七つの円環』!!!」

俺が止まり、手を前に出すと、

1・5 m程もある七枚の花弁が、

円を描くように広がり、魔法の射手を防ぐ。

これはギリシャの英雄アイアスの盾。

『投擲武器に対して無敵』という概念を持った概念武装。

実際は無敵じゃ無いけどね!!!

詳しくは『Fate stay/night』をやるう!!!

俺の目の前で次々と魔法の射手が、

アイアスに当たっては消えていく。

「ヒイイイイ?!?!?!?!?!」に、逃げるおおおおお!?!?!?!?!」

と神官どもが騒いでいる。

おいおい、あれで上級神官とか言ったら俺帰っちゃまうぜ?

「お前ら下がっている!!我々が足止めしている間に、

全魔力で限定広域殲滅呪文を準備しろ!!」

と言って出てきたのは、

神官服に獅子の紋章を付けた、64人の上級神官。

「行くぞ!!散開!!『闘争の輪舞』!?!?!」

ビュン!!と俺を囲むように走りながら詠唱する神官達。

手に持っているのは杖だけではなく大剣や双剣、ハンマーや大鎌。
柱の様な棍を持つてる奴までいる。

おっと、監察しているうちに詠唱が完了してしまったようだ。

「「「「「聖なる光で敵を焼きつくせ!!!」

『神光の決壊』!!!』「「「「「

全方向から光が押し寄せてくる。

しかも、ただの光呪文ではないようだ。

ああ、確かにそうだ。

微かだが、確かに『奴ら』の力を感じる。

ってかエヴァ、聖属性魔法使える奴めっちゃいるんだけど？

『兄さまあああああ!!!』

『シユウ?!!ダメええええええええ!!!』

『闇』から二人の叫びが聞こえて来る。

(成程、ノワールでも危険な魔法、と言う事か。)

しかし俺は慌てず、二人に話しかける。

「(『叫ばなくても聞こえるってば。』

まあ見てろって。俺の最高峰を見せてやる。』(「

そう言つと俺の周りに炎の様な光が逆巻く。

・・・これを使うには少々時間が足りないな。仕方ない。

「『フィジカル・フル・バースト』!!!」

そう叫ぶと世界が止まったかのようにゆっくりになる。

これは『アクセル・ワールド』の能力の一つ。

意識と、肉体全ての時間を100倍に加速するコマンド。

人間が使ったら、1mmでも動けば体が吹き飛ぶような痛みが走る。

が、生憎俺は魔人。 と言ってもすごい痛い!!

「さあ、魔人が救世主って言う矛盾を見せてやる。

来い!! 『メシアの鎧』!!!!」

逆巻いていた炎が形を成していき、

白い騎士甲冑の様な服に変わって行く。

首の付け根まである襟はきっちり締まり、

ジャケットの様な上着は肩が膨らんでいて、

二の腕当たりからスリットが入っている。

中のタートルネックは黒く、白い十字架が刻まれている。

腰には二本のベルトがあり、

スカートの様な腰布は六つに分かれていて、黒で縁取りされている。

白いスラックスには黒い布が？字に巻かれ、

靴は白いブーツっぽいモノが履かれている。

「因果を断ち切れ！！『アトロポスの剣』……！！」

そして俺が呼ぶのはメシアの剣。

不規則に波打った刀身は、中が黒く、縁は銀色。

刀身の所々に球が埋まっていて、鐔と柄は樹の様なモノで出来ている。

そしてこの剣の能力は、『因果を断ち切る』事。

本来ならこの剣の能力を一度使ったらメシアの能力と共に消えるの
だが、

俺は再度創れるから使い捨てのような使い方が出来る。

さて、そろそろ俺の時間が戻る。

その前に俺は剣を無造作に横に振り被る。

と、同時に時間が元に戻り、

聖なる光が俺を飲み込もうとする。

「我々の勝ちだ！！化け物！！！！ハハハハハハハハ！！」

先程の隊長らしき奴が叫ぶ。

「き、貴様！！一体何をした！！？！！？」

「なにつて、見た通り消しただけだが。」

「ば、馬鹿な！！ありえん！！」

あの膨大な魔法をどうやって？！しかもそんな魔

「うるせえなあ！自分で考えるそんなもん。」

俺がそんなに親切に見えますかあ？」

上級神官でも、自分の魔法が効かなかつただけで追撃出来なくなるのか。

これだから『正義の魔法使い（笑）』は弱いつてんだよ。

「魔法が効かなかつただけでなんだよ。」

持つてる剣は飾りか？！誇りは無いのか！！？

力が無いのなら命を賭けて見る！！

或いはこの身に届くかもしれないぞ、人間!!」

そう言うと、神官達は俺に突っ込んで来た。

「くっ、言われずともお!!!!」

「お前見たいなのがいるからああああ!!!!」

「「「「うおおおおおおおおおおおおお!!!!」

「「「「」

うん、機動戦士的な種の運命の主人公が居たが大丈夫か？

「ハハハハハハハハハハ!!!!」

デイ・モールト!! デイ・モールト良しッ!!!!

それでこそよ、人間!

花は散るから美しいのだ!!!! 『飛天凰舞』 『金剛夜叉』!!!!」

俺は野太刀と鐔の無い大太刀を呼ぶと、神官達と切り合う。

大剣の切落を飛天の逆風で打ち返し、その反動で槍の刺突を撃ち落とす、

袈裟斬りを金剛の左薙で弾き、逆手に持ち替え左斬上をガードする。

飛んできたモーニングスターを逆手のまま右斬上して双剣使いにぶつけ、

背後からの袈裟斬りを飛天でガードし、

鎌の左薙ムーンサルトで避けつつ二人を蹴り飛ばす。

上級神官が次々と吹き飛んで行くが、一向に数が減らない。

気絶してもすぐに目を覚ましてまた突っ込んで来るのだ。

「（いい加減面倒になって来たし、良いだろ。）

ウラあ！！！！行くぞ。目覚めろ『飛天凰舞』……」

俺は神官を気でパリイし、『飛天凰舞』のリミッターを一つ解放する。

「奥義!! 『一水不動陣』!!!!!!」

俺が回転切りを放つと、円形に気の水柱が立ち、神官を打つ。

周りの神官は打ち上げられ、そのまま落ち、動かない。

残っているのは補助・回復魔法をかけていた

後衛十数人のみ、なのだが……

「いない……? 何処に行った? 隊列に戻ったのか? ……ッ!!」

と、倒れている神官が転移されると同時に、

俺の足元に5メートル程の魔法陣が幾つも出て来て、

第9話 魔人は殲滅戦で友を見つけるようです(後書き)

作「という訳で9話でした。」

エ「なんとも半端な終わりだな……。」

作「ここで一旦切らないと、2倍になっちゃうんだよ。」

ノワ「シュウがピンチっぽいんだけど、大丈夫なの!？」

作「大丈夫だ、問題無い。」

愁「一番いい装備貰ってるしな。」

作「モンハンで言うなら、今のお前の防御力1000だからな。」

魔力・気の強化なしで。」

愁「ちなみに、防具なに装備で？」

作「素っ裸の状態。あ、攻撃力は2000くらいな。」

愁「えええええ(――)。」

作「強さ的には、神官≡下位ランポスで。」

愁「……もう突っ込まない。それでは、投票経過を。」

つハーレム要員

現在

ノワール エヴァ

決定

真名 テオドラ 刹那

投票

アリカ 11票

ネカネ 4票

ちづねえ 4票

木乃香嬢 4票

アキラさん 3票

釘宮 円 3票

椎名 桜子 3票

しずな先生 3票

刀子様 3票

柿崎 美砂 3票

ゆいな 3票

アリカ&アスナ(明日菜にあらず) 2票

木乃香&せつちゃん 2票

さよつち 1票

アスナ 1票

ナギ(女) 1票

アリカ 戦闘する 2票

日常デレ 3票

エ「となっているな。」

愁「アリカはもう決定してるようなモンだから、伸びないな。」

ノワ「集計まであと二日。シュウの平穩もそれまでね。」

愁「やめてくれ……。」

第10話 吸血鬼は一旦お別れするようです(前書き)

ランゲンウルツアイト! a l t l e n eです。

作「前回、ピンチつぽかった愁磨に、明日はあるのか?!」

愁「いや、無かったら今回無いだろ。」

作「ま、そうなんだけどな。」

ノワ「それじゃ、恒例の行きましょう。」

作「z e r o様、剣の舞姫様! 感想ありがとうございます!」

愁「閻水様、君に届け様、喜瀬希様、立神希様、夏希様。

アンケートありがとうございます!」

作「あ。ちなみに今回は後書きで投票経過出しません!」

愁「そりやまた、なんで?」

作「いや、何となく。」

ノワ「しかし、意外な方々が集まったものね。」

作「w k t kすると同時にガクブルなんだがな。」

愁「ま、とりあえず本編で俺の安否確認しようぜ。」

作「ウム。それでは!」

作& a m p ;愁& a m p ;ノワ「「「ペルファボーレ!」」」

死亡フラグが乱立している事に、指揮官は全く気付かない。

そして、それに気付いたのは三人。

分かっていたのはそれと共に居た二人。

逸早く気付いた三人は無言で障壁を張り、

最速でその場から飛び去る。

見捨てた訳ではない。

その余裕すらなかった。許されなかった。

その意味を悟った神官の数名が全魔力で障壁を張り終えた瞬間、

終焉が声を上げる。

「やあやあ皆様、随分と俺を過小評価してくれているんだねえ。

劇はこれから終演を迎えるんだぜ？

さあ、てめえら小便はすませたか？

神様にお祈りは？

部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？

答えは聞いてない！っけどなア！……！」

戦争は、最終局面へと移行する。しかし起こる事は変わらない。

演目は『グランギニョル恐怖劇』のまま。

S i d e o u t

S i d e 愁磨@約10分前

『兄さま!!』 『シュウ!!』

マジでやばい、と思った俺は、ある魔物を召喚する。

「落ち着きなさいって姫様方。『召喚！ライトニングイーター雷喰蟲！…！』」

俺の直上に出て来た魔物「ル・カポリ」は名前の通り、雷を喰らう者。

その許容量は、神から雷の力を貰ったとされる雷帝をも喰らい尽くす。

故に、似非神何ぞの雷、敵じゃねえ…！！

「ってゆうかお前ら、俺の名前しか叫んでねえんだが。

普通に喋ってるよ、戦場での癒しが無いじゃないか。」

『何を言うかこの大戯けが…！』

だったら心配させるんじゃない…！！』

『その通りよ！遊んでないでさっさと終わらせなさい…！』

ってゆうか何よその悪趣味な蟲は…！！

どっかに捨ててきなさい！！！！』

リル（今命名）は蟲と付いているが、

大体が蛇だが全身に毛が生え、鬣たてがみがある。

額には黒い大小の球がハの字に並んでいて、

目はクリクリしている。あ、女メスの子ですよ？

「めっちゃ可愛いんだがなあ。なぜこの可愛さが分からん。

でかいのが嫌なのか？（体長5mである。）

ああ、よしよし。この人は嫉妬してるだけだから大丈夫だよ。

ああ、モフモフ……。」

目を潤ませて俺に擦り寄って来るリル。

ああ、毛が淒く気持ち良いです……。

……よし、癒し分摂ったし、そろそろ殲滅してくるか。

「リル、省エネ形態^{モード}。」

クピッ！と鳴くと、リルの体が段々縮んで行き、40cm程になる。モフモフの四つ球ミニリュウってどこか。ああ、カワイエなあ。

「エヴァ！リルの事頼むぞ？」

『あ、ああ／／／』

べっ別に構わんから、さっさとこっちに寄越せ！／／／』

フフフ、エヴァは可愛いモノ好きだからな。

ニンマリしてるし、尻尾が見えるようだ。

もう一度モフっとすると、リルを離し『闇』に入れると、狙いと寸分変わらずエヴァの上に落ちて行った。

『あああ、モフモフだあ／＼／

ふふふふふ、モフモフもふもふ』

13Gピクセル・ブルーレイ録画ツツツ!!

PERFECT!!!これでかつる!!!

「充電フル。

さて、そろそろ真面目に行きますかね。

まあ、適当にな。

愁磨、自由フリーダムに!!!行っきま　　す!!!」

と、俺が軍に飛んで行ったんだが……

なんだあいつら?もう勝鬨上げてんのか?

最早世界が変わりっぱなしって忘れてるな。

全く……、それくらい気付こつぜ……。

さてさて、そんなふざけた幻想はぶち殺してやらないとな。

ドオオオオオン！！！！！！

「やあやあ皆様、随分と俺を過小評価してくれているんだねえ。

劇はこれから終演を迎えるんだぜ？

さあてめえら。小便はすませたか？

神様にお祈りは？

部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？

答えは聞いてない！っけどなア！！！！！！

魔力（攻撃手段）とスタミナ気力以外は決して減らない。

だから、俺は本気で攻撃出来る。

「汝ら 我が肉に組まれし 唱える者共

絶えたし血と肉と骨の痛み 今し出で唱えよ

アーニ・マラウス・ミーン・マ・シーネ・フェイ・スレスド・

ワルー・ウッド・モドルンド・アーク・セトプス

『ユードイオー激力鬼神三面瘡』！！』

両肩と腹から、救世主が倒したとされる鬼神・魔神・龍神の顔が召喚され、

俺と一緒に詠唱を開始する。

「グレン・ケネ・ヒル・ハルフォード」

この魔法は、悪魔の苦痛と憎悪をエネルギーとして、目標の存在を物質的にも霊的にも

完全に、根元のレベルまで分解・消滅させるモノだ。本来は、な。

そして、魔法を喰らった軍約5500人はほぼ壊滅し、全く動かない。

残ったのは、メインディッシュ たったの三人。

「ああ、避けてくれて非常に喜ばしい。

雑魚共と一緒に斃られては拍子抜けだ。

しかしとても残念だ。俺は先を急いでいるのだが、どうだろう。

見逃しては貰えんかな。」

と言って振り返ると、

そこに居たのは竜人と、悪魔や精霊のハーフであろう人間。

基本は白い神官服だが、

それぞれ赤褐色、黒紫、水色で飾られている。

帽子には竜や爪、水を模したバッジ、

胸には剣と楯と蛇と獅子を合わせた紋章が付いている。

そして、上級神官とは比べ物にならない魔力。

こいつ等が、現『世界最強の魔法使い』

と謳われる大神官だろう。本来ならゆっくりと戦ってみたいんだがな。

「貴方の様な咎人を見逃せるわけがなかるう。」

「その通りよ。此処で死んで逝きなさい、『白き死神』」

「……………」

悪魔っ子は無言ですか。仕方ない。

勿体無いが、一瞬で片づけさせて

「……………プッ。」

ん？今何か聞こえた様な…………。

「…プフ、…ククク、フツ、…フフフ。」

…うん、悪魔っ子、間違いなく笑ってるわ。

「馬鹿ジルダリア、我慢しろ！もうチヨイなんだから！！」

竜人のニイチャンが言うと、ジルダリアと呼ばれた少女が

「アハハハハハハハハハハ！！フフフフ、ふ、ゲホゲホ。

あー、恥ずかしい。

『貴方の様な咎人を見逃せるわけがなかるう。』

『その通りよ。此処で死んで逝きなさい、『白き死神』だつて！！』

カッコイイわジオン、エーリアス！！アハハハハハ！！！！」

「止まれ、アーカード。誰が言っていていいと言った。」

「いや、この雰囲気、もう俺必要ないだろ。」

ジオンの言葉に俺は振り返る。ジルダリアは膝を付いて咽ていた。

「今のは無かった事にしてください。良いですね?!。」

精霊っ子・エーリアスが顔を真っ赤にして睨んで来る。

「ああ。お互いにその方が良さそうだ……………」。

「ありがとう、……………本当に、ありがとう……………」。

エーリアスは座り込んでマジで泣き出した。

ジルダリアは……………もう駄目だ、手遅れだ。

「ゲフン。で、俺を見逃してはくれないのか？」

「少し待て、…『大移動転移符』発動。」

符が発動し、軍全員が転移した。恐らく王都に行っただろう。

「これで目撃者は居なくなった。さてアーカード、取引と行かないか？」

「ほう、取引出来る状況か？よく考える大神官。」

確かにこいつは強いが、俺が本気を出せばデコピンで木端微塵だ。

更に、他の大神官は使い物にならない。

全魔法使用中、さい、きょう……？

「確かに、お前が本気でかかれば俺達など、瞬きより早く死ぬだろう。」

しかし、今の戦いで分かったよ。お前は俺達を殺さないってな。」

ほう、『正義の魔法使い』の全員が石頭じゃ無いのは分かってたが、まさか頂点がそうとは。

「そこで提案だ。俺達は『大魔導士』になりたいんだが、元老院が、中々認めないんだ。と言うのも」

「ああ、分かっている。

『大魔導士』の方が大衆への影響力が上だからな。」

「助かるよ、全く。

で、遂に明確な条件を出して来たんだ。約定付きでな。

『白き死神』『黒翼氷帝』『闇の福音』以上三名を無力化せよ』

だとさ。無茶言ってくるぜ。」

「クハハハハ!!!」

「こりゃまた随分な要求寄越したもんだ老害共！！！」

「ほんとうよ。」

「あんた達の実力を分かってて言ってるんだから性質が悪いわ。」

「本当は隠れて貴方が行ってしまうまで待っていていよう、

と三人で話していたのです。

しかし、見ていて驚きました。

あの出鱈目な戦闘力もそうですが、

乱戦で、一人も切らず峰のみで攻撃。

しかし、あの魔法を使われた時には、

全員死んだものと思いましたが……。」

どうやらエアリアスとジルダリアは復活したようだ。

良かった良かった。

し、しかし……

「エアリアスさん、ちょっと良いですか？こっちへ。」

「え？ええと、その……、はい……」

と疑いつつもこっちに来てくれる。

「む、何よ？エイルに変なことしたら承知しないわよ！」

「（ジルダリア、あいつが攻撃しようとしたら……）」

「（ま、あいつはは大丈夫だと思うわ。」

ジオンの言う通り、その気ならもうやっているはずだし。」

「（しかし……）」

聞こえてるっちゅうねん。ま、頭から信じる奴よかずと良い。

そんな事はどうでもいい。今はこっちだ。

「やれやれ、可愛い子が泣いてるのは綺麗なんだけどな。

「ただ俺は見ると辛いんだよ。」

エーリアスの目からまだ零れている涙をハンカチで拭ってやる。

「『』なっ?!?!?!?!」

「ん、ちょっと、良いですノノあの、やめて…ノノノ」

「いいから動かない。」

号泣するほど恥ずかしいならやらなきゃ良いのに。

「そんなに恥ずかしかったのか?」

五人の反応を無視して拭い続ける。

「その、私は、水の精霊の血が四分の一ほど入ってしまって、普通の人より水分が出易いんです。

そのせいで、一度泣くと暫く止められないんです。

しかも、その、もともと涙脆くて／＼／

で、ですから、その／＼／…あの、拭いてくれなくていいです／＼／」

成程、このままやっても止まらんと。仕方あるまい。

「悪いな、はい。ちょっと自分で押さえててくれ。」

「え？あの……。」

そう言うと俺はハンカチを渡し、『創造』を開始する。

「『創造』『付加』人魚の涙を今一度止める薬を是へ。」
「i a h r B r」

そして俺の手に顕れたのは涙型の小さなビン。

精霊の力を鎮静化させる物なんて本来、数時間かけて『創造』するモノだ。

しかし、この世界ではそれが可能になる。それは『創造』の時間短縮。

本来不可能な『創造』にかかる時間を短縮出来るが、制限がハンパ無い。

『平行創造』の禁止、能力の限定、ステータスの大幅ダウン。

つまり戦闘がほぼ不可能になるが、代わりに創造スピードが1000倍になり、

俺の『想像』から補完が可能になるため、簡単な言葉で創れる様になる。

「よし、出来た。ほら、これ飲みな。」

そう言って差し出すが、エアリアスは受け取らない。

「って、そりゃ信用できんわな。

ハア、俺が飲んでも意味無いんだが。…仕方ない。

(キュポン)ンツ、ンツ、フウ。これでいいか？ホレ、飲め。」

半分ぐらい飲んでから渡してやると、今度は受け取ってくれた。

「え、あの、でも、これ…／＼／えと、そのお…／＼／」

なぜに顔を真っ赤にしながら狼狽えるか。手間のかかる…。

「—(バツ!)ほら飲め飲め。た〜んとお飲み〜。」

俺は渡したビンを再度掻っ攫い、

エーリアスの口に無理矢理突っ込んでやる。

「んんん?!んんっ、んふう、…んっ…んっ…んっ。」

最初は吃驚して嫌がってたが、段々薬を飲み始めた。

・・・なんか、こっ、凄く、エロいです。

「ううう、酷いですよお……。

…美味しかったですけど……。」

目は潤み、口元には薬が垂れ、顔は赤い。

デイモールト、PERFECT・・・!!

何この子、狙っているのかしら？

「ってあれ？嘘、本当に止まってる……。

精霊を抵抗^{レジスト}しても止まらなかったのに、なんで……。」

「ほら、ボーっとしてないでハンカチ寄越せ。」

なんか無抵抗なエアリアス。

多少抵抗して貰った方が興奮すげフンゲフン！！

ま、まあいいか。残ってる涙と口元を拭って、と。

「ふむ、後は、『治療』^{ヒール}。よし、これで綺麗になった。」

初期治療呪文で、赤くなってる目を治してやる。

「あ……。あ……。ありがとうございます……。／／／」

そう言っただけで微笑むエーリアス。

「ウム。やっぱり、美少女は笑っているのが一番だな!!」

「そ、そんな／／美少女だなんて、そんな／／／」

クネクネし出したエーリアスをほっといて、ジオンと話を再開する。

「さてジオン君、俺は勢力争いなんて興味無いし、

お前らの目的も知ったこっちゃないが、

お前等に協力した方が楽そうだ。

よって、その提案、受け入れる事にする。」

「おお！！本当か?!感謝する!!」

俺の手を握ってブンブンするジオン。ええい、鬱陶しい!!!

「で、具体的にはどうするつもりだ?」

「その前に一つ。」

……全く考えてなかったが、ここの会話聞かれてないよな?」

「大丈夫だ、問題無い。中から外に行くのは簡単だが、外から中への干渉は一切出来ない。」

その証拠に、転移出来たのに新たに送り込まれてないだろ?

って言うか、大神官てアホばっかか?」

「言わないでくれ……。それなら良いんだ。」

なに、簡単だ。俺らが出て行って兵士たちが喜んでる隙に、

お前は魔力を消して脱出、何処へ也とも行ってくれ。

後は俺達が元老院に、『お前等の力を封じて旧世界に送った』

とでも報告すれば、俺ら大魔導士、お前自由、皆ハッピーエンド。」

「それだと俺達に追手が来そうなんだが？」

「ああ、大丈夫。懸賞金は無期限無効にしておくから。」

「…ふむ、今の条件なら問題無いな。それで行こう」

「よッし！契約成立だ！！！」

ガツシリ握手すると、三人は世界の外へ向かう

「んじゃあな！」

近くに来たら連絡くらいしろよ、アーカード！！

って、そうだ？！

アーカードって本名じゃないんだろ？名前教えてくれよ。」

と思ったのだが、ジオンが俺の名前を聞いて来た。

困るモノでもないし、別にいいか。

「俺の名前は愁磨。愁磨・プテリユクス・ゼクスパール・織原。」

「そうか。じゃ、シユウマ！今度は飲もうぜ！！じゃあな。」

「随分大層な名前だね。」

……あんたと悪戯したら面白そうだから、

今度遊びましょ。それじゃあね、シユウマ。」

「あの…、偶に遊びに来てくださいね。」

さようなら、シユウマさん。」

「おう！お前らも元気だな。またな！！」

いや、なかなか良い奴らだった。

違う立場だったら、気兼ねなく友達になれたのかもな。

いや、今はもう友達だから関係ないか。

『シユウ、私達忘れて、随分とお楽しみだったじゃない？』

『兄さまは女に見境が無いのだな。誰彼構わず優しくしておって！
しかも、私にはあれだけ渋ったのに、

初対面の相手に簡単に名前教えよって！！』

と、二人から嫌味がかかる。嫉妬深い姫様達だなあ。

「ハイハイ、後でかまってやるからそう怒るなって。

……………二人とも、ちょっといいか？…………『召喚』」

俺の前に魔法陣が出て、『闇』から二人が出てくる。

「ちょっとシユウ！！私という者がありなが、ら…………？」

「兄さま！！初めて会ったばかりの女、に、……………兄さま？」

激昂していた二人だが、俺の様子がおかしい事に気付いたらしく、そのなりを潜める。

「エヴァ、ノワール。」

俺がさっきの戦いで思った事を聞いて欲しい。」

そう言うと二人は困惑しながらも頷いてくれる。

「……………これからは、エヴァと別れて旅をしようと思う。」

「……………え？」

俺の言葉に二人は更に分からない、といった顔になる。

「に、兄さま？い、今、なんて……？」

エヴァは震えながら俺に聞いてくる。

「エヴァとはこれから別れて旅をする、と言ったんだ。」

「そ、んな、なんでだ……？」

なんで、そんな事を言うんだ？兄さま？

わ、私を…嫌いに、なったのか？」

「……シユウ、理由を話してちょうだい。

でないと納得できないわ。」

エヴァは泣きそうになっているが、ノワールは冷静だ。

俺の考えてる事が分かるんだろうな。

「勿論だ。…エヴァ、お前は強くなった。俺の誇りだ。

だけど、お前には経験が足りないんだ。」

「……え………？」

そう。このエヴァには、

『一人で戦った』経験が足りない、いや、無い。

俺がずっと育て、ずっと鍛え、ずっと守って来た。

来てしまった。

エヴァが持つのは吸血鬼の力と、神官級の魔力、ただそれだけ。

エヴァに才能は無い。

原作で最強の一角であるフェイトと互角に戦っていたのは、

一重に、辛い過去に裏打ちされた経験があったからだ。

しかし、それを俺が奪ってしまった。

修業で非情になれず、死に迫らせる事が出来なかった。

抱くはずだった、あらゆる憎しみを無くしてしまった。

俺が殺しすぎたせいで、他人の死に罪を感じなくなった。

危険な相手は俺が瞬殺し、本当に危険な状況に置かなかった。

そのせいで、自分の命の危機に触れられなかった。

「お前の力は、上級神官に匹敵、いや、それ以上だ。」

しかし、その程度では困るんだ。お前は、大神官に勝てない。

その程度では、俺に着いて来れない。」

俺は、アークからもう一つだけ情報を得ていた。

それは、『ナギ・フェイト・大神官・エヴァの戦闘力』だ。

結果は、『ナギ<フェイト<大神官<エヴァ』。

原作では少なくとも

『フェイト=エヴァ』であったのに、

今のエヴァは、俺のせいで、こんなにも弱い。

原作まであと350年。エヴァに経験を積んで貰う為に

「だからエヴァ、お前とはここで一旦お別れだ。」

俺の思いは伝えた。

後は、エヴァを説得するだけ。これが一番難問なんだがな。

「……………分かった。兄さま達とはここで別れよう。」

…難問、だと思って、

必死に考えていた理論は、一瞬で必要無くなった。

「分かっていたよ。気付いていないとでも思ったか？

私は兄さまに守られて、自分の身を守れていない事くらい。

兄さまといたら、兄さまは私を完璧に守ってくれるが、

だが、私はそんなのまっぴら御免だ！！私の目標は、兄さまだ！！

何時までも一緒に居ては駄目なんだ！

だから、兄さま、姉さま……………。」

ああ、内の小さい姫様は、何時の間にかこんなに成長していたのか。

「今は、サヨナラだ！！」

…我々は不老なのだから、いつか会えるさ!!」

なら、もう俺達が出すことは無い、のだが。

だが、しかし!!

「エヴァ、俺達の代わりに、これを持っていけ。お守りだ。」

そう言って渡すのは、黒い羽と白い羽が交差しているチョーカー。

能力は・・・

『エヴァに十七禁以上、もしくは、

エロい危機が迫った時に、俺が召喚される』だ!!!!

痛い痛い!! 物を投げるんじゃない!!

シリアスは投げ捨てるモノなんだよ!!!!

エヴァは穢させん!! 嫁にもやらん!!

欲しければ俺を倒して行け!!!!

「ククク、吸血鬼がお守りを持つとはお笑いだな。

だが、ありがとう。一生大切にする。

それではな、兄さま、姉さま!!またいつか会おう!!!!」

「行ってらっしゃい、エヴァ。車に気を付けるのよ。」

「知らない人に着いてっっちゃ駄目だからな。」

「お前等は私の親か!!?全く、じゃあな!!」

「ああ。またな、エヴァ。いずれ、また会おう。」

バシユウ!!という音と共に、エヴァを旧世界に送った。

これでいい。

これで、『これ』に関係ないエヴァは助かる。

「さて、シユウ。本当の目的を…

……いえ、エヴァのも本気だったわね。

二つ目の目的は、一体何？」

流石、ノワール。そこまで気付いてたか。

「ああ。俺の経験もだいぶ溜まったし、武装の貯蔵も十分だ。

偉そうに人間の上に乗っ立ってる、『神』の殲滅に向かう。」

そう。俺の今回の真の目的は、武装の調整。

ノワールとの模擬戦と、今回戦いで使った感じで分かった。

あいつらは、本気の俺の足元にも及ばない。

神の名を冠しているが、所詮は天使。

しかも、全盛期より遙かに劣る軍。

ノワールだけでも勝負は見えている。

「さあ、ノワール、行こうじゃないか。

偽の神の世を終わらせに……！」

「フッフ、Yes、my master .

ああ、本気で戦えるなど、何千年ぶりか。血が滾る！」

ノワールが若干昔の女王様形態になってるな。踏んで欲しい。

「愁磨、行くぞ！グズグズするな……！」

「了解です、姫様。

さあ、『神の許へ連れて行け』……！」

イイイイイイイイイン！！

羽音の様な高い音が響き、

バシユウン！！！！

俺とノワールはあの世界へ転移した。

最後に聞いたのは、

塗り替えていた世界が硝子の様に碎け散る音と、

軍の勝鬨の声だった。

第10話 吸血鬼は一旦お別れするようです(後書き)

作「と言う訳で十話でした!!」

愁「えヴあああああああ!!」

エ「に、兄さま、落ち着けて。」

作「シスコンが……。」

ノワ「それは私も侮辱していると言う事で良いのかな？」

作「仲が良いのは良きかなって奴だよ。」

ほら、さっさと旦那慰めてやれ。」

ノワ「だ、誰が旦那だ!!/誰が!!全く……。」

作「ラブコメは去った……。一時的に。」

それでは、まず投票結果についてですが、

明日の更新の後書きで発表致します。」

愁「と言ってもこの作者適当ですので、

あくまで優先的に入れる、とお考え下さい。」

ノワ「気分次第で別の子もハーレム入りさせるかも

知れませんが、その辺りはご注意を。」

エ「姉さま、そんな適当で大丈夫なのか？」

ノワ「私はシュウと居られれば、それで良いわ。

ハーレムが3人だろうが100人だろうが関係無いわ。

シュウが一番好きなのは、私とエヴァだから。」

作「……におつて来たな……。」（ボソツ

愁「ん？なんか言ったか？」

作「気をしっかり持て。彼女に不安を抱かせるな。

分かったか？」

愁「お、おお。いきなり真面目だな。」

作「……トラウマだからな。」

エ「よく分からんが、そろそろ終わろう。」

それでは、皆の者！！フィーノスツチェスイーヴォー！！」

第11話 天界で二人が戦うようです(前書き)

こんばんわ、aitleneです。

作「今回は・・・まあ、いつも通りですね・・・。」

愁「相変わらず酷いなあ。」

ノワ「しかも、前s「おっとそこまでだ」

作「詳しくは本編で、と言う事で、恒例のお礼を。」

愁「zero様、剣の舞姫様、感想ありがとうございます!」

ノワ「takag様、アンケートありがとうございます。」

愁「紅蓮様、要望くださり、感謝いたします。」

作「そして、yamama様!ご指摘、ありがとうございます!ます!」

作品向上の為の糧とさせていただきます!」

愁「後書きで投票結果を発表致します。」

作「報告も済みましたので、それでは!」

作&愁&ノワ「」どうぞ!」

第11話 天界で二人が戦うようです

Side 愁磨

シュウン!!!

という音と共に、俺とノワールは、そこに降り立った。

そこは氷の世界。

ここは、初めて、俺が本気で何かを為した世界。

見渡す限り、いや。この世界は、雪で埋め尽くされている。

そして俺達の前には、縦に裂け、門の様に開いている十字の棺。

「ああ、懐かしいな。

私はここでシュウと出会ったんだな。

もうだいぶ昔の事に思えるけど、ハッキリ思い出せるよ。

フフフ、あの時は驚いたよ。

誰かが来たかと思ったら、人間なんだものな。

しかも、ぶつかってドテツと倒れたんだよな。

フフ、あれは思い出すと笑えるな。」

「う、うるせえな／＼あの時は、意識なんて殆ど無かったんだからな。」

ノワールは完璧にあの時に戻っている。

しかし、それは過去。すぐに、今に切り替わる。

「フフフ、なら好都合だわ。」

あの思い出は、私だけのモノでいいの。

これの共有は、誰にも許さないし、出来ないわ。」

笑いながら彼女は回る。白い世界で、黒が回る。

気分が乗って来たから、少しだけ歌おうか。

雪が舞い散る夜空

二人寄り添い見上げた

繋がる手と手の温もりは

とても優しかった

ノワールがそれに気付くと、

ヴァイオリンを弾く様な動作をとり動き出すと、

本当に音が流れ出す。

俺は、それに合わせて歌う。

どんな時もどこにいる時でも

強く強く抱き締めていて

それが、たとえ、地獄の底でも。

俺は、彼女を抱きしめていたい。

あなたへの この想いはすべて

終わりなどないと信じている

あなたただけずっと見つめているの

ノワールの頬がちょっと赤くなって来ている。

ああ、やはり、こんなにも、彼女が愛おしい。

沈然が想像を超え引き裂いて

一つだけ許される願いがあるなら

「ごめんね」と伝えたいよ

まるで、『あの時』の様な詩。

彼女を、怒らせてしまった、あの日の様な。

いくら想っていても届かない

声にしなきや 動き出

さなきや

隠したままの二人の秘密

それは、秘密と言うほどの事でもない。

一人の時は、なんてこと無かった、古い『生傷』だった。

あなたの傍にいただけで

ただそれだけで良かった

今度めぐり会えたら

もっともっと笑い合えるかな・・・

歌では二人は離れてしまう様だ。

しかし俺は、彼女を、もう離さない。何があるうと。

どんな時もどこにいても

「そこが、地獄の底だからこそ。」

強く強く抱き締めていて

彼女を抱きしめてあげよう。

情熱よりアツイ体温ねつで溶かして

二度と、冷えてしまわない様に。

あなたへのこの想いはすべて

終わりなどないと信じている

あなただけ ずっと見つめているの

「 シュウ……! 」

歌い終わると、ノワールがこちらに走って来る。

それを抱き止め、頭をゆっくりと撫でる。

ずっと、いつまでもしていたいが、しかし、そうはいかない。

ここに来た目的は

「 さあ、そろそろ行きましょう、シュウ。」

「了解。 ま、適当にね。」

ただ、復讐の為。

傲慢な神への復讐。

裏切られた魔王の、かつての仲間への復讐。

そしてそいつ等は、この世界の、上に居る。

「うーん、これも一応『ラグナロク 神々の黄昏』なのか？」

「侵略者の方が圧倒的に少ないけれど、

似たようなものじゃないかしら。」

「どっちみち、天界がある意味終わるんだから同じか。」

さあて、天使共。— r o c k · n · r o l l · (神様に祈れ)「

さあ、思い上がった天使を殺そうか。

S i d e
o u t

S i d e クルセウス（　一話で登場したダンブルドアですよ？）

ゴッホン！！全く、厄介な事になりおったわ。

まさかあの、元大天使長ルシフェルが地獄から脱獄するとはのう。

お陰で天界は大騒ぎじゃ。

天使と大天使は朝から晩まで異世界異次元を搜索。

『神』の我々でさえ日夜搜索に出ておる始末。

お陰で死んだ人間の選定が追いつかん。

裏切り者が、いらん事をしてくれるわ。

「どうした、クルセウス。随分と難しい顔をしておるな。」

「おお、アリアか。」

当然じゃ、まさかルシフェルが逃げるなど、

この数千年、誰が想像したじゃろうか。」

「一向に居場所どころか、

痕跡すら見つかっていないのだ。

まさか、妾の『次元探知』で見つけられんとは思わなんだよ。」

アリアの『神』としての能力は『次元探知』。

文字通り、次元を超えて対象を発見する能力なのじゃが・・・

「むうう、アリアで見つけられんとは。

儂の『神の雷』は対象が視界内におらんと使えんしなあ。

どうしたものかのう……………」。

と儂が考えていると、下の方に覚えのある力が一つと、

全く知らない力が現れた。

「この力は!!?!?!?」

クルセウス、間違いない、奴じゃ!!!」

「現れおつたか!!」

しかし、この位置は……。なぜ、地獄に？」

「そんな事、知った事か!!!天使全軍は、1時間で集合!!!
完全武装して大聖堂に待機!!!急げ!!!」

「ハッ!!!」

ドシユン!とアリアの親衛隊が、

情報を伝えるために管制室へ向かう。

さてさて、愚かな裏切り者を裁かんといかんのお。

しかし、改変され、無限となった地獄から抜けられるかの？

S
i
d
e

o
u
t

S
i
d
e

愁
磨

俺達は今、上を目指すため上昇中だ。

しかし、幾ら上がろうと天井が見えてこない。

既に立っていた場所から場所から、少なくとも

1万kmは上に上がって来たはずなんだが……

「ノワール!!」

この地獄の高さは本当に2000kmで合ってるんだよね?!」

「間違いないわ!しかし妙ね。

この距離なら既に大聖堂にすら着いているはずなんだけど。」

「大聖堂?教会みたいなもんか?」

「少し違うわ。

正式名称『大神光城デウスエクスマキナ聖堂』。

天界のもっとも高い位置にある、主神を祀る城。

城と謳ってはいるけれど、

中は全天界人800万人が入れる聖堂になっているわ。」

「まあ、今はんな事より、此処をどうやって出るかなんだが。」

「どうなっているか分かる？」

「恐らく地獄の何処かに基点があつて、

それによつて空が無限に続いてるんだ。」

「その基点を壊せばいいのね?!」

「言つのは簡単だがな。」

このくつそ広い地獄全部を焦土にする気か？

しかも、基点が結界内にあるとは限らない。」

「え?ど、どう言つ事?!」

「地獄の外を囲んで、その中から上がつて来る時のみ、

上に存在する全ての物を貫通し、

周りを空に見せる結界。つて言つのかな。」

「つまり、とつくに地獄を抜けているのに、

居るのは地獄に思わせる訳ね。」

「そうそう、そんな感じ。」

つまり、外の基点を潰せばいいんだけど……………。

問題が一つ。地獄の直径≡天界の直径だろ？」

「?ええ、そうだけど。それがどうし……………!!」

あ、そっか……………」

そう。俺達は地獄（天界）のどの部分に居るか分からない。

そして、天界の外なんて、どうなっているか全く分からない。

「俺らが基点壊そうっても、端が分からない。

かと言って適当に端目指しても、突き抜けるのがオチ。

その先がもし『座』とかだとしたら……………」

「うん、『座』に入ったらどうなるのかしら……………?」

「とにかく、不確定な事は出来ない。」

「……………ねえ、『創造』でなにか創れないの?」

「もう試したよ。」

けど、『創造』を使う事すら出来なかった。

地獄なんてモノを弄ったせいで、

位相とかが変になってるんだろう。」

「じゃあ、『闇』の中のアイテムに何か無いの？」

「『闇』に入れているのは確かに便利系だけど、

空間破壊とかが出来るのは入って無いんだよ。」

「……………今、役立たず？」

「い、いや、『王の財宝』使えるから、

武装はたんまりあるんだが…………。」

「それなら、あのメシアの剣で、

空間切っちゃえばいいじゃない。」

確かにアトロポスは森羅万象の因果を切れるモノなんだが……

「危険なんだよなあ……」

位相がずれてるから、

地獄の因果を一緒に切っちゃう可能性が……。」「

「私も転移出来ないから、元の世界にも行けない……」。

どーやったらこの空間から出られるのよ？！」「

「いや、俺に聞かれてもな。」

この空間からどうやって……空間……！

……ああ、そうか、そうだった。すっかり忘れてたよ。」「

「何か方法があるの？！」「

「ああ、あるよ。いや、自分で創って無いから忘れてた。」

「いやいや、まさかこれの存在を忘れるとはな。」「

そう。

俺が思い出したのは、慢しゲフンゲフン、英雄王の剣。

「ノワール、離れてろ。『ゲイトオブバヒロン王の財宝』……！！」

削ってはいないが、これの中に入ってるはずだ!!

ってゆうか入ってる!!

……いた! 出番だ。起きろ、『エア』

俺は『王の財宝』から、

刀身が黒い三連の円筒の形をした、黄金の剣を出す。

「ああ、そう言えばそんなモノあったわね!!」

そう。Fate武器を全く使っていなかったのを忘れていたが

この剣は、空間を切り裂く!!

裂いた先に、誰か居ても怨むなよ!!

「^{エヌ}天地乖離す

」

ヒュゴオオオオオオオオオオオ！という音と共に

刀身が回り、赤い風を纏い出し

「『エリシユ開闢の星！……！！……！！』」

横薙ぎの赤い台風が放たれ、空間を削り取って行くが

「まさか、『エア』で足りないだと？！

ならば……出でよ、

レイジング『魔王の砲撃放つハート機械杖エクセリオン』……！！』」

そして、この組み合わせにより放たれる攻撃は……！！

そこは、まさに教会だった。が、規模が桁違いだ。

普通の教会の大きさが一戸建てだとしたら、

此処の広さはデイズニーランド。それ位大きい。

そして、俺の前に居る、あの、忘れられない顔に向かって、言ってる。

「アハハハハハハ！いい顔になったね！！！」

俺を蔑んだ、あの幼女とジジイの驚いた顔は、まさに格別だった。

「き、貴様、一体何者じゃ？！」

『無限地獄』から抜ける方法など無いはずじゃ！！」

「ハッ、俺の事なんて覚えてないってか！？そりゃそうだよな！！」

なんせ『神様』だもんなあ！！？俺如き一人の人間の事なんざ

」

「いや、シュウ？貴方、あの時と姿変わっているのだから……。」

と、俺の後ろからノワールが出て来てツッコミ入れてくださった。

「おお！そっぴやそっぴやだっとな。

この姿でいる方が長いから忘れてたぜ。」

既に死んでから400年は経ってるから、死んだ時の歳の約24倍か……。

こいつの顔覚えてるのにビックリだよ。

……自分じゃ分かんが、相当怨んでるんだな。

まあ、此処で終わるからもう関係ない。

「これで分かるか、爺。

幼女を助けて、地獄に落とされた人間だよ。」

俺は、顔だけをかつての姿に戻す。

「お、お主は！！どうして此処に居る？！

なぜ地獄で死んでいない！！？

しかも、なぜルシフェルと一緒に居るのだ？！

お前の様な、無力な人間が！！！」

・・・

「そうだな。確かにこの時は俺はなんの力も無くて、

お前なんかにも足も出なかった。

・・・

だけど、今は違う！！この俺は、もう無力じゃない！！！」

そして顔を『今』に戻し、告げる。

「さあ天使共！！」

小便はすませたか？！神様にお祈りは？！

部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はいいか！！？

さあ始めよう！俺は堰を切る。 戦争の濁流の堰を切る！！」

「貴様、正気か？！天界と、一人と裏切り者が戦争するじゃと？！

ルシフェル！！貴方はどうなのじゃ？！

同胞に刃を向けると言うのか！！？」

「あ、いや、私は……、私、は………。」

クルセウスの言葉に、ノワールは下を向く。

い。
まだか？『また』なのか？もう此処まで来たからには待てない。

自分の身を守るくらいの覚悟はして貰わないと、邪魔なだけだ。

「ノワール！！！！お前はルシフェルじゃない！ノワールだ！！！！
いつまでも辛そうな顔してんじゃねえ！

いい加減覚悟を決めろ！！！！

覚悟の無い奴が此処に居るな！！もう此処まで来たんだ！！

お前は一度選んだんだ！それが土壇場で揺らいでんじゃねえ！！！！

その程度の覚悟で此処まで来たのか？！ノワール！！！！」

これで揺らいでいる様なら、『闇』に無理矢理放り込む。

さあ、どうする、ノワール。俺の信頼を裏切らないでくれよ？

「……………ありがとう、シュウ。もう、覚悟したわ。」

そう言うと、ノワールに力強い魔力が纏う。…………よし。

第11話 天界で二人が戦うようです（後書き）

使った詩は、水樹奈々様の『深愛』ですね。

作「はつずかしい!!!／／あー、恥ずかしい!!」

愁「酔ってたから、冒頭からやっちゃまったな・・・／／／

ノワ「私は、嬉しかったわよ?」

作「女の方が強いな、こつ言つのは・・・。」

愁「内容は・・・。」

うん、思った通りだ。やっぱり始まっただけだったな。」

作「使ったは良いけれども、基本的に死天使使わないな。」

ノワ「まあ、貴方の技量じゃそんなものね。」

作「愁磨のスペック的に必要ないんだよ。」

愁「まあまあ。それでは、投票結果を発表致します!!」

結果

一位 13票 アリカ姫

二位 6票 しずな先生

木乃香嬢

刀子様

ゆいな

三位 5票 ネカネ

ちづねえ

釘宮 円

柿崎 美砂

四位 四票 アキラさん

作「となりました!!」

愁「ちょっと待て?!まさか全員!!?」

作「いや、二位票が案外多くてな。今説明する。」

ノワ「アリカ姫は、ハーレム入り決定ね。」

続いて二位の四人は、余程の事がない限り入るわ。」

愁「三・四位については、余裕があれば入れるかも、です。」

これ以外のキャラも、作者がノリで入れるかも知れません。

「
r z
」

作「何度も言いますが、ハーレムメンバーの位置付けは、あくまで

『主人公に近い者の為、他のキャラより目立つ』です。

なので、過剰な出演はしません。

あくまで主人公は『愁磨』です。」

ノワ「全てのメンバーにライトを当てる為に、

一人当たりが短くなるのは当然ですから、

そのキャラのみが見たい、と言う方はご注意ください、

皆様、御理解ください。」

愁「続いてアリカ姫の介入ですが、

戦闘する 2票 日常デレ 3票です。

正確には両方2、日常1になりました。」

作「『票』で表していますが、これは割合です。

戦闘3割5分、日常6割5分だとお考えください。」

ノワ「見事に他作品では見ないメンバーね……。」

愁「……大丈夫なのか？」

作「とりあえず会議だ。『何がきっかけで愁磨に好意を持つか。』」

愁「その前に。次回の更新は28日。明後日ですね。」

作「メンバーの見たいシチュエーションがありましたら、

感想覧にてどうぞ!!それでは!!」

作 & a m p ・ 愁 & a m p ・ ノワ
「 「 「
ア
リー
ヴェ
デル
チ
! ! !
「 「 「

これは単なる言霊の一種だ。

しかし、発動には神通力を使っている。

名の通り、神の力の一端を使っている為、

天使では太刀打ちできない。

それを見た周りの天使達は動揺し、『神』達は目を剥く。

「さあ。どうする天使共。

俺が必要なのは、あそこの二人の命だけだ。

あの二人を差し出し助かるか、

差し出さず皆殺しになるか。どちらを選ぶ？

……他にも手はあるぞ？

武器を捨てたら、見逃してやる。さあ、どうするっ。」

俺の言葉に天使達は一瞬逡巡する顔をする、が

「その様な者の言葉に踊らされるでないわ!!」

さっさとそやつを押し潰せ!!」

幼女の声に、天使達は再び構え、突進してくる。

「哀れなもんだな。」

自分の意思を持てぬ者は死んでいる。『アトロポ』

「シュウ。待って。」

俺が『アトロポスの剣』で掃おうとした所、ノワールから声がかかる。

「……………手早くやれよ。あまり待たんからな。」

「……………ありがとう、シュウ。……………ごめんね。でも……………!!」

バサッ!!とノワールに翼が生え、闇色の輪を背負つ。

「許せとは、言わないわ……………!!」

『一封神八十七式裂光流星乱舞』!!!!!!」

唱えた瞬間、無数の光の球が周りに形成され、レーザーが放たれる。

これはノワールの固有魔法『一封神八十七式裂光流星乱舞』。

光により圧縮された反物質を、細いレーザーの様に複数打ち出す神級魔法。

「ぐあああ!!」「馬鹿なゲボア!!!!」「ぎえ?!」「グオア!!!!!!」

「ヒイイ?!」「ギユバ!?!」「ぶげえ?!?!」「ヒデブ?!?!」「ギヤ!!!!!!」

天使・大天使の張った障壁を無視し、無数の光は軍を蹂躪して行く。

それを見ながら、ノワールは目に涙を浮かべている。

「（ポン）……まだ、行くか？」

俺はノワールの頭に手を置き、聞く。

「……ええ、行くわ。」

それに、こうなってしまったのは、私にも責任があるから。」

どうして責任を感じているかは分からないが、無理をしている様子も無い。

瞳は覚悟を抱いたままだ。

「行くぞ、ノワール。武器を捨てた奴は見逃せ。」

「分かっているわ。来て、「ルンファース・スピア『明星の彗星』。」

俺はアトロポスとジャツカルを、ノワールは3m以上ある槍剣を召喚し構える。

「恨みは無いが、邪魔するなら容赦はしない。」

W i s h t o g o o d

『神に祈りな』！！』

「めね。…行きます！！！！」

俺とノワールは、天使達に突っ込んで行った。

S i d e
o u t

S i d e
ク ル セ ウ ス

「「「「うわああああああああああああああああああああ
！！！！」」」」

一体、この場で何が起きている……？！

最強の天界軍が、たった二人の侵入者によって蹂躪されておる。

非力な人間と、裏切り者の手で！！！！

「死ねええええええええええ！！！！」「はああああああああ！！！！」

「『敵対天使の存在、消去』^{デリート}！！！！！！」

「ちえりやああああああああ！！！！」「おおおおおお！！！！！！」

「フツ！！はああああ！！！！」

ルシフェルの槍剣は美しい弧を描き、二人の天使を切り裂く。

が、人間の攻撃を受けた天使は、文字通り『消えて』おる。

人間の正体不明の攻撃に天使達が逃げ惑っておる。

天使達が、百戦錬磨の天界軍の兵が、

一人の人間の攻撃に怯えておるだと!?

此奴は一体何者だ?!人間では無いのか?!

「狼狽えるな!智天使隊!!対魔王級用集束魔法、用意!!!!」

と、指揮官により智天使隊　魔法主体で戦う天使　へ命令が出る。

逃げようとしておった天使達が、

自分の責務を思い出し隊列へ戻り、智天使達は集束を開始。

力天使　白兵戦主体の天使　達は陣を組み、詠唱中の智天使を守る。

「シュウ！あの攻撃は不味いわ！！何とかしないと！！」

「ハツハツハ、了解了解。」

本当になんなのだ、あの人間は？！

あの、伝説のルシフェルでさえ焦っている一撃に、

なぜあの様な態度が取れるのじゃ！？

「「「「「 霊冥へと導く破邪の煌めきよ 我が声に耳を傾けたまえ

聖なる祈り 永久に紡がれん 光りあれ

その御名のもと この穢れた魂に裁きの光を降らせたま

え「「「「「

「ごめんな。別に撃たせても良いんだが……………」。

詠唱の邪魔をする軌跡さえ見せずに、

人間はあの奇妙な剣を振り被る。

「ブランドクロス・ジャッジメント神十字の断罪』！！目標、侵入者！！！！」

「連れの心臓に悪いからさ。『敵の準備中攻撃、消去』デリート！！」
軽く、剣を一闪させると、完成間近の集束魔法が、消された。

「うて　　な、なに?!?!?!?!」

指揮官の天使が、完成すると思っていた魔法が消えた事に、声を上げる。

そして

「うーん、やっぱ、流石に多すぎるな。

ノワール。殲滅するから下がってる。」

人間が、ごく軽く言った。

S i d e
o u t

S i d e
愁 磨

最初は俺達が無双して、逃げだす奴は逃がそうと思っていたのだが、
存外、こいつ等はしぶとかった。

ならば、遠慮しているだけ時間の無駄だ。

「うーん、やっぱ、流石に多すぎるな。」

ノワール。殲滅するから下がってる。」

俺はノワールを下がらせ、巻き込まれない様、促す。

「『形態付加： 救世主の盾 』！行くぜ！！』」

俺は空中へと舞い上がり、呪文を唱える。

「『悔い改めよ不浄の大地！！』」

罷り通るは大天使の光輪！！』」

俺の周りに四つの球が現れ四方に飛び、光で繋がり、輪の形になる。

「『光あれ！！幸あれ！！裁きあれ！！』」

輪が回転し球状になり、それを中心に、十字型に光球が四つ現れる。

背に現れた金髪、金色の神衣を着た仮面の男性、雷帝から声がかかる。

一度だけ、私の力を貸そう。救世の力を持つ少年よ。

雷球が現れ、手を翳すと、中から雷が十字に溢れだし、力が高まっ
て行く、

キイイイイイイイイイと風切り音が鳴り、

ドンー!!

と、手の中の雷球が広がり、中心の球に俺達を取り込まれる。

「天をも貫く我らの雷いかずち!!!!!!」

俺は力を放つ様に、手を？字に振り下ろす!!!!!!

「クロス・クルセイドリバーステリンジャー
『**聖逆十字反天雷烈波**』!!!!!!!!!!」

ドン!!!!!!!!!!オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!

直径10mの雷光が、残っていた天使達を一掃するように放たれ、
光線に当たらなかつた者は、迸つた余波の雷で焼きつき絶命した。

そして俺は、残っている11人に向け、言い放つ。

「後はお前らだけだぜ、『神様』!!!」

尻尾巻いて逃げんなら今だけだぜ?!」

と、あの爺、クルセウスが前に出て来た。

「余程驕りが過ぎる様じゃな、人間!!!!」

天使に勝つたからと言って良い気になるでないぞ!!!

天界の最高戦力は我等『神』じゃ!!!!!!」

ガシャガシャガシャ!!と武器を構える『神』達。

「そうか。悪いが、俺が復讐したいのは爺と幼女だけだ。

他は用が無いから無力化させて貰う。が、一つ良いかね?」

「この期に及んで、何を聞くと云うのですか、人間。」

と、弓を構えた碧髪の女性が答える。

・・・惜しいなあ。

ギリギリ熟女の域なんだよなあ。っと、違う違う。

「『神』つて12人じゃなかったのか?

一人足りない様だが大丈夫か?」

コッコッコ

「それは私の事ですか、人間よ。」

と、奥から歩く音と共に、女性が現れる。

薄褐色の肌と黄金の瞳、桜色の唇。

炎を思わせるような、軽くウェーブしたロングの髪と、鎧。

そして手には、炎の紋様が刻まれた大剣を持っている。

と、その女性を見たノワールが、愕然とした表情で呟く。

「ミカ、エル……。あなた、なの……。……？」

ノワールの言葉に、『ミカエル』と呼ばれた女性が一瞬眼を閉じ、答える。

「その通りです。お久しぶりです、ルシフェル様。
4000年ぶり、でしょうか。」

ミカエルの言葉に震えているノワールに、俺は聞く。

「ノワール。知り合いか？」

「……………かつて、私が…、大天使長だった頃の、私の副官よ。
そして、私が投獄される時に、

最後まで……………私を、信じていてくれた子よ。」

ああ、成程。そう言う事か。

「……………ねえ、シュウ。わ、私……………、その……………。」

こればかりは、しょうがないよなあ……………。

「はあ。…30分だ。それでケリを着ける。

和解するにしろ、殺すにしろ、な。」

「…ありがとう、愁磨。…待っててね。」

お礼を言いながら、ノワールは、服の裾をちんまりと掴んで来る。

…やめるツツ?!俺のシリアスが飛んでしまっ…

いや、待て、ノワール萌えええええ!!!!と、

シリアス、どっちが大切だ?決まっている!!

ギュッ。

「言っておくが、死ぬ事だけは許さんから…」。

「ええ、分かっているわ。…んっ…」。

「…ん、ふ…。…言って来い、頑張れ。」

そして帰って来い、ノワール。」

シリアスに決まってるんだろ？今は、な。

「∴ Yes、my master。そっちこそ、頑張ってるね。」

「ああ。『非対象者選択： ノワール ミカエル』」

広がれ、

『うんめいのうつくし

きせかい』

、

『

俺は、双方に邪魔が入らない様に、世界を塗り替える。

「さあ、11人の哀れな神達よ。『闘争の始まりだ』。」

「ほお？天界で固有結界を作れるとは、中々やるのう。

しかし、人間如きが作った世界が、神が作った世界に勝てるかの？

見せてやると良い、ヴラコニル。」

と、白短髪・茶眼の青年が前に出て来る。

「了解した、クルセウス殿。

喜べ人間。人間と神の違いを見せてやろう。」

こいつは、　　ダメだ。爺側だ。

「見る！これが僕の、『ミネグラキイ・フトセウ神の箱庭』だ！……！」

バン！！と床を叩くヴラコニル。だが、当然、なにも起こらない。

「……ブツ！！ククククク、で？

何時までそのカッコイイ姿でキメているつもりだ？」

ヴラコ（ryの今の姿は、まさに「イタイ」ってところだ。

「な、に？なぜ、なぜ僕の世界に変わらない？！

馬鹿な、こんな事有り得ない！！？」

「簡単なこつたる、神様。

お前如きの世界より、俺の世界の方が存在が上なんだよ！！」

「な、馬鹿な事を言うな？！

人間が作った世界如きに、

僕の世界が負けるはず無いだろうが！！？」

こいつは、こいつ等は気付いていない。

大前提から間違っている事に。

「お前等の間違いを訂正してやろう。

一つ、俺の世界は、『作った』『んじゃ無く、『創った』んだよ。

二つ、お前等は自身を『神』だと言っているが……違う、だろう？」

ニヤリ、とヴラコの顔を睥睨してやる。

「な、なにが違つと言つんだ?! 僕たちは『神』だぞ?!

全天使の頂点で
」

「そう、お前等は『神』の名を冠しているに過ぎん。

お前等は『神』じゃあ無い。

『神』の称号を自分たちで付けた、ただの強い『天使』なんだよ!
!?!
」

「そんな、違う!?! 僕は、僕はあああ?!」

ドッ、と膝を付くヴラコ。

そうだったと言う事を思い出したのだろう。

「ハイ、一人目終了」。『消える、天使』。
」

俺は『アトロポスの剣』を一閃させ、ヴラコを消し去る。

「 さあ。次は誰だ? 」

「 くっ!?!? こうなたら全員でかかるぞ! ! 」

グレゴリアス、アルトクラン、ダルタニアン、

カタルシス、エクリウル、プルネウラは囲んで叩け! !

アリアとウエルセウス、レイジアークは儼と遠距離から攻撃するん
じゃ! ! ! ! ! 」

「 引き受けた。 」 「 任せてよ。 」 「 ガツハツハ! 一丁、暴れるか! 」

「 ……しょうがないね。 」 「 ……参ります! ! ! 」 「 ……いつくよあー! ! ! 」

と、全く統一性が無い返事をしながらも、

既に陣を組んで俺を囲む前衛陣。

(・・・こいつ等は、居ても『問題無し』、か。

いや、一人だけ修正必要か。)

俺は、『答えを出す者』でとある答えを出す。

「『対象：』グレゴリアス『黒髪橙眼』 『アルトクラン青髪金眼』 『ダルタニアン金髪金眼』

『エクリウル緑髪藍眼』 『ブルネウラ桃髪桃眼』 結晶内へ一時封印』」

対象にした者の足元から、

封印用の闇色の結晶が生成され、飲みこんで行く。

これは、創造で創り上げた『絶対捕縛封印の棺』。

地獄で生成される闇結晶に、

『対象を封印する結果を持つ』を『付加』したモノ。

これから逃げられるのは『因果を超える速さを持っている』か、
『封印される結果を破壊する』事だけ。

「「「「な?!」「」「」「ほえ?」」

全員(?)が驚きの声を上げるが、

次の瞬間には結晶に取り込まれていた。

残っているのは後衛3人と、『カタルシス』と呼ばれた男。

深紫の髪で、前髪が胸まであり、

髪の切れ目からは、髪と同じ色の目が見える。

そして、手には鈍く光る、全てが黒い短剣。

「これはこれは驚いた。まさか『神』の称号を持つ者達に、
逃げる間すら与えず封印してしまうとは。

しかも、此処は『封印地獄』の様ですね。

人間が地獄を創れる程の力を持つなど、本来あり得ないのですが…。

ああ、そうか、そうですか。

貴方は『創造主神』の力を頂いたのですね？違いますか？

と、学者然とした『神』が言う。

ああ、やっぱりだ。『こいつが一番、面倒な相手』だ。

「よく分かったな、天使。

序に言ってやるなら、俺と契約した天使はノワール……

お前達が言う所の、『元大天使長ルシファー』だよ。」

俺の言葉に他の『神』は最早驚きの声すら上げれない。

が、こいつだけは、この『神』だけは、

嬉しそうに手を叩きながら叫んでいる。

俺が言うと、ピタ！とカタルシスが止まる。

そして、狂気の代わりに出て来たのは、純粋な殺気と畏怖。

「これはこれは……。その目的は資料にすらせず、

一人の時でさえ言葉にしていなはずなのですがねえ…。

本当に貴方は面白い。ですから、此处で死んでいただきますよ？」

チャキ、と短剣を構えるカタルシス。

こいつ相手に、余裕は出してられない。

そう、俺の勘が告げている。

ガシャ、と『アトロポスの剣』を構えながら最後の問いを聞く。

「どうしてお前みたいなのが『神』になれたか不思議でならないよ。

「簡単ですよ。品行方正に働き、

洗礼でそれなりの力を頂ければ『神』になんて誰にでもなれます。」

「洗礼？なんだそりゃ？」

「天使が自分の幼名を主神に捧げ、能力を貰う儀式の事ですよ。

序に教えて差し上げますが、これを『神契約』、

貴方の行ったのを『魂契約』と呼びます。

『神契約』で捧げるのは名前のみ、しかも自分の仮名ですから、

主神から頂ける力は『魂契約』より格段に落ちますが。」

と、長々と説明してくれた。

「実はお前、良い奴？」

「ククク、違いますよ。私の目的を知っているという事は、

その方法も知っているのでしょう？」

「ああ、知ってるさ。」

「なら聞く必要は無いでしょう。」

まあ、貴方のせいで使える魂が大分減ってしまいましたか、

問題ありません。それ以上の器の魂が二つも来たのですからね。」

こいつの用いる方法とは、

大勢の魂を使い、主神の力を掻き集める事。

さっきまで得心いかなかったが、

こいつあ説明したくれた『魂契約』で分かった。

「そろそろ我慢できなくなって来ましたので、

早く始めましょうか。

『神』大天使第4位、『死』のカタルシス。

獲物は『^{デスサイズ}死神の鎌』。」

「…魔人、『創造者』愁磨・P・S・織原。

獲物は…『創造物』かな。

所で、鎌じゃねえよ!!! ってツッコミはアリか?」

「この武器の姿は千差万別。私の得手が短剣と言っただけです。

それでは、ちゃっちゃと死んでください！……！」

「ハ！相手にはなってるよ！！　まあ、適当になあ……！」

ドンツ！！と全力で俺が突っ込んで行くが、

奴は魔法で俺に牽制を入れてくる。

短剣だから接近戦主体の奴だと思っていたから、

不意打ちを食らった気分だ、つと……！！

「『敵の攻撃消去』……！！『消去』……！！『消去』　おおお……！！」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド……！！

俺はアトロポスで何度も魔法を消し、

『ジャッカル』で幾度となく撃ち落とす。

なぜ、『アトロポスの剣』を何度も使えるかと言つと、

『形態付加』でアーカードの力を、俺自身ではなく、

『アトロポスの剣』に付加したからだ。

これにより、『アトロポスの剣』は、

アーカードの魂 3 , 4 2 4 , 8 6 7と同じ数使える様になった。

しかも、先程倒した天使達や、過去倒した賞金稼ぎの魂も喰っているので、

合計した魂の数は、1000万を超える!!!!

「ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ……………」。

戦闘開始してからの奴は、詠唱とは別に、何か言っている。

不味いな。奴の武器の能力は『概念を殺す事』。

つまり、奴に俺の『アトロポスの剣』が何をしているか分かれると、

アトロポスの力を相打ちにされてしまうのだ。

まあ、良くて相殺、なのだが。

「『ノルニルの旋律』^{うた} 起動」

それでも俺は、その前に決着を着ける為、『死天使』の能力をつかう。

これは、『未来を見る力』。だが、見えるのは自分以外の事象なので、

あくまで戦闘用だ。(詳しくは違うが。)

高速戦闘では、『答えを出す者』よりこちらの方が都合が良い!!

「うおおおおおおおおお!!!!」

俺は叫び、魔法を連発しているカタルシスに突っ込んで行き、

「『カタルシスの存在、消去』 ツッ！！！！！」

『アトロポスの剣』を、振り下ろす！！

「チッ！ 『魔人の剣』を殺しなさい『デスサイス死神の鎌』 …！！！」

カタルシスも『死神の鎌』の能力を解放し、

俺の剣を受けるが、どちらもなにも起きない。

「どつやら、貴方の剣も、私の剣と同じ様ですね！！？」

「一緒にするんじゃないよ！！『敵対天使の 剣ツメ消去』！！！！！」

「ならば、『槍になりなさい』！！！！！」

と、短剣を槍に変えて受けようとするが……

「無駄だ！！！！！」

「な、ガハああああ!!!」

『死神の鎌』を消し去った『アトロポスの剣』は、
そのままカタルシスを叩き切る。

「グブツ! な、なぜ、ですか…?」

貴方が消そうとしたのは『剣』では無いのですか……?」

口と体から血を噴き出しながらカタルシスが聞いてくる。

「冥土の土産だ、教えてやる。」

俺が消したのは『剣』じゃなく、お前の『攻撃方法』だ。

ついでに言うなら俺が消していたのは、そのモノの『因果』だ。」

「フ、フフフ、ガハ!!! ゲフ!? ガハ、ガハ!!!」

フフフフ、なんと出鱈目な。

私では手も足も出ないのは当然ですか……。

では…、ああ、そうだ。もう一つ、よろしいでしょうか…？

「まあ、いいぜ。俺に可能な事ならやってやらんでも無い。」

「貴方の…居た、地獄の一階層上の、『無血地獄』。

そこに、……私と同意見の者、が…居を構えています……。」

『無血地獄』。『血が流れる事の無い地獄』。

此処の住人は、血を見ないと生きていけない様な者達。

その罪の重さは、推して知るべしって所だ。

「ok、そいつ等を皆殺しにすりゃいいんだな？」

「ええ。私と同罪なのに…、

私だけ死んでしまう…のは、気に入りませんかね。」

「ああ。全員お前と一緒に地獄に送ってやるから、安心しろ。」

「フッフ、天界人は、死んだら魂ごと消えるので…、

それは無理ですね……。」

「分かってるよ。皮肉だ。」

「ああ……。貴方と話しているのは、存外…、楽しかったですよ。それでは…、さようなら……。」「。

最後に呟き、それまでの死神めいた表情が嘘のように綺麗に笑い、パシユウ、と光の粉になって散り、消ようとす。

俺はその空間に『停止』をかけ、消滅を防ぐ。

「フン、『神』の恥さらしが!!」

主神様に弓引くから、人間なぞに殺されるのじゃ!!」

そう、クルセウスが叫ぶ。奴を、恥さらしと呼ぶ。

「役立た「黙れ」　　?!」

カタルシスはそれを取り除き、天界をあるべき姿に戻そうとしていた。

問題なのが『神』中最強たるクルセウスの排除と、

賛同する天使・天界人の排除。

軍の『神』以外の5割以上が、

クルセウス側（この神殿に居た天使全員）だと言っから驚きだ

そこでカタルシスは地獄の犯罪者を使い、賛同する者を殺し、

『魂契約』により強大な力を得、クルセウスを倒そうとしていたのだ。

これを俺が知っている事を、あいつは知っていた。

それでも、最後まで言わなかった。

こう言う信念を持つ奴は、

きちんとした仲間が居れば、道を踏み外したりしない。

故に、あいつの手伝いをしたいと思った。

そして、その為にも、俺の目的の為にも

「な、なにを言っておる?!」

あやつと貴様は敵同士じゃろうが!!それを何故庇う?!」

「お前に教える必要はない。もう良いから、口を開くな。

悲鳴以外で口を開くな。貴様に懺悔などさせない。

痛みを植え付けてから、更なる痛みがある事を教えてやろう。」

「クツ?!ほざくな人間がああ!!!」『神の雷』!!!!!!!」

奴が腕を振り下ろすと、俺の上から雷が落ちてくる。

俺はそれを奴への突進で躲す

が、雷が俺の上から座標を変えずに落ちて来た。

煙の中で、影が笑う。

「な……、に……?」

「クククク、そのセリフは最っつっ高だ。

しかし訂正するなら、お前の雷は『神の雷の能力』じゃない。

神から貰った、『雷の能力』だ。」

そして、煙から影が出てくる。

出て来たのは俺と、ライトニングイーター雷喰蟲のルル。

「そしてこいつは、

本当に『神の雷の能力』を得た雷帝をも喰らった魔物だ。」

「そ、そんな馬鹿な、有り得ん……!!」

僕の雷を受けて死んでいないだど?!?!?!」

「なにが馬鹿か。今言ったらうが。」

お前の偽の神の雷如きでなど死なないと。

さあ、断罪の時間だ　　の前に。

お嬢さん方、少々お待ち頂けますかね？」

ガシガシィ！！と

振り下ろされた2mはあろう鉄扇と、糸で作られた大剣を受け止め、
使い手の残っていた『神』の二人に言う。

「チィィ！！切り裂け、『神虎』！！（パチン！）」

幼女が指を鳴らすと、四体の虎の霊が現れ、

俺の四肢に噛みつき食い干切ろうとする。

恐らくこいつ等が、あの時俺の四肢をぶっ飛ばした奴等だろう。

あの時は認識すらできなかったモノが、今の俺の前では、無力。

「絡め取り引き裂きなさい、『電糸』！」

糸使いのレイジアークと呼ばれた、氷色の髪をショートボブの少女が、

俺の瞳と同じ色のつり目で俺を睨み、大剣にしていた糸を俺の全身に絡みつけ、

引き裂こうと渾身の力を込め、引っ張る。

「『対象：『アリア』』『レイジアーク』結晶内へ封印。』」

俺はそれを気にした風も無く、二人を結晶に閉じ込める。

「しまった?!?!」

「くっ?!?!?」

気付いた二人が逃げようとするが、そんなスピードでは足りない。

「シッ!?!」

と、俺が僅かに止まった隙に矢を放って来る碧髪碧眼の女性。

「無駄だ！『対象：『ウエルセウス』結界内へ封印』！！」

「あらあらあゝ。」

さっきの鋭さは何処へやら、間延びした声を残し、封印された。

「『アリア以外の結晶内の外界可視・可聴を無効』。」

俺は二人が入った事を確認すると、

幼女以外の『神』に確認できない様に結晶内の視界を塗潰し、

音を認識できなくする。

「さ、これでもう此処で起こる事に手出し出来るのは、俺とお前だけだ。」

非常に残念なのは、時間が無いから手早くしなければいけない事だ。

戦闘開始から10分は経っている。

ノワールの方は、もしかしたらもう終わっているかもしれない。

「まだだ!!まだ僕はあああああ!!!!」

俺に、何度も何度も雷を落としてくるが、全てルリが喰らい尽くす。

「なぜだ、なぜ当たらないのだ?!」

「…ああ。ルリが喰うのは魔力そのものだからな。

魔力ごと無くなるんだから能力とか関係ないだろ?

『断罪の磔』(サバト・オブ・クリスト)。」

ドオン!と地面から十字架が出て、クルセウスを鎖で磔にする。

「主神じゃないが、本物の『神』と

同じ様に処刑されるんだ。光栄に思え。」

ドン、ドン、ドン、ドン、ドンドン!!カシン、ドンドンドン!!

両手足と脇腹に、『ジャツカル』で13mm炸裂鉄鋼弾をぶち込む。

「がああああああああああああああああああああああ
あ！……！」

傷を再生させ、精神を治し、幾度も幾度も撃ち抜き、マガジンを
変える。

ドン、ドン、ドン……カシン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン……！

カシン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、
ドン……！

ドン、ドン、ドン……カシン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン……！

カシン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、
ドン……！

ドンドンドンドン……カシン、ドンドンドンドンドンドン……

繰り返す度、5回。

計6回撃ち込んだ所で、貯めていたマガジンと弾が無くなった。

……まだ、銃弾の放たれる音が耳に響いている。

クルセウスを見ると、荒い息をつき、呆然とした状態になっている。

自分の状態が分からないのだろう。……少々やり過ぎた。

「さて、爺。『人間を迫害しないで、改心する』と約束するなら、それを外してやっても良いぞ。」

「……ほざけ、人間風情が。調子に、乗るでないぞ。」

……純粹に驚いた。まさか、此処までされて意見を変えないとは。

しかし、こいつの思想は元老院の爺共と同じだ。故に、こいつは排

除する。

「そうか。ならいいや。『クルセウスの力の一切を剥奪』。

『開け、地獄の門』。」

爺がなにも出来ない様に、力を人間と同じにし、

本来の『地獄』への門を創造する。

「な、これは?!や、やめろ!!」

ワシは神じゃぞ!!こんな事をしてただで済むと・・・!!」

「安心しろ。お前はもうただの人間の爺だ。」

「な、なに?!そ、そんな訳があるか!!」

「ククク、そんな事があるんだよ。」

「じゃあな。閻魔様と仲良くやんな。」

「ま、待て!!!い、今なら許さんでもない!!!」

「じゃ、じゃからやめろ!!」

「残念 お前、俺の目的に邪魔過ぎるんだよね。」

「な、何を言っているんじゃない？」

「お前に教える必要はないな。じゃあな！！」

ドゴオ！！と、磔にしたまま、十字架ごと地獄に蹴り飛ばす。

「に、人間があ！！覚えてい」「もうお前の出番は終わってるんだよ！！」

バン！！と扉を閉める。

さて。残っているのは少女だが、どう言いつ返事を寄越すやら。

「『アリアを封印している結晶を解除』。」

結晶の前まで行き、封印を解除すると、中から少女がドサ、と倒れて来た。

「おおっと。」

…気絶して「いやあ！！離してええええええ！！！！」……ないな。」

（流石にあの光景見たらこうなるわな。

って、ジジイがおかしいのか。）

俺は幼女に精神・体力回復魔法をかけ、爺と同じ質問をする。

「さて幼女。

俺はお前にバラバラにされた経験があり、ぶっちゃけ言つと

お（18禁だよ！！） したい所なんだが「ごめんなさい！

！！」

「違うの！あれは思わずやっちゃったの！！

クルセウス様から色々言われてたから、体が勝手に……！！」

ふむ、真実4 嘘2 恐怖4 って所だな。

『勝手に』は本当で、『クルセウス云々』 っるのが半分嘘だな。

ってか、口調が……。そこらへんも爺の指示だろうな。

「まあ、嘘付いているのは見逃してやろう。

さて、お前にも質問に答えて貰おう。

『人間を迫害しないで、改心する』と約束するか？しん

「します！！約束します！！だから、だから……！！！！」

「よろしい。が、それではダメだ。

きちんと、自分の言葉で言っんだ。」

「あ……。わ、私は、もう二度と、人間さんを、

虐めたりしません……うううう……。」

よし、これで強制執行の条件は完了したが……………。

(うっわ ……なんだ、これ？

この子態度変わり過ぎじゃね？

『答えを出す者』で

あー、そう言う事か……………。

第12話 魔人の復讐は失敗？するようです（後書き）

愁「今度は疑問で言おうか。どうしてこうなった？」

作「おかしいんだ。」

最初は、幼女地獄に落として終わりになるか、

幼女奴 化ENDの筈だったんだが……。」

愁「またか、また勢いなのか……。」

作「俺、細かい描写のキャラって、殺したくない派なのよね。」

主人公サイドに入れて殺さなくて済むなら、

茶番にしても生き残らせる。

寿命で死ぬのはいいんだけどね。」

愁「何その変な拘り。」

作「女の子に酷い事出来なかったって言うのが半分。」

愁「半分じゃないだろ?! 主な理由それだろ、お前!！」

作「男なら！！女性は愛できるものだ！！！」

愁「誇らしげに語ってんじゃねえええええ！！！」

作「次回、ノワールとミカエル！！」

愁「二人を結ぶ、絡まった過去の行方は？！」

作「あ、人物紹介通り、ノワールさんも……。」

愁「更新は……明日か明後日ですね。」（適当

作「それではこの辺で！！！」

作&愁「アリーヴェデルチ！！！」

第13話 黒翼は過去と戦うようです(前書き)

こんばんは、aitleneです。

ノワ「ロリコンは、ダメよ。」

作「愁磨君は、冤罪により殉死される予定かも。南無。」

ノワ「正確に言くと、精神的に大人のロリは構わないわ。

恋愛について分かっているから。だから、エヴァは良いのよ。」

作「一応言うけど、愁磨のは父性です!!保護欲なんです!!」

ノワ「分かってるわ。でも、シユウを めると凄く良いのよ……。」

フフフフ……。」

作「愁磨……!!逃げて……!!超逃げて……!!」

ノワ「剣の舞姫様。感想、誠にありがとうございます。」

作「私の心の支えになっております。真剣で感謝です。

んじゃ、報告終わったので。」

作&mp;ノワ「それでは、どうぞ……!!」

第13話 黒翼は過去と戦つよつです

Side ノワール@14分前

「ん、ふ……。……言つて来い、頑張れ。」

そして帰つて来い、ノワール。」

「Yes、my master。そつちこそ、頑張つてね。」

「ああ。『非対象者選択：ノワール ミカエル』」

「広がれ、

しきせかい』」

『うんめいのうつく

』」

『

シユウが唱えると、私とミカエル以外の天使達を、その世界に飲み込んで行った。

「随分柔らかな表情をする様になりましたね、ルシフェル様。

以前の貴方は、そんな表情をすることは無かった……。決して……。

「
ミカエルから、皮肉と喜びと、悲しみが混ざった言葉が、私にかけられる。」

447

「……ええ、そうね。」

私が笑えるようになったのは、シユウ……、愁磨のお陰よ。

今はエヴァって言う妹もいるけどね。」

あのまま地獄に居たのなら、私の心はいつか壊れていたでしょうね。

でも、あの人が来てくれた。

あの人は、とても脆い体で、私の所に来てくれた。

「……本当に、貴方は変わられた。

かつての貴方は凜々しく、気高く、刀剣の如く鋭かった。」

「軽蔑する、かしら……?」

「……いいえ、まさか。

私の貴方への念は変わりません。貴方は、常に私の目標です。

幾ら乙女の様になろうとも、先程の武、全く衰えを感じませんでした。

いえ、更に鋭くすらなっていました。」

ミカエルが、私を褒めてくれる。この子は、昔と変わらないわね……。

「ありがとう。素直にうれしいわ。」

「貴方に礼などされると、変な気分です……。」

昔は幾ら褒めようと、決まって

『ああ。修練の賜物だ。お前も人の事を褒めるより、自分を磨け。』

でしたから、褒め甲斐がありませんでした……。」

そ、そうだったかしら？／＼／＼そう言われればそんな気も……。

「そして、これが私の賜物です。」

そう言って胸に置かれた指の先に光っていたのは

「『六対翼の章』……。」

かつて、私がそうだった頃、私を象徴して作られた、最強の証。

「『神』の唯一上の位、『大天使長の証』です。

貴方が投獄されてから1000年、

この証は主にクルセウスの胸に掲げられていましたが、

私が彼を負かし、以来3000年、私がこうして守っております。

「そう……。所で、他の子たち、は……………」

他の子と言うのは、ウリエル、ラファエル、ガブリエルの三人の事。

皆、私の副官だった子達。ミカエルに劣らない力を持った子達。

「生きておりますよ？最も、三人は貴方に会えないでしょうね…………」

生きていたのなら、良かったわ…………。でも…………。

「会えないって、どう言う事？」

「私達は、貴方の為に、何も出来なかった自分が許せなかったんです。」

私は軍の上まで登り詰め、貴方を開放しようと思いました。

しかし、三人は待っていられないと言い、地獄に行きましたが…………。

「

「……ええ、そこからは予想出来るわ。」

私の封印場所は軍の最高機密だったから、

あの子達は当ても無く探していた所を捕まった、と言う事ね？」

「ええ、そうです。しかも、一度や二度ではなかったのです。」

1000年の独房入りの罰を何度も受け、解ける度に貴方を探しに行きました。」

皆が遂に『封印地獄』送りになったのは、3400年前。」

私が大天使長の位に就く、僅か400年前でした……。」

あの子達は……いつもいつも無茶をして……。」

「ねえ、ミカエル。その場所は分かるのかしら？」

「勿論です。私が軍で分からなかったのは、貴方の解放手段くらいです。」

「フフフ、ごめんなさいね。それで」

「

「教える訳にはいかない。」

今までの穏やかな雰囲気を消し、殺気を私に向けてくるミカエル。

「そうね……。そうだったわね、ミカエル。」

貴方は何時も真っ直ぐな意見しか言わなかったわね。

「でも、ごめんね。無理にでも聞かせて貰うわ。」

私の言葉に、ミカエルは更に殺気を強くする。

「……あまり私を見縊らないで欲しい。」

私は貴方と違いこの4000年、常に技を磨き、
武を高め、精神を研ぎ澄ませて来た。

4000年前とは違うのだ、ルシフェル。

貴方はもう、大天使長では無い!!!

大天使長は、この私、ミカエルだ!!!!!!」

ゴウ!!!

とミカエルの背中から白炎の翼が三対生え、頭上に炎の輪が浮かぶ。

ガシャ、と大剣を横にし、突進する様に、眼前に構えるミカエル。

「武器を構えろ、侵入者ルシフェル!!」

貴方の伝説を今日、終わらせてやろう!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュン、ピタ!!

と私は槍剣を回し、穂先を下に向け、構える。

「ねえ、ミカエル。変わらないモノって、無いのかしらね……。」

バサア！

と全天使中、唯一私だけが持つ、『六対の黒翼』を広げる。

「……貴方が居なくなった天界は、全てが変わってしまった。

変わらないのは、この証だけだ……！！」

天翼章と、もう一つ、何かが光った。

キーン！と私の頭上に、闇色の輪が現れる。

「ミカエル……。本当に戦うしかないの……？」

「くどい……！……戦う気が無ければ、来なければ良かった……！！」

ミカエルは、構えた剣の先を僅かに下げる。

……昔からそうだった。

動揺したりすると構えた剣が、

どんな構えであれ、僅かに下がるところ。

「もう、戻れないわよ。」

再度、剣が揺れる。

「『大天使長』、『炎』のミカエル！！

信ずるモノは我が信念と、我が炎の魔剣『レーヴァンティン』！！
」

そう。なら、私も、もう容赦しないわ……………！！！！

「『高貴な黒き翼』、ノワール・プテリユクス・エーデル・織原！！

私は、愁磨と、私と、エヴァと、……………」

一瞬、言うか迷ったけれど、自分の信じる者を口に出す。

「どづしたのミカエル!!! 貴方の4000年の修練はその程度なの?!!」

キインギン! キインキインキインギン! ギイン! キインキインギイン!

「なめるなああああああああああああああああああ!!!」

重ねる毎に、段々ミカエルが、私の槍剣を捌けなくなっていく。

が、これは彼女本来の戦闘スタイルで無いのだから、当然。

「チイイ!!!」

ガイイイン!!! と大剣で私の槍剣を無理矢理弾き、距離をとる。

「貴様の余裕も此処までだ、ルシフェル!!」

『燃え盛れ炎神!!』
ヴォーン・ファイオ
爆炎剣　!!!」

ゴオウ!!とミカエルの剣『レーヴァンティン』から炎が噴き出し、技名通り、巨大な炎の大剣になる。

副官時代の彼女の全力が5m程、しかも全く集束出来ていなかったのに比べ、

今の大剣の大きさは15m以上あり、炎は揺らぎ一つ見受けられない。

「奥義!! 『武帝焰舞』　!!!」

剣の大きさを活かした、完全に間合いの外からの攻撃。

しかし、剣自体の重さは変わっていないため、

その一撃は音速を超えたままで襲ってくる。

「『闇帝旋風』！！！！」

それを、槍剣を円形の盾としか認識できない速さで回し、受け流す。しかし、ミカエルも負けじと攻め立ててくる。

袈裟斬を受け流せば、放った力と受け流された力を利用し、逆袈裟を。

右薙を受け流すと、同様に左斬上を放って来る。

闇の風と王の炎が幾度も幾度もぶつかり合い、それは回を重ねる毎に強さを増して行く。

これが、彼女本来の戦い方。

強大な力と、経験に裏打ちされた確かな技術、炎の熱で相手を焼き切る。

圧倒的な戦力で相手を押し潰す、速く、巧く、重い剣。
単純明快、だから強い。

「はあああああああああ！！！！」

ザン！！

「でも、私には届かない！！！！」

「私の炎を切るのなんて、貴方くらいだ！！」

『炎神召喚！ 地裂爆炎衝 マグナード ！！！！』

ドン！とレーヴァンティンを突き刺した瞬間、私の足元から、大気すら焦がす炎が出てくる。

「無駄よ！！ 『拔え、天槍』 ！！！！」

槍剣を目の前で一闪すると、出て来る筈だった炎は掻き消える。

最早見えなくなった攻撃を、音だけで防ぐ。

「まずい……!!!!」

「どうしました?!やはり、今の貴方では最早私に勝てないと悟りましたか?!」

その通りだ。今のままでは、ミカエルの攻撃を受けてしまう。

そうになったら……シユウが、怪我をしている私を見たら、

ミカエルが死んでしまう

!!!?

「……いい加減、遊ぶのは辞めようか。」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

「 ツツツ!!?!?!? 」

私が魔力を全て解放すると、ミカエルは攻撃の一切を止め私と距離を取る。

「ミカエル。確かにお前は強くなった。昔の私と比べても勝る力だ。だが、忘れていた様だな。私かなぜ、最強であったかを。」

「な、……に……? 」

「『魔』と『聖』。相反する力を使ったからこそ、私は最強だったのだ。」

尤も、お前と居た時は、本気を見せた事は無かったな。」

「本気、だと……? 今まででは、全力で無かったとでも言うのか?! 」

私は、その言葉を否定する。

「それは違うな。」

この技は『咸卦法』と『闇の魔法』と呼ばれる方法に酷似している。
相反する魔力を合わせ、自らに取り込む。

この力で強化される力は、『魔』と『聖』両方の適正によって決まる。

「 暁の明星『最大顕現』

ダークル―チェデイトロメール
暗逆併明」

コオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

私の周りを、白と黒の風が覆い、すぐに消え、私が出てくる。

「【さあ、行くわよ、ミカエル。】」

その姿は、天使としては真に異様。

投擲する！！

「【奥義 カインエクソガンス 夢無明亦無 !!!!!!!】」

私の奥義は、強化された力を『投擲』を放つ為だけに使い、放つと同時に『暗逆併明』のエネルギーに魔力を上乗せして発射する事。

光速に迫る速さを持ち、

暗逆併明 + の魔力を纏った双槍の総エネルギー量は、

太陽など、簡単に吹き飛ばす!!!!

ズッ

と技がぶつかり合う音が聞こえた後、

「ミ、ミカエル！もう止めましょう！！これ以上は……」

「うるさい！！私は、貴方に勝たねばいかんだ！！！」

レーヴァンティンを振り上げ、私に襲いかかって来る。

私は『明星の彗星』を取り、それを受け止める。

「な、なぜそこまでするの？！こんな事をしなくてもあの子達は

」

「黙れ！！私が……私が助けたかったのは、あいつ等と、貴方だった！！！」

ガイン！！

ガイン！！

ガイン！！

ガイン！！

「私は、助けたくて！！貴方に、ただ認めて貰いたくて、貴方の後ろで無く、横に並びたくて、力を磨いた！！！」

1000年掛け、ようやく貴方と同じ地位に就いた！

3000年掛け、ようやく皆を助ける準備が整った！！！！

なのに、何故！！何故貴方が此処に居る！！！！？」

「ミカ、エル……………」

ガイン！

ガイン！

ガイン！

「私の……………」

ガインインインイン ヒュン ヒュン ヒュン

ドス！

ドス！

「私の、してきた事が…………無駄ではないか……………」

私達の武器が飛び、ミカエルが膝を付き、

目の端に溜まっていた涙を流す。

「…………ミカエル。」

私も膝を付き、ミカエルをそつと抱き締める。

「貴方のして来た事は無駄じゃないわ。」

…………私を助けてくれたのは、貴方では無いけれど。

貴方のお陰で、あの子達を助けられる。

それが、不満なのかしら？」

「（フルフルフル）そんな訳、無いです……………。でも、それでも、私は…………。」

「…………ありがとう。それだけで、私はもう十分よ。」

と、その時不意に、パリイーンと割れる音がした。

「さあ、あちらも終わった所だし、行きましょう。」

「あ…………。…やはり、ダメです。だって貴方達は……………え？」

ミカエルが困惑した表情をする。

そうでしょう。死んだと思っていた人たちがゾロゾロと現れたんですから。

「え？あ、あの、どうして……………?」

「その説明は後でまとめてするから。さ、行きましょ。

ああ、そうそう。私はもうルシフェルでは無いわ。

だから、ノワールと呼んで頂戴。」

ミカエルを置いて、私は向かう。

シュウに、説明して貰う為に。

「よ、ノワール。終わったんだな。」

「ええ、一応決着は着いたわ。

でも、今からまた始まるのよ。

「

「……デスヨネー！」

「で？何故その子が貴方に引っ付いているのかしら？」

仇であった筈の少女（シユウ曰く幼女）が生きていて、

何故、見た目通りの弱々しく、

縋るようにシユウの足に抱き付いているのかを。

第13話 黒翼は過去と戦うようです（後書き）

作「人とは、分かり合うモノです。作者的に。」

ノワ「まあ、死なないに越した事は無いわね。」

作「原作時期はどうなるか分かりませんがね。ネギサイドは度が過ぎる。」

ノワ「あの子達なりに頑張ってはいるんでしょうけどね。」

精神的方向が中学生のまま、と言うのが、ね。」

作「仲間？好きな人？がマジで死にそんな所見てるのに・・・。

ネギよ。幾度も死にそうになったのに、何故そんなにお気楽なのだ？」

ノワ「まあ、まだ原作からは遠いからあまり関係無いわね。」

作「そうでもない。オリジナルのネタが無いからキンクリの可能性あるツス。」

ノワ「この駄作者・・・。」

作「さて、次回は！『どうした、幼女神?!』」

ノワ「要するに、ご都合主義の説明会です、ご注意ください。」

作「多分、同時に新たに出て来た能力設定も上げるかな？です。」

ノワ「二日後、会って頂ける方は、また会いましょう。」

作「愁磨マジで出なかった……。主人公エ

そ、それでは……！」

作&ノワ「アリーヴェデルチ……！」

第14話 時はメイドインヘブンの時期のようです(前書き)

こんばんわ、aitleneです。

作「タイトル通り?、時が加速します。中盤から。」

愁「何となく書きたい事があったので、

ちまちま歴史介入?しながら行きます。」

ノワ「紹介はこんな所で。それでは、恒例の。」

作「zero様、剣の舞姫様、代給品様、たくみですすよw様!!」

愁「感想ありがとうございます!!」

「ご質問のある方も、どしどしどうぞー!!」

ノワ「報告は・・・こんなものね。それでは!」

作& amp ;愁& amp ;ノワ「「「ペルファボーレン!!!!」」」

第14話 時はメイドインヘブンの時期のようです

Side 愁磨

「何か、言い訳はあるかしら？ シュウ。」

「ルシフェ……、の、ノワール様。何もそこまで」

「ミカエル、黙ってなさい。これは私達の問題よ……！」

「ノワール。ミカエルに当るなよ。」

「貴方が悪いのよ?! 大体……!!」

「パパを、いじめちゃ、メ……なの。」

「私達はまだぞ、そこまで行ってないわ!！」

それは、今から15分ほど前に遡る。

「貴方が、本当にクルセウスを倒してくれたの？」

……その様子からは、とても想像出来ないんだけど？」

そう言って訝しげに見て来るのは、

緑色の髪と藍色の瞳の高校生くらいの少女、

『風』のエクリウル。

「悪かったな。マジで俺が倒したんだよ。」

尤も、殺さずに力奪って、閻魔の所に送ったがな。」

「君は酷い事するねえ。」

それって、天使にとっては何より屈辱的な事なんだよ?」

俺の後ろから言っけて来る優男。

前髪をファサアとやっているこのナルシストっぽい

青髪金眼は、『魅』のアルトクラン。

「アルトクラン。シユウマはそんな事承知でやっている。」
と、復活したカタルシス。

名前呼びなのは、『気に入ったから。』だそうだ。

「そんな事はどうでもよいだろう。」

「この者をどうするのだ?」

黒髪橙眼の青年『地』のグレゴリアスが、俺を睨む。

「そんな事いってもお。どおするんです?ダルタニアン?」

間延びした声は碧の髪と眼の、

巨乳若奥様風の女性、『水』のウエルセウス。

「……………どうするも無かるう。我らが東になっても勝てんよ。」

と、金髪金眼の武将然とした壮年、『武』のダルタニアン。

「そーだよ?クルセウスのおじ ちゃんと戦って無傷の人に、

私たちが勝てる訳無いよ〜。」

桃色の髪と眼の小学生くらいの子は、『花』のプルネウラ。

「そんな事より、確認する事があります。」

どうしてアリアが敵の貴方にしがみ付いているのですか？」

氷髪の、灰色つり目の少女、レイジークが聞いて来る。

「俺だつてよく分からんよ……………」

「そんなこと言われても私たちだつて分かんないよ！」

「シュウマ。私が死んだ後から説明してくれるかい？」

「ああ。実は　　かくかくしかじか。」

俺はあの後の事をそのまま伝えた。

「……………お前のせいだな。」

「……………。反論できない……………」

「……ふむ。違いますね。」

「どうやら、クルセウスが洗脳魔法を掛けていた様ですね。」

「ふえ？同じ『神』にそんなこと出来るの？」

「まあ、可能だねえ。」

「尤も、日に二、三回は掛けないといけないだろうけどねえ。」

「それが解けただけなのね。今までのアリアが嘘みただよ。」

「そう。今のアリアは借りて来た猫みたいに大人しい。」

「表情はあるんだが、無口になっている。」

「性格悪かった方がどんなに助かった事か。」

「洗脳が解けた事は喜ぶべきだろう。」

「それよりまずはアリアを此方に引き渡して貰おうか。」

「いや、それが出来たら苦労は……（ギョッ）……あああああああ。」

「グレゴ（ryの言葉に、俺の服を更に強く握るアリア。」

「どうしてこうなった。マジでどうしてこうなったorz」

「…いや……………」

「アリア。何故、その男から離れないのですか？」

さっきの説明を聞く限りでは、どうも……………」

「…この人は、私を助けてくれたの。でも、私が悪い事、したの。」

「要領を得ないわねえ。困ったわあ。」

「ハア…。アリア。詳しく話してくれるか？」

「…うん。あのね」

アリアの話は、あのトラックに轢かれた所から始まった。

あの時のアリアは洗脳が半分くらい解けていて、

自分を助けた俺を探しに行って、謝ろうとしたのだ。

しかし、俺を見つけたは良いが、目の前にクルセウスが居たのが不味かった。

クルセウスから洗脳魔法

では無く、別人格を植え付け体に乗っ取る魔法を掛けられ、

あの性悪モード（黒アリアする）になってしまったのだ。

（この時、『アリアの意識』は外を認識出来る。）

だが、既に途中まで言ってしまったので、

仕方なく黒アリアは俺に礼を言い、去ろうとした、との事だ。

そしてさつき。一番最初は黒アリアが1/3残っていたのだが、

強制執行の問答をする時に、完璧に意識が戻ったのだそうだ。

要するに

「轢かれる時に付けて貰い、クルセウスの呪縛から解放してくれた。

二回も貴方を助けてくれたシュウマに感謝している、と。

そう言う事ですね?」

「うん。パパは……とっても強いのだから、スキ。」

「ハハハハハハ……。ああー、そうかい。」

と、ところで、なんでパパ?」

「わたしを、いつも、助けてくれるのだから、パパ。」

「……そう言うのって普通は王子様とかでは無いのですか?」

余計な事を言うな!! レイジーク!!!

「……うんとね、おじさまは、かっこいいの。」

でも、パパはかっこよくて安心するの。だから、パパ。」

「はっはっは。そうかそうか。俺をパパと呼んでくれるか。」

子供、というか大抵の奴は、俺の事いっつも女としか見ないから、

小さい子が俺を男扱いしてくれるのは嬉しい。

「最早納得している???!?!」

「だって、なあ?」

「分かるよ!!」 「…理解できない事も無い。」

「仕様の無い事だな。」 「ええ、分かりますとも。」

俺の疑問に、男全員が理解を表してくれる。

「男ども!!何で敵と意気投合してんのよ?!」

「おいおい。こんな小さな、

自分にこんなにも愛を露わにしてくれている女の子を、

かつての敵だからと、仇だからと言って引き剥がすのか?!

元凶が爺で、利用されていただけの女の子を!!?」

「それはちょっと美しくないんじゃないかい?」

「……子は、大切にすべきだ。」

「はっはっはっはっは!!!!」

「それにしても、あのアリア殿が、

パライイイインと言う音と共に世界が砕ける。

そこには、見るも無残になった聖堂と、ボロボロになったミカエルと、

此方を向くノワールがいた。

「よ、ノワール。終わったんだな。」

「ええ、一応決着は着いたわ。でも、今からまた始まるのよ。」

「……………デスヨネー！。」

「で？何故その子が貴方に引っ付いているのかしら？」

ノワールがアリアを指差す。

「……………パパあ。あの人なんかこわい……………。」

「パ……………？私の耳がオカシクナッタノカシラ？」

もう一度言ってくれるかしら？」

ノワールの目のハイライトが段々消えていく。そして

「ば、パパあああああ。」

「ええ、やっぱりそうね。 シュウ。」

なんで貴方がパパと呼ばれてるのかしら？」

「あー、話すと長いんだが……。」

「ああ、なら良いわ。」

そして、冒頭に繋がった。

「何か、言い訳はあるかしら？ シュウ。」

ガシャ、と『明星の彗星』を構えるノワールさん。

「ルシフェ……、の、ノワール様。何もそこまで」

「ミカエル、黙ってなさい。これは私達の問題よ……！」

「ノワール。ミカエルに当るなよ。」

「貴方が悪いのよ?! 大体……!!」

「……ば、パパをいじめちゃ、メなの……!!」

「私達はまだぞ、そこまで行ってないわノノノ……!!」

「ノワール……! 子供の前で何てこと言うんだ……!!」

「貴方は一体どうしたいの?!」

不味い。カオスになって来た。

「とりあえずノワール。説明聞いてからにしてくれないか?」

「……聞きましよう。」

説明中
これこれしかじかかくかくつまつま

「なるほどね……。仕方無い事ではあるわねえ……。」

「それでだな。この子、どうしたらいいと思うっ？」

「私達に着いて来ても、ちょっとねえ。」

「でも……。離れるのは……。」

「……。そう、なのよね。」

「 temple 設定だから忘れがちだが、天界人は不老なのだ。」

天界人は遙か昔から地獄勢と戦い続けていて、

最初から居た天界人は、もう数える程居ない。

天界人は子を為す事が出来ないのだ。

だから、人間を引き入れる。

つまり、今居る天界人の9割以上が元は人間。

アリアだってその一人なのだ。

アリアの見た目はどう高く見積もっても幼稚園児程度。

そんな若さで、アリアは死んだのだ。

両親の事など覚えていないだろう。

まだまだ甘えたい盛りに入ったばかりだったろう。

それを、薄汚い考えの爺に使われ、自分の意識がある中で人を殺す。

そんな事をさせられた子に、パパと、親だと慕われたら、

俺はどうしてやったら良いんだろっ？

俺に、なにがしてやれる？

俺が、一体、何を

「…パパ？パパ！……どこか痛いのか？だいじょうぶ？」

気付くと、アリアが俺を見て辛そうな顔をしていた。

ああ、どうやら泣いていた様だ。

「あ、ああ。大丈夫だよ。目にゴミが入った、だけ、だから……。」

「…ほんとう？もし、パパをいじめる人がいたら、

私が、やっつけてあげるからね！」

ハハハ、情けねえなあ。

ギョッ。

「ありがとう、アリア。その時はお前に言うからな。」

「……うん！パパの痛いのは、私が飛ばしてあげるね。」

「ああ。ああ、そうだアリア。まだ紹介してなかったな。」

アリアを抱っこしてノワールに向かせる。

「彼女はノワール。お前のママだ。」

「……ママ？」

「そう。お母さん、ママ、マーテル、ラ・マデリ。」

「……ママ。」

そろそろとノワールに手を伸ばすアリア。

そして、肩口をキュッと握る。

「……ママ、ママ。エへへへ。」

「……アリア。アリア。」

ノワールにアリアを渡すと二人が顔を見合わせる。

「……なんか、パパと違う。でも、あつたかい。」

「フッフ、そう？アリアも温かいわ。」

暫く、二人にしておこうか。ちょっとだけやる事もあるしな。

「カール。」

「おや、シュウマ。家族の団欒はもう良いのですか？」

カールとは、カタルシスの事。

名前を略すなど、本来天界人なら許さない所だが、

こいつは主神に思う所が無いのだろう。

実際、あいつからそう呼べと言って来た。

「なに、今は母と娘の時間なだけさ。」

「そうですか。して、何用ですか？」

「もう戻ろつかと思ってな。挨拶だよ。」

「ああ、そうですね。皆を呼びましょうか？」

「いや、良さ。軍の兵士全員が爺派だったとは言え、全滅させた俺なんかと話したくはないだろうさ。」

「ハハハ！ 違う。しかし、貴方の事だから、

何か策があつて、全滅させたのかと思つていましたが？」

俺がそんなに万能に見えるのか、こいつには。

「いや。残念ながら、つて奴だ。」

あの時は、ただ邪魔だったから全滅させたただけだ。」

「そうですね…。」

なに、再編成が面倒になつただけです。

私の策が発動していても、これと同じ様な結果になつていたので、気にする事はありません。」

「そう言つて貰えるとありがたいぜ。」

「いえいえ。私も助かりましたから。」

「こっちの、本当に俺が手伝わなくていいのか？」

俺がここに来た理由は、復讐と……、

カールと同じく、天界直しの為だ。

本当なら『神』を殲滅しても良かったんだが、

全員反爺派だったので、生かしたのだ。

『天界』ってのは、『地獄』と対の重要なシステムだ。

天界が無いと、生物が転生出来ないのだ。

そして、その役割は天使が行う。

その天使の上官の『神』を全員殺してしまつては、

選出に時間がかかり、システムが滞る。

尤も、天使を半分殲滅してしまったから

五十歩百歩ではあるのだが、今後を考えるとこれが最良。

「ええ。私の策より良くして頂いたのに、

それを貴方に手伝って頂く訳には行きません。」

「分かった。そこまで言うなら甘えよう。」

「ええ。それでは、また会いましょう。」

「ああ。その内また来るよ。」

何百年先になるかは分からんけどな。」

「どうせ不老なのです。」

何千年待とうとも、生きていれば良いのです。」

「ちげえねえ。」

「ええ。今度は、貴方の子供を見せてくださいね。」

「……は？天界人は子供作れないんだろ？」

俺の質問にカールは頭を抱える。

「シュウマ。」

貴方は人間なのですから、子供なら作れるでしょう。」

「いや、だってノワールが天界人じゃん。」

幾ら墮天しても、種族的には天界人のままなのだ。

「いえ。子を為せないのは天界人同士だけです。

我々が精子を持ちませんので。

しかし、女性の方は卵子を人間同様持つておりますので。

と言っても、かなり少くはありますが。」

「何それ初耳。」

「ま、そう言う訳ですから。頼みましたよ?」

「……………余裕があつたらな。」

「フッフ、貴方の精神的に、ですか?」

意外とウブなんですなえ。」

「いやつかましい!!!自分でやるには経験皆無なせいだよ!」

「いえいえ、良いじゃないですか。」

そんなあなたも可愛いですよ？そのケはありませんけどね。」

「……はあ。疲れた。もう行くわ。」

「ええ。本当に、さよならです。」

「ああ。元気でやれよ。」

そう言って後ろを向くと、ノワールとアリアが手を繋いで待っていた。

「じゃ、戻るか!」

……

「ええ。そうね、あなた?」

「……そーゆーのは結婚してからにしなさい。」

「フフフ。分かったわ、シュウ。」

ギョッ

「……パパとママだけ、ずるいの。」

「ハハ、ごめんごめん。じゃ、行くうか、アリア。」

「…うん！」

そう言つて、アリアと手を繋ぐ。

「目的地は？」

「日本！！そろそろ戦国時代の幕が開けるしな！！」

「……この子に戦場を見せるの？」

「？……へいきだよ？こわくないもん。」

「いえ、そう言う事では無くてね？」

「…死体なら、いっぱい見たからへいき。」

私が外に行くの、初めてだから、たのしみ。」

「ハッハッハ、そうなのか！日本は俺の故郷だからな。」

少しなら案内してやれるぞ！！」

「…ねえ、パパ？つよい人いるかな？」

「いるぞ〜！第六魔王つて呼ばれる人だっているんだ。」

「…私、たたかつて見たい。」

「危ないから、俺が戦ってからな。」

「…はい。」

「ああ、この子の未来が凄く心配だわ……。」

「良いじゃないか。この子アリア強いし。」

「いえ、そうなんだけどね？そうじゃなくて……。」

「（クイクイ）……パパ、ママ。早く行こう。」

「ああ、そうだ！？1497年だから、戦国入ってるけど、

信っちとか謙信たんとか生まれて来るのが1530年からだからな
〜。

うーん。まだ天下取りの時期じゃないから、マッターリしてようぜ。」

「じゃあ、このままここに居るの？」

「いや、日本はもう少し後にして、魔法界行こうか。」

アリア、日本じゃないけどいいか？」

「うん。そこも行ったことないから、たのしみ。」

「そう、なら……………」。

とノワールは『神』達が集まっている所を向き、大声で言う。

「ミカエル!!あの子達の事、頼むわね!!!」

「貴方に言われずとも助けますよ!!!」

短い遣り取りを終えると、再びこちらを向く。

「本当に良いのか？」

ノワールを助けようとして捕まったんだから、挨拶くらい……………」。

「……………いいのよ。ミカエルが説教するだろうから、

私も居たら一緒に文句言われちゃうもの。」

「……………ふふ。よし、なら行くか!『次元転移!魔法世界!!!』」

バシユウ!!!

sub - side カタルシス

「全く、騒がしい方達だ。」

「カタルシス！！早く手伝え！！」

選定終わってない人間が山ほどいるんだ！！」

「ええ、今行きますよ！」

いつかまた、会いましょう。」

「カタルシス……！！早くこんか……！！！！」

「そんなに急かさなくても良いでしょう？！！」

S i d e o u t

- - -

- - - - -

パシユウウウウウ！

「おお、着いた着いた。」

「と言っても、一日くらいぶりではないんだけどね……。」

「……パパ。ここ、何も無い。」

今来たのは、あの時戦ってた、ゲート近くの荒野。

そりゃ何も無いよ。俺が吹っ飛ばしたんだから。なんて言えない……。

「またオステイアにでも行くか？」

「それでも良いけれど、帝国の方にも行ってみましょう。」

「うし。アリア、どこか行きたい所あるか？」

「……パパ達がいればいい。」

「ハハ、了解了解。」

これ以降は、簡単に上げて行くかうか。

1499年 ヘラス帝国

「…ね、パパ。あのおつきい龍とたたかっていい？」

「お、龍樹か！ん〜ちょっと強いかな？待ってる、俺がちよっと…」

…

「やめなさい！…!?!？」

1507年 王都オステイア

「よ〜！大神官三人衆。元気だったか？」

「シュウマ！久しぶりだな。何時こつちに来たんだよ！？」

「十年くらい前だよ。」

「しかしお前好青年って感じになったな、ジオン。」

「そんなに前から来てたなら挨拶くらいしに来なさいよ！」

「ジルダリア！お前随分でかくなったな。」

「あの時は小学生みたいだったのに。」

「あの時でも私とエイルは30越えてたのよ？」

「流石精霊と悪魔ハーフ。で、エーリアスは？」

「ああ。エイルなら今病院よ？」

「何?!どっか怪我したのか?」

「んふふふ。お・め・で・た!!!」

「おお!!おめでとう、ジオン!!」

「なぜ分かる!!?」

「いや、あん時(対軍戦の時)の目線で、

お前がエーリアス好きだったの分かってたから。」

「フフフ、いじわるねえ。」

「ククク、分かってたくせに良く言っよ。」

クイクイ

「パパ?その人たちだれ?」

「「パパああああああああ?!!?!!?!!」」

1509年 同・教会前

「いや〜。エイル綺麗だったな〜。」

「私なんか、すっかり生き遅れよ……………」。

「ま、まあ元気出して、ジル。」

「フン、ノワールは気楽よね〜。貰い手確定してんだから。」

「な?!ノノノわ、私は、その、あの……………ノノノ」

「もう〜。シュウマ。なんで結婚しないのよ?」

「いやその、だなノノノ」

「ハア…。二人ともウブだから進まないのよね〜。」

「どーせまだヤツても無いんでしょう?」

「」「」「づぐ……………ノノノ」

「ホントにヤッてないの?!信じらんない!!!!」

「……パパ?なにやってないの?」

「「「アリアはまだ知らなくて良いの!!!!」」」

Side 愁磨@『闇』の中の家

あの、ジルの言葉から二年。

俺は、三人の後押しもあり、覚悟を決めた。

「の、ノワール!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「わ?!ど、どうしたの、シュウ?」

「あの、その。……これ、受け取ってくれないか?!」

そう言っ、俺は黒真珠で出来た小さい箱を差し出す。

「?改まっ、何よ?」

訝しげながらもノワールは受け取り、中を見る。

「…え?あの、シュウ?ノノノこれっ、その……。」

中に入っていたのは、黒と透明な宝石で作られた指輪。

真ん中にはマーキーズの黒真珠。

その両端には翼型のヘマタイトと、ダイヤモンド。

「……すっげー遅くなっただけ。……ノワール。」

黒真珠は『美しさ』や『守護』。

へマタイトは『障害を退ける』、『強さ』。

ダイヤは『永遠の愛』を露わす。

「俺と、結婚してくれないか？」

「っ……!!」

意味は………察してくれ。

「……本当に、私で良いの………?」

「お前じゃなきゃ嫌だ。お前が、いいんだ。」

「シュウ……。シュウ……。!!」

ノワールは、泣きながら俺に抱き付いて来る。

第14話 時はメイドインヘブンの時期のようです(後書き)

作&ジル&ジオ&エー

「ゴオオオオオオイイツイイインツツ!!!」

「」

愁&ノワ「ノノノノノ」

アリ「・・・？」(パチパチパチ)

作「大事な事なのですが、無理矢理入れないとこの二人の場合、

何時までも出来なかつたので無理矢理。」

ジル「この二人、何年一緒に居たのよ？」

作「エヴァの修業期間もあつたからなあ。」

400年以上は一緒に居たな。」

ジオ「そんなにノワールさんと一緒に居て、よく耐えたな・・・。」

男として尊敬するぜ。」

愁「・・・やかましいノノノ」

エー「皆様、今回は今回の後半と同じ感じになると思います。」

ノワ「『これは酷い』な内容だけれど、よろしくね。」

アリ「……こうしんは、あしたします。

よろしくおねがいます。」（ペコリ

作「あ、二人がゴールインしましたが、ハーレムにはなりますよ？

『ツマ 眞実は、何時も一つ！』（byバーロー）ですが、

『ツマ 眞剣の恋は、一つじゃない！！』（by作者）ですので。」

ノワ「因みに、浮気では無いわ。あくまで、『一夫多妻』よ。」

ジオ「チクシヨウ！！主人公だからって！！」

シユウマに明日は拝ませねエ！！！！」

愁「クソッ！俺だって！！俺だってなア！！！！」

作「男どもがエキサイトしてますが、この辺で。それでは……！」

作&mp;ノワ&mp;ジル&mp;エー「……アリーヴ
エデルチ……！」

アリ「……ありーべでるち。」

能力と設定の追加

魔法世界過去編＋天界編

(前書き)

こんばんわ、a l t l e n eです！

作「新能力の本編でしていない細かい所や、

質問のあった設定、追加人物です」。

愁「特に説明する事も無いので、お暇な人はどうぞ。」

能力と設定の追加

魔法世界過去編 + 天界編

名前：愁磨・P・S・織原

ブテリユゼヌスパール

new!

二つ名 new!

『白き死神』 『穢滅白雷の白雪姫』 『返り血染紅の雪の精』 『嗤う
不死女王』
ノライフクイーン

通称、『皆殺しアーカード』

懸賞金 1300万Dp

追加能力

『うんめいのうつくしきせかい』

詠唱 new!

我が心中に眠る暗き空に響け

そこは深い森

そこに響くは墮天使の歌声

天上の月は忌み子の金

包む黒は虐げられた乙女

我の心にいるのは負の者のみ

故に見よその美しさを

如かして見よその荘厳さ

我に在るのは

是への愛のみ

壊された美しい黒は我を包む

壊された金は我が包む

さあ刻もう、恐怖劇を

しかし怒りの日ではなく

共に謳おう、出立を

さあ、歌い踊ろう、人間！！

！
！

魔人と魔王と吸血鬼と共に！！！！

！！！！

『 広がれ、
『 うんめいのうつくしきせかい
』 』

『
』

追加詠唱

『 闘争の始まりだ』

『家』

『闇』の中に創った平屋の日本家屋。

厳密には、『闇』の中に創った空間の中にある家。

中は動植物も居て、森に囲まれた、湖のある草原となっている。

擬似的な太陽と月もある、ある意味第二の地球。

広さは北海道程もあるが、6割が森になっている。

如何なる手段を用いても、愁磨の影以外からは入れない。

愁磨自身が入ると影も消える。

その後出るのは、周囲1kmの何処かに、任意で出て来る。

賞金首になった時点で、宿はとつても基本、この中で寝泊まりする。

愁磨の戦闘中、基本的にノワール&mp;エリアはこの中。

『ノルニルの旋律』^{うた}

十三騎士の一人、『死天使』の能力。あらゆる事象の『未来を見る力』。

自分の未来を見る事は出来ない。(『自分に起こる事の未来は見える。』)

本当の名前は、ラケシスの天秤。

本来の能力はこの世の全ての運命を操る力。思考発動型。運命を操り、それを実言する事により『未来が読める』事になる。

『術式兵装』

『形態変化：モード 兵装名』で設定した者と同じ存在になる能力。

正確には、自分自身に付与する能力。

付与するのはその人物と同じ服装・武器・能力のみ。

『形態付加： 兵装名』で自分では無い特定物に能力を付与する。

付与出来るのは『装備としての存在』しているモノのみ。

Alucard

HELLSINGの赤い旦那になる為の発動キー。

装備は赤いロングコートと同色の大きな帽子とスカーフ、

ブーツ。

黒いスーツに中世的な白いYシャツ、茶色がかった黒い

ツク』と、

武器は白い拳銃『454カスール カスタムオートマチ

6 kg 長さ150cm、

黒い拳銃『ジャツカル』。双方、全長39cm 重量1

普通の人間が撃つたら腕が吹っ飛ぶような銃である。

・拘束制御術式
クコムウェル

アーカードが付けている、自身への封印・拘束。

第3号、2号、1号、零号の4段階に分かれており、

開放すると不定形な体になる。

零号まで開放すると、自身が今までに血を吸った全ての『存在』を

死者として召喚することが可能になる。

エドワード・エルリック（もしくは『鋼の錬金術師』）

ハガレンのエドになる為の発動キー。

袋。
装備は赤いマント、背中に黒いフラメルの十字架、白手

左足にのみオートメール装備。（見た目だけ。）

・錬金術

有形物のみ、全てを錬成する事が出来る。

Alucard を付加する事により、擬似的に賢者の石を使った状態になる。

ロイ・マスタング（もしくは『炎の大佐』）

ハガレンの大佐になる為の発動キ！。

装備は軍服に、火トカゲの錬成陣の付いた発火布製手袋。

偶に黒いロングコートも。

・錬金術

みんな大好き、指パッチンによる爆発。

愁磨は火力を火花→ロケットランチャ 程度の爆発まで

錬成可能。

攻撃力は、ロケラン⇨中級呪文くらい。

フルグラテオホピカラダランホピオンス
（白き雷、紅き焰など）

Alucard を付加する（ry

ハガレン装備は、主に手加減用。

その為、意図的に自身の身体能力を落とす時がある。

『メシアの鎧』 『アトロポスの剣』

なぜか『術式兵装』出来なかった装備。

この装備への付加は出来る。

『メシアの鎧』

外見は本編同様、説明困難な外見。とりあえず救世主っぽい。

名前は作者の偏見により付けられた。

『アトロポスの剣』

『因果を立ち切る剣』。存在を無、無かった事にする能力。

存在の否定する概念なので、本当はモノに当てなくとも、

『それを消す』と決め、剣を振るうだけで良い。

『飛天鳳舞』

救世主の守護をする四天聖の一人『救世主の剣』の武器で、

鍔の無い野太刀。（刹那の夕風を思つと分かりやすい。）

しかし刀身1.8m弱、柄45cmもあり、柄が四角い。

『目覚めろ『飛天鳳舞』』で一段階開放、奥義の使用可能に。

『金剛夜叉』

支配者の守護をする四覇聖の一人『支配者の剣』の武器。

斬馬刀程も大きい大太刀。

大きさは『飛天鳳舞』とほぼ同じ。

開放キーは、『吼えろ『金剛夜叉』』。

上記二本は真の力を使う為に、『調伏』しなければならない。

『調伏』は『その剣を従える事』で、上位奥義を使える。

これに失敗すると、剣に喰われ、魔物になる。

ここでの『魔物』とは、竜ドラゴンや魔族とは違い、

完全に破壊のみを目的とした異形の害のみを齎す者である。

『飛天鳳舞』 『目覚めろ、飛天鳳舞。そして 歓喜せよ！』

！！！』

『金剛夜叉』 『吼えろ、金剛夜叉。そして 悟りを！！！！』

『救世ノススメ』 または『支配ノススメ』

十三騎士の力を行使するために必要な本。

頁には十三騎士が描かれており、手を翳した十三騎士の名を
言いつつ、

その力を使える様になる。

訓練により頁を開かなくとも名を言うだけで使える様になる。

愁磨はこれを本では無く体に登録しているので、

『本の名前』起動 で使う。

名前：ノワール・プテリユクス・エ デル・織原

二つ名 new！

『黒翼氷帝』 『詠う黒獅』 『黒燐迅豹』 『片翼の墮天使』

通称、『微笑みの漆黒菩薩』

懸賞金 700万Dp

能力

魔・聖属性の魔法

『闇』と『光』の上位属性。

『魔』 『聖』 中級呪文 〃 『闇』 『光』 上級呪文の威力だが、

上位属性の方が存在が上の為、拮抗する事無く『闇』『光』が負ける。

相殺する為には、1：3の割合以上で撃たないといけない。

ノワールは、強力な魔法を使えるという事しか未だに分からない。

『魔合聖纏』

『咸卦法』と同原理で『聖属性』と『魔属性』の魔力を合わせ、

『闇の魔法』ミギア エレベアと同原理で自分に付与する。

聖属性と魔属性両方との相性により強化倍率が変わり、

込めた魔力によっても倍率が変わる。

() 『聖』適正が高くても『魔』適性が低ければ、どれだけ魔力を込めようとも

強化倍率は1・2%程度にしかない。()

暗逆併明

『魔合聖纏』後の名称。(野菜の『獄炎煉我(シム・ファブリカ
ートウス・アブ・インケンデオ)』や『疾風迅雷』アギリータス・フルミニスと同じノリ。
)

『獄炎煉我』がATK3,800、DEF2,200、SPE1,
200(作中)、

『雷天大壮』がATK&DFE6,000、SPE10,
000だと仮定した場合、

暗逆併明 はATK350,000、DFE260,000、
SPE400,000である。

使用中は翼が半分白くなり、髪の色が白に染まる。

天使の輪が白と黒の二輪になり、頭上にX字に浮かぶ。

『明星の彗星』も、白槍と黒槍の二槍になる。

能力を十全に使う為、高速思考・演算能力も付いてくる。

『奥義 カインエグソガンス 夢無明亦無』

『魔合聖纏』のエネルギーを主に足裏、腰、肩、腕に集め、

『明星の彗星』を投擲するだけの、シンプルな攻撃。

投擲時に魔力を任意量上乘せし、攻撃力を上げる。

飛んで行く槍の速度は亜光速で、避ける事は不可能。

地球を3個ほどなら、余裕で貫通する。

名前：エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

アタナシキテイ

二つ名

『童姿の闇の魔王』 『闇の福音』 『禍音の使途』 『不死の魔法使い』

通称、『災厄と共に来る真祖』

懸賞金 1000万DP

魔法

好んで使うのは「闇」「氷」「雷」。

能力

真祖化により『不老不死』『蝙蝠（木の葉）化』出来る様になった。

『不老不死』

肉体が年齢を重ねなくなるスキル。

『老化しない＝死なない』と言うスキルであり、

『如何なる損傷、病気、老化によって死ぬことの無い状態』であるが故、

首などを飛ばされたり、心臓に杭を打たれば死ぬのである。

『不死身』とはまったく別のスキル。

『蝙蝠化』

体を無数の蝙蝠や木の葉などに変化させる能力。

回避・移動用の上級スキル。

分化させた蝙蝠が幾ら撃たれようと、

一つでも残っていたら、そこから元の姿に戻る。

『高速再生』

愁磨の薦めにより習得した魔法の一種で、

怪我の治りが速くなるスキル。

腕が切られても、5秒程くっ付けていれば治る。

愁磨によりこっそり強化されているので、

最早『再生』よりは『復元』に近い能力となっている。

3秒もあれば腕が生え換わり、頭が吹き飛ばされても、10秒あれば再生する。

『闘扇術』

扇を使った合気道の一種。

主に防御用のスキル。

『人形遣い（ドール・マスター）』

人形を扱うスキル全般を指す。

エヴァの場合は系に魔力を通して使うので、同時に『系使い』でもある。

他には植物を使役し、人型にして操ったり、霊を憑依させて操ったりする。

固有技能

マギア・エレベア
『闇の魔法』

発動した魔法を放たずに自分の中に取り込む業。

「闇属性」への耐性が低いと、使う度に理性を保てなくなり、

最終的には魔族や魔物になる。

理性が残るか残らないかはランダムである。

適性が低いと、そもそも成功しない。

天界

天界人は、例外無く不老不死。生前の罪を全て流して転生する為である。

その為肉体限界が、人間時よりかなり上がっていて、

人間時の100%までの限界が、500%まで上がる。

が、生物としての構造限界がほぼ人間と同じため、

人間の10%の力までしか力が出ない様にセーブされる。

(人間は通常2〜3%しか力を出せない。)

天界での殺人による死は魂の消滅である為、殺人は最重の罪。

天界の上下関係
ヒエラルキー

最下位

天界に住む事になった、死んだばかりの人間（一般人）

- ・約1億人程。人間の時と全く力は変わらない。

天使（天界軍に入った上記の人達）

力天使（白兵戦要員）

智天使（後衛Ⅱ 遠距離Ⅱ 魔法要員）

- ・約1100万人程。

軍との契約時、『人間だった頃の名前』Ⅱ 『天界での幼名』を捧げ、

主神から力を貰う。単純に達人以上の身体能力になり、特殊能力を得る。

これを『洗礼』という。

大天使（天使中の上位ランカ 50人。隊長的な存在）

- ・主に指揮官になるのはこれ等。入れ替わりが激しい。

『神』（大天使中で最も強い12人）

・人間の時の達人や、特レアスキルを貰った者になる最強の位。

『神』とは称号であり、強さの象徴でしかない。

これを決める儀（大会？）が千年に一度ある。

天界始まり、最初に決定以来、大天使長から変わらな
い事に

腹を立てたクルセウスが、この時にノワールを嵌めた。

大天使長

・『神』で最も強い一人。初期は上記大会での優勝者となる。

その後は、現大天使長を倒した者となる。

かつてノワールが居た事により、その証として黒い六
対翼のバッジが

その証として受け継がれている。

『創造主神』

全ての次元・時空を創ったとされる、真の意味での『神』。

上記、天使の『神』と区別するため、『主神』と記載。

あくまで『される』人物？である。

天界に伝わる伝承にそうとしか書いていない為、

能力、天界・地獄などの説明の為に作り上げられた偶像的なモノである(？)。

しかし、これを創った何らかの存在が居る事は確実である。

名前：ミカエル

天然の薄褐色の肌の、高3〜大学生位の女性(女の子)

キラツとした黄金の瞳と、炎色の軽くウェーブしたロングの髪。

168cm、見れば老若男女振り返る様な美人である。

『神』序列第一位、大天使長である。司るのは『炎』

武器

炎の魔剣『レーヴァンティン』。幅の広い刀身で、鍔は無い。

刀身に炎の模様があり、火属性系強化能力がある。

能力

『炎化』

物体・自身を炎にする力。

炎化する事によって体に物理的な限界が無い為、

人間以上に強化された天使の体の力を、100%引き出せる。

ヴォン・ファイオ 爆炎剣

文字通り、レーヴァンティンを炎化させる。

現在、1000の炎200m分を、15mに完全に凝縮でき

るので、

剣の刀身部分は約3万にもなる。(石が蒸発する温度以上)

物理的非物理攻撃になるので、防具を無効化する。

(こちらの攻撃を相手は剣等で受ける事が出来ないが、

こちらは相手の攻撃を剣で受ける事ができる。

SAOに出て来る エセリアルシフト の思考発動版。)

『武帝焰舞』

爆炎剣 状態での乱舞。

攻撃速度が音速以上の為、振る度に炎のカマイタチが飛んでくる。

近距離よりは、中〜遠距離の技。

名前：クルセウス

ダンブルドアが神々しくなった感じ。(あれで十分神々しいが)

天界の『神』の一人。序列第二位。司るのは『雷』new!!

能力 new!!

『神の雷』

狙った対象の直上に雷を召喚する。

『対象に雷が中る』という結果が先にあり、

幾ら動こうと、如何に防御しようとも無意味。

落ちるまで若干雷のチャージ時間が必要なので、

発動してから中るまでは0.7秒程時間がかかる。

威力は約100億V^{キリッ}6倍『千の雷』。

(通常の雷が10億ボルト。消費電力1kWの電化製品を、240時間以上連続で使用できる電力。)

武器 new!!

2.5mの杖。しかし、天使は魔法の発動体が必要無いので、

杖術の為の物であったかと思われる。

名前：アリア

主人公が助けた銀髪翠眼の幼女。

天界の『神』の一人。序列十位。司るのは『霊』 new!!

new!!

クルセウスに洗脳の魔法を受けていたらしく、

クルセウス撃破後は見た目通りの幼女然としている。

能力 new!!

『神虎』

虎の霊を四頭呼ぶ能力。霊体である為、物理攻撃の一切が無効となる。

倒すためには『聖』属性で被つか、これより上位の『魔』で倒すしかない。

s。
顎の力は約50t。鉄を難無く噛み切る。速さは200m/

指を鳴らして召喚する。

これで最初、主人公は手足を吹き飛ばされた。（正確には噛み切られた。）

『全天世界観測』

あらゆる次元・世界を『観る』事が出来る。全くの後衛用能力。

こちらが主神から貰った力であり、『神虎』は自分の能力。

武器

2mもある鉄扇。何故こんなに大きいかと言うと、

『女の子に大きい武器はロマンだから!!』である。

しかし、殆ど『神虎』で勝てる為、あまり活躍の機会が無い。

名前：ヴラコニル

咬ませ犬な、白短髪・茶眼の青年

某雷傷の眼鏡の少年が主人公の映画に出て来るドラコ君。

『神』の一人、序列十二位。司る属性は不明。

能力

『ミネクラキイ・プトセウ
神の箱庭』

世界創造系の能力であつたかと思われる。

空間創造の塗り替えは、それが使われていない空間か、

替えている以上の力で無いと、能力は不発に終わる。

名前：カタルシス

深紫の髪で前髪が胸まであり、髪の切れ目からは、同色の目が覗く。

イケメンであるが、研究者気質である為か、「女なぞいらんだぞうだ。」

愁磨を気に入ったらしいが、アッー！では無いらしい。

あくまで友として、である。

『神』の一人、序列第四位。

武器&能力

『死神の鎌』デスサイズ

黒一色で構成された黒い球体。あらゆる武器に変形する。

『特定した名』を殺しなさいデスサイズ『死神の鎌』

と唱え、武器を『それ』に当てると、殺す能力を持つ。

名前：レイジアーク

氷色の髪をショートボブの中学生位の少女。灰色のつり目。

クルセウス側かと思われたが、アリアの友達だったからあちらにいた、らしい。

『神』の一人、序列九位。司るのは『氷』。

武器

『電糸』と言う、霜^{II}氷でできた糸。能力？

名前：ウエルセウス

間延びした話し方をする、碧の髪と眼の巨乳若奥様。

『神』の一人、序列十一位。司るのは『水』。

武器

『水霊の琴弓』

ハープ状になった弓で、弦もハープと同数ある為、
相当な筋力が必要……。

構えれば、矢は水で自動的に作られる。

名前：アルト克蘭

ナルシストっぽい、青髪金眼の青年。

『神』の一人、序列八位。司るのは『魅』。

武器

『貴公子の狩爪』

四本爪のクロで、斬った者を『魅了』^{チャーム}状態にする。

能力

『魅了』

気の弱い者は、保持者を一目見た瞬間恋に落ちる。

恋と言っても、最早呪いの域である為、何をされても悦びになる。

名前：グレゴリアス

黒髪橙眼の、若干お固い青年。

『神』の一人で、序列第五位。司るのは『地』

武器& amp;能力

『地神鉄拳』

手袋程度のグローブだが、土などによりコ ティングする。

また、着けていることにより地（＝土・鉱物）を操れる。

操るだけで無く、無限に生成出来る。

名前：エクリウル

緑色の髪と藍色の瞳の、高校生くらいの少女。

ツッコミ役の大変な子。

『神』の一人で、序列第六位。司るのは『風』。

武器& amp; 能力

『風帝』

風を使い、あらゆる事が出来るスキル。

『風王の嵐槍』

『風帝』による、風で形成された槍。

突きも出来るが、その性質故、削り取るエグイ武器。

使用者であるエクリウルはダメージを受けない。

名前：ダルタニアン

金髪金眼の、武将然とした壮年の男性。

反クルセウス派の纏め役。

『神』の一人で、序列第三位。司るのは『武』。

武器

『武帝の裁架』

長さ4 m、幅2 mのハンマーに5 mの柄が付いていて、

刀身3・5 mの戦斧がハンマーの反対にあり、更に3 mの刃が真ん中にある、

(刃)

(ハンマー) + (戦斧) の型の武器で、謎の鉱物で出来ており、破壊困難。

破壊出来ても、すぐさま修復される。

能力

『絶対覇者』

肉体限界を更に上げ、十全に使用できるスキル。

肉体関係全てが速く、重く、強く、硬くなる。

名前：プルネウラ

桃色の髪と眼を持った、小学生くらいの女の子。

しかし、死亡時の年齢は『とある』の小萌 生以上だそう。

『神』の一人で、序列第七位。司るのは『花』。

武器& amp・能力

『千桜卍咲』
せんおうばんしきょう

自分の半径15m、または触れた事のある場所から、

如何なる植物でも生やす事が出来るスキル。

『華蝶蜂月』
かちやうぶんげつ

花を模した、1m程の可愛いらしい双剣。

しかし、能力により作り出した剣の為、

見た目とは裏腹に、斬った所から植物を生やし、

相手を干からびさせたり、毒の葉を直接植える、エグイ武器。

能力と設定の追加

魔法世界過去編＋天界編

(後書き)

作「なげえよ?!予想以上に時間かかったよ!!」

愁「しかも『神』連中はもう番外編でも無いと出てこないと言う・・・」

ノワ「足りない説明があれば、お申し付けください。」

作「もう無理。おやすみ。の前に、それでは!!」

作&愁&ノワ「アリーヴェデルチ!!」

第15話 魔人は友と別れるようです(前書き)

申し訳ありませんでしたあああああ!!orz

愁「昨日の更新閉じましては、

作者の住んでるボロアパートのネット回線が死にまして、更新できませんでした。」

作「仕事帰りに、急遽ネカフェから更新しております。

回線の修復に一週間程掛る様なので、

その間、更新も感想返信も出来無い事をお伝えします。」

ノワ「変わりと言っては何ですが、二話更新致しますので、

今しばらくお待ち頂ける様、お願いします。」

愁「えー、では、恒例のを。」

作「zero様、剣の舞姫様、mnf様。感想、ありがとうございます
ます!!」

愁「kaito様、ご指摘ありがとうございます!!」

ノワ「では、行きましょうか。」

作&愁&ノワ「」それでは、どうぞ!!」

第15話 魔人は友と別れるようです

所謂、前回から引つ張った。

Side 愁磨@魔法世界

1515年 王都・大魔導士の部屋

「なあ、本当にもう行くのか？」

「そつよ。もう少しゆっくりして行っても良いじゃない。」

「そうですね。行ってもブラブラするだけでしょうし。」

「いや、八年も居たしな。それに、そろそろ面白くなる時代だ。」

「シユウマって意味深な発言が多すぎるんだよね。」

「どう言う事だよ?」

「ククク、教えたら面白くないだろ?」

「…ノワール。この性悪のどこが良いんだ?」

「ど、何処と言われてもノノノ……全部?」

「あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー!」

「「うちそうさまですー!もう良いから行きなさいよ!」

「ハイハイノノノ…ま、お前等が死ぬ時くらいにゃ来てやるぞ。」

「あんたに会いたい訳じゃないわよ。」

「ああ、アリアちゃん。またねええええ。」

「うん。……また来るから、げんきでね。」

「片親がこんななのに、何故こんなにも良い子なんだ。」

「ノワールさんの教育の賜物でしょうね。」

「言ってる。アリア、もう行くぞ。」

悪魔っ子の魔の手から戻って来なさい。」

「…はい、パパ! …… またね、ジルおねえちゃん。」

「またね、アリアちゃん。あんたらも元気だね。」

「随分扱いがぞんざいね! ……」

「まあまあ。良いじゃんか。そんじゃ行くか!

仲良くやれよ! ……」 『転移、日本』! ……」

シュン! ……」

1534年 日本 甲斐

「なあ、愁磨殿。」

「ん？どうした、信玄。」

「私は、この武田を本当に率いて行けるのだろうか？

私などより、幸隆殿の方が」

「大丈夫だ。お前なら出来るよ。俺が保証する。」

「お前が言うなら、そうなのだな……。」

しかし私には、家の地位と、この武力しかない。」

「ならば、お前の胸と旗に何か刻むと良い。」

信念のある人間は、それだけで強くなれるモノだ。

ん、そうだな。『風林火山』でどうだ？」

「『風林火山』？どう言う意味だ？」

「『疾き事風の如く、徐かなる事林の如く、

侵し掠める事火の如く、動かざる事山の如し。』

つまり、男なら悩んで無いで全力で攻めて潰せ。

こうと決めたら静かに、揺らぐず其処に居ろ。

って事だ。」

「おおお！なんだかカツコイイな！！」

「ま、人の受け売りだけだな。」

「なんと?! 一体誰の事だ?!」

「() お前だよ。」

「シュウマ！！久しぶりだな！！」

「どちら様だ、おっさん。」

「分かって行っただらろ?!」

「ハハハ！老けたな、ジオン！！！」

「もう54だぜ？そりゃ老けるさ。」

「ああ、人間ってお前くらいだもんなあ。」

「いや、竜人だけだな。」

「つつても130まで生きりゃ、人間の90ぐらいじゃねえかよ。」

「ああ、そうだな……………」

「……………ジオン。本当に良いのか？」

「いって。俺はこの体に誇りを持つてるからな。」

「そうか……………んじゃ、これ渡しとくわ。」

「ん？なんだ、こりゃ？」

「てめーの死に際に間に合う為の物だよ。」

「けっ！んじゃありがたく貰っというてやるよ。」

「エイルとキアルちゃん、大事にしるよ。」

「お前こそ早くガキの顔見せろってんだ。」

「やっぱり当たり前難くてな。こればかりは。」

「んだよ。なら、もっと回数増やせば？」

「一日3回はやってんのか？」

「多?!?!?!?!?!」

1549年 日本 尾張

「よー！信つちー！嫁さん貰ってんだってな。」

「貴様、何者だ?!白い髪…物怪の類か?!?!?」

「なー信つち。これ殺していい？」

「よ、止せ勝家！！愁磨殿も冗談が過ぎます！！」

「しゅう、ま…？！まさか、かの『白姫様』ですか…！？」

「…その通りだ、勝家。そして……」

ガッ

「俺は女扱いされんのが嫌いなんだ。覚えとけオツサン。」

「ハ、ハハッ！！誠に申し訳ありませんでした！！！！orz」

「シユウ。あまり苛めないであげなさいよ……。」

1555年 川中島 犀川の戦い

「ハハハハハ！！！！どうした信玄！！」

お前の国が誇る騎馬隊12000はそんなものか…！？」

「抜かせ！！お主が人外過ぎるのじゃ…！！」

「足止めをするのは良いが。」

別に、あれを倒してしまっても、構わんのだろう？」

「そんな事本気で言うのは貴方くらいですよ！……！」

「おら。さっさとマロの首取って来い！……！」

「ハイ……！」

1561年 川中島 八幡原の戦い

「信玄……！」

「おお！愁磨殿！如何なされた？！」

「ユツキー……！信玄は何処だ？！」

「分からんでござる……！この乱戦故……！」

「チイイイ……！猪武者が……！」

1567年 東大寺

「おおー。ホントに燃えてるぜ。」

「フフフ、げに、風流であるな……。」

「自分で燃やしといてよくゆうよ。」

「……なあ、愁磨殿。」

「ん？なんだ、久ちゃん」

「……人間の夢とは、儚きモノであるよな。」

「んなの当然だ。『人の夢』と書いて『儚い』んだからよ。」

「そうですね……。ところで一つ疑問なのが。」

「どうして君は天下を取らないのかね？君なら簡単に取れるだろう？」

「簡単だからこそ、なのだよ、松永くん。」

「力あるモノ故の苦惱、と言う事か。」

1569年 北条領の一角

「ぬううう！抜かつたわ・・・！！」

「死ね！！武田信玄！！！！」

「親方さまああああああああああああああああ！！！！」

「失せろ、雑種！！！！！！！！（ドザン！！！！）」

「しゅ、愁磨殿おおおおおお！！！！！！！！！！」

「幸村！何やってやがる！」

「さっさとその忍者くずれぶっ殺せ！！！！」

「分かり申した！！大車輪！火焰ぐるむああ！！！！！！！！」

「幸村・・・・・・・・・・。」

「どうした信玄！！交代にやまだ早えんじゃねえか？！！」

「・・・・・・・・そうじゃな。ここではない！！！！」

「愁磨殿……………」

「どうした、信玄。」

「幸村を、頼めぬか…………？」

「…………あいつは、一人で大丈夫だ。俺とあいつを信じる。」

「そう、か…………これで、心残りは一つだけじゃ…………。」

「んだよ、まだあんのかよ。」

「謙信公との決着が、のう。これは、本に口惜しい…………。」

「…三日だけなら、俺の業で延命出来るぞ？」

謙信の所までも、俺が連れてってやる。」

「三日も、か。ふふ、ははは。それでは、頼む…………。」

その後の戦いと決着が、歴史に残る事はない。

1577年 信貴山城

「ズズズズズズズズズズー」

「ズズズズズズズズズズー」

「フウ。」

「して、愁磨殿。如何なされた、こんな時に。」

「いや、最期くらい見といてやるうと思ってな。」

「ふむ。ならば、一つ相談だ。」

君は、どのような死が私に相応しいと思うかね？」

「そうだな、奇抜で華々しい死が良いんじゃないか？」

「ほう。具体的には？」

「そうだな。此処ごと自爆したらいいんじゃないか？」

・

「ふ、フハハハハ！！それは良い！！今にぴつたりだ！」

1581年 本能寺

「よ！信つち。随分魔王らしくなって。」

「フウハハハハハハ！」

その魔王にそんな口を利くのは最早お主だけだあ。」

「ところで、お前と戦わせたい奴がいるんだがいいか？」

「他ならぬお主の頼みだ。して、だあれだ？居ない様だが？」

「ああ。『出て来い、アリア。』」

ヒュインッ

「あ。…ひさしぶり、まおーのおじちゃん。」

「だあれかと思えば、貴公の娘ではあないか。」

「そそ。前から戦いたいって言ってたからさ。」

「フウウハアハアハアハア！…冗談が過ぎるぞ…！」

「余所見していいのか？」

「なあにゲブルアアアアアアア！！！？？」

「……まじめにやってくれないと、おこる。」

「ぬうううう！！」

加減の効く相手ではないようだなあ！！」

「……いく！！！！」

「こおむすめがあ！！調子に乗るなよ！我は、織田信長ぞ！！」

この後5時間戦って、信つちが勝ったんだが、

アリアを泣かせたのでOHANASHIしたのは余談だ。

翌年 同所・本堂 炎上中

「信つち。なんで逃げないんだ？」

「その様な問い、愚問であろう。」

我は第六天が魔王ぞ。俗物相手に臆して逃げるなあとお！

片あ腹あ痛い！！！！」

「そうかい。で、誰を待っているんだ？明ちーか？」

「ククク。光秀とおはあ、地獄にいて決着を着けよう。」

しかし今は……………我をも謀ったお前とおの決着よ、松永あ！！！！」

「……………おやおや、気付かれていたとはね。」

さてさて、久しいな、愁磨殿、魔王殿。」

「よ、松ちゃん。やっぱり生きてたか。」

「フッフ、気付かれているとは思わなんだよ。」

何時から気付いていたのかね？」

「松ちゃんの茶室に行った時には分かってたぜ？」

目的までは分からんけどな？」

「君は本当に理解できないな。」

…ふむ、目的か。私も武人の端くれ。

一度くらいは真剣勝負をしたいと思ったのだよ。

ま、その他にも色々あるがね。」

「その割には大した舞台を造ったじゃねえか。」

「演出はしてもし足りないモノだよ。」

…と、お喋りはこの位にしないと。」

「そおうだな。そおろそろ、光秀が来てしまっただろおうなあ。」

「んじゃ、立会人は俺がやるよ。」

「フッフ、私達の戦いが永劫語られるとは、光栄だよ。」

「安心しろ。閻魔には話し付けとくから。」

「ふうはははは！丁おう度良い冗談だあ！！」

「二人とも、辞世の句はあるか？」

「「……」これじゃ（だよ）」「（スッ

「準備よすぎるだろう……」。

…オツケー。それじゃ、両者構え!!!」

「第六天魔王、織田あ信長。我は、魔おおつぞ!!!」

「求む者、松永久秀。卿からは、混沌を賜ろう。」

「それでは、始めえ!!!」

「いざや開かん、冥底の門んん!!!」

「愉快だよ、こつも心が躍るとは!!!」

1598年 王都オスティア@ 時は、無情に流れゆく。

S i d e

俺は、十年前から魔法世界に居続けていた。

ジオンにやったお守りの、片割れが砕けたからだ。

「 ああ、もう、か……………」

ジオンが弱々しく声を出す。

ジオンは現在114歳。人間にしたら80中後半。

娘のキアルも今では60にもなり、孫すらいる。

「なんだよ、もうって…?」

「分かっているくせに、聞くんじゃない……………」

「そうだな。……………安心しろ。お前等は全員死んだ後も、

同じ場所で過ごせるようにすつからよ。」

「いや……………どうせなら、来世でも逢えるようにしてくれ。」

「……ちよつと難しいが、頼んどくよ。」

「ハハ、神様は、お前の友達かよ……?」

「似た様なのと知り合いなだけだよ。」

……俺の友達は、お前らだけだ。」

「……心臓止まるから、そう言う事言うなよ……。」

「じゃ、訂正。」

第六天魔王と嫌味なお茶好きと、熱血馬鹿も友達にしとこう。」

「ハハハ、そうかよ。」

……ありがとう。」

「フン。……気が向いたら、じゃなく。また会いに行つてやるよ。」

「……最期にお前の素直な気持ち聞いて良かったよ。」

「じゃあな……。ま……。た……。と……。も……。」

「……お前がなりたくないって言っても、なつてやるぞ。」

「ハハ。……あり、が……と……な……。」

人の死で、泣いたのは初めてだった。

第15話 魔人は友と別れるようです（後書き）

作「ええ。ついに愁磨の友達が死にましたね。」

愁「・・・覚悟は、していたさ・・・。」

あいつが良いって言うんだ。俺にはどうもできないさ。」

作「・・・黙って泣くなよ、怖いからさ・・・。」

ノワールさん、あちらで慰めてやって。」

ノワ「言われなくても、そうするわ・・・。」

作「・・・そして誰も居なくなつた。

それでは・・・直ぐに会いますが、アリーヴェデルチ!!!」

幕間 魔人と黒翼の初体験（前書き）

皆さんこんにちは。

作「今回は、番外編です。本編でキンクリした時期のモノです。」
愁「内容は・・・俺とノワールのとある日常だな。」

ニヤニヤもできないし、グダグダだ。

ただただ、俺達が幸せなだけだ。

それでも読んでやろうと言う覚悟をしてから読んでくれ!!」

ノワ「あんな事になるなんて・・・。っと、それでは!!」

作愁ノワ「」「どうぞ!!」「」

幕間 魔人と黒翼の初体験

Side ノワール

先日、ようやく結婚式を挙げたシュウと私。

一つの区切りを終えて、オスティアで新婚生活を満喫していた。

今は、近くの平原で日向ぼつこの最中。私は勿論、シュウに膝枕して貰ってるわ。

・・・普通は逆？どっちも女の子みたいなんだから、そんなの気にしないでいいのよ。

「……………なあ、ノワール。」

ガイイン！ キンキンキンキン！

「なにかしら？」

ドガアアアアアン！！ <ギユアアアアアア！！！！>

「俺達結婚したけど、その過程で大事な事忘れてたわ…………。」

「ええと…………プロポーズは受けたし、指輪も貰ったし、式も挙げた

わよね？

キ、キスもしたし、（ゴニョゴニョ）…も、したわよね……？／／
／

<ギユエアアアアアアアアアアアアアアアア！！>（バキバキバキバ
キ！）

「うん、まあそう、だな／／

でもな、一般的にはその過程に恋人ってのがあるだろ？」

そう言えば……………。

シユウとは自然と一緒に居たから、付き合っではいなかったわね。

「でな、その…………、明日、デートしないか？」

「…………え？」

S i d e o u t

「でな、その・・・、明日、デートしないか？」

そう、俺とノワールは結婚したにもかかわらず、二人きりで出かけた事が無いのだ。

厳密に言えば旅も入るのだろうか・・・、

あれはそんな色気のあるモノで無かったので、除外。

今更そういうのは、その・・・

「あ、あのね、シュウ……」。

嬉しいし、行くのは賛成なのだけれど……その……、恥ずかしいわ
……／／／」

・・・そう、恥ずかしいのだ……。

「フツ!!」 ザザザザ! バズバズバズバズ!!

能力的には一切変わっていないが、経験的に足りないからな。

・・・まあ、新しい技法は身に付けさせたのだが。

戦わせられる時に経験値稼ぎしないと、自由行動させられなかったのだ。

だけど・・・まあ、これだけ強くなれば、一日くらいなら大丈夫だろう。

「あー……、アリア。」

「……………ん、キアルちゃんとあそんでるから……………、いいよ?」

なんと……………龍と戦いながら俺達のお話きいていたようです。

あ、キアルちゃんって言うのはジオンとエーリアスの娘の事だ。

「ああっ！アリア！！なんて可愛いのかしら!?!」

と、ノワールが跳ね起き、俺ごとアリアを抱きしめる。

「……………ママ、くるしい……………」

言葉とは裏腹に嬉しそうな顔のアリア。

「ありがとう、アリア……。それじゃ明日、パパと遊んでくるわね。」

「

うん、誘った側としては、これだけ喜んでもらえると嬉しい反面、非常にプレッシャーが……！！って俺、何も考えてなかった！！？

……これ、不味いんじゃないか？！

こ、こうなったら、奴に頼るしかない……！！

s u b S i d e 空を飛部

？「諸君、今宵集まって貰ったのは他でもない。」

？「いや、諸君って言っても俺とs y「今の俺は『S y u』だ。」

……俺とS y uの二人しかいねえじゃねえか。」

S y u「そんな事は瑣末な事なのだよ、G・O君。」

決してシロツコさんの意味では無いぞ？

G・O「なんで名前出さねえんだよ？」

SyU「なに、紳士の嗜みだ。」

G・O「……で、わざわざなんの用だ？」

SyU「うむ、素敵なスルーありがとう。」

実は明日、ノW……とある女性とデートに行く事になったのだ。
「

G・O「フーン、今更って感じだな。で？」

SyU「実は、私とその女性はまだデートをしたこと」「はあああ？
！うつそだろ！！？」

落ち着きたまえ。非常に恥ずかしい事だが、事実だ。

そこで、大魔導士となって、以前よりモテるようになったジロ

……

「ホーン、G・O君から、アドバイスを貰おうと思ったのだ。」

G・O「……なんていうか……、めんどくせーな、お前って。

まあ、良いけどさ。言うておくが、俺だってエイルやジルとしか出掛けた事ないぞ？」

SyU「0と1で大きく差がある分野だ。」

そして今問題なのは、お前が女の子と一緒に出掛けた回数。

人数などつまらんモノは、そこらの犬にでも喰わせておけ。」

G・O「はあ、仕方ねえ。お前には貸しが山ほどあるからな。

それじゃ、まずは何処から行くかだが」

Syu「金については全く問題」

そうして、魔人と竜人の夜は更けていく

S i d e o u t

S u b S i d e N ・ G ・ E

「夜遅くに悪いわね。」

私達が部屋に来ると、ノワールは紅茶諸々を用意して、椅子に座って待っていた。

この場に居ないと言う事は、アリアちゃんは隣の部屋で床についている様ね。

「で？こんな時間に呼んだんだから、なんか重要な要件があるのよね？」

ジルが言いながら椅子に座るので、私もそれにならって椅子に座ります。

「実は、その……明日、シュウとデートする事になってね……？」

ノワールは、今更なにを恥ずかしているのかしら？

と、エイルがなんとも奇妙な質問をする。

「まさかとは思いますが、一度もしてないなんて事は……？」

「アハハハハ！それは無いわよ！！だって結婚して、る、の……」

「……………本当に？」

ジルの何とも言えない視線と言葉に小さくなりたいたい所なのだけれど……………

躊躇っていても仕方ないので、……小さく頷く。

「いや、うん。あんた達見ると飽きないわね。」

「ジル、そう言う事は……。ごめんなさい、私もちょっと思います……。」

ええ、こればかりは仕方ないから甘んじて受けましょう。

「それより」、と話を進める事にする。

「それで、明日どういう服着ていたら、とか聞きたいのだけれど……?」

「うーん、私達もジオンとしか出掛けた事ないから、正直……。」

「そうでしたね……。私達は幼馴染の様な存在でしたから、二人ででも三人ででも、出掛ける時の服装はそれ程気にしませんでした。」

ノワールさんと愁磨さんでしたら、そんなに気を使わなくても良いのでは?」

まあ、私も殆ど同感なんだけどね。

「チツチツチ、そこは女心って奴よ!分かってないわねえ、エイル。」

「

「いえ、私はあくまで自分の経験から述べただけで……。」

「そうと決まれば、明日は早起きしないとね！ー！さあ、寝るわよ！」

「え……今日はもう良いの？」

「いえ、軽く打ち合わせはするわ！明日は忙しくなるわよ……！」
「！」

………なんだか、嫌な予感がするわ。

S i d e o u t

翌日、俺は若干寝不足ながらも15分前に待ち合わせ場所に来ていた。

ノワールを連れ去って行ったジルが、俺とアリアが朝食を食べてる所に来て

『広場の噴水に10時まで来なさい！あと、石像の方を向いてなさい！！』

と嵐のように来て去って行ったのだ。

なんか企んでるのかもだが、今の俺はそんな事考えてる暇は無い。

ジオンは結局、『ここがおススメだ！後はお前が考える！！』

と実に心強いお言葉しかくれなかったのだ。

朝食食ってる時にも来てくれたんだが、

『いいか、必ず10分前には待ち合わせ場所に行くんだ！』

女が必ずと言って良い程10分遅れて来るとしてもだぞ！良いな、絶対だぞ！！』

とフリをくれたんだが、その時の形相が怖かったので、

今日はそれよりも早めに来たのだ。

しかし、待っているだけと言うのも落ち着かない！！！！

クツ、こんな事なら明後日（今日的には明日だが）って言っとくんだった！！

そしたら下見も出来ただろうに　　って、無駄な事か……。
ま、まあ相手はノワールだから、一番緊張しない相手だと言うのが
救いなのだ……

「シュ、シュウ。待ったかしら……？」

と、後ろからノワールが声を掛けて来る。

そう、ジルが俺の向きすら指定して来たのは、

歩いて来るノワールを見せないが為だったのだ、とは後で気付いた。

要するに、この時の俺はまんまとジルの嵌ったのだった。

「あ、あの。変、かしら？」

ジルとエイルが選んでくれたのだけれど……？」

ノワールの服は何時も俺が創っている。

着た姿を想像しながら創造するから、それなりに耐性が付くのだが……、

今回は完全に不意打ちだった。

「あ、あの、シュウ……。そんなに見られると、流石に……。／＼／」

「あ、ああ、ごめん／＼……。そ、その、似合ってるぞ、凄く。」

ノワールは、肩までしか無い黒のYシャツにネクタイ、シャツと同色のアームカバー、

前の開いたロングスカートの下(?)にミニスカートという服装だった。

「そ、そう?／＼ふふ、良かったあ。」

これ、ジルとエイルが選んでくれたの。……。でも、ちょっと派手じゃないかしら?」

ちよっと派手?そんな事は無い。

道行く女性は水着?にジャケット、ロングブーツのみ、以上!

なんてのがチラホラ居るから、むしろ大人し目なくらい。

……。まあ、そんな女なんかはどうでも良い。

今は、ノワール・ノワール・ノワールだ!!

「そんな事ないぞ、うん。」

「ノワールの為に作られたと言っても過言では無いくらい似合ってる。」

「フッフ、それは言い過ぎよ。じゃ、行きましょうか。」

自然に腕を組んで来るノワール。

「・・・うん、さっきまで緊張してたのが嘘みたいだ。」

「じゃ、何処行きたい？」

「まずは服でも物色しましょうか。」

「シユウが創ってくれても良いのだけれど、買っても面白そうね。」

「ノワールとアリアの服は『Made in Alucard』^{オレ}。」

「常に防御壁が張っており、物理はラカンインパクト（七割）を完全防御し、

魔法は、全属性を半減（火、水などの元素系から、腐敗・毒等まで）

威力的には、ナギの中級魔法を完全無効。

流石に『千の雷』とか『おわるせかい』などの殲滅魔法は5割くら

いしか防衛出来ない。

「そうだな。俺が創ると、どうしても無駄な機能必ず付けるから
普段着って言うには物々しいんだよな。」

因みに、布など使わん。ドラゴンだのユニコーンだのペガサスだの、
そう言った幻獣と呼ばれる奴らの皮のみを使って創るのだ。

「見た目は変わらないけれど、気分的にね。」

あ、シュウ。見て見て！これアリアに似合つと思わない？」

ノワールが指したショウウインドウには、所々に布を重ねた薄い水
色のワンピースが。

重ね合わせているにも関わらず、ポリユーム控えめという謎技術の
一品。

「ああ、良いな。これはアリアに似合いそうだ。」

ふと下の値札を見ると、これはこれは。。。

「に、二十万D.p.。凄まじく高いわね。」

「いやはや、女の服は高い高いと思っていたが、女の子用もなか
か。」

と、ノワールは俺の袖をちょこちょこ引っ張って来る。

「こ、これは流石に高すぎるわ。中で良いの探しましょう。」

むう、相変わらず儉約家。糸目付けなくて良いって言ってるのに。

「さ、行きましよう行きましよう。」

「ちょ、ま、行くから引っ張るなって!!」

長考していたら、言う前に店の中に連れて行かれてしまった。

「フフ、結構良い物あったわね〜。」

二時間後（体感5時間以上）、店から大量の紙袋を持って出て来た俺。

女の子用の店かと思いきや、男性服やドレスまであった。

三人分の服を買い漁って、会計がビックリ。

なんと合計が、さっきのワンピースの1/10 + 程度。

「ぐううう、流石に重いな、つと。」

あまりの安さに、予想以上に荷物が増えてしまった。

まだまだ時間は昼時。

これから歩く邪魔にしなければならないので、荷物を纏めて『闇』にぶつ込む。

うん、道行く人が数人ギョツとしてるが仕方ない。

「あ、ごめんなさい、シユウ。買い物楽しくって、つい……。」

「なに、愛する妻の喜ぶ顔が見ただけでお釣りが来るよ。」

……あー、自分で言っというて何だが、恥ずかしいな。

ノワールなんて顔真っ赤で湯気が出そうだ。

「も、もう!!!ノノ私、飲み物買って来るわ!!!」

と、バタバタ走って行ってしまった。まだ何飲むか言ってないのに……。

「だけど、好都合っちゃ好都合か……。」

俺は目的を果たすため、急いで店内に入って行った。

Sub Side ノワール

わ、私ったら、何で照れてるのかしら・・・？

あのくらいなら、いつも言われてるのよ。

や、やっぱり、このデートって言う空気にやられてるのかしら？

「お待たせ致しました。」注文をどうぞ。」

と、よくある車型露店の店員から声をかけられる。

「あ、それじゃあ、ミルクティーと……」

忘れてたわ、シユウが何を飲むか聞いて来なかったわ……。

……まあ、偶には悪戯しても良いかしら？

「……そうね、このアボガドブルーティーって言うのを貰えるかしら。」

・・・何故店員さんどころか、後ろに並んでる人達まで驚くのかしら・・・？

S i d e o u t

俺が店から出て来てから、約五分。ノワールが飲み物両手に戻って来た。

「ごめんなさい、少し混んでて。待った？」

「うんにゃ、全然。」

例の買い物に五分位しか掛らなかったしな。

「はい、これ。何を飲むか聞かなかったから、適当に買って来ちゃった。」

「ノワールが買って来たモノなら何でも良いさ。」

丁度喉が渴いて来た所だったんだ。　ん、ん、ん……。」

勢いよく飲む俺。

を、ノワールは心配そうに覗き込む。

「ん？どした？」

「あ、あの、シユウ？それ、大丈夫なの……？」

「ああ、青汁なんて久々に飲んだけど、

こつちの世界のは、随分ジュースっぽいんだな。飲みやすいけどさ。

」

「……ん？ちょい待ち、何故青汁があるんだ！？」

「あ、青汁？店ではブルーティーって書いてたのだけれど……？」

でも変よね、緑色なのにブルーって。」

うん、信号の青と同じ要領だな。しかし、青汁を知らんとな？

ノワールの持つてる前・俺の世界の記憶って微妙なんだよね〜。

妙に漫画に詳しいかと思ったら、カレー知らないとか言っただよ。

「ん、飲んでみるか？結構いけるぞ。」

「え、うん、ええっと……、の、飲むわ……／＼／」

ノワールは何故か顔を赤くして青じり……もとい、ブルーティー

のカップをじっと見ると、

恐る恐る口を付けて飲みだ……………あ……………／／／／／

「あ、本当ね。結構美味しいわ。これで見たい目が悪くなければ最高ね。」

ハイ、と俺にカップを返すノワール。

あーうん、はい、了解です。

「は、ハハハ。うん、そうだな……………／／／」

「?どうしたの、シュ、ウ……………。あう／／／」

クツ、何だこれは?!

た、たかが間接キスが何でこんなに恥ずかしいんだ!?!!

「よし、次行こう、次!?!」

「そ、そうね、そうしましょう!?!」

……………全く、中学生かっつの……………。

一時間後。

基本的にウインドウショッピングをしていた俺達だったが、そろそろ腹が減って来たので、・・・ファミ、レス？に入る事にした。

「いらっしやませー！二名様ですね、こちらの席にどうぞー！」

「あ、ハイ、どうも」ハイ、お待たせしましたー！ー！」
と、席に着いた瞬間出てくる料理。

ファミレス？と言ったのは、見た目こそファミレスだったが、メニューが一つしかないと言う、斬新過ぎる所だったからだ。

外の幟に書いてあったのはズバリ、《『シェフの気まぐれ』のみ！』。

出てきた料理も・・・なる程、気まぐれだった。

俺はあんかけチャーハン、チンジャオオロース青椒肉絲、中華スープと、昆布巻き。

ノワールはオムライス、サラダ、コーンスープと、焼き鮭。

ま、まあ、このラインナップで400アスだと言うのだから破格だろう。

だがまあ、これ以上食ったら動けなくなるので、会計……の
前に、

「ふふふ、付いてるぞ。」

ノワールの口許のチキンライス（多分）を取ってやる。

「え、あ？！ううう、言ってくれば良いのに……／＼／」

「可愛いからそんな勿体ない事はしない。あむ。」

「ちよ、もっ！！」

「ふふふ、腹一杯だからもう行こうか。」

と、席を立って会計に行く。

店はやけに静かで、繁盛してないのかなと思い周りをよく見ると、

満席だった……なのに、シーンとしている。

どっちら俺達と同じく黙々と食事しているようだった。

「あ、お待たせいたしました〜。」

と、さっきのウェイトレスの子が会計だった。

「『シエフの気まぐれ』、二つで800アスになります。」

……ハイ、丁度いただきます。ありがとうございます。」

うむ、最後まで明るい子だね

「末永くお幸せに〜!!!」

通りに出ようとした瞬間、ウエイトレスの子が叫ぶ。

「~~~~~お幸せに~~~~~!!!」「~~~~~」

と、店の中から数十人の声がある。

当然、道行く人達には注目される訳で

「い、行くぞ、ノワール!!!」

「え、ええ、そうね!」

手を引つ張り走り出す 前に、店の中に叫ぶ。

「言われなくても幸せだよ!!!お前らにも幸あれ〜!!!」

後は、逃げるように走り出す。

店からは、囃す声と拍手が聞こえて来た。

「な、何だったんだ、あの店……。」

「も、もしかしたら、みんな常連さんだったのかもね……。」

「……まあ、あ　言うバカな連中とは友達にはなれそうだけどな。」

一kmほど（一般人に被害が出ない程度の）全力疾走で逃げて来た所は、

水辺にある広い公園だった。

「あゝ、なんか良いな、こついの。」

芝生に寝転びながら言う。　ああ、なんかこつ、平和だな。

と、俺の頭が持ち上げられ、なんだか柔らかい物の上に置かれる。

「そうね、次来る時はアリアも連れて来ましようか。」

俺の髪をさらさらと撫でながらノワールが言う。

……膝枕されたのは、初めてだったかもな……。

「……………」

「……………」

「……ねえ、シュウ。前にも言っていたけれど、ここって本当に……」

しばらく無言で俺の髪を撫でていたノワールが、急に聞いてくる。

「ん、ああ……。数百年くらいしたら、な……………」

「そう……。ねえ、シュウはどうして何もしないのかしら？」

救う力があるのに。そう言外に訴えてくる。

「地道な根回しがめんどくさいが2%、皆の安全の為に75%。

……………その他、23%。」

「……………失敗するのが怖い？」

「……………心でも読んでるのかな、本当に。」

「まあ、自信に充ち溢れてるよりは私も支え甲斐があるから、いいわ。」

「ノワール……。こんな頼りない奴でg」

その先は、人指し指で封殺された。

「そんな言葉、聞きたくないわ。もっと言っべき言葉があるでしょ？」

「……うん。ありがと、ノワール。」

上を向いて頬に手を当てると、ノワールはそれに手を重ねて来る。

「ええ、どういたしまして……。ん……。ちゅ。」

「ん、む……。あう……。ふふ、この体勢でするのはちょっと辛いな。」

「それには賛成するけど、もうちょっと余韻というモノを、ね……。」

「ごめんごめん。っと、そろそろ行くか？」

「そうね、そろそろ陽も傾いてきそうだし。」

現在は 四時頃かな。

秋になったばかりだと言うのに、随分陽が落ちるのが早くなった。

「じゃ、ちょこちょこ見ながら帰りますか。」

「フフ、こんな時間に帰り始めるなんて、中学生みたいね」

「いや、中学生でも六時までには遊んでるだろうな……。」

見逃していた所を見ながら、来た道を戻って行く。

と、不意にノワールの足が止まった。

「……きれい……。」

横を見ると　そこにあつたのはドレスだった。

黒を基調にしながらも白を大胆にあしらひ、

繊細な金刺繍がされてある、職人芸と言うに相応しい物。

……悔しいが俺の場合、自分の技量が足りない為、

こう言った芸術的本物を創るのは無理なのだ。

宝具はそのまま顕現させられるが、こう言う『人』の物は劣化版しか創れない。

「なあ、ノワール……。」

俺の声にハッと意識を戻すノワール。

「あ、いや、あはは。綺麗ね、これ。」

「ああ。結婚式前に見つけてたら、間違いなくウエディングドレスにしてた。」

「フフ、ウエディングドレスにするには、ドレスのボリューム的に足りないわね。」

でも、黒って良いのかしら？」

「ん？無くは無いぞ。紫とか赤とか色々あるし。ま、一番ポピュラーなのが白だな。」

「へ〜。何でも知ってるのね、シュウは。」

「俺は知ってる事しか知らないよ……って、買わないのか？」

歩き出したノワールに聞くと、チヨイチヨイ、とノワールはドレスの下を指す。

で、見てみると なるほど、250の後ろに0が三つ付いてる。

「ノワール。」

「……………なに？」

「五分くらいしたら行くから、この先の『Bizarre Adventure』」

「喫茶店で待っていてくれ。」

「はああ……分かったわ。でも、三分しか待たないんだからね？」

そう言ってノワールは歩いて行った。……まあ、なにするか分かってんだろうけど。

むしろ分かんない方がどうかしてるんだろうけど。

「ま、とつとつと用を済ませないとね〜。」

そして、俺は再び一人で店に入るのであった。

「「ただいま〜。」」

「おう、おかえり〜。」

「あれ？思ったより早かったのね？てっきり二人でほ〜」

「ジル？子供たちノ前デソソナ下品ナ事言ツチャ駄目デシヨ？」

「あう……ごめん、エイルう……。」

帰って来て早々なぜに漫才見にゃあかんのかと。

「おかえりなさいです、愁磨さん、ノワールさん。」

「ただいま、キアルちゃん。アリアの相手してくれてありがとうだね。」

言いながらノワールはキアルちゃんの頭を撫でている。

キアルちゃんは、ジオンとエーリアスの娘だ。

少し緑の入った白っぽい水色の髪に、ジオンの金の瞳。

性格はどっちかって言うと母親似だから、割合は1：1くらいだな。

と、キアルちゃんの後ろからアリアがとてとと走ってきて、

ぽふっ、と俺に飛び込んで来る。

「……おかえり、パパ。」

「んんん。ただいま、アリア。」

「あ、ちょ、シュウだけずるいわよ……！」

キアルちゃんの頭を撫でていたノワールは何時の間にかこっちを向いて、

さあアリアを寄越せと言わんばかりに両手を広げていた。

「なんだよ。ノワールがキアルちゃんと戯れてるから。」

「それとこれとは別じゃない。」

「ま、それもそうなんだけどな。ほら、アリア。」

ママにもお帰りのあいさつしないとな。」

こくん、と頷いて、やはりとてとて走って行き、ノワールの胸にぽゅんと飛び込む。

「…………表現が違うのは、ワザとだぞ？」

「…………ママ、おかえりなさい…………。」

「んんん。ただいま、アリア。」

「「「似た者夫婦が…………。「「「

うん、ごめん。こればかりは否定出来んわ。

「さあ愁磨！！お土産はまだか！？」

ジオン……

「おう、勿論あるぞ。当然、催促したジオンは無しな。」

「さっすが愁磨！つと言つのは現物見てからにしましょうか。」

「ちゃっかりしてやがる……。ジルにはこれな。」

そう言つてジルに渡したのは

「……………愁磨？これ、なに？」

「何つて、見りゃわかるだろ？くびwンプルゲ！？」

「首輪貰つて喜ぶ女の子がいると思つてんの！？」

「いや、まあ、いない事も無いんじゃないか？」

「確かにノワールとエイルは喜びそうだけど……！」

「喜ばないわよ……！」
「ええ、シユウから貰えるなら何でも嬉しいわ。」

実に正反対……とはまた違うコメントありがとう。

「まあ、本気の品その一はさておき……。」

「やっぱり本気だったのね！？しかもその一って、まだ他があるの……！」

「安心しろ、他のは普通だから。」

えーと、こっちがジルで、こっちがエーリアスな。」

『闇』からひよひよいと買物袋を取り出し、二人に渡す。

「へー、エイルとお揃いなだね?」

「と言っても若干デザインは違うし、色は全く違うけどな。」

それぞれに黒＋赤と青＋白の服や諸々をセットで渡す。

ジルはミニ& amp ・ちよっとパンク系で、エイルは清楚系……にしたつもりだ。

「愁磨さん……?これ、値段が……。」

「ん?ああ、気にすんなって。」

「そうよ、エイル。シュウったら、何回言っても聞かないんだから。」

ぬうう……。財政に負担無いから良いじゃないか……。

「はい、キアルちゃんにはこれな。」

「ありがとうございます、愁磨さん。」

キアルちゃんにはあえて黄色系、暖色基調の、
明るめと言うかポップ？な感じの服にした。

「あ、あの、これ、私には派手なんじゃないかな〜と……。」

うん、言うと思ったさ。

「だってキアルちゃん地味〜な感じのしか着ないからな。

シツクとかならまだいいんだけどな。」

「だって……。」

……まあ、大魔導士の娘ともなれば周りの軋轢とか諸々が大きい
訳で。

キアルちゃんはただでさえ大人しい子なのに、更に引っ込み思案に
なっちゃったり。

「キアルちゃんは可愛いんだし、子供なんだから余計な事考えずに
突っ走れ！」

と言う訳で、気が向いたら着てくれ。」

「は、ハイ！えへへ、ありがとうございます。」

うん、美少女は笑ってるのが一番いいな。

キアルちゃんは・・・何だろう？紫陽花かな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」(ブンブンブンブン！)

「痛い痛い痛い！！あ、アリア。大丈夫、アリアのもあるから！

真打は最後に来るんだって！！」

アリアがまさかのク　ヤンになりそうです・・・。

いや、娘に好かれるのは父親としては嬉しいんだけどね？

「よっこいせつと。ハイ、これがアリアのだ。」

如何にも『中身は高級ですよ！』と言わんばかりの見た目の小箱を渡す。

「・・・・・・・・」(シュルル　ガサゴソ　パカッ

アリアは夢中になって箱を開けている。

お礼はしないといけませんよ、って後で教育し直さないと・・・。

「。。。」

「すっごい、なにこれ。可愛いだけじゃなくて・・・。」

「しゅ、愁磨さん。今日幾ら使ったのかしら？」

「ん、食事＋飲食代は全部で2000アスくらいかな？」

「随分安く済んでるわね……。」

昼飯が一番安かったからな。またあそこに行きたいな。

と、アリアが値札とか諸々外して部屋に行ってしまった。

「???…アリアどうした？」

「さあ……？女の子の考える事は分からん。」

「父親、しっかりしなさいよ……二十万!？」

あんななんて物買ってるのよ!!」

「娘の為に散財するのは親の義務だろう?」

「愁磨さんの場合、ノワールさんにも……いえ、何でも無いです。」

ガタガタ！ボタン！

「あ、戻ってきた。随分早 (ドフィン!!)ぐえ……。」

アリアがロケットが如く俺に特攻して来た……。

「パパ、似あう……?」

俺から離れたアリアは、さっき買って来たワンピースに身を包み、くるんと一回転してみせる。

「ああ、凄く似あうよー！アリアの為に作られたと言っても過言ではないー！」

「（ぱああああああー！）（・・・！）（トフッ

珍しく・・・いや、初めてだったかも　アリアが満面の笑みを浮かべ、

また抱きついて来た。

「まあ、いつもなら親馬鹿と言っただけけど、確かにアリアちゃんに似あうわね。」

「シユウ……。あなた、やっぱりそれ買ったのね……？」

ノワールは最早呆れている。

いいじゃないか、愛する娘の為に何かしたいだろう？

「・・・パパ。」（クイクイ

「ん？なんだ、アリア。」

「・・・ふふ、ありがとう。」

あああああああああああああもっ!!なんて可愛いんでしょうか
この娘は!!

「シユウ、鼻血鼻血。」

「おお、すまんすまん。」

ノワールにタオルで拭いてもらう。

「手慣れてるのが嫌だな~~~~~。。。」

「ド喧しい。」

つと、さてみんな。時間も時間だし晩飯食おうぜ。」

「ん?ああ、もう七時半か。 ところで愁磨。」

「ハイ、ジオンのはこれな。」

「いよっしゃああああああ!!心の友よ!!」

ジオンが渡された紙袋からそれを出す。

「な、なんだ?この不思議な布は.....!?!」

真っ赤な長い四角い布には、真っ赤な紐が付いている。

そつ、ふんどしだ!!

「受け取ってくれ。俺の故郷に伝わる、男の魂だ。」

「男の…魂!? ありがとう、愁磨! 一生使わせて貰うぜ!!」

『燃え』をこよなく愛する男、ジオン。

間違った事は言っていないよな?

「さて、久しぶりに俺が飯作るかな。なに食いたい?」

「え、いいわよ! プレゼント貰った上に……うえ、に……。」

「ジル、残念だけれど、私も愁磨さんの料理食べたいわ。」

そうね、シーフード系のグラタンが良いかしら?」

「はい、一品決定。順番に作ってるから、後はみんなで決めてくれ。」

「ん、グラタンと食い合わせ良い物って……」

あ、この間の夜食に食ったブルスケッタが良いな。チーズとトマト大量に。」

「なにそれ、美味しそうね。じゃあ、それで行きましょう。」

スープはどうする?」

「スープはコーンとオニオン両方作るぞ〜」。

「あ、そう？じゃ、後はサラダで良いわね。」

「流石に多いわね。シュウ、手伝うわ。」

「サンキュ、ノワール。」

「ブル：何とかは私分らないから、スープとサラダで良いかしら？」

「ん、頼む〜。」

俺達が料理を作っている後ろでは、アリアが褒められたり

ジオンが馬鹿にされたり・・・うん、平和だね。

「愁磨、ノワール、おやすみ。」

「あゝ、流石に騒ぎすぎたか……。おやすみ。」

「ジオンったら、すっかりおじさんね……。二人とも、おやすみなさい。」

晩飯を食い終わった後、大人戦隊は酒も入って騒いだ。

アリアとキアルちゃんはとっくの昔におやすみしてる。

「おう、おやすみ。　すっかり遅くなったな。」

「そうね。早く寝ちゃいましょう。」

ぬう、タイミングが無い……。無理矢理作るしかないか。

「あゝ、ノワール。……。プレゼントがあるんだが？」

ハイ、と箱を渡す。

「……これ、すごい重いんだけど。」

「うん、オレも渡された時ビックリした。」

聞いた所によると、黒龍の鱗とクロンダイトとか言う魔石を加工したモノらしい。」

「よいしょ……、これ、蓋も重いわね。」

ベツトに箱を置き、ギィイーと言う効果音と共に蓋を開ける。

「ええ、分かっていたわ、恐らくこれでしょうって……。」

・・・まあ、出て来たのは当然あのドレスな訳で。

反応が芳しくないのが怖いんですが……………。

「ノ、ノワール…………？」

「…フッフ、全く。なんて顔してるの？」

ぎゅうっ、とノワールはいつもより強く抱きついてくる。

「もう、嬉しくない筈無いでしょう？ありがとうございます、シュウ。」

「心臓に悪いって…………。」

神経は世界樹より凶太いけど心はガラスなんだからな…………？」

「知ってるわ。　　ねえ、今着て良いかしら？」

「いや、着られたら正直我慢ならんのだが。」

「ふう…………そうね。」

シチュエーション的にも服的にも勿体無いから、いつか着ましようか。」

「……………ざ、残念なんて思ってるんだからな!？」

「250万くらいなら幾らでも…………でも、ドレスがやっぱり勿体無いか…………。」

「…………今日の所は大人しく寝ようか。」

「そうね。ーシユウ。」

「ん?」

「ありがとう、愛してるわ。」

「だから、今そんな事言われたら、と…………。」

「俺も、愛してる。」

「……………うん、アリアが起きない事を祈ろうか。」

幕間 魔人と黒翼の初体験（後書き）

と言う訳で初 番外編でした。

愁磨達が居ないのは・・・、ゲフンゲフンですからね。
にしても、なんだかデジャヴな終わり方・・・。

さて、この話はとあるところからワープして来た物です。

ですので、感想ありがとう！とかなくても気にしないでください！

www

それでは、また次回！！アリーヴェデルチ！

第16話 魔人と英雄達は出会うようです（前書き）

作「連投です。ええ、連投です。」

愁「今回は・・・いきなりキンクリしたな・・・。」

作「友の死を悲しんだ愁磨は・・・引きこもってたからな。」

ノワ「ぶっちゃけると、そろそろ時間が来ちゃうのよね。」

ネカフエ的な意味で。」

作「今回の話、粗方考えてはいましたが急造なので・・・。」

最早適当か、って言う所があるかと思つので、「意見よろしく
です。」

作&愁&ノワ「」それでは、どうぞ!」」」

第16話 魔人と英雄達は出会つようです

Side ノワール

シュウは、ジオン達が死んでしまつてからの約200年間、殆ど『闇』の中に造つた私達の家閉じ籠つていた……。

葬式の時のシュウは、普段からは想像できない程、

表に感情を出していて、見ているだけで辛かつたわ。

「……………ノワール。」

シュウが声を掛けて来る。

表情はいつも通りに見えるけれど、私には分かつてしまつ。

「……お早う、シユウ。どうしたの？」

「俺は、そろそろ魔法界で動く。」

現在は1981年。既に帝国と連合が小競合いを始めているので、本来動くにしては、遅いくらい。

「……大丈夫なの？」

「我乍ら女々しいと思うけど、これは……必要な弱さだと思っから。」

少し表情を崩して、悲しそうに笑うシユウ。

「……大丈夫。私は、…私とアリアは、ずっと一緒に居るから。」

私は、そっとシユウを抱きしめる。こんな事しか、出来ないから。

「ありがとう、ノワール。……行って来る。」

シユウも、私を抱きしめてくれる。

・・・慰めてあげないといけないのに、

私はこれだけで嬉しくなって、満足してしまう。

「ノワール、アリアは？」

「そこ。ソファで寝ちゃってるわ。」

私が言うと、シュウはアリアの方に歩いて行く。

・・・・・・・・少しだけ寂しくなっちゃうのは、秘密。

「…………アリア。行ってきます。」

シュウはアリアの額にキスすると、私の方にまた来る。

「アリアを頼むな。『闇』からは自由に出入り出来るから。」

ああ、戦闘時は出れないけどな。」

「出れないんじゃないかって、出さないんでしょう？」

過保護なんだから…………。」

「幾ら強くても、心配なんだよ。…ん、…………んむ、あう…」

「んん…………んっ、フ、ちゅ…………ん…………あ、…………あふ…………。」

……フフ、そんなの、分かってるわ。」

「言わせたいだけだったのか？意地悪いな……。」

「失礼ね……。シユウ程じゃないわ。」

「それもそつだ。…行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

シユウン！と音を残して、シユウは外に出て行った。

…そろそろ新しく妾でも出来る頃だと思つたのよね。

S i d e o u t

S i d e ？フードの子供？

オレは今、メガロメセンブリアのジジイ共に言われて、
帝国に攻められてる戦場に向かっているとこだ。

といっても、まだ戦闘が始まってる訳じゃねえから、
攻められそうなのって言った方があってっけどな。

「フフ・・ナギ。まずは自己紹介しないといけませんよ。」

「あ？なに言ってるんだ、アル？」

「最低限の礼儀と言う奴ですよ。」

皆様初めまして。私はアルビレオ・イマと申します。」

「詠春、お師匠。お前からなんなんか言ってるよ？」

「なら、私もしないといけないな。神鳴流剣士青山詠春だ。」

「ワシはゼクトと申す。よろしくの。」

「二人まで?! どうしたんだ?!?!?」

「宇宙意志には逆らえんのじゃ。」

「ナギ。そんな事ですから、鳥頭なんて呼ばれるんですよ?」

「くっそおおおおおおおおおおお!!?!?!?」

オレの名前はナギ・スプリングフィールド! 通称《自称》、『千の呪文の男』だ!?!」

「自分で言つと痛いですね……………」

「うるせえよ!! ほっとk」

ドオオン!?!?!

と、前の方で爆発が起きやがった。

「?!?! ナギ!?!?!」

「ああ！！始まっちゃったのかも知んねえ！急ぐぞ！！」

ドン！と皆瞬動で爆音地点に行くと、そこには

「あーあ、最悪。血塗れになっちゃったよ。」

地面に転がった何かと、血塗れのせいで一瞬赤髪にも見えた、
銀髪のすっげえ美人の女がいた。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

ゾクウー！

俺は、『闇』から出て直ぐに、寒気を感じた。

敵とかでは無く、こつ・・・『不幸だ』な感じた。

・・・まあいいか。

さて、ここは・・・どこだ？

どう見てもヴリエサーフ・・・、森の中だ。さてさて、アーク出して紅き翼の居所を・・・

「そのの貴様！！止まれ！！！！」

・・・聞こうとした所で、前から魔法使いとしか思えない男が、
4、5・・・7人が俺に杖を向けて聞いて来た。

「なんでしょうか？」

俺は、声を大原アイリスフィールさやかさんに変化させ、答える。

変えておくと分かり易いからな。

「ククク、なんでしょうだつてよ。」

「戦場に逃げ遅れた女になにするって言ったら、コ」「コ」罅ぜよ」「パアン！」

喋る価値のない、屑がな。

「ヒイイイイ!!?!」

「お、女あ!!何をした?!」

仲間の頭が木端微塵になったのを見てビビってるのが2人、

他の4人は憤慨して、俺を睨んで来る。

「敵軍の兵士だ!!!かかれ!!!」

「『戦いの歌』！！」

二人が大量生産の剣を振り上げ、俺の方に飛びかかって来る。

「『罅ぜよ』罅ぜよ』」（ドッパァン！！）

言霊を使い、空中で二人の全身を吹き飛ばす。

血の雨が振るが、今はどうでも良い。

「『魔法の射手』サキタ・マギカ連弾・火の5矢！！」

その間に残りが魔法の射手を詠唱し終わり、撃って来るが。

「（避ける必要も無いな……。）」

俺は、そのまま突っ立って、10本の火の矢を受ける。

ボボボボボボボン！

「ハハハ！直撃か！！これでh」（パチン！！）（ドォン！！）

「『形態変化：モード 炎の大佐』」

セリフが終わらない内に、

俺はロイ・マスタング大佐の兵装を呼び、一人を葬る。

「（なかなかの威力だ。今の状態の出力で中級呪文より弱いくらいだな。）」

元々手加減用に創った兵装だったのだが……。

Alucard と併用したら、『燃える天空』くらいは相殺できるな。

「な、何故生きている?!

くっ、光の精霊11柱 集い来た「遅い。（パチイン!!!）」

ドオオン!!!

面倒なので、残る三人は大きめので止めを刺した。

……にしても。

「うっわあ、ミスったなあ。」

あーあ、最悪。血塗れになっちゃったよ。」

やっぱり蒸発させとけばよかったなあ……………。

「おい！！そのあんた！！！！」

後ろから、変声も終わっていない少年の声があった。

「（またか……………。」

と思いつつ後ろを向くと、そこに居たのは赤毛のガキ……………。

……ん？こいつもしかして……………。

「んな所でなにしてるんだ？しかも血塗れで。」

ナギ？は無警戒に聞いて来るが、他の三人は構えている。

「なに、と言われても。」

多分帝国兵だったと思うけれど、男に襲われたから応戦しただけ。」

俺の言葉に、他の三人は若干警戒を緩める。

まだまだ甘いな〜

「そ、そうかよ。た、大変だったな…… / / /」

ナギ？はなんか赤くなってる。

大方襲われてるところでも想像したんだろう。変態が。

いや、マセガキの方が合ってるか？・・・戯言だな。

「オレは、ナギ。ナギ・スプリングフィールドだ！！つ」

「『通称『千の呪文の男』だ』って言うんでしょ？分かってるよ。」

「お！！オレの事知ってたのかよ！！いや〜有名になったもんだ。」

「ついでに言うなら、通称じゃなくて自称で、実は使える魔法が5〜6個で、しかも学校中退だつて事かな？」

「な、なんで知ってんだよ?!?!?!」

・・・いかん。ナギをからかったら他三人が警戒上げちった。

そりゃそうだよね。

あ、女言葉なのはワザとだ。

「そんな事どうでも良いじゃない。

所で、後ろの方達は自己紹介してくれないのかしら？」

紳士としては好ましくない行為だと思うのだけれど？」

「……ゼクトじゃ。ナギの師匠を務めておった。」

「神鳴流、青山詠春。」

「よろしく、詠春さん、ゼクトさん。

後ろのフードの方は？」

と、俺はアル？に話を振る。

「フフフフ、残念ながら、

紳士に対して紳士的に行くつもりはありません。」

「「「え？」「」」

と、アルの言葉に耳を傾げる三人。

「フフフ、何のことかしら？…流石変態ね。」

「フフフ、貴方に言われたくありません。所で……。」

「なんです？」

「……『美《微》少女』について、どう考えますか？」

アル？の問いに、俺は

「フツ。手折るモノでは無い、愛でるモノだ……！」

バックに『ドーン!』と効果音が出そうな程断言する!!

「フフ、私は、アルビレオ・イマ。よろしくお願いします。」

スツ、とアルが手を出して来る。

「愁磨。愁磨・P・S・織原。よろしく。」

バツ!!

俺が名前を言うと、アルは後方に超バックした。あるえ〜?

三人もポカーンとしている。

「……………聞きますが、『あの』シュウマですか?」

「『あの』って言われても、分かりませんわ?」

「……………アル。まさかとは思っのじゃが……………?」

「ええ。『返り血染紅の雪の精』。二つ名そのままです。」

「偶然では無いのか?彼の者は伝説の『大魔導士』によつて、

旧世界に封印されたとなっていたはずじゃぞ……………?」

なーんかキナ臭いな。

「…アルさん。もしかして、『皆殺しアーカード』の事ですか？」

「…その名を知っていて騙るとは……。本物ですね？」

「ええ、本物ですよ。」

でも、なんで疑うんでしょうか？

大魔導士の三人と一緒に巻物書いた筈なんだけど、残って無いの？」

そう。俺はこの時代で有利になる様にと、あいつ等と一緒に物語を書いたんだ。

「アル、お師匠？さっきから何の話してんだよ？」

「残っていますとも。ナギ、一度は聞いた事があるはずですよ。」

『大犯罪者のアーカードは力を封じられ、旧世界に送られた。』

大魔導士の三人は、頻繁に様子を見に行っていたら、

いつの間にか友となり、アーカードは危険ではないと分かりました。

』

概要はこんなところですよ。」

「ああ！それなら俺も知ってるぜ？」

確か、『そしてアーカードは、自分の名前を三人に託し、

それを受けた三人は酷く感銘を受け、アーカードが』

って奴だろ？」

あの時コソコソしてると思ったら……。

俺の名前入れてやがったのか。あのポケどもが……！！

「ええ、その通りです。」

そして三人が残した、現最高賞金首にも拘らず、賞金無期限凍結。

100年間謎のままだったその本名が、『愁磨・P・S・織原』。

「御大層な解説御苦労様。で？」

大魔導士が友と呼んだ私を、まだ疑うの？」

「伝説の大魔導士が三人がかりで掛けた魔法が解け」

「アル、もう良いじゃねえか。こいつが本物だとしても、危険じゃないって分かってるんだからよ。」

「しかし、ナギー!!」

「それにそいつからやな感じしないしよお?」

「そーよ、アルビレオ。私が殺す気なら、とっくにやってるわ。」

「仮に、それが本当だとしましょう。」

では、貴方の目的は、なんですか?」

やっとここまで来たか……。

「私を君達の仲間にしてくれませんか?」

「「「………は?」「」」

おお。空気化した詠春も反応した。

「八八八八八八!!」

「嘘だろ?! だって見た感じ女だし、声だって女じゃん!!」

「信じないなら触ってみるか? ちゃんと付いてるぞ?」

「いいぜ!!? 確かめてやるうじゃねえか!!」

「一応、ワシも確かめておかんな。」

「……女で無いと言うなら、俺も行くぞ。」

「貴方達……orz」

審議中

「……でかすぎる……。」

「勝負にすらならんじゃと……?」

「女顔の奴に負けるとは……!!」

終了

o r z o r z o r z

そこには、膝を付いた負け犬が三人いた。

「……すっかり馴染みましたね。」

「で、お前はどうするんだ？行つとく？」

「いえ、男としての自信を失いたくないですし、

それに、私は男だと分かっていますので。」

やっぱりアルはからかうのが難しいな……。

「で、お前らってなんか目的あつてこんな所通つてたんじゃないのか？」

「ああ、そついや忘れてたぜ！」

俺ら、戦場に行かないといけねえんだつた！」

「おお、そうじゃったな。行こう。」

「……すっかり忘れていましたけどシュウマ、
貴方はどれほどの強さなんですか？」

あのアーカードとは言え、強さが分かりません。

私達と戦場に行く以上、それなりに強くないと

「

「えー？大魔導士三人が、手も足も出ないくらい？」

それとも、軍相手に掠り傷すら負わずに殲滅出来るくらい？」

俺の本気顔にアルは頭を抱える。

「……伝承と違うのですが？」

「なんだ、歴史を覆して欲しいのか？」

「……それはまた、別の機会にしましょう。」

「アル　　……！！シュウマ……！！置いてくぞ……！！……！！」

「俺はもう来てるぞ？」

「「「「なあ?!」「」「」

お。俺の速さにアルも驚いてるな。

「はっはっは、小僧!どっちが先に着くか勝負だ!」

「え? ハッ!おもしれえ!」

「行くぜ!!3・2・スタート!!!」

ズサー。っ。。(っx(詠・ゼク・アル)

「ちよ、おま?!ずりいぞ!!待てコラア!!」

「待てと言われて待つ奴はいねえよ!!」

その後、向かった戦場で俺(「アーカード」)が復活した事が

舌打すると、全速でそこに飛び、女の子をキャッチする。

「アアアアアアアア　アアア……………え……………」

と、悲鳴を上げていた子が、不思議そうに俺を見上げて来る。

「大丈夫。君は俺が助けてあげるから、安心して。」

頭を撫でつつ、安心出来る様に微笑んでやる。

「え……………／／あ、わ、分かったのじゃ……………／／／／」

「うむ、よろし、おおっと。」

ブオオン！！とドラゴンの一閃が来る。

それを片手で受け止めるのだが

「によわ?!」

飛行術を使っていない事を忘れていた俺は、

その質量差故、木を薙倒しながら吹っ飛ばされる。

今度は、ドラゴンの腕が振り下ろされる。

「あ、危な
」

ドン………

と、俺はそれを、今度はきちんと受け止める。

「い………え？」

「じめん、首に撞ってて。」

「う、え?! / / あ…わ、分かったのじゃ / / /」

「素直で宜しい。フン………」

ブーン……とドラゴンを投げ飛ばし、

光子剣『クリュサオルChrysaor』を呼び出し振り被ると、

ブンッ

「あ、ありがとう／＼助かったのじゃ。」

「どー致しまして。可愛い女のk「姫様——!!」」

あっちゃー！。任務失敗か……。ま、良いか。

「それじゃね。」

もう一人で出歩いちゃダメだよ？」

「ん、ああ。お、お前!!名は何と云う?!／／」

えー……。参ったなあ。本名言ったらダメだろ？

帝国内に『紅き翼』が居たら問題だし!!

「こ、今度会った時に!!じゃあね!!」

ドヒュン!!と俺はマツハで逃げて行った。

「あ、おい!!待て!!!!」

ま、会う事なんて無いだろうし、良いだろ。

S
i
d
e

o
u
t

Side 黒づくめの男とヘラス族の男

「対象は（ターゲット）は……、」

スッ

「この二人の男と、二人の少年。」

「フン、ヒョロイ奴等と優男とガキ共じゃねえか。」

「そして、この……男だ。」

スッ

「あ？これ女じゃねえのか？」

「……いつこそ、数百年間どつやってか王都・帝国・メガロの

搜索から逃れていた、『皆殺しアーカード』だ。」

「なに?!こんな女…男が、あの『皆殺し』か!?!?

マジで封印が解けていたとはな…。」

「目的が何なのかは分からないが、連合側についているのだ。

我ら帝国の敵である事に間違いはない。」

「こんなのがあの伝説のとはねえ。楽勝そうじゃねえか。」

「こいつらの外見に騙されるな。」

オスティア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。」

「既に精鋭で組織された討伐隊も送ったが、

悉く返り討ちだよ。」

「君が望むなら部下もつけよう。正規兵では無く、

傭兵・賞金稼ぎになってしまっが「いらねーよ」「?」

「俺様一人で十分だぜ。任せときな。」

愁磨が介入して数カ月。

八面六臂の活躍をする『紅き翼』に、暗雲が立ち込める。

S
i
d
e

o
u
t

「ごめんなさい。」

作「今ある感想もろもろには返信致しましたので。

それでは、この辺で〜。」

作& a m p ;愁& a m p ;ノワ「「「アリーヴェデルチ！！！」」」」

愁「お前、いつの間に復活したんだよ……。」

作「俺、ゾンビツスから。」

ノワ「またタイムリーなネタを……。」

第17話 物語は大きく変わるようです(前書き)

ボワナセーラ、aitleneです。

作「しかし、大戦期の書き難さと言ったら無いですね……。」「
愁「時系列とか、すつごく曖昧だしな。」「

ノワ「とりあえず、感想感謝行きましょうか。」「

作「でわでわ、たくみですよw様、ゆや様、 剣の舞姫様!！」

愁「感想、ありがとうございます!!!」「

作「クウインディ!!」「

作& a m p ;愁& a m p ;ノワ「「「ペルファヴォ レ!!!」「」「

第17話 物語は大きく変わるようです

S i d e 愁磨

俺達は今、アルギュレーの辺境に居る。

初めの内は伝説になっていた俺が連合側に加わった事と、

俺達の活躍に大喜びしていたジジイ共だったが、

戦場に出ては一撃で敵艦を全て薙ぎ払う俺。

鬼神兵をぶった切る詠春、重力で押し潰すアル。

中級呪文を無詠唱で嵐の様に使うゼクト。

馬鹿げた魔力で『千の雷』を使うナギを見て、危険分子であると判断したのだろう。

俺は凍結中にはあるが賞金首だからな。

その為、懸賞金だけが上がって行くと言う変な事になっている。

尤も、大々的には公表されていないんだがな。

今は確か・・・、5000万だったかな？

ちよつとずれたな。えーと、そこでジジイ共は、

小競合い程度すらないこの辺境に俺達を飛ばし、

支持者を増やさせない腹積もりなのだろう。

で、今俺達が何をしているのかと言つと

。

ぐっ ぐっ ぐっ

「んっ ぶっ ぶっ」

こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ」

「ああ。俺達と詠春の故郷だな。」

「俺達といっても、私とアリアは違うじゃない。」

「ま、第二の故郷って事で。」

あ、ノワールとアリアはもう紹介したぞ？

こいつ等とは四六時中一緒に居る事になるからな。

「んじゃ、早速肉を」

「トカゲの肉でも旨いのかのう？」

「だから俺が創造で何か肉を、と言ってるのに。」

「あっ！ナギ、おまつ…何、肉を先に入れてるんだよ!？」

「まあまあ、いいじゃねえか詠春。」

「バツ、バカ!!知ってるだろ?!」

火の通る時間差というものがあつてだな」

「そうだけ。旨いもんから先だよ。ホラホラ!」

ヒョイ ヒョイ

「まずは野菜からって言うんだろ？」

分かってる、って、あっ!?!ナギ、馬鹿野郎!!

肉を白滝の横に入れるんじゃねえよ!!

硬くなっちまうだろうが!!!!」

「何イ?!そんなのか!!!？」

「フフ・・・詠春、愁磨。知っていますよ。」

日本では貴方達の様な者を、『鍋將軍』・・・

と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・シヨーゲン!?!」

「っ…強そうじゃな。」

「分かったよ詠春、愁磨。俺の負けだ。」

今日からお前等が鍋將軍だ。」

「全て任す。好きにするが良い。」

「（『鍋將軍』だってよ?! 恥ずかしいな、アル。」

弄るネタになりそうだぜ）」

「クイクイ）…パパ、鍋將軍じゃなくて鍋b」

「そつとしいてやれ、アリア。」

「ん。わかった……。」

「（今アリアちゃんが折角・・・）」

それ、寧ろ日本じゃ忌避される称号なんだが…。」

「おお、このソースうまいぞ？」

「ホントだ、うめえ!!?」

「これが日本の誇るしょうゆだよ。」

「それに大根おろしですね。」

「詠春。味噌を忘れるとは俺に対する挑戦か!!?」

「違う?!」

それにナギ、お前は日本に来た時寿司食ったろ。」

「という事は、ナギは醤油無しで寿司を食ったのか!!」

通だな!!」「(´・`・´) b ビシッ!!」

「バカだから忘れてるだけだ。」

「バカって言うんじゃないやねえ!それにしてもこの旨さ、

姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいだな。」

「姫子ちゃんて誰の事かしら？」

「姫子ちゃ…？ああ、オスティアの姫御子の事じゃな。」

「あー、俺らが入る前の事か。そりゃ知らんな。」

オスティアって、俺の伝説の発祥地だから、

俺の特徴とかが細かく残ってるから、行きにくいんだよな。

「…ハイ、リル。あ〜ん。」

「クピ！」（モギユモギユ

「……おいしい？」

「キュルイ〜」（コックリ

「……そう。」

アリアは自分の膝に乗っているリルに肉をあげ、

僅かに笑う。

ああああ、かわええなあ、どっちも。

「シユウも少しは参加しなさい。子煩悩なんだから。」

「…何だノワール。子供に嫉妬してんのか？」

相変わらず可愛いな。」

「べ、別に嫉妬なんてしてないわよ!!!? / / /」

「そこ。イチヤつかないでください。」

…まあ…戦が終われば、彼女を自由にする機会も

掴めるやも…です。」

「その戦だが…やはりどうも不自然に思えてならん。」

「ん？何がだ？」

「「「「この鳥頭が…」」」」」

「何もかもだよ、お前が言いだしたんだろっつが。」

それと肉ばっか食うな、鳥頭が。」

と、俺達が喋ってる所に、

ヒュン！！

ドカツ！！！！

いきなり大剣が飛んで来て、鍋を弾き飛ばし

パシパシパシ ヒョイヒョイヒョイ パシパシパシッ

それを詠春以外が反応し、三人が肉だけを掻っ攫う。

「ノワール、キノコ頼む。俺野菜と豆腐な。」

パパパパパパパパパパパパパパパパパパ！！

「相変わらずキノコ嫌いなのね……。」

シャシャシャシャシャシャ！！

と、二人で汁以外を全部取り切る。

あーあ、おじや食いたかったのに、勿体無い。

「お食事中失礼~~~~~ッ！」

俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！

いっちょやろっぜッ」

崖の上に居るマッチョが叫ぶ。

「なんじゃ？あのバカは。」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。」

おい、えいしゆ、むおー!?!?」

肉を食いながらナギが向くと、そこには鍋を被った詠春。

「フ…フフフフ…フ……………食べ物で粗末にする奴は…」

あ。キレたな。

「どおーしたー！ー来ねーのかあー！ー!?!?」

来ねーならこっちから

キンッ

いッ……………。」

「斬る。」

ギキン！！！！ バカアッ！！！！

何時の間にか詠春がエプロンを脱ぎ、

一瞬で間合いを詰めジャックの剣を斬り、

そのまま戦闘になる。

「うお?! あんたマジつええな! チョイまたね?!」

「ふざけるな！！本気で戦え！！！」

「ソースか。だが、あんたらの事は調査済みだぜ？」（ポイポイ！

ボウン！とダッチワイフが四体（一体ロリ）が出て来る。

「情報その一、生真面目剣士はお色気に弱い。」

詠春が一瞬怯むが

「舐めるな傭兵！！！！！！！」

ドガアアア！！！！

「うお？！な、何で効かねえんだ！！？」

詠春は構わず攻撃する。だって

「俺が好きなのは、黒髪の大和撫子だけだああああああああああ
！！！！！！！！！」

「え、詠春？どうしたの……貴方ですか、愁磨。」

「調教済みです」

元々黒髪好きだった詠春と一晩語り明かした結果、

それにしか反応しなくなったのだ!!!

後悔はしていない。自重もしなかった。

「心残りなのは、お姉様好きに出来なかった事だ……。」

「詠春……。あの頃の貴方はもう居ないのでですね。」

ただし

「ハッ！あらゆるジャンル揃えといて良かったぜ！」（ポイ！

出て来たのは

黒髪の、『ちよっと』、

アリアの胸に、先程の鍋汁が数滴飛んでいた。

「な、ナギ！！ゼクト！！逃げますよ！！！！！！」

「ノワール。今すぐアリアを風呂に入れ、着替えさせるんだ……」

「え、ええ。分かったわ。あ、アリア、行きましょう！！」

「…パパ、ごめんなさい……」

ナデナデ

「アリアは悪くないから大丈夫。パパは怒ってないよ。」

さ、ノワールと一緒に行きなさい。」

「うん、わかった……。」

音も無く、二人は俺の『闇』に入って行く。

「……………」

「……」

「ト」

「さあ、覚悟は良いか……?」

「……え?じよ、情報その5アーカード……」

特徴……『伝説』『嫁と子をこの上なく愛している』……。

「そう、その通りだ傭兵。」

あとほりルも愛していると足しておけ。

ああ、だが安心していいぞ。今回の被害は、

俺の可愛い可愛いアリアの服が汚れただけだ……………。」

「あ、アハハハ……。じゃ、じゃあ俺はこのh「ガシィィ!!!!」」

「よって、『炎焼き2万回』で許してやる。」

「え?」

「『形態変化：モード 炎の大佐 形態付加：Alucard』」

大佐の軍服の青が黒くなり、それ以外が紅くなる。

「さあ、お前の罪を数えろ……………!!!!!!」 (パパパパパパ)

これラカン『紅き翼』入らねえんじゃ

と思った時期もありましたが、男は拳で語り合う生き物。

ナギとの戦闘を重ね、何時の間にか『紅き翼』に入っていた。

と、俺達がアホな事をやっている内に、

帝国が実戦では初となる大規模転移魔法を使い、

グレート＝ブリッジを落した。

それによりジジイ共が無駄に重い腰を上げ、

遂に俺達が出された。

「と、言う訳で、此処がグレート＝ブリッジです。」

「何言ってるんだ愁磨。」

「事後報告。まあ、気にすんじゃねえよ。」

「そうかよ。んじゃ、行くぜ!!!」

「味方に魔法当てるなよ!!!」

ドン!!!とナギが突入して行ったのを確認し、

「……アル。」

隣に居たアルに話しかける。

「……何でしょう?」

「ナギに伝えるのは、お前の仕事だぞ。」

「……ええ、分かっていますよ……。」

「そうか。なら、今は行くぞ!!!」

「ええ、そうですね!!!」

ドン!!!と、俺とアルも飛び出す。

「（『ノワール。暫くは外界視聴遮断するぞ？』）

「（『了解。時間差設定するの忘れないでね。』）

「（『 オッケ。これでそつちで一日、

こつちで百日になった。』）

「（『 ……パパ、がんばってね。』）

「（『 いよっしゃ！！任せろ！！』）

「（『 じゃあね。晩御飯には帰って来るのよ。』）

「（『 楽勝。行ってきます。二人とも愛してる！！』）

プツンと回線を切る。

もう既に、味方は退避し終わっている。

「よっしゃ！来い！『飛天鳳舞』 『金剛夜叉』！！

お前等に恨みは無いが、ここは戦場だから、な……。」

俺は二刀を呼び出し、真の力を出す。

「『目覚める、飛天鳳舞・・・』

そして 歓喜・・・せよ!!!!」

ギチィツと音がし、剣の形が変わって行き

キィィィィィィィィィィンンン

『飛天鳳舞』は名の通り、鳳凰の翼の形を模した、

2m以上はあるが、重さなど感じさせない美しい大剣になる。

「『吼える金剛夜叉・・・』

そして 悟りを!!!!」

バギヤアアアアアアアアアア!!

「な、なめんな!!まだまだこれからだよ!!!」

「そうかよ! 『救世ノススメ』稼働。頼む、アルデヒャルト『劍聖』」

(. . . 私、いるのかしら? . . . まあいいわ。

インシュテール雷帝が認めたから、力を貸してあげる。(

「(『サンキュ。』)」

……なら、しっかり目に焼き付けろ!!

そして考える!! テメエが何をやっているのかを!!」

「ああああああああああああああああああああ!!」

戦闘開始から5時間。

帝国の勝利に終わるかと思われた奪還戦は、『紅き翼』の参加により、

連合側の勝利で終わった。

・・・この戦争が終わってからのナギは、

自身を『正義の魔法使い』と言わなくなった。

俺とアルの言葉に考える所がある様で、よかった。

そして、幾度か戦闘を繰り返した後、

俺達『紅き翼』はガトウの呼び出しで、メガロの首都に来ていた。

「俺達の故郷がある旧世界じゃ、強力な科学爆弾、核って言うんだが、

それが開発されてて、こんな大戦はもう起こらねえ。」

「始めたが最後、全員核爆弾で全滅だからな。」

「ああ。だが、この戦はいつ終わる？帝国を滅ぼすまでか？！

この世界にや核以上の破壊力を持つ大魔法もある。

こんな戦やってても意味はねえのに！！これじゃ

「

「これじゃまるで、誰かがこの世界を

滅ぼそうとしているかのようだ　　ですか？」

700

「その可能性は、考えてても良いかもしれないぞ。

俺と少年探偵団の成果が出た。」

「ガトウ。やっと来たか。」

「やはり奴等は、帝国・連合双方の中枢にまで入り込んでいる。

名は、秘密結社『コスモエンケレティア完全なる世界』だ。」

「で？それを言う為に態々俺達を首都まで呼んだ訳じゃないだろ？」

「察しが良いな、愁磨。会って欲しい協力者が居るんだ。」

あー、そうか。此処でアリカ姫が出て来るんだったな。

「協力者？」

「そうだ、ナギ・スプリングフィールド。」

「マクギル元老議員！あんたが?!」

「いや、ワシちゃう。主賓はあちらの方々。」

そう。この時の俺は油断していた。

俺の少ない知識の中の、原作通りに進んでいた事で。

「ウエスペルタティア王国第二王女、

アリカ・アナルキア・エンテオフユシア王女と

」

『この世界で俺が起こした行動の結果は、

未来へ行くにつれ大きくなる。』

数百年前に歴史に介入していたのだ。

今まで大きな変化が無い方がおかしかったのだ。

「第一王女、エルザ・ファミリア・エル・プレミロディオール王女。」

そして、大きな変化はいずれ、さらに大きな変化を呼ぶ。

第17話 物語は大きく変わるようです（後書き）

作「と言う訳で、アリカの従姉妹・・・、

いえ、義姉登場です!!」

愁「これは・・・、本格的に、そういう事なのか・・・。」

作「それにしても、ノワールとアリアが出てこないな・・・。」

ノワ「出ないって言うよりは、出れない・・・かしら？」

大戦期ってどうしても戦いメインでしょうし。」

愁「戦闘は俺メインだし、実生活も『闇』内の家の方が快適だしな。」

作「書き方が、いわゆるルート形式に似てるせいかな？」

一人攻略 ループ無しで二人目攻略開始・・・みたいな。」

ノワ「要するに、皆攻略してハーレムendするまでは、

攻略済みキャラが空気になりがち、と。そういう事ね・・・。」

作「しかもD・C・並みの攻略人数だからな。。。」

メンバー一人とデートしたりは、やっぱり外伝として入れて行く
しかない。」

愁「さてさて。次回の更新は、例によって明後です。」

作「遂に動き出す原作の影！果してフラグの運命やいかに?!」

ノワ「それではこの辺で失礼するわ。」

作&mp;愁&mp;ノワ「「アリーヴェデルチ!!!」」

第18話 姫様の想いは重いようです(前書き)

こんばんは、aitleneです。。。。。

愁「テンションひつくないな！。どうしたんだ？」

作「昨日、急に深夜シフトになってき。死にそう。。。。。」

ノワ「無理はするものじゃないわ。アリア、向こうで寝かせて来てちょうだい。」

アリ「。。ん、わかった。。。こっち、きて。。。。。」

作「zzzzz。。。」

愁「重症だな。。。。。」

ノワ「えーと、それではいつものを。

たくみですよw様、代給品様、zero様、剣の舞姫様。」

愁「感想、ありがとうございます!!」

ノワ「えーと、今回は。。。前半はシュウが掘った墓穴の説明ね」。

愁「作者め。。。。orz」

アリ「。。。。ねかせてきたよ。」

ノワ「ありがとう、アリア。」

アリ「えっと。。。。それでは」

愁&ノワ&アリア「」ぎんぞー!!」

第18話 姫様の想いは重いようです

Side アリカ

私は今、部下のガトウに連れられ、

メガロメセンブリアの首都に来ている。

かの『紅き翼』が私達の協力者と言う事で

「ねえアリカ。私は『紅き翼』似合うのが楽しみでいけないわ。」

この方は、私の義姉、第一王女エルザ。

政治手腕は、王女中では三番目。

それが何故第一王女、つまり、王位継承権第一位かと言つと、

継承者中、一番王家の魔力が強い為じゃ。

「義姉君。その様な対応はあやつらの前では控えてください。」

私と同じ程に、強く国民を思っている一人。

「分かっているわ。私は王女としての責務を果たしに来たのだもの。

ね、アリカは『紅き翼』で誰が一番気になる？

私はやっぱりナギなだけねど？」

義姉君から唐突に質問される。

気になる、と言つのが気になるが、強いて言つならば

「そうですね。『アーカード』、シュウマが気になります。」

「うーん、やっぱりそうなのね。何であの賞金首が好きなの？」

「す、好きとかそういう感情ではなく！！

ただ、何となく気になるのです。」

初めて噂を聞いた時は、ただの犯罪者としか思わなかった。

しかし、乳母に『アーカードと大魔導士』を読んで貰ってから、

アーカード・・・シユウマについて調べて行つた。

そして、出て来た数百年前の本は、本人達、

シユウマと、我が国の伝説『大魔導士』たち直筆の本。

それは日記で、伝承とは全く違う事が書いていたのじゃ。

懸賞金の元になつた街中での大量虐殺は、

実は誰も死んでおらず、面白おかしく報道されただけじゃと言つ。

伝承では『辛勝』となつていた5000人以上の軍を相手に、

自身は掠り傷一つ負わず、軍に一人の死者、

重傷者すら出さんで勝利した、と書いていた。

それを見た大魔導士の方々はシユウマを勘違いしていた事を悟り、

直ぐに友になつたと言つ。

偶に王都に来ては三人と遊び、

二人の恋仲まで助け、その結婚式にまで参加し、大魔導士も、シユウマの結婚式に参加したそうじゃ。そして、家族以外は誰も見られなかった。彼らの死目にまで立ち会っている。

我が国に伝わる、『最強の正義』と『最凶の悪者』。

男性にも拘らず、姫と呼ばれるその美貌。

伝承の嘘に関しては、不殺の虐殺者。

調べれば調べる程人が分からなくなり、

私は、何時の間にかシユウマと言う人物に没頭しとった。

義姉君は恋じゃないか、と語っていたが、違う・・・と思う。恋などしたことも無いし、されたことも無いのじゃ。

しかし今日、ここに、かのシユウマが居る。

会って話せば、人と成りが分かるじやろうから、

それから考えても良い事じゃ。

「ふむ。私がとやかく言う事ではないわね。

頑張りなさい、アリカ。

私も、今回は本気だから、ね。」

義姉君は、ナギファンクラブのナンバー2。

ナギに対する思い入れは、普通ではないのじゃ。

「王女なのですから、傭兵などを選ばずとも……。」

……かく言う私は、アーカードファンクラブの

会員ナンバー1にして、創設者なのじゃが。

……いや、好きとは関係無しに、『紅き翼』で唯一

ファンクラブが無いのが気になっただけじゃ。

「そう言うアリカだって」

と、話していると

「マクギル元老議員！あんたが?!」

「いや、ワシちゃう。主賓はあちらの方々。」

・・・アホなやり取りが聞こえて来おった。

が、ここで止まっている訳には行かぬので、歩を進める。

「ウエスペルタティア王国第二王女、

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女と

第一王女、エルザ・ファミリア・エル・プレミロディオル王女。」

狙っていた様なタイミングで、私と義姉君の紹介が入った。

「初めてお目にかかる、『紅き翼』の諸君。第二王女のアリカと申す。」

「同じく第一王女、エルザと申します。よろしく、ナギ様。」

私達が自己紹介すると、あちらも返して来る。

「初めまして姫様！俺はナギ！この『紅き翼』のリーダーだ！！

お姫さんに名前を覚えて貰ってるたあ光荣だぜ！！」

赤毛の小僧が叫んでおるが・・・なるほど。

こやつが『千の呪文の男』か。

確かに、保有しておる魔力はかなり多いが、品性の欠片も無い。

義姉君はこの様な者の何処が良いのじゃ？

「初めまして。私はアルビレオ・イマと申します。」

と、笑みを浮かべた優男が言う。・・・考えが読めん奴じゃ。

「神鳴流、青山詠春です。」

簡潔に言つたのは剣・・・刀、と言っんじやつたな　　を持った男
性。

どこか生真面目な雰囲気がある。

「フィリウス・ゼクトと申す。

ナギの師匠をやっとった、位しか紹介がないのう。」

見た目に似合わず、時代がかった言葉で言う子供。

いや、風格がある故、子供と言う訳ではないのじゃろう。

「よろしく、姫さん！！俺はジャック・ラカン！！

南じゃ無敵って有名なんだが、知ってるか!？」

「喧しい。気安く話しかけるな、下衆が。」

何なのだ、この筋肉ダルマは。全く持って不愉快じゃ。

「…愁磨。愁磨・P・S・織原。

『皆殺しアーカード』、って言った方が、

あんだ等によ分かり易いだろう?」

そして、あの方がおった。

I

Sub - Side 愁磨

まさか、こんな所でこれほどの

イレギュラーが来るとは思っていなかった。

アリカ姫が第二王女だと？

これじゃ王位を継ぐのはエルザになり、

自動的に、投獄されんのもエルザ・・・か？

こんな原作の根源に関わる程の改変が起こるとは。

「喧しい。気安く話しかけるな、下衆が。」

おっと。ジャックが振られたから、次は俺か。

……ここは影を薄くしておくか。

「…愁磨。愁磨・P・S・織原。『皆殺しアーカード』、
つて言えば、あんた等じゃ分かり易いだろう？」

……あれ？これ逆効果じゃね？

「ぬ、主^{ぬし}が、あのアーカードか。伝承通りの外見じゃが、
覇気は随分大人しいのじゃな。」

大魔導士の三方が苦戦したと言うが、嘘の様じゃな。」

……そう思ったら、アリカ姫が話しかけて来た。

「さて、な。真実を知ってるのは俺達だけだ。」

「いつそ、主が真実を語っても良いのではないか？」

「……他人に話す事じゃねえよ。」

ナギ達にも軽くしか教えていないのだ。

出会ったばかりの姫様に教える義理はない。

「な、何を言うか?!」

「話す気はねエって言うてるんだよ。」

「……はあ。詠春、後任せたわ。」

面倒になった俺は、返事を待たず転移した。

S i d e
o u t

I

「…愁磨。愁磨・P・S・織原。『皆殺しアーカード』、
つて言えば、あんた等によ分かり易いだろう？」

その声は、鐘が奏でる様なアルトで、男性のモノとは思えん。
美しい銀髪は、女の私でも羨む程サラサラで透き通っており、
肌は雪の様に白いのに、病的なモノは一切感じさせぬ。
手足もスラリと長く、女性と見分けるモノは胸しかない。

「ぬ、主があのアークードか。伝承通りの外見だが、
覇気は随分大人しいのだな。」

大魔導士の三方が苦戦したと言うが、嘘の様じゃ。
何より驚いたのが、保有魔力。
多すぎて漠然としか分からぬが、

王都の魔法使い全員を足しても絶対に足りぬじやろつ。

「さて、な。真実を知ってるのは俺達だけだ。」

意地の悪い物言い。これも、あの日記と同じじやな……。

「いつそ、主が真実を語っても良いのではないか？」

「……他人に話す事じゃねえよ。」

た、確かに、あれは簡単に話して良い事ではないが、

しかし、その様な言い方をしなくとも良いのではないか？！

「な、何を言うか？！」

「話す気はねえって言ってるんだよ。」

はあ。詠春、後任せたわ。」

そう言っつて、いきなり転移してしまった。

「あ、おい！愁磨！！？全く……申し訳ない。」

「いいえ。後であの方に伝えて貰っても良いのですが…

ああ、アリカ？頼み事があるのだけれど？」

「……なんじゃ？義姉君。」

「貴方なら、彼の足跡感知出来るでしょう？」

ちよつと行つて来て。」

「……命令とあらば、仕方あるまい。」

「よろしく（頑張れ！！）」

……よく分からん義姉君の言葉を放おき、

私はあの方の居場所を探ってみると、

存外近い事に驚きながらも、歩いて行つた。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

ハア〜・・・。

まさかアリカに話しかけられるとは。

あそこでのその役割はナギだった筈・・・。

・・・うーん、俺の事色々知ってる風だったし、

フラグ率的にはゲーム中盤には入ってる感じだな。

ってか従妹・・・いや腹違いか 　　って、

安直過ぎるだろ、宇宙意志。

見た目は、エルザの方がアリカより1、2歳年上。

髪は肩までのセミロングで赤みがあった白金。

軽く見えたが、瞳にはアリカと同じ光があった。

右の目は若干アリカより明るい蒼だったが、
左はハッキリした、眩い程のエメラルド。

多分、王家の力が強い為だろうな。

っと、考察はこの位にして、

このイレギュラーの対策を考えないt

「シユウマ殿。話の途中だと言うのに、

いきなり転移するなど、無礼だとは思わぬのか？」

……世界よ。俺に恨みでもあんのか？

「一向に思わんね。初めて会った奴の過去を、

世間に公表したら？って聞く方が無礼で不躰だと思うんだが？」

大きなイレギュラーがあるなら、

イレギュラーで無くしてしまえばいい。

王族の姫だ。一般の人間、いや、賞金首に、

ここまで言われたらキレルよ

「それは、……すまんかった。

シュウマ殿とは、初めて会った気がしなかったのじゃ。」

そう言っただけの隣に来るアリカ姫さん。

……この場は仕方ない。

適当に相手して、後はナギに押しつけりゃ良いだろ。

「会ったは今日が初めてだよ。どうしてだ？」

前世の記憶とか乙女チックな事言うのか？」

「前世、か。外れてはいないかもしれん。」

……煮え切らん。どう言う事だっただよ？」

「フム。…前世、昔、ね……。何か資料でも読んだのか？」

「おお、よく分かったな。」

実は、書庫で不思議な日記を見つけたのじゃ。」

「ふーん。で、その日記と俺にどう関係が？」

「それが、主と大魔導士の直筆の日記でな。」

「ブウツ?! な、あれはあいつ等が捨てた筈だぞ?!」

「それが捨てられていなかった、と言う事じゃな。」

いや、歴史を覆す事ばかりで驚いたわ。

ああ、そうそう、日記の最後に書いておったぞ。

『我等の親友との真実の記憶を此処に記す』とな。」

「! / / / そ、そうかよ。」

・・・あいつ等のせいで俺がこんな目に遭ってんのか。

今度転生先に行って虐めてやる・・・!!

「お? なんじゃ、照れておるのか？」

日記の通り、意外と可愛いのかな？」

「チツ！／／／

お、お前こそ何でそんなモン見つけたんだよ。

そんなモンが、簡単に見つかる様な所に

置いてあるはずねえだろ？」

「うつ？！そ、それは、そのじゃな。

そう！大魔導士達の事を調べていたら見つけて…。」

「嘘つけ。姫様程度の道楽で見つけられるんなら、

とつくの昔に学者が見つけてんだろ。」

「グ？！そ、それはたまたま……。」

「それこそねえよ。

となれば後は、禁書庫で見つけたか、

別の用件で探して見つけたか、だな……。」

「う、あ、くうう……。」

・・・何で焦ってるんだ、この姫さんは。

「……と言っても、こんなの見つけるとしたら

あいつ等か俺かのどちらかの事だ。

嫌われ者の俺を探す奴はいない。よって！

お前は、俺の事調べている時に見つけた！！

違うか！？」「m9）、（　　）ビシィ！

「クツ、ああ、その通りじゃ！！ノノノ

お主を調べていたら見つけたのだ！悪いか？！」

「いや、別に悪くはねえけどよ？」

・・・あれ？何時から推理モノになった？

いや、それはどうでも良いんだが。

何か、姫様が鉄面皮じゃ無くなってる？

さつき皆が居た所じゃ、原作の雰囲気のままだったのに。

「で？何で俺の事なんか調べたんだよ？

モノ好きにも程があると思うんだが？」

「……私が幼少の頃、乳母にお主の物語を聞いたのじゃ。」

「ああ、『アーカードと大魔導士』な。懐かしいな。」

「そう、それじゃ。それを読んで貰っておる時に、

辻褄が合わない、不自然な感じがしたのじゃ。

乳母にそれを聞くと、『数百年昔の物だから

内容は変わっているだろう』と言われてな。

それ以来、気になって調べ始めたのじゃ。」

「orz」

「ど、どうしたのじゃ?!」

ま、まさか、麻帆良入りを楽にする為に、

英雄入りする為の策で、こんな……

こんなイレギュラーが発生するとは……。

「い、いや、何でも無い。」

策士、策に溺れるつてのを嘔み締めていただけだ。」

「そ、そうか。それなら良かった。」

何かあったのではと心配したぞ。」

「いや、大丈夫だ。」

てゆうか、会ったばかりだし、

心配される程の仲になった覚えはないんだが？」

「む？…そ、そうだな……。おかしい……。」

私が出会ったばかりの他人を心配するなど。

こんな事無かったのじゃがな……？」

不味い！本格的にフラグの二オイがする！？

「と、ところで、何で此処に来たんだ？」

何か用があったんじゃないのか？」

「ん、ああ、そうであった。

お前を連れて来いと、義姉君に言われてな。」

エルザさんGJ!!

「な、ならしょうがないな、行くか!!」

「……随分、嬉しそうじゃな。

私とおるのが、そんなに嫌なのか……。」

やめろ————!!拗ねるな————!!

あんたはそう言う性格じゃない筈なんだ!!

「……………そんなんじゃないよ。(ボソッ

「…え?今何と」

「おら!行くんだろ?!置いてくぞ!!」

「あ、ああ。ま、待て、置いて行くなシュウマ!!」

フラグ強化完了俺の馬鹿！！

いや、落込んだ姫様無視出来る奴が居たら、名乗り出てくれ。

そしてナギ。多分、ごめん……………。

S i d e o u t

S i d e アルビレオ

愁磨とアリカ様が出て行ってから、約30分。

話が一段落したので、休憩となりました。

「ナギ様。少々良いでしょうか？」

と、エルザ姫がナギに話しかけに行きました。

フフ・・・、ナギも愁磨も、随分罪作りですねぇ。

「おお、お姫さん！何か用か？」

「いえ、折角ですからお話でも、と。」

「いいけどよ。面白い話なんてねぇぜ？」

「うふふ、いいえ。今で十分楽しいですよ？」

「今ったって、何も話してねぇじゃねぇか。」

姫の言葉に首を傾げるナギ。まあ、それはそうでしょう。

「だって、何処へ行っても、皆私には敬語なんですもの。

普通に話して頂けるだけで満足なんです。」

と、ふわりと自然に姫がナギに微笑みます。

アリカ姫が薔薇だとしたら、此方は百合でしょうか。

「お、おお、そうか／＼お姫さんも大変なんだな。」

それを見たナギが赤くなってますね。

フフ、あの笑顔を向けられては仕方ありませんね。

「あ、あのな、それでよ、お姫さん。

『様』って言うのやめてくんねえかな？

言われると、どうも背中が痒くてな。」

「それでは、ナギ殿……ナギ、さん？うん……。」

……こうしていると、二人とも年相応の

少年少女に見えるのに、悲しいですね……。

「ナギ君？いえ、ナギ……ナギ……うん……。」

「お姫さん、そんなに悩まなくてもいいって。

普通にナギでいいぜ。一番呼び慣れてるしな。」

「そ、それでは／＼な、ナギ……と。

では代わりに、ナ、ナギも、お姫さんと言うのを

止めて、私の事をエルザとお呼びください。」

「分かったよ、おひ…じゃねえ、エ、エルザ。」

「は、はい。姫、とか付けてもダメですからね？」

フフフフフ・初々しくて可愛いですねえ。

おおっと、お邪魔虫が。

「お？なんだなんだ、ナギの奴、王女と。」

おーい！んへぶるうら？？！「」

重力魔法でジャックを潰しておきます。

エルザ姫はどうやら本気の様ですしね。

ん？階段の方から声が聞こえてきますね。

愁磨とアリカ姫が戻って来たようですね。

「じゃから私は　　！！」

「も　いーって。分かったから。」

「シユウマは分かつとらん!！」

おやおや、随分仲良くなってますね。

それにアリカ姫の雰囲気は全く違いますね。

「あらあら、アリカが大声を上げるなんて……。」

「へー、珍しいのか？俺にはあれが素に見えるけどな？」

「珍しいなんてモノじゃないです。」

アリカが笑ったり怒ったりしている所なんて、

6歳以来、初めて見ました。

それに、人を呼び捨てにしているなんて。

男の方を呼ぶ時は必ず、『様』か『殿』。

姉は『義姉君』、妹は『殿』ですし。

でなければ『主』^{ぬし}以外、聞いた事ありません。」

愁磨……貴方は、

どれだけ罪を積み重ねる気ですか……。

「おお、皆悪い。待ったか？」

「いいえ、簡単な打ち合わせだけやって、

後はご覧の通り、雑談です。」

「そうか。で、ジャックは何で埋まってんだ？」

「フフ、馬に蹴られただけですよ。」

「あー、そうかい。やっぱりこいつは脳筋か。」

「おや、これだけで状況把握出来るとは。

やはり愁磨は凄いですね。」

「伊達に年食っちゃいねえよ。」

「フフ・・・それも歳の功、ですか？羨ましい限りです。」

と、目でアリカ姫を指します。

「はあ〜。そんなんじゃないよ。」

「私の見立てでは、そうなんですがね？」

フフ・断れない人は大変ですね。」

「不毛だって分かってるんだがな……。」

やっぱり、叶えられるんなら、叶えたいんだ……。」

「フフフ、貴方はやはり優しいですね。」

「……俺のは、ヘタレで無節操なだけだよ。」

「貴方のそれは、違います。優しいのだと思いますよ。」

「……勝手に言ってる。」

さ、皆。とつとと済ませちまおうぜ。

これ終わりや休暇が待ってんだからよ。」

「おお！やつとの休みだ、ゆっくりしねえとなー!!」

「休みは主らの様な馬鹿だけじゃがな。」

「姫さん達だって休みじゃねえか!!」

「ナギ〜。凶星だからって女の子に当たるなんて、

カッコ悪い上に見つとも無いぜ?」

「愁磨なんかサボりだろうが!!?」

「フ、働けない者と働かない者の違いだよ。

可能性がある分だけ俺のがマシだな。」

「ケツ!!やらねえんだったら同じだろうが!!?」

「この女顔が!!!!」

「んっ…だと、コリア?!喧嘩売ってんのか鳥頭?!」

「上等だ!!こないだの決着着けようじゃねえか!」

「いい度胸だ、ライトニングイーター『召喚『雷喰蟲』』!!」

「行け、リル!!あの鳥頭虐めてやれ!!!!」

「キュリユイイ」

「あ、てめえ?!それズリいぞ!!」

「そつだ詠春!!魔物相手なら得意だろ?!手伝え!!」

「ふざけるな?!俺が愁磨に殺される!!」

「ナギ！私がお手伝いいたします！！」

「エルザ！よっし、覚悟しろ、愁磨！！」

「お姫様相手だからって容赦しねえぞ！！？」

「望むところです！！！！」

ナギとエルザ姫は進展速そうですねえ。楽しみです。

「アルビレオ。『紅き翼』は何時もこうなのか？」

「おや、アリカ姫。

貴方は愁磨の加勢に行かなくて良いので？」

「主は何を言っておる？」

なぜ私がシュウマに加勢せねばならんのじゃ。」

フフ、此方は時間が掛かりそうですね。

さてさて、この姫様の恋はどうなるんでしょうね？

S
i
d
e

o
u
t

第18話 姫様の想いは重いようです(後書き)

作「と言う訳で、じゅう、はち話・・・でした・・・。zzz」

ノワ「所で、フラグがマックスでアリカが崩壊しているけれど？」

作「あの日記は、日記って言うより落書き帳って感じなんです。

四人のやり取りが凄く良く分かるんですね。」

愁「うーん・・・、つまり、物語に恋するお姫様、って所だな。」

作「あと、エルザの気持ちが軽いな、と思うかも知れませんが・・・。

そんな事から始まる恋があっても良いじゃないか!！」

愁「真剣なら真剣でok、と言う事です。」

作「あ、やばい・・・もう無理・・・。」

ノワ「仕方ないわね・・・。ベッドへ転送してあげるから。」

作「ありがとう・・・、ノワ・・・zzzzz」(シュンッ)

愁「あれ・・・?!ベッドは今アリアが・・・!!」

ノワ「知ってるわ、そんな事。」

大丈夫よ、作者なら何もしないわ。」

愁「俺以上の『年上系統』好きだからな・・・。」

言うておくが、俺も作者も熟女はアウト。」

ノワ「どうでもいいわね・・・。」

愁「それでは、明後日また会いましょう!!」

愁&ノワ「アリーヴェデルチ!!」

作&アリ「すう・・・すう・・・すう・・・すう・・・」

皆さんも、『ハーレムと言ったらこれ!』と言うものがありましたら、

作者にメッセージで飛ばして下さい。」

作「ユーザーページの上に『メッセージ送信』がありますので。」

愁「えー、前振り長くてすみません!!--それでは!!--」

作& amp; 愁& amp; ノワ「」どうぞ!!--」

第19話 二人の初恋が激しくなるようです

Side 愁磨

所変わらず、此処はメガ口首都。

あの後、起きたジャックが俺とナギをからかって来たが、俺とナギとエルザ姫の一撃でまた沈んだ。

ああ、休暇？に入っただけなのに、ノワールとアリアの事は二人に紹介した。

アリアは日記読んでたから驚いて無かったけど、

ちょっと悲しそうな顔してた……。なぜだ……。

そして、エルザさんはすげー驚いてた。

えーと。で、頭脳担当で話した結果、結局俺も調査に駆り出さされた。

その上、敵基地の破壊までやらされた。

と言う訳で

「もう動きたくない……………」。

「…パパ…お疲れさま。」（ナデナデ

あゝ。久しぶりのアリアたん…。

因みに此処は『闇』の家の中じゃない。

あっちじゃまだ数時間しか経ってないが、

それでも中に居るよりはいいだろうと…。

ああ、説明もダルイな……………。

「シユウったら、本当に疲れているわね……………」。

でも…垂れてるシユウは可愛いわ……………」

ノワールが頬を撫でて来る。やべえ、……ゾクゾクする。

「愁磨、お楽しみ在所申し訳ありません。

急な用事があります…ノワールさん、アリアちゃん。

そんなに睨まないください……………」

と、アルが空気を読まずに来た。

「酷いですね愁磨。

私が好きで家族の団欒を邪魔しているとでも？」

「お前の場合否定出来んだろうが。ってゆーか心を読むな。」

「顔にありありと出てましたから。所でアリアちゃん。

今日も可愛いですね。このsk「ノワ
ル……………」

「分かっているわ！！アリア、逃げるわよ……………」

ノワールはマツハで（比喻にあらず）アリアと一緒に

『闇』へ逃げ込んだ。

既に視聴無効にしてあるので、変態が何を言おうと無駄だ。

「フフ、手厳しいですね。」

「俺の娘にちよっかい出したらぶっ殺すからな。」

「私はただ愛でただけなんですけど・・・。」

まあ、今は我慢しましょう。

実は、アリカ姫がさつきから貴方を探してあちこちうろつろして
いるのですが。」

「……俺、疲れてるんだが……。仕方無い。

えーと、あったあった。『活力ドリンク』……。」

要するに、リポビタンドの即効&・効力upした物だ。

名前は、某狩りゲームと一切関係ない。

「（ゴクゴク）あゝまっずい。」

「貴方なら美味しく創れるでしょう?」

「馬鹿、良薬は口に苦えんだよ。」

「変な拘りですね……………」

「ふん、俺の勝手だ。別にいいだろ。」

「そうなのですけれどね。」

「…………ああ、アリカ姫の場所はお分かりで?」

「『答えを出す者』で一発だよ。んじゃ、行って来らあ。」

「バグよりはチートですよねえ……………」

実際その通りだしな。

えっと、アリカ、アリカは何処だ。

「あ、丁度良いところにおったな。」

済まぬ、シユウマ。聞きたい事があるのじゃが。」

「後ろですかそうですか。で、何のよ。」

と、振り向くと、アリカは今までの薄桃のドレスでは無かった。

アイボリー色の、体の線が出るタートルネックの長袖で、

胸には、菱形のシルバーアクセサリ。

ふわりと広がった黒のフレアスカートと、

同色のニ ソックスが完璧な絶対領域を作っている。

透明な金髪は何時も通りストレートだが、

常の苛烈さより、今は可憐さと色気を感じる。

雰囲気としては、大人っぽい恰好の高校生？、だろうか。

これは……、総合点

「な、なんじゃ、ジロジロ見おって。

どうせ私には似合ってん」 PERFECT……。」「……え……。」

「いやいや、これはこれは素晴らしい。芸術レベルだ。

なんて言うか、そう、良いな。似合ってるぞ。」

「お、お世辞などいらぬ!!! / / /

こ、これは義姉君に無理矢理着せられた物であって、

別に、…私の様な、無愛想な女になど似合わぬ。」

「俺がお世辞を言うと思ってんのか？」

俺が似合うつて言ってるんだから、似合ってるんだよ。」

「口の減らん奴じゃ!!! も、もう良い…。」

義姉君を見かけんかったか？」

「ん? いや、見てないけど。」

「そうか…。」

実は、義姉君と買い物に行こうとなつての。

『ドレスにローブでは無く、これに着替えなさい。』

とこれを渡されたのじゃ。

それで着替えたは良いが、肝心の義姉君が見当たらんのだ。」「

…ん? なんかアルの話と違

「あら、アリカ。探し　　あらあら、お邪魔みたいね。」

エルザさんが狙い澄ましたタイミングで来て、ニヤリと笑う。

その顔には『してやったり』、とありありと書かれている。

・・・よもや、変態と姫様がグルとは・・・。

「何よ、アリカ。一緒に行く人居るんじゃない。」

「え？あ、義姉君、誤解じゃ！これは　　」

「私は他の人と行くからごゆっくり〜。」

シウウマさん、アリカをよろしく。頑張るのよ〜〜〜」

「ええ？！ちょ、まっ　　」

時既に遅し、エルザさんはもう視界の外だ。

異常事態に体が言う事を聞かないって本当なんだな・・・。

「……………如何しろと言うのじゃ、義姉君……………。」

途方に暮れるアリカ。・・・偶には乗るのも一興か。

「しゃーないな。買い物行こうぜ、アリカ。」

「な?!何故私が主と行かねばならぬのじゃ!」

「...まあ、強制はしないけどなさ。」

嫌だっつてんなら別に一人で　いや、ノワールとアリアと一緒に行くか。

久しぶりに家族サービスでm

(ガシッ!!)「

ギリギリギリと俺の腕を掴むアリカさん。

痛い!痛いですって!!王家の力入れんといて!?

「そんな事をせずとも良い。行くぞ、シュウマ。」

「え、いやだっつてさっき　。」

「嫌とは一言も言うていない!!良いから行くぞ!!」

ええ。なんで怒ってるの?!俺なんかしたか!!?

ひよっとしてもうルート確定ですか!?

subside アリカ

「嫌だつてんなら別に一人で いや、ノワールと」

シユウマが言った瞬間、私の胸がズキン、と痛んだ。

……なんじゃ、これは……？

初めてノワール殿を紹介された時も、こうであった。

二人が結婚しておることは、日記から承知しておったが、

実際にその事を聞いた時にも、胸が痛くなった。

「そんな事をせずとも良い。行くぞ、シユウマ。」

気付くと私は、シユウマの腕を掴み歩き出しておった。

後日、義姉君に聞く所によると、これは嫉妬じゃと言っ。

じゃが、それは有り得ん。

「え、いやだつてさっき　　」。

「嫌とは一言も言っていない！！良いから行くぞ！！」

それでは・・・それでは、まるで、私が

Side out

Side エルザ

フウ、本当に手間の掛かる妹ね。　　いや、義妹、ね。

シュウマさんにはもう奥さんが居るけれど、あの子も王族。

一夫多妻なんて気にしないだろうし、

幸い、シュウマさんもノワールさんも抵抗は無いみたいです。

アリカの政治手腕は、小さい頃からその才を認められ、
将来は確実に王族一、と言われていたわ。

それを狙う他の王族があの子を引き込もうと多々手を使い、

その結果、あの子は、誰にも表情を見せなくなった。

その分、それ以前から熱中でいたシュウマさんの事に

更に力を入れ調べる様になって行き、何時しか惹かれて行ったわ。

何故私が知っているかと言うと、アリカは、私には、偶に話してく
れたの。

その度に、その時だけは、少しだけ楽しそうな顔をしていたわ。

何故犯罪者の事などを、とっていたけれど、先日聞いたら、

『日記』を写した物を少しだけ見せてくれて、納得したわ。

・・・歴史が確実に覆る内容だったのは、驚いたけれど。

会った事の無い王子様に、想いを馳せる。

あの子の恋は、それと似ているわ。私も、だけれど。

私はナギへの想いを恋だと理解しているし、行動もしているわ。

けれど、あの子は人と関わらなかったせいで気付いていない。

不器用な妹の初恋、・・・いいえ、最初で最後になるであろう恋を、

成就させてあげたいと思うのは、姉として当然でしょう？

「ナギ、探したわ。い、いま、お暇かしら？／／／」

「ん、お、おお、エルザか。」

そ、そんな...いや、えっと...き、着替えて、どうしたんだ？／／／

「よかったら、その.....。お買い物に、行きませんか？」

「あ、おう、いいぜ。ひ、暇だったからな！！／／／」

でも、私は私の事をしないといけない。いい加減気づけないと

Side out

S i d e 愁磨

アリカに連れられ、買い物始めてから4時間。

俺は服だの何だので積み重なった荷物で前が見えなくなっていた。

女って、何でこう、買い物長いんだろうな？

「シユウマ。あれは何じゃ？」

と、アリカが指差した先には殴り合う男達と、半券片手に叫ぶ大勢。

「ん〜？ああ、野試合だよ。」

拳闘大会みたいに金掛けて、どっちが勝つか予想するやつ。」

「なんじゃと？そんな事をして良いのか？」

「許可取ってなきゃ、今頃警備が飛んで来てるよ。」

偶に喧嘩が白熱して、野試合みたいになる時がそうだな。」

「……見ていて気持ちの良い物では無い。行くぞ。」

「へいへい、姫様。」

……アリカは外に出た途端、全くの無表情になった。

今は認識阻害効いてるから、王女様とか考えなくていいのにな。

女の子がつまんなそうな顔してんのって嫌いなんだが……。

正直、会って数週間経ったが、好みとか趣味とか一切分からないし、

アリカの場合、他人に自分のそう言うの話さないから、

余計糸口が掴めないんだよね。」

「で、今度はどちらへ行かれますですか？」

ま、こつこつ言うのはゆっくり解決するしかないんだけどな。

「変な言葉遣いをするな。」

……今日の用はもう済んだ。かえ「危ねえ!!!」
?!

俺がアリカを抱え横飛びした瞬間、

ドゴオオオン!!!!!!

横で爆発が起こり

「大丈夫か?!エルザ!!」

「ええ、ナギが守ってくれたから……。」

赤毛の鳥頭と、お姫様抱っこされたお姫様が飛んできた。

「くそつ、こんな街中でデカイ魔法使いやがって!!」

死人出てねえだろうな?!

「やはり、今のは……。」

「フム、…重傷者2名、軽傷者16名だな。」

重傷者も、傷は残らないから問題無い。

それと、間違いなく『完全なる世界』の奴だろうな。

流石に、お前等のどつちを狙ったのかは知らん。」

「?!あ、愁磨か!ビビらせんなよな!?!」

やれやれ、やっと気付いたか……。

「ナギ、お前もデート中だったのか。野暮なモンだよな。」

「な?!ち、ちげえよ!!!/ /これはただ買い物に來ただけ

」

「うら若き男女が、二人つきりでお買い物。

これをデートと言わず何と呼ぶ。

それにな、そんなに否定したから、エルザさんが泣きそうじゃないか。」

俺の言葉に慌てて後ろを振り向くナギ。

「うえ?!いや、違うんだ、エルザ!これは……。」

って、なんかすっげえ良い笑顔なんだが？」

「それについては分からん……。」

で、追跡魔法は掛けたんだろうな？」

「勿論だぜ！！やっと尻尾を出したんだ、逃がさねえぜ！」

「よし、いい子だ。」

エルザさんとアリカは一緒に基地に戻っててくれ！！

……………アリカは何行った？！」

「……………シウウマさん、それはギャグなのかしら？」

ん？おお、そう言えばずっとお姫様抱っこのままだったな。

「悪い悪い、余りにも違和感が無かったもんで。」

立てるか、アリ」（ギユウウウウウウウー！！）「……………。」

……………何故か泣きそうな上、震えてるんですが？

「……………あの、シウウマさん……………これは……………」

なんか複雑な顔のエルザさん。

んー……。火事か爆発にトラウマでもあるのかな？

「よつと。んじゃ悪いけど、俺はアリカと一緒に戻るわ。

ナギ、エルザさんと一緒に敵基地ぶっ壊して来い。」

アリカを抱え直し、ナギ達に言う。

「ちよ、ちよつと待てよシュウマ?!」

そんな所に連れてつたら危険だろうが?!」

「生憎、俺は腕が塞がってて二人は無理だし、それに。」

「私の魔法は役に立つわよ。忘れたのかしら?」

「ぬううう、しゃあねえ!!行くぜ、エルザ!!」

「ハイ!」

ナギはエルザさんを抱え、襲って来た奴を追って行った。

さてさて、俺はアリカを連れて帰りますか。

s u b s i d e アリカ

「危ねえ!!!」

シュウマがいきなり叫び、私を抱えて横に飛んだ。

「な、何じゃ、いきなり」

「

突然の所行に、抗議しようとしたその瞬間

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!

横で、魔法による攻撃が爆発が起こった。

火事で火傷を負う者、逃げる者。

その光景は、私の両親が殺された、あの時の様で

s i d e o u t

俺とアリカが基地に帰って来てから、

つまり、先程の騒ぎから10分程経ったが、

アリカはまだ浅く呼吸し、震えながら俺に掴まっていた。

帰って来た時、お姫様抱っこしたままだったから、

あいつ等が冷かそうと来たのだが、アリカの様子に気付き、

そのまま静かに去って行った。・・・余談だな。

「…すまない、無様な所を見せた……。」

アリカが復活した風に俺の胸に手を付き離れるが

「もうよい、大丈夫じゃ……。あつ?!」

まだフラフラしていたので、案の定倒れそうになったが、

予想していたので、難無くキャッチした。

「全く、何が大丈夫なんだよ。ほら、寝てろ。」

もしくは、また抱き締めてやるのか?」

「……………すまぬ……………」

と言ってアリカは再び、俺に体を預けて来る。

……………おかしいな、冗談の方を取られたぞ?

「……………調子狂うな……………。一体どうしたんだよ……………?」

アリカの頭と背中をポンポンしながら聞く。

「……………そうじゃな……………主になら、話しても良いな……………。」

お主が歴史を話せば、悉く覆す存在じゃ。

今更、この程度の話しをしても、何ら問題無いじゃろう……。」「

アリカはそう言つと、話しだした。

なんか、失礼な事言われた気がするが……。

「あれは……、私が6歳の頃じゃった。

ルr……いや、とある王子の誕生日の宴であつた。

そこには、前国王を始めとした我が国の要人が

集まつておつて、私の両親もおつたのだ……。

私と義姉君は、親に止められ行けなかつたのじゃが、

忍びで行つたのじゃ……行って、しまつたのじゃ。」

あとは、簡単な話だ。

現国王派の連中がクーデターを起こして、虐殺。

二人は居ない事になっているから助かつた、と。

「そして奴等は、証拠隠滅に、屋敷を……爆破したのじゃ。

……と言っても、火を放つ為の爆破だったらしく、

完全には倒壊せんかったのでな……。

……私と義姉君は、火の放たれた屋敷で、必死に親を探した。」

段々と、アリカの顔が青くなり、また震えて来た。

「が、そこは……まさに地獄だったのじゃ……。

火に喘ぎながらも、足を斬られ動けん者……、断続的に続く爆発……。

そ、そして……、漸く見つけた、と、父様と母様は……、」

「……もういい。もういいよ、アリカ……。

悪かった……、辛い事、思い出させたな……。」

アリカを強く抱きしめ、心を落ち着かせる魔法を使う。

と、今度はアリカの顔が真っ赤になって来た。

「……………シュウマ、主は……………」

主は、王女と云うものを、どう、思っ……………?」

S i d e o u t

S i d e アリカ

「……………シュウマ、主は……………」

主は、王女と云うものを、どう、思っ……………?」

私が問うと、シュウマは、不思議そうな顔をする。

何の脈絡もない問いでは、当然じゃろう。

「え、……どう、って言われても……」。

王女、じゃないか……？うん。」

尤もな回答をするシユウマ。しかし

「私が聞きたいのは、そう言う事では無い……」。

他人を信用しなくなって久しい私が、

出会って僅かしか立っておらん男の腕の中に居て、

その上、安心までしておる。

「そ、その……ぬ、主は……」。

最近までは、物語の中の人物じゃった。

……義姉君の言葉を否定したが、そう、なのじゃろう。

「主は、王女が……、自分勝手に、

……恋愛を、して……良いと思うか？」

何時の間にか、そうになっていた事に、

気付かなかった、いや……気付かぬ振りをしておった。

「え、う……え？アリカ、なに言って」

しかし、気付いてしまったものは、仕方ない……。

義姉君もやっておるのじゃから……、

私も……良いじゃろうか……？

「シユウマ、私は……、私は……主の事が……」。

この気持ちを、言うくらいなら、

言うだけなら、許されても良い、じゃろうか……？

「……シユウウムの……、……事が……」。

第19話 二人の初恋が激しくなるようです(後書き)

作「まさかのクーデターにより、アリカパパ死亡。

じゃあ、今の国王誰だよ……。」

ノワ「まあ、少し考えれば分かるわね。多分。」

愁「にしても、アリカの性格が大分……。

これでいいのかよ?」

作「俺が書くと、どうしてもテレになっちゃうんだよね……。

不思議だ。」

ノワ「素直なのは良い事よ。

あと、言う事があるんじゃないの?」

作「ああ、そうでした。

p v 5 0 0 / 0 0 0突破したので、記念にコラボなんてやって
みたいな〜、

なんて、思ったり、思わなかったり……。」

愁「身の程を弁えろ!!!!愚か者が!!!!」

ノワ「とりあえず、活動報告にも入れておくので、

『しょうがないから、あんたの所の使ってやっても良いわよ?!』

と言う人はご一報ください。」

作「それでは、この辺で。」

第20話 姫は敵の思惑に嵌ってしまひぬす

Side アリカ

「シユウマの…、事が……………」。

シユウマは、頬を赤く染め、こちらを見ておる。

その瞳は喜びもあつたが、困惑や、不安もあつて

「……………すまん、何でも無いのじゃ……………。忘れる……………」

シユウマを困らせるくらいならば、

……………この想いを、言う事はできぬ……………。

「え、ア、アリカ……………?」

「すまない……………。本当に、何でも無いのじゃ。

……………今日は、助かった。感謝する……………。」

そう言っつて、今度は確りと立ち上がり

「え、ああ。……っつておい！アリカ?!」

私は、その場から走り去った・・・。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

アリカが走り去ってから、約6時間。

俺は何度もアリカに話しかけたが、

碌な返事もされずにいた……。

そして、ナギとエルザさんが帰って来て、

兼ねてより疑いのあった執政官の『コンスル完全なる世界』との

繋がり証拠を見つけて来た事により、

エルザさんとアリカが、帝国皇女と極秘に接触する事になった。

数日後

「……で、何でアリカまで行くんだよ？」

本来なら、お前は行かなくてもいいのに……。」

「……シュ……、主には、関係無いじゃろつ。」

政治に関しては、義姉君よりも

私の方が優れておるのだから、私が行くのは当然じゃ。」

「こんなボロ船で行くんだ、危険なのは分かってんのか？」

「そんな事は元より承知じゃ。」

……「フン、心配でもしてくれておるのか？」

急に、何だっつてんだよ。

そんな態度取られたら……。

「……心配するに、決まってるだろ……？」

「う……く……フン！！余計な御世話じゃ！！」

こっちから、追っ掛けなくなるだろうが……。

「アリカ、どうしたんだよ？」

俺が何かしたのか……？だったら

「やめる……!!」

そうではない。……そうじゃ、ない……。」

アリカは、手に血が滲むほど握り、そう言う。

「お主が、悪いのではない……。」

他人から見たら分かんないだろうけど……、

そんな、泣きそうな顔で言われたら……。

「…執政官の逮捕は、お主たちに任せる。

それでは、な……。」

……そう言うと、アリカは足早に飛行船に乗って行き、

直ぐに、飛行船は出発した。

「…愁磨、アリカ姫と何があったのですか……？」

あの日以来、貴方達の間が、

どうもおかしいと思うのですが……？」

「……それが分かってりゃ、

こんなに苦勞はしてねえよ……。」

「……貴方には、ノワールさんと言う奥さんと、

アリアちゃんと言う娘が居ます……。」

それなのに、何故アリカ姫と恋仲になる様な

行動を取るのですか……?」

確かに、尤もではあるが……。」

「…前にも言つたら?」

叶えられるなら叶えてやりたいんだ、つてな。」

「それは、分かっています……。」

しかし、相手が離れて行くのでしたら、

貴方が追う必要はあるのですか……?」

「……確かに、追う必要なんてねえよ。

寧ろ、そっちのが楽だよ……。

でもさ、あれだけイベントこなしたら好きにはなっちゃまつよ。」

「……それはつまり、

ノワールさんへの愛が」

「んな訳、ねえだろうが………」

「……ッ、す、すみません………」

「……ノワールは俺の半身で、全てで、愛する者だ……」。

「……それとは、別なんだよ。

こんなの、不義理な奴だと思っ奴も居るだろうさ。

殆どが、そうだろう。倫理的にNGなんだ。

でも……俺に一番心を開いてくれると思ったら、

勘違いも、したくなるじゃんか……。」

「……貴方の場合、

それが勘違いで無いのが問題なんですよね……。」

「…余計な御世話だよ。」

「フフ……、それで、どうするのですか……。」

「どうするってたって……。幾らなんでも、無理強いは」

「そんな事言っ……。」

偶にはシュウから行っても良いんじゃないのかしら？」

何時の間にか『闇』から出て来たノワールが、

実に有難い言葉を掛けてくれる。

「……それは一体、どう言う事で御座いましょうか？」

「こっちの受け入れ態勢は万全なのよ？あっちも、入って来るのに抵抗は無いでしょうし。」

「えーと、つまり無理矢理にでも入れちまえ、と？」

「王族なのだから、一夫多妻になんか抵抗は無いですよ。」

それで来ないのは……、多分、シユウに迷惑だろう、

とでも勝手に思ってるんでしょね。だったら……。」

「…俺から、『好きだ』って言っちまえって？」

それで納得するか？アリカが。

そ、それにノワールは

「ああ、私は分かってるから、別に良いわよ？」

恋・愛・性・親全数値において、私がダントツだから。」

…なんだ、その淫獣式メーターみたいなのは……。

『そもそも、もうハーレムタグ付いてるんだから、

諦めて自分から行っちまえよ。』

「お前は本編で喋るんじゃないねえ！メタ発言禁止！！！」

「・・・えーと・・・、どちら様で？」

「宇宙意志、かしらね……。気にしたら負けよ。」

「ああー、もう！！あーったよ、やるよ！！

行って言っただるよ！！！」

「フッフ、漸く決めたわね。全く、ヘタレなんだから……。」

「フフ・・・、良いじゃないですか。愁磨らしいですよ。」

好き勝手言いやがって……………。

さて、となると……。実行場所は何処だ？

「みんな。」

話している所すまないが、今マクギル議員に連絡した所、

明日、証拠品を持って来てくれ、だとさ。」

「法務官にも、既に来てもらえるよう要請したそうさ。」

それで、誰が行く？」

考えてる暇もねえな……。

って、そうか！この後フェイトが出て来るんだっとな。

「そうですね……。」

ナギ、ガトウ、ジャックで良いでしょう。」

「待て、アル。詠春、悪いがナギ達と一緒に行ってくれ。」

「別に構わないが……。なんでだ、愁磨？」

敵さん出て来るから保険、とは言えないしな……。

「……いや、何となく嫌な予感がするだけだ。」

「お前の勘は当たるからな……。分かった、俺も行く。」

詠春増えた分、あっちも増えそうなんだがな……。

S i d e ナギ

次の日、俺らはマクギル議員の所に行った。

けど

「法務官は……、来られぬ事となった。」

こいつ……？……？

「……………ハ……………？」

ガトウが、疑問の声を上げる。

「あれから少し考えたのだが、折角の勝ち戦。」

態々水を差す事も無いだろう、と思っただろ……。」「

「ハ、ハア……。」「

「いや、私の意見では無いのだ。

そう考える者も多く、時期が悪い。

無念だろうが、君達も手を引いて「待ちな。」「……?」「

「あんだ、やっぱりマクギル議員じゃねえな。

何もんだ?!」「

ポオオオオン!!!!

「ゴウア?!」「

俺が無詠唱でぶっ放した『紅き焰』が、

マクギル(?)の頭に直撃する。

「ナギ?!おま、いきなり何を?!」「

「愁磨が言つてたんだよ。

『ちよつとでも怪しいと思つたら躊躇うな』って。」

「え、ハア?!あいつお前に何を吹き込んで」

「…良く分かつたね、千の呪文の男。

君に見破られるとは…。改良が必要だね。」

議員の居た所に、白髪の方が無傷で立つて居やがる。

「ケツ、愁磨の言つた通りにしたら案の定、ってただけだぜ!!」

あと、俺の勘だ!!!」

「やれやれ、あの『皆殺し』が、何故そちらに

付いているかも疑問だよ……。」

「んなこたあどうでも良いんだよ!!」

本物の議員はどうした?!」

「ハッハ！！だけど、生身のガチ勝負だ！！」

頭使わねえで済む分、万倍、戦いやっすいぜ！！」

「フツ、本当は、

『皆殺し』に来て欲しかったけれどね（チャ

わ、わしだ、マクギルだ！！うむ、反逆者だ！！

『紅き翼』、奴等は帝国のスパイだった！！

…ああ、確かだ、殺されかけたっ！

今も命を狙われている。は、早く救援を頼む！

軍にも、連絡をッ！！」

チッ！やられたぜ！！

「おおおおおおッッ！！！！」

「君達は、少しやり過ぎだ…。退場して貰おう！！！！」

ドツガアアアアア！！！

奴の石の棘柱で、建物が崩壊する。

「クソツ？！ナギ、一旦退却だ！！」

「チイイイ！！」

ザブン！

と20mくらい下の海に、皆飛びこんだ。

「英雄呼ばわりが、一夜にして反逆者、か……。」

「又ツフツフ、良いじゃねえか詠春。」

人生、波乱万丈じゃねエとな」

「タカミチ君達は、脱出できたかな……。」

「愁磨が居るから大丈夫だろ。」

……それより、エルザ達がやべえな……。」

『ナギ、聞こえますか？』

アルから通信が入った。

何でも、これは愁磨の特製で、

絶対に感知され無いなんちゃら。。。って言った。

「アルか！！皆無事か?!」

『ええ。今拾いに行きますので、少々お待ち下さい。』

アルが言った瞬間、何かが俺らの下から上がって来た。

「うお?!なんだ、これ！潜水艦か？」

『愁磨が貸してくれた飛行艇です。』

・・・何でも、マツハ70で飛べるとか・・・。』

「良く分かんねえけど、姫様達の所まで直ぐって事だろ?」

『ジャック、貴方は本当に残念な頭ですね・・・。』

でも、その通りですよ。』

なら、グズグズしてらんねえだろ!!

「アル！！場所は分かってるのか?!」

『ええ。会談の場所に、そのまま閉じ込められています。』

「アル、愁磨はどうしたんだ？居ない様だが？」

『ああ、もう先に行っていますよ。』

「ハアアアアア?!」

S i d e o u t

S i d e 愁磨

アリカ達が出発してから16時間。

もう『夜の迷宮』に着いて、話し合いしてる

「愁磨。どうしたのですか・・・？」

「お前は本当に、地の文を邪魔する奴だな・・・。」

「フフ・・・それは申し訳ありません・・・。」

全くこいつは本当に意地がわる

「愁磨、アル！！大変じゃぞ！！！」

「おまえもか、ゼクトオオオオ！！！」

「な、何をいきなり？！ではのうて！！！」

奴らの幹部がマクギル議員を殺して、

入れ代わっていたのじゃ！！直ぐに逃げるのじゃ！！！」

ああ、そういや　　ッッ！！

しまった！！

「アル、ゼクト！！！！俺の飛行艇貸すから、

タカミチとクルトを連れてあいつ等迎えに行け！！！」

「って……貴方はどうするのですか、愁磨？」

あそこのシーンは、感動的ただけだから安全だと思っていたが

「俺は先に行ってアリカを助ける!!!」

簡単な話だ。

元のアリカは大切な人質だったから無事だったが、

ここでのアリカは違う。

王国の第一王女と第二王女、二人があの方に居て、

王女の人質なんて、一人で十分。

そして、どっちが人質として魅力的か……、

「愁磨！どうするつもりですか？！」

貴方が一人で行っても

「俺の力量考える!!!」

悪いが、待っている暇はねえんだ！！！」

そして、人質として価値の無い方の王女がどうなるか・・・。

辿る未来なんて、一つしかねえ！！！！

「愁磨！！」

アルの声を無視して、俺は飛びだした。

・・・飛行艇はちゃんと出してから。

S i d e o u t

S i d e アリカ

会談が始まり、二時間ほどで話しは終わった。

あとは、各々国に帰るだけであつたのじゃが、

奴らの構成員だと思われる者達が、飛行船を陣取っていた。

「初めまして、王女様方並びに第三皇女様。

自己紹介は必要かな？」

リーダーと思しき男が出て来た。

「そのようなもの必要無い。さっさと去ね、下衆が!!」

「第二王女様……………」。

威勢の良いのは結構だが、自分の立場を弁えたまえ。」

・・・確かに、この状況は絶望的じゃ・・・。

兵士共だけならなんとでもなるが、この男・・・。

恐らく、実力はナギ達に相当するであろう。

「…さて、話していても時間の無駄だ。

第一王女様と第三皇女様は、上階牢に閉じ込めておけ。」

「ハッ！第二王女はどうしますか？」

「……いざという時の為の捕虜だ。」

地下牢に閉じ込めておけ。

抵抗された時に、もう片方がどうされるか分かるだろう……。」「

「了解しました。こっちへ来い!!！」

「触るな、下郎が!!！」

「アリカーーーーーー!!!!!!」

「放さぬか!!!この無礼者めが!!!」

見ると、義姉君と第三皇女・テオドラ殿が
両脇を持たれ、連れていかれていた。

「大丈夫じゃ、義姉君。その内奴等が来る。」

確信はないが、そう思った。

……義姉君と、皇女殿は大丈夫じゃろう。

私は、分からんが……。

「おら!!!こっちに來いって!!!」

兵士に付いて行き、しばらく歩くと、

思ったよりも綺麗で明るい地下牢に出た。

「ここに入ってる。食事もちゃんと出してやるよ。」

真っ直ぐに戦場をつつ切ろうとした俺だったが、

途中で転移すればいい事に気づき、転移しようとしたが、

何故か転移出来ず、しかも魔物の群れに阻まれ、

三分の一も進んでいなかった。

ただの魔物共なら良かったんだが

ブウン ブウン ブウン ブウン ブウン ブウン ブウン

と、また魔法陣が展開される。

まさか、ここでもう出て来るとは思ってもみなかった・・・！！

「コトド・オブ・ザ・ライフメイカー
『造物主の掟』…！！」

原作じゃ、旧世界の人間には効果& amp; 攻撃力皆無に見えたが、

ここに居る悪魔共の持っているのは、

俺に対しても十分徹る攻撃力を持っていやがる。

「これは使いたく無かったんだがな……！！」

いきなり出て来たから、碌な戦闘準備も出来なかった上、
何故か、俺の『創造』した物を弱体化させる効果がある。

だからこそ、これが使える。

「code・0000 認証・Pandora chaos/c
aligning

解除解除解除

開け、『禁箱』！！

待ってる、アリカ！！

今助けに行く！！

「出でよ、『貫く者』
『轟く者』
『初源』
『終焉』
！！！！」

「

s i d e
o u t

あれから、数時間もたったじゃろうか・・・？

リーダーの男が来た。

「やあ、お姫様。気分はどうですか？

ハハハハハ！！！！」

「ボス！随分と早いですね。」

「いいや、言いつけ守らないで先走ろうとした

新人を数人、達磨にして来た所だ。

お姫様だつてんで、全員興奮してな。」

「ハハハ、そりゃ大変ですねえ。

せつつかれて来た訳ですか！」

「全く、お前以外、碌に番も出来ないんだからな。

困ったものだよ。」

「良いって事です。それじゃ、俺は外に行ってますよ。

あ、鍵はこれっす。

ククク。じゃあな、お姫様。最初で壊れるなよ。」

……私を見張っていた男が、上に向かって行き、

リーダーの男が、下卑た笑みを浮かべながら

近づいて来る。

「さあて、実の所、俺も我慢出来なかつたのでね。

大人しくして貰おう。『魔法の射手・雷の3矢』」

男が魔法の射手で私を痺れさせようとするが

「無駄じゃ、愚か者が。」

王家の魔力を使える者に、魔法など効かぬ。」

届く前に、無効化する。

「ああ、そう言えばそうでしたね。全く面倒な。

…やはり、これを使うしかないですね。

言っておきますが、これ、高いのですからね？」

そう言うと男は、懐から木の様な物を取り出し、火を付ける。

と、結構な量の煙が出て来る。

「魔法は打ち消せても、これの効果は打ち消せませんよ？」

なんせ、唯の煙ですからねえ。」

何を言っているのかと思ったが、

直ぐに効果が現れる。

ドサッ

「…な、何じゃ…、これ、は……………」

体に、全く力が入らぬ。

「ああ、これは闇でのみ取引される、とある木の枝だね。

これの煙を吸うと、不思議な事に

女は筋肉が弛緩し、動けなくなるんですよ。」

カチャッ、

と鍵を外し、男が牢の中に入って来る。

「ククク、さて、楽しませて貰いますよ、お姫様。」

・・・こんな事ならば、

せめて自分の気持ちを伝えておきたかった・・・。

フフフ・・・、いつも後悔してばかりじゃな・・・。

もしも・・・、今度、生きて会えたならば、

今度は言えると、良いな・・・。

「.....シムウマ.....」。

そして、目を瞑る

ガンツ！！

「?!なん」

キンツ ボツ！！

空気を斬る音と、何かが燃える音がして

ギョツ……

あの、暖かいものに包まれる。

「……間に、合った……。」

その声に目を開けると、

涙で酷い顔になっている、シュウマがおった。

第20話 姫は敵の思惑に嵌ってしまつようです（後書き）

作「うーん、愁磨が女関係だとへタレっぽくなるな．．．。」

ノワ「浮気する夫みたいな事言ってるし．．．。実際．．．。」

作「いや、愁磨のは浮気じゃない。

浮気って言うのは、『異性交際において本命の恋人と交際関係を維持しながら、無断で他の異性と交際すること』 b y w i

k i

愁「じゃあ、無断じゃないとどうなるんだ？」

作& a m p ;ノワ「．．．。ハーレム？」

愁「なんか違う．．．。」

作「えー、コホン。さて、次回の更新は15、6日になるかと思いません。

最近話を進めるのが難しい．．．。」

愁「世界観的に、原作を生かしつつ殺さないといけないからな。

ド素人じゃ難しいよな。」

ノワ「．．．。何でわざわざこんな世界にしたのかしら？

あなたMなの？」

作「Mでもなくはない、かな？基本的にはSだけどね。
世界観に関しては、ノリで書いたせいだな。」

ノワ「・・・まあ、どうでもいいわ。」

私はシュウとイチャつきつつ、女の子を苛められればそれで良いから。」

愁「・・・なあ、ノワールってこんな性格だっけ・・・？」

作「違う・・・。お姉さま+姐さん÷2が理想的。」

ノワ「女の子が女の子とやっちゃんいけないのかしら？」

作& a m p ;愁「百合は美しいからよし！！」「」

愁「・・・あれ？」

作「解決したし、今回はよし！！それでは次回まで！！」

作& a m p ;愁& a m p ;ノワ「アーリーヴェデルチ！！！！」「」

第21話 魔人は周囲を増やすようです(前書き)

名前変えました、altleneこと、Hate・revolve
です。

作「えー、後書きにて少々色々ありますので、お時間がある方はど
うぞ。」

愁「今回は、ちと短いな。」

まあ前回の続きでしかないから、説明はいらんだろ。」

ノワ「剣の舞姫様、龍賀様、紅様。感想くださり、ありがとうございます
います。」

作「龍賀様、色々お世話になりました。ありがとうございます。」

では、前書きで伝える事は終わったので。」

作& amp;愁& amp;ノワ「」それではどうぞ!」」」

第21話 魔人は周囲を増やすようです

Side 愁磨

俺は、魔物（悪魔？）を数え切れない程倒し、

ようやく『夜の迷宮』に辿り着いた。

そして、『答えを出す者』でアリカの居場所を突き止め、転移する。

着いた所は・・・陽の光が無い所を見ると、地下牢だろうか？

そして、並んだ鉄格子の中程に居たのは、

床に力無く倒れているアリカと、

手を掛けようとして居る男。

見た瞬間、鉄格子を蹴り飛ばし、

無理矢理、十三騎士の一人である『炎帝^{カライ}』を呼び出し、

その力で炎剣を作り、振り被る。

「なんん」

蹴り飛ばした男が、こちらを向き何か言おうとするが、そんな事は聞きたくないし聞く必要もない。

キン　　ボウツ！！

炎剣で、男を鎧ごと薙ぎ払う。

鉄の高度まで圧縮された炎は、本物の鉄が

鉄を斬ったかのような音を出し、その後、

斬ったモノを一切残さず蒸発させる。

これはただ単に、6億　の炎が相手を焼くよりも、

俺の剣速が速かったに過ぎないだけなのでどうでも良い。

アリカを見ると、倒れた衝撃で、若干着崩れていた。

後ろ手に縛られ、足枷を付けられてる以外は、

出て行った時と変わらない・・・。

俺はアリカを起こし、抱き締める。

「間に、……合った……………」

念の為に五回、この記憶を読み、

アリカの身に何も無い事を確認する。

「シュウ…マ……………」

何故、主がここにおるのじゃ……………?」

アリカが俺に気付き、顔を上げる。

「何故って、アリカを助けに来たに決まってるだろ……………」

「……………私などを、助ける……………前に、

……何故、義姉君を助けに行かんのじゃ……！！

国に必要なのは、私では無く、義姉君じゃー！！」

いきなり怒られても、な。だって、そんなの……

「そんなの関係無い……」。

俺が必要なのが、お前だったんだから。」

「そ、……そんな事、ある、ものか……！！」

俺の言葉に、アリカは首を横に振る。

「私が必要な人間などいない！

今までがそうじゃった！！

近づいて来る者全てが、私を利用しようとしていた！！

今回とて、私は慰み者扱いじゃー！！」

……アリカの頬に手を当て、顔を近づけて行く。

「私は……、私は必要とさ」 んん？！」

そんな悲しい事は、言わせない……。

「んん！！／／…ん、ふあ、ちょ、何をs　んむうう?!／／
／」

暴れなくなるまで、キスし続ける。

「　ん！！／／…んん…む、ん／／…あふ、ん…ちゅ…
／」

…少なくとも、一分は経っただろう。

アリカの体から力が抜け、抵抗しなくなったので、一旦唇を離す。

「……ん、ふう……あ、…「じゅん。」

「……いきなり、何をするのじゃ……。

こんな事、ノワール殿が知ったら　「

「いや、公認だから問題ない。」

「………は？」

いや、そりゃ疑問だろうな。

「嫉けたのはノワールだ、って言うてるんだよ。」

「一夫多妻制……って知らないか？」

「いや……そんな事は知っておるが……。」

な、何故、私に、その、じゃな……… / / / 「

「………お前が、好きだから、かな。」

「………い、いま、なんと……？」

………もう一回言わせるか……。

「俺が、アリカを好きだ、って言ったんだよ。」

「う、嘘じゃ………、有り得ん……。」

だ、だって、主はノワール殿と結婚しておるではないか……。

「ARIAだって………、娘もいるでは、ないか………。」

「ARIAは………まあ、拾った（？）娘だ。愛してるけどな。」

ノワールは、俺が一番愛する人だ………。

でも、アリカの事も好きなんだ……。

はは……やっぱり、おかしいよな……?」

自嘲気味に笑うが、アリカはそれを否定する。

「い、いや……。わ、私も、……………」

アリカは一度下を向き、再び顔を上げ、言った。

「私も……、シュウマの事が……好き……じゃ……。」

もう一度、アリカを抱き締め直す。

「……ありがとう……、アリカ……。」

「それこそ、こちらの台詞じゃ……。」

フフフ、私の初恋じゃ……。光栄に思えよ……。」

……嬉しいんだが……

……やっぱり、確認する事がある……。

「なあ、アリカ……。今更だけど、さ……。」

俺、もう結婚してるんだが……、良いのか……？」

「本当に今更じゃな……。」

私は王族じゃからな、そう言ったモノには耐性があるし、受け入れられる。」

「だけど……、俺の一番は、アリカじゃん　ん?!」

……今度は、アリカに唇を塞がれた……。

「そんな事は、分かっておる……。」

じゃから、一番になるのは、私の仕事じゃ。」

随分遅しい王女様だな……。

「……じゃあ「待て。」……何だ？」

「今度は私が聞く番じゃ。」

そ、その……じゃな、あの時、その……覚えておる、か……？」

そんな事言われても、分かりません……。

「あの、街中での爆発があった後の、

帰ってからの話じゃ……。」「

「ああ、あの時な。……で、それが……？」

「その……わ、私が、じ、じく、告白しようとした時……は……？」

「あ、ああ。あれ、やっぱりそうだったんだ。」

「そう、それじゃ……／＼／＼」

その時、どうして、悲しそうな顔をした、のじゃ……？

あ……。顔に出たのか……。

「その、だな……。」

ほら、俺って……不老不死、じゃん？」

「あ、うむ。それは心得ておるが……。」

「その、やっぱり、アリカは俺より死んじゃう訳で……。」

だから……、好きな人が死ぬって考えたら、さ。

どうしようか、と思う訳で……。」

俺にとっては、一番深刻な問題。

妻となった者が、先に死ぬ……。そんなのは、耐えられない。

「だから、せめて不老不死になって貰わないと」

「……………プツ……………く、クフフフ……………」

「……………何故、笑うか。俺にとっては……………」

「ああ、分かっている…。フフフ……………」

何じゃ、私の考えは、とんだ間違いじゃったのか……………」

フフフ、馬鹿みたいじゃな……………」

え、えーと……………一体、何の話をしているんだ？

「シュウマ。私を、不老不死にしてくれ……………」

「え、……………本当に、良いのか……………？」

不老不死ってのは」

「ああ、分かっている……………、いや、知ってはいる。

正直、大切な者の死と言うのが良く分からん……………」

父様と母様の死は、普通では無かったし、な……。」

まあ、クーデターによる爆死（or炎上死）なんて、普通じゃねえしな……。

「じゃから、シユウマが感じた死の重さは、分からん。

じゃが、人の死の重さは、分かっている……。

……それが、主と共に居る代償だと言うのならば、

安いモノじゃ……。だから、頼む……。」

「分かった。えーと……（ゴソゴソ）。ああ、あった。

これを飲めば、肉体の老化が止まって、不老不死になれる。」

薬箱から黒い丸薬を出して、アリカに渡す。

「す、凄い物を軽く扱っただけじゃない……。」

「いや、不老不死になるだけだから、そんなに凄くないぞ？」

「む？不老不死と言ったら、吸血鬼と同じ能力ではないか。

その能力が何故強くないのじゃ？」

ああ、勘違いしてんのか。

「コホン。いいか、アリカ。」

『不老不死』と言うのは、肉体が年齢を重ねなくなった結果、死なくなると言うモノだ。

吸血鬼が持っているのは、これ＋『高速再生』。

吸血鬼は体全部で一つの生命体になっているから、体が二つに裂けようが再生するんだ。

『不死身』とはまた違うんだ……って、着いて来れる？」

「ああ、問題無い。」

アリカって、やっぱり頭いいな。

「そっか。んで、詳しい説明しようか？」

「いや、よい。今は義姉君を助けに行かんと。」

「ああ、そっちなら大丈夫だぞ？だって」

ドオオオオオンン！！！！

「あいつ等が来たからな。」

side ナギ

俺達は今、愁磨が置いて行った飛行艇で、

『夜の迷宮』まで飛んで来た所だ。

「・・・ナギ。賭けをしませんか？」

「あ？こんな時になに言ってるんだよ？」

「なに、簡単な賭けです。」

終わっているか、始まっているか、です」

何、訳のわかんねえ事言ってるんだ？

「愁磨の事だから終わってるに決まってるじゃねえか。」

「フフ・・・では、勝った方が負けた方の

今夜のおかずを貰うと言う事で宜しいですか？」

「よく分かんねえけど、良いぜ！」

「ただ、今はエルザを助けねえとな……！！！」

「フフフフフ・・・そうですか。」

俺の言葉に、アルが何故か笑う。

「あ？何で笑ってんだよ？」

「いえいえ、貴方はそれで良いのです。」

「まあ、貴方達は問題無いのですがね……。」

「やっぱりアルの言う事は訳分かんねえぜ。」

「二人とも！！もう着くぞ！！！」

「……普通、ここまで来るのに少なくとも数日掛るのですが……。」

「!

ゴオオオオオオオオ!!!

愁磨め!後で覚えてやがれ!!

subside エルザ

さつきから何度も爆発が起こっているのだけれど・

もしかして、ナギ達に来てくれたのかしら・・・?

「第一王女殿……。これは、もしかして……。」

一緒に閉じ込められている褐色肌の女の子・・・、

帝国第三皇女のテオドラ様が期待を込めて聞いて来る。

「ええ、『紅き翼』の皆ですよ。思ったより早かったです。」

「そうか！かの『紅き翼』が来たとなれば安泰じゃな！！」

して、……あの『アーカード』は本当に居るのかの？」

「ええ、いますよ。でも、噂なんて信じない方が良いでしょう。

実際に会えば分かりますよ？」

「（・・・ボソッ）」

「？今、なんて仰いましたか？」

「い、いや、何でも無いのじゃ！！気にするでない！」

テオドラ様の事が気になるけれど・・・、

ドンッ！！！！

牢の壁が殴られたような音を立て、ガラガラと崩れる。

そして、崩れた壁を踏みつけ、あの人がある。

「よお、来たぜ、エルザ。」

「遅いわ、ナギ。もう少しで寝てしまおう所だったわ。」

side out

ワラワラ出て来る敵を倒し続け15分。

敵からエルザ達が閉じ込められている場所を付き止めて、

やっと辿り着いた。

「そつらあ!!」

ドゴオン!!

エルザ達が閉じ込められてる牢の壁を殴り壊す。

「よお、来たぜ、エルザ。」

「遅いわ、ナギ。もう少しで寝てしまう所だったわ」

「助けて貰って一言目がそれかよ?!」

「それよりナギー！」

アリカが別の所に連れて行かれたの！！早くしないと！！」

「ああ、そっちは問題無いぜ！」

「え、なんで」

トトン

俺達の後ろに着地する音が、二つした。

「随分遅かったではありませんか？愁磨。」

「悪い悪い、少しイチャついてたんだ。」

「誰がそんな事をしたと言っのじゃ？！」

「していたじゃない。……私を差し置いて。」

「ノワール殿までそんな事を言っのか！？」

「・・・パパ。浮気しちゃ、いけないんだよ・・・？」

「グフツ？！こ、これは浮気じゃないぞ！？」

浮気って言うのはだな

「

「来た瞬間づるせえな。」

「……え？」

「ま、こつ言う事だ。分かったか？エルザ。」

S i d e
o u t

第21話 魔人は周囲を増やすようです（後書き）

ノワ「アリカがやっとハーレム入りしたわね。

どっちも煮え切らないから、こんなタイミングになるのよ。」

愁「・・・返す言葉もない。」

作「フウ・・・えー、前書きで引つ張った事なのですが。

『少年は魔人になるようです』、少しの間休載しようかと思っ
ます。」

愁「・・・主に、作者のテンションによる所が大きいな。

とあるユーザーの感想が胸糞悪くなる物だったから、だ。

見てるだけで嫌だったから、すでに削除した。」

ノワ「見てくださっている方々並びに、コラボを受けて頂いた方々、
作者の勝手、申し訳ありません。」

作「どんなに短くても1週間、長ければ一カ月以上です。

リアルにも少々影響出るので、最悪、後腐れ無い様に消します。
勝手ながら、御承知願います。

それでは、Spero di incontrare di
nuovo un giorno.

第22話 世界は思ったよりも大きいようです(前書き)

お久しぶりな方はお久しぶりです。altlineこと、Hate・
revolveです。

作「那由他様、MC様、ガンレオン様、ゆや様、アリス様、zer
o様、

弥太郎様、Diminundo様、ヴァルキュリア様。

温かいお言葉をくださり、ありがとうございます。」

愁「ゆや様には幾度と励まして頂きまして、本当に感謝です。」

ノワ「剣の舞姫様、紅様、木下文様、春夏秋冬様、断耶様。

休載中だと言つのに感想下さり、ありがとうございます。」

作「えー、今回から更新再開いたします!!

しかし、以前の様な速さでは書けないので・・・、4～5日毎の
更新を目指します。

それでは内容の方ですが・・・、以前の内容と比べて)・3・(
あるえ〜?

と思う箇所があるかも知れませんが、その時はご一報ください。
・・・。」
愁「それでは、詳しい内容についてのシツコミは後書きで!」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ!」」」

第22話 世界は思ったよりも大きいようです

Side ノワール

「いい加減、行かないとダメなんじゃないかしら？」

シユウト・・・主にアリカに言う。

まあ、結ばれたばかりなのだから、くっ付いていたい気持ちは

これでもか、つてくらい分かるけれど・・・。

「ん、そうだな。ナギ達も助けてるだろうしな。」

「.....」

「アリカ.....不満なのは分かるけれどね...？」

あまり関わっていない人には無表情にしか見えないでしょうけれど、

分かる人が見れば、今のアリカは明らかに不機嫌・・・

.....いえ、むくれているのが分かるでしょうね。

・・・容姿も相まって不自然さの欠片もないから、
捨てられた女にしか見えないのが嫌ね…………。

「いや…………、ちょっと調子に乗って、『後で膝枕してやるから』
みたいな事言ったら、殴られた…………。」

「そんな魅力的な事言われたら、アリカは照れて怒るでしょうね…………。」

そうなのか？って目で聞いて来るシュウ。

…………いいわね。位置関係的に、上目遣いになるから、すごくシ
ュウが可愛いわ…………。

ゴホン…………この人、他人の感情にはそこそこ鋭いんだけど
、

自分が他人に及ぼす影響って言うのを分かって無いのよね…………。

「シュウの場合、自分がどんな人間か分かる必要があるのよね。」

「なんじゃ、そりゃ？」

生前は、魔法使いまっしぐら（本人談）？だったから、
自分がどんな威力なのかが分からない、らしいわ。

「何時まで喋っているのじゃ！！早く来ぬかー！！」

アリカに急かされた私達は、急いで外に出る。

「にゃああああ〜〜…眩しい〜〜」。

「…パパ、ねこさん？」

地下も予想以上に明るかったとは言え、所詮は地下。

外とは比べるまでもなく暗かったと言う事ね。若干、頭が痛いわ…。

「それで…ナギ達は何処に居るのかしら？」

「あそこじゃろう。煙が上がっている。」

アリカが指した方を見ると、確かに…（ドガアアーン！！）

…今、丁度破壊音がしたから、間違いないわね。

「んじゃ、一飛び行きますかね。」

ヒョイっと、自然にアリカをお姫様抱っこするシュウ。

「な?! シュウマ!? 急に何をー!!」

・・・すっごく羨ましいとか、そんな事しかないわ。

「さ、行くわよ、アリア。」

「・・・ん。」

私もアリアを抱き上げると、シュウと同時に跳ぶ。

「キャアアアアア?!」

不意のジャンプに、意外と可愛い声を上げるアリカ。

300m程の空の旅を終え着地し、前を見ると丁度、

ナギ達も、エルザさんを助けた所だった。

「随分ゆっくりな登場だな、ナギ。」

「愁磨!!! てめえ、先に着いてたのに何やってたんだよ?!」

「いきなりキレんじゃねえよ！ゆとりかてめえは？」

「ゆとりってなんだよ？！馬鹿にしてんのか！？」

「してるっちゃしてるな。」

・・・私的には、『ゆとり』は被害者でもあると思うのよね。

やっぱり、親がすっかりしてないからいけないのよ。

「てめえ！！ちようどいいぜ！」

この間の決着がまだ着いて無かったな！！」

最近、ナギの沸点がホントに低いわね・・・シュウったら、何をしたのかしら？

「えー……いいよ、面倒くせえ。」

「ハ！なんだ、怖気づいたのか！？」

「んな訳あるかアンチヨコが！！」

中退風情が調子に乗ってんじゃねえゾ！！」

フフ、可愛いわね。本当に

「……………どっちも、子供……………」

「「グツハア!?!」」

アリアに台詞を取られたわ……………。

しかも、言われた二人は大ダメージ。アリア、恐ろしい子!!

「あ、アリアは随分大人びておるな。」

「……………えらい?」

「そ、そうじゃな。アリアは偉いな。」(ナデナデ

「……………えへへ……………」

アリカとアリアがすつごく仲良いわね……………。

新・母娘の関係が良好なのは良いけれど、嫉妬しちゃうわ……………。

「フフ……………、それでは一段落した所で……………」

何時までもここに居る訳にはいきませんし、隠れ家まで行きまじょうか。」

「あ、ああ。そうだな……。」（フラフラ

「喧嘩は、いけません……。」（フラフラ

二人とも復活したわね。……大分ダメージ残っているけれど。

「あ？帝国の皇女様つてのが居なくねえか？」

ジャックが、珍しく良いツッコミをしたわ……。

「ええ、それなら、私の後ろに居るわよ？」

と、エルザさんの後ろから、

影になっていたヘラス族の子が出て来る。

「フ、フフフ……。ようやく、会えたのじゃ……。」（キュピーン

お……。

……シウを見ているのは気のせいかしら……？

ダダダダダダダ……！！

バツ……！！

テオドラは震えて更にしがみついて来るし、

『紅き翼』の奴らはダラダラ汗をかいて居やがる……。

うん、忘れてたけどアリアって『神』^{てんし}だったな。

魔力は、ナギよりあるんだよな……。まあ、英雄補正でナギの方が強いんだけどさ。

っと、今はそれよりアリアだな。

「ハイ、ジャック。ちょっとテオドラ頼むわ。」

テオド……めんどいからテオでいいか……。を引き剥がし、一番近かったジャックに渡す。

いや、固まってたから無理矢理だが。

「ほら、アリア。おいで。」

しゃがんで両手を広げてアリアを呼ぶと、とてとて走って首に抱き付いて来る。

「フウ……」。

愁磨、アリアちゃんを不機嫌にさせないでくれよ……。」

「ある意味、一番手が付けられないからな……。よっと。」

ヒョイツと抱き上げてやると、ちよつとムスツとしながらスリスリして来る。

……普段が無表情だから、破壊力が……！！父力が溢れそうだし！！

「ハア、ハア……。フフ、良いですね……。」

ほら、アリアちゃん、こつち向いてくd」（バギャ！）

あああああ、カメラが!?!」

「変態八、駆除シナイトイケナイワネ……………?」

「私の娘（いや、アリアには姉と思われるが……）に

不埒な真似をするとはいい度胸じゃな、アルビレオ・イマ?」

「不埒とは失敬ですね……。私はただ愛でただけなんですよ?」

「変態は否定しないんじゃない……。」

「フフ……。どうせなら紳士と呼んで頂きたいのですが?」

「……………『魔合聖纏』。」「ゴオオオオオオオ!!」

「ノ、ノワールさん。それは流石に洒落にならないのですが・・・？」

「大丈夫、直グ楽ニナレルワ。」

「・・・先ずは落ち着いて、幼女のおs「天誅！！！」アフウウウウー！！」

む？俺が珍しく取り乱している内に、アルが何やらクロコゲになっている。

大方、アリアかテオにでも手を出そうとしたんだろう。

フツ、良い顔で死んでやがる・・・。

「さて、そろそろ良いか？」

何時までもここに居る訳にはいかないんだから、隠れ家に行くぞ。」

と、Airになつていたガトウから声がかかる。

「そつだな・・・。全く、いつもナギと愁磨のせいでこじれるんだよな。」

Air組はホント、空気変えるのに必要だな。ありがとう、ガトウ、詠春・・・。

「・・・パパ、何で泣いてるの？」

「ああ、世の不条理さが辛くてな……。」

「・・・？・・・パパ、いいいいこ。」（なでなで

「ううう、人を思いやれる良い子に育ってくれてパパは嬉しいよ……。」

と、俺とアリアが心温まるスキンシップをしていると

「さ、みんな行くぞ〜。あれにかまってるよ、また長引くからな〜。」

「・・・詠春・・・。俺あ悲しいよ・・・。」

本当ならorzる所だが、アリアを抱いてるお陰でなんとか持ちこたえる。

「フフフ……。シュウ、行きましょ。」

「何を頂垂れているのじゃ、主は。ホ、ホラ！さっさと行くぞ！！
／／／」

ノワールとアリアも両隣りに来てくれる。

「・・・あつちじゃ、考えられない幸せだったな……。」

「ん、行くか。」

「幸せ絶頂って感じで羨ましいなあオイ!！」

「ケツ、こんな性格悪くてももてんだから、世の中不公平だよな。」

「ナギ、貴方が言っても嫌味にしか聞こえませんかよ・・・?」

何だかんだ言いつつも、結局待っていてくれるあいつ等。

「うむ、出迎え御苦労。むさ苦しい男共に麗しい姫君方。」

「私をむさ苦しい方に居れないで頂けるとありがたいのですが・・・」

「全くだぜ!むさ苦しいのはジャックだけだろ。」

「「「「お前(貴方)(主)も十分暑苦しい(わ)(のじゃ)。」」」」

「んだとコラア?!」

「「「「良いからさっさと行くぞ(行きましようよ)!!」」」」

Air二人とタカミチから突っ込みが入る。流石にグダり過ぎたな。

「と言う訳で、『ブック!』『アカンパニー・オン!オリンポス、

「隠れ家！！」

「……………え？」

某ハンター ハンターのグリッドアイランド編で使われた大人数用指定ぶつ飛びカードを使い、

隠れ家まで強制移動する。

バシユウウウウウ……

ドオオオオオオン！

「そういう訳で、ここは『紅き翼』の隠れ家です！！」

「シユウマは誰に説明しているのじゃ？」

「アリカ、シユウのやる事にいちいち突っ込んでいたら、気が滅入るわよ？」

「……うむ、先妻の言う事は参考にしないといかな。これからはそつするのじゃ。」

「なんだ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！

こんな掘立小屋では、お姉さまに満足して頂けんであろう！？」

「俺ら逃亡者に何期待してやがんだ、このジャリはよ。

つてか愁磨は男だつてーの。」

「貴様、皇族に向かって無礼であろう!！」

「ヘツヘくん、皇族にや貸しはあつても借りは無いんでね!！」

「何イ!? 貴様何者だ、筋肉ダルマ!！」

おお、テオが復活したみたいだな。つてゆーか、

「ハツハツハ、仲良いな、お前等。」

「おいおい、冗談はやめろよ愁磨! この俺様がなんd」そうじゃ!

!」

「この様な筋肉ダルマと仲が良いなど、虫唾が走ります!

幾らお姉さまと言えどその様な言い分は了承しかねるのだ!」

うわー、ジャックが若干凹んでるよ。

何だかんだ言つて幼女に完全否定されんのはキツいんだな。

「テオド」テ、テオで良いのです! / / 「あー…んじゃ、テオ。

ジャックはどうでもいいが、一つ勘違いを訂正しないとな。」

口を の形にして、コテン、と首を傾げるテオ。

くうっ?!素直に可愛い!!

(ベシベシ!!)「痛い痛い!!ごめんごめんアリア。」

コホン。良いかテオ。俺は、男だ。それに、既婚者だ!!」

「なに?!そうだったのか!？」

「うん、そうだ!!」

よし、若干百合街道走りだしてるテオだ。これで俺にh

「ならばお兄さまなのだな!!フッフ、邪魔な条件が一つ減って良かったのじゃ!!」

それに妾は皇族じゃ!!重婚など気にせんぞ!!」

えー……………ダメですかそうですか。

「愁磨……。貴方は何人の幼じ……。女性をを誑し込めば気が済むのですか?」

若干私情が漏れたぞ、アル。

「いや、俺にもテオはさっぱりでs「なんじゃと?!」「

「お兄さまは覚えてないのですか!?!?」

「あー、ごめん、さっぱり分かん。

あと、お兄さまはやめて、愁磨って呼んでくれ。後、敬語いらんから。」

「う、うむ。そ、それでは……、愁磨お兄さまと呼ばせてもらうのだ!!!/!/」

「カフウ?!」「(ただし愛は鼻と口から出る

いや、何でアルも吐血鼻血してんのさ。

「フフ……、幼女の恥じらい顔……。それだけでご飯五杯いけますよ。」

それより愁磨は年上好きなのに、何故幼女に反応しているのですか……?」

「愚か者が……。美少女に反応せんで何が男か!!後ナチュラルに心読むんじゃねえ。」

「愚問でしたね、申し訳ありませんでした……。それと、それは今更と言うモノです。」

「え、えーと……………」

「あ、ごめんごめん。で、俺っていつテオとフラグ立てたっけ？

あと、悪いがお兄さまは無しで頼む。俺の妹は一人だけだ。」

「注文が多いのだ……………」

ふらぐ？…とはよく分からぬが 妾としゅ、愁磨が会ったのはつ
い数ヶ月前の事なのだ！

妾が屋敷の森で探検しておったら、ドラゴンに襲われての……………」

そこに颯爽と登場したのが愁磨だったのだ……………」

「あ……………」、やっぱりあれテオだったのか。」

「思い出したか……………」そ、それでの……………」

戦っている愁磨は、美しい銀髪を翼のように広げ、優雅に戦うのだ
……………」

「（オチが読める（ますね）……………」

「その様子が、まるで女神の様に見えるの……………」

妾は…、お、女だと思ったのだが、その……。一目惚れしてしまったの／＼／」

頬を赤くし、クネクネするテオ。

「だから、妾と結婚するのだ!!」

「色々過程すつ飛ばしてるが……。

……いや、好意自体は嬉しいよ？でもさ、テオ。お前、今何歳だ？」

「今年で10歳になるのだ!!」

フフン、とテオは誇らしそうに胸を張る。

「テオ、お前はまだ10歳だろ？」

俺みたいな犯罪者なんかより、もっといい相手を探せよ。」

「なんだと?!妾の事が気に入らんのか!!?」

「あー、いや。テオの事は好きだぞ。

だけd あ、違うぞ?恋愛対象としての好きじゃな……そんな目をされてもだな。

良いか、テオ。お前はこれから今までの何倍も生きてくんだ。

「一時の気のまよ」シユウ。「……ノワール？」

今まで静観していたノワールが、急に話しかけて来る。

「女の私から見ると、テオドラは本気じゃ。一時の気の迷いだなどと、ひどいのではないか？」

「アリカの言う通りよ。本気なんてテオに聞いてみないと分からないじゃない。」

それに、女の子が　いえ、恋するのに歳は関係ないわよ？」

ノワールだけでなくアリカにも責められる俺。

「いや、でもじゃない(のじゃ)……」「」「」

「あ~~~~!!もう!!テオ!!」

「ひゃい?!」

む。声がでかかったらしく、テオの声が上がった。

が、今は無視しよう。

「……テオは、俺を本気で……好きなのか？」

「あ、改めて聞かれると恥ずかしいが……、今一度言おう。」

わ、妾は……愁磨の事が好きじゃ！！／／／

「そう、か……。でも、俺は、テオをそう言う対象と見れてないぞ……？」

「妾はまだ子供だが、その位分かっておる！！

だが、いつか愁磨から好きだと言わせてみせるのだ！！」

……何かデジャブった……？アリカさん、顔赤いツスよ？

まあ、テオが本気かどうかは分かった。

じゃあ、俺と一緒に来るか？

そう、言おうとした。

……いや、感覚としては言った。

「……………」

しかし、俺の口からは何も言葉が出ない。口を動かすことすらできなかった。

そう……、これを表すなら、『口に出す事が許されない』？

いや、もつと上位的な・・・？多分、『考える事すら許されていない』レベル。

「ど、どうしたのじゃ、シュウマ？」

「シュウ……………？」

アリカとノワールが俺の異変に気付く。

「ああ、いや……………。なんでもない。」

今までは何も無かったから、半信半疑だったが…………。

「テオ、お前の気持ちは嬉しい。」

俺の言葉にテオはポカーンとなったが、徐々に嬉しそうな顔になる…………。

「だが、すまない。テオを、一緒に連れて行く事は出来ない。」

だが、次の言葉で三人の動きが止まり、次の瞬間テオが泣きそうになる。

「え、あの、シュウ？前文と後文が貴方的に合わないだけ…………。」

「…………テオ、お前は皇女として頑張ってくれ。」

呼べば、何時でも駆け付けてやる。だから、今は……………」

ノワールの言葉を黙殺し、テオに視線を合わせながら言う。

「……………」(グシグシ)

テオは溜まっていた涙を乱暴に払い、俺の方を見る。

「分かったのだ!…しかし、勘違いするでない。愁磨の事を思っただ!

諦めた訳で無いぞ!」

ツフフ……なんだよ、成長なんてしなくても良い女じゃないか。

「ありがとう、テオ。……………」ごめんな。」

「気にするでない!亭主の事を考えられるのは妻としての義務じゃ……………」

そうか、と呟き、ふとナギ達の事を思い出す。

「そっぴゃあいつ等……………」

振り向くと、ナギはエルザさんと向かい合って

「それじゃあ、私達が世界を救いましょう。」

世界の全部が敵、こちらの仲間は、最強なだけのたった10人。

フフフ、とつても楽しそうじゃない。」

「ハ、ハハハハハ！とんだお転婆なお姫さんだぜ！！」

「……ナギ。私の剣となり、盾となり、翼となり、雷となってくれ
るかしら？」

「へっ、聞くまでもねえだろ。」

そう言うとナギはエルザさんに跪き、首を垂れる。

「俺の杖も翼も魔法も、全てお前に預けるぜ。」

誓いを立てた騎士と、優しく微笑む王女。

荒涼とした大地と二人に後光が差し、それを仲間が囲む。

イレギュラーこそあれど、それはまさに絵画の様だった。

その光景を感慨深く見ていた俺だが、ナギが立った所でふと疑問が
出来る。

(まあ、要するに要らん小石を投擲するって事で。)

「なあ、その10人って誰の事だ？」

「え？えーと、まずナギでしょう？私、アリカ、ラカンさん、アルビレオさんに、

ガトウさん、詠春さん、ゼクトちゃん、愁磨さんにノワールさん？」

「……タカミチ、きつと良い事あるって。元気出せ、な？」(ポン

「放置プレイと言うのも、捨てがたい物ですよ」(ポン

俺とアルに続き、皆がタカミチ(orz)の肩を叩く。

「あ、いえ、ごめんなさい、タカミチ君！！

忘れていた訳ではないのよ?!ほ、ホラ、子供は勘定に入れてないのよ!!」

「エルザさん。」(ニッコリ

「な、何かしら？」

「アリアとテオにも謝っておきましょうか。あと、ここに居ないクルト君にも。」

「い、いえ、その、だから、忘れていて」謝れ。「……」「ごめん
なさいiiiiiiii!」

「…なあ詠愁。なんで愁磨はあんなにキレてんだ？」

「恐らく、アリアちゃんを無視されたからじゃないか……?」

「フフ……。今はテオドラ様も、ですね。」

「……なんであいつは全方位にモテるんだろうな？」

「間違いなく、間が良いからですね……。」

白馬の王子様になるチャンスが勝手に転がり込んで来るのですよ。」

「ずっぴりいよなあ〜。」

「「「「「お前（あなた）が言っんじゃねえよ（言わないでください）！……」「」「」「」

「なんでだよ?!」

どんな未来が待っているようにも。

『紅き翼』は、今日も平和です。

第22話 世界は思ったよりも大きいようです（後書き）

作「と言う訳で22話でした。」

愁「なあ、テオってハーレム入り決定してたんじゃない？」

作「詳しい事は秘密で。」

一応言うなら、テオはハーレムメンバーだけど愁磨と一緒に居ない、

と言うある意味イレギュラー的な役割をして貰います。

本格参戦は魔法世界辺からですが、世界時間で週一〜2週一くらいで出ます。

要するに、魔法世界までルートが無い隠しキャラ？です。」

ノワ「・・・そんなに複雑にして書き切れるのかしら？」

作「複雑（思い付きのせい）×イレギュラー×勢いこそ、

この小説の目的だからね。なるべく支離滅裂にはならないようにするよ。」

愁「さて。更新についてですが、次回は11、12日を予定してます。

それでは、次回まで！」

作愁ノワ「・・・アリーヴェデルチ！！！！」

第23話 序盤でラスボスが出てくるようです(前書き)

こんばんにちわ、H a t e . rです。皆さん大丈夫でしたか？
ウチの嫁とか諸々は殆ど再起不能です。。。

作「という訳で23話です。」

タイトル通り、ようやくあいつが出て来ます!!」

愁「原作に無かったフェイト一号(?)との六ヶ月間の戦いとか諸々は？」

ノワ「カットよ。小競合いなんて見てもつまらないでしょ？」

ちなみに、私はイライラしたわ。」

愁「・・・H e t aさん？」

作「お姉さまのご意見を活かした形でございますれば・・・。

えー、それでは恒例の。」

ノワ「木下文様、剣の舞姫様、紅様、z e r o様、微糖様、春夏秋
冬様、アリス様。」

「ご感想くださり、ありがとうございます。」

作「D i m i n u e n d o様、ゆや様、龍賀様、神無月様。」

温かいお言葉を頂き、本当にありがとうございます。

作者の心に沁み渡りますれば・・・。」

愁「まあ前振りはこの辺で。」

作愁ノワ「」それではどうぞ!」」」

第23話 序盤でラスボスが出てくるようです

Side 愁磨

紆余曲折を経て、俺達は『完全なる世界』に反撃を開始した。

と言っても、『答えを出す者』で楽勝

そう思っていた時期が俺にもありました・・・。

『答えを出す者』を発動しても、敵の居場所が分からなかったのだ。

戦闘時には問題無く使えるのだが、『完全なる世界』の内部事情となると、

全くと言って良い程効果が無い。

仕方なく俺は戦闘班に混ざろうとしたのだが、

三姫様&アル&ガトウから「お前は両方だ」と言われ、泣く泣く承諾。

フツ、メガロに居た頃から分かってたさ。

で、開始から六ヶ月。

マフィアだの武器商人だの腐った役人の 原だのを潰し周り、
遂にラスト戦闘前のセーブポイントまで辿り着いた。

戦闘をしながら不正を徐々に明るみにして行った事により、
俺達に掛かっていた疑いは晴れ、再び英雄として見られるようにな
った。

詳しい手順は控えよう。・・・それだけで単行本8冊は書けるから。
そして攻めるのは明日となり、今は皆英気を養う時間。の、はずだ
った。

「さて、シユウ。今日こそは聞かせて貰うわよ。」

「そうじゃ。散々逃げおって。今日ばかりは逃げられんぞ。」

部屋に帰って来るや否や、ノワールとアリカが詰め寄って来た。

二人が聞かせろって言うてるのは、六か月前の事。

『何故俺がテオの告白を受けなかったか』だ。

「……………それを話すには、俺の……………」

いや、俺とノワールと、アリアの秘密から話す必要がある。」

俺の言葉にノワールが反応する。・・・若干は察したようだ。

「…………シユウマに秘密がある事など、百も承知じゃ。」

見た事もない魔法を使い、人ならざる力を持つ。

御伽噺の中の者があるのじゃ。今更何を言われようとも驚かぬ。」

アリカの言葉に、少しだけ空気が軽くなった気がする。

「…じゃあ、先ずは大前提から言っぞ。俺達は、この世界の

人間じゃない。」

「…………何を今更言っておるのじゃ？」

主らが旧世界の人間だと言っ事なら、前にも

手を出し、アリカの言葉を途中で止める。

「…………言い方が悪かったな。俺達はこことは別の、つまり、平
行世界からやって来た。」

と、アリカが俺のおでこに手を当てて来る。

「…………むう、熱はn」俺はいたって正気だよ！」「…信じられん
のじゃが…………。」

「コホン。パラレルワールドって言葉は知ってるようだな。

なら、説明は省くぞ。俺は、前いた世界で一度死んだ。」

「……………は…？え、えーと、輪廻転生と言っんじやったか？」

「……………それともまた違う。」

そして俺は、若干省略しつつ今までの事を話した。

「……………つまり、ここはシユウマが前におった世界の創作物の派生世界で、私達はその登場人物。」

そして、この世界には大まかなシナリオが決まっていると言っ事じやな。」

「……………そうだ。だけど、俺はこの世界をそう。」

今度はアリカが俺の唇に指を当て、俺の言葉を遮る。

「分かっておる。それに……………、それに、じゃな……………//」

急に真っ赤になり、もごもごやってるアリカ。

「……………例えそうであったとしても……………、

この世界がシユウマにとって、過去、偽りの世界であったとしても、

私達が、ここで、こうして、生きておるのじゃ。

ならば、この世界は偽りでは無いのじゃ。」

「……………アリカ……………」

「シュウマに会えた事、私は誇りに思っておる。

ならば、シュウマも……………、その……………、……………何でも無いのじゃ……！／
／

続きを話すのじゃ……！」

先を促すアリカ。……………ノワールが鼻血出してるが、気にしない
方向で。

「と言っても、もう話す事は無いんだがな……………」

えーと、さっき言った『大まかなシナリオ』から離れる行動、

これを止める力が、『修正力』または『抑止力』。」

「……………そうか。『修正力』とやらによって、

シュウマはテオの告白を断らなければならなかったのじゃな……………」

しかし、何故私は大丈夫だったのじゃ？

主人公の母親ともなれば、物語の根幹に関わる事……。」

「……これは、俺の推測、憶測、推理でしかない。

原作ではテオの事を『第三皇女』と明記していたが、

アリカの事は『王女』としかなかったんだ。」

「つまり、テオには『皇女の三番目』として確固たる役目があるが、

私には決まった役割は無い、と？」

「……多分な。って言うか、変に思ってたんだ。

帝国は確かにでかい国だが、ウエスペルティアだって王国。

王の継承者が一人なんて事は有り得ないだろう？」

『英雄色を好む』とは言うが、元々王が継承者を何人も作るのは

暗殺されても良い様に……って言えば聞こえが悪いが、その為だ。

「確かに……。帝国王には妻が50人以上、子も1000人程おるし、

我が国とて、20人の継承者候補がおる。」

「ん、つまり重要なのは王族の子とナギが結婚する、って事なんだから。」

「むううう、私がああ鳥頭と結婚…？何度聞いても信じられぬ……。」

ナギエ……すまん、マジですまん。

「とにかく、テオを断った理由は分かったわ。

それで、シユウはこの先どうするの？」

「う〜ん、そうだな。明日帰つて…って、やめとこう。死亡フラグだ……。」

「それはなんじゃ…と、聞かぬ方が良さそうじゃな。」

「察してくれる嫁ばかりで、俺は幸せモノだよ。」

「コンッソッソッ！！ノノノノ」

「なんだ、二人して咳払いして。高校生か？」

「……ホント、鈍感なのか鋭いのかハッキリして欲しいわ……。」

「ノワール、これを天然と言うのじゃな……。」

すっげー失礼なこと言われてるんだが？

俺が一体何をした。

「さ、もう寝ましよ。今日は私の番だったわね。」

「違っじゃろう!! ノワールは昨日だったではないか!!」

「……あー、うん。なんで喧嘩してるかと言つと、寝る時の位置だな。」

いつも、一つのベッドで四人寝てたんだ。

俺の隣には必ずアリアが来るから、二人がもう片方どうするかって事。

「って、こんな事してる場合じゃないわ!!」

昨日も一昨日もその前もこんな事してる間に

ノワールが言い終わる前に、部屋の扉が開け放たれる。

「何を騒いでいるのだ、アリカ殿、ノワール殿？」

明日は大事な日だ! 早く寝るのだ!!」

『寝てた』というのは、そう。五か月前からテオがこっちで寝るようになったのだ。

あの日から、なぜか一カ月経ってからだったのが不思議でならないが。

とにかく。テオが来るようになってから、俺の両隣が埋まってしまった。

最初一カ月の二人は、修羅もかくやと言う有様だった。

「テオ、何度言わせるの！貴方がいい加減になさい！！」

「これ以上私達の至福の時を邪魔しようと言うのなら、手段は選ば
んぞ！」

「フフン、今更と言うモノじゃ！」

愁磨が良いと言っているのだから、二人に決める権利など無いのだ
！！」

「……今も、鬼くらいの勢いではあるんだが。」

「……さ、アリア。もう寝ようか？」

「……ん。」

アリアが眠そうな半目で、両手を広げ見上げてくるので、

抱き上げてベッドまで運び、一緒に寝る。

あ、何故アリアが常に隣かって言うと、文句一つ言わずに黙ってる
上に、

皆に譲ろうとまでする良い子だからだ。決して俺が娘煩悩だからっ
て訳じゃない。

「お休み〜……。」（ナデナデ

「……スー、スー……。」

「クツ!?二人とも、行くわよ!」

「仕方ないのじゃ!!セーの!!」

「「「最初はグー!!じゃーんけーんポン!!」」」

ちなみに今までの勝率は、ノワール1：アリカ3：テオ5。

大戦最終戦(?)前夜。静かに、騒がしく、しかし幸せに夜は更ける。

S i d e o u t

S i d e ノワール

今日の争奪戦は珍しく私が勝ち、……自分で言うのも悲しいわね……。

とにかく、……皆はもう寝静まっているけれど、私は…….
だか眠れない。

「ノワール、眠れないのか？」

シユウも眠っていなかった？もしかしたら起こしちゃったのかも。

隣に居ないと聞こえない様な声で、私に話しかけて来る。

「……ごめんなさい、起こしたかしら？」

「いや。……なんか、眠れなくてな。」

シユウも眠れていなかったみたいね。

「……ちょっと、散歩しない？」

「……そうだな。あ、ちょっと待ってくれ。『魂晶憑依 分身形成』」

唱えると、シユウの体がぶれて二重になり、もう一つ体が出て来る。

これは自分の体と全く同じモノを削って、それに魂の欠片を与える

事により、

もう一人の創る業、と言っていたわ。

・・・最早生命の創造なただけけど、

創っているのは、『魂を入れれば動く、血の通う死体(?)』で、

魂は創っていない　　などなど、裏道があるらしいわ。

私の魂は使っていないから大丈夫とか言っていたけれど、なんだか、
ね・・・。

シユウは魂は創れないし、体が特別なんてモノじゃないから、
消費する魔力が聖剣級武装の創造より遙かにかかる。

こんな無駄極まりないモノを何故創るかと言うと・・・

一重に、シユウの腕に抱き付いて眠るアリアの為。

娘に、嫉妬すら覚えるわね・・・。全く、嫌な女。

「さ、参りましょう。お手をどうぞ、姫様。」

本物の方のシユウがベッドから降りて、手を差し出してくる。

・・・フフ、そんな事言ったら、三人は私に嫉妬するでしょうね。

「ありがとう、褒めてあげるわ。……フッフ、結構恥ずかしいわよ。」

「う、うるさい／＼／」

外に出ると、嵐の前の静けさ、という表現がぴったりだった。

虫も動物も鳴いていなくて、風も吹いていない。

遠くに見える『墓守人の宮殿』は月光が落ち、

昼の不気味さは影もなく、幻想的な雰囲気を出している。

「…ねえ、シュウ。明日、大丈夫よね……？」

思わず私は、3カ月くらい前から思っていた不安を口に出してしま
う。

『完全なる世界』の事を調べるにつれ、その異様さが分かっていっ
た。

帝国・連合両軍に潜入しているのは概ね予想が付いていたけれど、

戦争に参加している構成員は、両軍の中に百人居るか居ないか。

それなのに、トップ（シユウは幹部と言っていた）のフェイト・アーウェルンクスが

頻繁に戦闘に参加している。

『紅き翼』の様な少数精鋭なのかと思いきや、悪魔も魔獣も使ってくる。

目的も不明確な上、フェイトは、シユウを仲間にしたいかの様な言動を繰り返していた。

「フッフフ……、なんて顔してんだよ？そんな顔も好きだけどな。

……ああ、大丈夫だよ。必ず帰って来るから。」

そう言って、いつもより少し強く抱き締めてくれる。

「フフ、それって死亡フラグなんじゃないのかしら？」

「ああ、しまった。じゃあ、もつと立てとくかな。

……俺、帰って来たらアリカと結婚するんだ。」

「そう言えば、まだ式を挙げてないわね。」

「なあ、ノワール。俺……いや、何でも無い。明日帰って来たら、話すよ。」

「それ、私にも影響があるのだけれど……?」

「貴方を殺して、涼宮 ルヒの出方を見る。」

「私にそんな知り合いはいないわね。」

「俺、もう一人じゃない!……もう、何も怖くない!!」

「いつの間に契約したの?!あ、でも、シュウなら魔法少女似合うわね……。」

「……………ここは俺に任せて先に行け!!」

「それ、実戦じゃないとダメじゃないかしら?」

「僕のLPは君の丁度百倍。これを君は逆転できると言うのかい?」
ライフポイント

「状況が分からないと、自分が100で敵が1つて言う事も有り得るわよね。」

「こ、これは…、そうか!!早く金田一さんに知らせないと!!」

「なんの事件に巻き込まれたのかしら?」

「これでお前のモンスターは全て攻撃終了。」

ポイズンバタフライの効果で、お前のライフは0だひゃーひゃっひゃっひゃ。

やったー！ 俺の勝ちだー！」

「何を勘違いしているのかしら……？」

……ねえ、シユウ……。」

「ん、ああ……。ごめん……。」

そう言っつて、シユウは笑う。いつもの様に笑う。

ギョッ

「の、ノワール……？」

ちょっと背伸びして、無理矢理シユウの頭を抱き締める。

察して、直ぐに座ってくれた。

「…あなたと、何年一緒に居ると思ってるの……？」

無理しなくても良いのよ。」

「……ああ、やっぱりバレるか。」

……正直言っつとき、すっげー怖えんだよ……。

いつもは『答えを出す者』で未来が分かるし、

いざとなれば『ラケシスの天秤』使えたのにさ、全く効かねえんだもんな。

元々は何の力も持ってなかった一般人で、そんなの分からなかったし、

運命を変えるなんて出来なかつたくせにな。

力を手に入れて、それが使えないからって不安になるんだぜ……？

……カッコわりい……。」

「……その格好悪い人に、私達は助けられてるのよ。

だから、自信を持って。」

「ありがとう、ノワール……。」

5分くらい経つと寒くなって来て、どちらともなく離れる。

「さ、寝るか……。」

……しかし、私にはまだやっていない事があった。

「……あ、あのね、シュウ。これ……。」

そう言って、シュウに箱を渡す。

「え？あの、なに、これ？」

「その……、不安になっちゃって、ね？ミカエルに頼んで、一緒に作って貰ったの。」

「……………開けても、いいか？」

こくりと頷く。…だって、渡すだけで、かなり恥ずかしくて……

「六翼の、ペンダント？」

開けて出て来たのは、盾に白と黒の翼が付いたペンダント。

「黒はあの棺から作って、白いのは私の槍の欠片から作ったの。」

シウウの削ってくれた『リバースドル』って言うのには敵わないけれど……。

その、気休めくらいにはンム！、…ン、ちゅ…………ン、あ、ふぁ……………。

「ありがとう、ノワール…………。」

「……………どういたしまして。…もう、寝ましょう。明日に響いちゃっわ。」

今なら、良い夢を見ながら眠れる気がした。

S i d e
o u t

S i d e 愁磨

翌日、時刻は13時を廻り切った頃。

連合・帝国・アリアドネ 混成部隊が集結し、最終決戦が始まる
としていた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら……。」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなモンだ。」

「クク、実はあっちもワクワクしながら待ってるかもな。」

「……想像したら、ちょっと可愛いわね。」

「ノワールさん、流石に悪魔は可愛く無いと思うが。」

「あら詠春。人のセンスを貶すなんて、酷い人ね。」

「そんなんだからムツツリなんて言われんだよ。」

「主に言ってるのはお前とナギとジャックだろうが!!!?」

と、俺達がいつもの調子で騒いでいると、後ろから声がかげられる。

「あ、『紅き翼』の皆様！」

連合・帝国・アリアドネ 混成部隊、準備完了しました!!」

「おう。あんた等が外を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突撃できる。

頼んだぜ!!」

「ハッ!!そ、それで、あの、ナギ殿……／＼／＼」

そう言っアリアドネの少女が色紙とペンを取り出す。

「そ、尊敬しておりました!!サ、サインをお願いでしょうか!!」
「？」

「ん、おお。いいぜ、そんなくらい。」

「フフ・・・、人気ですね、ナグ・・・愁磨？」

そんなに怖い顔をして、どうしたのですか・・・？」

アルが普段の読めない表情を崩す程心配した顔で、俺を覗き込んで来る。

「……すまない。無駄な事を考えていただけだ。」

「言われないと気になるのですが・・・？」

「いや、こんな甘ちゃんが居る部隊を放つといて良いものか、とな。」

「おやおや・・・。」

アルはいつも通りクスクス笑っているが、

「あ、甘ちゃんとはなんですか！！確かに私は未熟ですが
！」

騎士っ子は笑えなかったようで、憤慨している。

しかし、論点がずれているのは微笑ましいと言つべきか・・・

いや、やはり若いと言つべきか愚かと言つべきか。

「実力不足、成績不信、修業中未熟者大いに結構、一向に構わんさ。

俺が言つてるのは、命がけの戦争が今まさに始まるつてのに、

お気楽にサインを貰うその精神が軟弱だつて言つてるんだよ。」

「な、軟弱とは失礼ではありませんか！！幾ら英雄の『紅き翼』のメンバーと言えども、

貴方の様な犯罪者に言われる筋合いはありません！！」

ククク、毎回思うが、英雄なのに犯罪者とはこれ如何に。

「あー、ハイハイ。ごめんなさーいー。

用が済んだなら隊列に戻ってくれ〜。」

「むうううう！！言われずとも！失礼します！！」

鎧をガシャガシャ言わせ、少女は走って行った。

「・・・珍しいですね、愁磨。貴方が美少女を邪見にするなんて。」

「アル、何か誤解してるわね。

シユウは確かに美少女・美女には限りなく優しいけれど、

その子の為にならないと思った事は、憎まれ役になっても直すのよ?」

「……ノワール、危ないからそろそろ『家』に入ってくださいノノ」

「フフフ、分かったわ。頑張ってね。」

俺の頬にキスしてから『家』^{やみ}に入っていくノワール。

うん、周りの目が痛いや。

「よっしゃ!! 姫子ちゃんを助けるついでに世界を救ってやるか!」

「ナギ、普通は……いえ、私達は普通ではありませんでしたね。」

「そうそう。」

んじゃ、普通じゃない奴が普通に暮らすために頑張りますか!」

「よし!…んじゃ、やろうdグエツ!？」

ナギが号令を掛けようとしたが、それはアルによって止められた。

「まあまあナギ、異常ついでに開戦は派手に決めようじゃありませんか。」

「おお、良いなそれ！…んじゃあ、俺がリーダーとしていっぱグエッ？！」

「まあ待てリーダー。」

今度は俺が『千の雷』を撃とうとしたナギを止める。

「いいか、上つてのは命令を出して美味しい所を取って行くか、

下の者を尊重しつつ己の偉大さを知らしめるもんだ。」

「う、そ、そうなのか？なら愁磨！！一番手柄はお前に譲ってやる
！！！」

「ははー、有り難き幸せ！！！」

「……何バカな事をやってるんだお前等は。」

さて、丁度よくAir詠春が入った事だし。

「いっちょ派手に決めますか！！！」

S i d e o u t

S i d e アリアドネ の少女

あの犯罪者！！折角ナギ様と話せて幸せな気分だったのに、
態々嫌味な事を言っつて！！

・・・確かに浅慮だったのは私かも知れませんが・・・、
でも、あんな言い方無いじゃないですか！！

そもそも、英雄『紅き翼』に、何故魔法世界最凶の犯罪者が居るの
でしょうか！？

「おお、良いなそれ！！んじゃあ、俺がリーダーとして」

あ、ナギ様の雄姿が生で見られる

「いつぱグエツ?!」

・・・グエ?

と、ナギ様の後ろを見ると

「まあ待ってリーダー。」

またあなたですか！！？どれだけ私の邪魔をすれば気が済むのですか！！

アーカード・・・いえ、シウマと言ったのですか？・・・がナギ様と2、3言話すと、

ナギ様が満足げな顔をして下がってしまい、

代わりにシウマ・・・殿が出てきました。

「「「「「シウマさまあああああああああああ！！」」」」」

と、騎士団の一部が沸き立ちます。

普通なら団長が止めてくださるのですが、今は止められる側になってしまっているのだ、

頭を抱えた副団長殿を始め、誰も止めてくれません。

「コホン！！レッディーースエエエンドジェントルメン！！」

並びに魔界から態々お越し下さった魔族の方々！！今宵のクソったれな戦争へようこそ！！

それでは不承、この愁磨・P・S・織原が開戦の一番槍を取らせて頂きます!!」

ワーワー!!と盛り上がる両陣

って、何で敵まで盛り上がっているんですか!?

「それでは。『形態変化：Nein』 『形態付与：Schw
erter Schmuck』」

シュウマ殿が何か唱えると、取り出した奇妙なナイフ?を自分と
化させました。

すると、シュウマ殿が七色に光り出しました。

「これが次元の狭間を超えて来た宝石剣の使い方だ!!」

『さあ、挙げて行こうぜ!!平行世界の俺!!』」

と、空間に切れ目が10個ほど開き、そこから

シユ、シユウマ殿が出てきました!!? ?

「来てくれてサンキユ、これでもっとおm……助かるぜ!!」

それでは、皆さんに伝えるのは『初心忘れるべからず』で良いかな
?」

『《いいとも——!!——!!》』

「と言う訳で皆様!!早速参ります!!!!」

「『《バル・ボル・ベルグ・バルホルス!!》』

異世界の者11柱 集い来たりて敵を穿ち尽くせ!!』

聞いた事がありませんが、文面から行って恐らく魔法の射手ですが、
。。。

11柱だけって、アホなんでしょうか?その五万倍は魔族が居ると
言うのに!!

「『《魔法の射手・連弾・魔の57777777矢!!》』【魔式ノ吉?」

言いつつも、襲って来る魔族を片端から倒して行く『紅き翼』の方々。

そして、こんな風に考えていられる余裕があるのは・・・シュウマ殿が、全体をフォローしているから。

・・・見ていれば分かります。シュウマ殿は、力のない私達を助けているのだと。

ですが、何故、大量虐殺をした犯罪者が、私達を助けるのでしょうか？

「シュウ、流石に見ていられないわ。」

「・・・戦う。」

と、その影から女性と少女が出てきました。

「……分かった。リバースドールは持つてるよな？」

「ええ、10体ずつ持つてるわ。クローナシンボルもね。」

それと、伯爵以上と当たる時は必ずアリアと一緒に戦うから大丈夫。」

「なら大丈夫だ。ここは頼んだ！行くぞ！！」

「結局お前が仕切るのかよ！！」

「……戦場に有るまじき軽さで、『紅き翼』は『墓守人の宮殿』に向かいました。」

「さて、皆様。『皆殺し』に代わりまして、私『微笑みの漆黒菩薩』がお守り致します。」

「……ママ、わたしも、いる……。」

「そうね。アリアも私と一緒に守ってあげましょうね。」

「……この人達には危機感と言うモノが無いのでしょうか？」

公園にでもいる様な雰囲気です。

つて、『黒菩薩』……確かノワールと言いましたっけ……？

ではなく、後ろから魔族が……！

パチンッ

と、少女が指を鳴らしたかと思うと、魔族が八つ裂きになりました。

これも魔法の一種なんでしょうか？！

「……ママに近づいていいのは、パパだけなの……。」

「……！」

「そうね。私に迫っていい男はシュウだね。あ、いえ。コホ
ン。」

そろそろ真面目に行きましょう、アリア。『魔合聖纏』、
暗逆併ダイクルーチェデイト
明ロマル」

「……『天合獣纏』」

リッシュクエニツヒフリーデン
翼獣霊王」

どのような技か分かりませんが、ノワール殿は黒と白の天使の姿に変わ
り、

少女……いえ、アリア殿は13、4歳程まで成長し、ピンと立った
犬耳と尻尾が生え、

獣を模した軽鎧を纏い、蒼い炎で出来た狼を四匹侍らせています。

「さて、さつさと片づけちゃいましょうか。」

「……パパの邪魔をするなら……、許さない。」

言うやいなや、二人は姿を消し 消えた様な速さで敵を次々屠っ
て行きます。

『皆殺しアーカード』、『黒菩薩』。

魔法世界で知らぬ者のいない犯罪者が、人助けをしています。

『悪』ならば、そんな事はしない筈です。

しかし、この二人（三人？）が犯罪者である以上、『正義』である筈がありません。

ですが彼らは『紅き翼』の一員、『正義』の象徴たる英雄。

『正義』でも『悪』でもない、犯罪者で英雄。

彼らを見ていると、今まで信じて来たものが壊れていく気がします。

誰か、教えてください。

『正義』と『悪』って、何でしょうか？

S i d e o u t

S i d e 愁磨

連合軍のフォローをノワールとアリアに任せた俺だったが、

遂に諦めたのかな？」

「……『皆殺し』、我らが主の命だからもう一度だけ聞こう。

こちらに来る気はないかな？」

「残念ながら、方法どころか目的も釈然としない方には行けないんだな。」

「……そうか……。なら、仕方ないね。」

「『ならば我が直接聞こう。こちらに来て、同胞よ。』」

その声、いや、その存在を認識した瞬間気付いた。

これは、俺と同じだと。大元は違うが、同じなんだと。

「お前はもう少し後に出て来るべきだろ……。『ライフメイカー造物主』さんよ。」

第23話 序盤でラスボスが出てくるようです(後書き)

作「という訳で23話でした!!」

愁「『造物主』、本当に出て来たただけだな!!」

ノワ「しかも、シユウもなんだか分かり合っちゃってる感じね。

って言うか、結局私達戦いに参加するのね。」

作「腐つてもネギま!ですから。

日常パートのみで満足していると、段々Airになっちゃうからね。。。

とは言っても、そっちに魔王とかでもでない限り100%安Z
愁「おいばかやめる!!それ以上はフラグだ。」

ノワ「散々スルーしたけれど、アリカは簡単にシユウの過去諸々受け入れたわね。」

アリカ「・・・それでも、簡単ではなかったのじゃ。

そこの足りない部分はあ・・・あ、あ・・・//

作愁ノワ「「あ・・・?」」

アリカ「ア・・・アブドウルのカじゃ!!!」

愁ノワ「「誰!!?」」

作「「!」YES、I AM!チツ チツ」

愁「お前は何で乗ってるんだ?!いや、乗れるんだ!!?」

作「詳しい事を話すと、先ず第一部か」「いや、いらん。」チツ!

愁「そう言えば、アリカはこの時何処に居るんだ?」

アリカ「戦艦に義姉君と共に乗っているのじゃ。」

ノワ「まあ、後で描写が入るだろうしね。」

作「それでは、つと。えーと、次更新は19日になるかと思えます。

17,8は私用があるので。」

ノワ「それでは、また次回お会いしましょう。」

作愁ノワアリカ『『アリーヴェデルチ!!!』』

第24話 創造者の想いは相容れないようです(前書き)

おひさしぶりです！H a t e . rです。

作「友達が交通網断絶&実家避難により予定消去になってしまったので、

予定より早く更新です。」

愁「では恒例の。剣の舞姫様、木下文様、紅様、z e r o様、微糖様、

春夏秋冬様、千角時計様、レイナ・アーク様。」

ノワ「ご感想頂き、ありがとうございます。」

千角時計様にご指摘頂いた事は、みんなで気を付けます。」

作「今回は、遂に登場した『造物主』さんのお話です。」

愁「いつもながら・・・、早く戦闘しrゲフンゲフン。」

ノワ「あまり語っていても仕方ないので、」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ!」」」

第24話 創造者の想いは相容れないようです

Side ナギ

フェイトの野郎と話し終わって、俺達が突っ込もうとしたその瞬間、
フェイト達の奥から何かが現れた。

「『ならば我が直接聞こう。こちらに来て、同胞よ。』」

そいつを認識した瞬間、俺達は動けなくなった。

皆に聞かなくても、俺がバカでもこれだけは分かった。

『あいつには勝てねえ』。

愁磨とは偶に喧嘩がバトルになったりして、その度に負けるけど、

一回もこんな気は起きなかった。

『戦わずして負ける』って何時だか詠春が言ってたけど、今分かった。

威圧とか魔力とか、そんなんじゃないねえ。

存在が、『こいつ』に『俺』が負けてると思っちゃまった。

それだけで、俺の負けだ。

「おいおい勘弁してくれよ……。」

お前はもう少し後に出て来るべきだろ……。『ライフメイカー造物主』さんよ。」

だけど、愁磨は平然と喋ってやがる。

俺と……宿敵ライバルと呼べるフェイトが跪いて言う相手と。

そして

「ハハハハハ！何だナギ、ビビって腰が引けてんじゃないかねえか？

大人しくエルザさんのところに帰ったらどうだ!？」

愁磨の・・・いや、仲間仲間が挑発を掛けて来やった。

「……………ハッ!! ナメんなよ……………!!」

リーダーらしくしねえと示してのがつかねえだろうが!!

「俺様を誰だと思ってやがる!？」

震えが止まる。ビクついてた心も持ち直した…………!

「行け、愁磨! アル! ジャック! 詠春! お師匠!」

俺が言うと、何時の間にか皆が俺の後ろに立っていた。

「まいったなあ、オイ。あれには勝てないと思っちゃったんだがなあ。」

「相変わらずの滅茶苦茶でこっちが困るんだが…………。」

「フフ…………、貴方達を見ていると、何とかなると思っちゃいます。」

「全く、ナギもそうじゃが、愁磨も見ていて飽きんのう。」

「おお!! ヒーロー戦隊モノっばいな!!」

ポジション的に俺ってシルバーとかゴールド的な?」

「君達は本当に騒がしいね……。」

主の質問に答えたらどうだい、アーカード。」

俺らが騒いでると、フェイトの奴から俺達に　いや、愁磨に声がかけられる。

「何度も言うが、目的も手段も話せねえ胡散くせえ奴等の味方にやならんよ。」

「なら、さつさと死んでくれないかな？」

と、フェイトがお得意の『万象貫く黒杭の円環』で愁磨に攻撃するが、

皆でそれを叩きおと

「『勝手な真似をするな、一番目《ウ》』。」

俺達が落とす前に『造物主』が何かをして（多分）、杭を全て落ちました。

「『我はまだこやつに用があるのだ。やるのならばそちらのモノ共にするがいい。』」

「……委細承知致しました。」

という訳で、君達には抹殺許可が下りた。死んでもらうよ、千の呪文の男』。」

チツ！これじゃあ、愁磨が一人であいつと……！！

「なるほど、じゃあ皆。そっちの片づけよろしくう〜。」

「な、愁磨！！一人であれと戦うつもりですか?!」

軽い事言った愁磨に、アルがすかさず突っ込む。

「何、至極簡単。お前らが手っ取り早くそいつ等ぶっ飛ばせば、

後はRPG同様、パーティーでラスボスと戦えるって事だ。」

「一人であれの時間稼ぎをしようと言うのですか!？」

流石に無茶で「アル。」

「俺を誰だと思ってやがる?」

自信満々に、愁磨は言いやる。

「んだよ、俺のパクリかよ。」

「いや、俺のはとあるアニキの言葉だ。」

誰だか知らねえが、答えは一つしかねえだろ！

「最強無敵の、『紅き翼』アラルブラの一人だ！！んでもって、愁磨だ！！」

「クク、聞きたいのと大体合ってるからそれで良いや。」

「んじゃ、そっちは頼んだぜ？」

「・・・全く、無茶な人ですね。ナギより扱いに困ります。」

絶対に、死なないでくださいね。」

「あつたりめだ。」

俺が死んだら、ノワールとアリアとアリカとエヴァが悲しむからな！

「んじゃ、テメラも死ぬんじゃねえっ、ぞー！！」

最後に言い残して、『造物主』ライフメイカーと一緒に奥に消えちゃった。

「いいのかい？彼一人では主には絶対に勝てないよ？」

「ああ、問題ねえよ。」

良いね、君は本当に面白いよナギ・スプリングフィールド！！

ああ、何故かとても満ち足りた気分だよ。

このにんご……おっと、これはまだ言うべき事じゃないんだっただね。

「

……なんだ、フェイトの奴。ぶっ壊れたのか？

まあ、んなこたあどうでも良い！！

「そう言う訳だ。とっとと終わらせてもらっせ！！！」

「ツレないけど、仕方ないね。行くよ！！！」

俺とフェイトが飛び出したのを合図に、戦闘が始まった。

待ってる、愁磨！！美味しいところは持って行かせねえぜ！！！！

S i d e o u t

Side 愁磨

「ツクシヨン！」

「『風邪かね、同志よ。』」

「いや、この感じは多分鳥頭が噂してやがるな……。」

さて、話して何だ？それと同志ってどう言う事だ？」

何時までも話し出さない『造物主』ライフメイカーを促す。

「『話しというのはさっきも言った通り仲間になって貰いたいと言う事、』」

それに伴う目的、方法、動機。

しかし、それを話すには私と君の共通点から話そうか。」

そう言うと、『造物主』ライフメイカーは目深に被ったフードを取る。

そこには 顔があった。普通にカツコイイ男の顔。

「へー。お前ってそんなか……あれ？」

言う瞬間、『ライフメイカー造物主』の顔が美しい女性に変わっていた。

「え、あれ？今男の顔……って、また?!」

今度は、小さな男の子の顔。

「最初に言うが、私はこの世界の人間ではないのだ。」

と、フェイトに似た声が発せられる。

「私の世界は、この世界の魔獣が可愛く見える程の異形が跋扈し、人々は飢えに苦しみ、異形の常に怯えながら暮らしていた。」

「……で？」

「感謝する。」

そこで私は思ったのだ。『別の世界に行きたい、もっと幸せな世界に!』と。

その手段は、意外と身近にあった。

町の外れに古ぼけた神殿、もしくは教会があつて、その地下にあったのだよ。

『主神ノ救済』という本が。」

「！！！」

その言葉に、俺は衝撃を受けた。『主神』、という事は……。

「まさか、お前……。」

「その通り、私も創造主神殿から力を貰ったのだよ。」

私が願ったのは、『世界を創る力を』。

しかし、願いが曖昧だったせいかと初めは思ったよ。

貰い受けた能力は『他惑星を媒介とした平行次元に世界を創る力』だった。

随分面倒な能力だと思わないか？」

「面倒だとは思って……。」

俺も一度、自分で世界を創ろうとした。が、ダメだったから分かる。

『世界Ⅱ星』を創るなんて、全宇宙・全次元に関わる事だから、法外な力が必要。

いっそ、その星を丸ごと他世界に持って行った方が安いくらいだ。」

某螺旋族とか、とあるアンチスパイラルが分かり易いだろう。

「ほう、君も創造系か。」

と言っても、それ以外になると身体強化のみや物品贈呈になるのがね。

因みに、君の能力は？」

「誰が教えるかよ。 で？」

「尤もだ。さて願ったのは良いが、星を渡る事など私には不可能だった。」

しかし、そこには私ともう一人、親友がいたのだ。」

そう言った瞬間、

一瞬だけ『ライフメイカー造物主』の顔が、黒髪フェイトになった気がした。

「そこで友は願った。『世界を渡り歩く力をくれ』と。」

能力はそのまま『あらゆる他世界・他次元を渡る力』。

『定員2人』『使用代償・使用者の一分の寿命』と言う実にリーズナブルなモノだった。

そして、私達はこの星を見つけた。

そしてこの世界を創った。 代償は、『私の世界の人間全ての命』
」

「全ての、人間……？」

「ああ。 男性女性男児女児老翁老婆全ての命、 16億9375万2
14人。

言っておくが、勝手に使ってはいいない。了承を得て使った。

話したら、嬉々として受け入れてくれたよ。

こんな世界から居なくなつて、どんな形であれ平和に暮らせると聞
いてね。

……そう、全て、私の中にある。」

「……成る程、だから顔が一定しないのか。」

「まあ、代償と言えば代償だ。最早、自分の顔すら忘れてしまつた
よ。

だが」

一人だけは、覚えている。そう、言った気がする。

「……で、新世界の神になつたお前が、どうしてその世界を終わら

せよつと？

それは横暴が過ぎるんじゃないのか？」

「ふ、く、ククク。分かっているのではないか、君は？

まあ良い。さて、この世界を存続させて約400年。

この間の存続エネルギーは全て、この中から使ってきた。

世界の寿命1年分で、約500年分の人の寿命。

そして、魔法世界人はこの中の人々をそのまま生み出す、

というサイクルを初めは取っていた。

しかし、そのまま生み出したのでは寿命は簡単に尽きてしまう。

ならば、少人数のみ生み、それをアダムとイヴにすればいい。

その数人から産まれる子にこの人達の一部を植え付け、生を謳歌させる。

徐々に徐々に寿命を減らしながらも、幸せに暮らしていたのだ。私達は。」

そして、今まで無表情だった顔が憎悪に歪み、憤怒により闇の気が立ち上る。

「しかし、そこに来たのだ!!」

この世界の媒介となった惑星のある、旧世界側から!!

どうやってか、人間がこちらの世界に渡って来たのだ!!」

そして、徐々に魔法世界人と人間が交わり合い、

亜人と呼ばれる新人種が生まれ、同時に種族間の軋轢も生まれ、争いが生まれ、

武器が生まれ、戦争が生まれた。

「故に、私は許さない!!ただただ平和に暮らしていた私達の間
割り込み、

不幸を撒き散らした旧世界人を許さない!!!」

「だから、この世界をゼロにして一からやり直す、と……?」

「その通り。」

そして『完全なる世界』「コスモエンテレケイア」とは組織名であり、計画名であり、新たな世界の名なのだ。

勘違いの無い様に言っておくと、旧世界人共も殺さない。

この中に取り込み、『完全なる世界』と新たに創った暁には、住人として暮らさせてやる。

もったも、多少は恨みを受けて貰う事にはなる。」

「成る程、言ってくれば実に分かり易い。」

お前は、旧世界人に壊されたお前の……前の世界の人達の日常を取り戻すために

行動している……そう言う事で良いんだな？」

「そう！そうとも！！分かってくれたならばs「まあ待て。」」

俺は『造物主』ライフメイカーの言葉を遮り、一つ質問する。

「3つ、重要な事を聞いていない。一つ目、どうして、この世界を消す必要がある？」

「決まっている！もうこの世界は旧世界人に染められてしまった！！ならば、一度リセットするしかないだろう！！」

「……二つ目、どうして俺に協力を仰ぐんだ？これまでの説明だと俺が必要に思えないが。」

「端的に言うならば、より良い世界にするためだ。」

具体案の一つとしては、他種族が入って来られない様にして欲しいのだ。」

「三つ目、この魔法世界人は全て消すのか。」

加えて、消したその人は次に生まれて来る時にはどうなっている？」

「最初だが、無論全て消す。世界と、不幸を憂うる同世界の住人だ。」

次だが、これは完全に別人として生まれて来る。」

人種、記憶、魂の在り方……全て違う人間として生まれて来る。」

「そうか……。ならば、俺はお前に協力しない！」

「な、何だと？！何故だ！！」

まあ、こいつからしたら断る理由は無いんだろうけど。」

「簡単なこつた。お前が消しちまう中に、俺の嫁と仲間が居るからだ。」

それとも、あいつ等は除外してくれんのか？」

「我々は一心同体なのだ！その様な事はできん。」

「……なら、仕方ねえな。《招来：『私の救世主^{メシア}さま』》」

俺は短縮しておいた『メシアの鎧』 『アトロポスの剣』 『救世ノス

スメ』を一気に呼び出す。

「残念だ……。君とは、『同志になれると思ったのだが……。』」

俺が武装するのを見て、『造物主』もフードを被り、宙に浮く。

そして奴の背後には、凄まじい大きさの魔法陣が次々と浮かんで行く。

「『ならばここで果てる、異世界の創造者よ。』」

その言葉と同時に、魔法陣から複数の砲撃が放たれる。

「薙ぎ払え、『アトロポスの剣』!!!」

しかし、いつも通りに魔力砲の因果を消しとば

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「な!?! クッ!!!」

間一髪、魔力砲を避ける事に成功する。だが 何が起きた!?!?

「『動揺するのも無理は無い。君のそれは因果、存在を断ち切るそ
うだが』」

奴は、俺を見下ろしながら言い放つ。

「『この世界の因果を……全てを司るのが誰か忘れたのか？』」

この世界の全ては奴が存在させるかさせないか決めているから、他人《こいつ以外》が勝手に因果ぶった切ろうが、直死で切ろうが意味が無いって事。

「……要するに、フツーに戦えって事ですな。」

「『その通り……。』」

となると……この世界の魔法以外を試すしかないな。

「じゃあ、最初っからクライマックスだぜ!!!」

『シュターイン・ヴァニシュトン・ルシフェリオン
星光の砲撃放つ殲滅杖』」

新たに『王の財宝』から呼び出したのは、RHと瓜二つの杖。
レイジングハート

「集え、あかほし明星！全てを焼き消すほむひ焰となれ!!!」

空間が歪む程の魔力が集まり出し、放たれる。

「ルシフェリオン・ブレイカー——あああああああああああ

「！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

と耳を劈く音を立てながら『造物主』に向かっていく魔砲。

攻撃力だけなら核をも凌ぐ程の威力。流石にこれを無傷で

バシユウウ！！

「ですよね。フラグですよね……………」

奴に届く前に、障壁で掻き消されてしまう。っていやいやいや！？
どんな障壁だよ！！

「『この程度か？』」

ウォン！ ブウン！ ウォン！ ウォン！ ギュイイン！ グオオ
ン！

奴の前に攻撃用と見て分かる禍々しい魔法陣が広がり、

技名と共に放たれる。

「『プロテ・ネクスィ・クライスイス
六天傀儡』」

イイイイイイイイイイイイイイイイイイインン！

！！！！

見た目とは裏腹に静かに放たれたそれは、先程のただの魔力砲とはケタが違う。

魔力砲とて、避けなければ確実に墜ちていた……。

ならば、それとケタの違う攻撃なぞ喰らったら

「『フィジカル・フルバースト』！！！」

いつか使った、時間&思考百倍化の能力で時間を稼ぐが、やはり動きが速い。

攻撃自体が速いのではなく、恐らく世界への干渉が軽減されている。

今攻撃しても、障壁で掻き消されるだろう。

かと言って貫ける程の攻撃を用意するには、時間が足りない。

だから俺は、Alucardの最終封印を解く。

「『拘束制御術式 零号 開放』！！！」

その言葉と同時に、周囲が赤く、黒く染まり、無数の目が現れる。

「帰還は果たさずとも良い。幾百幾十となつて帰還を果たせ。

所詮貴様らは残り滓。故に一時その為に、自らを犠牲として完全に俺を守れ。

さあ逝け、塵芥。」

行進の言葉により、俺に殺されたあらゆる者達が出て行く。

それに若干遅れて、時間が元に戻る。

「……何をしたかは知らぬが、無駄な事を。

どれ程雑兵が集まるうとも、我には勝てぬ。」

魔力砲が次々と放たれ、魔族・人間・天使が葬られて行く。

経過時間 23 秒。 残存戦力は約 20,460,000 / 20,680,000 万。

時間は余裕、しかし零号開放により残機は 1。

ミス一つで死ぬる状況。 これまでで最も過酷。 だからこそ、燃えて来る。

「さあ、挙げて行こうか！！」全魔力解放、 宝玉 に集中。」

地獄の魔王が司る筈の大罪、それを顕した 宝玉 を開放する。

現在も痛みは続いているが、それが全く気にならない程の力の奔流。

俺がただ立っているだけで、某戦闘民族が気を高めている時のように地面が砕け、重力を無視して石が上に昇って行く。

「行くぞ、『造物主』」。

『形態融合：スライヴンデイトゥリースインツ七つの大罪』 / 『メシア救世主さま』」

初めて使う、しかも自分で創っていない装備。

融合 付加の為、『形態融合』なんて存在しない筈の能力。

しかし、何故か出来ると思った。

「
否 アーヴォ・ガジ・エッティアス・メシア 禁忌ヲ犯シタ救世主
」

唱えると、俺の体と『メシアの鎧』が融合して行き、同時に形が変化して行く。

骨ばった翼が生え、体は全て刺々しい鱗の様なもので包まれる。

ドラゴンの様な角、爪、尻尾も生え、その姿はまさに悪魔。 し
かし、その色は全て白。

黒の悪魔とも、白の天使としても異端。ましてや、人間では無い。

「【零号解除。さて、『造物主』。自己紹介がまだだったな。】」

零号術式を解除し、Alucardとして再び自分に付加する。

経過時間2分と49秒。残存兵力1546万/2068万。

三分と掛からず500万の敵を葬るとは……。流石はラスボス。

中には英雄級すら居たんだが……。まあ、どうでも良いか。

だって、今からそのラスボスの相手をするのは

「【愁磨・プテリユクス・ゼクスパール・織原。『魔人』と呼んでくれ。】」

その英雄を片端から葬って来た、『魔人』なのだから。

第24話 創造者の想いは相容れないようです(後書き)

作「と言う訳で、24話でした。相変わらずの微妙な切り方。誰かいいフェードアウトの仕方教えてくれ……。」

ノワ「ナギが原作より自信満々じゃないわね？」

作「まあ、愁磨が諭した結果&作中補正。

『造物主』がアンチ旧世界人設定だから、原作と違って怒りモード。

故に覇気がパない事に。」

愁「にしても、こんな『造物主』で大丈夫か？

なんかもう色々とあれだが……。」

作「原作の『造物主』が、『気に入らないから魔法世界壊しちゃおうぜ?』

的なノリだったのが気に喰わなかった。

あと、ラスボの過去に困難があつて人間味があつても良いと思つたんだ。

反省はしていないし後悔もしていない。」

作「『造物主』の辺りでの質問はバンバンください！

ぶつちやけ、書き切れない所が多々ありますのでw」

ノワ「次回の更新は、20〜22日を予定しているわ。

曖昧な作者で申し訳ないわ……。」

愁「それでは、次回また会いましょう……！」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ……！」

第25話 決着は嵐の前だったようです（前書き）

ギリっギリ今日投稿です！！

作「計画停電だの仕事長引くだったのでこんな時間になってしまいました。

申し訳ありません。」

愁「さて、では恒例の。剣の舞姫様、木下文様、ナタナタ様、春夏
秋冬様、

紅様、龍賀様、竜華零様、微糖様！感想ありがとうございます！
！」

ノワ「作者が、今回については前回からの続き&
としか台本をくれなかったわ……。」「
作「そう言う訳です！それでは！！」

作愁ノワ「」「」どうぞ！！！！」「」「」

「『熾天覆う七つの円環』……!」

とりあえず、頭上に傘を創る。当然そこには雨が降り注ぐ訳で

バリイイン!! バリイイン!! バリイイン!! バリイイン!!

一枚辺り0.1秒と言ったところだろうか?

ならば、もう一枚あれば事足りる。

「『熾天覆う七つの円環』!!」

今の内に……! 『追う者』 『貫く者』 『轟く者』 『初源』 『終焉』
!……!」

バリイイン!! バリイイン!!

オリジナルで創った宝具を5つ呼び出す。

バリイイイイン!

これで、残りはあと七枚。

「【展開、 『束ねる者』 武装付与… 『追跡者』 - 『初源』」

「ゲンゲニル貫く者」 - 「オメガ終焉」 「ブリューナク轟く者」！！」

「バンドラ禁箱」から出したのは、一本の槍。

しかしそれは、針がそのまま槍に成ったかのように、武骨さも無く装飾の類も一切ない。

当然だ。これに俺が求めたのは「集約する事」。

「『又・・・？』」

バライイパライイイン！！！！ パライイイン！

この組み合わせが危険だと直感で感じたのか、攻撃が更に激化する。

「【残念、もう終わった。《モード：「ロンギヌス神子殺之故神槍」》。

きつえつろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！！」

ポッ！！

ロンギヌスを「造物主」に全力で投げつける。

「『その様な実直な攻撃が当たるものk』」

ノワールのカインエグンガンズ夢無明亦無 と比べると速さが全く足りないが、

この槍は魔弾。故に

「【分かってんじゃないかねえか。なら、後は簡単な話。」

俺の創造物の攻撃力が、お前の障壁の防御力より強かった。

単純明快、故に真理であり全てだ。】」

「『クフ、ククク……。我の予想より貴様の方が上だったと言う事か……。』」

「【冥土の土産に教えてやろうか？

今のはな、『追跡者』^{ザミエル}により永久に追って来る槍にして、

『初源』^{アダム}により『貫く者』^{クングニル}を始めから　つまり、『追跡者』^{ザミエル}と

同時に発動させ、全てを貫通する攻撃として放ったんだ。

しかし、このままでは攻撃力は皆無。

そこで、目標に到達した『終わり』^{オメガ}と連結させ、『轟く者』^{ブリューナク}を発動。

後はご存じのとおりだ。】」

要するに永久追跡+永久貫通、敵に当たったら爆発って事だ。

「『ク、ククク……。そうか、それはすごいな。』」

「【つむづむ、そつだるつっ?】」

これ創るのに掛かった時間、宝具以上だったからな。

「『そして、感謝しよう

』」

ドズツと鈍い音がする。脇腹を見ると、そこには

「【『造物主の掟（コード・オブ・ザ・ライフメイカー）……
……!-!-!】」

眩くとそれが引き抜かれる。

いつもなら直ぐに回復するのだが、桜色の何かで傷口が覆われている。

「『素晴らしい……。』

普通ならばそれに傷口を広げられ、一瞬のうちに弾け飛ぶと言つのに。』」

そのお陰で血も止まってるんだが、普通なら直ってるんだからマイナス。

「儀式は既に最終段階に達している。そして、私も貴様の攻撃で限界だ。」

ビシツ、と『造物主』の全身を覆うマントに罅が入り、

今まで以上の魔力と殺意が放たれる。

「これで、オシマイだ。」

マントが砕け、『造物主』が一瞬光に包まれる。

次の瞬間そこにいたのは、最早人間では無く、魔物と言つにも禍々しいモノだった。

「散れ、魔人」ヨ！！」

グオオン！！

と、2 m程に巨大化した拳が俺を襲つ。

「【グ、チイッ！】」

脇腹の痛みで若干初速が遅くなるものの、攻撃も遅くなっていたのでギリギリの所で避ける事に成功する。

「ヤハリ、コノ姿デハ追イキレヌカ。」

背後の声に振り向き、改めてその姿を見る。

それは、間に覆われた人型で、悪魔の様な翼も生えてるし、尻尾も生えている。

……肉体があるか無いかって点と体長20m級って事以外は俺と変わらんか。

「【なんだ、俺のパクリじゃねえか。しかも、魔法も使えねえみたいだな。】」

「『ソノ通り。シカシ、全テノ魔力ガ攻撃ト再生ニ注ガレテイル。』」

貴様ト同ジダ!!」

「【いや、俺は魔法とか使えるし。それに、決定的に違う所があるぜ?】」

「『又カセ!!貴様ト我ハ所詮同ジダ!!!』」

再び拳が放たれるが、

ドガアアア!!! ブォン!!! ザンツ! 「チエストオオオ!」
ザザザザ!!!

俺の後ろから放たれた五撃によって、拳が止まる。

「愁磨！！てめえにはっか美味しい思いはさせねえぞ！？」

「【いや、空気読めねえのか、鳥頭。】」

「オイオイ愁磨。ンなもん今更じゃねえか。」

「【ああ、それもそうか。】」

「てめえ！わざわざ助けに来てやったのになんだその言い草は！？」

「いや、お主ら。愁磨の姿に何も疑問は抱かぬのかの？」

「フフ……、愁磨の異常さを一々気にしていたら負けですからね。」

うん、もうラスボス前とは思えない空気だね。

「『ホウ、貴様ら。一番目達ヲ倒シタノ力。』」

「……愁磨、あいつ誰だ？」

「【いや、『造物主』だよ。】」

「オイオイ、大分でっかくなっただなあ！！こっちのがやり易そうだぜー！！」

「ジャック、油断してはいけませんよ？」

「仮にもラスボスじゃからのう。」

「まあ、神鳴流は化け物の方が得意だから助かるが。」

「【と言つ訳だ、造物主君。俺とお前は違つだろ？】」

「『……………なにが言いたい？』」

「【俺には、仲間つてのが居るんだよ。テメー見たいに引き籠つて
る奴とは違つんだよ。】」

「しゅ、愁磨…………。」

「【ん？どうした、ナギ。】」

ナギが言葉に詰まっている。

「【そうかそうか、俺の言葉に感動したか。流石の鳥頭でもその
いで】」

「流石に、それは無いと思つぞ？」

「ええ、流石に恥ずかしいですね。」

「うおおお！？鳥肌立つちまつたぜ！！」

「せ、背中が痒いのじゃ！！！？」

「【て、てめえら……。】」

「なんだ、お前ら？愁磨が仲間じゃいけねえのか？」

本っ当にこいつは空気読めねえな……。

「いや、まあ、そうだな。俺達も愁磨を仲間とは思ってるぞ。」

「フフ……ナギは本当に空気が読めませんねえ。」

「『時間が無イト言ッテイルダロウ!!!』」

グオン!!!と『造物主?』の拳が俺達に襲いかかる。

「『『『うおおおおお!?!』『』『』『ッ!』」

アルのみが冷静にバックステップで避け、

他の四人はMHモンハンの無敵スライディングジャンプの様に避ける。

「【ぬうううううらあああああああああああああ!?!】」

俺はそれを回し蹴りで止めると、足場が陥没し、天上から壁に衝撃波が奔る。

「【ナギとアルとゼクトは上から魔法ぶっ放せ!!】

詠春とジャックは接近戦頑張り!!】」

「簡単に言ってくれるな!!」『らい、っごおおおおおけん《雷光剣》!!』」

「へっ、いつもの事だぜ!」『ゼロ・インパクトオオオオオオオオオオオオ!』」

詠春の剣から落雷が迸り、ジャックは練っていた氣を圧縮し、それを殴ってぶつける。

「へっ、負けてらんねえな!リイン・ニীগ・ゴエヴオーイ!

ヘカトンタキス カイキーリアリス アストラブサトキーリブルアストラヘー
百重千重と重なりて走れよ稲妻!!」『千の雷』!』」

「ナギは呪文を増やすべきだと思っておりますが……。まあ、後で良いですね。

イーン・リーソ・ヴォンヴァリーメ!」エアヘス・チャレ・ニエール『押し潰す黒重』。」「

「飛ばしとるのう。ワシも負けておられん!!」『水たす濁流』!』」メル・ファンゴスタ

ナギはお得意の『千の雷』を放ち、アルは扇状に重力場を形成し、ゼクトはナギとアルに合わせ水の殲滅級魔法を放ち、電撃付きのウォーターカッタにする。

「『ぬうううおおお!?!』」

脚部に全員の攻撃が集中した為、

ジャックの十数倍タフになっている『造物主』でも体勢を崩す。

「【黄昏よりも昏きもの・血の流れより紅きもの・時の流れに埋もれし・偉大なる汝の名において

我ここに闇に誓わん・我らが前に立ち塞がれし・全ての愚かなる者に・我と汝 が力持て

等しく滅びを与えん事を！《待機：ドラグ・スレイブ『竜破斬』：七秒』！！」

その内に俺は魔力量にモノを言わせて必殺技の高速詠唱を開始する。

「【カイザード・アルザード・キ・スク・ハンセ・グロス・シルク

灰燼と化せ 冥界の賢者 七つの鍵をもて開け 地獄の門！

《待機：ハロー・イン『七鍵守護神』：五秒】」

「愁磨〜！！いい加減もたねえぞ！！」

ええい、分かつとるわ！！集中力が切れんだろうが！！

「【『束ねる者』ダスパンデル発動。付加対象：《十三騎士》！！

『NO1・預言者パウル』 『NO・2聖母』 『NO・3雷帝イシユテルテ』 『NO・4炎帝カーラー』

それを『造物主』は、全エネルギーを集約した拳で受ける。

しかしその拳は赤と金の螺旋によって抉られ、螺旋は体を貫く。

周りの虹は拳の影響を受けない為、そのまま『造物主』の四肢を刈取る。

残ったエネルギーは『墓守人の宮殿』を貫き、宇宙空間まで飛んで行った。

「ヒヤッハアアア……!!すっげえな愁磨!!」

「【まあ、お前らが時間稼ぎしてくれなきゃ無理だったな。】」

「急ぎましょう。早くしないと儀式が完成してしまいます!!」

「『行かせて、なる……ものか……!!』」

四肢を無くし、腹の8割が無くなりながらも『造物主』は立ち上がる。

足が無いから、正確には浮き上がる、だが。

「『貴様等如きに、私の悲願を……我等の幸福を邪魔させるものか……!!』」

「【みんな、先に行け。俺はこいつに引導を渡してから行く。】」

「結局お前が……とか言ってる場合じゃないな！！行くぜ！！」

疲れ果てているだろう体を引き摺り、五人が最奥の部屋に走って行った。

「【さて、『造物主』。お前は】勘違いしている所がある。」

アーヴォ・ガジ・エッティアス・メシア
禁忌ヲ犯シタ救世主 を解き、『造物主』に話しかける。

「『この後に及んで……、なにを……言つか。』」

「言わせてもらうなら、だな。」

俺は『お前のやり方』を否定しただけで『お前』を否定していない。

「『なにを、言っている……？』」

「これからゆっくりとこの星の在り方について話そうぜ、って事。」

「フ、フフ……フハハハハハアハハハハ！！」

我の一人相撲だったと言う事か！所詮は貴様の手の上か！！」

「合って無くもないが、まあ今はそれで良いや。」

言いつつ『造物主』にメガザルを掛けて全快させる。

無論、こんな事が出来るのは Alucard でストックがあるからだけだな。

「『そうかそうか、ならばこの、既に発動している『無に帰す魔法』も

止めてしまうのか。』」

「それは、外の連中がやるさ。旧世界人と、魔法世界人が協力して、な。」

「『クククク……』 『魔人』殿。私のやった事は間違いだったのかな？」

「それがお前の正義だったんなら、俺は否定しないさ。」

「そう、か。」

それきりどちらも喋らず、外からは魔法陣が展開する音と、

お姫様達の怒号が聞こえて来た。

S i d e o u t

S i d e エルザ

「エルザ様、これでよろしいのですか!？」

私とアリカの付き人役?の少年、クルト君が叫ぶ。

・・恐らく、アリカもあつちの船でガトウに同じ事を言われているんじゃないかしら？

「良い訳が、無いでしょう……………!!!!?」

唇を噛み締めたせいで、血が滲んで来る。

・・・アリカにはこの事を話していないけれど、あの子は気付いて
いるのでしょうか・・・。

それでも、私が話していないのだから言い訳は出来るわ。

「ナギ・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・。」

私の咳きは、多数の戦艦の駆動音と魔法陣の発動音で、

誰にも届く事は無かった。

S
i
d
e

o
u
t

第25話 決着は嵐の前だったようです（後書き）

と言つ訳で25話でした！！

作「十三騎士で不明になっている名前は作者の捏造です！！ww

意味はちゃんと考えて付けたので、大目に見てください。。。」

愁「因みに作者、スレイヤーズは知りません！！

使いたかっただけ、らしい。。。」

ノワ「それと、ナギのキーは『英雄の放つ雷』、

アルのキーは『微笑みの変態って意味よ。』」

愁「アルエ。。。。」

ノワ「それにしても、ゼクトちゃんが生き残ったわね。

しかも、『造物主』がナギの成長に貢献してないわ。。。。」

作「わやくちゃになってますので、質問等ありましたらメッセージでも

感想覧でも良いのでお聞きください！！ww」

ノワ「次回の更新は、。。。どうなの？」

作「少なくとも来週中には更新します！！！」

愁「適当だな。。。。」

それではまた次回お会いしましょう！！！！」

作愁ノワ「アーリーヴェデルチ！！！！」

Aria「。。。わたしとママとありかおねーちゃんはいつでの？」

作「じ、次回はちゃんと出すから！！！」

ノワ「その前に折檻ね。」

作「ちよ、まアツーーーー!!」

アリカ「くうう、まだ私は姉か・・・。

しゅ、愁磨と子供を作れば、少しは母らしくなるじゃろうか・・・?
「」

作愁ノワ「」「」「どづづぞー!ー!ー!」「」

第26話 姫と騎士は離れてしまつてます

Side 愁磨

『造物主』が（対外的には）倒された十三時間後

俺達 アラルノラ『紅き翼』は真の英雄、 マギステル・マギ『正義の魔法使い』として、

オスティアで戦争終結記念式典に参加していた。ラスボス討伐

マギステル・マギ『正義の魔法使い』何ぞと言つ下らん称号を寄越してきたのは、勿論元老院。

式典前に一度呼ばれ渡されたのだが、俺は勿論、皆も受け取らなかつた。

しかし、それも計算の内だったのであろう。式典時に発表されてしまい、

民衆と言つ民主主義最強兵器を使って俺達に渡して来た。

（『流石に、ここで不安を煽る行動は避けるべきだよ、なあ……』）

（『こればかりは、仕方ないわね〜。』）

）『・・・かつこわるいから、・・・いらない・・・。』（

と念話家族会議を終了させ、仕方なくメダル諸々を受け取る。

「さすが愁磨なのじゃ！妾の夫なだけはあるのじゃ！！」

テオさん？ここは公の場だから目立つし、

そついう発言されますと後々面倒になってしまつのですが？

「ハア……。テオ、あんまり困らせるな。」

「む、すまぬ。愁磨が困る事はせんのだじゃ！！」

素直な良い子なんだけどな。如何せん皇女だから、世間ずれがな。

それに、アリアとの折り合いも悪いと来た・・・。

年が近いのがいかなのかなあ・・・？

「と、ところで愁磨。しゃがんでくれんと届かないのじゃ……。」

テオを見てみると確かに、背伸びしてプルプルしてる。

・・・なにこれ可愛い。今すぐお持ち帰る・・・。

アリアが怒ってるからやめようか。

「ん、これで良いか？」

「うむ、よし。」

俺がテオからメダルを貰っている間に、ノワールはアリカから、
アリアはエルザさんから貰っていた。

立ち上がり振り返ると、そこにいる人達は拳を上げ、声を挙げてい
る。

「……ま、偶には良いかな？」

ひとりごちると、バツ！！と拳を振り上げる。と、歓声が更に大き
くなる。

『お姉さまー！ー！！』とか『けっこんしてくれー！ー！』

とか聞こえるのは聞き間違いだろう。

「おお、忘れる所じゃった。」

と、テオが袋状になっている袖から巻物を取り出す。

「コホン。あーあー、『静粛に、静粛に！ー！』」

拡声魔法（風＋音魔法の応用）で声を式典会場全体に行き渡らせる。

「『ヘラス・ウエスペルタティア・メガロメセンブリアの名に於いて、

『皆殺しアーカード』、『微笑みの漆黒菩薩』

兩名に掛かっている賞金、それぞれ5000万DP、2000万DPを永久凍結すると共に、

英雄として、『^{マキステル・マキ}正義の魔法使い』の名を授ける！！』」

一旦区切ると、こちらを向き『すまぬ』、と目で謝ってくるテオ。

「（好きでやってるんじゃないのは、分かってるから。）」

テオに聞こえる精一杯の小声で、なるべく安心出来るように言うてる。

テオは頷くと、続きを読みだした。

「『『皆殺しアーカード』改め愁磨・^{フテリュゼタスパール}P・S・織原。

貴公には『^{シユノーベスリッヒロイト}白帝』の称号を、

『微笑みの漆黒菩薩』改めノワール・^{フテリュゼタスデル}P・E・織原。

貴君には『^{シユヴァルツフースティン}黒姫』の称号を。

「(ビクウ!) ど、どうしたのじゃ?」

ああ、漸くだ・・・漸く・・・

「男らしい称号を手に入れた……………」。

『白き死神』 『穢滅白雷の白雪姫』 『返り血染紅の雪の精』 『嗤う
イライフクイン
不死女王』

『皆殺しアーカード』、戦国時代では『白姫』……………。

ハッキリしないor女の称号のみという、まさに公式が病気状態だ
った。

何度でも言おう。

自分で女装・女化するのに抵抗は無いが、女扱いされるのは嫌いな
んだ!!

「しかし!!今ここに『白帝』と言う名を手に入れたあああああ
あ!!」

さあ讚えよ愚民共よ!!俺の名を言ってみるおおおおおおお
おおお!!…!!

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「白帝さまあああああああああああ!!」

「!!」「」「」「」「」「」

「フハハハハハ！勝ったツツ！第三部完ツツツ！！！」
いや、何に勝ったか知らんけどな。

「（……私が既に『黒翼氷帝』って言う二つ名貰ってる事知ったら、死んじゃうんじゃないかしら？」

「（……言っちゃ、メ……）」

さって。遊びはここまで、かな？

（『ノワール、アリア。ちよ〜っと一仕事行ってくるな。』）

（『はあ……。何だかんだ言って、結局は助けたいのね。』）

（『……パパ、がんばって。アリカ・は、わたしが・・まもるから……』）

（『うんうん、ありがとうな、アリア。頑張ってな。』

ノワール、エルザさんは任せたぞ。』）

（『ハイ、行ってらっしゃい。』）

さて、おバカな姫様の先回りしておきましょうかね。

S i d e o u t

S i d e エルザ

式典が終わって数時間。

見下ろす街は……いえ、世界中がお祭り状態になっているわ。

でも、私は楽しむ事なんて出来ない。なぜなら

「エルザ!!こゝんなとこにいたのかよ。探しちゃったぜ。」

今、一番居て欲しくて、来て欲しくない人が来てしまった。

「態々探さなくても良かったのに……。皆と楽しんできたら?」

「うっ、あのいや、だな……………ああもう！！んな事どつだつてい
いだろ！」

怒られちゃったわ。

と、ナギも縁の方に来て街を見下ろす。

「……………お前と居たかつたんだよ……………」

……………そんな事、言わないで欲しいわね。

頼りなくなっちゃうじゃない……。

「…なあ、エルザ。俺らに隠してる事、あるんじゃないのか？」

私の体が自然と反応し、僅かに震えてしまう。

「隠し事なんてあつて当然だしさ、洗い浚い話せなんて言わねえけ
どよ。」

せめて、少しくらいは「ナギ。」

ナギの言葉を遮る。　　そうしないと、頼ってしまうから。

「……………ちよつと、後ろ向いてくれないかしら？」

「あ、え？……………良いけどよ。」

振り向いたナギの背中には思っていたよりも小さくて、
でも、やっぱり……頼りがいがあった。

トスッ

「お？え、ちょ、エルザ？／＼／」

ナギの背中に顔を押し付けながら抱きつく。

「ギ」

「え？今なんて」

「ナギ、ナギ……ナギ……」。

「エ、ルザ……？」

ナギ、ナギ。 ナギ、ナギナギナギナギ……。

私の……、私が、初めて愛した男性^{ひと}。

「いしてるわ、ナギ。」

トン、とナギから離れる。

「い、今なんて言った、エルザ？」

「ごめんなさい、ナギ。」

「……エルザ？」

「気安く話し掛けるな、痴れ者が。」

妾はウエスペルタティア王国が女王、エルザ・ウエスペリアーナ・プレミロディオールじゃぞ。

英雄『紅雷の騎士』とて、礼儀を欠くで無いわ。」

バサッ、とマントを翻しナギ殿から離れる。

「ちよ、ちよっと待てよエルザ!!」

!!

バシンッ!!

「うお!?!ちよ、なんだ、これ!おい、エルザ!!」

妾は風・雷・光の結界魔法で空气中に不可視の一室を作りだす。

「案ずるな、五分もすれば解除される。」

言い残し、責務を果たす為に歩き出す。

「エルザあああああああああああああああああ！！！！」

ナギ殿の叫びを背に、階段を下りて行く。

悲しみに浸っている時間など無い。もうすぐ、この王国は滅ぶ。

「故に、妾は、自分の使命を（スパアン！）きゃう！？」

思い耽っていると、う、後ろから誰かに叩かれました。

「だ、誰ですか！？無礼ではありませんせ」

「責務とかくったらねエ事言ってんなよ、エルザさん。」

怒りながら振り向くと、そこには愁磨さんがいました。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「随分男を弄んでますなあ、お姫様。」

「しゅ、愁磨さん？何故ここに　　！！」

ぶ、無礼であろう、貴様！妾を誰だと思っておるッ（デシッ）あう
うう……。」

女王モードになったエルザさんにチョップをかまし、

再び通常モードに直す。

「似合わね　　。だからやめとけて。」

エルザさんは何時も通りにこやかに笑ってりゃ良いんだよ。

まあ、今はどうでもいいか。ほら、時間ねえんだから早くしろよ。「
額を押さえながら」「と言つ顔で俺を見てくる。

「?じゃねえよ。ここら一帯落ちちまうんだから、とっとと避難せ
んぞ。」

「な、なんでそれを!?ま、まさかアリカが」

「アリカは知ってるだろうが誰にも言わねえだろうよ。

個人情報だから秘密にしないとイケないのです。」

埒が明かないので、エルザさんを抱え転移する。

「あ、愁磨さん!エルザ陛下を 陛下!!!?」

「よっす、クルト。ガトウはどうした?」

俺が転移した避難誘導本陣(?)近くに、丁度クルトが居た。

「え、えと、師匠なら中で指示を出していますが。」

「了解。俺は先に貧民島スラムの人達避難させっから、

お前らは五分以内に出発して避難誘導始めとけ。」

「ハ、ハイ！分かります……ど、どうして愁磨さんが」

「クルト。その情報は今必要な事か？」

「あ…、いえ！失礼しました！！では僕は師匠に伝えて来ます！！」

クルトは一瞬言葉に詰まるも、直ぐに立て直し走って行った。

うん、クルトはタカミチより判断早いし行動力もあるんだけど、

如何せん効率主義的だからな。

そこら辺を上手くしてやればかなり有能に　　っと、

今はそんな事言ってる場合じゃないか。

「あーと、エルザさんはなるべくデカイ島に降りてくれ。

『王家の魔力』は魔力無効内でも使えるんだったよな？」

「え、ええ。魔力の代わりに使えば良いだけだから。

魔力より制御が難しい分、効果は上がるし……。」

「あ、護衛はすぐにノワールが合流するから、船に乗って先に行つてくれ。」

魔法使いは使えねえから、全員避難所の手当に回してくれ。

後、アリカにはアリアとリルを付かせてるから、安心して良いよ。」
えーと、後は何も無いよな？

あっても勝手にやってくれるだろ。

「じゃ、健闘を祈る!!」

エルザさんの返事を待たず、貧民島に転移する。

「さって、とりあえず全員集めましようかね。」

完全崩壊まで3時間、猶予は約2時間、要避難民数不明。

まあ、すっげーめんどくせえが。

「力を持ったからには、少しは使っても罰は当たらんよね、うん。

『形態変化：モード タナカクニエ 黄猿』

某海賊王世界に出てきた、光の能力を装備する。

「行きますかね。 まあ、適当にさ。」

キンッ

と短く音を立てて、俺は住民収集に向かった。

S i d e o u t

s u b S i d e アリカ

愁磨が義姉君の所に行ってから、間もなく一時間。

何処から話を聞いたかは知らぬが、オスティアが崩壊する事を知っておった。

ノワールとアリアには話して、私には話さぬとは……！

「あら、アリカも同罪でしょう？フフフ。」

……先程、アリアと珍妙な生き物を連れて来たノワールが言っておった。

と言う事は、愁磨も私が知っておった事は当然知っておった訳で……。

愁磨も、話さなかった私に腹を立てていたのじゃろうか・・・？

「・・・・・・・・・・パパは、アリカm・・・の事、おこつてなかったよ。」

と、アリアに慰められる。

「そ、そうかの……？ありがとう、アリア。気が楽になった。」

頭を撫でてやると、アリアは頬を少しだけ赤くする。

相変わらず可愛い娘じゃ。

突然、アリアと一緒に残った竜……？リルが首を擡げる。

「・・・・・・・・きたの？」

「キュル！」

「わかった。……アリカ・・・は、ここでめいれい？出しててね。」

リッシュクローニッドフリーデン
翼獣霊王

アリアは、先日の戦争の時の姿になり、リルと一緒に甲板に向かう。

「…………安心して。周りの船も、皆も、

「……アリカママも、護ってあげるから。」

「え……………」

「……り、リル。傍に、ちゃんと付いててね。」

「キュルイイイ〜」

「……………うるさいノノノ」

声を掛ける間もなく、アリアはドンッ！！と飛んで行ってしまった。

じゃが……………。

「フ、フフフフ……………」

「あ、アリカ様……………?」

いかん、部下が怯えておる。

「コホン。行くぞ！直ぐに崩壊が始まる！！我らが民を一人残らず救い出すのじゃー!!」

外を見ると、既に義姉君の船団が進んでいる。

義姉君は、恐らく……………。じゃが、今は優先事項が違う。

「一人も死なせるな！無駄にして良い命など存在せん!!」

そして、一つの島が落ち出した。

S i d e o u t

S i d e エルザ

「7番艦までは全て王島へ当たれ！」

8・9番艦と13から19番艦はハイル島へ、10・11・12番艦と20から27番艦はワンド島へ行け！」

その他の艦は順次、手前の島から当たれ！街毎に二艦ずつ付くのじゃ！！」

愁磨さんから言われた5分では準備出来なかった物の、

30分で艦隊準備・配置・命令系統の決定をしたんだから、大丈夫よね？

「陛下！！それだと貧民島が手遅れになる可能性が！」

と、部下に穴を突かれるが

「心配ない！既に『白帝』しらみかひ殿が向かっておる！！」

「なら問題ありませんね！！」

・・・女王より信頼度が高いつて、どう言う事なのかしら・・・？
あの時飛んで行った攻撃を見てしまつては、頷くしかないのだけれど・・・。

（『もしもしく、こちらノワール。聞こえるかしら？』）

と、ノワールさんから念話が届く。

（『ノワール殿か。聞こえるが、どうした？』）

（『……シュウの術式だから、元老院の狗には聞こえないわよ。』）

（『あ、そうですか？もう、愁磨さんのせいで変え損なつてしまつたから、

部下と話するのが辛いです。』）

（『その嫌味には、謝罪と叱咤を一緒に送るわね。

それで、進捗状況はどうかしら？』）

(『ええ、悔しいですけど、愁磨さんのお陰で避難は間に合います。』)

つとー!』)

ガイイイイン!!!

「皆の者!妾と『黒姫』殿が守る!!!慌てずに戦艦に乗り込むのじや!」

と言っても、守りは殆どノワールさんとアリアちゃんがしてくれているし、

一番手のかかる貧民島は愁磨さんが行ってくれている。

アリカには指令系統を纏めて貰っているし……

この家族だけで帝国をも……いえ、確実に世界を治められそうね……。

(『そ、なら良いわ。そっちの状況は常に聞こえるし、

狗に噛まれるしん』)

『ゴルエおらあああああああああああああああああああ!』

ノワールさんの喋っている途中で、凄まじい大声の通信が入ってくる。

『おい、エルザー！これはどう言う事だよ！！』

ナギ……

「見ての通り、世界を救う代償に自らの国を滅ぼしたのじゃ。

心配せずとも、妾も遠からぬ内に、奴等と同じく地獄に落ちる。」

『な、何で話さなかった！！俺がいれば』

「自惚れるな。戦いしか能の無い者が居ても邪魔なだけじゃ。」

『ツク……！待ってる、今そっちに行ってやる！』

「馬鹿者が、今来ても魔力の使いぬそなたでは邪魔になるだけじゃ！

っ、ええい鬱陶しい！！！（ガキイイイイイイ！！）

アルビレオ！そこにおるじゃろう！！」

ナギと話していても理性的な話しが出来ないので、アルに話す。

通信しながらの魔法行使は楽ではないのよ！

『ハイハイ、居ますよ。』

「逃亡生活中に使った飛行舟にも対抗呪文を施してある！」

『ええ、m』もう乗ってるってーの！！』』』

「ならばここから一番遠い島に行き、岩の破壊と民の誘導を。」

救助活動が終了し次第、そなた達は二度と戻ってくるな。」

『なっ！そりゃどう言っ事だ！！』』

「これ以上話しても無駄じゃ。こうしている間にも民が危険に晒されておる。」

通信終了！！妾は救助活動に戻る！」

言い放つと、私は踵を返し歩き出す。

「え、エルザ陛下！少々お待ち下さい！！アルビレオ！」

『ハイ、クルト君。私達は身を隠し、事態が好転するのを待ちます。』

「ええ、陛下の仰る通りにするのが賢明です！」

戻れば、確実にメガロ…いえ、元老院に拘束されます！！」

『分かっています、ナギの事もお任せを。』』

「……そなた達には、世話になった。礼を言っておく。……さらばじゃ。」

『……ハイ。それでは、陛下、クルト君。御武運を。』

『あ、ちよ、待てよ!!エ』 ブツンッ

ナギが言っている途中で、通信が切れる。

「クルト、行くぞ。」

「陛下、しかしこのままでは……!!」

「民を救えずして、なにが女王か。」

……本当ならば、妾がこの手で決着を着けたかったのじゃがな。」

しかし、過ぎた事を言っても仕方ない事。今は、一人でも多くの民を救わないと　!!

(『ナギ……後でお仕置きが必要ね……。』)

まだ耳がキンキンするわ……。』(

……ナギには、二重の意味でもう会えないかもしれないわね……。

S i d e o u t

S i d e ? ?

こうして『千塔の都』と称えられた空中王都オスティアは

魔素の雲海に沈み、地図から姿を消した。

残ったのは、島から砕け、僅かに浮かぶ岩群だけ。

「犠牲者数は、10000人を切ったそうです。人口の、実に0・3%未満……。」

これだけの大災害でこの数は、奇跡以外の何物でもありません。」

全人口約350万人と言う途方もない数が祝杯ムードの中を、

魔法を使える者が5人のみという状況で、これを僅か三時間以内に救助。

「愁磨達も参加してたんだ、奇跡でも何でもねえさ。」

「だが、そう割り切れる人達ではないだろう。」

「そうじゃのう。むしろ大変なのは、これからじゃ……。」

「……なあ、エルザも、アリカも、愁磨も……、

何で、誰にも言わなかったんだ……？皆に、言っていれば……。」

先程まで下を向き一言も話さなかったナギが、

下を向いたままポツリと言う。

「何故私達に秘密にしたか、でしょう？」

「……そうですね、愁磨が何時か話していました。」

『偶然起こる事は必然で、必然起こる事じゃない事は偶然。』

全部同じ事、所詮は予定調和でしかない』と。」

「……俺には、分かんねえよ。」

「そう、ですね・・・愁磨にも、変えられない事があると言つ事です。」

「ハツ、愁磨でも勝てねえって、神様の書いたシナリオってやつかよ?」

ナギとアルが、自嘲気味な笑みを浮かべながら言う。

そしてナギは笑みを浮かべたまま、目に腕を押しつける。

「惚れた女も守れねえなんて、弱えな、俺は……………」

「……………恐らく、愁磨も捕えられたじやろう。」

ノワール殿とアリア殿は、『家』に入っておるじやろうから、無事じやろう。

しかし、愁磨を……………ワシらも、仲間を守れんかった。」

「お師匠……………」

「ああ、そう言えば・・・愁磨から手紙を貰っています。」

「愁磨から? そう言うのは早く出せよ!!!!」

ゼクトの言葉に腕を上げ、アルの言葉でナギは体を起こす。

皆がテーブルに集まり、再生が始まる。

『この手紙を読んでもうっつー事は、俺は腐れジジイ共に捕まってるだろう。』

お前らに伝えてない事も山ほどあるが『』

「」「」「山ほどあるのかよ！」「」「」

「……静かにしてください。」

『今は置いとけ。そのうち話す。』

俺はエルザさんと一緒に牢屋に入っておくから、安心しろ。』

「……ま、まあこれで、エルザさんの身も安全な訳だな。」

「解せねエ……………」

詠春の言葉に頭を抱えるナギだったが、

他の皆はナギが『解せない』と言う言葉を知っていた事で衝撃を受けていた。

『ノワール、アリア、アリカは俺の『家』に入ってるから、

エルザさんより安全だから、もっと安心していいぞ！！」

「……待ってください、後でツッコミを入れてください。」

『エルザさん&俺が処刑されんのは、恐らく二年後。』

場所はケルベロス…ケロベル…ケロちゃん溪谷。

詳しい日時までは知らねえから自分たちで調べる。』

「……一番知りたい所が分からんとはこのう……。」「

『だからためエらは、それまで待ってる。』

その間何するかなんぞ、勝手に決める。ガキじゃねえんだ。

ダラダラ待つのも良いし、修業するなり勝手にしろ。

敢て意見を出すなら、数千円殺した俺らが何したら罪滅ぼし出来る？

いや、所詮は自己満足だけだな。

じゃ、そう言う事で。二年後また会おう。』

シューン、とそこで再生が終わり、顔を見合せた皆の意見は一つにまとまる。

「てきと だな。」

「 適當ですね……。」

「 適當だなあ、オイ。」

「 適當過ぎるだろう……。」

「 適當じゃのう。」

「 でも、やるこたあ決まったたる!!！」

バツ！とナギが立ちあがり、皆もそれに続く。

「 最初は……オステイア周辺か? 」

「 ええ、分かっていますけれど。鳥頭ですね、あなたは。」

「 今行ったら、捕まるだけだろうが……。」

「 幾らなんでも普通、先ずは身を隠すじゃろつて……。」

「 流石の俺様でも、その答えは駄目だつて分かるぜ? 」

「 あーあー、悪つござんしたね! じゃあ隠れ家に行くとするか!!！」

そう言つて背を向けるナギに、皆は苦笑しながらも付いて行つた。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

見たいなやり取りをあいつ等がしたであろう二ヶ月後、

要するにオスティア崩壊（崩落？）から二ヶ月後。

俺は今、エルザさんと共にメガ口の元老院議事堂に居る。

理由は

「ですから！この様に我が国の民の窮乏を訴えているのです！！」

要求は二つ、元オスティア民の受け入れ、最低限度の住居・食料提供。

・・・三つか。

「故に」

「仰る事は良く分かりますが、自国を滅ぼし、

彼らを現状に追い込んだのは陛下自身ではありませんか？」

エルザさんの言葉を遮り、元老院の一人が話す。

同時に、壁に待機していた重装兵もこちらに近づいてくる。

「更に言わせて頂ければ……彼らは既に貴女の民ではありません。」

ズシャ、と重装兵が俺達を囲む。

「恐れながらエルザ陛下、な、並びに『白帝』殿。」

「何かな？」

ニコリ、と底冷えする笑みを発言した兵士に向ける。

「お、御二方を、逮捕させて頂き……たいと、思います。」

おいおい、確認になってんぞ？　良い判断じゃないか。

「ハハハハハハ！良かったね、君。」

「な、何がでしょうか……？」

「いや、なに。」

兵士の肩に手を置き、魔力を（南栄生弁で）ちよろつと出しながら言う。

「立場を弁えていない様なら、切り刻んでやるうと思ってたからさ。」

取り囲んでいた兵士は全員尻もちをつき、真正面に居た人は

「ありゃ、気絶してるよ。こいつの渾名今日から弁慶で良いな。」

と、んなこたあどうでも良いな。

で、罪状は何になるんでしょうか？元老議員の皆さん？」

クルリと振り向くと、ジジイ共は揃って明後日の方を見る。

てめえら……

「エルザ陛下には、父王殺し及び「コスモエンテレケイア『完全なる世界』との関与、

オステイア崩壊時・周辺状況報告の虚偽・改竄の疑い。」

『白帝』に「様を付ける、戯けが。」ヒィ！し、白帝様には、

これら全てへの関与、実行の疑いが……。」

「あっそ、御苦労さん。嘘乙嘘乙。」

ほら、さっさと牢に連れてってくれたまえ。職務怠慢はいかんよ？」
再度振り返り、今度は兵士共に言う。

「ツク……！さっさと来い！！」

「あ、痛　！」

と、一兵士が、エルザさんの腕を掴んで無理矢理連れて行くこととする。

バン！　ズドオオン！！！

一撃目で掴んでいた手を叩いて吹き飛ばし、二撃目で大理石に首まで埋める。

「美女・美少女・幼女への敬意と男としての責務を忘れてオイタしたら、こうなるからね？」

ワカッタカナ？」（ニイイッコリ

「「「「「sir・yes　sir！！」「」「」「」

ビシィ！と俺に敬礼をする兵士諸君。

「ならばよし。エルザさん、大丈夫？立ってます？」

尻もちを付いて腕を押さえてるエルザさんに、手を差し出す。

「あ、ありがとうございます……。」

「さ、牢屋に案内してくれたまえ。」

「「「「こちらであります!!」「」「」

兵士四人が先頭に立ち、一糸乱れぬ動きで歩き出す。

俺とエルザさんもそれに続き、地下の石造で出来た牢まで来た。

兵士が鉄格子を開け、再度敬礼する。

「ここにあります!!」

「エルザさんからどうぞ。」

「?え、ええ……。」

疑問を抱来つつもエルザさんが入り、続いて俺が入ろうとする。

「お、お待ちください白帝様!別々の牢に入って頂かないと……。」

「いやだ、って言ったら……、どうぞする?」

「も、問題ありません、sir!!それでは!」

ボタンガシャンガチャガチャガチャ！！

兵士は急いで格子を閉め、鍵を掛ける。

「……………失礼致します！！」「……………」

整列・敬礼・逃げ足を迅速にこなし、兵士達は去って行った。

後に残ったのは、俺とエルザさんのみ。

「あ、あの、愁磨さん……。なぜ逃げないのですか？

私に構わずとも……。」

「いや、俺がやりたいだけだから気にしないで良いよ。

それに、こっちの方が面白いしね。」

「……………捕まっているのに、ですか？」

そつだよ、と言い、天窓を見上げる。

後先考えないでとりあえず入って来てしまったが、

二年間は長いよなあ……。今まで暮らした1/400とは言え。

今頃あいつ等は、どっかに隠れながら作戦でも立ててるのかな？

俺が牢屋入りしたのは、介入可能か調べる為と言つのもあつたが、これが果して過去の介入結果なのか、始めから介入出来たのか……

「はてさて、鬼が出るか蛇が出るか……。」

今は何も分からないが、とりあえず今は

「どうやって、二年間暇潰そう……？」

それだけが、気がかりだった。

作愁ノワエル ㊦ ㊦ アリーヴェデルチ!! ㊦ ㊦

第27話 主人公補正は健在のようです（前書き）

どうも、H a t e . rです。

作「予告通り、第27話です。予想以上に話しが進まない・・・。
それでは、いつものを。」

愁「j . i様、剣の舞姫様、ながもく様、紅様、皇 翠輝様、微糖
様、

木下文様、z e r o様、しがく様、龍賀様、春夏秋冬様。
毎度の感想、ありがとうございます!!」

ノワ「しがく様、指摘ありがとうございます。

小学生な作者を、どうぞ許して見捨てないであげてください・・・
。

h a k i様、質問くださりありがとうございます。疑問がありましたら、また。

それでは、行きましようか。」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ!!」」」

第27話 主人公補正は健在のようです

Side 造物主

私は今、『墓守人の宮殿』の最奥であった場所の更に奥に居る。

あの決戦で壁が全て吹き飛んでしまったから、増築したのだ。

あの戦闘から、初めての会合。100万もの魔物を退け続け、

魔法世界部隊を守っていたノワール殿とアリア殿も居るのだが・・・

「・・・おそと、ひさしぶり。」

「そうね。それにしても時間が曖昧だし、この生活は流石に堪えるわ。」

「・・・また、おうち？」

「そうね、外に出ても問題は無いのだけれど……。」

シユウに頼んで、もっと時間を延ばして貰いましょうか。」

「……………ん。」

「フフ、パパが居なくて寂しいのね。私もよ、アリア。」

こちら側では大戦から四ヶ月経ったが、『家』とやらでは僅か三日しか経っていない。

三日会わないだけで、ノワール殿まであのだらけ様とは……………

「魔人殿は本当に罪作りよな……………」

「茶化すなって。…………それで、進捗状況は？」

「ああ、これなのだが……………」

魔法具で窓 『でいすぶれい』 だとか魔人殿は呼んでいた
を
開く。

「うん、ここまででは計画通りか……………」

「むしろ、この段階で躓いていては不可能な話だろう。」

「いや、基礎が出来ていないと最後で。

ここが最重要地点と思って当たってくれ。」

「ふむ、了解した。」

そして話し合いをしているのは、無論魔人殿のみ。

まあ、私が話せる相手など魔人殿か、新たに創った『二番目』^{シウエア}しか居ないがな。

話し合いの内容は　　私達が話す事など、この星の行く末以外無い。

「今の所はこんなモノか。ところで、姫ちゃんは何時までそのままなんだ？」

ナギ達じゃ手が出せなかつたみたいだが？」

と、魔人殿が後ろの結晶を指す。

中が液体で満たされ、『黄昏の姫御子』アスナ姫が浮いている。

「……この娘は、この世界の人間だ。」

「いや、知ってるが。」

「オステイア民、特に王家の人間は、創った中でも純粹な魔法世界人種の一つ。

『王家の魔力』とて、私が創った力に過ぎん。

故に、私を超える事は無い……筈だった。

しかしこの娘は、私の『リライト』すらも効果が無かった。」

『リライト』は、私が創った魔法世界人を私の中へと強制送還する魔法。

私の位に近い者ほどその効果は純粋なモノとなり、

幹部 『ディアーション・フエイツ運命を冠する者』、 『デューエ・ルサミス可能を関する者』にもなると、

『王家の魔力』を無視して送還する事が可能だ。

魔人殿の戦った召喚魔達の『リライト』は劣化よりも酷いモノだった為、

攻撃力があつたと言う事だ。

「成る程、人の進化限界であるはずのデユナミスをも超える創造体……。」

確かに、手元には置いておく必要があるか。」

「相変らずの洞察。しかし、しばらくしたら解放するぞ。

どれほどのイレギュラーだとしても、同胞の魂の欠片。

本当ならば、束縛するのも好きではないのだ。」

「心情は知らんが、理解は出来る。じゃ、俺は本体に報告して
くるわ。」

そう言っただけで立ち上がる魔人殿・・・の、分身。

私から見ても、最早違いが分からない生命体（厳密には違っらしい
が）の創造。

やはり、次の段階に進むには魔人殿の手が必要だ。

「了解した、魔人殿。次回までには30%まで終わらせておく。」

・・・と、魔人殿が私を見てくる。

「如何したのだ、魔人殿？」

「なあ、いい加減『魔人殿』って呼ぶのやめてくれないか？

お前も、友達に『造物主』なんて呼ばれんのは嫌だろう？」

その言葉に、過去の記憶を僅かに思い出す。

「了解した、愁磨殿。」

「うむ、よろしい。で、お前の名前って何？」

「おお、そう言えばこちらを名乗った事は無かったな。」

私は過去の記憶を辿り、友と対となる名前を紡ぐ。

「私の名はツエラメル。遡上、『偶然を冠する者』という意味だ。」

S i d e o u t

S i d e 元老院議員 - 側近 A -

「あれから数ヶ月経つが、エルザ陛下の様子はどうか？」

「はい。エルザ陛下は、用意した食事も満足に食べられておりません。」

精神力は大したのですが、そろそろ限界が見えるかと。」

私は今、議員の方々に牢番兵士からの報告書を元に、提示報告をしています。

まあ、議員長からの命令で虚偽だらけ・太鼓持ち様になっているのですが、

エルザ陛下が出した食事を食べられていないのは事実ですが、

どうやら白帝様が食事を用意しているようで、肉体的には全く元気だそうで。

「ふむ、折角の自白剤も無駄になっているか。新しい手段を考える必要はあるな……。」

「して、白帝さま……アーカードの様子はどうなのだ？」

「……あ、危なかった……！もう少しで笑ってしまう所でした！」

白帝様の話しになると、この人達は急に落ち着きが無くなったり、

オドオドしたり、辺りを見回します。

今の様に言い直すのは、最早当たり前になっています。

「…はい。白帝様は至って健康。従う気配は毛頭ありませんが

反抗の意思も見られず、牢内で魔法具磨きをしております。」

「魔法具をどうやって持ち込んだかはさておき……。

こちらの方が、やはり厄介か……。」

「そうですね。アーカードが居ては、陛下にお話を聞く事も出来ませんしな。」

……相変わらず、自分が肥える事しか考えていませんね。

そんな事より、オスティア難民の受け入れによる市民の不安増大への対処、

避難民の住居場所の確保、治安保守にも問題が出ているのですから、そちらに目を向けて欲しいですね。

部下にやらせるだけでは無く。私に任せるだけでは無く……!!

はぁ……。ただでさえ白帝様の敵　もとい的な上に、重労働。

命が惜しいですし・・・仕事、替えたいですねえ。

S i d e o u t

S i d e ナギ

「おい！すっかりしろー！今、治してやるからなー！」

エルザと愁磨が捕まってから、もうすぐ一年半。

あれから俺達は旧世界・魔法世界を問わず紛争地帯を回って

被害に遭った町とかに物資を届けたり、今みてえに怪我してる人の

治療を続けて来た。

「あ…、ありがとう、『立派な魔法使い』ナギ……。」

「『治療』^{クイラ}。……これで、もう大丈夫だ。」

俺がそう言うと、女の子は気を失った。

魔法世界だと、こうして魔法を使って、直ぐに怪我を治せる。

……けど、旧世界だと魔法を迂闊に使えねえ。

使うとしてもひと気がなるべく無いところを選らばねえとダメだし、ひと気があるにしろねえにしろ、記憶を消す必要がある。

そのせいで、一人だけ、助けられなかった。

「詠春、この子をさっきの村まで頼むぜ。」

「分かってるさ。俺だと、気でゆっくり治すしかないからな。

任せっきりですまん。」

「いって。アルが言うには、ホントはそっちの方が良いらしいぜ。」

「

あの子も、この子みたいに・・・簡単に助けられた筈だった。

あそこは戦場のど真ん中で、周りは人だらけで・・・。

とてもじゃねえが、秘匿なんて出来なかった。

走って、走って　　ようやく林ん中に行けた時には、もう手遅れだった。

「じゃあ、ちょっと行ってくるぞ。」

「あ、待ってください詠春さん！クルトから通信です！」

魔法がばれりゃあ、無駄な戦争が生まれる。

魔法の秘匿は、それを防ぐ為だって、お師匠も、アルも、オヤジも言っただけだ。

たしかに、大を救うためには小を切るしか方法がねえ。

だが、救える命が目の前で、手の中で消えてくくらいなら、いっそ

『皆さん、聞こえますか!!?』

「どうした、クルト。そんなに急いで。」

通信画面のクルトは、なんでか慌てて 嫌な予感がした。

『エルザ様の処刑が、来週に早まったんです!!』

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「暇だ〜暇だ〜 ひつまつで、し〜に〜そ〜お〜」

「ひどい歌……。とりあえず、天井に座るのはやめてください。」

「……へい。」

一年以上も一緒に居たせいか、最近ではエルザさんの遠慮がすっかり無くなった。

・・・まあ、それも上辺だけ。

兵士が持つて来る情報を聞くたびに、エルザさんは最初の気概を無くして行った。

『ナギが、絶対に助けてくれる　　愁磨さんは何を考えているか分からないし、』

ここに居る事自体、意味が分からないのだけれど。』

最初は、助かりたい、助けてくれる、大丈夫。そんな事を言っていたのに。

『私が死ねば　　少しは、世界が平和になるのでしょうか？』

最近では、死ねば、消えれば、罰を受ければ　　そんな言葉が増えた。

そしてそれに拍車を掛けているのは

「ぎ、議員！このような辺境にわざわざ、ご苦労様です！！」

「うむ、御苦労。話は通してあるから、君は下がっていてくれ。」

ゴゴゴオオオオン

と重厚な音を立てて、石の扉が開いて行く。

実は、前の牢は勝手な事をしすぎて、今のバベルみたいな所に移されたのだ。

「これはこれは御二方とも、見るに堪えないお姿ですな。」

大仰なフリをして入って来たのは、先日と違う議員。

毎日風呂には入ってるし、着替えても居るんだが？

「最古の王家の末裔と英雄殿にこの様な仕打ち、心が誠に痛みます。」

カッーン カッーンと足音を響かせ、エルザさんに近づいて行く。

「実は市民の不安を早急に取り除く為に、刑の執行は8日後に変更と

先日の議会で決まっしてしましまして……。

我々も、急がなくてはならなくなったのです。」

「……なん、だと!?!」

俺の声に優位を取った気になったのか、議員の声が僅かに上がる。

一ヶ月ほどならずれても大丈夫なように計画を進めていたが、

まさか、半年も繰り上げられるとは!

……前倒しするしかない、か。

「クク…その前に、お尋ねしましょう。」

黄昏の姫御子と共に封印された墓所の最奥部……

そこに到る方法を、貴方は知っている筈だ。」

……あ?こいつ馬鹿?ああ、馬鹿でしたね。

いや、知る訳無いだろうが。あそこにエルザさん居なかっただろうが。

「さあ、答えるコ(ドゴオオオオオン!!!)」

このゴミがエルザさんに手を伸ばしたその瞬間、間に『嵐脚』（ひごんぎやく）で斬撃を飛ばす。

「ハイハイハイハイ、クサレ寄生虫野郎!!」

レディー
女性を手荒に扱おうとするなんてどんな漢魂ブラザーソウルしてやがんだ? ああ!
?」

しばらく腰を抜かして俺を見上げていた議員だが、

正気を取り戻すと、指を指して激昂してくる。

「ア、アーカード貴様ア!!」

大人しくしていれば閉じ込めておくだけで許してやるうと思っ
たモノを!!」

えー、何こいつ何様? 殺して良いよね、一人くらい。

って駄目? ああ、こいつが議員長ね。なら仕方ないか。

「アー、ウン、ゴメンゴメン。どうしたら許してくれる?」

「ふざけおって貴様あああああ!!」

フン!! ならば墓所の最奥部に行く方法を教えて貰おうか!!

まあ、聞いた所でどうせ教えられん d」

「ああ、そんな事で良いの？」

俺があの時風穴開けた所があるから、そこから入れるよ。

もつとも、認識障害が掛かってるせいで見えないんだけどね。」

「……………え！？」「」

案の定俺の言葉に反応するエルザさんと議員さん。

「え、ちょ、愁磨さん！？合っているか分からないけれど、言ってる良いの?!」「」

「……………それは、本当なのか？」

「うん、マジだよ。ああ、でも早く行った方が良さぞ。

力を手にできるのは、最初にいった人だけだから。

今頃、ここを盗聴してる奴等が先に行つて……………」

と、俺の話しの途中でドダダダダ！とけたたましい音を立てて走って行ってしまった。

やれやれ、教育がなくて無いな。親の顔が見てみたいよ。

「愁磨さん!! どういうつもりなの?!

元老院が黄昏の姫御子の力を手に入れてしまったらどうなるか!!

議員を見送ると、エルザさんが珍しく声を荒げる。

まあ、当然か。アリカの妹はエルザさんの妹も同然。

その妹をまた利用されようとして、それを促したのが俺なのだから。

「ククク、安心していいよ。あいつ等は、絶対に辿り着けないさ。」

「え…… ああ、嘘だったんですね。良かった……。」

俺の言葉に、安堵した様子のエルザさんだったが、

再びの俺の言葉で百面相をする事になる。

「いや、本当の事言ったけど? 認識阻害さえ破れば、後は簡単に行けるよ。」

ああ、でも安心していいのは本当。あそこには、俺の次に最強の番人がいるから。

まあ、詳しい話しはここを出てからするよ。」

出てから

そう言った瞬間エルザさんの顔が曇り、顔を膝に埋める。

「……なら、私が聞いても意味はない事ですね。だって、私は……」

その言葉が、雰囲気、あまりにも悲痛だった為に、

俺は言葉を失ってしまう。

「……エ、ルザ、さん……。」

「ごめんなさい、愁磨さん。私は民の為に」

「……エ、ル……ぶふう……！」

「……え？」

「ブツハハハハツハハハハハアツハハハハハハハハハハ……！」

俺は、思わず吹き出してしまふ。

「え、え、ええ??？」

「ヒューヒューヒューヒュー、あー、ふうー。」

ククク、あんたさ、自分が惚れた男の事理解してねえだろ。」

まあ、あの鳥頭を理解し切れる奴がいたら、それこそ神様しか居ないが。

だけど、これだけは言える。

「あいつは、絶対に助けに来るよ。なんせ馬鹿だからな。」

S i d e o u t

S i d e 議員

我々は牢での話を盗み聞き、すぐに隠密行動できる限りの兵を召集、

しかし、清廉潔白な英雄達を果して『』

そして、意識が完全に落ちる。

後に残るのは無限の闇と、最早無い筈の体の痛み、そして絶望感だった。

Side out

「ツエラちゃん、終わったか？」

「『……ああ、シユウちゃんか。」

来ているなら手伝ってくれても良かったではないか。『』

「うん、しめん。もう言わないからやめてくれ。」

あと、ちゃんと手伝ったさ。フェイト、手筈は？」

「すでに終わっているよ。今頃、入れ替わり終わっているはずだよ。」

「サンキユ。じゃあ、また八日後に。」

「了解だ。 全ては、この星の為。』」

「全ては、我が同胞の為。」

「そして全ては、自分と、自分の愛する者の為に。」

S i d e エルザ

あれから、八日。私は今日、魔法世界の安寧の為に死ぬ。

・・・いいえ、元老院の代わりに『父王殺し』の罪を被せられ、殺される。

私は元々、第三王女だった。

それがあの日、クーデターでアリカの父・・・旧国王が死んだ事に
よって、

私は第一王女となった。

……そう、クーデターを起こしたのは、私の父だった。

勿論、最初は知らなかった。

王が死んだのなら、普通は第二王位継承者が王になる筈で。

子供ながらに疑問に思ったけれど、その時はただ嬉しかった。

アリカに、勝てた気がしたから。

「あー、ゴツホン！」これより、ウエスペルタティア王国元第一王女、

エルザ・ファミリア・エル・プレミロディオル並びに、

『白帝』愁磨・P・S・織原の処刑を行う!!』」

ウエスペルタティアは最古の王家と言われている、特殊な魔法を使えた。

けれど、力だけの王国がこうも長く続く筈がない。

ウエスペルタティアの真の力は、その政治力。

そして、アリカの家が最も政治力に長けていて、私の家が最も力に長けていた。

その為、私の家は代々將軍の位に就いていたのだけれど、

父はその不満を、常に漏らしていた。

『力を持つ者が王になるべき』だと。『政治だけの家は宰相になるべき』だと。

当然、歴史と同時に生まれた事を変えるのは難しくて。

そして遂に、アリカの父も、他の王族も大勢殺してしまった。

「『彼の者の罪は以下四つ!!』

一つ、父王殺し。一つ、戦争の原因である『完全なる世界』との関与
『

王になった父は、魔法世界を統一しようと『完全なる世界』を、

敵を頼り、利用されて。そして、死んでいった。

愚かだと思う。それに、本当に身勝手。

・・・それでも、父なりに誇りを持って、魔法世界の事を考えて、
家族には優しく、厳しくて、強くて。

だから、父は今でも、私の誇り。

だから、せめて。

私の手で、両親を殺されたアリカの手で、引導を渡したかった。

でもそれは、目の前に居る外道共のせいで叶わなかった。

拳銃、私自身もそいつ等に利用されて。

「『一つ、王国崩壊時の情報提起の怠慢。』」

「一つ、これによる人民への被害と世界規模の混乱を起こした事！！」

でも、この選択に、間違いはないと思う。

父も、私も、アリカも愛する、この世界の為に死ねるなら。

きっと、私の死にも意味はある。

「『白帝』はこれら全てに関与、並びに史上最悪の賞金首である
！！」

よって今日ここに於き、宣言する！！

元老院・帝国議会による全会一致を持ち、この者達を処刑する！！」

「

「エルザ陛下、白帝様。順番に……お飛びください。」

ガシャッ、と兵士が愁磨さんに武器を向ける。

「うむ、そこでエルザさんに向けないのは正解だ。

あの時居た兵士だな、気で分かる。学習した様で何よりだ。」

「……今まさに処刑されようとしている筈なのに、この尊大な態度。」

思わず、決意が揺らいでしまいそうになる程の眩しさ。

だから。

「愁磨殿。申し訳ないが、妾から行かせて頂くぞ。昨日約束した通り」

「ああ、俺は一切助けんし、手を出さない。」

入って行くべきでない信念と覚悟には、一切な。」

「……感謝する。ではな。」

そう言つて、橋をゆっくり歩いて行く。

「エルザ様……！！！」

ごめんなさい、クルト。……元老院の事は、貴方に任せるわ。

心残りがあるとすれば、これ以外には

初めまして姫様！俺はナギ！この『紅き翼』のリーダーだ！！

自信に満ちた、少年の顔。

おう、いいぜ。ひ、暇だったからな！！！！／／／

ちょっと照れた、可愛らしい顔。

よお、来たぜ、エルザ。

頼もしい、男性の顔。

エルザああああああああああああああああああ！！

・・・どんな事があっても見せなかった、絶望した顔。

走馬灯のように、彼との思い出が浮かんでは消えて行く。

ごめんなさい、ナギ・・・。もっと、もっと貴方と

ガコン、と橋が軋む。

瞬間、私の体は宙に投げ出される。

アツハハハハハハハ！じゃあ約束な、エルザ！

せめて、もう一度。

その太陽の様な笑顔を、見たかった・・・。

ギャヤエエエエエエエ！ ギエアアアアアアアアア！！

魔獣の雄叫びが近づき、そして

トサッ

と軽い音を立てて落下が止まり、温かいモノに包まれる。

・・・魔獣の口の中って痛くないし、温かいモノなのかしら？

そつと、目を開ける。

そして、そこに居たのは

「待たせたな、エルザ。もう来るななんて言うんじゃないぞ!!」

太陽な笑みを浮かべた訳で無く、自身に満ちている訳でもなく。

額に汗を流し、精一杯という顔をしているけれど。

「ナ、ギ……………?」

「あ?それ以外の誰に見えるんだよ!!つとおお!!」

そこに居たのは、一番会いたくて、一番愛しい、私の騎士^{ナキ}だった。

第27話 主人公補正は健在のようです(後書き)

という訳で27話でした!!

作「ま、まだ救出出来ない・・・だと・・・orz

うーん、やっぱりいらぬ描写減らすべきかなあ？」

ノワ「・・・ねえ、これってシユウの自作自演だと思われるんじゃないかしら？」

主に『紅き翼』の関係者みんなに。」

作「元老院はまだ生き残ってるし、そもそも原因だから問題なし!!

『造物主』について言及されたら知らないけどね。」

愁「まあ、そこは説得するか拳で語り合うから問題無いです。」

愁「という訳で次回、救出完了!!(?)八日をお楽しみに。」

ノワ「本編にちなんで？」

作「俺の限界にちなんで。それでは、また次回!!!」

作愁ノワ「アーヴェデルチ!!!」

第28話 一行は休憩に入るようです（前書き）

こんばんわ、H a t e . r です。

作「今回で、ようやく原作の兆しが 見えて来ません!!」

愁「むしろ見えたら、キンクリし過ぎだつて怒られんだろうが。」

ノワ「それでは、恒例のから。

z e r o 様、剣の舞姫様、木下文様、j : i 様、春夏秋冬様、龍
賀様。

感想いただき、ありがとうございます。」

作「質問はバシバシ受け付けてます！」

……現在の回答で良いか分かりませんが。足りねーよ!と云う方
は再度!」

愁「ちなみに、ネタばれは多少しかしないぞ？」

そんじゃあ本編!」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ!!!」」」

第28話 一行は休憩に入るようです

Side クルト

トン、と軽い音がして、エルザ様が谷底へ落ちて行く。

ナギは勿論助けに来ないし、愁磨さんは眉一つ揺らさず、それを見ていた。

「エルザ様……！！ 　　　　　なぜ、何故ですか、愁磨さん……！！」

僕は、自分の無力さが齒痒かった。

『紅き翼』に入ってから、常にそれを感じていたけれど、
だからこそ、あの人達なら、なんでも出来ると思っていた。

（『クルト。』）

（『え、あ、愁磨さん！？』）

と、当の本人から念話が届く。

谷は、渦巻いている魔素のせいで魔法が使えなくなっている。

ここは、上では魔法を使えるけれど、念話なんて届かないはず……

いえ、非常識さを説いても今更ですね。

(『そうそう。んな事、今更ってもんだ。』)

(『思考を読まないでください!!! って、なんで助けられないんですか!?!』)

皆さんなら、この位の逆境なら ……!』)

(『……なあ、クルト。お前、俺を…俺達を、信じられるか?』)

愁磨さんは僕の質問を無視して、そう続ける。

そんなの……。

(『貴方達を信じなくて、誰を信じると言つのですか?……!』)

(『クフフフフ、……なら、信じてろ。 またな。』)

『またな。』 確かにそう言って、愁磨さんも谷へ飛び込んだ。

「クツクツ…王家の者と最強の魔法使いの血肉は、さぞかし美味でしょうな。」

議員の一人が得意そうに言うけれど、僕にはもう不安は無かった。

「これで、世界の悪は滅びました!!どうぞご安心ください!!」

録画終了。　よろし「いよおおっし、こんなモンだろお!!」「」

カメラが止まった瞬間、兵士の一人が聞き慣れた声で笑いながら、実に場違いな馬鹿丸出しの声を上げる。

「録れたか?ちゃ〜んと録れたか?御苦労さん

オイおっさん、これ生中継とかねえよな?ねよな?流石にまずいんだよね〜。」

「っな、無礼者オ!!貴様何者だ!名をつぶ!!」

「録画はここで終わり。」

で、ここで今から起こる事は無かった事になる。分かるな?」

言い終わると、兵士は気合いで鎧を吹き飛ばす。

と、そこから現れたのは、褐色肌の筋肉の塊　　もとい、

「せ、千の刃の、ジャック・ラカン!!!?」

この人は、もっとスマートに登場出来ないのでしょうか？

そして周りの兵士も、次々現れるメンバーにどよめく。

「こ、近衛詠春!!! アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクト!!!」

ガ・・・ガトウ!!! 貴様もか!!!」

一人で全員の名前を言う辺り、御苦労様と言った感じです。

「『アラルツラ紅き翼』だと!? 馬鹿なツ!!! で、では、谷底の王女は!!!」

「そう言う事です、元老院議員さん。」

ここに居ない、『紅き翼』最強のリーダーが行っている事でしょう。

「ツク、馬鹿なツ!!! 幾ら『サウザンドマスター千の呪文の男』とて、あの谷底から!!!」

「それはどうかのう? あの馬鹿が魔力も気も使えん位で死ぬ訳が無かるう。」

「それに、さっき愁磨も行った事だしな。」

そう、愁磨さんも行っているのですから、確実にエルザ様を助けてくれるでしょう。

「ぐう…！何をしている、反逆者だぞ、捕えろ！！」

谷底の三人も逃がすな！！」

「……この状況で勝てると思っているのか…。つくづく愚かな元上司だ。」

「フハハハハ！！このイベントの警備はここに居るだけでは無い！

周囲10kmに3個艦隊と5000名の精鋭が配置してあ

……この人達が、戦時中にどれだけの戦艦・兵士を相手に

ほぼ無傷で勝ったか忘れてる様ですね。

「だから、その程度の戦力で良いかって聞いてるんだよ！！！」

全員の魔力・気が練られ、議員と兵士を攻撃が飲み込みました。

これで、この場は良い筈です。

しかし、これではダメなのです、皆さん……………！！

S i d e o u t

S i d e ナギ

「ナ、ギ……………?」

「あ?それ以外の誰に見えるんだよ　　! ! っとお!」

魔獣共は俺とエルザを見つけると、すげえ速さで噛みついてくる。

チツ、いつもならこんくらい楽勝なのによお!!

魔力も気も全く使えねえってのは厄介だな!!

「なんで、ここに……………?どうして、なんで……………」

「なんでって」

俺は魔獣の攻撃を避け、谷の出口へ突っ走る。

「答えて！…答えるのじゃ！！こんな事をしてなんになる？！

ここでは、お主も一般人と変わらんじゃぞ！！

攻撃が掠っただけで、即死してしまう様な所に……！！無謀すぎる
！！」

あんまり喋んねえでくれっかな！？避けなので精一杯なんだからよ！

「ツハ、確かに、今までで一番 二番目に危ねえかもな！！」

・・・言い直したのは、アレだ。あいつと、一回マジで戦って貰ったからだ。

手足をぶった切られたし、マジで死ぬと思ったからな。

「この俺様が良いとこレベル10状態だからな！！

でも、クリア報酬がお前だってんなら、いくらでもやってやるぜ！
」

「わ、妾は、何故かと聞いておるのじゃ！！

こんな危険を冒してまで助けて貰う価値なんて、妾には　　！！」

「ッハ、約束しただろうが！！どこまででも連れてってやるってよ！！」

メガロで初めて二人で出掛けた時、約束したんだよ。

じゃあ約束な、エルザ！この戦争が終わったら、一緒に好きな所に行こうぜ！

本当に好きな所で良いの？

ああ、どこまででも連れてってやる！！ってな。

「そ、そんな理由になってないじゃない！！」

わたつ、妾は最早そなたの主でも、ましてや王族ですらない！！

妾は大戦を引き起こした『災厄の女王』じゃ！妾を助ける意味、なんて……

そんな私を助けて、貴方になんの得があるの！？」

それなのにこいつは訳の分かんねえ事をグダグダグダグダ言いやがって！！

「私の価値は、もうこの死にしか無いの！！」

お願いだから (ゴズン!!) きゃうつ!?!」

分ならず屋のどたまに頭突きをかまして、俺の話の聞かせ

つて、頭突きした分動きが止まったから魔獣がつつ!?!?

ズンツ!!!

と目の前にまで迫っていた魔獣の頭(ミミズ見てえだから微妙)が
地面に叩きつけられたお陰で、そこを走り抜けられた。

「 貸しだぞ。さつさと姫様落してこい。」

走り抜ける瞬間、あいつの言葉が聞こえる。余計な御世話だつ
つ
の!!!

俺だつてな !!!

「あんな風に別れられたんじゃ、気になってしょうがねーだろうが
!!!

言わなきゃ分かんねえなら言つてやるよ!!!

俺がエルザを助けんのは !!!!!!」

谷がそこで終わり、バツ！！と空中に飛び出す。

「俺がお前を好きだからだよ！！ただそれだけだ！！！」

「……………へ？／＼／」

「杖よ。メア・ウィルガおいおい、気付いて無かったってーのか？」

杖を呼んで、エルザのアホ面を見ながら言う。

「……俺、恋愛とか初めてで良く分かんなかったけど、

エルザには気付いて貰えるように、色々頑張ってたつもりだったんだがなあ？」

「傷つくぜ……………。ったく、てゆうーか何が民を救えだよ。

そんなのより、お前の方が大事に決まってるじゃねえか。」

「そんなのって……………！あ。」

そんなのなんて言ったら怒るだろうと思ったから、先回りして杖に下ろす。

「で、エルザはどうなんだよ。俺の事どう思ってた？」

「私だ　ツ妾は王族、だから。元々自由が許される立場ではない。

それに、今は大罪人じゃ。民達の為にもそんな浮ついた　」

「っだー！ー！ー！そーゆーのはいらねえんだよ！

お前はもう王族じゃねえってさつき自分で言っただろうが！！」

エルザがなんか言ってるが、全部無視して喋り続ける。

・・・別に、焦ってる訳じゃねえぞ！！

「『災厄の女王』もさつき処刑されて死んだ！

お前は自由だ。縛る物は何にもねえただの人間だ。

そーゆー、責任もねえ王女でもなんでもねえ、ただのエルザとして
答えるよ。」

「……………人の気も、知らないで……………！！」

エルザは下を向いて、プルプル震えてる。

・・・あれ！？俺なんか拙い事

「私だって！！私だってナギの事好きよ！！」

捕まっていた二年間だって、いつつも貴方の事考えて…！

それで、それで……！悪い!？」

「いや、悪かねえ。むしろ最っ高だね。」

その言葉を聞いて安心した俺は、エルザを抱き寄せる。

自然と顔を見合わせて

「ナ、ギ…んっ……………」

エルザのが名残惜しかったけど、顔を離す。

エルザの顔を見ると、真っ赤で泣いてて　　ってあ?!

「エ、エルザ、どうした!？」

「え?…あ、ごめんなさい…。その、安心しちゃって……………」

「エルザ……遅れて悪い…。この時しか無かったんだ。」

「私、私ね……王女だから、民の為だって諦めようとしたけれど、

それでも諦められなくて……!!」

トン、とエルザが俺の胸にまた飛び込んできて、ポカポカ叩いてくる。

「、こいつ……」

「なんで、なんでもっと早く来なかったのよ!？」

怖くて、不安で、私……!!ううう……」

エルザを、そっと抱き締めてやる。

「すまねえ。……なあ、エルザ。俺さ、もうお前にそんな思いはさせたくねえ。」

守ってやりてーつつつか、一緒に居たいっつか……」

エルザは、俺の言葉に首を傾げていやがる。

っ、伝わんねえかなあ!？」

「つまり、なんだ。……俺と、結婚してくれないか!!?」

「……………え!?!?!」

「お前の罪とか後悔とか責任とか、俺はバカだから分かんねえ。」

…けど、お前と一緒に背負いてえって思っ。だから……な。」

エルザは百面相してたけど、最後はこっちを向いて、

最高の笑顔で言ってくれた。

「……はいっ！」

S i d e o u t

1047

S i d e 愁磨

只今のBGMは、メンデルスゾーンの結婚行進曲で。

「うんうん、恋が成就する瞬間って言うのは美しい。そうは思わな

いか？」

「それには同意するけれど、いいの？あっちは放っておいて結構派手に暴れているから楽しそうよ？」

崖の上を見ると、其処彼処で爆破してたり斬撃が飛んでたりする。

「楽しそうではあるけど、兵士共は弱いからどーでもいいし、

元老院少数は生かしておかないとダメだし、別に構わんさ。

俺の目的には入って無いしな。」

「……のう、愁磨……本当にあの様な計画を進めるのか……？」

と、俺の言葉に不満顔を向けてくるアリカ。

先日計画について大まかに話したんだが、怒り狂ってなあ……。

五時間延々と話したら、状況を完全に掴んでくれて落ち着いた。

条件にオスティア民を全て助^{残す}ける事を前提に、だったが。

「進めるかも、じゃなくてももう始まってるんだよ。

あと三十年。正直ギリギリだからな。」

「私も、愁磨の策が最善策だとは、思うのじゃ。でも……。」

「アリカ。貴方の葛藤も分かるけれど、結局は皆救われるのだから。

まあ、他の人が言ったら絵空事でしようけれど。」

「……そう、じゃな。」

全員を完全に助けられるなど、神以外居らぬのじゃからな。」

と言いつつも、アリカは今一つ納得言っただけみたいだな。

まあ、それも仕方ないか。

ツエラメルが戦争始めるきっかけ作った原因とは言え、

人が一応ではあるけど死ぬんだからな。

「まあ、そこら辺は追々って事でさ。」

今は、エルザさんが助かってカップル誕生おめでとって事にしようぜ。」

「……で、あの二人いつまで抱き合ってるつもりかしら？」

他人のを見ると、無性に甘ったるくなるのね。」

「そうじゃな、流石に長い。」

・・・女性陣が怖いので、あの二人を物理的に引き離しに行きましようかね。

「アリアー！リル　　！もう行くぞー！！」

魔獣と戯れているアリアとリルに叫ぶ。

一応言っておくが、あのでっかい蛇みたいなのではない。

あれは幼体で、大人になるとミロカロスみたいに美しくなるようだ。

黒くて若干籠っぽくはなっているが。

魔獣（大）の頭を一撫でしてから、とととて走って来るアリア。

リルは尻尾を握手するかの様に巻き合ってから飛んでくる。

「……………ねえ、パパ。また、くる？」

見上げてくるアリアを抱き上げ、ちょっと思考。

リルも巻き付いてくる。ふむ、友達になったみたいだし…………。

「そうだな、また来ようか。かなり後になるかも知れないけどな。」

「でも、クルト。処刑日前に助けてしまったら全ては黙阿弥。

ナギもエルザ様も…全員、苦しい思いを」

兵士達の亡骸の中に居るのは、この地獄の様な惨状に合わない少年達。

眼鏡を掛けた白髪の少年と、金髪のスーツ姿の少年。

「そんな事は分かっている！！だが、タカミチ！！」

「だからクルト、それは僕達がやるんだ。

良いじゃないか、今日の所はハッピーエンドって事で。」

「クッ！！」

白髪の少年　クルトは踵を返し、足早に去っていく。

「そんな甘い考えじゃ、ダメなんだよタカミチ！」

() 『まあまあ、興奮すんなってクルト。』 ()

() 『！愁磨さん！？』 ()

(『後で話がある。場所は 』)

魔人の話に、計画に。少年は

S i d e o u t

S i d e 詠春

エルザさんを救いだして元老院兵を全滅させた俺達は、

ナギとゼクトの要望で、俺の故郷である日本へやって来た

「うおおおおおおお！！これが有名な飛び降りる奴か！！」

「以外と低いんじゃないの。」

「いや、普通の人から見たら高いから。俺らが異常なだけだから。」

「フイイイイイイイイイイやっほおおおおお！！！！！」

「あ、ジャックてめえずりいぞ!!俺も!!」

騒ぐナギ、ジャック、ゼクト、愁磨。主に騒いでるのは二人だが。

つていうか、お前らは修学旅行に来た学生か!!?」

「フフフ・・・騒がしいですねえ。」

「エルザさん、夫の調教は妻の役目よ?しっかりしないと。」

「ちよ、調教?!////」

「同時に妻の調教も夫の役目なのだけれどね?フフフフ。」

「それって、あの、つまり……//ノキュウ……。」

「あ、義姉君!?!しっかりするのじゃ!?!」

「エルザさんって、随分初心ねえ……。美味しs」

「ママ……、それいじよーは、めっ、なの……。」

「うぐ。…ごめんなさい、アリア。」

か、カオス過ぎる!!一番小さい子が一番しっかりしてるぞ!?

フツ、英雄と呼ばれても、一皮剥けばこんなモノ……。

「あ、こら、ナギ！お前は飲んじやいかんだろうが！！」

「かてー事いいっこなしだつて詠春！！今日の主役はナギとエルザさんだぜ！！」

「そーそー！！男の嗜みだつて。」

「お、俺は知らんぞ！！」

詠春さん、相変わらず大変ねえ……………。

一時間後。

「ナギいいいいいい！！俺の酒が飲めないのか！！？」

「飲んでやろうじゃねえか！！」

ええ、今度は詠春さんが大変になっております。

ふ、普段クールだから、落ちっぷりが酷いわ……………。

「嫌やわあ、あの人てば。ホンにお恥ずかしい所見せてもって……。」

「い、いや、良いのじゃ。あんな詠春殿もなかなか面白いのじゃ。」

「アリカ、人様の亭主を面白いなんて言うものじゃないわよ……?」

アリカの隣で飲んでいる黒髪の方は、詠春さんの奥さんの木乃葉さん。

和服がとっても似合う、物腰の穏やかな大和撫子。

……でも、何故かしら?菩薩の様な微笑みが、偶に阿修羅に見えるのは。

「み、みなさまあああああああ!!!」

と、入口から血相を変えた男性が叫ぶ。

「なんや、騒がしい。お客様に迷惑やろ?」

「お、奥様!!それ何処では無いのです!たった今し方、

裏の祭壇に封印してあったリョウメンスクナノカミの封印が……!」

「な、なんやて!?!」

リヨウメン・・・なんたらか良く分からないけれど、騒がないで欲しいわ。

アリアが起きちゃうじゃない。

「み、みなはん!申し訳ないですけど、今すぐに」

「皆の者、用意は出来ているか……?!」

ユラツ・・・と立ち上がる詠春さん。に続いて、男性陣。

そこに、さっきの騒がしさは無く

「斬殺じゃあああああああああああああああ!?!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおお!?!」
!?!」」」」

「フフフ・・・祝いの場を邪魔するとは、無粋ですねえ・・・。」

殺意だけが、そこにあつたわ。

アルも表情には出ていないけれど、すっごく怒っているわ。

どうでもいいけれど、静かにしてくれないかしら・・・?」

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「っつと言つ訳でやって参りました無粋者の所!!」

「「「「「ぬおおおおおおおおおおおおお!!」
「「「「「

と叫ぶ野郎ども。気合いは十分だな!!アルもアルで酔ってるな!
!フハハハハハハ!!

「宴を邪魔するなどおお!!俺がノワールに膝枕してる時、
アリカとイチヤイチャしてる時、アリアを膝に乗せている時に邪魔
する

ガトウが威加法を使い、得意の居合拳を叩きこむ！！

しかし、その威力はまさに小惑星隕石！！それが雨霰と降り注ぐ！！

「ではアル、同時に行こうかのう………？」

「フフフ、良いでしょう……。飛びつきりをプレゼント致しましょう。」

ゴオオオ！と二人の魔力が高まり、同時に魔法を放つ！！

「『ヒスカヤ極零烈凍波』！！」

「『フラゴザハース死黒核爆烈地獄』！！」

「『融合！！』カテドラル螺導対滅地獄』！！！！」

絶対零度のレーザーと核爆発が起こり、温度差によってピカピカを崩壊させる！！

が、まだまだ原型を留めたままだ！！

「よっしゃあナギ！！トリだ、アレ行くぞ！！！！」

「アレえ！？ツハ、それも面白そうじゃねえか！！！！」

「ぜってー分かってねえよな！？まあいいや！

『^{バンドラ}禁箱』！！出でよ『^{ケレン}紅蓮の魂』！！『^{ラガン}男の在処』！！』

「「「があああああああったああいい！！」」」

それぞれに乗り込み、掛け声とともにラガンから出たドリルが

グレンの頭に刺さり、変形する！

「俺とエルザの祝いの席！！邪魔するクソ野郎は貫いてやんぜ俺達でえええ！！」

「たとえ謝つても許さねえ！！覚悟しろよ！この虫野郎！！」

「「酔っ払いのテンションが有頂天になる！！」

英雄合体、グレンラガン！！俺達を、誰だと思ってやがるうううううう！！」

もう何言ってるか分かんねえのは無視してくれ！！

「一気に行くぜ！！！！ひっさあああああつ！！」

グレンに付いているサングラス・兼ブーメランを投げ、スクナの腕を捕える！

し、

スクナの封印を解除した奴らの思惑を意図せず粉碎して収集したのだった。

翌日、二日酔いで頭を抱える者4人、

昨夜の失態を思い出し頭を抱える優男1人、事態の収集に頭を抱える者1人、

そして、呆れる者4名と首を傾げる少女が居たとか居ないとか。

第28話 一行は休憩に入るようです（後書き）

つと言う訳で28話でした！

作「次回、ようやつと麻帆良に入ります！…終盤になると思いますが。」

愁「その前にテオとクルトとツエラメルと話して、麻帆良入りする為に裏回して…あれ？入れるのか？」

ノワ「ええ、フラグの強化も追加も忘れないでやるみたいね？ええ、あくまで、予定でしかないけれど。」

作「今回、愁磨の計画のヒントが！ 人によっては答えになるかも。」

愁「まあ、誰でも思いつく様なモノだから、期待はしないでくれよ？」
ノワ「戦争よりも死者モドキが出るけれどね…。」

作「ところで質問なのですが、現在、文字数が初期の頃より遙かに多くなっています。」

5000 9000くらいに。

読みにくい初期の方が…etc.ありましたら、お答え頂けたら幸いです。

それでは、次回12日くらい！また次回会いましょう！（曖昧「

作愁ノワ「「アリーヴェデルチ！！」「」

Aria「じかい、エヴァ・・・おねえちゃん？がでてくるみたい。パパがすきだって、いってたけど・・・ワタシノ、テキナノカナ？」

第29話 魔人はフラグを立てるだけのようです(前書き)

こんばんわ、こんにちは。今回いつもより難産、H a t e . rです

作「タイトル通り、前告知した学園入り 次回です!!

期待していた方、申し訳ございません!!! orz

言い訳しますと、時系列が凄いのなんのって……。」

ノワ「所詮、言い訳にすぎませんので、

『しょうがねえなあ』と広い心で読んで頂けると幸いです。」

愁「それじゃあ、恒例のを。

剣の舞姫様、木下文@木下衣玖様、龍賀様、z e r o様、春夏秋

冬様、ルービツク様、

ロリで紅葉な梅好きのファッカーでもあるシュバルツ様、

感想ありがとうございます!!!」

作「フラグも伏線も増えて行く……! 果して私は全て拾い切れるのか!?

それでは!」

作愁ノワ「」どうぞ!!!」」」

第29話 魔人はフラグを立てるだけのようです

Side 愁磨

「おーっす、スタン爺さん。今日もいい髭だな！」

「…せめて良い天気じゃの、ぐらいは言えんのかの？ シュウマ殿。」

スタンと言う名前で分かるかも知れないが、俺はウエールズの隠れ里

つまり、ナギの故郷に来ている。

既に二年は滞在してるから、村の人達ともそれなりにご近所さんだ。

「……おじじ、おはよう。」

「おー、アリアちゃんお早う。今日も可愛いのが。」

「オイオイジジイ、鼻の下伸びてんぞ。だらしねえ。」

「フンツ、貴様に言われたくなどないわ悪ガキめ。」

スクナを再封印した後、俺は『紅き翼』全員に計画の事を大まかに話した。

正直に言つと、こいつらが受け入れてくれるとは思って無かつたし、ぶん殴られるとは思つたんだが

『……………ありがとうよ、話してくれて。俺は賛成だぜ？だってよ』
『……………ありがとうよ、話してくれて。俺は賛成だぜ？だってよ』
つてナギに言われて、呆気に取られた。

曰く、『不必要に死んでく命があつちだけでも減るってんらいいだろ。』

……目の前で、腕の中に居た命を助けられなかつたとか言つていた。

それでどう心が動いたのかは、本人だけが知つてれば良い事だ。

「ああ、そうそう。俺、魔法世界まほうに用事もちあるから、暫く行つてくるわ。」

「あ、そうか。ワリいな、手伝えなくつてよ。」

「別に気に病む事は無いわよ？ナギが居ても邪魔なだけだから。」

まあ、皆考える所があるみたいで。

今はバラバラに散って、考えを纏めているって所だ。

「……ノワール殿、じゃからナギはスマンと謝ったのを分かっておるじゃろう?」

「スタンさん、私を馬鹿にしているのかしら?」

分かっているから言ったのよ?」

「何時になってもん慣れんのう……。」

……ノワールとスタン爺の折り合いは、なんか不思議だ。

と、俺達が雑談していると

「皆さん、おはようございます。朝から騒がしいですね。」

「ん?ああ、ネカネちゃんおはよう。今日も可愛いね。」

「しゅ、シュウマさん。子供扱いしないでくださいノノ」

俺が頭を撫でているこの子は、ネカネ・スプリングフィールド。

綺麗な長い金髪を背中程まで伸ばしていて、紫がかった深い青い瞳の子だ。

ナギの親戚の子（と言っても同じ村に住んでいる）で、今は学校が夏休みで帰省中。

……アリアとは仲良しなんだが、何かと衝突？してる。

「子供扱いされなくなかったら、もっと大きくなるか

700年前に生まれてくるしかないよ」。

そうそう。今丁度話してたんだけど、俺達暫く魔法世界に行くから。」

「え、ええええええええ！？そんな！

折角夏休みなのに。……もっと、シユウマ様と遊べると思ってたのに……。」

そんなにシヨンボリされると困るんだがね？

……ああ、『様』が付いてるのは、俺のファンクラブさんだからだ。

No.1から順に、アリカ、ノワール、アリア、テオ、ネカネちゃん。

うん、聞いた時は色々ツッコミ入れたかったのは割愛。

Side とある取引

「『では、これで文句は無いのであろう?』」

「……ええ、これで良いわ。これでアスナちゃんを渡してくれるのよな?」

「『無論だ。だがしかし、そちらが約束を破った場合……』」

「ああ、分かってる。お前も約束は守りやがれ。」

あーあ、愁磨に怒られちまう、かな?

|||||

Side ガーウ

「で、でも師匠は?!」

「弟子に心配される程、落ちぶれたつもりはないぞ!!」

それに、守りながら戦うのは苦手なんだ!」

悪魔の攻撃を防ぎながら、タカミチに叫ぶ。

『造物主』の事を探っていると、これだ。既に同じ状況が10回を越えた。

いつもなら雑魚が大量に出て来て、タカミチと協力して倒せるんだが

「如何した、人間よ。余所見をされていて良いのか!？」

「少しは待ってくれてもいいと思うんだが?」

今回は、相手が強過ぎる。伯爵級か・・・あるいは侯爵級の力を持っている。

侯爵級!! 地獄の門番と考えると考えてくれれば、その強さが分かるかも知れない。

「アスナちゃん行くよ!ここに居ても邪魔になる!」

「ダメ……イヤ！ガトーさん！！」

「嬢ちゃん……。涙見たのは…初めてだな！！」

幼女趣味は無いが・・・ナギが残して行った子だ。

俄然、守りたくなるじゃないか！

俺は、悪魔に対しての攻撃をより激しくする　と、

「し、師匠おおー！！」

タカミチの声で後ろの悪魔に気付くが、一人相手に精一杯。
悪魔が奇妙な鎌を振り被り

ドズッ

と鈍い音が、俺の後ろでする。俺を庇った、そいつは

「あー…、痛え…。」

口と胸から血を拭き出している、愁磨だった。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

ガトウの死亡イベントが、今日だったとは、な・・・。

Alucard 形態しか装填して無かったから、庇うしかなかった。

とりあえず

「『形態変化：モード スガミマエ 崇神魔縁』ゴプツ！…っち！『被え』！

ガトウ、しゃがめ。『罅ぜよ』！

俺を刺しやがった悪魔を被い、ガトウと戦っていた悪魔を破裂させる。

「しくじった…ガフツ！？っと、刺さりっぱなしだと痛ってえな…」

「愁磨さん!!?そ、そんな…!」

鎌を抜くと血が吹き出て、倒れこんでしまい、それを見たタカミチが叫ぶ。

まさか、ガトウの役割を俺がする事になるとは……。

「…タカミチ、姫ちゃんの記憶の……お前以外の、記憶を消しておけ。」

ああ、あと…俺んトコは念入りに消しとけよ。

その子が幸せになるにや、いらねえ記憶だ。」

「そ、そんな……!貴方なら、その程度の傷……!!」

「この鎌な……、『魂喰らい』ソウルイーター つつて、悪魔は結構使ってるもんなんだ。」

名の通り、魂を持って行くから……。言っただろ…?俺、魂は創れねえんだよ。」

言っている傍から、後ろからワラワラ悪魔が湧いて来ていて、

ガトウは既に戦闘状態に入っている。

「ここは俺達に任せて、姫ちゃん連れてさっさと逃げる。

……俺に出来ない事を、お前に任せる。いいな？」

「ツツツ！！アスナちゃん、行くよ！」

タカミチは、先程の渋り様が無かったかのように姫ちゃんを抱えて走り出す。

「や、ヤダ！シューマさんと、ガトーさんが！！」

「僕達が居たら足手まといにしなければならないんだ！！」

ああ、役に入り込み過ぎて忘れてた。一応言つとかないとな。

「タカミチ、またな。」

俺の言葉に一気に涙を浮かべた様だったが、それを振り払い、

ナギの様な顔をして叫ぶ。

「か……必ずですよ！！また会えなかったら、殴りますからね！」

「男のその台詞は萌えないからやめてくれ。」

そして、タカミチが走り去ったのを確認してから

「『再生開始』 あーあ、血塗れだよ……。ノワールにまた怒られる。

「……愁磨。こんな茶番した事、説明して貰うからな？」

「お互いにな？じゃあ、とりあえず 『雑ぎ被え』！」

全く、いらん事してる暇があったら副業しっかりやれってんだ。

S i d e o u t

S i d e ? ?

「死なないで！お願い、目を覚まして！！」

私の力は、こんな時に…何にも役にたたない。

彼は、ケイジは、私を助けてくれたのに。私は、彼を助けられない。

「チツ、間に合わなかったか！？」

「！！誰！？」

背後に現れた

落ちてきた？

人に、銃を構える。

と、そこに現れたのは……

「白帝……シユウマ？」

「肯定だ、お嬢ちゃん。」

真っ白い……銀色にも見える長い髪、女性にしか見えない美しい顔。

そして、救世主と呼ばれる理由の一つの、真っ白い騎士服。

処刑された英雄、大罪人の死霊……数々異名はあるけれど、

数年前から紛争地帯を騒がせている、その理由。

「お、お願い！ケイジを助けて！！おねがい……。」

全ての傷を癒し、体が半分になっていようと治してしまう。

巷では、そう噂されていて。だから、この人なら

「……君、何か言い残す事はあるか？」

「え……………?」

「…では、仲間たちに……………。すまない、と。」

それ…と、この子を、頼みます。俺の代わりに、守ってください…。

「……………分かった。それと、すまない。俺にもっと力があれば……………。」

この人達は、何を、話して……………?

これじゃあ、まるで

「白帝さま……………?話していないで、早く、早く……………!」

「マ、ナ……………。俺は、助からないんだ……………。」

「聞いた事はあるだろう?悪魔の武器、『魂喰らい』。」

魂を持って行かれたんだ……………。肉体がゆっくりと、急激に死に行くのを待っただけだ。」

「でも、貴方が、魂を治してくれれば……………。だって、貴方は、なんでも……………」

私の言葉に、首を横に振る白帝。

「俺は、魂を…生物を、創る事は出来ない。」

だから、せめて。

教えてくれないか？君の、名前を。俺と共に永遠に語り継ぐ為に。」

「光栄、です……。俺より、遙かに人を助けている、貴方に……。」

ケイ、ジ……ケイジ・タツミヤ。故郷は、日本、で……。」

「たつみや、けいじ。龍の宮殿は、恵を司どる、でいいかな？」

「ハイ……ありがとうございます。……マナ……。」

ケイジが、私に手を伸ばして来る。

それをしっかりと包むと、ケイジが微笑む。

「マナ……。俺に借りを…返そうとかは、忘れて。幸せに、暮らしてくれ……。」

それと……、何時までも、泣き虫なままじゃ、ダメだぞ？」

「…分かった。私、ケイジの分まで、幸せになるから……！」

私も、ケイジみたいに、困ってる人を助けられるくらい、強くなるから……！！」

「さい、」に。マナにとって、俺って、どんな奴だった、かな……？」

質問の意味が、よく、分からないけれど

「ケイジ、は……私の命の恩人で、それで、……お、お兄ちゃんみたいな、人。」

「アハハ、ハハ　ゴホツガフツ！お兄ちゃん、か。」

なら、大丈夫かな……？じゃあな、マナ……。ごめん……。」

そう言って笑うケイジの手から、段々力が抜けて行く。

ダメ……まだ、せめて、これだけは……！！

「ケイジは、私になんでもしてくれたよ！だから、だから　！」

ありがとう、ケイジ……！」

「……うん、マナ……。ありがとう……。」

ケイジの瞼が閉じて、溜まっていた涙が落ちた。

……

……

…

「白帝さま……。…お願いが、あります。」

しばらくケイジの手を握って泣いていたけれど、約束したから。

強くなるって。もう……。なるべく、泣かない様になって。

「私に、力をください。人を助けられる、力を。」

「……。少ね…いや、恵司君と約束したからね。教えよう。」

それで、君の名前は？」

私の、名前　マナ・アルカナ。

でも、それはケイジが居た時の、名前だからー

「マナ。……マナ・タツミヤ。ケイジと同じ字は、貴方が付けて。」

「そう、だね。じゃあ」

フオオン、フオンと白帝さまは、空中に字を書いて行く。

龍宮、真名。

「龍の宮を継ぐ、新らしく、真の名前。龍宮真名。」

「分かった。私は、今日から…今から、龍宮、真名。」

S i d e o u t

第29話 魔人はフラグを立てるだけのようです（後書き）

つと言う訳で29話でした！

作「いつか、恵司に救いをあげたい……orz

無理だけど。そんな暇無いけど。」

愁「アスナむっりやりだなあ……。確かに詳しくは能力話して無いけどさ？

タカミチ……再会したら抱きつかれそうだなあ。」

Aria「……『神虎』……。」

作「『神虎』出しちゃ駄目！もしくはタカミチ逃げて……！」

ノワ「さて、次回の更新は16日か17日になるわ。……最近、展開が難しいそうよ。

ラストまで持って行ければ、何とかなるんじゃないかしら？」

作「なんつか忘れてる気がする……。」

ここは？ってのがありましたら、是非感想覧へ！って言うか何か欲しい！」

愁「前話のタイトル全部変えたのは、何となく気まぐれだ。」

作「揃えようと思ったたら、何時の間にか作業していた……。」

スタンド攻撃とか（ry」

Aria「……それでは、またじかい……。」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ……！」

Aria「……ありーヴえでるち。」

第30話 一行は麻帆良に入るようです(前書き)

こんにちは、H a t e . rであります。

作「さて、今回はちょっと急ぎ足。麻帆良入りと言っても読んで頂ければ分かりますので、どうぞ。」

愁「その前に恒例の。」

木下文@木下衣玖様、剣の舞姫様、春夏秋冬様、龍賀様、ルービツク様!

感想ありがとうございます!!」

ノワ「それでは、行きましようか。それでは」

作愁ノワ「」エヴァあああああああああ!」」

第30話 一行は麻帆良に入るようです

Side エヴァ

「遂に追いつめたぞ、ナギ・スプリングフィールド!!」

私は目の前の目深にローブを被った、如何にも『魔法使い』風貌の男に

『エンシス・エクセクエンス断罪の剣』を突き付ける。

この数年間この男を追って来た理由は、ただ一つ

「今日こそにつ、んんッ! 『白帝』と『黒姫』の居場所を教えてくださいぞー!!」

「『闇の福音』 『禍音の使途』 『不死の魔法使い』 エヴァンジェリン……。」

しつこいな……、俺も暇ではないのだ。ここでケリをつけさせて貰おう。」

フン、流石は英雄と言われているだけあって、凄まじいプレッシャーだ。

しかし……兄さまと姉さまに比べたら、子供騙しに過ぎん！

「くらえ！！」ニウイス・テンベスター 闇の吹

得意の中級呪文を至近距離で叩きつけようと、奴に突撃する。

が、あいつは何もせずに、後ろにスッと下がっただけ。

舐めおって、若僧が！！

「おっと。」

と奴がわざとらしく地面に落とした、それは

「兄さまあああああああ！！！！」

が、着替え中の写真が　ってしまった！！思わず取ってしまった

メリッ、と音がし、次いでドポーン！！と言う音と共に、

私はネギニンニク地獄に落ちて行った。

S i d e o u t

S i d e ナギ

俺は今、前に愁磨に頼まれた仕事をやっている。

何でもこの真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンを麻帆良に行かせる、
つて。

「……で、貴様。兄さまと姉さまの居場所はどこだ！」

「フリーフリー、俺も知らね なんだわ!!」

「きつさまあああああああ!!この三ヶ月間無駄にさせおつて
!!」

・・・俺は、本当に知らねえんだよ。

今年は俺の番じゃ無かったから、こうして来れてるんだ。

タカミチの話だと、愁磨もガトウも一緒に逝っちまったとか言ってたが

愁磨を倒せんのは、俺だけだから、んなこたあ有り得ねえ！！

・・・愁磨を倒すのが有り得ねえとか言つなよ。

「まーまー落ち着けて。ホレ、愁磨からの手が。」

手紙を出した瞬間、かっぱらわれた。

愁磨よ・・・教育はちゃんとしねーと・・・。

「今年から学校に行け、までは了承しよう……。しかし！！」

手紙を読みながら、顔を真っ赤にしたり怒ったり照れたりしていた

エヴァンジェリンが突然立ち上がった

「小学校からと言つのはどつ言つ事だああああああああああ
あああああ!」

……色々、最強種つても大変なんだな。

S i d e
o u t

S i d e
愁 磨

「遂にやって来ました、麻帆良学園！！！」

あれから俺達は、詠春の所に行つて身を隠したりまったりしたり、魔法世界に行つて計画の準備を進めたり遊んだりしていた。

・・・真面目にやる事はやったんだぞ？

「エヴァ、エヴァ。あああ、早く会いたいわ……」。

でも、もう少しだけ待っててね！！」

「師匠……もとい愁磨さん、ノワールさんはどうにかならないのかな？」

真名はその後、恵司と同じ武器が良いという事で、

俺が銃の扱いを教えて、ノワールが実戦訓練、アリカが治療担当となった。

(アリカの通常魔法制御の練習にもなった。)

アリアとも模擬戦をしていた為、魔法剣士ならぬ魔砲銃士になった。

弾は自分で調達する、と言ったので援助していない為、

魔砲弾は経費が馬鹿にならないらしく、滅っ多に使っ事は無いが。

「エヴァ、エヴァああああ！！すまない、出来ない兄を許してくれ！！」

「……………ああ、こっちの方が重症だったね。」

「……………パパ、エヴァずるい。」

真名は悪魔とのハーフの為か、数年でいきなり大きくなって、

いきなり成長が止まった。身長、追い抜かれた……………。

そうそう、アリアと真名で何故か衝突が無く、至って平穏だった。

むしろ二人つきりで遊びにすら行く事もあった。

……………嬉しいんだけど、ちょっと寂しい。

「アリア、エヴァとは仲良くしてな。えーと……………姉みたいなものなんだから。」

「……………ちょっとだけ、頑張る。」

「いつつもそれだ……………。」

「して、愁磨。この後はどうするのじゃ？」

「えーっと、詠春とクルトが話しはしてるみたいだから……」

とりあえず学園長の所行くか。」

実は密かに楽しみにしてた事が一つ。

……それは、あのジジイが本当に人間なのか見極めるって事。

S i d e o u t

S i d e 近右衛門

「フウ……………」。

おっと、思わず溜息をついてしまった。

しかし、溜息も出るというものじゃ。今日、婿殿が話して来た人物・

さらに、本国の新任とはいえ、議員殿から配属命令が来た人物が来る。

これが同一人物だと言うから（複数が一致しておるのじゃから更に）驚きじゃ。

関西呪術協会と関東魔術協会でさえ、仲が悪いと言うのにじゃ。

……監査官とかじゃったら、ワシ、逃げても良いかのう……？

コンコン

「学園長。新任の先生方と生徒が到着致しました。」

「おお、しずな君か、ご苦労。通してよいぞ。」

「失礼します。さあ、みなさんどうぞ。」

しずな君が促し、入ってきたのは

「ありがとうございます、しずな先生。お礼に、今度食事でも如何ですか？」

「ウフフ、お気持ちだけ頂いておきますわ。」

「ずるいわ、シュウ。私もお食事したいのに。」

と言う訳で、しずなさん。如何かしら？」

「え…あ、あの…。」

…発音から見ると、恐らく男性じゃろう。

白髪の、軽そうにも紳士的にも（何れにせよ真剣な）見えるじよ…男性。

黒髪黒目の、しかし日本的では無くヨーロッパ的な顔立ちの、不思議な雰囲気的女性。

「愁磨……。しずな殿が困っておるではないか。」

「ふむ…、これは失礼しました。ああ、皆で行けば問題無いじゃないか。」

「良いわね、名案。アリアはどうかしら？」

「……わたしは、いっしょでいいよ。」

続いて入ってきたのは、プラチナブロンドの女性（オッドアイとは珍しいのう。）

銀髪の無表情な少女・・・この子が生徒じゃろう。

・・・この家族、仲が良いと言うか・・・。しずな君が狼狽えておる所など初めて見たぞい。

「あ、あの、私は……。」

「……………おねーさん、いや？」

アリアと呼ばれた少女が、しずな君の上着の裾を引っ張りながら上目遣いで……………。

「こ、これには流石のしずな君でも

「……………今度、ご一緒させていただきますわ。」

「……………ん。」

「「「イエイー!」」」

「……………『つっつみ』とか言うのが足りないのじゃ。」

案の定、しずな君が落ちた!?

麻帆良中の男がいくら誘っても反応せんかったのに……。

とりあえず……。

「ウオツホン!!そこら辺にしておいて貰えんかのう?」

「おおっと、これは失礼。」

「フォツフォ、しずな君、もう下がって良いぞ。」

「は、はい。失礼致します。」

ボタン、としずな君が去ったのを見送り、会話を再開させる。

「ようこそ、麻帆良学園へ。学園長・並びに統括理事の近衛じゃ。」

「コホン。初めまして、近衛近右衛門学園長殿。」

本日より配属となりました、愁磨・P・S・織原と申します。」

「同じく、ノワール・P・E・織原。シュウ……愁磨の妻になります。」

「アリカ・アナルキ……ではなかったの。」

アリカ・P・X・織原。同じく妻じゃ。」

クリンルオス

「……アリア・P・W・織原。」

「私は龍宮真名。何時か織原を堂々と名乗りたいね。」

仲が良いと思ったら、家族じゃったか。……妻が二人!?

とかツッコミどころがあるのは、ワシが日本人じゃからじゃろうかのう?

と言うか、総じて名前を、どこかで聞いた覚えが……。

「さて、詠春とクルトからは、話は通してるって聞きましたか?」

「フォツフォツフォ、どちらも詳しくは教えてくれなかったのじゃ。」

自己紹介ついでじゃし、くわし　　!!!」

織原殿　四人おるか。愁磨殿が、恐らく認識障害を解いたのじゃろう。

一瞬にして、四人が四人と繋がった。

「……かの英雄は、女王と共に処刑されたと聞いておったんじゃかのう?」

「主の上層部が嘘八百並べただけ、と言うことじゃ。

現に私達はここにおる。」

「……………して、英雄兼犯罪者一向がなんの用じゃ？」

エヴァンジェリンでさえ持てあましておると言うのに、

よもや、伝説となっている英雄に勝てるなど毛頭思っておらんが……。

学園に仇成すと言うならば、この命と引き換えにでも

「クフフフフ。ふむ、いい目だ。それに免じて応えよう。

ん、そうだな。ここに来た理由は……………ぶっちゃけ無い。」

「……………ホ？」

「そこはせめて『トヨ』？』にしておけよ……………。

暇潰し、休暇、戯れ、休暇、気紛れ、茶番、退屈凌ぎ、気晴らし。

要するに、何となくって事だ。」

こ、この英雄破天荒過ぎやしないかのう!？

自分が死んだ者扱いされているという事に、もっと気を使って欲しいのじゃが。

……職員にバレたら、ワシ飛ばされちゃう。

「飛ばされやしないから安心しろ。どっから命令来てるか忘れたのか？」

「心を読まんでくれんかのう？……それで、何が目的じゃ。」

「それはさっき答えたじゃない　って言っても、納得はしないわよねえ。」

「そうね、ここで働かせて頂戴。」

「……つまり、教師として、と言う事で良いのかの？」

「そう言う事だ。ああ、家はエヴァの所に住むから問題ない。」

「な、なぜエヴァンジェリンがおる事を知って

気にするだけ疲れるだけじゃの。」

「フオッフオ、どうせなら警備もして貰いたいのじゃが、如何かの？」

「給料は弾むぞい。」

「やってもいいが、どうせならそうだな……。」

ここには、日常でも権限持つてる指導員つてのが居るんだっ たよな
「？」

「良く知つとるのう……。」

指導員とは、主に分けて校内・区間・広域の三つあり、

校内は読んで字の如く、区間は一つの纏まった初等部、大学の学区
内、

広域は決められた区間内において、学生にそれなりの指導を許され
た教員の事じゃ。

「俺達全員に、全域 麻帆良指導員とでも言えば分かり易いか？

教員・学生・麻帆良内に居る全てにおいて指導する権限を貰いたい。

「

「ヒョ！？そ、それは流石に無理と言うものじゃ。」

学長達ですら学区内が精々じゃしのうち。」

「ならば、善意以外を持って私達に攻撃・言動して来た場合にのみ、

これを適用、でどうじゃ？それ以外は一般人で良い。」

「フオッフオッフオ、それじゃったら問題無いぞい。

加えて、其方から手を出した、そうなる様に煽った場合も適用は無
しじゃぞ?」

「まあ、それならこちらも問題無い、かな。」

事実、エヴァンジェリンがそうじゃからのう。

あれと同じ処遇と言う事で問われても、押しつけてしまえば良いか
らの。

「さて、もっと詳しい話になるが」

しかし、嫌な予感がするのう……。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

あれから数ヶ月経ち、俺達は学区内（今居るのは、原作組のいる学区の2つ隣）

では知らぬ者のいない教師となった。

俺は『デスベナルデイ微笑赤点の織原』とか呼ばれてる社会科教師で、

ノワールは養護教諭（白衣万歳！）で、休み時間は生徒が途絶えないとか。

アリカは外国語教師（赤メガネ着用）で、古めかしい言葉がつぼるらしい。

アリアは初等部3年で、何故か登下校中周りに来た男子共がデストロイされるらしい。

真名は紛争地帯に行つて、修行中。それと、自分の様な子供を助けている。

「ああ、寒い寒い。日本より余裕で寒いんだが。」

そんな事を継続しているのは俺の分身であって、

本体である俺は数ヶ月前からウエールズに滞在中。

何故かと言つと

「愁磨さん、ここに居たのですか。探してしまいました。」

「およ、ネカネちゃん。久しぶりだね。学校はどうしたの？」

「はい。休校日とかが重なって、ちょっとした休みになったので。

ネギから手紙で、しゅ、愁磨さんが来ていると……。ですから、その……。」

もう17なんだから顔を赤らめてモジモジしないでくれ。

抱きしめたいくらい可愛いじゃないか。

ネギは、ちゃんと生まれてきた。(・・・何故か、危険な臭いがするが)

ナギにエヴァの方を頼む代わりに、こつちを引き受けたって訳だ。

「あ、すみません。ネギの様子を見に行かないと……。」

「この間池に自らぶっ込んだばかりだもんな……。」

頑張れ、お姉ちゃん。俺も後で行くよ。」

「はい、ありがとうございます。」

愁磨さんも、何時までも外に居たら風邪を引いてしまいますよ。」

丁寧に辞儀して去って行くネカネちゃんに、手を振り見送る。

……ん？冬、雪の日、ネカネちゃんの帰省……。まさか、
今日なのか？

Side 少年

「ピンチになったらあらわれる〜 どこからともなく〜」

ぼくのお父さんは、えいゆうって言って、すっごくえらい人なんだ
って。

一回も会ったことないけど、きつと、カッコ良くてつよいんだと思う。

村の人たちはみんな、『悪ガキだった』とか『しんでせいせいする』って言ってた。

でも、ぼくはお父さんは

「あ、そうだ。今日はネカネお姉ちゃんがかえってくる日だったんだ！

早く村にかえらないと！！」

ネカネお姉ちゃんはぼくのおじさんの子供で、いとこのお姉ちゃん。

やさしくて、いつもニコニコしてる人。

ずっと村にいる、たびびとの愁磨さんのお話をきいてくるのはなんだろう？

「ハアツ、ハアツ！ネカネお姉ちゃーん！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

ぼくが村にかえったら、村がまっかになってた。

すごく熱くて、パチパチ音がしてて

「ネカネお姉ちゃんーん！？おじいちゃんーん！！」

なんだか良く分からないけれど、みんながあぶないって思ったなら、走らなきゃいけない気がして、燃えている村に入っちゃった。

走って、走って、みんなを見つけたけど

「おじ、さん……？おばさん……？」

みんな灰色になってて、動かなくなってる。

みんなが杖を持ってて、みんな、みんな……。

「ぼくが、ピンチになったらって、言ったから……？」

ぼくが、お父さんが来てくれるって言ったから、言ったから？」

ズズズ、っておっきい何かが出てくるけど、

ぼくは動けなくて。何もできなくて。

「お父、さん……。助けて、お父さん、お父さん……。！」

その何かが、ぼくに腕をふりあげて

ドンッ……！！

目を開けると、誰かが、その手を止めてた。

S i d e o u t

「フン。何様のつもりだ、ガキが……。」

自分のせい自分のせいで。随分主人公精神溢れるじゃないか。

しかし、妙だな……。。

「

μ

それを見ていたネギが逃げ出した。

そう言えば、あいつも妙だ……。

無茶苦茶な威力なのは前からだが、壊すのを楽しむような戦い方を
する様な奴では……。

「ネギ!!」

「六芒の星と五芒の星よ、悪しき靈に封印を!」
ラゲーナ・シクナートーリア『封魔の瓶』!!」

ネギの逃げた先に悪魔が先回りし攻撃を放つが、

スタン爺とコロナおばさんが庇い、隙を付いて悪魔を封印する。

「待て、ネカネちゃんは何処だ……?」

瞬間『円』を使い、村を全て搜索。

ネカネちゃんと傍にいる悪魔を発見し、転移。悪魔を殴りつける。

「【『短縮結合』

アーヴォ・ガジ・エッティアス・メシア
禁忌ヲ犯シタ救世主

【」

「おっとと、あつぶないなあ!!何すんのよ!」

「【…一応聞こうか。お前が指揮官か、『魔王』】」

「そっだよー、カツコイイおにーさん

七代魔王が一人、『色欲のアスモデウス』。

えっちなだけじゃなくて、他にも幾何学とか天文学も得意なんだよ
ー」

人の話を全く無視して、一つの村壊す為に態々魔王まで召喚しやが
って

ツエラメル、後で絶対にシバく。

第30話 一行は麻帆良に入るようです（後書き）

と言う訳で30話でした！

作「奇しくもキリが良い所で、何とか麻帆良入りしました！！

原作6年前ですが！そして謎の魔王登場！！

エヴァが残念な子になっているのは、今回だけです。…多分。」

エヴァ「なぜ私が小学生なんだ！！！」

愁「だってエヴァ、小学校にも行つて無かつたし……。

あと、可愛い可愛いエヴァに制服着て欲しかつたし。」

エヴァ「どっちが本音でも嬉しい自分が憎い！！！」

愁「今使っている認識阻害は、『俺』と『英雄愁磨』が繋がらない
つて言う物だ。ジジイも気付かないくらいの代物だが、

俺が使っていない状態で名乗つた『家族』には効果が無い。」

ノワ「ちなみに、私達にも同様のものが掛かっているわ。」

愁「そして無駄に新キャラを……。他の魔王まで出す気か？」

作「今のは考えて無い。」

そして最初から全力全壊の愁磨。次回、魔王に明日はあるのか！
？」

ノワ「それでは、また次回お会いしましょう。」

作愁ノワ「アーリーヴェデルチ！！！！」

第31話 魔人は少しフライングするようです(前書き)

こんばんは、H a t e . rです。

作「次回こそ、次回こそ!!」

と言う訳で、早速恒例のをやってしましましょう!!」

愁「なんなんだよ...?えーっと。

ながもく様、h a k i様、春夏秋冬様、ルービツク様。

感想ありがとうございます!!」

ノワ「h a k i様、誤字報告ありがとうございます。」

作「これからもバンバンください!それでは!!」

作愁ノワ「」どうぞ!!」

第31話 魔人は少しフライングするようです

Side 愁磨

「え、あの、愁磨、さん……？その姿は一体……？」

「【そこら辺は後で説明するから。俺から絶対に離れないで。】」

「は、ハイ！」

と、俺の背中を守る様に杖を構えるネカネちゃん。

そして、それを見て笑っている悪魔共。

まあ、お笑いだろつな。プルプル震えてるんだから。

「【ネカネちゃん、良いから。俺に任せて。】」

「あ……う、ふえ……。」

頭を撫でてあげると、ギョウウツ、と俺の服の握るネカネちゃん。

(今は黒い救世主服の方になっている)

……気丈に振る舞っていても、やっぱり女の子だ。

普段ネギ（9割9分）とアーニヤちゃんの世話してるし、学校でも村でも頼られているから。

誰かに頼るなんて事出来なかったんだろうな。

「【さて、悪魔共並びに魔王殿。誰からでも掛かって来いよ。

順番なんて気にすんな。 どうせ、誰も生かして帰れないんだからよ。】

「ゲギヤギヤギヤギヤ！吼エルナ、人間！！貴様ノヨウナ小サ」

「【誰がマキシマムインフィニット豆粒ドチビだゴルアアア！！！】

」

ドグン！と腹に手刀を叩き込み、内臓を引きずり出し、擦じ上げて千切る。

「……真名に背を越されてから、某錬金術師並みに敏感になったのは内緒だ。」

「うっわ、エグっ！？ボクでもそこまでやんないよー！」

「しゅ、愁磨さん…？」

「【ネカネちゃんは気にしないで隠れててくれ。】」

ネカネちゃんも渡したロングコートに隠れている為、状況が掴めていないのだ。

「クツッ！アスモデウス様！！ヤッチマツテクダサイ！」

「えっ！？しよ、しょうがないなあ。

行つくよ、おにーさん！！フォイエ・タウバー『魔炎』あー！！！！」

気の抜ける様な声と共に放たれた炎は、大気すら焼きながら迫る。

………けど。

「【ぬるい！蠅が止まるぞ！！】」

ザウン！と蹴りの衝撃波のみで相殺する。

この程度だったら、ナギの『燃える天空』の方が熱いし速い！

「む、生意気！！知らないからね！！

フォイエ・タウバー『魔炎』！！リミットブレイク『限界値突破』うー！！！！」

ガオオオオオオオオオオ！！！！

と、今度の炎は傍に居た悪魔を熱波だけで溶かし、

地面すら蒸発させながら凄まじい速さで向かって来る、それを

「【俺のこの手が真つ赤に燃える！勝利を掴めと、轟き叫ぶ！

ばああく熱！ゴツドオ、フィンガアアーツ！】」

「え、ええええええええ！？そんな！ボクの『フォイエ・タワー魔炎』を素手で！？」

「【……ヒートオ、エンドオツ！！】」

『フォイエ・タワー魔炎』とやらを握り潰すと、大爆発が起こり、

その煙に乗じて、アスモデウスに殴りかかる。

「【男女平等オー……！！………ビンタ……！！】」

「あつっ！……！！」

ベシン、とそれなりに痛そうな音がして、アスモデウスが倒れる。

……ノワール達がやられたならいざ知らず、

村燃やされただけじゃそんなにキレイない！

真つ黒……？ツエラメルも主なのは黒だが、

多数の人間の魂が入っているせいで虹の様な魔力に見える筈だ。

（魔族・悪魔は魔力を感じるのではなく、流れを見るのだ。）

「命令は、何だか、よく分からないけど……。」

『ネギ・スプリングフィールドに目的を与える』為に、この村を壊
せて……。」

ネギに……？修正力……ではない事は確か。そして、ツエラメ
ルでもないか。

魔王召喚なんて出来るのはあいつか俺……あと、「トド・オブ・ザ・ライフメイカー」
造物主の掟』
を持った

フェイトとテュナミスくらいだから疑ったが、今思えば、目的が無
い。

原作通りに行けば、ネギは蟻程度の障害になり得る。

あいつがそんな不確定要素を出す訳が無いんだ。

……後で確認はする必要あるが、今はこつちだ。

「【……まあ、駄魔王でももう一回召喚されても邪魔なだけだ。」

お前には『契約』^{ギアス}してもらおう。二度と地獄から出られない様にな。」

フォン！と地面に魔法陣が敷かれるのを確認し、魔力を練る。

「え……！？あ、ぐうう！！」

「【む、流石は魔王か……。この魔力量でも抵抗出来るのか。】」

仕方ない。

ネカネちゃんが見ていないのを確認し、アスモデウスの頬に手を添え

「ほえ！？／＼あの、ちょっと……！？ボク、その、はじ……むー
ー！！！」

無理矢理魔力を注ぎ込み続ける。

仮契約でもキスをしていたが、効果付与には、粘液接触が一番安定するのだ。

ましてや魔王　と真実で言い訳しておく。

バオウ！！！と風が吹き、契約が終了した事を知らせる。

「【…ツフ、これでお前は俺の奴隷も同然だ。」

よって、俺以外は触れないから。安心して地獄で御留守番してろ。

『送還』』」

「ま
」

なんだか可哀相な魔王を地獄に帰すと、遠く丘を見上げる。

ナギは杖を渡すと、空に舞い上がり消えてしまう。

ネギは泣き叫び、そして、何かを決意したように顔を上げる。

…
…
…

「ツエラメルうっうっうっうっうっうっ！！！！」

「おや、シユウマ。どうしたんだい？」

「フェイト！！あの野郎何処行った！？」

「それが、僕も知らないんだよ。此処に居るのは確かなんだけれど

ね。

それと、野郎では無く彼女だよ。」

そう、ツエラメルは生前女だったんだつたな。

って、そんな事はどうでも良いんだよ!!

「フェイトでも知らないのか……。と言う事はデュナミスとゼクトの方が？」

「二人も知らないそうだよ。」

……ああ、言伝は預かってるよ。『あの村に関しては私では無い』
だそうだよ。多分、元老院の方だね。」

「ツチ、クルトじゃまだ経験が足りないからな。仕方ないか。」

異分子が必要だから残しては居たが……。消しておくか？

……。いや、人死は出なかったし……。予定通りに行くか。

「分かった。あいつ出て来たら教えてくれ。」

「ああ、分かっているよ。君はまだ教師ごっこを？」

「「じつこと言えばそうだが、そうでないと言えばそうでない。」

「…まあ、深くは聞かないさ。頑張つて。」

うーん、結局無駄足か……。。

よし、テオをモフモフしてから帰るか。

…

…

…

1ヵ月後、ネギがネカネちゃん・アーニヤちゃんと

一緒にメルディアナへ向かったのを確認し、村の建物を直し、石化を解く。

「これで全員つ、と！みんな、無事か？」

「おお、シユウマ！お前は無事じゃったのか！と言うか、ワシらは確か…。」

「無事だったよ。ついでに言うなら、解いたの俺だし。」

「なんじゃと！？悪魔の石化をどうやって解いたのじゃ！？」

一般人が解けばそりゃ疑問か。・・・ネギ対策が仇になったかな、こりゃ。

「あー……、改めまして。愁磨・P・S・織原だ、よろしく。」

学園の時と同様に認識障害を解いて挨拶をすると、

スタン爺始め皆が驚いた顔をするが、それは直ぐに呆れ顔だったりに変わる。

「ナギの知り合いじゃから普通ではないと思っておったがの……。」

「それ以前に、エルザさんが生きていたからねえ。」

「……驚かれないのは新鮮だな。もっとう、なんかないのか？」

「では聞くがのう。お前が居たのに、何故村がこの様な事態になったのじゃ？」

それを言われると痛いが……………。

ただ、一つだけ。

「英雄も万能じゃねーですよ。ナギを見れば分かり易いと思うけど。」

「

「そうだねえ……。なんか大変みたいだけれど、

息子ほっぽってどっか行っちまうんだからねえ。」

「……俺でも位置が分からないから、

ナギとエルザさんを囲っているのは間違いなくツエラメルなんだよなあ。」

二人にも考えあつての事だろうし、野さ……ネギには悪いけど、

しばらく様子を見させて貰おうか。」

「じゃ、元気でな。ああ、村には結界張っておくから、

また襲われたくないんだっいたら出ないでくれ。」

認識阻害付きの、だけどな。」

「む、シユウマはどうするんじゃ?」

「俺は俺で、やる事があるんだ。」

S i d e o u t

s u b S i d e 地獄

「シュウマ、シュウマ……か。フッフツ。」

「アスモデウス、ご機嫌だな。」

「あ、レヴィ！あのねあのね、ボク面白い人間見つけたんだ！！」

「……ボクとか言うのやめろ。お前とて男なのだ。」

だから馬鹿にされるのだぞ。」

「そんな事どうでも良いもん！ボクね、契約して貰ったんだ！！」

「……………え？」

「だからボクも、あの人……ううん、シュウマさんと結婚すれば、

地獄の王になれるんだ！！」

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

「えー、まずは生徒指導の」

体育館から、教師の声が聞こえてくる。

あれから6年間、私は兄さまの言う通りキッチンと小学校に通った。
楽しくない訳では無かったが、それでも、兄さまと姉さまと居た方
が。。。。

いや、これは甘えか。……本当は、かなり甘えたいが。

風の噂では、第八学区に兄さまが来ているらしいが

居たとしても、自分からは会いに行かない。

数十年も会えなかったのだから一秒でも早く会いたいが、何やら

「大体！魔法世界で何やら楽しそうにしているのが気に食わん！！」

「マスター、なんの事でしょうか？」

「……別に、なんでも無い。」

私に膝枕していた緑髪の人物……いや、ロボットに慥然と答える。

名は茶々丸。超鈴音とか言う奇妙な奴が、数年前寄越して来た。

科学と魔法の融合体のガイノイドとか何とか、計画が何とか言っていたが、興味は無い。

「えー、続いて、新任の先生方をご紹介します。」

「チッ、ここはづるさくて寝て居られん。帰るぞ茶々丸。」

「Yes, master.」

去年からなんの陰謀か分からんが、引き続きアホなクラスになって
しまい、

二ヶ月も我慢したのだ。兄さまには悪いが、少しはサボらんと気力
が持たん。

早く、会いたいな……。

Side out

Side 近右衛門

「初めまして、愁磨・P・S・織原と言います。昨年度までは第
」

数年前から麻帆良に来ておった、今は壇上で話している英雄兼死人・犯罪者の彼らは、

先に言った通り、普通に教師をしておった。

何故かここでは無く第八の方に行っておったが・・・聞いても無駄じゃ。

「短いですが、以上で挨拶とさせていただきます。」

彼が礼をすると、男女関係なく黄色い声が飛び交う。男は野太いがの。

ノワール殿の時も同様じゃった・・・。

当然と言えば当然じゃが、一般・魔法教員問わず視線が鋭い。

そんなに見つめられると、胃に穴が開いてしまっんじゃがのう？

「以上で親任式を終了します。生徒の皆さんは」

願わくば平穏であって欲しいのじゃが・・・。

来年の為にも、そうは言っておられん。英雄の子が三人も揃っのじやからのう。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「愁磨さあああ————ん!!!!」

式が終わり職員室に向かっていると、タカミチが走って来た。

・・・ああ、忘れてた。

そう言えばこいつってここで教師やってたんだった。

「愁磨さん、どうしてここに!?!それに、何で生きて……」。

「なんだ？俺が生きてちゃ不満なのか？」

「だって、あの時は助からないって言うてたじゃないですか！！」

「あの時またな、って言っただろ？やっぱり信じてなかったのか。」

「信じてましたよ！！でも何年も連絡取れないし、

ナギも死んでしまうし、それで

「あの、申し訳ありません。高畑先生は、愁磨さんと知り合なので
すか？」

俺達が話していると、しずなさんが声を掛けてくる

って、先生達も生徒達も見てんじゃねえか。

・・・廊下で生きた死んだとか言うてたらそりゃ目立つよな！。

「ああ、しずな先生。愁磨さんとは、なんて言うて良いのか……。」

「タカミチとはアレですよ。師弟と言うか仲間と言うか。」

「ウフフフ…切っても切れない仲、と言う事ですわね。」

「あー、まあ、それでいいです。」

相変わらず大人の対応をしてくれるから助かる。

・・・ある所を突くと修羅になるから困るが。

「それで、しずな先生と愁磨さんは、どう言った関係で？」

と、タカミチが何やら引き攣った顔で聞いてくる。

「どっ、って言われても。」

「一緒に食事する仲、でしょうか？」

「ああ、それが妥当ですか……って、どうしたタカミチ。」

なぜか石像になってるんだが。

あれ？こいつもしかしてしずなさんに惚れて？しかも勘違い？

いいか、面倒だし。

「しずなさん、申し訳ないけど教室まで案内して貰えます？」

担任タカミチなんですけど、この状態ですし。」

「そう、ですわね。」

高畑先生には悪いですけど、予鈴も鳴っていますし行きましょ。

「と言う事で、俺達が向かう先は・・・1-A。」

「ノワールさん達はいかなさったんですか？」

「ノワールは挨拶が終わってすぐに保健室に。」

「アリカは所用で少々。真名は教室ですし、アリアはほら、ここに。」

そう言って、俺のスーツの裾を掴んでいるアリアの、

少し高くなった頭を撫でる。

・・・擬似的に、ではなく、普通に体を成長させているのだ。

生前が、あれだし。親心、と言う程崇高なモノでもないけど。

でも、大きくなったアリアは少しだけ感情豊かになったし、

以前より喋る様になった。・・・嬉しい反面、何故か少し寂しいけど。

と、なぜかしずなさんは、アリアを見つけると驚いた顔をする。

「タカミチは本当に教師をやっていたのか……?」

「……役立たず? ずぼら?」

「え、ええ。このクラスは元気が良いもので……。」

要するに御し切れなかった訳ですね、ハイハイ……。

「まあ、適当に行きますかね。」

始業ベルが鳴り終わると同時に、俺は教室の扉を開けた。

第31話 魔人は少しフライングするようです(後書き)

つと言う訳で31話でした!!

作「次話で、次話でようやく入れる!!ので、お待ちください!!」
愁「エヴァあああああ!!エヴァアアアアアアアアアア!!
あああ、エヴァアアアアアアアアアアアアああああ!!!!

作ノワ「うるさい。」

ノワ「アスモちゃんが本格的に!?そしてしずなとネカネちゃんま
で:。」

しず「私はそんな気は:無いと言えば、多少嘘になってしまっけ
れど。」

ネカ「べ、別に、私も無いと言ったら嘘になるくらいで……。」
Aria「……全力、全壊……?」

愁「次回、血の雨が降りそうなんだが?」

作「そんな事無いつてww次回、愁磨と原作、

タカミチ、愛の決闘!?エヴァvsアリア!?(未定)」

愁「最後おおおお!!!!」

ノワ「では、また次回お会いしましょう。」

全員「『『アリーヴェデルチ!!!!』』」

第32話 吸血鬼と魔人達は再会するようです(前書き)

こんにちわ、H a t e . r です。

作「早速恒例のを。

紅様、木下文@木下衣玖様、ながもく様、剣の舞姫様、春夏秋冬様、龍賀様、謎様、

h a k i様、ルービツク様！感想ありがとうございます！！」
ノワ「h a k i様、いつも誤字報告ありがとうございます。」

愁「さて、今回は噂のエヴァとの再会&原作フェイズ！

……欠片だが。」

作「ゲフンゲフン。それでは！」

作愁ノワ「……どうぞ……！！」

第32話 吸血鬼と魔人達は再会するようです

Side 千鶴

「ウシシシシシ！」「」

美空さん、風香さん、史伽さんが悪戯っ子のように笑っているわ。

・・・事実、その通りだけれど。

今日の集会で紹介された先生が副担任になる、って朝倉さんが言っていたから、

それに触発されたのでしょうかね。

担任が高畑先生になった初日、今日と同じ仕掛けをして

全部防がれたのが悔しかったのかしら？

ガラガラガラッ！

と扉が開いて、その人が入ってきた。

遠くても分かった、正に絶世の美女と言える顔。

ポニーテールにした美しい白髪と、その間から窺える同色の瞳。

スーツとYシャツは逆に真っ黒で、ネクタイが白。

手足もスラツと長くて、見ているだけで引き込まれ

ガボン！！

と、多少惚けていた所に急に大きな音がしたから、

驚いて体が跳ねてしまったわ。（皆も同じ様だったけれど）

音の方向　即ち、入ってきた先生を見ると、バケツを頭から被っていた。

「……………冷たい。」

……容姿とは裏腹に、意外と普通の反応を返してくれた。

面白そう……いえ、不思議な先生ね。

S i d e o u t

S i d e 刹那

初め見た時は見間違えかと思ったけど、あんな綺麗な人

・・・もとい、カツコイイ人を、見間違える訳がない。

数年前、このちゃんが川に落ちそうになった時、何処からともなく表れて助けてくれた。

・・・慌てて落ちた私も助けてもらってしまったけれど。

私がこの事を悔やんでこのちゃんから離れようとしていた時も、

どこからともなく来て、励まして、叱ってくれた。

長と一緒に剣の稽古もつけてくれて・・・結局、全く勝てなかった人。

三言ほど言って、突然居なくなってしまうたけれど。

だからこそ、私の目標で、目的で・・・。

『言わなくても、伝わる事も有るかも知れない。でも』

「大切な事なら、言わなきゃ伝わらない事もあるから、か……。」

その人は今、頭からバケツを被ってビシヨビシヨだ。

しかし、なぜか黒板消しは避け、足元にあつた紐は切り、吸盤矢を全て避けている。

「皆さん初めまして、フテリユゼタスパール愁磨・P・S・織原と言います。」

剣の達人の長をも指一つで圧倒して、鬼を干から薙ぎ払えるくせに、虫が嫌いだったり、キノコが苦手だったり、人間的な所が見えて。

届きそうだと誤解してしまうから

「だから、諦められないんですよ……。」

S i d e o u t

S i d e 愁磨

水も滴る とか巫山戯た事考えた数十秒前の俺をポコポコにしてやりたい。

寒い。冷たい。濡れて気持ち悪い。

「愁磨・P・S・織原と言います。
フテリユゼタスパール

科目は時間割りの通り、社会科。

頑張ってるおバカさんは助けませんが、不真面目な人は狗の餌になって貰いますので。

……授業は、真面目に受けてくださいね？」

ハイイ……と返事してくれるが、概ね呆気に取られている。

掴みを間違えた様だな。……まあ、いいか。

「コホン。と言っても、私語を慎めとか勉強だけしろなんて言いませんので。

あくまで授業は楽しく、がモットーですので、よろしく願いします。」

「ちよおつと待った、先生!!」

「ここは報道部である朝倉和美に任せて頂きたい!!」

「あー、質問がまとまればそれで良いよ。じゃあ、15分以内に皆の意見を纏めてね。」

「よい、スタート!」

「え、ちよ、いきなり!? ええい、先ずはゆるなから!」

10分後。

「よつし、じゃあ行くよ先生!!」

「15分どころか10分でまとめ終わったよ。ふむ、少々評価を改めないとな。」

「その1! 性別・年齢・身長・体重・スリーサイズを!!」

「見ての通り男、現在23歳、174cm、69kg、えーと……
74・59・77だね」

「ま、まさかスリーサイズの為に『答えを出す者』使うとは……。」

けれど・・・

婚期云々が迫っているから急いでもいるけれど・・・！」

と、俺の回答に教室がどよめき、しずなさんは何やら思案顔だ。

ちなみに、ノワール達を抜いたのはこの教室に居ないからだ。

「むむむ、とs……お姉さんスキーかと思いきや！！

そして難攻不落しずな先生まで！！これは大物だね！！

アリアさんは如何ですか！？百合属性をお持ちですかにや！？」

マイクをアリアに向けて楽しそうに笑う朝倉。

情操教育上悪いから百合とかやめなさい。・・・俺とアルの話聴いてるから無駄か。

「・・・百合・・・？お花は好き……。あと、ここで好きなのは、
パパと真名だけ。」

「おおっとおおおお！？」

まさかの謎の褐色スナイパー龍宮を指名だあああああ！！！」

なら

「ふむ、そう言う事なら、お祭り騒ぎは一つにまとめた方が良いでしょう？」

「「「「「「え？」「」「」「」」」」」」

疑問まで完璧に八モるのか、このクラス。どんだけ仲良いんだよ。

と言う疑問はさておき、明石にとある質問をする。

「明石、今日は予定あるか？」

「ひょえ?! い、いや、無いですけど……。」

「よし。全員聞け!! 今夜は俺達の歓迎会&明石の誕生日会だ!!」
「!」

そう、さっき教師用の生徒簿を見て発見したのだ。

今日は6月1日、つまりは明石の誕生日。

「ええええ?! い、いいよそう言うのは!! は、恥ずかしいじゃん
! / / / /」

パパが出て行った後も騒がしい人達を素通りして、真名の所に行く。

「……真名、エヴァって、どれ？」

「ん？エヴァンジェリンなら、今日はサボリのようだ。

ここ毎日はキッチンと来ていたからね。このクラスに耐えるのも辛いんだよ。」

パパの言い付けを守ってないのは許せない……けど、

確かに、疲れそう……。

それを小学校から守っていたのだから……少しは、プラス。

「愁磨さんの事を大事に思っているのは分かるけれど。

だったら、エヴァンジェリンも信用して良いんじゃないかな？」

「……一番、古いのは……分かってる……。」

ママの次に、パパと一番長い付き合い。

・・・私よりも、ずっと、ずっと・・・。だから、分からない。

なんで、パパ達と離れていられるんだろう？

S i d e o u t

「で、なんの用だ、ジジイ。」

現在、21時。歓迎会&誕生会がお開きになった後、

ジジイから呼ばれた俺は、エヴァの所に行く前に一瞬だけ寄ることにした。

「フォッフオッフオ、大した用事では「じゃ、帰るわ。」

フォー!?だ、大事な事じゃから待ってくれんかのう!?」

「で?25文字で終われ、制限時間3秒なよーいスタート。」

「魔法先生達に紹介させてくれんか!？」

24文字・・・やるな。

「死んだ英雄兼犯罪者をご披露させてどうするんだ？」

それに今となつちゃ、俺は『白帝』じゃなく『アーカード』だ。お前に旨みはないさ。」

「む……。」

「安心しろ、今まで通り警備員はやってやるよ。んじゃ。」

言い残し、学園長室から出ていった。

ああ、待っててくれエヴァ!今すぐ行くからな!!

Subside 茶々丸

「マスター、新任の歓迎会に行かなくて宜しかったのですか?」

「フン、どうせ下らん教師だ。行く必要もなかるう。」

今日はマスターと一緒にいましたから、私も情報がありません。

まあ、明日になれば分かることですが・・・

コンコン

と、家のドアが叩かれました。

来客とは珍しいですね。ましてや、深夜　　と言つにはまだ早いようです。

マスターが学園側と話をつけていますから、此処には超鈴音くらいしか来ません。

と言つか、魔法先生達は来られませんから。

コンコンコン

「茶々丸、夜分に訪ねて来る不粋者をさっさと追い返せ。」

ああ、いけません。取り敢えず出ないと。

「兄さまあああああああああ!!」

「お、おー、よしよし。」

鬼気迫る顔で特攻してきたかと思っただら今度は泣き出したエヴァを抱き締めながら、これでもかと撫でる。

・・・ああ、懐かしい感触だなあ・・・。

成長しない筈の体だが、幾分か柔くなっている気もする。

「……………遅い。何をしていた。」

「何って……………戦ったり、戦ったり……………後は歓迎会？」

「何だと!?!と言う事は、新しい教師と言うのは兄さまの事か!!」

「そうだよ。って、何で今日に限って居ないんだよ。」

・・・居たら居ただけ抱き締めてたが。

「だって、小学校の頃からあの訳の分からん連中と付き合ってたな。」

ちよつと疲れたから、今日くらいならいいかなと思っただんだ……。

それなのに、兄さま達は今日来るし……。」

うううう、と唸りながらまた泣き出しそうなエヴァを抱き上げて、家に向かう。

「小学校、楽しかったか？」

「……楽しくない訳ではない事もあったが……」

でも、兄さまと姉さまといた方が数億倍楽しい。」

「フフフ……そっか。」

尊大だけど、ちよつと昔の甘えた感じに戻っているエヴァの返答に、思わず微笑ましい感じがして笑ってしまう。

ドアの前についた俺はふと立ち止まり、エヴァを見下ろす。

「エヴァ、言っていない事あったな。」

「ふ……………フン！なんだ！？今更謝られても」

「ただいま、エヴァ。」

ふえ？と可愛い声上げたエヴァは少し呆気にとられ、

…………泣きそつにながらも、笑顔で言ってくれた。

「おかえり、兄さま。…………もう、離れんからなあ…………。」

結局、たつぷり5分。軒先でエヴァを抱き締めている事になった。

S i d e o u t

……………

……………

……………

時は少々流れ、ウェールズの本奥。

…

…

…

Side ????

「卒業証書授与！ネギ・スプリングフィールド！」

「ハイ！」

僕は一杯勉強して、メルディアナ魔法学校を首席で卒業出来た。

でも、全然足りないんだ。

あの時助けに来てくれた父さんみたいに、僕も『マギステル・マギ立派な魔法使い』
になって、

困ってる人を助けないといけないんだ！

「ネギー、あんたはなんて書いてあったー？」

向こうから走ってくるのは、幼馴染のアーニヤだ。

第32話 吸血鬼と魔人達は再会するようです(後書き)

つと言う訳で32話でした!!

作「原作に……一応入った!!」

「ここが区切り良かったんです!……ええ、言い訳です。」

愁「とは言え、これでエヴァと一緒に居られる訳だな!」

エヴァ「出番が無くて辛かった、とだけは言わせて貰おうか。」

ノワ「で、あのエピソードは……?」

作「ち、近々番外編で!!」

「つと言う訳で、次回から本格的に原作開始。長かった……。」

愁「ここからの方が長いつて言う事を忘れるなよ……?」

作「百も承知!ここまでの設定についてですが、

とあるキャラの事情により、次回に回します!

では、次回!またお会いしましょう!!」

作愁ノワエヴァ『『アリーヴェデルチ!!!!!!』』

第33話 主人公薬味は、主人公魔人と遭うようです(前書き)

こんにちは、H a t e . r です！

作「今回、すつごく難産でした……………orz」

愁「原作に入った途端これとか、先が思いやられるな。

まあ、良いか……。では、いつものをノワールから。」

ノワ「ではー。R a i N様、ながもく様、木下文@木下衣玖様、龍賀様、

omegazer様、剣の舞姫様、竜華零様、春夏秋冬様、もみじ様！

感想頂き、感謝します。」

作「もみじ様、頂いた指摘は気を付けます！

フォンドボー様から頂いた意見ですが、私の小説はこれがデフォですので、変える気は全くありません。ご容赦を。」

愁「つと言つ訳で、遂に本格的に原作だ！！進捗は、おして知るべし！

それでは！」

作愁ノワ「「「どうぞー！！」「」「」

第33話 主人公薬味は、主人公魔人と遭うようです

Side 木乃香

「もー、明日菜のせいで遅刻やないのー！」

「ゴメンって言ってるじゃなーい！！！」

愁磨はんが副担任になってから10ヶ月。

勉強とか遅刻とか、愁磨はんがキビシク注意しとったお陰で、

明日菜の寝坊も少しは良くなっとなったのに。

「全部おじーちゃんのせいやわー。」

明日菜にも新しいせんせのお迎えとか頼むからー。 氣い抜けたんや
る？」

「うぐぐ、確かに愁磨先生のお小言聞かなくて済むと思ったけど…
…。」

愁磨さんなんや有名人みたいで、隣の区の人らがよく喋っとなった。

厳しくてよう叱るんやけど、同年代っぽくて嫌いになれないんやて。

って、この占い変やね？

今日出会う人が運命の人な訳やから、好きな人の名前言っても今日会う人と

……まーいいやろ 私は愁磨はん一途やし。

明日菜は明日菜で頑張ってもらお

フワッ

と風が吹いた気がして、気も無しにそこを見る。

明日菜の隣に来たそれは、小学生くらいの子供で

「あー、あなた、失恋の相が出てますよ。」

無遠慮に、何も考えてない顔で、言った。

ある意味、劇的な出会い……。

……あ、あははは……これが、明日菜の運命の人なんやろか？

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「で？どう言いつつもりだ、ジジイ。

場合によっちゃ、秘境部族みたいにわっかで赤ん坊の頃から矯正で
もしてない限り

そんな事になる筈無い、人体の神秘的に伸びたこの後頭部の骨、切
り取るぞ。」

「ヒョ！？勘弁してくれんかのう？」

残念ながらあの後頭部に脳味噌が入っている訳では無かったが、

逆に不思議な後頭部をペチペチやりながら脅h・・・もとい詰問す
る。

「タカミチがAAAの方で忙しいのも分かる。

普通の人間じゃ、あのクラスを纏められんのも分かる。だがしかし
！！！！」

「何故ナギと義姉君の息子を担任にするのじゃ？全く意味が分からぬ。」

アリカに台詞とられた！？

そうそう、アリカは外国語の教師になりました。

まあ主に3年担当だから、ネギと接触は無いと思うが。

「普通こういう場合って、シユウが担任になるものじゃないのかしら？」

確かに、担任とかに興味は無いしどうでも良いんだが。

新田先生を筆頭とした一般教師陣の反対と、刀子や瀬瑠彦・明石と言った

良識ある魔法先生からも疑問の声が挙がっているのだ。

「ふむ……。なら、条件を付けてやろう。

もしこれをネギが守れていれば、先生達は全員俺が説得しよう。責任も俺が取る。」

「フオツ、これはまた大きく出たのう……。どんな無理難題なのかのう？」

「クフフフフ……安心しろ。凄まじく簡単で、初歩の初歩の事だよ」

Side out

Side 刹那

「あ、アリア殿。愁磨先生はどうしたのですか？」

「……新しい、先生のこと……妖怪退治……」

「そ、そうですね……ありがとう。」

「……ん。あと、アリアでいって……。けーごもいらな
い。」

これでも、ここ一年でアリアど……アリアとはかなり打ち解けたのだ。

……最初は酷いものだった。

このちゃんと話をして、愁磨さんと……まあ、頑張ろうとなった

のだが、

世間話や修業の話をしている時は居ないのに、そういう話に持って行くと

気配無く現れ、愁磨さんの背中に抱きついてこちらを睨んで来るのだった。

結局、口下手な私は2、3・・・200、300と手合わせイジメをして、漸くここまで扱ぎ付けた。

ハア、私もしずなさんや刀子さんの様に、大人の魅力でもあれば別だったのだろうか・・・。

ちなみに、何故かこのちゃんとは、犬猿の仲となっている。本当に珍しい。

と言ってもそこに関してだけであって、仲は良いのだが。

ガラガラガラ！ パシパシパシトン。

「ハイハイ、予鈴鳴り終わるまでに席に着かないと大変だぞー！」

┌

と、いつもの様に罨を受け止め、決まり文句を言いながら愁磨さんが教室に来た。

・・・当然、大変になるのは私達の方で。

一度神楽坂さんが遅刻して来た時に出された宿題の量を見て、

『朝は席に座って喋るべし』が暗黙のスローガンになった事は内緒だ。

「えー、学期末が迫る中と言う訳で、今日は新しい副担任の先生を紹介する。」

最早担任となっている愁磨さんではあるが、彼もまた副担任。

高畑先生はしょっちゅう出張で居なくなる為、仕方無いのだが。

「しずな先生、どうぞー。」

そう言っつて、しずな先生に続いて入ってきたのは

「では、自己紹介してくれ。」

「は、ハイ！は、初めまして。今日から副担任をする事になりました、

ネギ・スプリングフィールドと言います！よろしく願います！
！」

「実は、教師達が豪く反対してしまいましたの。

強行しても問題があったので、条件付きで認めるといった話になったのですじゃ。」

『……ネギ君はその条件を満たせなかったのですね。ならば仕方ありません。』

では、指示は追って伝えますので。では。』

……切れてしもうた。

いつもなら一時間は小言があるモノじゃが……。一体、何なのじゃ？

S i d e o u t

s u b S i d e 元老院議員

「……………これで満足かね、ナギ・スプリングフィールド。」

「ああ、上出来だおっさん。

しっかし　ハハハハハ！ネギは担任にやなれなかったか！！

つま、愁磨が居るなら当然か！！」

訳が分からない。死んだ英雄が生きていたり、処刑された白帝が生きていたり……！

う、上は一体、なにをしているんだ！？

「っと、記憶は消しておかねえとな。」

「私がやるわ。ナギは細かい魔法が下手だから、記憶全部消しちゃうでしよう？」

「んっだよ、俺だつて練習すりゃ……。」

「ハイハイ、今まで幾ら練習したか思い出してみましようか。」
（ブォォン）

『災厄の女王』の魔法陣が展開され、

Side out

「ま、副担任でも変わんねえか。俺達の……俺の替わりになれば良いからな。」

Side 真名

Bannon! !

「兄さま!!あれは幾らなんでも酷過ぎるだろう!!!!」

「……ああ、俺も非常に悔んでいる。どうせなら辞めさせる程度はしておくべきだった。」

「あ、あははは……。」

刹那からは、乾いた声しか出ない。

まあ、私は既にそれすら出なくなっている。……それもそうだろう。

授業中に魔力を暴走させて神楽坂の服を吹き飛ばすわ、

宮崎を助けるためとは言え神楽坂に魔法がばれた揚句、もう一回服を吹き飛ばすわ、

歓迎会の時大勢の前で読心魔法を使うわ、

パニックに陥って大勢の記憶を消し飛ばそうとするわ……。

最後のなんかは、愁磨さんが無効化^{リスト}していなければ今頃、

20人以上の廃人が生まれていた事だろうね……。

「……ああ、頭が痛い……。」「」「」「」

「……パパの邪魔……なら、『シエンフイ神虎』のえさ？」

「いや、まだだ……。明日菜は馬鹿でお人好しだから問題は無い。

何だかんだで秘密を守ってくれる……。それよりも、宮崎とその周辺だ。」

……まあ、だろうね。

歓迎会の様子じゃ、少年を気になって……。もう惚れているも同然みたいだしね。

「確かに、図書館島組は聊か面倒なのは確かだ。

宮崎・綾瀬は知識だけならば一人前。早乙女は観察力・洞察力がずば抜けている。」

「加えて、報道部の朝倉と仲良しじゃからな……。

ネギがああの調子のままな以上、情報収集・構築は時間の問題だ。」

「鬱陶しいわねえ……。……。

ナギとエルザの子供じゃなかったら、今すぐ八つ裂きにでもしてあげるのに。

って、あ、そっか!」

「どうしたのじゃ、ノワール。」

ノワールさんが、さも良い事を思いついたという表情を見せ

「危険そうな子達、皆八つ裂きに」

「「ダメに決まってるだろ(るじゃろう)(だろうが)!!!!」」

「なによ、冗談よー……。」

「……私は、良いとおm「アリア、お願いだ……。」……了解、真名。」

この家族^賊、ツツコミとポケの入れ替わりが激し過ぎて疲れる……。

刹那がもう少し慣れてくれれば、鋭いのが入るんだがな……。

「ハア………明日は何をしてくれるんだろうな?」

……今から滅入ってしまうからやめてくれ……。

S i d e o u t

S i d e 木乃香

「もー！あなたのせいでバイトには遅刻するし学校には遅刻しそうになるし！」

あんななんか泊めるんじゃないわー！」

「えうつ！？そ、それは僕のせいじゃないですー！」

もー、仲悪いなー。って言っても、時々コソコソ話ししとるから、ホンマに仲悪い訳やないんやろうけど。

「いいって！！（バシン！）それに、勇気が本当の魔法って言ったのはあなたでしょ？」

自分の力でなんとかするわよ。ホラ、あなたあっちでしょ。じゃねー！」

「あ、はい！頑張ってください！！」

目をなんや輝かせて、ネギ君は教員玄関の方に行った。

「なあなあ、なんのはなし？」

「こ、木乃香には関係ないわよ！ホラ、走らないと間に合わないわよ……」

「ホンマや……！愁磨はんにとやされてまう……！」

折角頑張って褒めてもらってたのに、こんな事で評価は下げられへん！

ダダダダダダダダダダ！！ ガラガラガラ！

「ッセ……ッフ……！」

「あら、明日菜さん、木乃香さん。二人揃ってギリギリとは珍しいですね。」

「おはよーさん、いいんちよー。愁磨は……せんせは？」

「ええ、なんでも急な転校生が居るとかで遅れているそうですわ。」

「へえ、って事は一緒のクラスなんだ。ネギもそうだけど、

こんな時期に転校してくるなんて珍しいわよねー。」

複雑な家庭事情、とか言う奴なんやるか？

・・・ウチ、人の事言えるような普通の家に住んで無いんやけどな。

「…………お前ら、早く座れ…………。」

「…………ひゃあ!?!?!」

「愁磨先生、何時の間にかいらしてたんですか!?!」

と言うか、お顔が優れない様ですが…………。」

「なんでもない、気にするな。　あー、知ってる者も居るようだが、

このクラスに新しい仲間が増える事になった。朱里君、あかさこ入って来なさい。」

幽鬼みたいな愁磨さんが言うと、廊下にいた子が入って来た。

「初めまして！ボクはもみじ・A・朱里あかさこって言います！

趣味は星座観察、特技は人の願いを叶える事、得意科目は天文学と幾何学！」

薔薇みたいな真っ赤なポニーテール、炎みたいな紅い目のカワイエ顔。

綺麗な真珠色の肌で、元気な印象なのに、淫靡な雰囲気を持った子。

そして

「好きなモノは愁磨です！よろしく！！」

ベキッ！ ミシッツ ジャコン チャキッ

なんでか男子の上の制服を着て、中等部のスカートを履いたその子の一言は、

4人の殺る気を最高まで引き上げてもうたみたい。

Side out

Side ネギ

「さて、全員質問は無いな？無いよな………？

ハア……。アス……朱里、席はエヴァンジェリンの隣だ。」

「ハーーーーイ!!!」

元気な返事をして走って行くもみじさんと違って、

愁磨さんは疲れているような、怒っているような……すごく、な
んていうか……。

「しゅ、愁磨さ　「『先生』、だ。」しゅ、愁磨先生……あの、
授業……。」

「……ああ、そう言えばそうだったね。実質、今日が初授業か。

よし、なら見ぶて……もとい、見学させて貰おうかな。」

そう言つと、窓際に座ってジッとこっちを見てくる愁磨さん。

うう、やり難いなあ……。村に居る時は優しい人だったから、

今みたいに怒つてるとすごくやり難い……。

でも、頑張らないと!!!頑張つて、父さんみたいな『立派な魔法使
い』になるんだ!

「じゃ、じゃあ、早速授業始めますね!!!テキストの42ページを
開いてください。」

コホン。The boy looking for his father

テキストに書いてある英文をスラスラ読んでいく。

けど、日本の英語ってあっちと少し違うから、違和感があるなあ。

「じゃあ、今の所誰かに訳して貰おうかな。じゃあ、始めの所を

」

バツ！ サツ！ キラキラキラ ググググ . . .

テキストから顔を上げると、みんな視線を逸らす。

雪広さんだけはこっちを見てくれるけど、そこまで避けられると

「じゃあ、明日菜さん。」

「な、なんであたしなのよ！…！…！言うのは普通、出席番号順とかでしょ！…！」

「え、だって…明日菜さん、ア行ですし…。」

「それは名前の方だし」 神楽坂。「ひゃあ！…！しゅ、愁磨先

生…。」

窓の方を見ると、座ったまま愁磨さんがこっち……じゃなくて、明日菜さんを睨んでいる。

あ、あんな顔もするんだ……。

「授業中は『騒ぐな』、と言っている筈だ。

それに、教師に対しての言葉遣い。せめて授業中くらいは直せと言っているだろう。」

「うう、スイマセン……。」

「それに、分からないなら分からないと言えば良い。

……まあ、挑戦もしない子には特別な予習プリントを

「ヒイイイ！！や、やるわよ！！じゃ無かった、やらせて貰います
」！

「そうか？じゃあ頑張れ。」

すごいなあ……。あの明日菜さんに言う事を聞かせるなんて！

経験なのかな？それとも、大人だからかなあ？

「うづうづ、えっと？男の子は、見る……彼の、お父さん……。で、
デイスアー…？」

「クスクス、明日菜さん、英語ダメなんですねー。」

「なあっ！？あなたね あ、あわわ、わわ……。」

「くくくくくくヒイッ！！」「」「」「」「」

「????みなさん、どうs「小僧。「へっ、愁磨さん？な」

窓際の……今は何故か後ろに居る愁磨さんの声に振り向くと、

そこにいたのは、村に居た頃の優しい顔の人じゃなく

「教育してやる。有り難く思え。」

悪魔みたいな、悪魔だった。

S i d e o u t

第33話 主人公薬味は、主人公魔人と遭うようです（後書き）

つと言う訳で33話でした！。

作「進まない……全ッ然進まない!!」

愁「……まあ、敢えて何も言うまい。次は漸く設定だな。頑張れ。」

作「………ああ!うん、あつたね!」

ノワ「今回、妙なのが增えたわね。」

しかも、いきなり戦線布告してくれやがったわね。フフフフ……。

┌

作「無視された上に初八つ裂きキャラにされそう!？」

真名「愁磨さんがネギ君を調教してくれるようだね。」

次回、もう少しマシになってくれていれば良いのだけどね……。」

愁「無理だな。だからこそネギじゃなくて野菜な訳だし。」

作「野菜は自らを省みないツツツ!!」

今回はゴールドンウィークが終わりそうな頃になるかと。では!」

作愁ノワ真名『『アリーヴェデルチ!!!!!!』』

第34話 日常に事件の影は潜むようです（前書き）

こんにちは、H a t e . r です!!

作「予想より早く出来たのでうp!! 休み最高!!」

ノワ「さて、今回も亀の様な速度で物語が進んでいきます。

そろそろ、あの子面倒になって来たわ。」

愁「では、恒例のを。

もみじ様、龍賀様、R a i N様、o m e g a z e r o様、木下文

@木下衣玖様、

h a k i様、ながもく様、謎様、春夏秋冬様、ルービツク様、竜

様、蟋蟀様!!

感想ありがとうございます!!」

作「h a k i様、誤字脱字報告感謝です!!

ではでは、今回は間違いが無い事を祈りつつ!!」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ!!」」」

第34話 日常に事件の影は潜むようです

Side エヴァ

「ああー、怖かった……。」

「ね、ねえ。ネギ君大丈夫かなあ……？」

「あははは……ま、まだ十歳なんだし、しゅーま先生も、そこ、ま
で……。」

「」「やる、よねー……。」

小僧が兄さまに連行されてからは自習となり、15分。

何故か用意されてあったプリントをやりながら話している辺り、

奴等も成長して（調教されて）いると言う事が窺える。

「チャオー。ネギ坊主、何で連れて行かれたアルか？」

「十中八九、先程の神楽坂をダメ言った事ネ。」

「あー、そうか、そうアルね。師が弟子を諦める事は許されない
アルからね！」

「……まあ、概ね合っただけで、問題ないネ。」

さて、あちらは新任の小僧が気になるようだが、

こちらは大事な案件を抱えているのだ。……そう、私の隣の、こいつに。

「朱里とやら……貴様、何者だ？」

「えー、何者って言われてもなー。んーっと、魔王！」

「……ふざけているのか、貴様。細切れにするぞ。（ガツ）……何だ、真名。」

「君も感じているだろう、エヴァ。この濃く黒い、尋常じゃない量の魔力。」

……加えて、私には見えている。」

……真名の魔眼は非物理 霊体を見る事ができ、魔の者の質を見分ける事が出来る。

吸血鬼なら赤、狼男なら銀、魔族・悪魔は紫。そして

「こいつは、漆黒だ。間違いなく……魔王だよ。」

「……………関係、無い……………。ママだって、魔王……………」

…答えて。パパと、どう言う関係なの……………?」

何時の間にか、見ているだけで霊体すら断ち切りそんな雰囲気のアリアが、

朱里の後ろに立っていた。……………こいつ、そう言えば天使だったな。

「えへへ〜 愁磨とボクは契約したんだよ。」

ボクが奴隷で、愁磨がご主人様なんだよー!」

「……………もう少し、要領を得た説明をしろ。」

兄さまと何処でどうなったかを、事細かにだ!」

「めんどくさいけど……………分かったよー あのね」

チツ、掴みにくい奴だ。

数十分前

subSide 近右衛門

「と言う事で文句はあるまい。」

「う、うむ……。」

な、なぜじゃああああああ!?なぜこつも面倒事が舞い込むのじゃ!?

愁磨殿達とネギ君の件が片付いたと思うたら、今度は!!

「では、私はこれで失礼する。」

…アスモデウス、今度会う時は敵と見なせるくらいに強くなってるよ。」

「分かってるって、レヴィ!ありがとね!」

「フン、貴様はそうだから いや、いいか。ではな。」

ズリリ、と影 いや、あれは闇かの にレヴィアタンが沈んでいき、

完全に気配が無くなった。ふう……老体には、あの魔力は堪えるわい。

「ねー、おじーちゃん。ボクは何時までここに居ればいいのぉー?」

「フオ、フオッフオッフオ。少々待ってくれんかの？もうすぐ」

「バァン！！」

「ジジイ、今度は何の用だ！？何度も何度も呼び出しやがって！

くっだらねえ用事な、ら………………。」

「やつほー、愁磨！元気だったー！？」（ピョーン！

ガツ！ ギリギリギリギリギリギリギリ

「なんでデメエがここに居る、アスモデウス！！？」

あん時地獄に追い返しただろうが！！どうやって命令無視したんだ
！？」

「痛い痛いいたーい！！」

だって、あんな無理矢理されたからちゃんと出来て無かったしいー
！！

ボクと愁磨の相性が良かったし、

愁磨のがおつきいからボクが出て来るには十分だったんだよー！
」

「意味分からんわー……………！！！！！！」

「……何を言っているかはようわからんが、一つだけは分かったぞい……。」

また愁磨殿絡みの面倒事じゃあああああああ！！

Side out

subSide 愁磨

「……つまり、契約が滅茶苦茶だった上に、俺が下手に魔適正が高かったせい？」

更に、俺がお前を召喚できる魔力量だったせいで

呼び出せる状態だったから、と……。」

「そーー！でね、地獄の王になる為には魔王をみんな倒せばいいんだけど、

ボクじゃ全然無理なの！

でも、契約とか結婚してる相手が倒してくれれば、自動的に王になれるの！」

「……要するに、俺を利用する為に結婚してくれって事か。」

で、アスモデウス。お前のこつちでの名前ってなんだ?」

「もみじ・A・朱里アスモデウス!レヴィが考えてくれたの!」

レヴィ・・・レヴィアタンか。

確かに、瞳も髪も真つ赤だからな。紅葉もみじってのは合ってるだろう。

だがしかし!

「いいか、アス……朱里。

自己紹介の時は『アスモデウス』じゃなくて、『エー』にしる、分かったな?」

「ハイ!あと、もみじって呼んでね!そっちが名前なんだって!

「生徒の居ない所では、そう呼ぶ事にしよう。

つと。じゃあ、HRの時間だから俺は行くぞ。ついてこい、朱里。」

あれ?そう言えばネギが居な

「うわあああああああ!?!?!?寝過ぎしちゃったよー!」

「……また遅刻か。たるんでやがるな。」

S i d e o u t

S i d e ネギ

ううううう……ボク、ダメダメな先生だ……。

明日菜さんに酷い事言っちゃうし、愁磨さんと新田先生には毎日怒られるし……。

あ、また愁磨さんって言っちゃった。

「公私混同するなって言われても、そんな急には無理だよー!!」

僕十歳だし!! 割り切れて言われても無理だよー!!」

荷物を振りまわしていると、コロンと何かが

つて、ああ!これは!! 『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』!!

おじいちゃんが昔くれたの、ネカネおねえちゃんが入れてくれたんだ!

「よーし!これを使って、二人にお詫びのもの作れば!!」

許して貰えるとは思えないケド・・・でも、今よりは良くなるよね！

薬学は学校で一位だったし！

それじゃ、明日菜さんには

Side out

Side エヴァ

「スウ……スウ……。ん……。」

サラ サラ

「フフ、兄さまも、眠っていると可愛いものだな……。」

私達は今、屋上に来ていて、実は憧れの一つであった膝枕を

兄さまにしてやっている。(させて貰ったとも言つが……)

「ん、エ、ヴァ……。」

サラ サラ

「ぬ……？な、なんだ、寝言か。フフン、夢の中にまで私が出て来るとはな。

兄さまは本当に私の事を 「

「アリア、と……仲良くしてくれ……ってばー……。

ああ……『神虎』は出すな……すう……。」

……すまない。しかし、波長が同じすぎるのだ。

過去とか、想いとか……身長とか。

サラ サラ

「大体、兄さまが悪いのだ……。こんなに綺麗で、カッコイイから。」

かれこれ二時間は撫でているが、全く飽きてこない真っ白でさらさらの髪。

御伽噺に出て来る姫の様な寝顔。

眠っている時はふにゃつとしていて……可愛い!!

ゴホン。でも、起きている時は吸い込まれる程カッコイイ笑い顔。

……兄さまの事を好きだから、そう思うだけかも知れんな。

「ネギく……………ん!!」 「ネギせんせ……………!!

!!

「うわああああ!! 助けて……………!!」

ええい、無粋な!!!またあの小僧か!!!

天才と言われているようですが、所詮は十歳。教師の見えない仕事までは出来る筈も無く、

そのしわ寄せの仕事はほぼ全て兄さまに来ている。

それだけでなく日々心労を与えて居るといつの日に、束の間の休息まで奪う気が!!!

「うううう……野菜、野菜があああ……。」

サラ サラ

「大丈夫だ、兄さま。兄さまは休んで居ていい。」

いらん雑音を結界で防御し、苦悩している兄さまの頭を撫でる。

……少しでも、私は癒しになれているのだろうか？

S i d e o u t

S i d e ノワール

「うわあああああああああ!!!」

さっきから五月蠅いわね。一体何をしているのかしら、あの子は。せつかくエヴァがシユウを労っているというのに、原因の子は騒いでいるだけ……。

学園長もそうだけれど、シユウも暇潰しにしては苦勞しすぎな気もするのよね。

「まあ、それをフォローするのが私達の役目なんだけれどね。」

保健室の外に出て少し歩くと、見えてきたのは……

若干脱げ掛けたスーツのネギ君と、追いかけている生徒達。

「……この匂いと、あの子を見た感じ。ホレ薬かしら？」

全く、あれを作るのは法律で禁止されているのに。

メルディアナは何を教えているのかしら。」

簡単に作れる上に、他人を自分の意のままに操れる魔法薬はそれなりに存在するわ。

中でもホレ薬は厄介だけれど……、

シユウを愛している以上、あんな小物に抱く心は持ち合わせていないわ。

「ええっと、こうだったわね。『掃え』！」

シユウに教えて貰った業、言霊。

、
神力を使って言葉のままに事象を操る事が出来るそうだけれど・・・
生憎、私はそこまで詳しくないから、自分が理解できる範囲内では使えない。

「あ、あれ？私達、一体なにしてたんだっけ？」

「うわ、やば！部活始まってんじゃない！」（バタバタバタ！

「あ、あれ？」

「助かってよかったわね、スプリングフィールド先生。」

「あ、ノワールさ「先生よ。」あうう、すみません……。」

「愁磨先生に散々言われているのにまだ理解出来ないようね？」

ナギとエルザさんの子供なのだから、学習能力は高いものだと思う

ていたけれど……。

いい加減諦めたわ。真逆ね。勉強だけできて、本質的な事は全く理解できない。

突然変異かしら？

「とりあえず、この件は愁磨先生に報告しておくわ。」

「ええええええええ！？そんなー！！！」

「学園長に報告しないだけ有難いと思いなさい、犯罪者さん。」

知らないの？ホレ薬作るのって法律違反よ？」

「ええええええええ！！そんな事、学校じゃ〜。」

知った事ではないわ。

それより、シユウの事愁磨って呼ぶの違和感あるわね。

……エヴァとちょっとだけ代わって貰いに行こうかしら。

落ち込んでいるおこちゃまを放って、私は屋上に歩いて行くのだった。

S i d e o u t

S i d e 近右衛門

『それで、ネギ君の修業状況はどうなっているのですか?』

「それが困った事になっておりましたの。」

あの實力では警備に就かせるわけにもいきませんのでな……。」「

『英雄の子、と甘やかすからそう言う事になる……。』

”白帝”^{じつみかて}か”闇の福音”に弟子入りさせる件は?』

「……残念ながら。」

無理に決まっておるじゃろっ!??

仕事を押し付けて、面倒事ばかり起こす相手を愁磨殿が自分の弟子になぞ取るものか!

エヴァンジェリンの方も同様じゃ!最愛の者の心労を増やす訳が無い。

『仕方ありませんね……。』

ああ、そう言えば!そちらに、魔王が居るそうではないですか。

しかも、ネギ君の村を襲った悪魔達の頭が！」

「な！…もしや、それにネギ君をけしかけると言つつもりですかの？」

『そのつもりですよ。』

なに、相手は地獄でも落ちこぼれと聞いていますので、大丈夫ですよ。』

一度だけ来たレヴィアタンの説明から窺えたのじゃが……確信は無い。

ともあれ、落ちこぼれと言っても魔王。何かしらの実力は持っている筈なのじゃ。

『なに、魔法先生を総動員すれば大丈夫でしょう。』

こちらからも300人ほど兵を出しますので。では。』

むううう、確かに教師陣からは討伐の動きが出ているのじゃ。

魔王と言つ事が、唯一尻ごみさせている要因なのじゃが……。

そこに英雄の子が入るとなると、のう。

「……ワシも、久々に出る事になるかのう。」

しかし、流石にネギ君には試験を受けて貰わんどの。」

Side out

Side 亜子

「ねー、ネギ君来て一週間くらいだけどさー。どう思うっ？」

校庭でバレーをしようと、まき絵がふと聞いて来た。

「ん、いいんじゃないかな？頑張つては居ると思うし。」

「教育実習生だっけ？授業もちゃんと出来てるし、いいんじゃない？」

せやねー。来年受験やけど、高畑先生と愁磨先生もおるし。

かわえーし、問題はあれへんよねー。

「確かに頼りないとは思っケドねー」

「それはしゃーないやんかー。ネギ君まだ10歳やで？」

「アハハハハ、勉強以外は教師と生徒交代で教えるとかー？
経験豊富なお姉サマとして。」

「つとと、ゆーなつてば。ちゃんとトス上げてよねー。」

転がって行ったボールを追いかけると、

誰かの足に当たって、先に拾われてもうた。

「あ、すいませ　　」誰が経験豊富なお姉サマですって？笑わせて
くれるわね。」「

「あ、あなた達はー！ー！！」

S i d e o u t

S i d e ネギ

「ネギ先生。いかがですか？研修の様子は。」

「あ、ハイ……。うう、愁磨さ…先生にいつも怒られてばかり
で……。」

クラスのみなさんも、僕よりはタカ…高畑先生か愁磨先生の所に相

談に行きますし。」

「あらあら……でも、それは気に病む事ではありませんよ。」

高畑先生はあの子達と長いですし、愁磨先生はあの通りですし。」

父さんの知り合いって聞いてたから、強いとは思っていたけど、町の不良さんをデコピンで倒しちゃうくらい強いとは思って無かったし、

勉強も実際に見て来たんじゃないかってくらい物知りだし……。

「ううう、僕ってダメ先生だ……。」

「あ、あらあら……。」

「「うわー！ーん！！たすけてー！ーせんせー！ー！！！」」

僕が落ち込んでると、職員室に飛び込んできたのは……

えーっと、和泉亜子さんと佐々木まき絵さんだった。って、ケガしてる！？

「どどどどど、どーしたんですか！？」

「あ、ネギせんせー！高等部の人たちがー！！」

亜子さん達に言われた場所に行くと、そこで口論してたのは

高等部の人たちと明日菜さんといいんちよさんだった。

「今時先輩風吹かすとか頭悪いでしょ！おばさまー！！」

「なんですって、ミルク臭いガキがー！！中等部のくせにでしゃばって！」

「出しゃばって何が悪いのよ年増ー！！」

あ、あわわわわ！？とっ掴み合いになってる！！

と、止めないとー！！

「み、みなさーーん！！喧嘩はやめてくださーーいいい！！」

「なによ、ネギ！邪魔しないでー！！」

「あら、これが例の子供先生？カワイーじゃない！

そうね、私達にゆずってくれたらこの場所ゆずってあげ　ぶ！？

（ボム！」

「誰が譲るものですか。少し頭をおひねりなさいな！」

「やったわね—————！！！」

うわああああああああん！！さらに収集着なくなっちゃった—————！！

「やれやれ、相変わらず元気だね、二人は。」

・ ヒョイツ、と突然明日菜さんといいんちよさんを掴み上げたのは・

た、タカミチ—————！！！！

「久しぶりの教師の仕事が喧嘩の仲裁とはね。

女の子が取っ組み合いの喧嘩なんてみつともないぞ。」

「あ、た、高畑先生！？」

「君達も。僕の生徒が手を出したようですまなかったね。

でも、中学生相手にちょっと大人げなかったかな？」

「あ、ハイ……すみませんでした……。」

ソロソロ去って行く高等部の人達。

すごいなあ、タカミチは。あつという間に治めちゃうなんて！！

「た、高畑先生いー！ー！！先にやってきたのはあつちですよー！ー！！」

「それでも、それに油を注いじゃいけないよ。

こう言う時は、聞き分けの無い方に華を持たせてあげないと。

って、これも愁磨さんの教えなんだけどね。」

タカミチもすごいけど、愁磨さんって一体何者なんだろう？

……父さんの知り合い、かあ……。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「愁磨先生、次の体育は自習だそうですので。」

「ああ、しずな先生。ありがとうございます。と言う事は屋上だな。」

「そうだ、しずなさん。今夜どうですか？」

「今夜も、の間違いですわね。構いませんけれど。刀子さんはどういたしますの？」

「刀子は警備の方ですので、残念ながら。」

刀子には昔、詠春の所に居た時に刹那と一緒に稽古を付けてやったから、

酒を飲む程度の仲だ。俗に言う師弟ってやつで　って（キーーンコーーン）、これに関しては追々（カーーンコーーン）。

「おっと、もう行かないと間に合わないな。では、また今夜。」

「…愁磨先生、職務中はそう言う話を慎んでくれませんか？」

「アハハ、すみません新田先生。お詫びに御馳走しますよ。」

漸く自作酒が完成しましてね。それに、三種肉の唐揚げ串も大量に作りますから。」

「ハッハッハ！あれを引き合いに出されては、引き下がりがたくなりますな。」

「では、授業もありますのでまた今夜。」

うん、新田先生も仕事をキチンとやっている分には大らかな人であった。

つてか、普通にいい人なんだよな。・・・ネギ以外の教師陣には。

あれの場合、教師って言うより生徒って言った方がしっくりくるから仕方ないけどさ。

「おろ？アリア、こんな所で何やってるんだ？授業始まっちゃうぞ。」

「・・・ん、屋上、高等部の人達。」

「あー、さっきタカミチから来たやつか。確かドツチ部の連中だったな。」

体育、出来ると　いや、生きて帰れるといいなあ？」

「・・・ん、去年・・・の？」

「そうそう。今年もまたやりたいなー。」

アリアと話しながら階段を上り、屋上の扉を開けると

「あんだ達はまたーーーー！！高等部の屋上行きなさいよ！開いてんでしょ！ー！」

そこそこ上手い事やれば全国大会出場まで行けるようにした合宿、とだけ言っておく。

「さつさと立ってください、スプリングフィールド先生。

自習授業くらいは完璧に仕切って見せてください。」

それだけ言つと、隅の方に固まっている最強中学生集団の方に行く。

うん、改めて見るとすげえ面子だよな！。

強い方から順に天使^{アリア}、吸血鬼^{エヴァ}、悪魔^{真名}、烏族^{刹那}、魔王^{もみじ}つて。

「一番後ろに魔王が来る面子つて、一体どんなだよ……。」

魔王より強いのが問題なのか、魔王が弱いのが問題なのか……両方が。

「フツ、その一団を瞬殺出来る人が何を言っているのかな？」

「……パパは、そんなこと……絶対しない。」

「確かに、愁磨さんは私達の事を大切にしてくれていますからね。」

「ハツハツハ、良いじゃないか桜咲刹那！！照れが完全に無くなってきたな。」

「この一団に入っていれば、嫌でもこうなりますよ。」

「惜しいね。照れた刹那は可愛いのに。」

特異な者たちではあるけれど、皆の問題はそれなりに解決して順風満帆。

さてさて、そんな時に新入りさんはどうして膨れているのでしょうか？

「愁磨、ボクの事ははたいたじゃんかー！ー！ベシンって！」

「……あー、六年前のウェールズの時のか。だってほら、お前敵だったし？」

「にゃー！ー！じゃー、お詫びにキスしてくれたら許してあげてもいいよ！」

「なんで兄さまが貴様とキスしなければならんだ！出来そこない魔王が！ー！」

「おこちゃま吸血鬼は黙ってて！！隙ありいー！（ガッ！）いいいー！」

「隙なんてねーよ。俺とキスしたかったら、少なくとも女になつてからにしる。」

一人増えただけなのに、随分姦しくなったもんだ。まあ、楽しいからいいけどな。

Side out

「ウェールズ………？六年前、って…。」

愁磨が常時張っている認識障害とは、

基本的に『意味の分かる者にしか通じない』というもの。

日常の何気ない一幕でしか無かった故に、会話を聞いていた少年の
呟きは、

騒がしくなった一行の耳に届く事は無かった。

第34話 日常に事件の影は潜むようです（後書き）

と言う訳で34話でした！

愁「色々動きそうだな、次回！！」

作「図書館島あるから早くても次々回ですね、ハイ。」

ノワ「エヴァの代わりに、もみじちゃんに白羽の矢が立ったみたいね。」

もみ「愁磨が助けてくれるからへーきだもん！！」

愁「……………考えとく。」

作「さて次回、と言うか続いては設定です。

アスモデウスがちゃんと出て来たから、漸く出せる！」

ノワ「それでは、設定読む方・次話の方もまたお会いしましょう。」

作愁ノワもみ『『アリーヴェデルチ！！』』

設定 大戦期から学園編初期 (前書き)

作「と言つ訳で特筆する事ありませんので早速！」

設定 大戦期から学園編初期

名前：愁磨・P・S・織原

二つ名：『白帝』（英雄としての二つ名。現在は犯罪者扱いの為機能していない）

懸賞金：5000万DP（死亡扱いの為、凍結に近い形となっている）

新『術式兵装』

スガミマエン
『崇神魔縁』・『大群ノ王』
オオゼイノケガレノオウ

オオゼイノケガレ
大群と言う組織の王の能力。

言霊＋神通力を使った業を使う。（ノワールが使っていたのは簡易的なモノ）

この形態の場合、星の流れ・因果を使う為、業が『確定』性質を持つ。

回避・防御・阻害・無効化する方法はほぼ無く、高速再生・不死身能力を持つか、

幸運値が使用者より高ければ避ける事が可能。

固有能力

アーヴォ・ガジ・エッティ・アス・メシア
禁忌ヲ犯シタ救世主

ヴァイヴオリビシマカストライズハイルフォールハイドピリスティア ハーガスイ ナーシューイーシュト
傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、異端、耽溺

以上の全てを解放した状態の『スリーヴンディートゥリーズインツ七つの大罪』と

『救世主さま』兵装を融合させた、全兵装中最強級の兵装。

白い悪魔の様な外見と、黒い救世主服かを選ぶ事が出来る。

特殊武装

一つの能力以外を全て捨てた武装。

愁磨が全力で集束した為、武器の能力と言うよりは概念武装のレベルに。

これを変化・無効等する為には、これより上位の概念武装を用意する必要がある。

『ダスパンデル束ねる者』

愁磨が使う『形態付加』の上位互換武装。

縫い針の様な形の槍。(槍としても使えるが、強度は木棒並み。

通常の『付加』とは違い、順番を設定し連続発動させる為の物。
(例：<『追跡者』『貫く者』>とすると、永久追跡+貫通になり、

<『追跡者』・『貫く者』>とすると、追跡 接触後貫通となる。)

相性や、宝具のレベルが高いと連結(上記『・』)出来ないなどの制約はある。

『初源』
アダム

対象を選択し、始めから使う能力を持った武装。
白い羽が刀身となったナイフ。カッター程度の切れ味&強度。
強度。

非常に分かり難い能力だが、応用力が非常に高い。

(作中の様に『束ねる者』でレベル制限のある物を同時に使わせたり、

魔法を指定後敵に付加 魔法を使わせ続ける 魔力切れに追いつく、

と言った使い方が出来る。)

一設定につき一回しか発動できない。

『終焉』
オメガ

対象が終わる時に発動させる能力を持った武装。
黒い羽が刀身の短刀。錆びた包丁程度の切れ味と強度。

こちらも分かり難い能力だが、応用力が高い。

作中の使い方としては、『追跡者』を指定後『轟く者』と連結
敵に接触(『追跡者』が終了) 『轟く者』発動
と言う使い方をした。

(例：魔法指定後『轟く者』と連結 敵に付与 敵が魔法使用
後木端微塵。)

『追跡者』
ザミエル

追尾の能力を注ぎ込んだ武装。
対象を指定後対象を最短で追尾する為、障壁は勿論、建物・生物にも弱い。

直径20cm程の球で、『ぶつけるとそれなりに痛い』。
落としたら割れる程脆い為、使う時は『貫く者』が自動的に必須となる。

『貫く者』
グングニル

設定した対象を貫通する能力を持った武装。
指定物が終わるまで貫通する。

(例：『障壁』を指定、投擲 一枚目を貫通した時点で『障壁』は終了)

二枚目からは貫通しない。)

作中では、『追跡者』を指定した『初源の者』アタムに付加した事により、

『追跡者』が終了するまで障壁を貫通して行った。

50cm程の投擲剣で、強度は指で簡単に折れる程度。

しかし、貫通時は一切の抵抗が無くなるので、单体でもそれなりに使える。

『轟く者』
ブリューナク

指定した対象に接触後、『対象を破壊する』能力を持った武装。
『轟く者』より下位ならば、概念すら破壊する。

破壊する時は『破壊するか破壊出来ないか』なので、

僅かにでも差があるのなら、抵抗できないし抵抗しない。

創造物の追加効果

『救世ノススメ』

使う際、十三騎士の能力・身体能力にブーストが掛かる。

その為、制約として『その十三騎士の了解を得ないと使えない。』

』

また、秘奥義発動には該当する十三騎士と心を合わせないと発動しない。

『支配ノススメ』

十三騎士を無理矢理使う為、ブーストが掛からない。

その為、能力発動までの時間が『救世ノススメ』より早く、秘奥義使用は一人で可能。

秘奥義もやはり、『救世ノススメ』より発動が速い。

名前：アリア・P・W・織原ブテリユウメリテイクノス（前名 アリア）

愁磨が娘とした天使。

学校に通うようにしてからは、成長しない体をアイテムで成長させている。

成長した為か、幼女の舌足らずが多少治り、多少喋る様になった。

二つ名 『獣帝』 『蒼炎狼使い』

固有技能・魔法

『天合獣纏』

ノワールの『魔合聖纏』と同じ原理の能力だが、
アリアが使うのは『神気』と『神虎』。

（『神気』とは、天使魔法を使う時に使用する気（？）の事である。）

霊獣である『神虎』に『神気』を纏わせ、それを自分に付与する。

リッシュクエニツヒフリーデン 翼獣霊王

アリアが『天合獣纏』を纏った状態。

体が成長し、中高生くらいになる。

髪の毛と同じ、銀色の犬耳と長めの尻尾が生える。

軽鎧＋コヨーテ・スタークの『ロス・ロホス群狼』状態が合体した様な装備になり、

『神虎』も3m程まで大きくなった状態で召喚される。

名前：アリカ・P・X・クリソルオス織原（前名 アリカ・アナルキア・エンテ
オフユシア）

腰まである金髪で、左眼深緑、右眼蒼のオッドアイ。

18歳〜25歳程 164cm / 1 @ kg（例の如く・・・）

魔法世界にあった、ウエスペルタティア王国の第三王女。
幼少の頃、王族の宴にて両親をクーデターで亡くす。

『王家の魔力』は王族中四位だが、政治手腕はずば抜けて一位である。

能力

『王家の魔力』

精霊存在に干渉する為の特殊な魔力。

通常の魔力とは別に溜まっているモノであり、

構成性質も通常と違うので、魔法減衰・無効空間でも影響を受けない。

魔力としても扱えるが、制御が難しい。

魔法は、その属性を司る精霊に『簡易契約』をし発動するものであり、
王家の者は、才能があれば『これ』に干渉して無効化する事が出来る。

『王家の魔力』で干渉するのは『簡易契約』にであり、精霊に干渉するものではない。

ここでの精霊とは姿の無い概念体であり、魔物中の精霊種とは異なる存在。

名前：もみじ・A・朱里

アスモテロめがでこ

50000歳くらい（本人談） 158cm 42kg

黒紫の眼で、真っ赤な髪をポニーテールにしている。
色欲の魔王の為、非常に美しい顔・体をしている。

ウェールズの村を襲った魔族団の指揮官をしていた魔王。

とは言っても非常に残念な身の上だった為、
愁磨が奴隷化させる事により、不埒・攻撃的な目的で他人が触れられない様にし、
地獄に送り返した。

しかし、無理な執行だった・愁磨のキャパシティが異常・相手が魔王である
等の不十分・異常状態により、好き勝手に現界してくる。

色欲を司る為か、地獄の王になりたい為か、主である愁磨に異常に執着してくる。
性別を変えられるにも関わらず、何故か男のまままで迫ってくる為、
愁磨は拒否しているようだ。

能力

『フォイエ・タウバー
魔炎』

自身の何処からでも熱や炎を出す事が出来る。

魔力を籠めれば籠める程、温度・炎量・制御性が上がって行く。

何かに付加する事は出来ず、自身の体が持ち堪えられる限界値が
実質の最高温度。(アスモデウス自身は約2億 まで耐えられる)

『属性半減・吸収・無効・倍化』

『魔炎』は自身の体質でもある為、被炎攻撃は吸収、与炎攻撃の
威力は2倍になる。

被闇属性は無効となり、与ダメージは1.5倍になる。

土・風攻撃は被ダメージが半減、与ダメージは1.3倍になる。

一方、水・氷・光属性攻撃にはとても弱く、被ダメージ5倍、使
用不可である。

『チャーム
魅了』

発動型スキルで、発動するとアスモデウスに惚れない生物はいな
い程の威力。

威力の調整が出来ず、性欲まで底無しに引き上げてしまう。

以前一度使い、襲って来た悪魔を消し炭にしてからは一度も使っ
ていなかった。

対抗出来るのはアスモデウスに興味を持たないか、

魔・闇族としての上位存在だけである。しかし、稀に精神力で抗
える者も居る。

使うと大抵襲われるので、自爆用と言っても過言ではない。

設定 大戦期から学園編初期 (後書き)

作「『紅き翼』やエルザさんとか、ツエラメルの設定って欲しいですか？

需要があるようでしたら追加しますです。」

愁「通常、能力は戦闘したら発表って感じた。」

戦闘してない真名とかタカミチは後々、だな。」

作「では、更新は8〜10日くらいを目安に35話でまたお会いしましょうー!!」

作愁「『アリーヴェデルチ!!』」

第35話 期末試験は問題無く波乱のようです(前書き)

お久しぶりです、H a t e . rです。

作「久しぶりに6日ぶりの更新……。ええ、難産でした。

ついでに言うと、精神ダメージがジクジクと。」

愁「……まあ、そんな事は置いておいて恒例のを行こうか。」

ノワ「えと…竜様、蟋蟀様、もみじ様、R a i N様、剣の舞姫様、

木下文@木下衣玖様、

omega z e r o様、この世全ての悪様、龍賀様、ながもく様、

春夏秋冬様、灰色様、アイン様。

感想いただき、ありがとうございます。」

作「並びに、活動報告にコメント下さった方々、ありがとうございます
ます。」

コメする前に消してしまい、申し訳ありませんでした。

花鳥風月様、活動報告消したにも関わらずメッセージ下さり、あ
りがとうございます。」

愁「アイン様、誤字脱字報告、ありがとうございます。

最後に、この作品読んで頂いてるみなさんに感謝を。

それじゃあ、第35話！」

作愁ノワ「」どござー!!」「」

第35話 期末試験は問題無く波乱のようです

Side ネギ

「課題、ですか？」

春休みが近くなったある日、学園長先生から呼び出されて、学園長何時に来た。

また叱られると思ったんだけど、予想とは違った事で……。

「フオッフオッフオ、そうじゃ。」

これをクリアできれば、正式に教師として雇おうと思ってる。

そして

『立派な魔法使い』マギステル・マギ 見習いとしての本格的な修業もじゃ。

」

『立派な魔法使い』マギステル・マギ お父さんと同じ。ボクの目指さなきゃいけないもの。

こっちに来てからは愁磨さんに怒られてたせいで忘れかけてたけど……。

ようやく、そのスタート地点に立てる……！

「ボク、やります！がんばりますから、やらせてください！！」

「フオッフオ！やる気があるのは良い事じゃ。では、これを。」

学園長先生から封筒を貰って、学園長室から出て行く。

よし！がんばろう！！

Side out

Side しずな

現在2 - Aでは、全教科の復習小テスト返却と答え合わせをします。と言つのも

「バカレンジャー！！お前らは詰めが甘いんじゃない！！」

「「「ごめんなさいー！ー！（アルー！ー！）（です。）」」」

「いやー……。面目ないでゴザル。」

学年では通称バカレンジャーと呼ばれている5人。

1 - Aの時から愁磨先生が居残り・宿題・特訓・・・様々な方法を用いて教えて来たのだけれど、

他の生徒達よりちょっと伸びが悪くて困っていますわ。

「佐々木と古の数学、 $2X + 3 = 5X - 9$ の答えが -4 と $-3X$ 」
- 12。

移項した時の $+$ ・ $-$ の動き、あとし忘れに気を付ける。

長瀬の英語。That is not a hospital. の訳が、あの病院ではありません。

あれは病院ではありません、な。惜しい…。

綾瀬の理科。単語は覚えているが、勉強していないから意味がごっちゃになっている。」

伸びが悪いと言っても、ニアミスが多いとかあと一歩、と言つものなだけれど…。

「だが神楽坂！！英語の自己紹介でThis is my Kag
Urazaka! From the Japan.

これは私の神楽坂です！日本から。って意味分らんわ！勉強した痕は見えるけど！」

「しょうがないじゃないですかー！日本人なんだからー！！！」

「超だつて中国人だが100点だし、雪広は96点だぞ!？」

「超さんは天才だし、いいんちょはハーフじゃないですかー！！！」

「ちょ、明日菜さん!？わたくしはハーフじゃありませんわよ!！」

あら？そう言えば、今日はネギ先生静かですわね。

職員用机に座っているネギ先生は・・・手紙を見えていますわね。

「ネギ先生？どうなさつたのですか？」

「うわわわわ!？し、しずな先生……。あ、アハハハ、なんでもないですー。」

「そうですね。授業中なのですから、

気を付けないと愁磨先生にまた怒られてしまいますわよ。」

「は、はい、気を付けます！」

手紙を隠すと、ちらりと愁磨先生を見るネギ先生。

いつもと違って、その視線は……なんだか挑戦的で、不穏なモノを感じますわね。

大丈夫だと良いのですけれど……ネギ先生が。

Side out

Side 明日菜

「ちょっとネギ、今日はどうしたのよあんだ。」

「あ、明日菜さん。いえ、なんでもないですよー。」

アハハハ、っていつもみたいに笑うけど……なんか元気が無いのよねー。

「ガキがいつちよまえに隠し事なんてしてんじやないわよー!!」

ほらほら、素直に言っちゃいなさい!!」

「あ、ちよ、明日菜さ!?!アハハハハハハハ!?!?」

……

……

…

「バカレンジャーの内二人が平均80点以上と、不審者の撃退？

なに、その取って付けたオマケみたいな課題？」

「ゼー……ゼー……、ハイ。成績の方は僕と愁磨さんと、

皆さんの頑張り次第だからなんとも言えないんですけど……。」

愁磨先生って苦手なんだけど……教えて貰うようになってからは成績は上がった。

私達五人は一年のテストじゃ平均40点が普通だったのに、

今じゃ平均65〜から取れているし、1-A時最下位が今じゃ学年10位より上だし。

「不審者、って言うのが良く分からなくて。」

「……で、アンタは一人で行こうとした訳ね。」

「あう……。」

全く、コイツは……。お子ちゃまのくせに自分一人でやろうとしちゃうのよね。

危なっかしくて目を離せないから・・・だからガキって嫌いなのよ！

「もう、私も一緒に行つてあげるわ！

あ、危なっかしくて一人になんてさせられないからね！」

「あ、あすなさ～～ん！！」

「うわ！？だから抱きつくなって言つてんでしょーが！！」

「仲ええな～ お邪魔さんはお風呂に行つて来るえ～。」

「木乃香あぁー！！！！！！」

Side out

翌日、夜

Side 刀子

『学園長、ネギ君達は予定通り図書館島に入つて行きました。』

『「うむ、」苦勞じゃつた神多羅木君。今日はもう良いぞい。』

「話を逸らさないでください！どう言つ事ですか！？」「（バンツ！

「フォツ！？な、何がかのう？」

「決まっています！ネギ君の就業課題の事です！」

ガンドルフィーニ先生が学園長を詰問している理由、本来ならば課題は

『綾瀬・神楽坂・古・佐々木・長瀬バカレンジャーのいずれか2名に平均80点以上を取らせる』

という内容だった筈が、先程学園長に聞いた所

「なぜ『図書館島に居る不審者の撃退』が追加されているのですか！？」

「実はのう、しゅ……とある先生から意見が出たのじゃ。

明日菜君以外は既に70点以上を取れておるのじゃから、不十分ではないかと言われている。」

「またあの織原とか言う教師ですか！？一体何者なんですか！！」

「じゃからのう、それは言えんのじゃ……。」

……確かに、言えるはずありませんね。

私は青山の家に行った頃に稽古をつけて頂いたおかげで知っています
が、

本国が貶めて処刑した筈の英雄改め犯罪者、など言おうものならば、
マギステル・マギ
立派な魔法使い至上主義のガンドルフィーニ先生は倒れるでしょうね。

「安心してくれてよい。不審者と言っても形ばかり、古くからの知り合いじゃ。」

「……フウ、分かりました……。ですが、次からは全員に通知を徹底して頂きます。」

「フォツフォツフォ、分かっておる。」

どうだか、タヌキ……もとい妖怪。

そう言えばししょ、じゃなかった。愁磨さんは警備中なのでしょ
か……？

……ちょっと、行ってみましょうか。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

図書館島が見えるとある屋上。ノワール・エヴァ・アリア達三人は先に寝てしまい、

珍しく俺とアリカは二人きりで酒を飲んでいた。

「愁磨、ネギと……明日菜を放っておいて良いのか？」

図書館島にはドラゴンもおるし、何よりもナギと義姉君の形見とナギ達が

「ナギとエルザさんの息子と何か思って助けた対象って言っても、

俺は愛着も執着も何もないからどうでもいい。」

ナギからは半殺し程度までなら好きに教育して良いって言われたし、神楽坂は一生徒、アスナは仲間の知り合い程度だ。

「手厳しいのじゃな……。まあ、私とて言ってみただけじゃ。」

無駄にして良い命などないが……万を殺す者ならば手助けをする必要はないのじゃ。」

「ん？以外だな。アリカなら全員助けるとか言つと思つただけだな。」

「なに、私が助けられん命は愁磨が助けるから問題無い。であろう

「？」

両手でコップを持ったアリカが、こちらを振り返り微笑む。

金色の月明かりに照らされた白金を見て、改めてその美しさを想つ。

・二人きりと言う事もあって、なんだか恥ずかしくなってくる・
。。

「フン、俺は俺の助けたい奴しか助けねーよ／＼／＼」

「ふふふふ、その顔を久々に見ただけで満足じゃ。」

今宵は月も美しいし、愁磨と二人きりなだけでなく照れた顔を見れた。なんと良い夜か。」

「言ってる…。実際、あそこにはアルが居るし、あいつはナギの息子を死なせんさ。」

「……ああ、今はセクトとガトウも居るみたいだな。」

あいつ等、『紅き翼』半分集まって何やってんだ？

この教師が見たら卒倒なんてレベルじゃねーぞ、あれ。・・・ま、いいか。

「おおっ！？……そろそろ冷えて来たし、家帰るか。」

「む？そ、そうじゃな。帰るとしよう……。」

言いつつも、座ったまま裾を掴んで来るアリカ。

「……で、何をして欲しいんだ？ああ、お姫様抱っこして帰るか。」

「ち、違う！？／＼いや、それも捨てがたいんじゃないが……。」

指先をくりくりさせ、あらぬ方を見るアリカ。

ぐう……！デレたのは久々に見たから破壊力がツツ……！

「この頃忙しかったし、誰か一緒におったし、じゃから、その……。」

ほら、あれじゃ。……んっ！」

目を瞑ってこっちを見て来る……って、つまりそう言う事か。

……何だろう、このアリカ。親鳥が甘えてるような微笑ましさがあるんだが。

「高校の奴等に見せてやりた……いや、やっぱ無しだな。」

こんな可愛いアリカを見せてやるなんて、勿体無い……………」

「よ、余計な御世話……………じゃ……………。バカ、もの……………」

顔が近付いて行き、そして

「愁磨さん！！！！い、今直ぐきて、くだ、さ……………。あ、あう…………！！
いや、今すぐ来てください！！！」

真つ青な顔で飛びこんで来た刹那に邪魔された。

…………アリカも、エヴァに負けずタイミングが悪いらしい。

Side out

Side 真名

「真名！！！」

「愁磨さん急いでくれ！私ではもう持たせられない！！！」

愁磨さんから教えて貰った時間魔法で20秒、刀子先生の時間を遅らせていた。

魔族のハーフだから、これでも魔力量には自信があったのだけれど・
・ツ!

時間を3秒遅らせるだけで魔砲が10発撃てるね、これは!

「限定発動、10・10・10! 広がれ、『うんめいのうつくしき
せかい』!!」

<対象：葛葉刀子 時間停止>!! ツツ刹那、状況説明!」

愁磨さんは、いつか見た固有世界を創り出し、刀子さんの時間を止める。

自分でやったから分かるよ……。やっぱり化け物だね、この人は

「は、ハイ! その、いつもの様に警備していたら、不審者を見つけ
たんです。

偶々居合わせた刀子さんと私達で、取り押さえようとしたんです。

そ、そし、たら……。急に、本当にいきなり……!!」

「ああ、刹那、大丈夫だ。もういいぞ。……真名。」

説明しようとした刹那が混乱しだし、愁磨さんが落ち着かせるよう

に抱き締める。

・・・無理もない。自分よりも強い剣の先輩が、いきなり半分になったのだから。

「概ね、刹那の言った通り。私の『眼』にも何も映らなかったから、何も分からない……」。

黒いレザー素材のマントで、顔も見えなかったけれど……不思議な髪だった。」

「ツチ、『アンサートーカー答えを出す者』に該当なし……。それで、そいつは？」

「『一人で十分だ。』と言って、文字通り消えてしまった。」

「……分かった。今はそれより刀子だな。刹那を頼む。」

まだ少し震える刹那を私に預け、愁磨さんは静かに横たわる……。腰から下が無くなった刀子さんの横に膝を付く。

「しゅ、愁磨さん……。刀子さん、大丈夫ですよね……？」

「……ハッキリ言っが、損傷がでか過ぎる。」

腕足一本、風穴くらいなら創って代用できるが、下半身丸々は無理だ。

創ったとしても拒否反応が出るし、そもそも『創造』のルールに引
つかなかった。」

「そ、そんな……!!」

「だから!!……奥の手を使う。二人とも耳を塞いで目を瞑れ。

絶対に聞くな、見るな。」

「分かりました、信じています……!!」

ギョツ、と強く目を瞑る刹那に習い、私も耳を塞ぐ。

刹那ほど想ってはいないけれど、同僚が死ぬのはもう御免だ……!

頼んだよ、愁磨さん……。

Side out

Side 愁磨

二人が見聞きしていないのを確認し、刀子の状態を慎重に変える。

「<座標：0 - 358、567 - 358、0 - 567、567 - 3

58 時間停止>

<座標：前+1より+224 麻痺><座表：前+2400から+3200 活性>。

……フウ、これで…刀子、刀子！！目を開ける！！」

「……あ、…あ、し、しょう……。どう、したのですか……？」

「師匠って呼ぶなって言ってるだろうが……。自分の状況、分かるか？」

「……不審者を見つ、けて…その、あと……？」

ツああ、何かが飛んできて、それで…。下半身の、感覚が、なくなっ……。」

よし、この様子は…。傷口の停止と痛みの麻痺、血液の不足対処の思考強化は成功してるみたいだ。自分の置かれた状況も把握したみたいだし……。

「刀子、いいか！！今しているのは応急措置でしかなく、このままじゃ死ぬ。

俺に出来る方法じゃ、人外にするしか助ける方法が無い。

だから……人間を辞めてでも、生きたいか否か。答える。」

「……この、人間の姿のままでしたら……生きていたいです。」

……存外、決断が早いが……。

刀子が後悔したなら……、俺が責任を持つて

「分かった。……最後、一番重要な事だが　刀子、処女か？」

「……ああ、ええ、そうです……。」

私より弱い……男に、許す気はありませんでしたから……。」

……よかった、二重の意味で。死にかけなせいで麻痺してるのか。

（刹那達に聞かせたくなかったのはこれ。一応、2……歳なんだし。）

「形態：^{モード} Alucard　完全発動……行くぞ、刀子。」

「……ええ……。」

刀子を抱き上げ、口を大きく開ける。

常とは違い、牙のみになったその歯で、刀子の首筋に噛みつく

ソブリ、と嫌な音がした。

S i d e o u t

第35話 期末試験は問題無く波乱のようです(後書き)

と言う訳で35話でした!!

作「中途半端でスイマセン!!と言うのも、今回の後半は愁磨Side。
de。」

次回前半がネギSideですので切りました。」

愁「刀子が一体どうなったんだ!?て言うかまた新キャラ!?!」

ノワ「色々ブレイクしすぎて、着いて来れないんじゃないかしら…

…?」

作「ネギ魔改造?いいえ、刀子様を魔改造計画です。

フラグ・伏線回収は終わるまでには全部やり……やる予定ですよ!
で!」

愁「つと、次回は……いい感じだし13日の金曜日!」

作「難しいなあ……。原作入ってから話が難しい。

では、また次回お会いしましょう。」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ!!!」

第36話 力を持たない少年は知るようです(前書き)

三日とか……今の状態じゃ限界値突破!どうもHate・rです。

作「いつそスピノフの方が楽だと思う今日この頃。

原作乖離は当たり前!では、いつものを。」

愁「流れエ……」。

龍賀様、ケルベルス様、春夏秋冬様、竜華零様、木下文@木下衣
玖様、

灰色様、花鳥風月様、omegazer様、アイン様、やがみ
様、もみじ様。

感想いただきありがとうございます!!」

ノワ「アイン様、いつも誤字脱字報告、ありがとうございます。

無虚様、疑問点はあの様な回答で宜しかったでしょうか?

Hateの思いつきだから……申し訳ないわ。」

作「先人は残しました、細かい事を気にしたら負けだ!!」

それでは、36話!」

作愁ノワ「……どうぞ!!」「」「」

第36話 力を持たない少年は知るようです

黒フードの男が現れる数十分前

Side ネギ

カチッ ビュン！

「うひゃあ！？（ガシッ）」

「^{バキッ}無闇に触ると危ないでござるよ、ネギ坊主。」

ほ、ほほ本を取ろうとしたら矢が飛んで来た！？

あんなの当たったら死んじゃうよ！！長瀬さんありがとう。。。

「この図書館島には、世界に100冊とない貴重な本もあるですか
ら、」

盗掘・盗難者の為の罠が仕掛けられています。」

「そうなんですかー。それなら……って、」

泥棒さんより先に生徒さんに被害が出ますー！？」

この学園、楽しいけどおかしいよ!!

愁磨さんが言ってる事何となく分かってきた……。うう……。うう……。

「って、皆さんなんで居るんですか!？」

「さつきも言ったでござるよ。もう一回だけ言っが、

明日菜殿からネギ坊主が不審者退治に行くと聞いたでござるよ。」

「だから着いて来たアルよ!!ネギ坊主一人には任せられないからネ!

ついでに、ワタシ達の点数アップの為に噂の魔法の本を探しに来たアルよ!」

みなさん……。なんだかんだで僕の課題の為に……!

って、魔法の本!？た、確かに麻帆良ならありそうだけど……、

使ったら愁磨さんに怒られるかなあ?それとも、使える物は全部使えって言うかな?

……。きつと大丈夫だよ、うん!!

「それじゃあみなさん!頑張って不審者さんと魔法の本探しましょ

うー!!」

「「「「「「おー……（でいぢる）……」」」」」」

それから僕達は、図書館島を探険・・・じゃなくて、冒険した。

異常に高い本棚の上を歩いたり、湖の中を歩いたり、

床が開いて落ちそうになった佐々木さんがリボンで手摺にぶら下がって助かったり、

落ちてきた本棚を古菲さんが蹴り戻して、中の本を長瀬さんが全部キャッチしたり、

数十・・・数百メートルある本棚をロククライミング?で降りたり。

「こ、こんなの絶対、おかしいよ……。」

「魔法使いのあんたがそれを言うの?」

な、なんでこんな不思議な所なのに不思議に思わないんだろう?

ウェールズの村どころか、メルディアナの学校にもこんな所なかったよ!

「ふふふ……バカレンジャーは流石としても、ネギ先生が

ここまで着いて来れたのは意外です。さあ、この上に魔法の本があるです。」

や、やっと着いた……！

ここまで来て居ないんだから、不審者さんも居ないよね！

あとは、本を取って帰るだけ！石の天井を開けて上に出ると

「すごーい！！RPGのラスボスの間みたーい！！」

「が、学校の地下にこんな場所が……。」

「あ、見て！あそこに本が！！」

佐々木さんが指差した方を見ると、両側を石像が守ってる感じの祭壇があつて、

その真ん中にハードカバーっぽい本が……って、あれは！？

「あれは、伝説のメルキセデクの書！！？ほ、本物だ！

あれなら頭を良くするくらい、多分簡単ですよ……！」

って、今……

「父さんを、父さんを……知ってるんですか……！！？」

Side out

十数分前

Side アル

「と、言う事はやはり……。」

「ああ、ナギとエルザ様は間違いなく『造物主^{ツェラメル}』が握っている。

と言っても、愁磨もそこは分かってるんだろうから……。何か考えているんだろう。」

『ナギ・エルザ奪還』及び『^{コスモエンテレケイア}完全なる世界計画』の正当性検証』

私達四人はここ二十年、その為の調査ばかりしていました。

ナギは居なくなっただけで、ラカン^{ウイギオ}は魔法世界に引き籠り。

愁磨は協力しているので賛成と取りまして……。と言う事で四人しかいません。

「それにしても、先程から妙な魔力を感じるのう。」

「ええ……。ネギ君とアスナ姫……。あとは……。何でしょう？」

「ああ、それは私でございます。しかしながら、安心して頂きたい存じます。」

私は、危害を加える気など毛頭ございません。」

「……！？」

現れたその男から、全員が瞬時に距離を取ります。

フードで顔は見えませんが、この魔力……。異常と言つよりありませんね……。

ええ、この感じは大戦の時に嫌と言つほど覚えがあります。

「どうしてお前がここに居る、フェイト・アーフェルクス？」

「……勘違いして頂きたくございません。あれらと私は違うモノでございます。」

造物主猊下に創って頂いたと言つ点では同じでございますが。」

「と言う事は……貴方はデユナミスですか。雰囲気随分違いますね……。」

「ああ、役回りを申し上げるならばデューエ・ルナミスと言った方が妥当。」

違うのは至極簡単。私があればとも違う、と言っただけでございます。」

そう言ってフードを取るデユナミス(?)。

現れた姿は……そう、正しく虹色の髪を持った

「しゅ、愁磨……!?!いや、姿を模しているだけか。」

「ええ、ええ。フェイツは猯下の嘗ての友を、デューエは嘗ての猯下を。」

そして私は、創造主猯下を模して創られたのでございます。」

だとしたら厄介ですね……。

まさかとは思いますが、愁磨の『創造』を擬成りにも使えるとなったら……。

いえ、問題ありませんか……。

「造物主も愚かじやのう。愁磨の創造には、詠唱呪文なぞ比べ物に
ならんほど

魔力を消費するのじゃ。お主の魔力量では、3分と持つまい！」

「折角出張つて来て貰って悪いが、一気に決めさせて貰おう。」
ゴオウ！

ゼクトが魔力を練り上げ、ガトウが咸卦法を使用して完全な戦闘態
勢に入ります。

その瞬間、敵の臭いが一気に血生臭くなります。

そして、先程から臭っていた血の臭いも一層強くなります。

「・・・貴方、ここ二時間以内に人を殺していますね・・・？」

「ああ、気付かれてしまいましたか。ええ、美しいものを見ると壊
したくなる性分です。

……つつい、半分持ってつちまっただんですよ。」

ッ、口調と一緒に、雰囲気が変わります。

・・・嫌な気ですね。狂った獣としか言いようがありません。

「おっと、これは失礼致しました。あの時は一人で十分だったのでございますが……。」

ああ、忘れていました。今は時間が無いので……本題に入らせて貰うぜ?」

メキメキメキ、と言う音と共に敵の体に変化して行き

何時か造物主と戦った時の、愁磨と同じ姿になって行きます。

「【ああ、やはり創造主猊下の力は素晴らしい!漲りつてきやがります!」

さて、ここに来たのは他でもねえんです。」

翼を広げ、手を横に出すと、あの……アトロポスとか言う剣が現れます。

ああ、いけませんね……死亡フラグが見えます。

「【俺の独断で申し訳ねえとは承知しております。

計画の邪魔になりそうだし、てめえらには死んで頂きたく存じます
!」

「もう少し、もう少しだけ……!!」

「ネギ、あんた……。」

僕は調子に乗ってた。あの戦いを見て、ハッキリ分かった。

あれが、父さんの領域。魔法学校なんかじゃ辿り着けない世界。

動きなんか見えない。けれど何となく見なきゃいけない(ゴツン!)
(!!)

「あつう!?!」

「いいから逃げんのよ!!死んだら元も子も無いでしょ!!」

「でも、だって　　!!?!」

後ろを振り向くと、四人が向かい合って魔力を気を練り上げていた。

鳥肌も立たないくらい、凄くて……見た瞬間、死ぬって思った。

そして、それが放たれた。

「ネギ……!!!!」

明日菜さんが走って来て、僕を庇うように抱き締める。

その瞬間、技がぶつかり合って

バシユウウウ！！

「お前ら、オイタはそこまでだ。やるんならガキ共が居ない所でやれ。」

爆発は起こらないで、間には愁磨さんが居た。

父さんの仲間・・・英雄の攻撃を、片手で止めてた。やっぱり、あの人は何か違う。

村に居た優しい旅人で、僕の先生としての先生で、あなたは

「あなたは、一体何なんですか……？」

「……さて、何だろうな？」

S i d e o u t

S i d e 刀子

「ん、んんっ…………。」

「あ、気が付いた？大丈夫、刀子…………って、シュウが治療したのだから大丈夫よね。」

「…………ノワール、さん…………？」

私が目を覚ますと、ベッドの横にノワールさんが座っていて、

刹那が私に被さるように寝ていた。…………この子は…………。

「あ…………助けて頂いて感謝します。」

それで、私はどうなったのでしょうか…？愁磨さんは人外がどう、と…………。」

「ほほう、流石だな葛葉刀子。自分の状況を真っ先に確認するとは。」

兄さまの修業の成果のお陰だな。」

「エヴァンジェリン!？」

一応戦闘態勢を取りますが、刀がありません…………。

神鳴流は武器を選びませんが、真祖相手に徒手空拳では　　兄さま？

「……あの、兄さまと言うのは……愁磨さんの事ですか？」

「ああ、シュウウだったら言っただけで無かったわね。エヴァは私達の兄妹分
で、

私の次のシュウウのハーレム要員よ。」

「ね、姉さま！！／＼／＼ハーレムとはどういう意味だ!？」

「あら、男性がそう言う好意を向けている女性を複数人侍らせたならハーレムでしょう?。」

「た、確かにそう言う好意を向けてはいるが……！！／＼／

だがしかしそう直球で言われると、どうしても恥じが先行してしま
って……………」

しゅ、愁磨さんとノワールさんの義理?の妹が悪の魔法使いで……

愁磨さんは英雄で……?あ、今は犯罪者だから……と言うか初
めは犯罪者でしたね。

えーと、つまり……………。

「愁磨さんは何処に？お礼を言わなければ。」

「ええ、深く考えたら負けだからそれで正解よ。」

シユウは貴女を預けた後、不審者の首を取りに行ったわ。

多分、もう直ぐ帰ってくるから、待ってましよう。」

「む、そうだな……。茶々丸、お茶の用意をしておけ。」

「かしこまりました、マスター。ついでにお茶漬けも用意しておきます。」

エヴァンジェリンが部屋の隅に居た絡繰さんに命令すると、

さも当たり前のように従って下階に下りて行きました。

と言つか、お茶漬け……。ぶぶ漬けて。招きたくない客でも来るのでしょうか？

「ああ、帰って来たみたい。私達も下に行きましょう。」

「え、はあ……。」

ノワールさんの言葉に従い全員が今に着くとほぼ同時、

玄関が開き、愁磨さんが帰って来て……一緒に生徒達とネギ先生が来ます。

「どうぞ皆様、お座りください。…どうぞ召し上がってください。」

「……おやおや、手厳しいでござる。」

お茶より前にぶぶ漬けを出す絡繰さん、着いていけない生徒達とネギ先生。

愁磨さんはそれを意に介さずソファに座り、不機嫌さを隠さずに言います。

「……で、どこから説明して欲しいんだ？」

「ぜ、全部に決まってんでしょー！！」

……今だけは、神楽坂さんに同意しましょう。

第36話 力を持たない少年は知るようです(後書き)

と言っ訳で36話でした。

作「いやもう、色々ツッコミ所詰め込み過ぎた。

結局敵さん正体全く不明だし!？」

愁「相変わらずひどい……。今更か。」

ノワ「いきなり魔法バレしたわね……。何してるのかしら、皆。」
アル「……。申し訳ありません。」

周りを気にできる程余裕が無かったもので。」

作「相変わらず明日菜に守られる原作主人公エ……。」

どうしよう、書いてて本気で気に食わない……。!」

愁「本格的に魔改造?嫌だぞ、面倒だから。」

それでは、また次回……。17〜8日に会おう。」

作愁ノワアル『『アリーヴェデルチ!!!』』

第37話 事件は一先ず決着するようです（前書き）

お久しぶりです、Hate.rです。

と言う訳で、PV208万、ユニーク210,000突破ああああああああああああああああ！！！！

作「この様な拙い小説を沢山の方々に読んで頂き、感謝です！！
そんな今回、説明回？になります。ぶっちゃけ次イベントへのつ
なg……ゲフンゲフン。」

愁「えー、では恒例の行こうか…。

RaiN様、剣の舞姫様、木下文@木下衣玖様、もみじ様、春夏
秋冬様、

omegazer様、アイン様、龍賀様、ながも 様、竜華零
様、やがみ様、灰色様！！

感想ありがとうございます！！

ノワ「アイン様、いつも誤字脱字ありがとうございます。

いつそ誤・作者と言って頂いても……。それでは、第37話。」

作愁ノワ「……どうぞ！！！！」「」「」

第37話 事件は一先ず決着するようです

Side 愁磨

「これは責任問題だぞ！！一体どうするつもりなんだ！？」

「だから、シユウのせいじゃないでしょう。」

これは貴方の大好きな英雄様が引き起こした事態なのよ？」

「バカな、何故大戦の英雄がここにいると言うのだ！

いや、今回の事件の前に！お前達は素性が不明瞭で怪しいのだ！！」

「ガンドルフィーニ、随分偉くなったな？

兄さまをお前呼ばわりとは……………指を全て塗り取ってから八つ裂きにするぞ？」

現在、午前一時半。エヴァオレ・ノワール・エヴァ・アリカ以外の学生組を除く俺達4人は、

図書館島での騒ぎについて言及、詰問・・・いや、口論になっている。

正義の魔法使いガンドル・立派な魔法使いファイニ派信者達は要するに、

魔法バレしたのは構わないが、最悪の魔法使いアーカードと共にいたエヴァと一緒にいて

学園を表裏問わず好きにしている俺達は何者だ、と聞きたいらしい。

「エヴァンジェリン、貴様……！！学園長、全て説明してください！」

「フオッフオッフオ……。こ、困ったのう。」

ああ、大人の話はつまらんなあ……。と言っか、なんでこうなったんだっけ？

えーと、確か図書館島の地下で

回想

「げ、猯下……！！申し訳ございません！！

創造物の身でありながら、御身に刃を振り下ろす所行！この身を持つて

双方の攻撃を受け止めると、侵入者 俺にそっくりな奴が片膝をつき、首を垂れる。

自分にそっくり……いや全く同じ顔に畏まれても気持ち悪いだけだから、

それを制し先を促す。

「いや、また創る徒勞の分無駄だ。それよりお前、冠なは何だ？」

「ハッ、我が名は『ヴァール・レミリエス不可能を冠する者』でございます。

ぞうぶ……、ツエラメル猯下にはヴァナミスとお呼び頂いておりません。」

む、察しが良いな。いや、これはまさか……？

新しく創った答えアンサー・トーカーを出す者の派生能力、『フロウ・テイカー流れを読む者』か。

「ヴァナミス、今回の事は不問とする。話は追って聞くから、今は去れ。」

「し、しかし！私は猯下に攻撃致しましてごさいます！どうか、処罰を……！」

いや、ここでこそ能力使えよ。

呆然となつてるとは言え、ネギ達の前で如何しろって言うんだ？

「だから ああ、そうだ。ここに来る前、人を襲ったのはお前か？」

「ハッ、その通りにございます。そのようにお創り頂きましたので、必然」

「よし、この場で片手足を引き千切れ。それにて忠心を見せる。」

「寛大なそのお心、まさに世界の主たる器……！！」

失礼致します、お目汚しとは存じますが！！ぬ、グ、グググ……！！

左太ももを右手で、右手を左手で鷲掴みにするヴァナミス。

そして、右手の方を若干速く、両手を一気に振り上げる。

ブチブチブチブチブチブチブチブチブチ！！ ゴリッ！

「アアアアアア、アアアアアアアアアアアアアアアアア！！
！！
ブシューウウ！！

叫び声と共に、肉の裂ける音。その後骨を折る音がし、血が吹き出す。

刀子の件の借りは一先ずこの程度で良いだろう。結果的には死んでいないのだから。

「忠心の証、確かに。これにて今回の件は一時不問とする。」

「ゼツ、ゼツ……！有り難き……幸せにございます……」。

では、失礼致します……」。

そう言つて音も無く消えるヴァナミス。……光転移まで使えるのか。

どこまで能力を使えるかは検証する必要があるが、今は……。

「さて、お前、等……。ああ、そりゃそうか。」

「それはそうでござるよ……。きつい事するでござるなあ……」。

振り返ると、妙に静かだったネギ一行は、長瀬を残して全員気絶していた。

……
……
……

「愁磨、あれは一体何なのですか・・・？」

「どうやら、造物主の新たな幹部らしいのじゃが。」

「いや、俺にも分からない。ツエラメルが独自に創ったモノだからな。」

あの様子じゃ、脅威にはならんだろ。俺が死ねって言えば喜んで死ぬだろうし。」

気絶したネギ達は放置、先にアル達と話をする事に。

しかし、こいつら・・・。。。

「んな事より、こいつらに説明しなきゃいけなくなっただろうが。」

仮にも英雄様なんだからしっかりしてくれよ。」

「ああ、スマンな……。この頃戦える場所が無いからな、どうも鈍って……。」

「はあ……。ダイオラマ球貸すから、今回みたいな失態しない様にしてくれ。」

ああ、この分じゃ詠春は酷い事になってんだらうなあ……。

刀子と刹那を弟子にしてた時に釘は刺しておいたけど、書類仕事とかちゃんとと長の仕事に追われて修業してる暇なんてないだろうしな。

「ん、うう………あああつ！？バイトに遅刻しちゃ あれ？」

「む、起きたか。じゃあ俺は後始末があるから、お前等は……」

まあ好きなようにしてくれ。」

「ワシらの不手際で申し訳ないのう。またの、愁磨先生？」

「あ！愁磨先生！！あれ、えつと………何よあれ！？」

ああ、こう言う手合が一番面倒なんだよ。

説明したらしたでバカだから分からなくて、結局分かり易いようにもう一回纏めた説明する羽目になるんだよ。

「神楽坂、もうこんな時間な上、お前等不法侵入だし、
なによりお前バカだけを相手にするのは面倒だ。

俺達の家で説明するから、長瀬とでそいつ等全員起こせ。」

「あいあいでござるよ。」

「ちょっと……今のどう言う事！？確かに私勉強できないしアレだけど……。」

「言うかなんで楓さんはそんなに素直に従ってんのよー……！」

「（死にたくは無いでござるからなあ……。」

「と言つか、さっきのを見てその様な口を利ける明日菜殿が凄いでござるよ。」

「ほらネギ坊主、起きるでござるよ。」

「ちょっと……！無視しないでよー……！」

……

……

…

「どござ皆様、お座りください。…どござ召し上がってください。」

「……おやおや、手厳しいでござるな。」

家に帰るとリビングには、眠っているアリアと一部の寮組もみじ・木乃香以外が揃っていた。

そう言えば、もみじの扱いも考えないとな・・・あとヴァナミスと
ツエ^{造物主}ラメルの事もあるし、

刀子に関しての説明と、一番面倒なのがこいつら・・・！！

「で、何を説明して欲しいんだ？ああ、言っておくが質問と要求は
3つまで。

お前等が話す全てが対象だ、気を付ける。」

「ちょ、ちよっと！意味分かんないわよ、説明しなさいよ！！」

「説明なら今しただろう……。そして分かっていないのはお前だけ
だ。

今は流石に無かった事にしてやるから……………、次、どうぞ？」

「では、愁磨先s「ちよっと待ちなさいってば！！酷くない!？」
明日菜さん……………」

酷いのはお前の頭だ、神楽坂。見てみる綾瀬の呆れ顔を。

思わず同情したくなるほど、この世の端を見たって顔だぞ。

「酷くない。お前らは教えを乞う側、俺は教えてやる側。立場を考
えろ。」

以上だ。あと二つしかないぞ、どうする?」

「ちょ「楓さん、お願いしますです。」

「あいあい」

「ムガガ、ムガムムム~~~~!!」

長瀬が口を押さえ、ズルズルと引き摺られて行く神楽坂。

ただでさえ尺が無いんだから邪魔しないで欲しいな。

「では、愁磨先生……。先程の四人との関係と、貴方達の正体を教えてくださいです。」

「ああ、それだ、そう言うのを待っていた。しかし敢えて聞こう。

本当にそれでいいのか?」

「はい、これで知りたい事は全て聞けると思えますですから。」

やはり、この中で一番キレるのは綾瀬か。

頭は良いがしかし、目先の不思議に……。知識欲に目が行き過ぎだな。

「では一つ、先程の虹色の髪の俺。

俺とあいつの関係は創造者同等の…王と家臣と言ったところだ。

あとの三人、あいつらとは戦友、パーティーメンバー、……英雄仲間だな。」

「えっ、英雄……?!それって、父さんの仲間って言う事ですか!」?

「…最後、俺達の正体、な……。一番しっくり来るのは、そうだな……。」

『俺の、ハーレムだツツ!!』だな。」

ネギの質問は番外だから無視し、綾瀬の質問に答え切る。

「さて、答えられていない点はあるかな?」

「………ああ、その、突っ込むのもあれです……。」

ハーレムとは愁磨先生との関係であって、正体では無いです。」

「そう言えばそうだな……。肩書きでも言えば良いのか?」

俺は魔人、英雄、大犯罪者、創造主。ノワールは墮天使、アリアは天使。

エヴァは真祖：吸血鬼、アリカは無き王国の王女、真名は半魔族、

刹那は半鳥人、もみじは魔王。刀子はたったさっき吸血鬼になった。

「

・・・ああ、そりゃ胡散臭い目で見られるだろうな。

真剣なのは、こちら側の存在を知っている魔法使いネギと忍者長瀬だけだった。

回想終了

その後、散々ナギの事を聞いてくるネギを見て試験もあると思いだし、

全員の記憶を物理・精神・魔力・神力的に封印して寮に帰し、

寝るかとなった所に警備をしていた刀子が行方不明、

俺達が犯人だろうと決め付けたガンドル達が来て

「今に至る、と……。」

「何を訳の分からない事を言っている！！疚しい事があるから説明

その正体不明の奴の説明でお前等は満足するのか？しないだろう、嘘だと言って。」

『マギステル・マギ
正義の魔法使い』の象徴、元老院は不正・失態ばかり、

遂には俺達の傀儡と化し、処刑済みの俺とエルザさんは生存中。

犯罪者の俺が学園の平和を守って、教師をしてる

言ったところで、正義を妄信している頭岩ドルフィーニは信じないだろう。

「何度も言うが、俺達に手を出さなければこちらも手を出さない。

足も武器も魔法も出さない。では、義理は果たした。」

「な、待て！まだ話は 「『跪け』」 ガツ！？」

「身の程を弁えろ、と言っているのだ。

俺の戯れ程度で動けない様な、何も自分で掴もうとしない雑魚が粹がるな。

行こう、ノワール、エヴァ。」

「ちゃんと部下は統率しないとダメよ、近右衛門。」

「……フン。」

ああ、今日は疲れた……。

S i d e o u t

S i d e 近右衛門

「クツ、調子に乗って……!」

愁磨殿が出て行って、漸くガンドルフィーニ君が立ち上がる。

むう、あの様子ではやはり、ネギ君の修業には付き合ってくれん
う。

「仕方あるまいて、ああ言う手会いじゃからのう。

それよりも今は、ネギ君のスキルアップが先決じゃ。」

「そ、それもそうですね……。

それでは、学園に潜む魔族を討つ計画を遂に……?」

「そうじゃのう。本国の応援も来るようじゃから、一ヶ月内には準備が整う。」

ネギ君への通達方法は……分かっておるじゃろっ?」

「はい、全て計画通りです。徐々に広まっていますし、もう直ぐ耳に届く頃でしょう。」

さてさて、魔王相手とは果してどうなる事かのう……。

恥とは思つが、有事の時の為……愁磨殿に相手をして貰うかの。

S i d e o u t

後日、テスト結果発表

綾瀬夕映、平均81点。

神楽坂明日菜、平均73点。

古菲、平均85点。

佐々木まき絵、平均76点。

長瀬楓、平均83点。

図書館島の侵入者、協力勇士により撃退成功。

Side 千雨

『 と言う訳で、新年度から正式に英語科教員となる、

ネギ・スプリングフィールド先生じゃ。彼には3-A担任を務めて貰う。』

なんじゃそりゃあああああああああ！？

有り得ねえだろ！！

「うーん、ネギ君が担任かー。悪くは無いんだけどなー。」

「……明石、お前も変に思うのか？」

「おおー！？長谷川さんから話しかけて来るとは珍しいね！

変、って言うか……。愁磨先生の方が良かったかなー、なんて思ったり……。」

ふーん。まあ、気にもなるか。

去年の誕生日イベント以来、結構良くして貰ってるみてーだし。

・・・ま、私はどっちでもいいんだけどな。

愁磨先生の方が良かったとは思うけど、鬱イベントでも起こらねー限り

どっでもいいぢ。

S i d e o u t

第37話 事件は一先ず決着するようです（後書き）

つと言う訳で37話でした！

作「途中でキンクリしたのは他でもありません。

自分で書いててネギがウザ過ぎてブチ切れました」

愁「と言う訳で500字くらい？消去。

良いよネギ、お前はいつそそのままで……。」「

作「さて次回は漸く原作で言う3巻目。しかし跡形も無いと思うのでご注意を。」「

ノワ「それと、200万記念に番外編リクエストでもコラボでも、

何かあつたらよろしくお願いしますね。来たためしが無いけれど。

愁「それじゃあ、また次回会おう！……」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ！！！！」「」

第38話 少年とフラグが立っていくようです(前書き)

お久しぶりです、H a t e . r です。

作「ギリギリ、今日投稿です。すっごい短いけど。」

ノワ「お待たせした揚句、申し訳ないわ……。」

とりあえず、いつものを行きましようか。」

愁「木下文@木下衣玖様、春夏秋冬様、竜華零様、オレンジ様、アイン様、

om e g a z e r o 様、もみじ様、龍賀様、灰色様、やがみ様、

なおぼん様、龍牙様、

ぬけさく様。感想ありがとうございます!!。」

作「さて、今回は次展開への布石だと思っていただければ。

ええ、短い事の言い訳だと思っていただければ…orz」

愁「とりあえず、次回に期待……? それでは38話!!。」

作愁ノワ「「どうぞ!!」「」」

「うえ！？あ、悪魔、ですか？」

「そーそー！今麻帆良中で噂になってるんだよ！」

「なんでも、願い事3つ叶えて魂を持つてつたり、

おなかが減ったら人を食べちゃうらしーよ！」

悪魔とか魔族がいるのはもちろん知ってるけど、

燃える家

石になった人達

麻帆良は結界があるから、そういうのは入って来れないって聞いたけどなあ？

目の前の異形

灰色の人達

もし入って来れても、ごく弱い魔族だつて聞いたし……。

倒れるお姉ちゃん

目の前で石になるスタンさん
でも、そういうのを倒す人達が居るから心配ないって学園長先生言つてたしな。

拳

翼

雷

怖い……

「そ、そんなの居る訳ないじゃないですかー、いやだなー。」

「えー！居るかも知れないじゃん！！」

あ、ネギ君はもし願い事叶えて貰うとしたらどうするっ。」

「僕ですか？僕、は……………」

僕の夢は、父さんと同じ『正義マキステル・マキの魔法使い』になる事で…………。

父さん

悪魔

仇

仇

仇

だから、もしその悪魔が目の前に来たら…………、

仇

仇

正義

敵

敵

敵

敵 敵

僕は、父さんと同じ様に、みんなの為に、その悪魔を

「ネギ君？どうしたの、そんな怖い顔して？」

「えっ！？あ、いえ、何でもありません！お願い、ですか！」

アハハハ、もっと先生らしくしてもらいたいですねー。」

気が付くと、まき絵さんが僕の顔を覗き込んでた。

僕、怖い顔してたかなあ？そんな事考えてないんだけど…………？

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「で、こんなんで本当に満足したのか、連中は。」

「フオッフオッフオ。恐らく一時的に、じゃと思うがの。」

愁磨殿が何もしないんじゃないじゃったら手を出して来んじゃないろう。」

「貴方もつくづくバカね。あの人達、何か気に入らない事があったら

私達に突っかかって来るに決まってるじゃない。」

「そんな事も学習出来んのか、小僧が。所詮は人間と言う事か……。」

正義万歳魔法使い共があまりにうるさかったので、

ネギを表面・書類上俺より上に就けた途端、静かになった。

愚かとしか言いようが無い。しっぺ返しの後始末をするのは俺達大人

いや、基本俺だからいいのか。……殺してえ……。

「まあ、それは置いといて。」

お前等、またいらん事してるようじゃないか？なんだ、悪魔って

「？」

「それがのう、本当におるから困っとるのじゃよ。」

下の者達もやる気でのう……。」

「どうせ貴方が上が喉けたのでしょうか？まあ、私達には関係ない事でしょうけれど。」

「フオツフオ。そう言ってもおれんでの。」

夜の警備を嚴重にしたいのじゃが、手伝ってはくれんかのう？」

「却下だ。これ以上仕事が増えちゃたまらんし、

何より謎の悪魔退治に使おうって腹積りだろ？」

麻帆良には悪魔だの魔族だの、妖怪、侵入者、e t c . . . が良く来るし、

今の警備の仕事で手一杯だ。（担当範囲が麻帆良全域だからな。）

それに、（いつもの事だが）最初から利用しようと言うスタンスが気に食わない。

「一回戦って手に負えんようなら助太刀してやるよ。」

大公でも無い限り、今のお前なら楽勝だろう？」

「フオッフオ、それは過大評価というものじゃ。」

「じゃが、一応数には入れておくからの。おお、その分は別途支払わせてもらうからの。」

「そこら^金辺の心配はしてないよ。じゃ、授業があるから。」

悪魔階級　　貴族階級と言った方がいいかもしれない　　は、
下から

男爵　子爵　伯爵　侯爵　公爵　大公　皇帝。主なモノは以上、7
階級。

皇帝の上には一魔神、魔王、地獄王という称号のみがある。

「……………刀子。」

「はい、愁磨さん。ここに。」

学長室から離れ呼ぶと、スウツと影から現れる刀子。

吸血鬼化してからの刀子には主に諜報役を任せている。耳も夜目も良くなってるからな。

「悪魔共の出現、ここ数週間でどれだけ増えた？」

「はい、日増し日増しに……。以前は一日に5〜6体くらいでしたが、

二週間前は平均20体、一週間前は46体、昨日一昨日は既に100体を超えましたし、

最近では男爵・子爵は当たり前。一昨日は遂に伯爵級まで現れました。」

「ふむ……なにが起こってるんだかね。引き続き頼む。」

麻帆良全体で100体だから恐ろしく密集率は低いが、

単純に一カ月で25倍。いや、週で倍々ゲームになっていると思っただ方がいいかも知れない。

うーん、（悪魔側の）地獄で何か起こってるのか……？

Side out

Side ネギ

「悪魔、ですか！？本当にいるなんて……。」

「そうなのじゃ。最近は数がかなり増えてのう、猫の手も借りたい状況なのじゃよ。」

悪魔・・・僕の村を、みんなの仇・・・!!

「手伝わせてください、お願いします!!」

「フオ。しかし、本当に良いのかの？悪魔は手加減してくれんぞい？」

・・・分かってる。

修行をつけてくれてる瀬流彦先生とか神多羅木先生とは違って、

あいつらは本気で来る。そんなことは分かってる・・・!!

「でも、僕は戦わなきゃ・・・あいつらと戦わないといけないんです
!..!」

「フウム……、では明日から頼むぞい。じゃが、護衛はつけるから
のう。」

「ハイ、分かってます!!」

僕だって、ちょっとは強くなったんだ。

誰かを守るくらい、役に立つくらいならできるんだ……!!

だから、みんなを、みんなの仇を取って……

父さんみたいに、誰かを助けるんだ！

第38話 少年とフラグが立っていくようです(後書き)

というわけで38話でした。

作「事後報告と次回フラグ回。

変換に十数秒、決定に十数秒かかってやる気がこったとも言いますが…。」

愁「最初に出した設定並みに短かったな……。」

まあ、PC復帰の練習だと思ってくれ思ってください。」

ノワ「次回は来週中頃に、だそうよ。では、また次回。」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ!!!」「」「」

第39話 魔帆良は悪魔達と戦つようです(前書き)

と、言う訳で再投稿&お久しぶりです。

例のごとく、感想関係は40話で。

辞典に入れた短縮がないって、つらい・・・。

それでは、どうぞ！

第39話 魔帆良は悪魔達と戦つようです

Side ネギ

「デイグ・デイル・ディリック・ヴォルホール！

ウエルタル・ライネホエスティーウオリース・カルカレキルクムウエルテンテム
逆巻け 夏・の嵐彼の者等に竜巻く牢獄を

フランスカカルウエウテルテンティス
『風花旋風風牢壁！！』

「ダルク・ネルク・ペトネーレ！

悪しき者封ずる守護盾を！！『ラゲニアスワードアンジエ防魔円環楯』！！』

【コシャクナ！この程度で我ヲ止メラレルト思ウテカ！】

「数秒止まれば十分だよ！ネギ君！！』

「ハイ！！闇を貫きて敵を討て孤高の光！！』

瀬流彦先生とヒゲグ・・・神多羅木先生が悪魔の動きを止め、

詠唱遅延していた、今の僕に使える対悪魔最高の魔法を放つ！！

ラウソウウエチエクニクタ
『『穿つ聖天』！！』

【ソノ程度――！！デモンズ・アツパアアア―！！】
ドガガガガガガガガガガガガガガガガ！！

技がぶつかり合って、黒い閃光がだんだん僕の魔法を押しってくる。

【所詮ガキナゾ、コンナモノカアア！！】

「うう、くううう・・・。」

そうだ。僕はまだ弱い、けど・・・！！

「お前なんかには、負けられるかああああああああああああ！！」
ガオオウ！！！！

【ツナ！？】

魔力を思い切り込め直すと、白い閃光が黒い閃光を掻き消し、
悪魔を貫くと、悪魔が砂のように崩れていく。

【ソナナ！風穴程度デ、我が！？コノカハ、マサカアノ御方―！】

「まで！あの御方っていうのは・・・。」

ぼくが言い終える前に、悪魔は崩れ去ってしまった。

「うん、こいつもなのか。あの御方って一体誰なんだろうね？」

僕が倒すと、悪魔が必ず言う”あの御方”。

学園長先生が雇った凄腕の人達が探してるんだけど、

一向に見つかる気配がないみたいだ。

「・・・ネギ君と言うよりも、ネギ君の技に反応しているようだな。

独学で習得したのだったな？」

「あ、ハイ。古文書に書いてあった退魔呪文をもとにして、

僕に使えるレベルの魔法に組み立てたんです。」

これは、実はちょっとだけ嘘。

本当はメルディアナ魔法学校の禁書庫にあった”滅魔呪文”をもとに組み立てた魔法。

「しかし、この一ヶ月でネギ君は随分成長したね。」

「ああ。攻撃力の面では、魔法先生で10人以内に確実に入るだろ

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「ツクシー!!」

【隙アリイイイイツ!!!】

「つと、こんなのが隙になるか戯けが！」支配ノススメ” 剣聖”
!!」

”魂喰らい”で切りかかってきた子爵を逆に切り捨て、

周りの悪魔達を見回す。

「毎日毎日ご苦労なこつた。

で、そろそろご主人様の事話したくなったりしないかな?」

「私たちの王の友と言っても、言う訳にはいかないのだよ!!」

「地獄にお友達作った覚えはねえし、

手下しか寄越さねえビビりも知らねえよ!!」

ここでの地獄は、天界にあった地獄ではなく、本物の地獄のこと。

天界界の地獄、地獄界の地獄とでも言えばいいのだろうか。

「ッハ！あの魔王に限ってそれないよ！！」

「魔王ね……。数人心当たりがあるから困るよ！！」

（「シュウ、お取り込み中ごめんなさい。聞こえるかしら？」）

（「ん？ノワールの声なら、何時でも聞こえるぞ？」）

大公級と思われる奴と公戦していると、ノワールから念話 came。

今の兵装じゃ余裕がある訳じゃないんだが、ノワールのためなら。

／＼（「そういう小恥ずかしい事は置いておいてくれるかしら……／

こっち、侯爵と公爵がわんさかいて面倒だから、あれやってくれる？」）

（「ん、皆時間かかっているみたいだし了解した。」）

プンツと念話を切り、悪魔から一気に距離をとる。

「と言うことで。大公級とやる機会は早々ないから、

もっと楽しみたかったんだけど。妻のお願いなら仕方ないよな？」

「うむ、それなら仕方ない。ならばこちらは一斉にー」

「あ、その心配には及ばない。どうせ一撃だ。」

俺は手を合わせると、手の平の間に魔力で球体を作り上げる。

「形態変化”妖精尾長”・・・じゃ、またいつか。」

「・・・！！全員退」

「フェアリー・ロウ妖精の法律」

唱えると光が麻帆良中に広がり、俺が敵と見なした全てを葬っていく。

・・・魔法先生、死んでないだろうな？

.....

.....

...

バンツッ！！

「貴様、どういづつもりだ!!」

お前の魔法のせいで職員18名が重傷だ!!どう責任を・・・」

「正確には、悪魔による重傷者10名、

俺の魔法による重傷者10名な。

ジジイ、病院送りになった全員分の警備担当のリストを。」

悪魔を”フェアリー・ロウ妖精の法律”で一掃した後、味方陣の被害を聞きに来たら

案の定、正義信奉者数名に当たっていた。

・・・何故こいつ（ガンドル）は無事だったんだ？

「ほい、これとこれと・・・これじゃな。」

「最後の3つは悪魔との戦闘で病院送りになった奴等だ、俺には関係ない。」

・・・うん、明日からこいつ等の復帰まで、俺がこの地域全部担当する。

問題ないだろ、それで?」

「どうせなら毎日あれで片づけてくれんかのう?」

負傷者は無くて済むんじゃないが。」

「三日後に魔法教師全滅してもいいなら構わんが？」

(球) 半径150km内を一掃する対戦争魔法だぞ？

どんだけ魔力消費すると思ってるんだ。一日3発が限界だよ。

・・・アーカード解放使えば・・・いや、言うのもアホらしい。

「じゃ、今日はこれで。おつかれ。」

「待て！！まだ話はー」

「だー！！アリアが眠いって言うてるんだよ！！」

一緒に寝るんだから邪魔するな！！」

「ぐ、むむむ・・・む、娘の為となれば仕方ないか。」

・・・ああ、そういえばこいつも子(娘) 煩惱だったっけ。

あの熱い夜が懐かしい。・・・BL要素は一切含まないぞ？

S i d e o u t

そして数日が経ち、4月15日。大停電の日――

Side ネギ

「いや、最近悪魔の襲撃が減って助かるね。」

「でも、何でいきなり減ったんでしょう？」

200体くらい来てたのに、もう数体しか……。」

「ま、楽なのに越したことは無いよ。っと通信だ。ハイ、学園長。No.3です。」

（「フォツフォ、瀬流彦君、ネギ君。今夜はもうあがって良いぞ。

神多羅木君が居ない分頑張ったご褒美じゃ。」）

「おっ、ありがとうございます！では……。……だってさ。

明日も修行するんだからこう言うときは早く寝なよ？」

「ハイ、分かりました！おやすみなさい。

……。しょうがないっか。僕も部屋に戻る……ん？」

寮の部屋に戻ろうとしたとき、変な魔力を感じた。

え〜っと、あっちって大橋の方だったよね？

・・・悪魔とかが居ないか、確認するだけ・・・。

Side out

Side もみじ

「レヴィ〜〜〜!!」

「おっと。相変わらず元気そうだな、アスモデウス

・・・いや、もみじと言った方がいいのかな。」

なんだか学園が真っ暗になった時、懐かしい魔力を感じて

大橋の方に来てみたら、レヴィが居た。・・・なんで？

「妙な騒ぎを起こすのもどうかと思ってな。

結果が解けたようだから様子を見に来たんだ。」

「そうなんだ〜。えへへ、久しぶり〜」

やっぱりレヴィは優しいな。地獄にいた時からずっと。

って、そうだ。愁磨に頼まれてたんだ。

「ねね、レヴィ。最近悪魔がすごい来てたんだけど、

地獄で何かあった？」

「ん、実は魔王が新しく一人入ったんだけど、

そいつが魔人殿とやらで、祭りの前菜とか何とか言ってたよ。」

あ、ボクの代わり？がやっと入ったんだ。

ってというか愁磨、魔王になるような人と知り合いなんだ……。

元魔王とか元大天使長とか居るから今更だけど。

「そういうお前は、魔人殿とはどうなって……何者だ。」

「ふえ？」

レヴィが魔力を飛ばした先を見ると、ガサガサって草むらが揺れて、

大きな杖をこっちに向けて出てきたのは……

「どう言っ事ですか、もみじさん・・・いえ、悪魔！」

「ネギせんせー・・・。」

Side out

Side ネギ

地獄にいた？悪魔？魔王？今までの話からすると、

もみじさんは元魔王で、隣の人は現魔王・・・。だったら！

「魔王さんなら、分かる筈です！！」

……六年前、ウェールズで僕の村を襲った悪魔達を！！」

「六年ま・・・ッ！？」

”六年前”に、もみじさんが反応する。

・・・やっぱり、この人達は知っている！！

「もみじさん！！教えてください、そいつらは・・・」

「知ってどうする、人間。」

「決まっています！村のみんなの敵を討つんです！！」

もみじさんを庇うように立った紫色の髪の女の人に、杖を向けたまま、言い放つ。

「そうか……。その仇とやらはな、ここにいるもみじ……」

アスモデウスが率いていたのだよ、人間。」

「……！！！」魔法の射手 連弾・雷光の200矢”！！！！”

聞いた瞬間、体が勝手に呪文を唱え、雷を纏った光の矢が

アスモデウスともう一人の魔王を襲つた。

貫通と麻痺を持った矢が200本も当たれば、魔王といつても……

「……やれやれ、戦の作法も知らんのか。」

「そんな……。無傷！？」

「人間にははかなり多い魔力のようだな。」

しかし、私には効かない。ただそれだけだ。」

くそつ、なんで、なんで邪魔をするんだ……！！

あいつを倒せば、みんなの仇を討てるのに！！

「邪魔をするなああああ！！」ラッソウエチエクニクタ 穿つ聖天”！！！”
ガイイイン！！

「ほう、”悪魔喰らい”の技か！これを使える人間が居るとは！

しかし、これではせいぜい伯爵程度しか倒せまいて。」

バシユウ！と僕の魔法は簡単に握りつぶされる。

そんな……！悪魔に、あれ以上の魔法は今は無いの……。

「成る程、天才型……。その歳で挫折を知れ、と言う方が酷か。

厭、この子が私と居る時に挑んで来た不運と浅慮を呪え。」

「あ、レヴィ、だめ……！！！」

鎌が僕の首に添えられ、振り被られる。

ダメだ、僕にはもう、どうすることも出来ない……。

「安心しろ、痛みなど感じん。」
ビュン！！

「ダメええええええ！！」

パシッー

「恐れで目を瞑ったら死ぬと思え。最後まで足掻け。

お前のような”主人公”には、もっともつと、みつともなく這いずり回って貰わないと”面白くない”んだよ。」

「「……………え？」」

振り下ろされた鎌を掴んで、僕の前に立ったのは、

黒い騎士服を着た、愁磨さんだった。

S i d e o u t

S i d e ノワール

「魔人殿、手を離しては頂けないか？そいつは……」

「ああ、もみじに手を出そうとしたのは知っているが、

ここで死んで貰っちゃ困るんだよ。」

大橋に着いてから暫く成り行きを見ていた私達だったけれど、坊やが殺されては面倒だから、仕方なく出て行った。

「レヴィアタン、ここは退いてくれないかしら？」

この子は私達がいじめる……叱っておくから。」

「抜かせ、ルシフェル！！この小僧は」

キキキキキンッ

「……聞き分けのない子は、嫌いなのだけれど？」

「クッ……！！」

シユウの掴んでいた鎌を細切れにして、レヴィアタンに

”明星の彗星”を突きつける。

「あ、あわわ、の、ノワール？そこら辺にしてあげてくれない、かな？

レヴィはボクの為にやったんだし、悪いのはネギせんせーなんだし……。」

「…そうね、被害者がそう言っているのだから、良しとしましょう。」

「……いいだろう。」

この子も、相変わらず過保護ね。妹同然だから仕方ないのだけれど。

「ふう…今日の所はもう帰りなさい。」

妙な騒ぎを起こさない為に今日来たのに、無駄でしょう?」

「……ではな、もみじ。また来る。」

「う、うん……。レヴィも元気だね。」

もみじちゃんの頭を一撫ですると、坊やを射殺さんばかりに睨んでからレヴィアタンは帰っていった。

「さて、どうしようかし」あああああああ!!!」

だから、物分かりの悪い子は嫌いだって言ったでしょう…。!!」

護衛が居なくなつた瞬間坊やがもみじちゃんに魔法を撃つて来たか

ら、

”^{イジス}反転魔鏡”で跳ね返してあげた。

「ククク、ノワールが喋っているのを遮るとはいい度胸だ小僧。

選べ、魂が死ぬか肉体が死ぬか精神が死ぬかださあ選べ!!」

「シユウ、気絶してるから無駄よ。さっさと記憶封印して帰して、帰りましょう。」

嫌になるわ。報告したら、またガンドルちゃんのを

お小言に付き合わされるのかしら？

「……いや、記憶はこのままにして帰そう。」

「その方が面白いから、かしら？それとも進める為なのかしら？」

シユウは両方正解、と言う顔を見ると、坊やを寮へ転移させた。

全く、責任は持たないわよ？……支えてはあげるけれど。

S i d e o u t

翌日、朝……

Side ネギ

「はぁぁ……。」

昨日大橋で気を失って、気がつくと寮の部屋で寝てた。

どう考えても愁磨さん達が送ってくれたんだよね……。

分からないよ……、村を襲った悪魔は魔王で生徒だし、

父さんの知り合いっぽい愁磨さんは、そのもみじさんの……保護者？だし……。

「あ~~~~!!どうしたらいいんだよおお!!」

もみじさんは生徒だから仇も討てな……そもそも愁磨さん達が居るし、

と言うか、もみじさんも魔王なんだからボクが勝てるわけ無いよ!

「よー、困ってるみてえだなアニキ!」

「そうだよ、困ってるんだよぉ~~~~!猫の手も借りたいよ!」

「へっへ、猫じゃありませんが、オコジヨの手でしたら貸せますぜ?」

いや、日本のことわざでそれくらい忙しいって意味で、

本当に猫の手なんか借りれるわけないし、ましてやオコジヨ・・・

「……オコ、ジヨ?」

「そうですあ! 正確にはオコジヨ妖精ですがね。」

隣を見ると、そこにいたのはタバコを持ってトレンチコートを着た・
・

「カモ君!」

「へっ、お久しぶりでさあアニキ!」

第39話 魔帆良は悪魔達と戦つようです(後書き)

ルビと少々書き足した39話でしたっ！

久しぶりに書くと、何を書けばいいか分からなくなりますねーw

では、また次回！アリーヴェデルチ！！

第40話 少年達は尾行するようです(前書き)

お久しぶりです、H a t e . rでございます。

作「同窓会的飲み会あったりだとか急に実家の墓参りがあったりで、ギリギリになってしまいました！」

愁「えるしっているか にちようびは つぎのしゅうだ。」
作「ええい、黙らっしやい！！と言っ訳で恒例の！」

ノワ「コホン。

xx様、龍賀様、春夏秋冬様、東方在住宵闇系幻想少女様、もみじ様、

オイラム様、スルメ様、IRIS・T・O・P様、yh様、なおぼん様、ケルベルス様、

アイン様、神夜 晶様、灰色様、HINA 様、Rain様、refine様、

ライコウ様、冠様、omegazer様っ！フウ……。」

作「感想・訂正・質問ありがとうございます！ノワールさんご苦労様です。」

愁「では、久しぶりに！」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ！」「」

第40話 少年達は尾行するようです

Side カモミール

「……実家に帰らせていただきやすー!!」

「ええっ!? ちょ、ちょっとまってよー!ー!ー!ー!」

「放して下せえ! いくらアニキの頼みとはいえ、こればかりは聞けねえッス!」

俺ツチが実家からアニキを追いかけて、日本まで来たその日、

アニキがシケた面をしてたから理由を聞いたところ……

「なんで『アーカード』と敵対してんスカー!ー!」

容姿は絶世の美女、『大魔導士』三人とやりあった最強の魔法使い。

しかしその実態は残酷卑劣、極悪非道、冷酷無比、見敵必殺。

魔法界の子供には常に、『早く寝ないとアーカードが町を滅ぼしに来る』

と親に真剣に言われるほどの悪魔。

なんで生きてんのかとか色々問題はつきねえが……。

「わかりやした、とりあえず話は聞きますんで、放して下さい。」

「うん！ありがとうカモ君！」

再びテーブルに陣取り、アニキの話を聞くことにする。

じゃねえとあのまま握りつぶされて、中身飛び出そうだったしな……。

「……………つまり、アニキの村を襲った悪魔の頭……………よええ？魔王さんが生徒で。」

その魔王さんをアーカード…愁磨とやらが守ってる、と。そういう事ですね？」

「うん、そうなんだ……………。前に愁磨さんが話してくれたんだけど、なんでか忘れてて……………。」

たぶん、忘却呪文だと思う。」

アニキの魔法抵抗は覇屑無しに高けえ。

単純に魔力が多いってのもあるが、他にもあるみてえ……………要する

に、愁磨とやらの実力は、

そこいらのエリート魔法使いよりも数段・・・いや、魔王を従えて
るってんだから、

数十段上って事だ。

「更に周りには元魔王兼元大天使長、元天使、真祖の吸血鬼、元王
女、神鳴流剣士、

半悪魔^{ハーフ}、半鳥族……とまあ、

ひでえ有様ですな、こりゃ。

なんで麻帆良が無事なのか、大丈夫な要素を探すだけで精一杯です
ぜ？」

「うう〜ん、学園長先生が絡んでるのは間違いないと思うんだ。

脅されてるのかどうかは、分かんないけど……。

でも良い先生だし、父さんと同じ英雄の一人だって言うし、うう〜
〜ん……。」

なるほど……。他の魔法先生とやらにしちゃ、ちよいと面倒な相
手だがそれだけ。

だが、アニキにとっては”村を滅ぼした仇”と”父の友”が付いて

るからややこしいのか。

英雄の父持つてるってのはめんどくせえッスねえ。

「で、結局どうするのよ？」

「それでヤスねえ。とりあえず近辺調査してから、……………」

「でも、あの人達を尾行なんてできるのか……………」

アニキと顔を見合わせ、横を見ると……………。

「あ、明日菜さんんんんんんん！？」

オレンジ髪の女生徒……………一般人っぽい女生徒が、そこにいた。

Day 1

Side 愁磨

「す、すいません愁磨さん。態々手伝っていただいて……………」

「いやいや、刀子の方から誘ってくれるなんて珍しいしな。」

刀子の頼みなら聞かない訳にはいかないだろう？」

休日、刀子に買い物誘いを受け、街に出てきた。

あ、刀子は既に全員の血を飲んで、完全に陽の下でも動けるようになった。

……のはいいんだが。

「（気付いてるか？なんか無粋な輩がいるんだが……。）」

「（ええ、家を出てからずっとついてきてますね。）

困惑、好奇、あと……いやな感じがします。」

「（ウチのクラスの奴等か？ま、いいか。）」

この前の騒ぎの事もあるし、ネギとカモ……カモネギの可能性が高いな。

とにかく今は刀子との買い物……これもデートに入るんだろうか？

刀子にそんな気があるのかが問題だが。

嫌われてはいないよな？こんな風に誘ってくれるわけだし、一応師弟ではあるし……。

うーん、刀子は分かりにくいんだよなあ。

Side out

Side ネギ

「……であれどつなのよ？ぶっちゃけデートにしか見えないんだけど。」

「ですよねえ？姐さん。怪しいところなんて欠片も見えませんぜ。」

あの後、結局明日菜さんに強引に話を聞かれて、こうして愁磨さんの尾行をすることになった。

でも、明日菜さんはなぜか忘却魔法の効きが弱かったみたいで、

愁磨さんが僕と同じ側の人間だって事と、図書館の事も覚えてたから……。

「だから、仕方なかったんですぅ……。」

「ん？なんか言った？」

「いえ、何でもないです……。」

結論、尾行して怪しかったら行動開始。そうでない場合は、

学園を一応、かなり、守ってくれているから何もしないで次の行動を見る。って事になったんだ。

幸い、カモ君の魔法（妖精魔法とか言うんだって）のお陰で、僕たち誰か

もつと良かったら、尾行してる事に愁磨さんたちは気付いていない。それは無いだろうけど。

「しっかしアニキ。ここからじゃ何も聞こえませんか？」

「そうね……。会話が聞こえないんじゃない、怪しいかどうかも分からないわよね。」

「あ、大丈夫です。風の初期魔法と基礎魔法を使えば、遠くの声も聞けます。」

「最初っからやりなさいよ!！」

うう、愁磨さん相手に慎重になり過ぎるって事はないから、様子を見て、

今からやるうとしてたのに……。

「風よ、精霊よ 彼方より此方へ導け」ウエルト・ライアーント『風陽光』

「これでどうですか？」

「あ、ホントだ。聞こえる。」

『 子刀子、これなんかいいんじゃないか？』

『 え、そんな！？そのような可愛いもの、私には似合いませんよ！』

『 そうか、刀子は綺麗系だからな。花よりはこっちの三日月の方が似合うかな？』

『 で、ですから髪飾りなんて 』

「 ……………デートよね、ただの。」

「 ……………デートでヤスね、ただの。」

結局、なんの情報も無いまま、愁磨さんたちは買い物をして帰って行った。

……次の日、刀子先生が髪飾りをちゃんと付けてたのは余談。

「愁磨ー！へぶっ！」

翌日、屋上。

愁磨さんとアスモテウスもみじさんが連れだって教室から出るのを見て、

僕と明日菜さん、カモ君の三人（二人と一匹？）は昨日のように影から見ることにした。

愁磨さんがもみじさんを助けて、それでももみじさんは愁磨さんを好きになっただらしくって、

毎日アタック（体当たりの意味も含めて）してるのをよく見かける。

飛びつく度に避けられて壁にぶつかり、地面にスライディング、一昨日なんて池に落ちてた。

「ねえネギ。朱里さんがって本当に…えっと、魔王？なの？」

私には、どう見ても、その……………」

「あつしにも、恋してる女子中学生にしか見えませんぜ。」

僕だって、毎日学校でもみじさんの事を見てるから同感だ。

ああ、どうしよう、どうしよう!?

まさかこんなことになるんだったら洋服の三つや四つや百持っておくべきだった!

ってそんなに持っていたらどれを着るか迷って待ち合わせに遅れてしまう!?

「せつちゃーん!そろそろ出えんと、時間に遅れてまうよー!。」

「ちょっと待ってってー!」

(せめて一昨日言ってくればよかったのに!このちゃんのバカ!ー!ー!)

ってええい、迷っている時間はもうない!」

持っている服の中で一番見れる服に3秒で着替えると、”夕風”を背負い寮の自室を飛び出した。

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「あっちから誘ったくせに、おっそいなあいつら。」

飛び石連休（連休と言っていいものなのか）一日目に行った刀子とデート（木乃香談）

を見られたらしく、木乃香が昨日、

『ずるいー！私らも愁磨はんとデートしたいー！』

と言って来て、休日返上で買い物に付き合う事となった。

『私ら』と言っているように、刹那も来るらしく。こうして寮前で待機しているんだが

「愁磨せんせー、おはようございまーす！ってかこんにちは？」

「あ、ああ。おはよう。どっちでもいいと思っぞ。」

「こんにちはは。寮前にいるなんて珍しいですね。何しているんですか？」

「ちょっと、学園長からの頼まれ事だ。気にする事じゃない」

部活や買い物に行くため、寮から出てくる生徒皆に声を掛けられるので困る。

まさか生徒とデート（三人で行くのはデートなのかは置いて）
に行くとは言えないし、

「いや、別に」だとなんか怪しい（女子寮にいても違和感皆無なの
も置いて）

「しゅーまはーん！ごめんなあ、待ったあ？」

「す、すみません！服を選ぶのに時間がかかってしまいました！」

と、玄関から二人が走ってきた。

謝りながらもいつもの笑顔の木乃香は、白のワンピースにピンクの
ふわふわした上着。

あわあわと謝っている刹那は、袖のないYシャツに黒のネクタイと
同色のパンツ。

これだけを見れば、かわいい子に振り回される生真面目中学生だろ
う。

一方の持ち物がポーチで一方が真剣でなければ。

「刹那、時間かかったと言ってもいつも通りじゃないか。」

「うう、申し訳ありません……。」

苦笑しながら言うと、シヨボーンと落ち込むサイドテール娘。

ジョークと取れないんだな、相変わらず。

「気にすることないよ。刹那の魅力を隠してしまう服よりはずっと良い。」

むしろ魅力的だ、俺が保証する。」

「は……？……！？／＼え、いえ、私などが魅力的である筈がありません！」

いえ、愁磨さんが嘘つきとかそういう意味ではなくてですね？！」

顔を真っ赤にし、千手観音の如く手をバタバタする刹那。

なに、この子。思った通りの反応見せてくれるとか、すっごいかわいいんですけど。

抱きしめてもいいよねって寮の前だからまずいか。ってかわき腹がすごく痛いんですが。

「あの、何でしょうか、木乃香さん？」

「……………」。

いつの間にか俺の斜め後ろに来て、わき腹を抓っている木乃香。むくれているのか、分からない程度に頬がプクツとなっている。原因が刹那だけ褒めたからであろうか、先に褒めたからかは定かではない。

「……フフツ、木乃香も似合ってるよ。かわいいかわいい。」

「ブフツ！もー、しゅーまはん！なにすんの？」

膨れた頬を指で突いてやると、空気が出て笑ったような音がする。やられた木乃香は怒っているような、嬉しいような顔をしている。

機嫌が治ったようだなによりだ。

「じゃ、行くか　　って、どこ行くんだ？」

「えーっとな？せつちゃんの服見て、靴見て、なんかかわええもん買っんや。」

「なるほど、刹那改造って訳か。じゃあ電車かな。」

言いながら歩いていく木乃香と俺。

刹那は少々事態を把握できていないようだったが、気付くと走ってくる。

「ちょ、このちゃん！そんなの聞いてないわ！」

「今言ったんやもーん ええやん、しゅーまはんに選んでもらえば間違いないし？」

キヤーキヤー言いながら、今度は二人が走って行く。

見ていると、本当に、全く

「若いつて、いいねえ。」

・・・いかんいかん、年寄りじゃあるまいし。と言っても800歳だけぞ。

S i d e o u t

s i d e 明日菜

「……………愁磨先生ったら、こんな毎日デートしてんのかしら？」

「グググ、アーカード！イケメンはやっぱり敵ッスね！！」

十人に聞いたら十人が女って言う人でも、イケメンって言うのかしら？

カッコイイ女の人も言うのかな？刀子先生とか、ノワール先生とか、アリカ先生とか・・・

って、皆愁磨さんの仲間（って言うか奥さんよね）じゃない。

そついう女の人が好きなのかしら？

「やっぱり家の中も見ないと、怪しい所はありませんね。」

「そりゃそつよねー。学園じゃ超有名人だし、事を起こせば嫌でも人目につくだろつし。」

ってあんた。流石に家の中とかは無理だからね！？」

前回の事もあって、愁磨先生の家には行きたくない。体も拒否してるし。

って事は、こーやって尾行してる意味あるのかしら？無いわよね？

「桜咲さんって、あんな顔するんですね……。」

「え！？あ、ああ、そうね……。」

教室、って言うか学校での桜咲さんは凜としてて、

落ち着いててかっこいいイメージしかなかったんだけど、

木乃香と愁磨先生と歩いてる彼女は、怒ってたり困ってたり照れてたり……

普通の中学生に見えた。……持つてる刀を除いてだけど。

「愁磨さんって、すごいですね……。」

僕なんて、桜咲さんと数回しか話した事無いのに……。」

「そ、それはホラ！愁磨先生はアンタより10歳以上長生きしてるし！」

あの二人とは、子供の頃からの付き合いだって言うし！」

まあ、私だってちょっと嫉妬してるわよ。

……木乃香のあんな楽しそうな顔、久しぶりに見るし。

「……アニキ、姐さん。これ以上は無駄じゃねえツスカ？」

「そう、だね。何かあったら、その時に本当の事聞こっか。」

ネギは、諦めたような、なんて言うか・・・不思議な顔をしてた。

頭ゴチャゴチャなってバカな事しそうにもないし、考えるって事も大事よね・・・？

私もちよつと考え事あるし・・・

黙って行くような事があったら、見張るくらいでいいですよ。

S i d e o u t

その夜、警備中

S i d e ネギ

夜。僕は警備のお仕事が休みなのに、学園を歩いていた。

ある目的地に向かって。

「ほい、終わりっ！」

僕の視線の先にいる銀にも白にも見える髪をした女性　のように
見える男性は、

伯爵級と数体の男爵悪魔を一撃で、軽い調子で葬る。

その姿は、形や調子こそ違えど。

僕を、燃え盛る村から救ってくれた父さんと同じだった。

「愁磨さん。」

「ネギ、お前今日は休みじゃなかったか？」

警備中は、愁磨さんって呼んでも（仕事中なのに）何故か怒らない
し、

僕の事を”ネギ”って呼んでくれる。

そこには、村にいた頃の愁磨さんが垣間見えて。

余計、僕は分からなくなる。

「ちょっと、愁磨さんに用って言うか……お願いがあるんです。」

「言うだけ言ってみる。大抵の事はできるぞ。」

そつだな。とあるよしみで、お前は割引で仕事してやるぞ？」

なんだか、僕のしたい事が分かっているような口ぶりだ。

いつもは父さんを連想させるようなことは絶対に言わないから。

「『魔法の射手・連弾・光の53矢』！！『雷の暴風』！！」

サギタ・マギカリエス・

ルーキス

ヨウイスステフルダダエンス

詠唱遅延していた『魔法の射手』を先に放ち、同じく遅延していた『雷の暴風』も放つ。

貫通力の高い”光属性”で障壁を突破、『雷の暴風』をフルに当てる為だ。

普通なら、削り切れなくても暴風で突破できる。そつ、普通なら。

「来い、”ランベントライト”。『マザーズ・ロザリオ』！！」

白いレイピアが煌めき、”魔法の射手”を正確に11発撃ち抜き

「来い”エリユシデータ”、変遷”ダークリパルサー”。『スターバースト・ストリーム』！」

目に映らない速さで黒と白の直剣に持ち替え、同じく16発を切り裂き

「『ジ・イクリプス』!!」

残りの26発も切り裂き、『雷の暴風』までも一撃で切り裂く。

「で？何のつもりかだけ聞いて殺してやる。」

「……僕は、あなたが分からないんです。」

生徒と笑っていたり、買い物に行っていたり、アリアさんにデレデレしていたりするあなたは、

とても普通の、幸福な人に見えるんです。

でも、戦っている時のあなたは、父さんと同じ領域にいる人で、悪い人で……。」

皆は『悪だ』と言うけれど、あの人達は『大好き』と言う。

僕もどちらかだったら、良かったんだと思う。けれど……

「僕には、答えが分からないんです。」

愁磨さんは目を瞑って、黙って聞いている。

怖いけれど、堂々としてて。後ろには、やっぱり父さんの背中が見える。

「よく、分からないんですけど。父さんだったら、こっつする気がするんです。

だから
「

杖を構え、周りから集めていた魔力を一気に纏う。

学園長先生が教えてくれた、自分の中の魔力を使えない僕が擬似的にそれを使う方法。

悪魔と戦う　　愁磨さんと、戦う方法。

「僕と戦っていただきます！！愁磨・P・S・織原！！」

S i d e
o u t

第40話 少年達は尾行するようです(後書き)

っと言う訳で40話でした！

作「敵情視察を兼ねて、未デートの人達を一斉に。

短すぎるとか反論は聞きます、ハイ。」

ノワ「これでも、まだ終わってないのよね。しかも私、出てないし。」

もみじちゃん、最早デートじゃないし。」(ジトツ

Aria「……………」(ジー

作「えー、この三人は次回活躍しますので！！今は逃げさせていただきます！」

愁「えー、作者は久しぶりに書くもんだから、間違いとか多々あるかも。」

と言う訳で訂正とか質問とかあったらよろしく！」

ノワ「次回は……九月入ってからになるみたい。」

気長に待つて頂戴。では、また次回会いましょう。」

愁ノワ「アリーヴェデルチ！！」 Aria「……………デルチ。」

第41話 魔人は戦い、少年が動くようです（前書き）

こんばんわ、H a t e . r です。

作「微妙に予告より早く出来たので、うpでございませう。」
愁「冗長かなあ、と思わなくも無いな今回。」

まあいつも通りか。さて、恒例の行こうか。」

ノワ「毎回私なのね。。。別にいいけれど。」

時神雫様、誤字訂正ありがとうございます。

春夏秋冬様、東方在住宵闇系幻想少女様、灰色様、なおぼん様、
龍賀様、

感想ありがとうございます。」

作「では、参りましょうか。それでは!！」

作愁ノワ「「「どうぞ!」「」「」

第41話 魔人は戦い、少年が動くようです

Side ネギ

「『ヘヴンズフィスト』!!!」

「ッ!」
『フランス・バヌエアエリアーリス
風花・風障壁』!!!」

愁磨さんが赤く光って技を使う(?)と、

僕の頭上にいきなり巨大な機械の拳が出現して、落ちてくる。

咄嗟に『風花・風障壁』を使って防ぐけど、嫌な予感がして、全力で後ろに飛ぶ。

ゴォウ!!

「うわああああああああ!!」

数瞬後、10tトラックの突撃でも防げる魔法の風盾を無いかのよ
うに破り、

機械拳が落ちて来て、地面との接触で台風みたいな衝撃波が生まれ、
飛ばされる。

「（あ、危なかった……！下がってなかったら潰されてた！）」

「第六感はやはり、驚愕に値するだけの数値だな。じゃあこれはどうだ？」

『シューティングスター』！！』

やっぱり、どこからともなく大砲を出して、弾が連射されるけど、全部明後日の方向に飛んで行く。

「良く分かんないけど、チャン　！？」

「さあ、間に合うか？」

チャンスかと思った瞬間、全ての弾が方向転換して僕に向かってくる。

期待が外れてしまい、思考が一瞬止まり対処が遅れてしまう。

「（先に当てれば……！）エウオカウアルキユリヲシルルダベルダモギアアリア風精召喚　剣を執る戦友！！

コントラサーゲネット
迎え撃て！！」

風の中位精霊12体を、僕を囲むように召喚して弾を迎撃させる。

けれど、迎撃する毎に爆発が起きて、愁磨さんを見失ってしまう。

「しまっラッソウ『ワイルドチャージ』」

後ろを振り向くと、爆発が晴れると同時に片腕が機械化した愁磨さんが

ロケットのように突っ込んで来る。

間に合わないと思った僕は、纏っていた魔力を全て使い無理矢理魔法を完成させる。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

「ラッソウウエチエクニクタ穿ウエチエクニクタつウエチエクニクタ聖ウエチエクニクタ天ウエチエクニクタ！！」

突撃槍のような僕の魔法と愁磨さんの腕がぶつかり、拮抗する。

さっきのように一瞬防ぐのではなく、既に3秒もぶつかり合っている。

「（この魔法は、悪魔に有効……。まさか、愁磨さんも悪魔なんですか……！！！？）」

だとしたら」

「何を迷った！ネギ・スプリングフィールド！！」

「ガッ、フうあああああ！?!」

『何故悪魔かたきが父さんと』

その疑問が頭を過った本当に一瞬、魔法が右に少しだけ逸れる。

愁磨さんはそれを見逃さず、機械腕で魔法を受け流す。

そして、残った突進力のまま僕は殴られて、10mも飛んでいく。

「それで、と聞く必要はないな……。迷いも疑問も鬱積も、全く晴れていないようだな。

……装着”グレイソード”。」

左手に顔のついたオレンジの機械腕と剣を装備した愁磨さんが、

飛ばされた10mを音も無く詰め、僕の首に剣を突き付ける。

「……のであれば、」

「う、え……………?」

「…………じゃあな。先に逝ってナギとエルザさんを待つと良い。」

愁磨さんが最初何を言ったか聞こえなくて聞き返そうとしたけれど、殴られた衝撃で喋れなかった。

そして剣が振り被られて、僕の首を撥ね

カロン

「フオッフオッフオ。あまりオイタが過ぎやせんかのう、愁磨殿。」

「クク、老体に鞭打って登場とはご苦労な事だ。」

ずに、下駄の音をたてて現れた学園長先生の指二本に止められていた。

学園長先生は、言葉はいつもと変わらないけど……雰囲気がいっつもと全然違う。

「学園長！！」

「ネギ！！」「アニキー！」

続いて、見た事のない（多分）魔法先生10人くらいと、

明日菜さんとカモ君が来た。

「おやおや、随分連れて来たな。」

「……………勝手について来ただけじゃ、危害を加えんでくれんかのう。」

「ウフフ、そんなの無理に決まっているでしょう？」

「……………うにゅ……………」

更に、いつの間にか僕の後ろにノワールさんとアリアさんが来ている。

二人だけだったのに、一瞬で大人数になってしまった。

学園長先生が来てくれなかったら、僕は死んでた……………けど！

これじゃ父さんの事も、僕の事も分からない！！

「明日菜ちゃんと……………オコジヨ君。ネギ君を連れて離れておるのじや。」

「ハ、ハイ！！ほら、行くわよネギ！！」

先生達は構えているけれど、愁磨さんもノワールさんも何もせず、明日菜さん達を通してくれて、僕は明日菜さんの肩を借りて立ち上がり、離れて行く。

クソツ！僕に、僕にもっと力があれば……！！

「さて、代わりに楽しませてくれ。雑魚諸君？」

愁磨さんの尊大な言葉を最後に、僕の意識は落ちた。

S i d e o u t

S i d e ノワール

シユウが居ないので（と言うか戦っているから）寝付かないエリアを連れて

坊やと戦ってる広場に来ただけけど、そこには隣学区の魔法使い達と、

近衛門が居た。

ホントは坊やを焚きつけて、ちょっとだけ強化を進める予定だったのだけれど……。

悪魔との連戦は結構経験になってたみたいで、予想以上に強くなつてたのを

シユウがつついっ楽しいんじゃない見た見たい。

「いくら可愛い顔してても、やっぱり男の子なのね。」

困るわよねアリア。」

「……………」(コックリ

無言で肯定するアリア。でも、その動きが眠気に拍車を掛けたみたいで、

何度もコックリコックリしてる。

ああ、いいわ。やっぱりかわいいわあ。

ドガアアン!!! ドオン!

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオ!!!」

アリアを愛でていたら、シュウと近衛門が戦い始めた。

拳で拳をそれぞれ迎撃しながら、空に上がっていく二人。

シュウは Alucard しか使っていないとは言え、近衛門も負けてないわね。

戦う所を見るのは初めてだけど・・・

軽く身体強化したシュウと素のまままで打ち合ってるわね。

「あれに、身体強化と具現魔法が組み合わさるのかしら？フフ、凄く楽しそうね。」

後で私も遊びたいくらいだわ。」

「んー・・・先に・・・寝るのお・・・。」

「フフ、そうね。ごめんねアリア。」

【シュウ〜そろそろ帰ってきて〜。アリアがとっくにおねむよ。】

「【おお！？まあ、こっちはいいか……。分かった。】

と言う訳だジジイ。今日はここまでな。」

「フォッフォ！つくづく娘に甘いのが。まあええじゃろ、久々に楽

しめたわい。」

ザン！と2000Bくらい落ちてきて、それぞれこっちと教員の方へ行く。

ああ、やっぱりギヤイギヤイうるさいわね。。。。

「アリア、ごめんな？すぐに帰って寝ような。」

「。。。。んー。。。。んー。。。。すう。。。。すう。。。。」

シユウに頭を撫でられた途端、アリアは安心してか寝てしまう。

。。。私とシユウが逆でも、寝ないで待っていてくれるのかしらね。

って、いけないわね。いつまで経っても、三人の事だけは不安になっちゃうわ。

「フフフ……………安心しろって。」（ナデナデ

「……………な、なにかしら？／＼／＼」

「いや、何でもないよ。……………ホラ。」

シユウが目で差すアリアは

「……ん……ママあ……。」

幸せそうにちよつとだけ笑って、すり寄ってきた。

……ホントにずるいわね。なにがずるいって、愛しいのもあるけれど、

分かってる風なシュウが一番ずるいわ。

「愁磨殿。すまんが明日の朝は学園長室へ寄ってくれんかの。」

「……………別に構わんけどさ？」

「ええ、そうね。」

「「空気くらい読めよな」読んでよね。」

Side out

寮、ネギ達の部屋、木乃香は刹那の部屋へお泊り。

Side 明日菜

「ネギ、ネギ！しっかりしなさいよ！」

「う、うづ……？あすな、さん………？」

その後、気を失ったネギを大急ぎで部屋まで連れて来た。

嫌な予感がして探しに行ったんだけど、まさか愁磨先生とやりあつてるなんて。

「アンタバカじゃないの！？学園長が助けてなかったら死んでたわよ……！」

「ハイ……。でも、僕は……、ああしないと進めない気がしたんです……。」

結局、中途半端で終わってしまいましたけど……

愁磨さんは、僕が一番欲しかったモノをくれました。」

ネギの一番欲しいもの……？それって、ネギのお父さんの居場所？

でも……ネギのお父さんは、死んだんじゃないの？

「アニキ。アニキが父親を見つけてえってんなら、こんな無茶しち

やいけねえ。

頼りにはなんねえだろうが、俺っちがついてヤス！だから、一人で
行かんで下せえ！」

「か、カモ君……！！」

え、このオコジヨ、変な物でも食べたのかしら！？

言ってる事が感動できるほどまともなんだけど！！

「それに、なんだかんだ言っても、姐さんもいやす！」

「うええ！？あたしも!？」

「ア、明日菜さん……!？」

ネギが妙にキラキラした目でこっちを見て来る。

い、く、悔しいけど、確かにその通りよ……！なんか放つとけな
いのよ！

「ま、まあ、色々縁もある事だし！？目の届くところで死なれても寝
覚めが悪いだけよ！」

み、みんなだつてアンタが居なくなると寂しいだろうし！！それだ

「けよー!？」

「ククク、姐さん……。それは噂に聞くツンデレってやつですかい？」

「ち、違つわよこのヒロ白淫獣!！」

「つ、つんでれ?って何ですか、あすんわああああ!?!カモ君!？」

オコジヨの首を絞めてたら、いつの間にか紫色になってた。

あ、あぶないあぶない……。

「ゲフゲフ……。し、死ぬかと思いやした……。

で、アニキ。今後の方針を固めるべきでさあ!アーカード軍を崩すのは大変ですぜ!」

「しゅ、愁磨さん達を崩す……って、それは、その、愁磨さんを倒すしか……。」

「そうよね。皆が皆を想ってはいるけど、愁磨先生が中心よね、あの集団は。」

問題は……。」

いいつつ、二人を見まわす。

こつちには中途半端に強いガキ魔法使い、ちよつと体育が得意な女子中学生、

あとはエロいだけのオコジヨ……。

「……………や、闇討ちするしかねエ!!」

「ごめん、闇討ち出来たとしても、もみじさんが木乃香さん……くらいだよ……。」

「う、うう……ん……。どっちも気が引けるわね。」

まさか木乃香このかに怪我させる訳にはいかないし、

もみじさんだってクラスメイトだし。それにあの子、この上なく攻撃し難い容姿……。

「分かりました……。

明日の朝、学園長先生にお話を聞きます!!話はそれからしましよ……」

「これ以上は喋っても仕方ないしね。今日は寝ましようか……。」

でも、あの人頼ると口クな事が無い気がするのよね……………。

Side out

翌朝、学園長室前

Side 近衛門

「と、言う訳じゃ。」

隣学区どころか全学区の学園長から文句を言われてしまったわい。」

「うわぁ……………。絶対に行きたくないわ、ンな所。」

「人間って、本当におバカさんなのね？」

近衛門一人にすら勝てないでしょうに。無知は罪ってよく言ったものよね。」

全学園中最高の権力をもつとるワシの所で好き勝手されると、

学園全体の権威が落ちる……………と言うのが気に食わんと。

それで、今一度最高権力者を決定しようじゃないか、と話があった訳じゃ。

まあ、やる訳がないがの。

「つまんねえな。力見せてやりや黙る……………とも限らんか。」

「そうじゃの。での、あちらが何か仕掛けて来るじゃろつが、

なるべく……………なるべくでよい、穏便に済ませてくれんかの。」

「分かったわ。まあ、再起不能にしなきゃいいでしょ？」

……要するに決定戦……そう、決定戦。

魔法側の先生と生徒の総力戦をするのじゃが……。この二人だけでも殲滅出来るからの。

「そう言う訳じゃ、頼むぞい。」

「りょうつかーい。じゃ、授業してくらあ。」

そう言うって出ていく二人。

話を聞いてくれ、まだ人間的である分感謝せんといかんのつ。

コンコン

「ホッ、誰かの？」

『……………ネギ・スプリングフィールドです。』

「（ネギ君……？妙に気配が薄かったので気付かんかったわい。）

おお、ネギ君か。入ってよいぞい。」

「失礼します。」

おおおう、何やら思いつめとるのう……。

どうせ愁磨殿がらみなんじやろうなあ。そうなると大分しつこくなるのう。

「学園長先生……………お願いがあるんです。

その、神多羅木先生と瀬流彦先生には悪いと思ってるんです。」

「……………ほ？」

すつごく面倒な予感がするのじゃが……………？

「僕を……………僕を弟子にしてくれませんか!？」

第41話 魔人は戦い、少年が動くようです（後書き）

つと言う訳で41話でございましたっ！

作「ネギ、力を求め学園長に弟子入り!？」

愁「・・・まあ、エヴァの代わり?になるって言ったら、

近衛門しかないわな。」

ノワ「ドンマイ、御二人さん。出番はあるそうだから、腐らないで
ね。」

愁「ネギが強い?・・・まあ、あいつも頑張ってるんだよ!!」

作「エルソ技使ったのは・・・ついですが、ハイ。

最近やり始めたんですが、面白くって」

ノワ「それじゃ、また次回お会いしましょう。

・・・まあ、来週には書き上げるそうよ。」

作「原作乖離で書くのが大変なんだよね！（テヘペロ）」

作愁ノワ「・・・それでは、アリーヴェデルチ!!」「」

第42話 少年は騙され、少女が守るようです(前書き)

Boa noite! Hater.rです。

作「と、言う訳でよく分からなくなった42話です。

プロット?なにそれk(ry」

愁「それじゃ、恒例のやつちまいますよ。」「(無視

ノワ「そうね。Rain様、春夏秋冬様、龍賀様、なおぼん様、灰色様。

感想頂き、ありがとうございます。」「

作「……それでは、参ります。42式しまなる!」

作愁ノワ「」「どうぞ!」「」

第42話 少年は騙され、少女が守るようです

Side ネギ

ドサァー!!

「う、う、う、う、う、う……。」

「フオッフオッフオ。では、今日はこれまでにしておくかの。

しっかり寝て、明日に疲れを残すでないぞい。」

「あ、ありがとうございます、た……。」

学園長先生と修行を初めて早三日。

内容は僕が想像したのと全く違って、体の正しい動かし方だとかから始まって、

実践向きの格闘技や対近距離用の魔法を教えてもらっている。

学園長先生が言うには、

『ネギ君は魔力量は桁違いじゃから、とにかく持久戦に持ち込むのじゃ』

だそうだ。

受けて避けて流していれば、ほとんどの相手は魔力が切れて勝てる。
・・・らしい。

上級の魔法は、戦況判断が出来るようになってからだって。

「って、言ってもなあ……………」。

「アーカードとアニキじゃ、あっちのがどう考えても魔力量も上でさあ…………」。

まあ、東最強の魔法使いの事でさあ。考えあつての事でしょげ。」

確かに、愁磨さん達と戦うには絶対に接近技が必要になる。

・・・魔法より剣とか槍とか使ってるイメージあるし。

魔法障壁（かどうかもあの人達は怪しいけど）も凄いいし、

平気で魔法を切っちゃう人だから、数を撃つても無駄な事は分かった。

と言う事はやっぱり至近距離から

「アニキ、アニキ。んなこたあもつと修行してからにしよう！」

今は力より頭でさあ！！」

「う、うん。そうだね。じゃあ、寝てから寮に戻るっか。」

変な事言っているかもしれないけれど、それは……

ダイオラマ球って言う魔法具の中の世界だから。

学園長先生が修行の為に、って持って来てくれたんだ。

とある筋に貰ったらしいけど、

『ううゝむ、なんでくれたんじやろうなあ……？』

畏かのう？そんな事する必要はないしのう……。』

とかブツブツ言ってた。

まあいつか。今は寝て、早く明日菜さんと作戦会議しないと……

……

……

……

「う〜ん……。半日も寝ちゃったよ……。」

「これでも外は10分しかたってねえってんですから、恐ろしい魔法具でさあ。」

（しかし妙でやすねえ？最新式でも、外の一時間を一日にしかできねえはずでさあ。）

喋りながら魔法陣に乗ると、淡い光が周りに昇って来て、

パシユツと軽い音を立てて、僕は元の麻帆良学園に戻ってきた。

「ああ、ネギ・スプリングフィールド君じゃね？」

「え！？あ、はい。えっと、あなた達は確か……。」

「ああ、申し遅れた。私達は5学区から23学区までの理事会代表者じゃ。」

私はボルレア……失敬、名前は長いので。ジャイロと呼んでくれい。」

陣の前に立っていたのは、50歳くらいの初老の男性だった。

ジャイロ……学園長先生？紛らわしいから先生でいいか。

「えと、ジャイロ先生は僕に何か用があつて……？」

「おお、そうじゃ。とにかく、こっちに来てくれるかの。」

「ここだと人目につく。」

「は、はあ……。」

ジャイロ先生が歩き始めたので、僕も仕方なくついていく。

そして、しばらく歩いた所にあつた魔法陣に乗って、またどこかへ飛んだ。

「えーっと、ここは……？」

「此処こそが私達の砦、要塞、最前線基地。そう。」

真つ暗な部屋に明かりが灯り、部屋にいた黒いマントの人達が見えるようになる。

恐らく、ジャイロ先生と同じどこかの学区長の人達だろう。

「ようこそ、第二学長会 現通称、対学園内悪魔対策会の円卓へ。」

Side out

Side アリア

「アリカママ、プリント……。」

「おお、ありがとうアリア。丁度取りに行こうとしていたのじゃ。

……気のせいじゃろうか、久しぶりに会った気がするのじゃが。」

「……おうちで、毎日……会ってる。おととい、いっしょに寝た。」

「そ、そうじゃな。すまぬ、忘れてくれ。」

「……?変なママ……。」

でも、私も変……誰が悪いか、分かる気がする……。

「ところでアリア。この後予定はあるかの?」

「……んーん、ない。」

「そうか。私もこれを集めるので最期じゃったから、一緒に帰らぬか?」

「ん。じゃあ、鞆もってくる……。」

職員室から出て、教室に戻る。

……あそこ、いつつも騒がしくてキライなの……。

エヴァと真名が近くにいれば、だれも来ないからまだいいんだけど……。

「あーおい、アリアン！一緒に帰ろよ！」

「……………わたし、アリカママと……帰るから。」

教室に入った瞬間、アスモデウスが走ってきた。

……この子は、あんまり好きじゃない。

なんか……パパといるとき、エヴァより……ママに近い感じがするから。

「え？ボクも一緒に帰っちゃ……ダメ？」

「……………アス　もみじ、寮。わたし、おうち。

行くの、反対側……。」

「むうー！どうせ行くんだから良いじゃん！」

「よるしいじゃない、アリアさん。帰るくらいいいじゃないありませんことっ。」

話していると、いいんちよが横から入ってきた。

「だから、ここはキライ……。関係ないのに……。おせっかい……。」

「ママ、待たせてるから……。いそいで……。」

「あ、うん！って、ちょっと待ってよおー！」

……

……

…

「……。……。」

「あ、うっ……。うっ……。……。」

あのあと、職員室に戻ったら、アリカママはお仕事はまだあるって言った。

『すまぬ、愁磨にどやされてしまったのじゃ。』

こやつらに赤点を取らせると、夏休みアリアと遊べんからの。』

ばかれんじゃー四人が、英語の補習なんだって……。

アスナ……明日菜は、英語だけできるから……なしだった。

前は一番だめだったんだって……。パパが魔法の事教えたから、記憶……なにか変わったのかな？

「あ、アリアさん、もみじさん。こんにちわ。」

「ちゅちゅ……なにしてるの？」

「お買い物です。夕食と、猫の餌です。」

歩いてたら、ちゅちゅと会った。スーパーの袋から、ネギが出てる。

……。アレじゃない。

餌も買ってるし、ねこさんのところ、行くみたい……。

「いっしょ、行く……。」

「かしこまりました。もみじさんはどうしますか？」

「え、あの、ボクは………行ってもいいの、かな？」

「ねごさん、いじめないなら………いい。」

「うええ、いじめないよお！じゃあボクも行くね！！！」

……騒ぐのも、だめ、なのかな……？

一人くらい、いつか………。

「それでは、お先に行って頂けますか？まだ買い物が残っているの
で……。」

「すぐに参りますので。」

「……ん、わかった………。いこ、もみじ。」

「え、あ、うん！じゃーね、茶々丸！」

「はい、お気をつけて。」

ちやちやと別れて、裏道に入っていく。

「ね、なんで手伝うって言わなかったの？」

「アリアンなら茶々丸の手伝いすると思ったんだけどな？」

「……………ねこさん、おなか減ってるから。」

「ちやちや、時間決めてるの……………」

「毎日あげると、自分でごはんがとれなくなるから……………毎日じゃないけど。」

「毎日来るくらいなら、飼った方がいい……………あぶなく、ないし……………」

「でも、20匹くらいいるから、飼うと……………大変……………」

「……………うう。」

「はえー……………なんか、綺麗な所だね。」

「ん、わたしも……………そう、思う……………」

「ビルに囲まれてるけど、汚れてない、不思議な場所……………」

「いっつも、ねこさんがいっぱいいる。」

「ニャーニャー！すっくいつぱいいるね！ニャーニャーぶげっ！？」

「……いじめちゃ、ダメって……言った。」

走っていらつとした首根っこをつかんで、止める。

……にわとりじゃないんだから、すぐに忘れないで、ほしい……。

「にゃー、ごはんだよ……。」

ニャー ニャーニャー ニャ？ ニャニャー！

「う、わ、ちょ、わわわー！！」

ね、ねえ。これ触っても、良いのかな？かな？」

ねこ缶をお皿に出すと、ねこさん達が集まってくる。

もみじは、足元に来たねこさんに、恐る恐る手を伸ばしながら聞いてくる。

……ねこさんって、魔除け？だってパパが言ってたけど……
だいじよぶだよね。

「……うん、この子たち……やさしい。」

「そっか！わしゃしゃしゃしゃ……おお、もっふもふじゃん！！」

キミはどうかなく　わっしゃしゃしゃ」

……変な歌歌いながら、ねこさんを次々回収してく。

嫌な顔してないし、多分……だいじよぶ。

もみじ、今なら夢中になってるから……だいじよぶ。

私は、そつともみじ達の傍を離れて……ずっとつけてきた、

パパの敵の後ろに、『ぎじてきにわーぷ』する。

「一人だけお願い、『シエンフー神虎』。」

「『なっ!?!』」

私が『シエンフー神虎』を呼んだ声で、やっと気がつく……敵？

そっか……こんなに、弱いんだ。

「……なにか、用？先生。」

「アリアさん……！！クツ、ルークス光よ バーンナホル弾ける！！！」

ネギ先生が閃光弾……みたいな魔法を放って、目くらましをする。
けど、無駄……。パパとママと戦ってて、この程度なら……
見飽きてる。

「シエンフー神虎』、捕えて……。」「

ゴロアルル……。

「今のうちに、もみ」 うわぁ！？」

「ネギっ！！あう！」

「兄貴！姐さん！！って、おおおお！？食わんといて……！
食っても俺っちは美味くないぜ！！？」

「うるさい……。だまって……。」

あなたみたいなの、汚いの……。食べさせない。」

捕まえた三人……。？は、思った通り……。

ネギ、明日菜……。変なのだった。

「もう一回だけ、聞くね……。なに、してたの？」

Side out

Side ネギ

「もう一回だけ、聞くね……。なに、してたの？」

僕たちは、もみじさんを……。いや、魔王を倒そうと、後をつけて来た。

だけど、あっさりアリアさんに捕まってしまった。

なんでだ！？愁磨さんにすら僕たちの位置までは分からなかったのに！！

「（まずい、まずいまずい……！！この虎、明日菜さんに触っても消えない。

と言う事は、魔獣じゃなく別のモノで構成された召喚獣！

抜けだす事は……出来るけど、時間が足りない！」

ここは仕方ないと判断した僕は、一昨日の事を多少混ぜながら話す。

・・・なんだか、嫌な事ばかり教わる。

「…………昨日、第二学園長会の人から話を聞いたんだ。

もみじさんが結界を内側から破って、魔王軍を麻帆良に呼び込もうとしてるって。

それで、知り合いの僕達が先に、説得に来たんだ…………。」

「……………嘘ついても、分かる…………。」

『シエンフー神虎』、左。」

ゴロウウアア……………」

「きゃあああああああ、あ、ああ……………!?!?」

アリアさんが虎に命じると、左足 明日菜さんの方に力を入れ始める。

骨の軋む嫌な音が聞こえ、悲鳴すら出なくなっていく。

「ま、待ってください!!ほ、本当の事を話しますから!!」

「……………ん、6割本当みただから……………半分だけ。」

「う、ゲホ、ゲホッ……!!」

要するに、4割が嘘だったから、半殺しにしたって……!!?

こんな、こんな簡単に人を傷つけて!!

「アリアくん、何やってるのー?」

「ッ、もみじ……!!」

もみじさんがこちらに来た事で、アリアさんに動揺が走り、

僅かに虎の拘束が緩まる。

その瞬間、僕は魔力を右足に集め、学園長先生に教わった蹴り技を放つ。

「『蠍狩』!!」

ガッツツツン!!

グルオアアアアアアア!?

「っ、朱里さん、ごめんね!!」

「うえ、え？明日菜さん！？なに、何これ！？」

足が離れた瞬間、明日菜さんはもみじさんを羽交い絞めにして捕え、僕は魔法を遅延しておく。

「ハア、ハア……！もみじさんアリアさん、すみません。

学園長達には、ウェールズの村の……あの時の映像を見せられて、麻帆良をこうされては敵わないって言われて、もみじさんを倒しに来たんです。

そう、村を嗤いながら燃やすもみじさんがバッチリ映ってたんですよ。

お陰で、話に聞くだけじゃできない覚悟も出来ました。」

明日菜さんは困惑した表情で、もみじさんは震えながら、

アリアさんは……相変わらず、無表情で僕の話の話を聞いている。

「でも、ハッキリ言って僕には関係無いんです。

麻帆良の治安とか、そんなのは後回しなんです。」

「「えっ?」「」

「僕にとっては
」

明日菜さんともみじさんが、疑問の声を上げる。

そうでしょう。明日菜さんにはそれとなくしか伝えていませんから。理解しているとは思っていませんでした。

『アツハツハ！考えすぎだって！！お前は本当にどっちにも似てないな！！』

まあ、熟考するのは悪い事じゃない。けど、そう言う事じゃない事だってあるだろ?』

そう、僕にとってこの人達は

「教師と生徒の前に、ただの仇で、敵で、憎むべき相手なんです。

……
『エミツタムレーン・ガエンテウマテエクニクタ
解放 降り立つ聖天』!!』

ゴバアアアアアアアアアア!!

天に光の柱が昇り、悪を滅する。

『ラウゾウエチエクニクタ穿つ聖天』を、更にあの魔法に近付けた魔法。

威力は桁違いだけど、範囲が狭く魔力消費も多い。

「ちよつ、危ないじゃない!!」

「大丈夫です、この魔法は対象以外にはただの眩しい光ですから。

それよりも、アリアさん !?!」

いつの間にか、アリアさんが居なくなっていた。

後ろを見ると、光が丁度収束して行って、中が見えるようになっていく。

「.....ハア、ハア.....ハアッ!」

「あ、アリアン!!大丈夫!?!ごめんね、ごめんね.....!」

ボクの為に!!」

そこには、四頭の虎と大きな扇を持ち、息を荒くしているアリアさんと、

無傷のもみじさんがいた。

「明日菜さん、離れてください!!」

「……勘違い、しない……で……。」

「「「え?」「」」

Side アリア

傷ついちゃった『シエンフイ神虎』を戻してあげる。

ごめんね……、ありがと……。

「……あなた達、もみじが……ほんとに、そんな事すると思
うの……?」

このいつつも、ばかみたいに笑って……何にも考えてない、子
が……。

人を壊して、嗤うって……思ってるの……?」

「あ、その、私は……。」

明日菜が、よろよると後ろに下がる。

・・・私は、この子がキライ。・・・でも、ダメな子じゃない。
バカだけど、やさしいから。

「……でも、愁磨さんと会う前だったんだ……！」

あの時は、そうだったと思うしかないじゃないか！じゃないと、そうじゃないと……！」

「ね、ネギ……。」

「・・・あと、もみじ。私は、あなたの為に、やった訳じゃない。
ない。

パパと、ママの為。」

「え、ええ？」

・・・あれは、もういい。もう・・・迷ったから・・・。
それよりも、こっち。

「あなたが居なく、なると・・・悲しむから・・・。」

ママは、あなたが好きだし……パパも、邪険にしてるけど……好き……。

だから、殺させない。……傷つけさせない。」

「あ、アリアン……。」

「だからあなたは、私が……私も、守ってあげる。」

Side out

「すうう……ふううう……。すううう……ふううううー！」

守る、か……。僕には、守ってあげたい人は……。多分、いる。

一番は、明日菜さんだと思う。それと、カモ君。

次に、クラスの人達。その次に、麻帆良の人達。

でも

「僕の……僕が、そんな風に、自分を犠牲にしてまで守りたかった人達は、

その人が、壊したんです。」

「……」蔡雅”。

杖に魔力を通して槍の様にすると、アリアさんはさっきの大きな鉄扇を広げる。

『レイン・ガエンテザマチエクニクタ降り立つ聖天』を防がれた以上、

多少の魔法ではあの鉄扇でかき消されてしまう。

だから、槍の先に集めての一点突破……これしかない。

「あああああああああああああああああ……!!」
ドンッ!!

学園長先生から教わっていた『瞬地』もどきを使って、

それでも普通の数倍の速さで突撃する。

アリアさんはそれを畳んだ方の鉄扇で防ごうとして

ザクッ!!

……鉄扇で防がれた感じも、触れた感じもせずに、何かに刺さる

感触がした。

「アリア、よくやってくれた。ハハッ、まさかお前がそんな事言っなんてな。

知らない内に育ってるもんだな。」

「ば、パパ……!？」

槍の先には、アリアさんを抱きしめて頭を撫でている……
すごく優しい顔をしている愁磨さんが居た。

S i d e o u t

第42話 少年は騙され、少女が守るようです(後書き)

つと言う訳で42話でした。

作「ネギがなんか壊れてますね、すみません。

原因はストレスです。」

愁「……………なあ、次回終盤には修学旅行行きそうだけど、まだ仮契約してないよな、ネギと明日菜。」

作「……………お前、”ハマノツルギ”創っちゃえよ。

それで明日菜にあげれば問題ない。」

ノワ「魔力供給とか問題山積みなんだけれど……………」

A r i k a「解せぬ。」

作「すいませんすいません！！旅行編なったら出番増えますんで！！
主役かっつてくらい増やすので！！」

愁「ある意味、俺よりお前が大変だよな。」

A r i k a「次回は……………ふむ、いつもの通り来週中だそうじゃ。

それでは、また次回会おう。」

作愁ノワA r i i『『アリーヴェデルチ！！！！！！』』

第43話 その後と準備は平和なようです(前書き)

こんにちは、H a t e . r です。

作「と言う訳で、ぶつちやけ閑話休題？

普通の話が書きにくい自分が居ます。ええ……。」

愁「じゃあ、いつもの。

龍賀様、灰色様、もみじ様、竜華零様、ゆや様、春夏秋冬様、な
おぼん様。

感想ありがとうございます！！」

ノワ「油断すると、ホントにあれよねえ。……まあいいわ。

それじゃ、43話。」

作愁ノワ「「「どうぞー！！」「」「」

第43話 その後と準備は平和なようです

Side ネギ

「パ、パパ……！せなか、あの……！」

「ん？？どうしたアリア？」

な、何が起こっているんだ……！？

落ち着け僕！ええと、もみじさんを倒そうとしたらアリアさんが邪魔をしてきて。

それで、アリアさんと戦っていたら愁磨さんが助け（？）に入って、僕の魔力槍で刺されたんだ。

「パパ、パパあ……。いたくない？だいじょぶ？」

「ん？ハツハ、大丈夫だ。俺は今娘の成長を見て嬉しいんだ。」

……それで、ええつと……蚊にでも刺されたように平然として、アリアさんを撫でたり頬擦りしたりしてて……！！？

「（だ、ダメだ、分からない！！」

俗に言う親バカって言う現象だと思うけど、戦闘中に割り込んで刺された人が

出来る芸当なの！？愁磨さんならやりそうって言うか現在進行形だけれど！！）」

「……………で、お前らは何時まで居るつもりだ？無粋な。」

この上なく幸せそうな顔のままこちらを見た愁磨さんは、いきなりそう言った。

アリアさんを見ていたはずのその顔は、睨まれるよりも威圧的で、

酷く……………人間性が無かった。

「な、なんですか……………！！僕はもみじさんを……………！！」

「分からないか？俺は娘の成長が見れて嬉しいんだ。

それこそ、お前のちんけな攻撃を受けずに娘を愛でたい程にな。」

……………いや、分かっていますよ！

愁磨さんが僕の攻撃とアリアさんを比べるって、そんな事すらしな

いってことくらい。

・・・違う！！ええっと、答えになってない！！

「だ
」

「俺の奴隷に手を出そうとした事も、アリアに手を上げた事も、

俺を刺した事も……これは自業自得として。全て見逃してやるから
帰れと言っているんだ。

……意味、分かるよな？」

いつか見た 目を細めて、薄く笑う……明確に愚かな敵
を見る表情。

……ここで帰らなければ、僕も明日菜さんもカモ君も殺すと、そ
ういう意味でしょう……！！

「……明日菜さん、立てますか？」

「え？あ、う、うん……。」

「カモ君、帰るよ……カモ君？」

せめてもの抵抗に、答えず向こうにいる明日菜さんまで歩いて行き、

肩を貸す。

箒に跨り、カモ君を探すと……明日菜さんの肩で気絶していた。

「それではスプリングフィールド先生、神楽坂。……おやすみ、良い夢を。」

「~~~~~ツッ!!おやすみなさい!!!!」

どこまでも……どこまでも僕をバカにして!!!

S i d e o u t

S i d e 木乃香

「ハアアアアアアアアアアアアアアアア……………」。

「とんでもなく長い溜息やなあ、明日菜。

なにかあったん?」

「別に、何でもないわよ……………」。

そう言って、また机に突っ伏してまっ。

最近の明日菜元気ないなあ……。せやけど引き換えに勉強できる
ようになつとるから、

愁磨はん寄りな私としては、複雑やなあ……。

そう言えばネギ君も

「ハアアア……み、皆さん。席についてください……。」

こっちもすっごい元気ないなあ……。

この二人が沈んどるって事は、また愁磨はんに怒られたのかな？

……

……

…

「きりーっ、れーい！」

「「「「「ありがとうー」ございましたー」「「「「

「はい」……。あ、木乃香さん、すいません。

ちよっとお話があるので、放課後残っていたいただけますか？」

「ん〜？分かったえ〜。」

なんやる？また愁磨はんの事で注意されるんやるか？

・・・まあ、ネギ君が言いたくなるんも分かるけど。

きつついもんなあ、特にネギ君に　　そう言えば、なんでなんやるな？

「あ、木乃香さん。すいません残って貰ってしまっ……。」

「ええよええよ。それで、なんの用なん？」

終わって数分、ネギ君が困り果てた顔で教室に戻ってきた。

んー、勘やけど愁磨はんの事やないなあ。

「じ、実は……かくかくしかじか……で。」

「ふんふん。」

つまり明日菜が元気ないんは昨日愁磨はんにちよっかい出したせい
で、

それはネギ君のせいやから、元気づける為にお詫びのモンを上げた
いど。

で、選ぶんを私に手伝ってほしいんやな？」

「は、はい……。それに、明後日は明日菜さんの誕生日ですし。

その買い物もできますし、丁度いいかと……。」「

んー、私も丁度誕生日プレゼント買わなあかん思ってたし……。。

親友がこのまま沈んどるんも嫌やしな。

「ん、任せえ！伊達に明日菜との付き合い長あないでー！」

「本当ですかあ！？ありがとうございますうー！ー！ー！」

「ほな、明日駅で待ち合わせな。」

仲直りしてネギ君がちょっと大人しゆうなれば、愁磨はんに褒めて貰えるし。

……ごめんな、明日菜。こっちの方が強いみたいやわあ。

S i d e o u t

翌日、原宿

Side 釘宮

「やつふー！ー！良い天気ー！ー！」

「だねー。晴れてよかったよ〜。」

私達は、明後日から始まる修学旅行の三日目の自由行動で着る服を買ったため、

電車で原宿までやってきた。

「ほにゃらば早速、カラオケに行くよおー！ー！ー！ー！」

9時間耐久だー！ー！」

「いくらでも歌っちゃうぜー！ー！ー！」

「コラコラ、今日は目的が違う。修学旅行で着る服買いに来たんでしょ。」

予算も少ないんだから適当につく「ゴーヤクレープー！ー！ー！」

「あ、私も〜。」

「話を聞かんかー！ー！ー！ツそのバカ二人ー！ー！ー！ー！」

全く、いつつこの二人は話を聞かないんだから。

そのせいで何回……何回……。

「もう！私も食べる！！」

「おー、食べ食べ。そしてどんどん太りなさい。」

「うっわ、これホントに苦ッ！！」

何回、私も巻き込まれて散財した事か。

「あー、あの服カワイー！！」

「あ、本当だ。いいかも……。」

「ねーねー、これ京都っぽくない？」

「どごがよ。」

と、主に桜子が騒ぎながら原宿を歩いていた私達。

うーん、なかなかこれっていうのがないわね。

「ん？」

「どしたの、柿崎？」

「いや、あれ……。ネギ君と木乃香じゃない？」

指差した方を見ると　確かに、ネギ君と木乃香が居た。

こんなところで何してるんだろ？

……。二人、二人……。ま、まさか！！

「なな、これなんかどうやらネギ君。」

「あー良いですね！かわいいですよー！

木乃香さんに似合いますねー！」

「あんもー、ちゃつてネギ君。」

「……………」これはまさか！？

「「「デートー!?」「」」

「いやいやいや、ネギ君10歳だし、兄妹感覚で買い物来ただけじ

やない？

「私たちがみたいに、修学旅行で着る服とか。」

「それでわざわざ原宿まで来るー？」

「それに、ネギ君ただの10歳じゃないし、愁磨先生も恋に歳は関係ない！って言ってるし。」

「た、たたたたた大変だよー！！」

「ね、ネギ君が生徒に手を出したなんて知られたらー！！」

「……………こ、今度こそ愁磨先生にやられる！？」

「って、ちよつと待った。」

「ねえ、この場合手を出したのは多分、木乃香の方じゃないの？」

「木乃香、面倒見がいいから……………」

「あ、そっかー。」

「確かに、それっぽい感じよね。大体、あの二人同じ部屋で暮らしてるんだもんね。」

「それで、母性本能くすぐられて、いつかそれが恋愛感情に……………！！」

……ダメだよ!!

結局禁断の恋愛に違いは無いじゃん!! (愁磨は放っておいて。

「とにかく、当局に通報と事情説明を!!」

「と、当局って職員室とか!? そんなことしたら2秒で愁磨先生が飛んでくるよお!!」

「んな訳ないでしょうが!!」

あ、繋がった! もしもし、明日菜! ?」

『はぁーい……。何、柿崎? 折角の休日だったのに』

あ、やっぱり明日菜か。

いくら寝るのが早いって言うても同部屋。事情を知らない訳が無い
!!

「昼間っから寝てんじゃないわよ!!とにかくこれ見て!!」

『え、なに……。写真? ネギと木乃香じゃない。』

『これがどうかしたの?』

「どづー!?これって秘密のデートじゃない!?」

そこんとこどうなってるか、明日菜なら何か知ってんじゃない!?」

『んなバカな事があるわけないじゃない………』 (ピッ)

ツー、ツーと電話が切れた音がする。

くっ、事情を聴かないで終わってしまった!!

「そうそう、んなバカな事がある訳が無い。」

「あーもー!二度寝しないでよ明日菜あー!」

「信じてないのかなあ〜?って二人とも!ネギ君達が移動し始めたよ!」

追わなきゃ!　　っとおわ!」

路地を出ようとした瞬間、ネギ君がこっちを見た。

危ない危ない。意外と勘とか鋭いんだね……。

………ん?

「どうしたの、くぎみー。早く行かないとネギ君達見失っちゃうよ

なんだか、騒がしいなあ。

都会っていつもこんな感じなのかな？

「木乃香さん、すみません。折角の休日なのに付き合わせてしまつて……。」

明日の準備とかもしたいでしょうし……。」

「何言つてんの、私も用あるつて言つたやないの。」

それに嬉しいんよ？ネギ君の方からこんなん言つてくれるなんて。」

「こ、木乃香さん……。」

う、嬉しい……！最近、他の人に嬉しいなんて言われた事無かったから。」

ああ、木乃香さんつてやっぱり良い人だなあ。」

「ほんなら行こか。今日中にまわらんとあかんしな！」

「はい！」

S i d e o u t

「よし、お前らはここで待ってる。ちょっと轆ヤってくる」

「なに！？今ニュアンスが尋常じゃない感じだったんだけど！？」

「ってダメですって先生！！ホラ、微笑ましいもんじゃないですか！

良くても兄妹にしか見えませんって！！」

「グヌヌヌ……。」

まるで親の仇でも見るようにネギ君を見る愁磨先生。

って言うかこの人、何してるんだろう……？木乃香の事お気に入りみたいけど……。

「(P i P i P i P i P i P i) お？もしもし、明日菜！？」

「(P i P i P i P i P i P i) お、私も？……………ヒイ！」

桜子と柿崎二人に電話がかかってくる。

桜子の方はテレビ電話っぱいけど……。

『事情はお聞きいたしましたわ……。3-Aクラス委員長として命令いたしますわ!!』

教師と生徒の不純異性交遊は断固厳禁、絶対阻止しなさい!!』

「えええ〜。見てる方がおもしろ・し・い・です・わ・ね
『?』」

……さ、サーイエツサー!!』」

「「サーイエツサー!!』」」

テレビ電話でいいinchよが恐ろしい顔で睨んできた。

……と同時に、愁磨先生がその後ろから睨んできた。無理無理。

善良な一般市民がこの二人に勝てるわけないって。

「よし、じゃあバレないように変装するか」

「……………なんでこんなもの持ってるんですか?」

「ん?聞きたいのか?」

路地に置いていた紙袋から制服を取り出す愁磨先生。

・・・本当は聞きたいところだけど、ものつすごい良い笑顔で言われたら・・・。

「じゃあ、チアリーダーの名に懸けて!!」

「」「」「いいんちよの私利私欲を応援よ!!」「」「」

「って愁磨先生、異常に制服似合いますね。女言葉違和感ないし。」

「ん、そうかな?これでも気をつけてるのよ」

怖い、いろんな意味で怖いよこの人。

ウチのクラス変人多いけれど、この人は次元が違うよ。

「なーネギ君、これどうやる?」

「へー、パールツクですか。似合いそうですけど、ちょっと恥ずかしくないですか?」

「(釘男、桜姫。行くのよ!!)」

「(了解ー!)あゝ、これいいなあ。これ買って、釘男君」

「ハッハッハ、良いとも!!店員さんこれください!!」

(……パールック阻止完了、帰投します!)

って、ついノリノリでやっちゃった。

……若干楽しいのは困るんだけど。

「あー、これなんてピッタリやない?」

「(柿ざ ミサミサ、行くわよ!!) あー、これミサミサ欲しい
って言ってたやつじゃん!」

「(了解、愁子!!) あー、ホントだ!店員さーん、これくださ
ー!ー!ー!」

「……と、都心は乱暴な人が多いですね。

(……あれ?今の愁磨さん……な訳ないか。女生徒の制服だったし。
)」

「せ、せやね。(……あれ、愁磨はん?なんで女モンの制服着とる
んやろ?)」

「ちよ、これダンベルじゃなーい!ー!服代がー!ー!」

「服代程度、いくらでも私が出すから気にしないの。」

さあ、どんどん行くわよ!」

「「おおー!」

切に願いたい・・・ツッコミ役が欲しい!

どうしたらいいの、これ!?疑問に思ってるのは私だけなの!?

「ふう……。アハハ、さつきから何回も割り込まれたりしましたか
ら、

ちょっと疲れちゃいました。」

「そっかあ。これ買ってるから十分やし、静かなところで休もか。」

「静かなとこってやばくない!?!いやネギ君が二重の意味で!」

「と、とにかく追っよ!」

……

……

…

「ああー、今日は楽しかったです!ー東京も見られましたし!

あつっ?」

「ふふっ、ネギ君フラフラやないの。座って休みい。」

「(いやー、普通に仲良いわよねあの二人。)」

「(だねー。あ、ネギ君寝ちゃった。アハハ、歩き疲れて寝ちゃうなんて子供だねー。)」

「(い、いや、あれは……!!倒れてそのまま膝枕になった!?)

くうううう、木乃香の奴うらやましいわね!!)」

全く。静かにしないと見つか ってやばいやばい!

愁磨先生が堂々と向かおうと!?

「(しゅ、愁磨先生落ち着いて!!ネギ君が意図的にやった訳じゃありませんって!!)」

「(離さない!!あ、あれはわざとに決まってるわよおおお!!)」

「(この状況でも女言葉なんですか!?!じゃなくてほら座って!!
って力強っ!!普通に無理なんですケドおおお!!!?)」

「(つてええええい!!)」(ドガア!

「(おおう!?)」

桜子が足カツクンの要領で愁磨先生にタツクルする。

流石に立っていらなかったようで　　つて

「「「「うわわわああああああああああああ!!?」「」「」

ガサガサガサガサ!!

「ひゃあ!??つて、皆なにしとるん?」

「あ、アハハハハ……。その、これは……。」「

「「「らあああ~~~~!!お待ちなさああああい!!」

と、木乃香にバレてしまった所でいいんちよと明日菜が登場した。

「……………なんで明日菜も?」

「「「「「ここのこ木乃香さん!!ネギ先生を膝枕なんてつらやm……
もとい、離れなさい!!」

そして私に代わりなさいな!！」

「いいんちょ、明日菜まで……。あっちょー、もしかしてバレてたん?」

「う、うううん……。?あれ、皆さんどうして……。」

つて、あ、明日菜さんまでえ!？」

「ネギ君、どうやらバレてたみたいなんや〜。」

「ええええええ!?!?驚かそうと思ってたのに!！」

おおおおお、これって修羅場!?!ちよつと違うか。

じゃなくて、朝倉とかパルがマジで好きな事になってるよ!！」

「バレてたなら仕方ありませんね……。その、明日菜さん!！」

「うええええ!?!?な、何よ!?!」

明日菜に向き直ると、ポケットを探りだしたネギ君。

な、なに!?!?木乃香を賭けて決闘とか!?!いや、いつの時代!?!?

「これ、その、先日のお詫びです!！」

「……………へ？えっと、何の話……………？」

ネギ君が出したのは、長方形の箱……………。ネックレスとかを入れる奴かな？

「その、明日菜さんずっと元気なくて、それって、あの……………。

あれって、僕のせいだと思って。だから、その……………。」

「あ、ああ。フ、フフフフ……………。もう、違うわよ。

その、落ち込んだのは……………あれよ。自分の不甲斐無さに嫌気が差してたからよ。」

「（な、何の話です……………？）」「

「（さ、さあ……………？）」「

「あ！ええっと。あと、これもです。ハイ。」

「え、また？これは何よ？」

「アハハ、一日早くなっちゃいましたけど。明日菜さん、誕生日おめでとつじゅいませすー！」

「「「「「……へ?」「「「「「」

「明日菜の好きな曲のオルゴールや。朝からプレゼント探して、これにしたんや。」

「………つ、つまり。」

デートじゃなくって、明日菜の誕生日プレゼントを探してただけ?

「あ、明日菜!?!私たちからもプレゼント!?!」

「誕生日おめでとう!?!」

「わ、わ、わ!?み、皆……。こないきなり……。」

あ、ありがとう!?!私嬉しいよう……!?!」

「……さ、今のうちに……。」

「あなたたち……?」

「あ、アハハハハ。ごめんね、いいんちよ。私達の勘違いだったみたい。」

「あ、あなた達はあああああああ!?!」

「じゃーねー！また明日ー！」

「新幹線に遅れるなよー！。遅れたら置いてくからなー！」

あれから数時間、カラオケとかボウリングとかその他もろもろを回って、

麻帆良に帰ってきたのは0時間近だった。

「神楽坂、どうするコレ？お前がおぶってくか？」

「ああ〜……。ハイ、私が寮まで連れて行きます。」

愁磨先生に顎で指されたのは、おぶられたままのネギ。

子供に今日の日程はきつかったみたいで、途中で寝ちゃったの。

……。ずっとおぶってたの、愁磨先生だけ。

「よっしょっと。じゃあ、おやすみなさい先生。また明日。」

「ああ、また明日。お前はバイトしてるし、寝坊は無いだろっしな。」

なんだろう……？今日の愁磨先生、なんか違和感ある。

悲しそうって言うか、妙に優しいって言うか。

「ああ、そつだそつだ忘れてた。神楽坂。」

「はい？」

「ほい、やるよ。」

と、私のタートルネックの中になんか箱を入れて来た。

「うひゃあああああ！？な、なんですか！？」

「何って、プレゼント。その通り両手塞がってるしな。」

「あ、そつですか。っじゃなくて！！えと、あの……。ありがとう
ございます。」

「うむ、それじゃな。」

それだけ言って、踵を返し暗い森に歩いて行く。

……なんか、ヤダ。このまま帰したら、なんか、ヤダ。

「あの、愁磨先生！！なんでですか！？」

「それはつまり、ネギの敵っぽい俺が、

ネギの味方兼保護者のお前の誕生日を祝った拳句、プレゼントまで
寄越すとは。

何を企んでやがる……って意味か？」

「え、ええつと。そこまでアレじゃないけど……。」

「フフツ、お前は、なんて言うか……。アレだよなあ。」

「わっ！？」

何故か、撫でられる……。見上げると、今まで見た事無い

いや、私に向けられた事のない優しい顔の愁磨先生が。

この顔、あれだ。アリアさんとかエヴァちゃん撫でてる時の顔に似
てる。

「あ、あの……//」

「俺は……俺達はな、一回死んだんだ。それで、同じ時に生き返っ
たんだ。」

矛盾してるけど、いくら家族でも、これだけはダメなんだ。

だから、俺達を祝う奴はいない。その代わりに、俺達は祝ってやるんだよ。」

……何の話が分かんないけど。

いや、全然分かんないからどうしようもないんだけど……。

「じゃあな、アスナ。た

ゴオオオオオオオオオン

ゴオオオオオオオオオオン

「え、なんて言いました？」

丁度よく、12時の鐘が鳴って聞こえなかった。それに今、明日菜アスナ？って。

「おやすみ。」

「え、あ、おやすみ……。」

結局、なんて言ったかは分からなかった。

ホント、勝手な人・・・。

S i d e
o u t

第43話 その後と準備は平和なようです（後書き）

と言う訳で43話でした！

作「さて、次回からようやく修学旅行編。

長い、長いぞ……。」

愁「この調子だと200行くんじゃないかなろうか、これ。

……仕方ないね。」

ノワ「修学旅行に行く人は、次回発表。

行かない人はお留守番編で書くらしいから、問題ないそうよ。」

作「ああ、また長くなるのか……。申し訳ありません。

さて、今回は……。来週中には更新します。弱スランプエ……。

では、また次回！！」

作愁ノワ「……アリーヴェデルチ！！！！」

第44話 新たな試練は幕を開けるようです

Side 愁磨

「あああああああゝゝ。ひいゝゝまあゝゝだああゝゝ
よおおお……………」

「そ、そんな情けない声を上げないでください。」

「だああつてええ……………」

のぺーっと机に伸びる。…………仕方ない。そう、仕方ないのだ。
何故って、そりゃ

回想

昨日、夜、学園長室。

「急遽代理寄越せてどういう事だ!？」

ジジイから電話を受けた俺は光もかくやと言うスピードで学園長室
に乗り込み、

本人に詰め寄る。

「フオオオオオ！？そ、それがの？

婿殿が愁磨殿を寄越さんでくれと言ってきたのじゃ。絶対に何か問題起こすからと。」

「……………」。

フッ。
「

よし、今から行って殺して来よう。それで俺が長なれば問題ないだろう。

うん、そつに違いない。

「そつか、分かったよ。それなら仕方ないよな。じゃあ、おやすみ。」

「待つんじゃ！？いかんぞ！？絶対にいかんからな！？」

「チツ……………まあ、見当はつくさ。

あっちの過激派がなにかやらかそつとしてて、俺が行ったら間違はなく失敗すると。」

で、木乃香をダシに詠春を脅したか、詠春の名前だけ使ったかだな。」

行けないのは残念だけど、最悪「そつだ、京都へ行こう」的なノリで、

休みとって行けばいいんだしな。

・・・それよりも。

「随分な茶番を仕組むじゃないか。

ネギはお前と詠春の仲が悪いから、東西間が緊張していると思ってるぞ?。」

「フオッフオッフオ。なに、体の良い御遣いじゃよ。

過激派は木乃香を狙っとる。それが敵の真っ只中に行くのじゃ。」

「……………お前、俺よりスパルタかもな。」

要するに自分が鍛えた弟子がどこまで出来るか……………

それが見たいんだろう。……………孫娘をダシにしても。

「フン、大した信頼だな。木乃香と刹那に1μでも傷をつけるような結果になってみる。」

麻帆良にいる全員が拷問にかけられる様を見せ、怨嗟の声を全てお前に押し込めてから殺してやる。」

「フォッフォッフォ。心がけておくぞい。」

タヌキが。・・・もとい、ぬらりひょんが。

ノワールは保険医、アリア・エヴァ・真名は2年で間違いなく行かなければならないから、

この4人が守るって算段だろう。ああ、大正解だよ。

・・・もみじに戦闘面での期待はない。少なくとも、今は。

「じゃあな、おやすみ。精々地獄に落ちろ。」

「フォッフォッフォッフォ！そうなたら主が来るまでま待ってるわい。」

終了

と、言う訳で俺は刀子・アリカと共に留守番。

ああ、あいつらは今頃何やってんだろうなあ……………。

Side out

Side 刹那

「はい、アリア。あーん。」

「あ……………ん。もきゅもきゅ……………」

「はふう……………」

アリアさんにお弁当を食べさせ、恍惚とした表情をするノワールさん。

現在私達は、京都に向かう新幹線の中にいる。

教師が生徒と同じ席に座るといっ点で一悶着あったのですが、鶴……………

もとい、悪魔の一言で決着がついた事は語る必要はありませんね。

「……………ハア……………」

「あらあら、ご機嫌ななめね。まあ私だって非常にムカついているのだけれど。」

「あ、あはは。仕方ないじゃないですか、ノワールさん、アリアさん。

長も難しい立場ですし、対赤子、対世界までこなす旧友を入れる訳にもいかなかったんでしよう。」

そう。クラスの副担任であるにも関わらず政治的（？）要因で愁磨さんが来られなくなってしまう、

アリアさんは普段に輪をかけて不機嫌に。

ノワールさんは分かり難くはありますが、こめかみに常に青筋が浮いている。

「理解はしているけれど、納得はしてないわ。」

詠春……あっちについたら……ツフフ。ウフフフフフフ……
「……………」

「……………クスッ。」

あ、アリアさんまで笑った！？長、今すぐお逃げくださいいいいいいい……

過激派とか普通に無視してでも逃げない!?

「キヤーーーーー!!」「うわわわあああああ!?!」

「ちょ、わあああああつ!?!」

「なあに?騒がしいわねえ。」

騒いでいるクラスメイトを見ると……………。

か、かかかかかかカエル!?

「お嬢様、申し訳ありませんが少々お手洗いに行ってまいります。」

「おー、分かったえ……………つてもういない。」

お嬢様の返事も聞かず、車両を離れる。

フウ……。ああ言う、ヌメヌメして奇妙な形をした生物はどうしても苦手です……。

と言うか、何故カエルが……?お嬢様、もしくは親書を狙うには少々

「……これ、落し物です。ネギ先生の……ですか？」

「はい……！ありがとうございます……！」

「そうですね、気をつけてください。あちらに着いてからは特に、ね……。」

拾い上げるとほぼ同時にネギ先生が入って来たので、渡してあげる。

『落し物』と言う意味で忠告も付け加えておく。

この調子だと財布すら落としかねないし、まず見つからないだろうから。

「は、ハイ。気をつけます……。」

「では。」

……いらない事を言ったかもしれない。

勘違いしないと良いのですが。

S i d e o u t

「おおー！ここが例の飛び降りる！！誰か飛び降りれ！！」

「では拙者が……。」

「おやめなさい！！下の方に迷惑ですわよ。」

「（飛び降りるのはいいのかよ……。」

清水寺に来て皆さんはテンションが一気に上がってしまい（新幹線の時点で凄かったけど）、

他のお客さんの迷惑にならないようにするので精一杯で、

とても楽しめたモノではなかった。

「（ハア………………。愁磨さん…………助けてください…………。」

「おお！？なんだネギ君溜息なんてついて！！」

折角なんだから楽しまないと！！」

「は、ハイ……。」

本当の意味で、この仕事大変なんだって気付いた気がする……

。。

愁磨さん、ごめんなさい。。。。麻帆良に帰ったら今までの分を取り返せるように働きます。。。。

「ネギせんせ。そんな思いつめても良い事ないわよ?」

「あ、ノワールさ…先生。何飲んでるんですか?」

「抹茶よ。シユウが点ててくれたのも美味しかったけれど、これはこれで良いわね。」

「一緒に飲むかしら?」

ノワールさんの誘いに頷きそうになるけれど、周囲を囲むのはアリアさんや桜咲さん、灌宮さん

要するに愁磨さんと行動してる面々。。。ああ、どうでもいいや。。。。

「お言葉に甘えて。。。。」

「……………予想外の反応でちょっと困るわ。」

「本当に疲れているようだね。まあ、アレを抑えるだけでも大したものだよ。」

素直に評価できる。」

「ありがとうございます……。」

「ずー……。」

「「「「はあ……。」」」」

抹茶を飲んで様々な溜息をつく。いいなあ、なんか……。

まったりっていうかゆっくりっていうか……。そう、余裕がある。

「いいなあ……。」

「フフツ。お年寄りみたいよ？」

「と、年寄り!?……でも、こんなにゆっくりできるんならそれも良いですね。」

「ね、ネガティブなんだかポジティブなんだか分からなくなってるよ？」

「大丈夫、ネギせんせ？」

「もみじさん、心配してくれるんだ……。」

ついこの間倒そうと・・・いや、殺そうとした僕を。フフフフ・・・。

ああ、僕って本当に心が狭くて愚鈍で愚昧で愚かで矮小で生きてる価値が無いなあ・・・。

「……………はい、お団子。特別に奢ってあげるわ。」

「え？」

どんよりしていた僕に、ノワールさんがお団子をくれた。

ああ、ノワールさんすらこんなに優しくしてくれるなんて。相当酷いんだろう。

「誰も、あなたとシユウを比べたりなんかしないわ。違いすぎるしね？」

でも、あなた担任なんだから。せめて1億分の1くらいは働いてくれないと。」

「は、はい。やってみます……………」

「ええ。『頑張る』よりはそっちの方が好きよ？じゃね。」

「ああ〜！待ってよノワール〜！ボクまだ食べ終わって無い〜」

一人だけ騒がしく去って行く一行。

……『頑張る』と『やってみる』って、どんな違いだろう？

あれは、えっと……誰だっけ？

『『頑張る』ってのは嫌いなんだ。なんか、『とりあえず』とか『適当に』ってニュアンスがあるじゃん？

でも『やってみる』はなんか、こつ……ポジティブさがあるじゃんか。』

『ギャハハハハ！説明になってねーぞ！お前はいつつもそうだな、

』

……よく、思い出せないけど。

僕が無意識に反芻してるから、多分父さんか愁磨さんなんだろう。

そうだな……とりあえず！！

「西の長さんに親書渡して、父さんの手掛かりを見つけよう！！」

そのために来たようなものなんだから！！」

あと、愁磨さんの分も……とは言えないけど。

1億分の1……いや、千分の1くらいは働いて見せる!!

……

……

…

「ネギくーん！こっちこっち！」

「はいー！これが有名な音羽の滝ですかー。」

何かに効くって話だったけど……。

同じ所から出てるのに違う効能ってありなのかな？

「ゆえゆえー！どれがなんだっけ?!」

「右から健康・学業・縁結びです。」

「……左左いー!!」「」「」「」

「ん!？う、うまい!!いやでも不味い気もする!？」

「みなさん落ち着きなさい!!全く……。」

こ、これは確かに。霊験あらたかな味な気も……。」

ああ、普通に真ん中選んで欲しかった自分があるよ……。

多少は教師っぽくなったのかな……？

「あ、アニキ！あれヤバくねーか！？」

「ん？……ん！？」

「みんな酔い潰れてしまったみたいですが……。」

酔い潰れ……ってなんで！？

……ああ！滝の上にお酒の樽が！？誰がこんな悪戯を！

「ん？なんだかお酒臭くないですか新田先生？」

「言われてみれば……。」

「あー！その、えっと！？）　　って、焦る必要はないのか。」

その、滝の上にお酒の樽が仕掛けてあって。みなさんが飲んでしまつたんです。」

「ええ！？ああー、本当ですね……。全く、誰がこんな悪質な悪戯

を。

ネギ先生。申し訳ありませんが、全員をバスに乗せて旅館に行つてくれますかな？」

「はい、分かりました。」

酔い潰れていないみんなと協力して、いいんちよさん達をバスに乗せ、旅館に向かう。

吐く必要のない嘘とか、誤魔化すなんていらんだよね。

ね。・・・正義じゃなくて、正しい事をすればいいんだ。・・・ですよ。

「ったく、困ったモンね。ん？なんか言った、ネギ？」

「いや、アハハハ。何でもないです。」

「むうう〜……。アンタ、出発前からなにか隠してない？」

『アッチ』関係で。と言うか、そっちしかないけど。」

・・・明日菜さん、勘に関しては愁磨さんと同じくらい凄いいんじやないかって思うんだけど。

今更だし、いつか・・・。

「実は、学園長先生から頼まれて関西呪術教会　麻帆良学園と仲が悪い所がありました、

そこに仲良くしましよって手紙を持って行く事になってるんです。

」

「へー、面倒な事になってるのね。

……で、今日の変な出来事全部その仕業な訳ね？」

「……………明日菜さん、あなたって本当に凄いですね。

と、そう言う訳です。すいません……………」

「いいわよ、気にしないで。今更ってもんでしょ。

で、またなんか手伝えばいいんでしょう？気が向いたら手伝ったげるわよ。」

そう言っつて、不敵にも見える顔で微笑む明日菜さん。

僕の周りって、カッコイイ人が多い気がするなあ。

「でですね、姐さん、アニキ。

俺っちはあの桜咲ってのが一番怪しいと思　」

「いや、それは無い。」

「それって、愁磨さんが桜咲さんがスパイだって知ってるって事だよ？」

あの人、約束は守るから……麻帆良に不利益起こす人だったら排除してるか懐柔してるよ。」

「……ネギ、あんた毒されて来たんじゃない？」

「うぐ……。と、とにかく。スパイとかの心配は無いよ。」

そりゃ、全く無いって思うのもダメだけど。

「あ、いたいた。ネギ先生。教員は早めにお風呂済ませてくださ
いね。」

「あ、はい。」

キリがいいー（？）所でお風呂上がりのしずな先生が来た。

これ以上話もできないから、仕方ないか。

「（それじゃ、私達ももうすぐお風呂だから。また夜の自由時間ね。」

明日菜さんとも別れお風呂に向かい、カモ君（熱爛持ち込んで）と一緒に入る。

ふう………。

「今日は………疲れたよ………。一日目でこれって、死ねるんじゃないかなあ………」

「そういう時は………！飲みますかい？！アニキ。」

「いいけど、お酒はダメだよ！」

「えー！良いじゃねえツスカー！」

ガラガラガラ！

「わー！露天風呂ー！ー！ー！」

「ええ感じやね〜 ……つて、ネギ君！？」

「明日菜さん、木乃香さん！？」

「ちょっと！なんであんなここに居んのよおー！ー！ー！ー！」

Side out

Side ????

かくして、騒がしいままネギの第一日が終わった。

そして、麻帆良では

「よし、決定！！明日の夜までには準備終わらせとけよ二人とも！」

「愁磨と旅行か。二人つきりならなおよかったのじゃが……。」

警沢は言えんの。」

「（こ、これはある意味チャンス！？で、ですがしかし……。）」

留守番組が、動きだすのだった。

Side out

第45話 初戦 少年はいまいち成長しているようです(前書き)

こんばんわ、H a t e . r です。

作「先に。ここは京都ですので、不思議認識障害がありません。

ですので、一部生徒が可笑しな(正しい)思考をしている場面があります。」

愁「障害結界に感謝したくなるような、ないような……。」

ノワ「それじゃ、いつもの行くわね。

木下文@木下衣玖様、朧月那由他様、もみじ様、龍賀様、W h
i t e S e a l 様、

なおぼん様、春夏秋冬様。

感想・訂正・アンケート(?)ありがとうございます。」

作「留守番編は、原作で言う53 4時間目に入れます。

それでは、45話。」

作愁ノワ「「どうぞー!」「」

第45話 初戦 少年はいまいち成長しているようです

Side ネギ

「あれ、桜咲さん？もう就寝時間ですから、お部屋に戻ってくださいー。」

「先生ですか。すみません、これが終わったら戻りますので。」

見回りをしていたら、桜咲さんが御札を貼っていた。

なんだろう？東洋呪術は詳しくないから分かんないや。

「……ああ、これは式神返しの結果です。」

私のは手遊び程度ですので、低位の式神は入って来れず、上位のモノが入ってくれば

分かる程度のモノです。」

「へえ〜……。でも、手間がかかりそうだな。僕には合っていないか……。）」

あ、そうだ。ちょっとだけお話ししてもいいですか？」

「ええ、構いませんよ。では、こちらに。」

桜咲さんは簡潔に言うと、脚立から降りてスタスタとロビーの方へ歩いて行ってしまおう。

ううーん、やっぱり若干苦手だなあ……。

「フリー・シエー・エクスレット人払い”。えっと、桜咲さんは親書の事、知っていますよね？」

「……ええ、愁磨さんから聞きましたから。それが？」

「はい。桜咲さんは神鳴流　こちらの情勢に通じていると思いますので。」

関西呪術教会について教えて貰いたいんです。」

学園長先生はいくら聞いても言葉を濁すだけだから、仲が悪いつて事しか分からなかった。

そりゃ、余所者魔法使いがあれだけ大きな顔をしてれば仲も悪くなるよ。

「おそらく、ですが。敵の大部分は関西呪術教会の一部勢力である『呪符使い』です。」

それと、所謂タ力派。関東魔法教会を實力を持って排除しようとしている連中です。」

「なるほど……。危険な相手である事は間違いないですね。」

それで、敵のリーダーは誰なんですか？」

「タカ派をまとめているのは、元老陣……。数十年裏で実権を操っていた奴らです。」

そして、関西呪術教会の長は……。『近衛詠春』です。」

僕はその名前を聞いた時、一瞬分からなかった。

このえ、えいしゅん……。？近衛、詠春……。って、まさか。

「近衛って……。木乃香さんと何か関係が？それに、詠春って……。」

「ええ、そうです。」

この……。お嬢様の父であり、愁磨さんの戦友です。」

つまり、父さんの戦友でもある……。！！

……。学園長先生は知っていて狙ったのか。だけど、今はありがたい。

「ありがとうございます。……あと、一つだけ。

詠春さんはどちら側ですか？」

「……長は、こちら側です。方々まで手が回らないと言っつのが現状ですので……。」

よし、これで敵はハッキリした。父さんの話も聞けるだろうし、

いやでも実戦経験が出来る。

「それじゃ、お休みなさい。桜咲さん。」

「はい、おやすみなさい。」

一応、僕も警報鳴るくらいの結界は張って……よし。

……明日の為に、早く寝よう。

S i d e o u t

「やれやれ、困ったな。これじゃあ天ヶ崎さんが使えないじゃないか。」

……仕方ない。最初だけ僕が行こうか。」

「んんんんんん……。」

「木乃香？どうしたのよ。」

「トイレやあ……。」

私はネギに言われた通り、ずっと木乃香と一緒にいた。

なんでも、今回は特に『要人』らしい。

覇権争い、ねえ……。……。？なんか、覚えがあるような……？

「って、なんで私がお嬢様みたいな事件に巻き込まれるのよ。」

……それにしても遅いわね。お腹でも壊したのかしら？」

と、立ったその時、廊下を走ってくる音がして、

ネギと桜咲さんが飛び込んできた。

「ちょ、なに!?!」

「木乃香さんは!?!」 「お嬢様は!?!」

「え?今トイレだけど……。遅いから様子を見ようと思って……。」

「クツ!お嬢様!?!いらっしやいますか!?!」

ドンドンとトイレの扉を叩く桜咲さん。ちょ、みんな起きちゃって!

『入っとなりますえ〜。』

「!?!」

「な、なあんだ。入ってるじゃな」

キンツ!!

大太刀が煌めき、鍵を切る。つてええええええええええ!?!?

しかも扉を開け つてネギもいるのよ!?!?

『入っとなりますえ〜。』

「……………え？」

しかし、その先に木乃香はいなかった。

代わりに御札と、水が出しっぱなしの洗面所の蛇口だけがあった。

S i d e o u t

S i d e フェイト

「いやあ、おおきにフェイトはん。流石に屋内で猿鬼と熊鬼出す訳にもいかんくてな。」

「……………別に、大した事じゃない。」

単に、計画に必要なだから利用してるだけにすぎない。

・・・にしても、スマートじゃなかったよ。

それ以外にないとは言え、お手洗い終わったばかりの女性を捕まえるなんてね。

「じゃあ、僕はこれで。」

「はいな。後は任せとき。」

「（・・・大丈夫だよな？あのお嬢様、愁磨のお気に入りに入りらしいけど。」

魔力使うだけだし・・・いざとなったら止められる。」

そう結論付け、駅の屋上に飛びあがる。ここから先の観戦は、単なる好奇心だ。

”ネギ・スプリングフィールド”

1stと2ndを倒した、英雄一派のリーダー・『サウザンドマスター千の呪文の男』の息子。

愁磨の話だと、あの『東の修羅王』に稽古をつけて貰っているらしい。

「どれほどのものか……見せて貰うよ。」

眼下では、天ヶ崎さんが津波を起こす札を使い、それを・・・へえ。

ネギ・スプリングフィールドは、障壁を三角形に置いて左右にいなしている。

あの歳で高さ5mの障壁を作れるのか。

「ごんのお…！」 お札さんお札さん ウチを逃がしておくれやす」

今度の札は、大文字焼きのように炎が広がる。

確かに、並みの使い手なら数分稼げるだろう。でも

「フランクフルトタテイオルウエレア
”風花風塵乱舞”！！」

「うっひゃあ!?!」

ゴウ！と風魔法で吹き飛ばす。中級魔法を詠唱破棄か……。思った以上に出来るね。

それに、あの威力。魔力の込め方が分かっている。

”才”か、師が化け物なのか……。両方かな。

「アエトルカブトウーラエ
”戒めの風矢”！！」

「あひい!?!お助けえ！」

「クツ!?!”曲がれ 曲がれ”！！」

ネギ君は、折角隙について束縛矢を放ったのに、お姫様を盾にされ

たからと

魔法矢を無理矢理曲げ、結果数発しか天ヶ崎さんに当たらなかった。

・・・それ、一般人に当たっても大丈夫な魔法じゃないか・・・。

「さあ、木乃香さんを返し」ざーんがーんけーんけーんけーん！」

「つ、月詠はん！！遅かったやないか！」

「えろつすんまへーん。命令されとったんですう。」

今日のところは引けとの事ですえ。」

「チいい！！」

猿鬼（二号？）を出し、二人が撤退してくる。

僕が出れば、とは思っけねど・・・それだと面白くない気がする。

「……………毒されたかな。」

ともかく、楽しめそうで何よりだよ。

ネギ・スプリングフィールド……………。

Side out

………

………

…

Side ネギ

「私、ネギ先生の事が好きでした！！……………大好きです、ネギ先生！
」

……………。

待って。どうしてこうなったんだっけ！？

今は修学旅行二日目、自由行動日、宮崎さんから誘われて。

明日菜さんとか木乃香さん達がいるから色々都合もいいし、一緒に行くことになって。

いや、ちょっとは違和感あったんだ。宮崎さんと二人きりになる場面多くなって。

それとも 形警部が出てきて『お前はとんでもないものを盗んだんだ……。』とか言うの!？」

待て、落ち着くんだ。考えよう。僕は宮崎さんをどう思ってるんだろっ?

色々アクシデントもあってクラスの中では親しい方だし、かわいいし、勉強真面目にしてくれるし、

押せ押せな皆の中では癒しっけ言うか一緒に居て落ちつく存在だし、嫌いじゃないって言うか、むしろ好きな部類だけど!

「あ、アニキ!? 大丈夫ですかい!!」

「どうしよう、どうしよう……。待て、逆に考えるんだ。」

背德的であるからむしろ良いと考えるんだ……。そうだ、愁磨さんだってそうだし。

僕の場合一人だし。いざとなったら噂の愁磨さんの国に行けば結婚もできるだろうし……。」「

そうだよ。愁磨さんが王様って考えれば全部丸く収まるじゃないか。

良くある覇権争いで愁磨さんは濡れ衣を着せられて犯罪者扱いになっけ。

公園近くのお団子屋さんで休んでいる時に、いい肴が飛び込んできた。

昨日はそこそこ成長してると思ったのだけれどね？

恋愛って言う点じゃ、全くの素人って言う訳ね。

「ほら、ついてるよ。ああ、もみじも……。」

「ん〜」

真名は両手に花……もとい両手にお荷物状態で、甲斐甲斐しく世話をしてる。

やっぱりお姉さんよねえ〜。和むんだけど、やっぱりもつとはg

「それ以上の事を考えるのはやめて貰えるかな？ノワールさん。」

「あら、分かっちゃった？ウフフフ……。」

「姉様は顔に出るんだ。それこそ兄様以上に……。」

そうだったの？気をつけないといけないわね。

にしても、シュウが居ないとアリアがイマイチ元気無いのよね。

アリアだけじゃなく、皆ちよこちよこ元気ないし……………。

早く颯爽登場してくれないかしら……………。私だって。

「あああああ、もみじ貴様！！それは私の団子だろうがぁ！！」

「へっへーん！！いつまでも残してるエヴァが悪いんだよぉ〜だ」

……………この二人に関しては、若干気のせいかもしれないけれど。

Side out

Side 朝倉

「おろ？ネギ先生どうしたの？」

「いや〜その…………アハハハハ。」

明日菜がネギ先生を背負って旅館に帰って来た。フッフーン、何かあるわね？これ。

そう言えば朝食の時、宮崎が頑張ってたよね？

「こういうときは、本人に直接聞くのがジャーナリスト!!」

と言う訳で。ネギ先生と何かあったの？」

「ふえええええ！？べ、別に。何も無いですう〜。」

「明日菜からネタは上がってるのよ！さあさあ、お姉さんに話してご覧？」

嘘だけどね。ネギ先生と何かあるっつーたら宮崎が明日菜か、木乃香って言う線もあつたね。

消去法で宮崎しかなかったから来たけど、そう面白いネタでも

「そ、その……お返事が欲しかった訳でもなく、言えれば満足だったと言いますか

返事が怖いとゆーか……。だから、いいんですうー。」

……え、これってつまり告ったって事！？宮崎が!?

特級ネタキターーーーーー

！！！！！

と、本来なら喜ぶ訳だけでも。

「アツハツハ！本屋は可愛いなあ！

でも、小学生じゃないんだからそんなじゃダメだよ？って相手が相手か。」

「あーうー？

あ、あのあの！この事はみなさんには内緒に……。」

「分かってる分かってる。野暮な事はしないよ。じゃね！私は応援してるよ！」

はあ〜やれやれ。平和だねえウチのクラスは。

と録音していたのを思い出してレコーダーを取り出し、上書きして消す。

「ゆっくり進む恋もあるさね。すまぬ、いいんちよ。

この事は私の胸の奥にしまっさ……。」

あーあ、何か血沸き肉躍るすっごいネタ無いかなあ。

と、思っているとネギ先生を発見した。思ったよりも普通みただ。

思ったよりもタフなんだね。・・・一応、取材しとこうかな。

「アニキー、大丈夫ですかい？」

「実はそんなに大丈夫じゃないんだよねえ……。」

フフフ……上面を作るのを愁磨さんに教えて貰ったのを思い出してね……。

僕でも40分で自由に作れるようになるから凄いやねえ……。」

……………お、オオオオオオオオオオコジヨが喋ってる！？

ネギ先生腹話術とかできたの！？って言うか普通に寂しい人になっちゃってる……！

「ハアアア……。」

「アニキー、もうちょっとシャッキリ　アニキー！猫が！」

と、オコジヨ（ネギ先生？）が叫んだ方を見ると、猫がバンに轢かれそうになっていた。

そしてそれを見たネギ先生が飛びだして……って！？

ね、ネギ先生死んだああああ

「伏虎”！”天竜”！！」

ネギ先生はスライディングで潜り込みバンを蹴り上げ、空中で猫の先まで蹴り飛ばした。

く、くくくく車を蹴り上げて吹っ飛ばしたあ！？何者！？ホントに何者！？

「危なかったあ……。大丈夫だった？」

ニヤー

「そう、良かった。……。早く逃げようか。」

「だな！戦略的撤退ってやつだ。」

ぶつぶつと何やら言っていると、ネギ先生の姿が消えて凄いスピードで何かが飛んで行った。

………す、スクープキターーーーー！！！！

「（謎の10歳天才少年。中国拳法？かなんかの使い手で、マジッ

クみたいに消える……。

超常現象として考えるなら魔法とか気とかそういうのか

そう言えば愁磨先生とも古い仲っぽいし、タダ者じゃあないわね！
！）「

すっかり基準が愁磨先生化け物級だったから隠れてたけど、

ネギ先生も相当イレギュラーだよね！！ふ、ふふふふふ！燃えて来たああああ！！

と、言う訳で。

「お背中流しましょうか？ネギ先生。」

「し、しずな先生！？け、けけけ結構ですー！！！」

「そう遠慮なさらずに。ささ。」

教師時間のお風呂に潜 入スクープ！！もちろんそのままじゃなく、しずな先生に化けてね！

ネギ先生を強引に洗っていると、筋肉がすっごい事に気付く。

「凄い筋肉ですわね、ネギ先生。愁磨先生と何をしてらしたんでし

たっけ？」

「え……？僕が稽古つけて貰っているのは学園長先生ですよ？」

それにしずな先生、”先生”じゃなくて愁磨さんじゃ……？」

「あ、あら。ネギ先生が居たからつい。」

フムフム、あの不思議学園長に中国拳法が何か叩きこまれてんのね。

って言うか、しずな先生と愁磨先生ってそんな関係だったの！？」

新情報ありがとうネギ先生！！

「それでね、ネギ先生。私しゅ、愁磨さんから教えて貰ったの。」

「……な、何をですか？」

「ネギ先生と愁磨さんが同じってこと。」

「たあッ！！」

洗いかけのまま、風呂まで飛んでいくネギ先生。

な、なに！？急にどうしたの！？

「愁磨さんは、そんな迂闊な人じゃありません。」

直接遭遇して、覚悟を決めて意思表示しないと、魔法の事は教えてくれません。」

「ま、魔法！？ネギ先生も愁磨先生も魔法使ってことね！！」

「……やはり、偽物ですか。あなた、誰ですか？」

「……ひ、ひっかけられた！？だけど真偽問わず良い情報が手に入ったわ！！」

「ある時は巨乳教師、またある時は風林火山の火！その正体は！

3 - A N O . 3、朝倉和美よ！！」

「でしょうね……。こんな事するのは朝倉さんか早乙女さんか佐々木さんか

椎名さんか鳴滝さん達ですからね。

あと柿崎さんと釘宮さんも巻き込まれる形……で……。」

いきなりがつくりと土下座orz体勢になるネギ先生。

うん、意外と多かったのね。分かる分かる。私も多いなって思ったもん。

「まあ、良いです……。それで、どうするつもりですか？」

「ふ、決まってるわよ！私の野望の為に協力してもらおうよ！」

「……や、野望、ですか？」

「そう！魔法使いが実在するとなれば世界中大騒ぎ！私の独占インタビュー記事が

あらゆるメディアで引ッ張りダコとなり、ネギ先生は一躍有名人！

ドラマ・ノベライズ化して、最後はハリウッドで世界進出よ！！」

これが私の野望よ！スキャンダルとかチマチマ集めてても大成出来ない！

そこに舞い込んで来た大金星！

「さあ、いつちよ魔法を使ってネギ先生！！」

「……別に構いませんけど、まさかそれで終わるなんて思ってますか？」

「へ？」

「魔法使いですよ？僕だけと考える人がいるとでも？」

十年しない後、大国が探しだして魔法使いの隊を作って戦争に投入されることになりますよね。

しかも、魔力は休めば復活する、ほぼ無限の不思議エネルギーです。

生きたまま何かしらのエネルギー源にされる人も出るでしょうし、人体実験もされるでしょう。」

青くなってきた私を冷ややかに見て、なおも続ける。

「フツ。それ以前に、なんでここまで魔法使いと言う存在が見つからなかったと思います？

信用のある、各国の偉い方々は皆知っているんです。

国がそれを隠匿し、魔法使いも隠匿に努める。知られた場合は”消す”か、記憶を改竄するんです。

どうしますか？OKと言うなら、今ここで派手な魔法を見せてあげますよ？」

何でもなく、何時ものように笑うネギ先生。なんとなく勘で理解する。

真実だと。何時もの軽い気持ちで答えたら、見せると言った魔法でと。

「い、いや、アハハ。遠慮しとくよ。」

「そうですね。それじゃ、お風呂は今教員の時間ですから。上がってくださいますか?」

「は、はい!失礼します!!」

感覚的には世界新記録なスピードで、風呂場を退避する。

アハハハハ……ネギ先生に愁磨先生が被ったよ……。

うん、世間にバラすのはやめとこ。私がバラされちゃうしね。

「うし、寝よう!って、まだ7時前かあ。なんか日常的な面白い事無いかなあ。」

「若干非日常でいいなら、用意できますぜ?」

歩いていた廊下を振りかえり、下を見ると。そこにはネギ先生のペ
ット?

の白いオコジヨがいた。

Side out

S i d e

「フハハハハハハハハハハ！そうだ、京都へ行こう！！」

「いえ、もう着いています。」

「テンション高いのう……。 (子供みたいでかわいいがの)

もう暗いし、宿に行って休むとしよう。」

「そうですね。それで、どこでしたっけ？」

「えーっと……。あ、あったあった予約表。」

白銀髪の影が、ポケットから紙を取り出す。

そこに書いてあったのは

「『ホテル 嵐山』だったさ。和室しかないのにホテルって、どうよ。」

S i d e o u t

第45話 初戦 少年はいまいち成長しているようです（後書き）

つと言う訳で45話でした。

作「ネギ、戦闘面では学蔡同レベルへ。恋愛面、年相応。

精神面、追い詰められた場合のみ確率で超成長。」

愁「現実性が無いから、イマイチだな本当に。

って言うかフェイトは結局出て来るのな。」

ノワ「じゃないと坊やといい関係になれないじゃない！

ウフフフフ……。」

Aria「……みたく、ない。」

作「次回、ついにお出でまするあいつら！

朝倉とカモの運命は！？そして出て来る好敵手（噛ませ狗）！

愁「次回も似たような周期で更新するらしい。それでは。」

作愁ノワAria『アリーヴェデルチ！！！！』

第46話 争奪戦は思わぬ結果を招くようです(前書き)

こんばつぱー、H a t e . r です。

作「キモイ？知った事か。こうじゃないと前後書き書けないんだ。
のっけから失敬。」

愁「コホン。

さて、久々に閲覧数見てみたらPV3,400,000、ユニ
ク370,000越え。

読んでくれた全員に感謝だ。ありがとう。」

ノワ「それじゃ。龍賀様、オイラム様、もみじ様、なおぼん様。

感想ありがとうございます。

もみじ様。H a t e はシメておきましたので、私が代わりに謝り
ますね。

ごめんなさい……。完全に見逃してたわ……。」

愁「……………じゃ、行くか！」

愁ノワ「それでは、どうぞー!!」「」

第46話 争奪戦は思わぬ結果を招くようです

Side

7:20

「こんばつぱー。予約してた織原ですが。」

「はい、織原様ですね。いらっしやいませ〜。

長旅でお疲れでしょう〜。お部屋に案内しますので、ついてきてください。」

京都に着いた愁磨・刀子・アリカ一行。

その時はまだ魔法陣が敷かれておらず、愁磨も本件に関してはすっかり忘れていた。

「ええですね〜。今日は観光ですかえ？」

「ええ。妻がどうしても言うもので。」

「しゅ、愁磨が行きたいと駄々を捏ねるから仕方なく来たんじゃないぞ？！」

わ、私は別に……。」

「とまあ、昨今流行りのツンデレでしてね。もう可愛くて可愛くて。」

顔を真っ赤にしてべしべし叩いてくるアリカを諫めつつ、従業員に
ついて行く。

「フッフ、仲がよろしゅうてなによりですわ。」

もうお食事用意できますけど、どうしますか？」

「そうですね、お願いします。何も食べてなくて、お腹減ってて。」

三人分用意してもらっていいですか？」

「ええ、かまいまへんよ。失礼ですけど、食べるようには見えへんわあ。」

それもそうだろう。肉体が女性で無い分ふっくらしておらず、同様
以上に細く、

力を入れたら折れそうな肢体だ。

「ええ、良く言われます。にしても、なんだか騒がしいですね？」

「今日・明日と修学旅行の子たちが来てはるんです。」

大抵他のお客様に迷惑掛かるからもう、この時期は大変で。」

談笑しながら歩くと、部屋につく。

奇しくもその部屋は、ネギの斜め前の部屋だった。

「それでは、ごめっくり〜。」

「フウ〜。……で、いつまで拗ねてんだよ？冗談じゃないか。」

「別に、何でも無いのじゃ。」

愁磨は『なんでもなくないだろ』、と言いたそうな顔はしたが言わず、

代わりに後ろから抱き締めた。

「ごめんな？許せ。」

「……謝っているのか命令しておるのか、分からんではないか……。」

「アツハツハ、ごめんな。」

刀子、どうだった。」

不機嫌が一瞬で無くなったアリカを離すと、窓の方を見て言う愁磨。
すると、扉の影から刀子が出て来る。

「はい、少なくとも周囲50kmに敵勢力はいませんね。

ただ……。知ってて、ここを選んだのですか？」

「は？何を言ってるんだ？」

「ここに、麻帆良学園修学旅行組が来ていると分かっている予約したのですか？」

刀子の質問は、愁磨のポカーンとした顔が答えとなった。

……

……

…

10:30

「準備はいいかい？ねえさん。」

「オツケー。カモつちこそ、抜かりはないね？」

「おうよ！この旅館にいる限りは、絶対成功するぜ！」

題して、『くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブラブキッズ大
作戦！！』』

名の通り、表向きは修学旅行イベントだが、その目的は金稼ぎ。

旅館をすっぽりと囲む仮契約陣が敷かれており、ネギと（それ以外
でも魔力を持っていればいいのだが）

キスすると、仮契約バクティオーが成され、一枚ごとに協会から

五万オコジヨ\$（相場不明）が貰えるのだ。

さらに優勝者トトカルチヨも開催されており、微々ながら朝倉にも
利点がある。

無論朝倉は仮契約がどういうものか詳しくは知らなく、あまり説明
もされていない。

故に、少々はた迷惑なお小遣い稼ぎ、程度にしか考えていない。い
や、考えられない。

「（スマネエな、ねえさん。でも、兄貴にはこれが必要なんだ。）」

そして、朝倉に話した事すらも……4割方の真実でしかない。

カモの本当の目的は、戦力強化なのだ。

「（いくら修行したって、あの爺さんじゃ愁磨にゃ勝てねえんだ。

アニキがあいつに勝つにゃあ、手を増やすしかねえ。」

ネギの仲間は現在、明日菜（未契約）、カモのみ。手助けとしては、学園の魔法先生・生徒もいるが。

対して愁磨はノワール、エヴァ、アリア、アリカ、真名、刹那、木乃香、茶々丸、もみじ、刀子。

万に一つどころか、億にも、兆にすら勝ち目が0なのだ。

愁磨がいないこの時こそ好機。その筈だった。

「それでは、ゲームスタートお！！と言う訳で選手紹介をしていきましょう！

まずは一班、鳴滝姉妹！さんぽ部がどう魅せるのか！？続いて二班は古菲&長瀬！

元バカレンジャー二人組だが、相変わらずの運動神経は侮れない！

続いて三班はネギ先生への偏愛と執着No.1いいんちょ&長谷川！やる気の違いがネックだが一番人気！

四班、佐々木・椎名の運動部ペアは安定感がある！そして大穴、五

まずいますまずいますまずい！！

なんでこいつがここに居るんだ！？学園で留守番の筈じゃねーのか！？

「あ、あわ、あわわわわ……………」

「…………ああ、そうだったな。このタイミングだと、朝倉には知られてるのか。」

まあいいや。…………カモミール・アルベル。お前の目的は？」

「フン！てめえに教える義理はねえよ！！」

敵に情報を流すって事は、それだけ自分たちの死期を早めちゃう。

少しでも時間を稼いで、打開策を

「考えるんだ！と、お前は考えるんだろうが。」

いかんよ？気の短い奴だったら即、殺しちゃうから。状況判断を誤っちゃいかん。

さて、もう一度だけ聞こう。仏ほどじゃないが情けはあるんでな。

目的はなんだ？畜生以下の愛玩動物未満生物。」

「……………仮契約カード作りや、協会から1枚につき5万オコジヨ\$
が貰える。」

単なる金稼ぎ」と、戦力強化と言った所か。

ノワール達は結界張ってて、陣が発動しない限り気付かない。そして俺が居ないこれほどは無い好機。

ゴミながら天晴れた。淫獣程度に評価を上げてやろう。」

……………ホントにこいつは何でも知ってる様じゃねえか。

手のひらで踊ってる気分だけ。

「さて、俺は邪魔する気は毛頭ない。むしろ協力しようじゃないか。」

「……………え？」

「聞いてなかったのか？俺がゲームを盛り上げてやると言ったんだ。」

ああ、契約陣も強化しておいたぞ？

手だろつが足だろつが頬だろつが、キスすりゃ仮契約成立だ。」

んな馬鹿な！？陣は妖精にしか敷けなくて、しかも改変はできねえ筈だ！！

現に数百年、方式は一切変わってねエってのに………。

「さあ、上手く実況して盛り上げてくれよ？はい、説明文。」

紙を渡すと、部屋を出ていく愁磨。俺らはポカーンとしてたが、

画面から聞こえて来た叫び声で、意識を戻す。

『ハツハツハ、つーつかまーえたあ〜』

『ちょ、え、ハアアア！？なんでどうして愁磨先生がいんのおおお！？』

「コホン！さあ盛り上がってまいりました！なんと、偶然旅館に居合わせた愁磨先生！

彼に捕まっても新田に捕まっても同様！ロビーで正座です！！

ちなみに愁磨先生の移動は、普通で歩くのみ！更にネギ先生の部屋には近づかない！」

普通に実況に戻るねえさん。すげえな、この人も。

メンタルどんだけつええんだ中学生。

って言うか、どういうつもりだ？敵の戦力を増やす手伝いなんて聞いた事ねえぞ！

『ドーン……ドーン……』

『きゃあああああああ！！ちよ、逃げるよ！！』

『コラあああああ！！またか3 - A！！』

『挟み撃ちいいー！！？』

戸惑ってる間に、次々葬正座させられてられて行く生徒達。

そ、そうか！手伝うとか言いつつ全員捕まえる気だな！？

「おおーっど！？混乱に乗じて一班と五班がネギ先生の部屋の前へ！

そして宮崎が部屋に入ったあー！！」

S i d e o u t

S i d e 愁磨

「やー、新田先生。お疲れ様です。」

「おや、愁磨先生。お疲れ様です。学園の方はどうしたのですか？」

「有休です。3年が居ませんので受け持つ授業も無かったですし、そろそろご機嫌をとらないと、アリカが拗ねてしまいますので。」

「そうですか。大変ですなあ、奥さんが二人もいると言うのは。」

緑茶を傾けつつ新田先生と雑談する。

横に恨めしそうな顔の生徒が数名正座してるから、若干シニールだ。

「なーんと！ネギ先生は全員偽物だったあー！！！」

トトカルチヨは親の総取りかあー！！？」

『ふざけんな朝倉あー！！食券返せー！！』

と、インカムから絶叫が聞こえてきた。どうやらゲームも終盤らしい。

さて、行くか。

「では、私はこれで。あまり一人にしておくと、またあいつ拗ねてしまうので。」

あと、ロビーは他の方の邪魔になるから、場所を移すなりした方がいいんじゃないですか？」

「ええ、そうですね。罰で夜更かしさせては元も子もありませんからな。」

それでは、旅行楽しんでください。」

部屋に帰ると、ポケットから5枚のカードを取り出す。

順に、鳴滝姉妹・佐々木・椎名・雪広・宮崎。

カモの魔法陣を上書きして創ったので、当然、俺のものとなったのだ。

最も、宮崎の以外はスペアを貸して金はくれてやるけどな。

「しかし、やり過ぎだな。まさか式紙相手でも本体と仮契約パクティオーできるとは。」

「ええ、そうですね。些か軽率だったのでは？」

「何、問題ないさ。どうせこいつ等も巻き込まれる。」

その時の手間を省いただけさ。……文句あるんだったら、やっっちゃうよっ。」

か、可愛いんだが……もしかして……ファーストいや、名譽の為にやめておこう。

「んっ。」

「んっ！……………！！！！」（バタバタ

刀子は、数秒も我慢せず暴れて唇を離す。うっくん、初々しいのう。と、俺の前にカードが現れる。

絵に描かれていた刀子は、その、なんと云うか……………。

「……………魔女っ娘？」

「え、どういふ事ですか！！私は刀を使っんですよ？」

「いや。ポニテにでっかいリボンつけて、マントつけて、ニーソだぞ？

あ、でもホットパンツか。…………近接系って意味じゃ、某魔王の弟子と同じか…………。

武器は　　うん、使っな。」

「え、どうしてですか？そっちが仮契約の目的と言っても過言ではないのに。」

「だって……『村正』って。明らかに妖刀やん。」

Side out

Side のどか

「おおー！それが昨日の優勝賞品！？かわいいー！」

「あーん、欲しかったあーー！！」

朝ご飯のあとに、朝倉さんが優勝賞品のカードをくれました。

本に囲まれた私と、数字とか文字が書いてあって、凄く素敵です。

ゆ、夕映のお陰だけど・・・ネギせんせーとの記念ですー。

「僕はもう、分からないよ……パト ッシュ……。」

「あ、アニキー！あっしだって分からねエんですから！！」

なんであの嬢ちゃんのカードだけマスターカードを寄越したんだ……

……？」

「ゆ、優勝賞品だから……じゃない？」

流石の愁磨先生でも、本屋ちゃんの記念品を持っておくのは忍びな
かった……とか？」

あれ……ネギせんせーと神楽坂さんと朝倉さん…….&dot&dot&dot.&dot˙と、
オコジヨさん？

マスターカードとか言ってるけど、何の話だろー？

「くうー……戦力にならねえモン貰っても仕方ねエ。

こうなったら、姐さんが仮契約してくれやせんか!？」

「ええー!?!い、嫌よ!だって、ネギとき、キスしなきゃいけない
んでしょ!？」

わ、私だって女の子だし、初めては好きな人としていって言うか…
…。

って、何言わせんのよエロガモ!!」

「仕方ねえなあ……。じゃあアニキ、使い方教えやすぜ？」

「つつても、出す時は『来たれ』。しまう時は『去れ』。これだけだ。

「ふ〜ん……『来たれ』。」

ネギせんせーの持ってたカードが光って、何かの角が現れました。

て、手品？って言うよりは、なんて言うか 魔法みたいですか？

「ヴリスラゲナ 太陽神猪の牙”……？聞いた事無いんだけど、カモ君知ってる？」

「さあ？俺っちは魔法にや多少詳しいが、武器とか魔術品に関しちやさっぱりだ。

名前からして、スゲー猪の牙見てーだけど……。」

ヴリスラゲナ……確か、イランの勝利の神の名前。

インドラって言う神様と同じ存在で、すっごく凶暴だったはずですよ。

「にしても、参ったぜ……。確かにこりゃ、従者増やすよりや即戦力になるぜ。

まさか、主従がランダムに決まるなんてな。」

S i d e o u t

第46話 争奪戦は思わぬ結果を招くようです(後書き)

ノワ「と、言う訳で46話でした。 って、何やってるのよ。」

愁「サーセンwwww まあ、思う所が合ってたから無問題!!」
ノワ「ハイハイ、分かってるわ分かってるわ。」

結局ワンちゃん出てこなかったわね。楽しみだったのに。」

Eva「それよりも私達の出番はどうした!!」

エキストラとかモブじゃないんだぞ!!」

愁「まあ、稀によくあることだ。気にしたら負けだ。」

ノワ「主従ランダムとか鬼畜すぎない……?」

愁「そうじゃねーと、ネギの強化が出来なかったしな。」

追加武装もろもろに関しちゃ、修学旅行終わってから纏めるそう
だ。」

Eva「今からどれだけ増やす気だ……。今話だけで6個増えたぞ
……。」

じゃあ、また次回も会えると良いな。」

愁ノワEva「「「アリーヴェデルチ!!!!」」」

第47話 敵達と戦闘を始めるようです(前書き)

こんばんわ、H a t e . r です。

作「オリ展開とか戦闘多いと書き易いです。

妄想のまま(常に妄想とかは(r y)書けますからね!」

愁「そんなこんなで予定より4日も早く更新だ。やったね えちや

ん

ノワ「それ以上は言わせないわ。では、いつものを。

もみじ様、ケルベルス様、オイラム様、春夏秋冬様、なおぼん様、
一雫様。

感想ありがとうございます。それでは。」

作愁ノワ「」どうぞ!」「」

第47話 敵達と戦闘を始めるようです

Side 明日菜

「だあああ〜！また負けたぁー！」

「フッフッフ。まだまだ修行が足りません。」

修学旅行三日目、班別自由行動の日。

私達は特に計画もなく、ゲームセンターに来てた。

「明日菜もやるー？」

「……私はいいわよ。」

「もー、まだ拗ねてるの？ネギ君に置いてかれたのがそんなに気に入らないの？」

そう、ここにネギはいない。

親書を渡す仕事は自分の仕事だから、私は来なくていいって言われた。

そりゃ、私が居ても何にもならないだろうけど……。今更、置い

てかれるってのも……。

「はぁ……………」

「おー、こりゃ相当重症だねえ……………」

パルがなにか言ってるけど、知らないわよ……………」

せめて目的地教えて貰っとけばよかったなあ。

「沈む片思い……………。そんな乙女の心にウエッテイ！！

罹^{リリ}罹^リ狩る・真^{マツ}剣狩る！魔法少女 アカたん、惨状！！」

「愁磨先生じゃないっすか！こんにちわ〜。」

「おう、早乙女その他多数。ご機嫌麗しゅう。」

沈んでいる所にツツコミ満載の登場をした愁磨先生。

しかもそれを無かったように話しているのも癪に障るんだけどおおー！！？

「さて神楽坂君。ここにネギ先生の居場所を知っている人間が居る訳だが……………。どうする？」

「どござする、って……。」

どうせ教えてくれないでしょう……。」

「ありゃ、ホントに重症だな。」

フム……じゃあ、条件を満たせば教えてやろう　　ってのだったら
信じるか？」

どうせ碌なもんじゃないんでしょうけど……。

一応聞いておいた方がいいわよね。

「なに、簡単な事だ。」これ”で俺に勝てばいい。安心していいぞ、
俺はガチの初心者だ。」

指差した先にあった筐体は、魔法を使って戦うカードゲームだった。
ふ、フフフ……いいわよ……。こづなったら、やっっちゃろづ
じゃない!!

S i d e o u t

S i d e ネギ

「やっとつきやしたね、アニキ。」

「ここが、関西呪術協会本山の入口……。」

？ 毘古社……？ 読めないけど、ここの上に西の長が居る。

その人に親書を渡せば、僕の仕事は終わりだ。その後は、僕の好きにさせて貰う。

父さんと……あわよくば、愁磨さんの話も。

「行くよ、カモ君。『ハイレイ・カヌニウティス簡易執行』！」

学園長先生から伝授された、気によって自分を強化する技を使って一気に石段を登る。

僕は一か所から動かせないし2〜4倍くらいにしかできないから簡易執行だけけど、

学園長先生は自由自在に『息吹』を動かせるし、数十倍以上に強化できるらしい。

「……おかしいな。」

「妙に長くねエですかい？この石段……。」

今の僕の速さは、時速約100km。アルゴドーズをブトゥス『修羅の息吹』による強化と、当たる風を魔法で追い風にしてるからだ。

それでももう5分は走ってるから少なくとも8km程度は来てるはずなのに、

一向に社が見えてこない。

「こりゃあ……東洋呪術の結界だな。アニキ、分かりやすい？」

「じゅめん、全く……。知ってるのは式紙と多少の攻撃符くらいで、空間系とか補助系は全然。」

せめて、目印はつけて行こう。『魔法の射手 サキタ・マギカ 連弾・雷の三矢』セリエス フルグラリス」

バシバシバシ！と地面に向かって魔法矢を放ち、焦げ跡を付けておく。

こうしておけば戻って来た時とかに役に立つ。

「よし、行こう。」

……

…
…

「ま、マジで終わりがねエのか……………?」

「いや、待ってカモ君。この焦げ跡。

どうやら、一定の空間内を広げて、そこでループしてるみたいだ。」

更に五分後。ちょっと走り疲れて来たところで進展があった。

空間の広さはおよそ8km。それだけ走っても本山に着かないから、空間を広げているとしか考えられない。

「とにかく、空間の始点と終点を正確に把握しよう!!!」

ズズウウウン!!!

「へえ…………。見かけによらず頭働くんだね。ちょっとだけ見直したよ。」

次の行動に移ろうとした所で、敵らしい僕と同年くらいの白髪の子が大蜘蛛に乗って出てきた。

けど　　なんだ、これは?

なんだろう、なんだ。よく分からないけどこれは、あの次元の敵だ。

愁磨さんとか、父さんとか、学園長先生とか そういう次元レベルの、
化け物。

「(ダメだ……。戦っても100%勝てない。逃げれない。なら、
どうする…?!)」

お前は、誰だ……!!」

「ふむ……。当然の質問だね。普通ならそっちから名乗らせるけど、
知ってるからいいよ。」

初めまして、ネギ・スプリングフィールド。

『ディアーション・フェイツ運命を冠する者』が？、フェイト・アーウェルクス。」

……理性的な相手ではあるみたいだ。

でも、もしこいつがこの結界を張っていたとしたら……。ダメ
だ。

「フェイト・アーウェルクス。僕に何か用か？目的は!!」

「……。時間稼ぎか、情報を引き出そうとしてるのか。まあどっち
でもいいけどね。」

そうだね……。簡単に言うと、ぼくの目的は邪魔者の排除だ。

雇い主の人がね。君は絶対に邪魔するから殺して来いって。」

敵側の、刺客

！！こんな化け物に命令出来るなんて・・・

。何で制御してるんだ？力か、お金か……。人質が効く相手じゃないだろうし。

「ああ、勘違いしないでよ？ぼくは従ってる訳じゃないんだ。

あくまで利用しているだけ。ここに来た目的は……。そうだね。品定めが正解かな。」

「品、定め……………？」

「そう。君が本当にそうするに値するかどうか。

それだけだよ。」

分からない。何を言っているは分からないけれど……。

敵意は無いつて事でいいんだよ、ね？

「……………ここから、出して貰える？」

「ああ、良いよ。」（パチン

フエイトが指を鳴らすと、石の矢が三本、鳥居に向かって飛んで行った。

『魔法の射手』無詠唱……。しかも、最も高度な物理系を。

「それじゃあ、”警告”はしたからね。」

それだけ言うと、景色に溶け込むように消えて行った。

”邪魔”、”警告”　つまり、僕が邪魔しそうな事をする計画があるんだ。

普通なら止めるけど……。

「絶対に止められないのに行くなんて……。間違いなく笑われちゃうよね。」

「あ、アニキ……！変な事考えねえでくだせえ！！

いくら何でもあれにや勝てませんぜ。命あつての物種って言うし。」

「そう、だよね……。」

うん、何かするって決まった訳じゃないし。

とりあえず今は親書渡しに行かないと！

Side out

Side 早乙女

「よっしゃあー！これで関西のカード全部だ！」
コンフリクト

「……な、なにが初心者よ……。一回辞書で意味調べて来なさいよね……。」

「全くです……。」

明日菜が愁磨先生と戦うこと10回。

最初はいい勝負だったんだけど、三回目から徐々に押されて、6回
目からは完全試合。
パーフェクト

そこからは私と夕映で仇討ちをしようとしたんだけど……。

「出て来るの全部レアカードとか……。Luck値どうなってんのよ
おーー！」

せんせー、私の分もやってくれません？って言うかやってー！！」

「アツハツハ、足掻け足掻け若人。」

「おー、兄ちゃんやるなあ。ワイと勝負せんか？」

騒いでると、隣の筐体に男の子が座って来た。

やりそうな子だね！いっちょコテンパンに

……

……

…

「っだあああああああ！また負けたあ！？強すぎやる！

」！

「フツ。俺のHPを半分削ったのはお前で二人目だ。誇っていいぞ少年。」

男の子は私達と比べ物にならないくらい強かったけど、

流石に勝てなかった。

ってゆうーが出るのレアカードばっかか！！それはそれで困るけどさ！

「くうう！いつかこの借りは返したるで！ほなな、愁磨はん。」

「ああ、君もな。」

先生がボソツと何か言つと、男の子はビックリした表情して走つてつちやつた。

んー、不思議な雰囲気の子だったねえ。

「さつて、俺は知り合いのところに行つてくるからな。羽目外し過ぎるなよー。」

「はーい！奥さんとお幸せにー！！」

ゲーセンの出口に居たアリカ先生奥さんにも向けて言う。

綺麗だよねえ、アリカ先生もノワール先生も。

「あ、愁磨先生カード忘れてつてるです。」

「え？あ、ホントだ！」

愁磨先生の座つてた筐体を見ると、貸してたスターターと20枚くらのカード……

つまる所、今日出してたレアカードが全部重ねて置いてあつた。

「……………これ、くれるって事なのかな？」

「じゃない？いやー、先生ってホントカッコイイよねえ。

さて、次どこ行こっか？」

「わ、私はどこでもー。明日菜さんは……………。あれ？明日菜さんは？」

そう言われて見てみると、明日菜も居なくなってた。

まさか、愁磨先生を追ってった……………？こうしちゃいられない！！

「私達も追っよう！！」

「……………行き先が分かりませんです。」

Side out

Side 小太郎

「どーやった？小太郎はん。」

「いや、ありゃあかんで千草の姉ちゃん。ワイの正体バレとったわ。

しかも、姉ちゃんと月詠はんによろしく言っとったで。」

でも、足止めは出来たで。こんだけ止めときゃ、あのフェイトとか言う奴が

ネギなんちゃらの事始末しとるやる。

「あーあ、ワイもやってみたかったわ。」

同い年で本気喧嘩なんてした事あれへんのに。」

「そんならフェイトはんがおるやないか。あれならいくらでも相手になってくれんで？」

冗談。あんな化けモンとやったら蒸発してまうわ。

でも、あの織原愁磨言っくんは楽しめそうやったなあ。手加減してくれるやるっし。

ちよっと燃えてきたで、この任務。

S i d e o u t

「ささ、奥さまとお嬢さまはこちらへどうぞ。」

「うむ。」「苦勞じゃ。」

「ちょ、アリカ先生！？あれ止めないんですか！！」

「此奴等なりの挨拶じゃ。気にするでない。」

挨拶が真剣振りまわしてするものなの！？

………愁磨先生だったらやりそいで（）って言うかやってるし（違和感ないわね。

「聞けば刀子君も刹那君も………あまつさえ木乃香にも手を出しているそうじゃないか！！」

あゝあゝ！？娘が欲しかったら俺を三万回殺してからにするんだなああああ！？」

「えっらい勘違いしてるみてえだけど………望む所だゴルアアアアアアアアアア！？」

「………ふむ、いつもとは少し趣向が違うようじゃな。」

「だったら止めなさいよ！？」

『良いのじゃ』って言いながら指差す方を見ると、温厚そうな綺麗な人が二人に近づいてった。

ちよ、あれこそ危ないじゃないの!!

「二人とも、そこまでにしとかんと 怒りますえ?」

「「サーイエッサー! 申し訳ございません!!」」

「.....」。

「の? 大丈夫じゃったろう?」

もう、なんなのよこの人達.....。

.....

.....

...

「コホン.....。ようこそ、明日菜君。木乃香から話は聞いていたよ。いつも娘が世話になっているようだね。」

「は、あの、いえそんな!! 私の方こそお世話になってばかりで!」

「だよなあ……。」

「そつじゃのつ……。」

くうううう！赤点は余裕で回避出来るようになったけど、点数はまだまだだから木乃香に教えて貰ってるわよ！

なに！？悪いの！？……悪いわよね……。

「で、愁磨。無関係に近いこの子を連れてきたからには、何か用があつての事なんだろうな？」

「ああ。考え方も物事の把握も、普通の現状原作より上にはなつたがその代わりに、圧倒的に戦闘経験と現状把握が出来ていない。」

『故に』と、こつちを向いた愁磨先生が、私に聞いてきた。

「お前は、何を知りたい？何を、成し遂げたい？」

Side out

Side 刹那

「ハア、ハア……。ちょ、せつちゃあーん。なんやの?」

「刹那ん速いよおー！おいてかないでー！」

「ああ！すいません、お嬢様、もみじさん!？」

「おじよー、さま、いわんでってえ〜！あーもー疲れたあー！」

班別行動で動いていた私・おじよ……このちゃん・もみじさんでしたが、

エヴァさん達が丁度居ない時に敵の襲撃に遭い、こうして逃げているのですが……。

白昼堂々狙ってくるとは

「……仕方ありません。あそこに入ります。」

「あ、映画村。ここに来たかったん？」

「もう、休めるん、なら、何でもいいよ〜。」

「と、とりあえず入りましょう!」

映画村に入ると、かなりの人がいた。……ここなら、迂闊には襲って来ないだろう。

ノワールさんとアリアさんは朝から行方不明だし、やはりエヴァさん達に連絡を入れて、

援軍が来るまで時間を稼いでいた方がいいか……。

「なーなー、せつちゃーん！これ見てえ。もみじはんめっちゃかわいいやろ？」

「うえ！？あ、ハイ。お嬢様ももみじさんも、とても似合っていると思います。」

「ぶー。ボクおまけみたいじゃーん。そんなに変かなあ？」

不満顔でくるりと回るもみじさん。

いつもより高い位置で纏めた髪と着物が舞い、名前の通り紅葉を思わせる。

お嬢様も同じ髪型だが簪を付けており、浴衣はもみじさんのは対照的に落ちついた色で

黒髪がよく似合い、お世辞の欠片もなく、二人とも美しいと思える。

「い、いえそんな！本当に似合っていて綺麗だと思います！！」

「むー。そこまで言うんなら刹那も着なさい！命令です！！」

「あ、ええ考えやあ。せつちゃんいつもかわええ服着ないんやもん。

勿体ない思ってたんやわあ。」

「え、いや!!私なんかが着ても一人と一緒に居ると比べられて一層貧乏層と言いますか!?

え、ちよ、やあああああー!!!

.....

.....

...

「いややわあ.....。ものつすごい綺麗やわ.....。」

「うん!すごい綺麗だよ刹那ん!愁磨が見たら間違いなく一発だよ!」

「う、ううう.....。このような服では護衛が出来ないと言いますか.....。うう.....。」

20分後、私達は着物姿で映画村を練り歩いていた。

着せ替え人形の如く着物を選ばれた結果、私は白に近い淡い桃色の着物を着る羽目になった。

いつもはサイドに纏めている髪も下ろさせられている。

袋に入れてもなお、恐ろしい程に”夕凧”が似合わない。

「うっう、私にはこんな格好に合わないのです……」。

お陰でさっきからみられて……」。

「なーなー、もみじはん。せっちゃんて天然なんかなあ？」

「それは前からそうだけど……。可愛いとかって言われるのに慣れてないんだろっねえ」。

今度愁磨に特訓してって頼まないかね！！」

「すうううっごい逆効果やからやめとき。」

私が頂垂れていると目の前に馬車が止まり、貴婦人の恰好をした女が降りて来る。

顔を覆っていた扇を取ると

「お、お前は……！」

「どうも、その東の洋館の貴婦人神馬流でございます」。

借金のカタにそこのお嬢さん貰いに来ましたえ」。

「昨日の夜お嬢様をさらっていった女の仲間　　確か月詠とか言う。」

しかも、私にだけ分かるように発言とは違う口の動きで『神鳴流』と言って来た。

こいつが、私と同じ剣を使うと言うのか・・・？

「こんな場所で、一体何の用だ!？」

「せつちゃんせつちゃん、これお芝居や〜。」

「映画村じゃ、突然お客さん巻き込んでお芝居始めるんだって。ラッキーじゃん」

とは言いつつも、もみじさんは一昨日の話を聞いているので真剣な顔だ。

なるほど、劇に見せかけてお嬢様をさらおうと言う魂胆か。しかし

「そんな事は許さない!お嬢様は私が守る!」

「キヤー!せつちゃんかつこええ!」

「刹な!ボクも守ってえ〜!」

と、お嬢様ともみじさんが両側から抱きついて来て、周りから囃しの声上がる。

『キマシタワァー！』ってなんですか！？もみじさん分かったたんですよね！？演技ですよね！？

「ウフ、ウフフフ……。ほな、仕方ありませんなあ……。？」

「む」（パシッ

「木乃香様わたし、センパイとを賭けて、決闘仕合を申し込ませていただきますう。

30分後、シネマ村の正門横にある『日本橋』で待ってますえ。

月詠が手袋を片方投げてきて、条件反射で受け取ってしまっ。

とは言っても、逃げれるわけもないか……。

「逃げたらあきまへんコロコロえ……。？ほな、また会いまひよ。

助っ人は連れてきてもかまいまへんで……。」「

「あ、あう……。」「

月詠は最後、狂気とでも言える気を放ち、馬車に乗って去って行った。

目的はお嬢様なのか、それを口実に私と戦いたいのか。

「あ……。大丈夫ですか、お嬢様……?」

「う、うん……。えへへ、ちょっと怖かったけど……。こんなんでこわがとつたらあかんもん。」

「ほえ?なんか怖かったかなあ。」

ぽやっとしていても、流石は魔王……。あの程度の狂気では動じないと……。

恐怖だけでしたら、修行中の愁磨さんと比べ物になりませんが……。情けない。

ところで……。

「」の恰好のまま戦わないといけないんでしょうか?」

「?そんなのあたりまえやん(じゃん)。」

Side out

S i d e 木乃香

「ウフフフフ……。待っとなりましたえ〜。始めまひよか、センパイ……。

二人とも私のものにして見せますえ。」

30分後、私らはいわれた通りに日本橋に来た。

橋の真ん中には、もう月詠はんがまっとなって……ワラった。

「せ、せつちゃん……。あの人、やっぱり怖い……。」

「……………」

せつちゃんの袖を握るけど、反応してくれへん。

や、やっぱりせつちゃんも怖いんやろか。せやったら、私なんかのために戦わせられへ

「安心して、このちゃん。」

「ぶえ？」

妖怪が出てきて、

武器も何も持っていないもみじはんに襲い掛かる。

「もみじはん、あぶ」

「フフン、今のボクを甘く見て貰っちゃ困るよ!!」
『フォイエ・タウバー魔炎扇』！
「！」

もみじはんは地獄の炎を扇型に作り出し、熱風だけで妖怪を全て薙ぎ払う。

す、すごい。前は垂れ流すだけやったのに、いつの間にこんなに制御できるように・・・？

「ど？少しは強くなったでしょ」

私の考えてた事が分かったんか、振り返ってウィンクしてくる。

少しやなくてすごいっつよおなっとなるちゃん!!

「あらあ……。それが噂の魔王はんやったんですね。だったら相手を交えまひよ。」

出てきてください、『十一鬼王』。

今度はすごい大きい札を投げると、そこから出てきたのは

人間くらいの大きさの、すごい怖い鬼やった。

「さあ、死合まひよか。センパイ、魔王はん……。」「

S i d e o u t

第47話 敵達と戦闘を始めるようです（後書き）

と言う訳で47話でした。

作「若干急ぎ足だったかもしれない。なぜなら早く戦いたかったから。」

あと、いい加減ノワール様とアリアちゃん出したいから!!」

愁「それでも次回にまわるのな。」

さて、次回は4日くらいになりそうだ。それじゃ!!」

作愁「「アリーヴェデルチ!!」」

第48話 二戦 あるいは三戦のようです(前書き)

ここにやちわー！H a t e . rです。

作「近々クロウカードが出てきたら、『お前影響されやすいな！』
と言つてやつてください。」

愁「俺、魔法少女化すんのか……」

ノワ「自分で言っちゃったもの、仕方無いわよね。」

では、いつものを。龍賀様、もみじ様、アタナシア「F a t e様、
春夏秋冬様、

なおぼん様。感想ありがとうございます。」

作「そんなこんなでもうすぐ50話。修行編とか悪魔編飛ばしてえ
えええ！」

早く学祭と魔法世界編書きたいよおおお!!」

愁「そつから本番だもんな。知ったこつちやないがW W

それじゃあ、48話！」

作愁ノワ「」どうぞ!!」」」

第48話 二戦 あるいは三戦のようです

Side 刹那

『オラオラオラオラ、どうした嬢ちゃん!!』

この程度じゃ月詠様に届かないぜエエエ!?!』

「この……!! 『斬光剣』!!」

ガキーン!

『おおっと、アブねエアブねエ。』

針のように細い鬼に、修行中ではあるものの最も速い『斬光剣』を放つが、

長さが橋の幅程もある大剣を持った鬼に防がれてしまう。

「『十一鬼王』とか言ったな……。確か、真田幸村と十勇士が密かに封印した、

全力を持ってすれば『鬼神』も倒せると謳われた、鬼にただ一つしか存在しない戦闘集団。」

『ほおおおウウ、我らの事を知っておるとは。

そのような人間、久しく見たゾ!博識な嬢ちゃんだ。殺すに八惜しいのう。』

『シカシて妙。我ヲを描いた書、全テ葬られたハズナリ。』

それはそうだろう。実際に焼いた人から聞いたのだから、

これを知っている人が如何に稀有な存在か知っている・・・。

そして、こいつらの危険性も。

「そりゃそりゃそりゃそりゃそりゃそりゃあぁー！！！！！！

いらぬ事してると、燃えちゃうよぉー！！！！」

『ホホホホ！この魔王なかなかどうしてヤリますワ！！！！』

『カカレカカレ。相手一人。余ヲ9人。攻撃途切レシ時、勝利。』

『そないな事言われてモ。隙無イでこの嬢チャン！！』

もみじさんが9人引き付けてくれているから、私は観客の方にも意識を飛ばせている。

・・・こいつ等は戦闘開始と同時に、私たちではなく観客に向かつて行った。

止められたのは、こいつらを出している符が強すぎるらしく、月詠が動けなかったからだ。

クツ！あと一人いれば、月詠が持っている符を斬ってこいつらを消せるのに！！

『そい、そい！！』

「クツ、またか貴様！！」

キンキキキキン！ キン！

『ヒイーーーーーヤハハハハハ！まだまだ投ゲル剣はあるゾ！踊レ踊レエエ！！』

妙にダボついた服を着て異常に髪の毛の長い小さな鬼は、一切私に攻撃して来ず、

観客へ短剣を投げつけている。

私への攻撃は細鬼が、観客へは小鬼が。その二人を狙うと、大剣鬼が守る。

完全にもみじさんが倒れるまでの時間稼ぎだ。

連携を見るに、こういう事に長けた連中なのだろう。

『ガラ空キだぜ、嬢ちゃああああん！？』

「しまっ

」

先ほどより多く投げられた短剣の処理に時間を取られ、細鬼の鉞が迫る。

確実に、避けられない。

そう思うと同時に、”夕凧”の柄にある仕込み刀を抜く。

せめて、一体くらい相討ちせめばもみじさんに申し訳が立たん！！

ザシユウ！！

「ウフフ、いけないわね刹那。シユウから教わってるでしょう？」

どんな時でもあきらめちゃダメ。

億分の1でも生きれる可能性があるなら、そっちを選びなさい。」

『グ、が、ゴブフアア！！？』

『古麻！！女アアアアア！！よくモ弟をおおオオオ

ガルルルア！！　ウオオオオオ　ン！！

な、ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！？』

「・・・それ、こっちのせりふ。せつなど、もみじ・・・いじめた。

だから、しんじやえ。」

『お、オイオイオイオイ！！ナンダナンダヨてめエらはあ！？
人が楽しんでるとk』（ザシユウウ！！）」

「誰がそんな濁声で喋る事を許可したのかしら？」

死を覚悟した筈の一撃を止め、5秒足らずで二人の鬼を斬り払い、
一人を食わせたのは 朝から行方の知れなかった、ノワールさ
んとアリアさんだった。

S i d e o u t

S i d e 月詠

なんやの？あの人達。折角私がセンパイと魔王はんと楽しんどった
のに。

我慢して、我慢して、我慢して

もう少しで最っっっ高の状態になれたのに……………。

なんやの？なんやの？？

ナンヤノ、ナンヤノナンヤノナンヤノナンヤノナンヤノナンヤノナンヤノナ

ンヤノナンヤノ？

「許シマヘン。」

Side out

Side ノワール

朝。シユウから連絡が来て、お昼過ぎに詠春のところに来てって言われたから、

適当に散策してから、デート中（仕込んだ）の刹那と木乃香を拾って行くとしたら・・・。

映画村の方から、ちょっといけないレベルの妖気がして来てみたら。

何故か刹那ともみじが着物姿で鬼と戦ってて、ピンチだったわ。

「ええ、許せないわよねえ？この子達の柔肌に触れていいのはシユウだけよ？」

シユウとこの子達を苛めていいのは私だけよ？

これが許せましようか？いいえ、許してはいけないわよねえ？」

「……………ママ、ズレてる。」

ああ、いけないわ。三人が着物なんか着ててつい美味しそうだったから……。

仕方無いわよね

「……コホン。とは言え刹那、もみじ。こんな雑魚以下のプラナリアに手間取る様じゃ、

シウウの傍には居られないわ。だから

残りはあなた達が倒しなさい。」

「は、はい!!」

「フンツだ!! もう少して倒せてたもんね!!」

私の横に倒れていた刹那が飛びだし、もみじの炎が更に吹きあがる。

残りの鬼達は私とアリア闖入者と仲間が瞬殺された事で、一瞬出遅れた

それで、今のこの子達には十分な隙よ。

「『フォイエ・タウパー魔炎纏』!」

「神鳴流奥義 『百烈桜華斬』!」

「愁磨（さん）直伝！！」
『魔桜炎烈斬』まおうえんれつざん！！！！」

『ギヤアアアアアア』

シウが勝手に作った技で、残りの鬼が蒸発する。

文字通り、全部の気で守った”夕凧”に『魔炎』フォイエ・タウバーを乗せて、『百烈桜華斬』を放つこの技。

普通はただの剣線だけれど、そこに炎が走って散ることによって、炎の桜の様になってとても綺麗な技。

「フフ、やれば出来るじゃない。偉いわ二人とも。」

「あ、ありがとうございます……。」

「フフン、当然だよ！！」

まあ、尊大な態度は許してあげましょうか。

だって今は

ギイイイイーン！！

「許シマヘン。」

ギンガンドン！ギインギイン！！

「あらあら、スカートが破れてしまったわよ？いけないわ。」

「え……?」

トサツと倒れて来る月詠ちゃんを受け止め、仲間の子に声をかける。

「その子……。この子、受け取ってくれないかしら?」

「ツチ、なんやあんたらにバレバレじゃないか……。意味あらへんなあ。」

「ウフフ、そんな事無いわ。気配消すの、とっても上手よ。」

刀子のとは比べるまでもないけれど。」

男の子は月詠ちゃんを受け取ると、『覚えとれよー!』と中々な台詞を言っ走って行った。

あの子とも、これから先長くなりそうね。」

「あ、あの、ノワールさん。さっきの技は一体……?」

「ええ、まだ教えて貰ってないわよね。」

あれは無形の敵を斬る『斬魔剣 二の太刀』と、秘奥義の『千変万化』。

あの子の中にあつた狂気を千回斬つて無くしたのよ。」

『千変万化』は”斬る物を選ばない”神鳴流の根源であり、最高の技。

修行中の人から達人までは斬る物を、技によつて自在に選ぶことができるの。

でも、”頂”まで極めた人が使えるのが『千変万化』。

技に頼らず、自分の技量によつて斬る物を決められる技 日本
語変よね、これ。

「つまり、相手に有効な技を最大の威力で叩きこめる訳よ。」

「なるほど……。しかも、それを一度に千回斬る事が出来て初めて完成する技なのですね！」

うう、未だに『百烈桜華斬』しか極めていない私には遠い話ですね……。」

「フフ。詠春の所に行つたら、シュウに言つてみなさい。」

なんせ先生が三人もいるんだから、誰かが稽古つけてくれるかもしれないわよ。」

……本当は千回斬るんじゃなく、”気によつて千以上に分裂させ

る技”だって知ったら、

どんな顔するかしら。

意外と熱血根性出すかもしれないわね。

「さ、私達の愛しの主に会いに行きましょう。」

Side out

Side 明日菜

「何を知りたいって、言われても……。私、何も分からないもん！
でも、全部は教えてくれないんでしょ！！」

「アツハツハ！それが分かって来ただけでも進歩だ！

よし、1つだけのつもりだったが4つまで教えてやる。期限は設けないから、ゆっくり考える。

詠春、付き合えよ。」

「もう少しで夕飯なんだから、少し待て。」

「あいつかわらぬ堅いなあ……。」

さつきまでの真面目は雰囲気はどこへやら、愁磨先生は一瞬でいつもの感じに戻った。

『考える』……。愁磨先生はその人が分からないことを、考えるってはやらない。

分からない大切な事にはヒントを、そうでなければ答えを言うかどうかでもいって流しちゃう。

つまり、バカな私でも、考えれば分かるって事……。

「……愁磨先生、一個いい？」

「ん、早速か。……まあ、お前がそれでいいってなら聞こう。」

また、くだらないって言われるかもしれないけど……。

どうしても、これだけは聞いておきたい。

「愁磨先生は、私達の敵なの？ネギの事……。私達の事、嫌いなもの？」

「……一つ目は、そうだな……。基本的には味方だよ。どうしても敵になる事はあるけどな。」

二つ目は……。いや、これは俺としての答えにしておこうか。

嫌いじゃないさ。むしろ好ましい存在だ。お前らも、ネギもな。」

そういうと、誕生日の時みたいにポンポンと頭を撫でてくる。

うん、いいよね？今はこれで。

「えへへ、愁磨先生ってお父さんみたい。　　って、こんな事言ったらアリアちゃんに怒られちゃう。」

撤回撤回。」

「……ふ、ふん。褒めたって何も出んぞ。」

来い詠春、晩飯前に腹すかせとくぞ。」

いきなり、プイツと庭の方に歩いて行っちゃう。

・・・なんか、顔赤い？

「ククク、どうした愁磨。顔が赤いぞ？」

「てっ、こんの……！！ぶっ飛ばすぞ！！」

「うはははは！今ならお前に勝てそうだよ！」

「言ったなコラア！？
アーヴォ・ガジ・エッティアス・メシア
禁忌ヲ犯シタ救世主　　！！！」

はあ……ごうごうのを茶番って言うのかなあ？

……

……

…

「よ、よく来てくれたね。ネギ・スプリングフィールド君。使いの命、よく果たしてくれた。」

「あの醜態見せといて取り繕う必要がどこにあるんだよ。」

「適当で良いじゃんか、適当で。」

それから一時間弱。庭を壊滅させて、お母さんに怒られて、愁磨さんが全部直して。

その間にノワールさん達も来て、親書を渡して一応東西の仲を約束した。

でも結局、関西の方でまとまらないと意味無いよね……。

「ささ、ちょうどいい時間ですし夕飯にしましょう。」

「あ、すみません。僕達は修学旅行中ですし、旅館に戻らないと。」

「それなら大丈夫よ？新田先生に今日はここに泊るって言っておいだから。」

木乃香の里帰りに親と一緒に居させてあげてください！ってね。ウフフ……。」

「保護者同伴どころか関係無いのもいるがな……。」

新田も甘くなったものだ。」

と、ノワールさんとエヴァさんが話しているうちにどんどん料理が運ばれてくる。

……この人達、意外と人の事気にしないよね。

いや、京都料理って一回食べてみたかったからいいんだけど……
……。

「「「「「いただきますー！」「「「「「「」

「いただきますー……す。」

「い、いただきます。」

……うん、美味しい。

S i d e o u t

s u b S i d e フ ェ イ ト

「で？なんのつもりや新入りはん。

ネギとか言う子始末しろ言われとったのに見逃して。親書渡ってし
もたやないか！」

「……別に、気にする事じゃないよ。

結局は夕力派の人達と英雄が相容れなければ東との不和は続くんだ。

それに、ネギ君が計画の邪魔を出来ると思っているのかい？」

「……無理やるな。小太郎はんだだけでも時間稼ぎは十分やし、

ましてあんたもおるんや。」

そう。ネギ君は脅威足り得ない。少なくとも、今は。

問題は英雄がほぼ全盛期だと言う事と……愁磨一行だ。

「……全く、困った人だよ。」

「ん？なにが言ったか？」

「なんでもないよ。

……食事中だから気も緩んでるだろうし、今のうちに始めてしま
おう。」

「せやな。小太郎はん、頼みましたで。」

「まっかせとけ！あんなガキちよろいモンや！！」

・・・一応、侮らないようにと言ってはいるんだけど・・・。

どうにも不安だね。ぼくも準備をしておこうかな。

Side out

Side 愁磨

「詠春様。」

「どうした。」

夕飯も食べ終わり、酒飲みしか残っていない広間に巫女さんが駆け込んで

詠春になにか耳打ちをしている。・・・聞こえるんだけどな、耳澄ませば。

「……………またか。」

「はい……………。どういたしますか？」

「どうするもこうするも、行くしかないでしょう。あれの相手は私でない」と

「まあ待てって、詠春。古株は黙って見てようぜ。」

「……何を言っているのか、イマイチ理解できないんだが……?」

「な、何言っただてめえ！アニキがどうなっても良いってのか！」

「ちよつとは黙ってる、畜生以下の淫獣が。」

使い魔を祭壇と道中へ飛ばし、スクリーンで映像を出す。

そこには既に

「ネ、ネギ君！？刹那君まで！」

「あと、真名とアリアを後陣として追わせてる。保護者は刀子とエヴァだな。」

「……お前、まさか……?」

「そうよ、そのまさかよ。」

これでもしもあいつが復活しても、兆に一つも勝ち目は無い。

さらにエヴァには新装備も持たせた。過剰戦力もいいところだろう。

「ああ、楽しみだなあ。むしろ復活してくれないかなあ。」

「そう言えば、明日菜君の姿が見えないようだが？」

いつもこういう事に行く時はネギ君と一緒に筈だろう？」

「ん……？ホントだ、いねえ。」

改めて映像を見ると、確かに明日菜の姿が見えなかった。

珍しい……？いや、そういう事ではない。あいつは絶対について行く筈だ。

「愁磨、祭壇じゃ。これは……少々危ないのではないか？」

「フェイト……？何やってやがる、あいつ。」

アリカに指され祭壇を見ると、フェイトと着物着崩した姉ちゃんが。

さらに、祭壇に横たわった明日菜が居た。

事と次第によっちゃ、出ることになりそうだな。

Side out

20分前、浴場

Side 刹那

「つぷはぁー！今日は変な汗かいたから生き返るわー！。

にしても広いお風呂よねー。お屋敷も広くてびっくりしたけどさ。」

「（ああ、愁磨さんを尾行していたのでしたね……。）」

「一応ここは観光名所にもなっていますから。予約後、嚴重な調査をして合格しないと入れませんが。」

過去、二回それをしないで入って来た人がいましたが。

・・・私とこのちゃんの誕生日をこっそり祝いに来た、愁磨さんとナギさんを筆頭にした四人でしたが。

「ふーん、そんな所にタダで入れるなんて。愁磨先生と一緒に来て得だったわねー」

「……そういえばさ。どうなの？木乃香と桜咲さん……いや、刹那さんって幼馴染で好きな人も一緒でさ。」

その……「こっ、なんてゆーか。ドロドロなったりしないの？」

「ふええ！？あ、いや、その……」

相手がしゅ、愁磨さんですから。そういう事にはなっていません。」

……そう言えば、家に居てドロドロな雰囲気になっている所を見たことが無い。

「やっぱり、そうですね。みんな、愁磨さんの事もみんなの事も好きですから。」

そういう事にはならないですし、したくないんです。」

「……うん、見てるだけで分かるもん。」

でも、ナンパなのはダメよねー！やっぱり男の人は硬派っぽくて渋くなくちゃ！」

あ、相変わらずおじさんが好きなんですね……。

と言うか、この手の話題は苦手なのですが。」

「の、のぼせてしまいそうなのでお先に失礼しますね。」

「あーい。私はもうちょっと入ってるわ。」

「貴様、何者だ!!」

「名乗るほどの者でも無いよ。ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴ
アンゲイトブレンキー・ペトラス『石の息吹』。」

ポウン!!と霧のような魔法が放たれる。

石化魔法と即座に気付き、扉を閉め距離を離す。

『それじゃ、お姫様はいただいて行くよ。』

「ま　　!!」

中に充滿した石化霧のせいで入る事もままならず、相手の気配が消える。

すぐさま着替えると、霧の晴れた浴場に入り魔力の痕跡を見つける。

失態だ・・・!私が傍に居ながら簡単に明日菜さんを

「ふうう……。驕るな。私はまだまだ弱い……。弱い、弱い……。

よし……!」

私は、”弱い”と自分に言い聞かせることでいつでも全力が出せるようになる。

愁磨さんには怒られたけれど・・・こればかりは仕方ない。

ガラッ！

「明日菜さん！今の悲鳴は　　あ。」

「……ネギ先生、心配なのは分かりますが女子が入っているであろう

風呂に飛び込んでくるのは如何なものかと思います。」

Side out

……

……

…

Side ネギ

「は、速い！！」

「ですが、見失わない程度の速さです！瞬間移動テレポートを使う魔力が残っていないのか……。

それとも誘っているかのどちらかです。」

お風呂場から出た僕達は、廊下で会った龍宮さんに状況を話すと、

二人で明日菜さんと攫った犯人を追った。

これで少なくとも、長さんが救援を寄越してくれる筈だ！

「うおおおおおおおおおおりゃあああ——————」

ドゴオオオオオ！！

「うわあ！？」

「ネギ先生！！ 奥義！『百烈桜華斬』！！」

走っていると、空から誰かが凄いスピードで落ちてきて地面を殴った。

僕は吹き飛ばされちゃうけど、桜咲さんが敵を斬りに行く。

「へっ！『疾空黒狼牙』！！つと、『狗音嚙鹿尖みだれうち乱撃』い！！」
ドガガガツガガガガガガガガガツガガ！

「く……！？」

でも黒い狗が出てきて、百を超える斬撃が全て相殺されてしまう。

その衝撃で土埃が飛び、そこから学ランを着た男の子が出てきた。

「やるやないか、姉ちゃん！でも……お前はからつきしやな、西洋魔術師！」

「……」

「……そう。そういう事ならいいよ。」

「……愁磨さんと戦うここぞと言つ時の為に隠しておきたかったけど、いいよ。見せてあげる。」

「桜咲さん、みなさん……！ここは僕に任せて明日菜さんを……！」

「……分かりました！お願いします……！」

追って来ていた瀧宮さんとアリアさんと、もう一人にも言う。

「ふん、生意気な……。刀子は居てやって、負けたら嘲笑ってやれ。」

「……バレているとは思わなかったよ。頑張ってくれ、先生。」

「……」

影から三人が飛びだし、冷やかな目とちょっと優しい目と絶対零

度の睨みを残して飛んでいく。

もう一人、エヴァさんだったんだ……。エヴァさんより気配読めない刀子先生つて一体……。

「まあいいや。行くよ、えーっと……。」

「っと、名乗つとらんかったな！ワイは小太郎、犬上小太郎や！」

「じゃあ、小太郎君。悪いけど時間が無いしちょっと怒ってるんだ。

5秒で終わらせてもらつよ。」

小太郎君は僕の台詞で額に青筋が入って、睨んでくる。

でも 無駄だよ。

「『カントゥス・ベラクス戦いの歌』、アルゴドーズをフトゥス『修羅の息吹』！同纏・混装！！」

「うおおお！？」

シユウウウウウ……。

「『バルトフェルド・コンチエルティア戦闘の為の協奏曲』。行くから、構えておいてね？」

構えても構えなくても、変わらないけど。」

S
i
d
e

o
u
t

第48話 二戦 あるいは三戦のようです(後書き)

そんな訳で48話でした！

作「自信満々のネギ君！ハイパアソニックスベッタアアアアアアな事になるのか決まるのか！

答えは次回。」

愁「ガトウの咸卦法+俺の形態融合÷2って感じだな、この技。

美味そうに育ってんなあ……。」

刹「ノワールさんもアリアさんも、ずるいです……。

美味しいとこ持って……。

ええ、あのままだったら辛かったですけど……。うう……。」

ノワ「あ、あの、ごめんなさい刹那？悪気があった訳ではないのよ？ただ傷の一つでもついたら事だから居てもたっても居られなくっ

て……。」

Aria「ご、ごめん……刹那……。」

作「そんな訳で次回、刹那さんの鬱憤は晴れるのか!？」

愁「次回、お前は朝日を拝めねエようです！

それじゃ、また次回!!!」

作愁ノワ刹「『アリーヴェデルチ!!!!!!』」

Aria「でるち……。」

第49話 終戦 少年はお姫様を助けに行くようです(前書き)

こんにちは、H a t e . r です。

作「最近(大分前から)充電期間が長いのが悩みの種。」

愁「2日で書いてるもんな、毎回。」

さて、ノワールが酔い潰れてるので俺が代わりにいつものを。

なおぼん様、春夏秋冬様。感想ありがとうございます!うん、楽でいいな。」

作「さて、旅行編も終盤。ネギvsフェイトはどうなるのか!」

愁「いつも通りだけどな。そんな訳で49話。」

作愁「どうぞぞ!!」「」

第49話 終戦 少年はお姫様を助けに行くようです

Side 小太郎

「『バルトフェルド・コンチエルティア
戦闘の為の協奏曲』。」

ネギが奇妙は魔法使^{つこ}た途端、急にゾクゾクするようになった。

こりゃあれや。フェイトとか言う新入りとか、愁磨とか言う兄ちゃんと同じ感じや。

「行くから、構えておいてね？」

構えても構えなくても、変わらないけど。」

「へっ！！抜かしてられんのも、今のうちやで！！！」

余裕なネギに狗神を10匹ほどぶっ飛ばす。

ワイら狗族は狗神使い 式神使いで言う前鬼・後鬼を自在に操れる。

言つても一種の精霊やから、比べモンにならんほど頭ええやつらや！

「フン！！！」
馬蹄頭拳

「なあっ!?!」

「1、……………!」

飛んでつた狗神を全部パンチ一発で消しよった!?

面白いやないか……………!!

「ホンなら、まとめて行くでえ!!」 狗族獣化!

『犬上流 狗音爆碎拳』 んん!!」

「2、……………!」

獣化+狗神一点集中の右ストレート……………!

受けれるもんなら受けて

「『我流 桜花』!」

SubSide 愁磨

「やはり負けましたね、あの少年。」

「ああ……。ネギの奴、予想以上に育つてやがる！」

ネギが妙な技を使った瞬間、俺はすぐさま現場に向かい一部始終を見ていた。

原作だと良いところ相討ちの相手に完全勝利……！

「素晴らしい……！！だが、それじゃああの少年が浮かばれないと思わないか？刀子。」

「え、はあ……？確かに、師がいれば確実に伸びる　って、まさか。」

「よし、こっちは俺に任せて刀子はスクナいじめて来い」

「了解です……。」

呆れ7割：平然2割：歓喜1割で飛んで行った刀子を見届けると、俺は小太郎の

横に降りた。……………黒か。

Side out

い、おーい。すっかりしろ少年。

こんなところで寝てると風邪ひくぞ。」

「う……？ああ！あなたは昼間のあだだだだだ！！」

「起きろとは言っていないぞ？獣化してなきゃ死んでる威力だ。」

いつのまにか寝とって、愁磨に起こされて体中痛くて……………。

って、そうやネギや！俺あいつと戦ってて

「そうやネギや！あいつはどこにあってあたたたたた！！」

「お前はケンシロウか。」

ネギならお前をぶっ飛ばした後、刹那達の後追ってたよ。」

「ぐうう、記憶は無いけど分かるで……………。こんな完敗したの初めてや……………。」

ワイの今出せる最強の技を簡単に破られたんや……………。

勝負にもならん、完敗や。

「さて、そんな負け狗君。お前には3つ道がある。」

1つ、俺と一緒に来る。2つ、ここで負け狗のまま死ぬ。3つ、負け狗のまま狗として使われる。

好きに選びたまえ。」

「んな狗狗言つなや！！バカにしとんのか！！」

「返事がない場合は俺の方で勝手に答えを決めるぞ？どつだ？」

くうううう、動けん上に万全でも勝てん相手にそないな選択肢出されたら・・・

男が出せる答えなんて一つしかないやろが！！

「ええで、お前についてったるわ！！」

「よし、それでこそ男の子だ！リベンジしないで負けを認めて切腹するのは潔く美しい。」

しかし！！敢て俺は言おう。それこそ負け狗だと！諦めだと！！」

な、なんか語りだしたで、このニイチャン・・・。

女みたいな割には熱いんやな。

「そんな訳で、お前にはネギに勝てるくらい強くなって貰おう。」

なんせお前は俺を男だと言ってくれる稀有な人間だからな!!あ、半分狗か。」

「……は？そ、そんな下らん理由で見ず知らずの敵を弟子にするんか?!」

「俺にとっては下らなくない、それが答えだ。」

アツハツハ！俺も弟子ゲート！ジジイと育成競争だ!!」

動けんワイをかついで歩きだす愁磨　もとい師匠。

強おなれるのはええけど・・・妙な争いに巻き込まれたモンや。

Side out

十数分前

Side 刹那

「『翼族流　一ノ太刀・廻空』!!」

『ギョアアアアアアアアアアアア!』 『ギエアアアアアアア!』

『やりよるで、この嬢ちゃん!!』

『神鳴流きい妥妥たのに、全然違う技使いよるで!?!』

『そつちに構つとる場合か！！』

ネギ先生に言われ先に行くと、そこには凄まじい数の鬼が待ち構えていた。

よく見ると中に烏族もあり、かなりの苦戦を強いられると思ったのだが――

「フハハハハ！！弱い！脆い！貧弱貧弱うう！！」

貴様らそれでも東洋に謳われし鬼の端くれか！？」

「欧州の吸血鬼と同等と聞いていたから期待していたのに……」。

徒労だね、これじゃあ。」

「……………えい。」

後ろからついて来ていたらしいエヴァさん、真名、アリアさんの活躍躍によって、

物の数分で500体ほどが蹴散らされていた。

……これ、私が来た意味なかったんじゃないかな？

『よつやるのつ、嬢ちゃん方。現世にも強い武人が残ってるもんだ。』

『いやいやしかし奇にして僥倖。人外をよつもこれだけ集めたモノだ。』

お前らの主は余程好き者と見える。』

「ほう？少しはマシなのが出て来たじゃないか。」

『ホツホツホ、吠えるでない吸血鬼。程度が知れようぞ。』

飽きてきていたエヴァさんの前からやって来たのは、人間に角が生えただけの様な鬼だった。

だがもう一人の男に角は無く、代わりに烏の羽が生えており、

女・・・声の者は面を被り、代わりに生えているのは金毛九尾。

「ほう？随分なモノ好きも居たものだ。まさか三大妖まで召喚しているとはね。」

『如何にも、だ。半魔の嬢ちゃん。我が名は酒吞童子、鬼の王！』

『余の名は崇徳上皇、諱を顕仁。天狗の王である。』

『妾の名は玉藻前白面金毛九尾。此奴等とは一緒にするでないぞ？』

妾は戦が嫌いなものじゃ。』

「……………じゃあ、帰って……………おぼぼ。」

『おぼっ！？く、クックック……………よく言ったぞ小娘が！！』

うぬから血祭りに上げてくれようぞー！！』

あ……………先に来ていた鬼の方々も止まっているのですが……………。

とりあえず、結界張って見守りましょう。余波で死ぬそうですから。

『鬼火！！』

「……………シエンフー『神虎』、食べていいよ。」

「丁度成長を試したかったんだ。相手をしてあげるよ、鬼の王。」

『ウツハツハツハ、不遜！！故に愉快よ！！』

我には向かう女子なぞおらんかったでなあ！！』

「ふう……………。それじゃあ、私は余りで我慢しようかな。」

兄様を侮辱した罪は重いぞ、下郎。」

『余を下郎と罵るか、薄汚い淫売が！！血で男をモノにしてさぞ心地よかるうて。』

「ハッ！！私が恋焦がれるのは兄様だけだよ！見当違いも甚だしいぞ下郎！！」

……って、何を言わせるかこの戯けがあ！！／／／

「……私達は見ていただけでよさそうですね、刹那。

いえ、先に行きましょうか。」

「……そうですね、刀子さん。」

残りの鬼達の始末は、ついでに行われるでしょうから……。

Side out

Side ネギ

「びたまふなれば 根の國・底の國より上り出でませと進む
幣帛は

皇御孫の處女にして赤玉の御赤らびます 藤原朝臣 神樂坂明日菜
の」

「フェイトおおおおおおおおお！」「ガッ！

「・・・やれやれ、やっぱり来たのかい、ネギ君。」

上空から高速落下しての『桜花』を、不動のまま止められる。

少しは効くかと思ったけど、やっぱり甘かったか・・・！

「明日菜さんを返してもらっぞ！！」

「・・・ああ、何か勘違いをしているね、君は。」

この儀式で彼女が命を落とす事は100%ないよ？用が済めば無事に返

「バルトフェルト・コンチエルティア『戦闘の為の協奏曲』！我流 桜花・乱舞』！！」

「やれやれ。」

今は、絶対に勝てる相手じゃない そんな事は分かってる！！

でも、それでも！明日菜さんの為に！もっと、皆を守れるくらい強くなるために！！

「お前と戦わなくちゃいけないんだ、フェイト！！！！」

「・・・面白いね、君は。」

それに、熱いを見ると　　ちよつとだけ楽しくなるんだ、今は。

「

学園長先生から教わった唯一の技、『桜花』。

本来相手に使えば、当たった部分が桜の花の如く潰れる技。

「お前になら使っても、文句は言われなだらう!!?」

「確かに、ぼくに使っても実力的に言われようがないけれど。

そんなえぐい技を使うなんてひどいね。」

「お前からの文句は受け付け……ないッッ!!」

会話をしながらも、障壁一枚で全ての攻撃を受けきるフェイト。

生憎、君を倒す必要は無いんだ!!

「・・・それで、いつまでこうしているつもりだい？

そろそろ　　「

「もう、終わったよ!!」

「！」

最後に思いつきり殴りつけると、木で出来ている祭壇は今までのダメージで一気に壊れ始める。

そう、お前には勝てない。だけど、明日菜さんを取り返せば僕の勝ちなんだ！

「なるほど。視界を拳撃で埋め尽くして、その間に祭壇へ均等に攻撃を飛ばす。

祭壇が壊れれば儀式は続けられない。」

「そういう訳でお前に構ってる暇はもう無いんだよ！！」

『虚空瞬動』を使い、一気に儀式をしていた女の人まで間合いを詰める。

これで

「そう、これで終わりだよ。ネギ君。」

「生く魂・足る魂・？魂なり！！」

さあさ碎けな封印の大岩。ウチの前に姿を見せえ『リョウメンスク

ナノカミ』！！」

瞬間、光の柱が天高く昇った。

S i d e o u t

S i d e 刀子

「クツ、これは！？」

「一足遅かったようですね。」

私と刹那が祭壇に着いた時、既に飛驒の大鬼神
『リョウメンス
クナノカミ』は

封印を解かれ、この世に再び顕現していた。

「刹那、あなたは下がっていないさい。」

ネギ先生を連れてきますから、結界を張って防御を固めるのです。」

「で、ですが！あの少年は明らかに愁磨さんの次元ですし、あの大
鬼と一緒に

ザッ！！

「はい、お願いしますよ。」

戦うには……って、え？」

ネギ先生の影に転移して、再びネギ先生の影へ。

それから刹那の影へ転移。ネギ先生を刹那へ渡し、フェイトの前へ移動する。

神楽坂さんはスクナの上に召喚士という為、影が出来ていなので助けられない。

「……これは驚きだ。まさかこのぼくが察知出来ないほどの隠密術を身につけているとは。

愁磨も人が悪い。」

「フェイト・アーウェルンクス。あなたは愁磨さんの同士と聞いています。」

ですから、味方として聞きます。何故こんな真似を？」

「計画に必要。あなたは全てを聞いていないようだし、言えるのはここまでだよ。」

「そうですね。ならば」

愁磨さんとの仮契約カードを取り出し、フェイトに突き付ける。

「これが計画に必要なだから手を出すと言われていません。」

よってあなたの独断とし、あなたを敵と判断します。」

「……愁磨の想い人に攻撃したら、ぼくが殺されてしまうよ。」

かと言って、あれは手放すには惜しい量のエネルギーだし。」

「私には関係ありません！ 『アデアット来たれ』！」

カードから武器、”妖刀 村正”を出し、フェイトに切り掛かる。

”村正”の能力は『怨殺』。つまり、相手を憎んでいるほどスペックが上がるというもの。

「随分禍々しい刀だけれど、それだけみたいだね。どうやら攻撃力不足」

「『アデアット来たれ”蜻蛉切”』！！」

「それは……『ランドリィ・エンセウス水流の剣』！」

村正を蜻蛉切りに変えると、フェイトは水を使い剣を作り防ぎます。

ですが、この槍の能力は！

「『絶斬』。つまり、全てを切り裂くのですよ！」
バシヤツ！

「・・・危ないなあ。もう少しで切られるところだったよ。」

「逃げるのは得意のようですね……。」

バクティオー
仮契約し、得た武器名は”村正”。

しかし、使ってみるとこれは村正ではなく

「呪われた武器に自在に変えられる刀。対象は一定数を殺し、恨まれた武器。」

つまる所、聖剣であろうとも恨まれてさえいれば使えるのです。」

「・・・愁磨との仮契約バクティオーらしい、チート武器だね。」

それなら、多少本気で行っても無傷で時間稼ぎ出来そうだ。」

言つと水が槍となり、森から土が飛んできて巨大な円柱となり、
フェイトの傍に待機します。

あれは、ネギ先生！？刹那の結界から出たのですか！！

「明日菜さんは返してもらったぞ、フエイト！！」

「……やるじゃないか、ネギ・スプリングフィールド。」

体の所々を石化させながらそれでも堂々と言い、森の方へ飛んで行くネギ先生。

全く、無茶をしてくれますが。

「これで、思い切りあなただけを足止めできます。」

「足止めをした所で、どうするんだい？

姫を失ったスクナは、京都の街へ攻撃を始めるよ。」

「そんなもの、決まっているでしょう？」

「私が一撃で仕留めてやるよ、フハハハハ！！」

刀子、10秒だけ私の邪魔をさせるんじゃないぞ！！」

「なに、頭はいつでも私が狙っているよ。」

「……『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』。これは詰んだか、仕方ない。」

エヴァンジェリンさんと真名が現れると、フェイトは諦めたようで、水の転移を使い姿を消してしまった。

「む、何だ。邪魔が居た方が盛り上がるというのに。」

「仕方ありません、マスター。一気に決めて帰ることにしましょう。」

「ふう………………。良いでしょう、これ以上ない邪魔をしてあげます。」

『アテアット来たれ” 十拳剣”』！！』

「つちよ、それはダメだろう刀子!?!」

十拳剣、能力は”顕現”。言葉のままに切り刻む能力を持った、最強の剣の一つ。

それを構え、スクナに突撃する。

「最終決戦究極奥義！『極大雷帝千裂剣・千変万化』！！！！』」

「あつちやあ…………。」

理由は知らないけれど、魔法・呪術的效果を全て無にする。」

「まあ確かに、明日菜の力を使えばあの大岩の封印を解くことな容易かつたろう。」

めんどい奴だ……。詰まる所、女の為に異世界に来てまで最高の食事を取りに来たって訳か。

一途な奴だな、相変わらず。

「はぁ……。スクナは刀子が消し飛ばしちまったから、集めるまで少し時間かかる。」

代わりに俺のを持って行け。腹の足しにはなるだろう。」

「・・・仕方ないね。それじゃあ上から10人、下から200万、好きな魂1000人。」

このどれかを頂戴。」

「ったあー……。50番目から30人。これで満足しろ。」

「それでもいいか……。それじゃ、ぼくは戻るよ。」

最上級の魂を搔つ攫って感謝の一つも寄越さず、フェイトは魔法世界に帰って行った。

さて、と。俺はお姫様の涙を止めんな。

Side out

Side 明日菜

「ネギ、ネギ！！返事しなさいってば！ねえ！！」

「神楽坂……。ここまで石化が進行してしまつては、並みの術者じゃ無理だ。」

それこそ、癒しを極めた程の術者でも無ければ……。」

私が目を覚ますとそこは森の中で、ネギが横で倒れてて、

体が殆ど石みたいになつてて、呼んでも返事しなくて。

いつの間にか龍宮さんとかエヴァちゃんとかが来てて……。

「え、エヴァちゃん！エヴァちゃんなら治せるでしょ！？」

「わ、私にも無理だ。腕の一本が石化してるくらいなら治せるが……。」

「な、なら愁磨先生なら！？ノワール先生でも！

あの人達なら治せるでしょう！？」

言っている間にも、ネギの体はどんどん灰色になって行く。

風の魔法で空気を取り入れてるから、完全に石化しないと窒息しないとか何とか言ってた。

けど　もう手の先と、顔の半分くらいしか残って無い!!

「誰か、誰か助けてよおおお!!」

「何を喚いてる、神楽坂。」

「ッ……!! 愁磨先生!!?」

振り向くと、愁磨先生が森から出てきた。

よかった、これで

「し、愁磨先生、お願い!! ネギを、ネギを助けて!!」

「……生憎だが、俺は無駄な事はしない主義だ。」

「む、無駄……? 無駄ってなによ!! ネギが、ネギが死んじゃうのよ……」

「に、兄様。流石に、その、だな。ここは助けてやって良いんじゃないや

ない、か？

少年も、神楽坂を助ける為にこうなったんだし、だな……。」

愁磨先生はふう、と溜息を吐くと、私とエヴァちゃんの頭をポンポン叩く。

「何か勘違いしてるがな。俺以外の人に救えるモノを、態々俺がやる事もないって事だ。」

そう、他でもないお前だよ神楽坂。」

「わ、私……？でも、でも私、何も魔法知らないし、どうやって……！！！」

「お前に渡しただろう？俺達の力の象徴を。」

「しょう、ちょう……？」

私が、愁磨先生から貰ったもの……って。この、ペンダント？」

私が胸元から一枚の羽と剣をモチーフにしたペンダントを取りだすと、

愁磨先生は静かに頷いた。

「消すだけだったお前に、癒しの力を渡した。」

それを使えるなら、魔法で傷つけられたあらゆる傷を無かった事に出来る。

無論、石化や毒・麻痺その他。魔法的攻撃なら何でも。」

「っ、つまり、ネギを助けられるのね!!どうやって使うの!?!?」

「思い出せ。お前の力を。そして願え、癒す相手を。強く強く。」

それを使えるのは、お前だけだ。」

思い出す・・・、力・・・?

よく分かんないけど、私がやらなきゃ、私がやらなきゃネギが死んじゃう・・・!!

「お願い、お願い……!!こいつはお父さんに会って、よく分かんないのになって、

もっともっと、したい事があるの!

私を助けて死んじゃダメなの!!だから、お願い……ネギを助けて
!?!?」

ペンダントを強く握りしめると、ビシッ!とビビが入って中から光

が溢れだして、

その光が集まって

一本の剣が出来る。天使の羽見たいな、大きい真っ白な剣。

「え、こ、これ、どうしたらいいの!？」

「言っただろう、それは癒す力。一切の攻撃能力を持たない代わりに、全てを癒す。」

「……………よ、要するに。これをネギに……………さ、刺せばいいのね？」

「……………既に、俺を信じるか信じないかではない。」

お前が持っているネギを助ける術は、それしかない。」

だ、だったら、やるしかないじゃない……………!!

宙に浮いたままだった剣を取って、ネギの胸の上で構える。

「……………ふう。ね、愁磨先生。」

「なんだ？」

「信じるか信じないか関係無いつて言ったけどさ。私は、愁磨先生を信じるよ!…」

痛かったらごめんね、ネギ !!

手に持った剣を、思いっきり突き刺した。

S i d e o u t

第49話 終戦 少年はお姫様を助けに行くようです(後書き)

と、言う訳で49話でした！

愁「痛かったらごめんね (テヘペロ

で済むかああー！ー！もう少し悩めよ！」

作「明日菜のおバカが良い面で現れたんだからいいじゃないか・・・

あ、三大妖(笑)は普通にボコられました。小太郎以上の噛ませ犬。」

愁「今回の主犯？はぶつちやけフェイト。

犯行動機は主君への献上品取得のため。でんじゃーすぎますね、はい。」

作「ネギは順当に石化し生命危険。木乃香と仮契約できませんので、仮契約していない明日菜に新武器プレゼント。」

作「旅行で仮契約してしまった生徒達の進退は学祭編にて！！

そしてまたしてもメンバー登場！？」

愁「次回から学祭編っぽい。それじゃ、また次回。」

作愁「アーリーヴェデルチ！！！」

第50話 弟子試験と学園祭（準備）と超の計画が始まるようです（前書き）

やっここ大台、50話。こんにちはH a t e . rです。

作「悪魔編、修行編？そんなものは存在しません！！」

愁「正確には学祭編に完全吸収。カオスが余計カオスに……。」「
ノワ「さて、前回出来なかったいつものを。」

もみじ様、春夏秋冬様、龍賀様、なおぼん様、地海月様。

感想ありがとうございます。」

作「と言っ訳で、今回もやっちまった感満載でお送りします第50話！」

作愁ノワ「」それでは、どうぞ！」「」

第50話 弟子試験と学園祭（準備）と超の計画が始まるようです

Side ネギ

「フツ！ハツ！アッアアアア！」

「フォッフオッフオ、力押しでは当たらんぞい。」

「簡易執行じゃない『アルゴドーズをアトウス修羅の息吹』を使っても掠りもしない事に、

いつもの事とは言えちよつと苛立ちながらも、『桜花』と蹴りを混ぜて攻め立てる。

パシッ

「ほい、ここまでじゃ。次は耐久訓練行くぞい。」

いつも通り全力で守りなさい。」

「はいっ！『バルトフェルド・コンチエルティア戦闘の為の協奏曲』！」

「フォッフオ、大分密度も上がったのう。どれ？『我流 桜花』！」

ズガガガガガガガガガガッガガガガガガガガ！
「ぐうううう ！！！」

『バルトフェルド・コンチエルティア戦闘の為の協奏曲』を全開にして、1秒だけ防御を固める。

『カントゥス・ベテークス戦いの歌』に込める魔力、『修羅の息吹』に込める気の量で

肉体強化度、魔物防御力が（理論上は）上限無しに上がる。

だから、修行の最初と最後にこれをやって毎日の簡単な成長度を見る　為らしい。

パキーン！

「うわっ！」

「今日は34発、耐えたのう。フォッフォッフォ！凄い成長じゃない。

修学旅行前は15発が精々じゃったのにのう。」

「あ、ありがとうございます……。」

そう。修学旅行の後・・・正確にはフェイトの石化攻撃に突っ込んで行って

死にかけて後。

体が魔力と気の強化に耐え易くなって、込める力を多く出来るようになった。

「それじゃあ、今日はここまでじゃ。ゆっくり休むとよいぞい。」

「はい、ありがとうございます……！」

あ、あの、学園長先生！折り入って相談と言っか、提案と言っか？があるんですけど……。」

「フオツフオ、なんじゃ？」

「修行に、格闘術だけでじゃなくって魔法の修行も入れて欲しいんです！！」

回想

京都・12時・復活時

「……………う、うう？」

「ネギ、ネギ！？しっかりしなさい、大丈夫？生きてる！？」

「あ、明日菜さん。ええっと、大丈夫です。つていたたたたたたたー！！」

ギユウウウウウウウウ

「よかった……。よかったよお……。」

僕が起きると、明日菜さんが泣きながら力一杯抱きしめてきた。

つて、ホントに痛いです！？このせいで大丈夫じゃくな

「……………あれ？確か僕は、フェイトの攻撃で……………？」

「そう。お前はフェイトの攻撃に自分から突っ込んでって明日菜を助け、

安全な所まで運んだ時点で、石化に耐えきれず死にかけて。

それを明日菜に助けられたって訳だ。」

「愁磨さん……。」

明日菜さんの後ろに立っていた愁磨さんが、簡潔にまとめて教えてくれた。

で、でも明日菜さんは魔法使えないんじゃない？

「フン、そこまで教えてやる謂われは無い。

じゃ、俺はノワールの世話してやらんといかんから帰る。アリア。」

「(てててっ)……すー……。」

アリアさんは愁磨さんに走り寄っておぶさると、そのまますぐに寝ちゃった。

よっぽど眠かったのかな……？

「あ、愁磨先生！！あの、ありがとね。お陰で」

「俺は何もしていないと言ったろう。じゃあな、おやすみ。」

影が巻き付き、瞬間姿を消す愁磨さん。

周りを見ると、いつの間にかエヴァンジェリンさん達も居なくなっていた。

あの大きい鬼　スクナと、フェイトは・・・あの人達が倒してくれただよね。

「また、助けてもらっちゃったな……。」

「グスツ……。し、仕方ないじゃない。あの人達デタラメに強いし！

今回みたいな訳わかんない事になったら、助けて貰わないと。って言うか助けてくれるし……。」

「ですね……って、そうだった。」

明日菜さん、助けてくれてありがとうございます。」

まだ助けて貰ったお礼を忘れていた事を思い出して、頭を下げる。

と、明日菜さんも慌てて頭を下げてくる。

「え、あ、いいのよ！って言うか先に助けて貰ったの私だし……？
だから、ありがとう。」

「じゃあ、お互い様って事ですね……。それより、どうやって僕を
？」

「えーっと、これなのよ。」

そう言ってポケットから取り出したのは、いつもつけているペンダ
ントだった。

確かこれ、愁磨さんから貰ったものだって……。

「やっぱり愁磨さん、何かしてるんじゃないですか……。」

「あーっと、なんだっけ？これがなんだか不思議な力で剣になっ
てね？」

で、癒しの剣だとか何とか言われて、それで
「

「へえ……。やっぱりこれも愁磨さんの……。って、どうしました？
明日菜さん。」

説明してる時に明日菜さんが固まって汗をかいてる。

どうしたんだろ？や、やっぱりあの儀式のせいどころか……？

「い、いや、違うわよ！？体はホントに何でもないので安心して！」

「は、はい。本当に元気そうです、し……？」

それじゃ、僕達も帰りましょうか……。」

「そーね。もう一回お風呂に入りたいし。」

本山に歩きながら、僕は考えた。

僕の手だけじゃ、明日菜さんを救えなかった。力が足りなかった。

攻撃とかそういう事じゃなくて（それもあれるけれど）、防御とか、治癒の魔法とか……今までに必要なだっけ感じなかったもの。

それが必要だっけ、強く分かった。

回想終了

「だから、魔法の修行もしないと思って思ったんです。

瀬流彦先生と神多羅木先生の修行とは別に、こう……応用って言う

か凄いのを！」

「ふうむ……。瀬流彦君の防御魔法は『戦闘の為の協奏曲』で事足りるし、

神多羅木君の高速戦闘魔法は、ほぼ覚えてしまったからのう。

もう少し先の事も、とは思っておるのじゃが……。」

そこで学園長先生は顔を伏せ、うんうん唸りだした。

もしかして、まだ実力が足りないとか思われてるのかなあ？

確かに実戦経験は少ないけ

バツ！

「実はのう！！」

「うわあ！？あ、はい。」

「うむ、実はのう？この学園で君に魔法を教えられる人間は4人しかおらんのだじゃ。」

4人……。？つまり、僕より魔法戦で強くて詳しい人が4人しかいない……。

ま、まさか。あの4人、なの！？

「も、もしかしてあの人達ですか？」

「うむ、あいつらなのじゃ。」

愁磨殿、ノワール殿、アリカ殿。そして、エヴァンジェリンじゃ。」

「そ、そんなあああああああああ！？」

Side out

Side 愁磨

「弟子？」

「は、はい！学園長先生が、僕に魔法を教えられるのは愁磨さん達しかないって。」

ですから、お願いします！！」

土下座せんばかりの勢いで頭を下げるネギ。

・・・確かに、この学園でネギに魔法を教えるのは無理だわな。

そもそも魔法学園を名乗っているのに、そのトップがトップだ。

曰く、東方に『四拳王』あり。曰く、”修羅”、”釈迦”、”金剛

”、”閻魔”。

之に付き従う『四天王』あり。曰く なんだっけ。

b y空手部の伝説。

要約すると、麻帆良の長は魔法を掻き消すほどの拳撃を使う

ジジイ4人とその四天王4×4の、合計20人で構成されており・
・
・
・
・

魔法を一切使えんのだ。

「まあ、弟子くらいいいけどな。暇だし。」

「ほ、ホントですか！？あり「だが断るッッ！！」

え、ええええええええ！？そんなあ！！」

だってもう弟子いるし？一人も二人も変わらないけど、小太郎格闘と呪術
のと、

ネセ魔法の修行レシピ考えるの面倒だし って、丁度いいのがあった
か。

「じゃあ二つしよう。一か月半後の文化祭、そこで行われる麻帆良

武闘祭に、

俺の弟子を出す。そいつに勝てば弟子にしてやるぞ。」

「ほ、ホントですか！？それはホントですね！！」

「ああ、約束しよう。」

こうしちゃいられない早速修行だ！と家を飛び出して行ったネギ。

相手も分からんで大会で勝ち続ける、か。バカだなあ。

「聞いても教えんがなあ！アツハツハツハ！！」

「でも、どうするの？魔法無しだと、戦いの為のなんたら……って
言っつの使われたら、

格闘じゃエヴァと同等かそれ以上よ？あの子。」

そう、そうなんだよな。それが問題だ。

恐らく後二週間も経ったら、無詠唱かつ、一瞬で合成出来るようになって
いるだろう。

魔法の射手の本数も増えている事だろう。

「なあに、簡単な事じゃないか姉様。あれをそれより強くすればいいだけの事だ。」

「そうじゃな。今は真名と茶々丸が実弾避け地獄の最中じゃし、避けるまでは行かずとも、受けられるようにはなるじゃろう。」

「さらにアリアが狗の使い方をマスターさせ、対魔法はアリカが。残りのメンツで格闘面を徹底的に強化……いや、狂化させる……！」

ダイオラマの中換算でざっと9か月……………。

これだけ修行して勝てないようなら引導を渡してやるわ。

ああ、楽しみだ。凄く、楽しみだ……。

SubSide ネカネ

「ネカネお姉ちゃん、元気ですか？僕はなんとか元気ですってます。

あと、愁磨さんがね。”俺達も元気だ”って言うておいてって。

自分で言えばいいのに……。

えっと、日本に来てから四ヶ月経って、最初は怒られてばかりだった仕事も、

何とか出来るようになって来ました！

今回のテストね、学年2位だったんだ……。前は一位だったんだけどね。

それで、愁磨さんがね

『

昨日ネギから手紙が届いて、近況報告をしてきました。

10歳の子が教師なんて出来る訳ないと思っていたけれど、なんとかやっているみたい。

・・・愁磨さんの事がたくさん書いてあって、良い意味と悪い意味でよく愁磨さんの事見てるみたい。

『でね、今度学園祭があつてね！準備とか今からちよつとずつ始まつてて、

すつごく楽しみなんだ！！

もう一つ入ってるのは、愁磨さんが送れって言った奴なんだ。

”良かったら”って。』

言われて、もう一つ封筒が入っている事に気がつきました。

開けると、中には飛行機のチケットと・・・簡単な手紙が3枚。

『それじゃ、また手紙書くね。あ！あと、ね。』

……………もう、父さんの影だけ追うのはやめたんだ。

それだけ！じゃあね！！』

そこで手紙は終わってしまった。

ナギさんばかり追っていたネギが……………。それはそれで心配なのよね。

「……………行こうかしら、日本。」

いいえ、行きましょう！！」

そう決めると、早速スタンさんに許可を貰いに向かいます。

『 追伸。シユウを好きな子、大分増えちゃってるわよ。』

隠しているつもりと言っなら……………まあ、私から言っことは無いけれど。いいの〜』

「賛成圧倒多数により

『男装女装喫茶』に決定です!!」

『キヤーーーーー!』

諸行、無常……。

俺とネギは笑いあい、熱く力強く握手をし、倒れた。

夕刻、愁磨宅、作業中

subside ノワール

「」

「ノワール、こっちはどうすればよいのじゃ?」

「えーっと。こっちのをこれに重ねるて縫うでしょ?

で、これを半分重ねてまた縫う。その後これとこれを縫って、これと合わせてちょうだい。」

「むう、意外と難しいのじゃな。ありがとう。」

眉間に皺を寄せて真剣に縫いだすアリカ。

ああ、いつもは綺麗なんだけれどこういう一生懸命な姿がホントにかわいわあ。

「ノワールさん、見惚れないでください！」

そっちが終わらないと私のが進められないんだすから。」

「もう、少しくらい良いじゃない……。」

「だ、め……。」

「アリアまでええ。」

仕方なくアリカから目を離し、自分の作業に戻る。

今何をしてるかって言うと、シユウのクラス展示で着る衣装を縫ってるの。」

シユウが『創造』で終わらせようとしてたから止めて、私達が作ってるのよ。」

「いたっ！うう……。……。いたっ！」

「も、もみじさん。出来る人に任せましょう？私達は警備に行けばいいじゃないですか。」

「い・や！僕も出来るんだって愁磨に見せてあげるんだもん！……
いったあ！」

「……………ばんそーこ張る所、もうない……………」

……………黒い布任せて正解だったわね。

でも、これ以上刺しちゃったらダメよねえ。

「もみじ。一生懸命なのはいいけれど、あなたが自分の為に怪我し
たって知ったら」

シユウはどんな顔するかしらね？」

「あう！？え、えーと。その、あうう……………分かったよお。」

刹那、見回り行くよ！！アリア、後よろしく！！」

「ん……………任された。」

もみじは満足気に頷くと、刹那を拉致して元気に飛び出して行った
わ。

元気よねえ、ホント。若いって素晴らしいわ。

「……………。（チクチクチクチク）」

「……………。（チクチクチクチク）」

「……………。（ババババババババババ！）」

「……………。（チクチクチクチク）」

の、ノワール。そう言えば、どうして手作りにしようと思ったのじや？」

アリカが沈黙に負けたように、私に話しかけてくる。

普段騒がないけれど、沈黙が苦手っぽいのよね。

「そんなの決まってるじゃない。」

「き、決まっておるのか？」

「フフ……………。だって、手作りの方が愛情籠ってるじゃない。」

「……………それもそうじゃな。」

妙に納得した様子でアリカは作業に戻り、私も作業に戻る。

そう言えば遅いわねシュウ。もう警備時間じゃないのに……………。

「おお、やっと来たアルか。」

「仕事だよ。……で、こんな時間に何の用だ？」

愛の告白ってんなら間に合ってるけど考えんでも

「

見回りが終わり、俺は放課後超チャオに呼び出された屋上に来ていた。

いつもの調子なので、まさか告白だなんて思っちゃいないが。

「久しぶリアル、”創造主”殿。」

「これは少々斜め上の用事だったな。」

接触して来るにしても、もう少し後だと踏んでいたから焦った。

だが……何故こいつが俺を”創造主”と呼べる？

「思ったヨリも驚かないのネ。」

「伊達に長く生きてないさ。で？」

まさか俺をからかう為だけに呼んだ訳じゃないだろう？」

「クフフ、隠さないでもいいアルよ。どうせ知っていたのだから。」

単刀直入に聞くネ。 我々の邪魔をする気があるか否力。それだけを聞きたいネ。」

『どうせ知っていた』・・・、ね。未来でも相当高く評価されてる様で安心したよ。

質問と言つ割には過剰な魔力を俺にぶつけて来る超。

さてさて、どう答えたら良いものやら。

「邪魔をする気満々……と言つたらどうする気だ？」

「こつするネ。」（パチンッ

ザザッ！

「申し訳ありません、愁磨さん。超^{創造者} 鈴音の命には逆らえませんが、
で。」

「私達には何の遺恨もありませんがね。」

「茶々丸と、妹さん達か。ずいぶん見縊られたモンだな。」

茶々丸と妹4人に囲まれる。邪魔をするなら今ここで　と言いつもりなのか？

だが、茶々丸が何千体居ようと俺には勝てんぞ、超よ。

「フッフッフ、これで十分ネ。何故ならあなたは……茶々丸を攻撃できないネ!!」

「何を言つかと思えば……。動けなくする事くらいは訳ないぞ?」

「果たしてそうかな?やれ、茶々丸!!」

「ハイ、超。」

「おい、マジか!?やめとけって」

と、後ろを振り向いたところ……。

「しゅ、愁磨、さん……。や、やさしく、してください…… / / /」

「ガツフウ!?!」

上着を半脱ぎにして頬を染めている茶々丸が。

ひ、卑劣な……。!!確かにこれは攻撃出来ない!!

俺はロボットの関節にでも萌えられる程度の能力を持っているんだぞ！！

ガッ

「む、しまった!？」

「……………」

「……………」

茶々丸に見とれていたら妹達に腕を掴まれてしまった。

2人ずつは流石に重い……………!!

「ちい! 離せ」

「わ、私の事……………。嫌いなの? おにいちゃん。」

「グッハア!？」

4人全員が目を潤ませて見つめて来る。だ、ダメだ……………! これは勝てん!!

振り払うことなんて…………俺には無理だ!!

「ま、負けた……。完敗だ……。」

「フッフッフ。みた力、私の力!!」

「いいえ超。これはどちらかと言えば私と妹達の力です。」

「グ、無駄にAIが進化してるネ……。」

はなしをもとそう
閑話休題。

「それで、本当の所はどうなんだ”創造主”。」

「ああ、うん。邪魔する気とか毛頭ないよ?」

「軽いネ!!もう少し含みを持たせても良いんじゃないか!??」

「散々ふざけたんだからいいだろうが……。」

邪魔するどころか、手伝ってやる気があるくらいだ。」

「そ、それは本当か!??」

実際、俺には不利益ないし。

魔法バレして、後々戦争に魔法使われるようになる事は絶対にあり得ないしな。

」で、「一応聞いておくが……。お前らの目的は？」

「ウム。我々の目的は、二つ。

一つ、ここ旧世界に魔法の存在を公表する事。そして
」

うん、ここまでは順調だ。・・・と言うか、もう一つ？

やっぱり完全に原作通りには行かないか、っと今更か。

「あなたの定義する所の『人間』 その全ての抹殺ネ。」

「.....へ？」

S i d e o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419q/>

少年は魔人になるようです

2011年11月21日20時05分発行